

数多の星は蒼穹にて輝
く

姉川春翠

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

生まれながらにしてある宿命を背負っている少年ソラ。

ソラに対してある思いを抱き、行動を共にする少女トウネリ。

二人は多くの出会いを紡ぎながら、それぞれの願いを抱いていく。

彼らが抱いた願いは救済となるのか、それとも——破滅に導く引き金となるのか。

目次

序章	最初の出会い は永遠の光			
プロローグ		1		
1	第一節	不思議な少年と優しき少女	12	
2	2	第一節	不思議な少年と優しき少女	37
3	3	第一節	不思議な少年と優しき少女	50
1	1	第二節	揺れる想いと動き出す運命	76
2	2	第二節	揺れる想いと動き出す運命	94
3	3	第二節	揺れる想いと動き出す運命	109
1	1	第三節	愛されている少年と裏切られ た少女	133
2	2	第三節	愛されている少年と裏切られ た少女	145
3	3	第三節	愛されている少年と裏切られ た少女	164
4	4	第三節	愛されている少年と裏切られ た少女	184
1	1	第四節	最初の出会い は光となって	201
2	2	第四節	最初の出会い は光となって	

724	第三節	消えることのない過ち	2
713	第三節	消えることのない過ち	1
699	第二節	小さな灯は影を照らす	4
686	第二節	小さな灯は影を照らす	3
672	第二節	小さな灯は影を照らす	2
658	第二節	小さな灯は影を照らす	1
643	第二節	小さな灯は影を照らす	1

794	第四節	嘘という名の大罪	4
780	第四節	嘘という名の大罪	3
768	第四節	嘘という名の大罪	2
759	第四節	嘘という名の大罪	1
748	第三節	消えることのない過ち	4
734	第三節	消えることのない過ち	3
	第五節	偽りは月明かりの下に	1

864	エピソード	878
853	第五節 偽りは月明かりの下に	5
843	第五節 偽りは月明かりの下に	4
830	第五節 偽りは月明かりの下に	3
815	第五節 偽りは月明かりの下に	2
807	第五節 偽りは月明かりの下に	2
第三章 深き闇の中の怨嗟		

953	第二節 笑顔の理由(わけ)	3
946	第二節 笑顔の理由(わけ)	2
937	第二節 笑顔の理由(わけ)	1
928	第一節 静寂に包まれし暗雲の空	3
912	第一節 静寂に包まれし暗雲の空	2
903	第一節 静寂に包まれし暗雲の空	1
893	プロローグ	

序章 最初の出会いは永遠の光

プロローグ

雷鳴が轟く。

強い雨が闇夜の大地に降り注ぐ。

街の中は所々瓦礫と化していた。雨に打たれて消えた炎が、黒煙を燻らせている。

人影が雨に打たれていた。その手には血と泥に塗れた、白の薄い衣服が強く握り締められている。

人影は天を見上げて叫ぶ。頬には滴が伝い、雨によるものか涙によるものかは判別しない。それでも、彼が悲痛な叫び声を上げていることは分かる。

ただひたすらに天に向かって叫ぶ人影に近づくものは誰もいない。彼の背中には孤独と絶望が重くのし掛かっていた。



数百年前に、この世界は生まれました。広がっているのは無限に真つ暗な空間で、生まれたばかりの世界には星すら存在していませんでした。

唯一あつたのは、世界が持つ感情、そして知恵です。

孤独を感じた世界は、知恵を使い「どうすればこの孤独を無くせるか」と考えました。最初に考えたのは、自分以外の世界を生み出すことでした。しかし、世界には新たな世界を生み出す力を持つてはいませんでした。

次に考えたのは、自分の中に新たな物を作り出すことでした。そこで最初に生み出したのは、生き物でした。しかし、彼が生み出した生き物は、生まれてすぐに死んでしまつたそうです。

故に彼は、どうすれば生き物が生きていけるかを考えました。

生きていくための環境が出来ていないのだろうと考えた世界は、手始めに真つ暗な自分に光を生み出しました。初めはただ暗い空間全体に光を照らしたため、無限に真つ白な空間が出来ただけでした。これでは真つ黒であつた頃と変わらないと判断し、光を凝縮した球体を生み出しました。後に太陽と呼ばれるそれは、暗い空間の中を明るく照らしました。

ですが、太陽を生み出しただけでは生き物は生きていきませんでした。というのも、彼が生み出した光は、明るく照らすと同時に異常なほどの熱を発していたからです。生

まれた生き物は、その光に触れるなり炎を上げて燃え、灰になってしまします。

どうすればいいのだろうか。世界は悩みました。

そして得た答えは、その熱を持った光からある程度引き離れた場所に住ませるというものでした。後に地球と名づけられるその星に居ること生き物が灰になることを防ぐことができました。

ですが、知恵のある世界はすぐに地球と太陽の問題点に気が付きました。生活するために球体として作った星地球は、太陽の光を遮断してしまう面も存在していました。

そこで地球をある一定の間隔と一定の向きに回転させることにしました。世界はこうのとき気まぐれも起こし、太陽の周りを地球が回るようにしました。これにより地球に太陽の光が等しく降り注ぐようになったのです。

さあ、これで生き物たちが生きていけるだろう。そう思った世界は再び生物を地球に放ちました。が、確かにすぐに死ぬことは無くなったものの、彼らはまるで苦しむようにして息絶えるのです。

世界はまた考えました。ふと、世界は自分が生み出した命が、なにかを吸っていることに気がつきました。そこで世界は、彼らが生きるのに適した空気を生み出したのです。

世界は他にも様々な試行錯誤しました。太陽の光が無い間真っ暗闇になってしま

地上を照らすために、太陽の光を受けて僅かな光を灯す月を生み出したり、自分が生み出した生物を模した星の集まりを作ったり。

結果遂に完成したのが、空には多くの星々が散りばめられ、地上には多くの生き物が生きている——今私たちが住む世界“ヴェルトロス”なのです。

——「世界のおはなし」 序章 世界“ヴェルトロス”の誕生より

◇

蝋燭が灯る部屋の中。一人の少女が、本を手にベッドの上に座っていた。白銀の長い髪は火の光で月明かりの如く輝き。白く透き通った肌と華奢で整った体つき。全て少女を神秘的に彩っている。

少女は一息吐くと、開いていたページを閉じた。

「今日はここまで」

そう言って、少女は自分の隣で眠る少年の顔を眺めた。

体は小さく、可愛らしい寝顔と長めの空色の髪は、一目置いただけでは少女と見間違えてもおかしくはない。

「もう、いつも途中で寝ちやうんだから」

微笑むと、そっと少年の髪を撫でる。サラサラとした髪は、少女の髪に負けず劣らず神秘的で美しい。

次に少女は頬に触れた。柔らかく触り心地の良い頬は、少女の手に温もりを伝えていく。

「んんう……もう食べられないよう……」

「一体どんな夢を見てるのかしらね。涎まで垂らしちゃって」

クスクスと笑うと、少女は立ち上がった。それを感じたのか、少年は少女の背中に抱き付く。見たところ起きている様子はない。

「はいはい、すぐ戻ってくるからね」

あやす様に言うと、少年の手を優しく解く。

「んん、エイネえ」

「はいはい、もう少し待ってね」

少年が甘えた声で少女の名前を呼んだ。

本当は起きているんじゃないかしら？　と思いつながらも、エイネと呼ばれた少女は本棚に向かっていく。棚には彼女の手にある物以外にも幾つもの子供用の本が置かれていた。

その合間に持っていた本を収めると、彼女は少年の下へと戻っていく。

再び少女エイネは少年の頬に触れた。その姿はまるで母親のようだ。

「おやすみ、ソラ」

寝る前に必ず置かれる一言。それに答えるように少年——ソラレベリアヴィルレは微笑んだ。

◇

ソラの朝は早い。日が出始めた頃に必ず目を覚まし、出かけるための身支度をやる。身支度を終えたソラは、そつと隣の寝室をのぞき込む。

隣はエイネの部屋だ。見たところ、まだ健やかに眠っている様子。それを確認したソラは静かに扉を閉じた。

出て真っ先に向かったのは、クリンベルという貴婦人の大きな屋敷だ。

この貴婦人とソラの家はどういうわけか地下で繋がっていた。この道はエイネも知らない道だ。だから必ずエイネが眠っている時にこの道を使う。秘密の道は見つかってはいけないものなのだ。

薄暗く不気味な通路を通って屋敷の中に入ったソラを出迎えたのは沢山の猫だった。数は十四匹。どれもが雌らしく、そのすべてがソラにとっても懐いていた。

「おはようみんな。みんなも朝早いねえ」

ソラはしゃがんで、それぞれ一匹ずつ彼女らの頭を撫でる。

猫も気持ちよさそうに目を細めて喉を鳴らした。

時には我先にと喧嘩をする猫もいたりするが、その愛らしい姿にソラは笑っていた。

「ベルさんはまだ寝てる？」

ソラの問いに猫が鳴いて答える。

「そっか、じゃあ起こさないようにしないかね」

笑うと、ソラは階段を昇り二階へと向かう。その後ろに猫たちは行進するかのようについていく。朝のいつもの光景である。

ソラが向かったのは書齋。ここには数多くの本が並んでおり、種類も様々。ソラは毎朝ここで本を読み魔法を学ぶのが日課になっている。

立ち並ぶ本棚の中を歩き、その内から一つの本を取った。背表紙に書かれたタイトルは「魔法生物」という簡素なもの。世界に存在する数多くの魔法生物について書かれているものだ。

「あと少しで読み終わるんだよね」

地面に置いて本を開き、ついてきた猫たちに呟く。

分厚いページの本も、残り数ページというところまで来ていた。

「あれ？ 破れてる」

最後のページを読み終えた時、それ以降のページがごっそり破られていることに気が

ついた。

「そういえば、禁忌に触れる内容が書かれてるのは破つて処分してあるって言つてたっけ。なにが書かれてたんだろうなあ」

破られたページの内容に興味を惹かれながらも、無くては仕方ないとソラは読み終えた本を戻した。

戻したと同時に、ゴトツツという音が反対側で聞こえた。

「あ、どうしよ。またやつちやつた」

どうやら押し込み過ぎて、反対側に収められた本を落としてしまったようである。これをするのは初めてではなかった。

ソラは落とした本を戻すために今居る側の反対に回ると、地面に落ちた一冊の赤い表紙の本を拾い上げる。

「えーと『母と子と恋人』？ なにこれ」

魔法にはおよそ関係ない題名にソラは小首を傾げる。

開いてみると、どうやらこれは恋愛の物語を書いたもののようなであった。

「そういうえげこういった本を読んだことは無かつたなあ」

そういう類の本もあるというのは知っていても、魔法関連の方にばかり目を向けていたソラ。

なんとなく興味を惹かれ読み進めていく内に、ソラの顔色が変わっていった。具体的には赤く、まるで何かを恥ずかしがるように。

「えっ？ えっ？ なにこれ？ えっ？」

そう、本の中身はおよそ子供が見るには少々刺激的すぎる内容だったのである。

慌てて本を閉じるソラ。息が興奮から荒くなっている。顔も真っ赤に染まっている。

「ボクはなにも見てない。ボクは何も見てない。ボクは何も見てない」

一体全体何が書かれていたのか、ソラは暗示を口にし始めた。

猫たちが不思議そうにその姿を見つめている。

「よし、ボクは何も見てないよ、何も見てない。と、そろそろエイネを起こしに行かないきゃ」

ソラは元の位置に本を戻すと、赤い表紙の本から逃げるようにしてそそくさと書齋を後にした。

書齋を出て階段に向かっていると、丁度起床してきた婦人に出くわした。

「あらソラちゃん、おはよう。今日も来てたのね」

「あ、おはようございますベルさん。いつもすいません」

「いいのよいいのよ。あそこの本は私全部読んで内容も覚えているから」

しれつとすごいことを言うこの貴婦人の名はクリンベルトンリユーゲ。ソラが住む村で唯一の金持ちであり、とびつきりの美人。村の人からベルさんの愛称で親しまれ、中には妻そつちのけで求婚をするお爺ちゃんもいるのだとか。

そんなベル婦人は、村の人々に数々の支援をしていた。お金に困っている家族がいれば彼らに食事を与え。怪我をした人がいればこれを癒やし。時には親しい商人を呼んで、村の人々に物資を分け与えるということもしていた。

「なにか学べることはあつたかしら？」

ベル婦人は決まって、本を読んだソラにこの質問をしていた。

「あ、えーつと。はい、いろいろと」

対しソラはいつもよりも曖昧に答えた。

「今日はなにを読んだの？」

「えつと、昨日と同じで魔法生物に関する本と、えつと——」

内容を思い出そうとして、ソラの顔が拒否反応を示すように、或いは爆発したかのようになりに火を吹いた。

「そ、それよりエイネを起こしに行かないと！ 今日ピクニックに行くつて約束してたから！」

慌ててソラは階段を駆け下り、一目散に逃げていく。

今まで見たことのない反応に、ベル婦人は首を傾げたまま猫たちの方に目をやった。「どうしたのあの子？」

婦人の問いに、猫が各々ひと鳴きする。

「ほほう？ それはそれは……なんだか面白そうねえ？」

猫の声を聞いた婦人は、にやりと意地の悪そうな笑みを浮かべた。

屋敷を後にしたソラは、村の中を走り回っていた。というのも、朝起きてきた村の住人たち全員に朝の挨拶をして回るのも彼の日課だからだ。

「おはようございます！」

「あらおはようソラちゃん。今日も元気ねえ」

「おお、ソラちゃん。今日はエイネちゃんとデートだろう？ 楽しんできてな」

「で、デート!? ただピクニックに行くだけですよ！」

「あらあら照れちゃって」

「おう、おはようソラ！ 今日はずちのじやがいも持っていつてやるぞ！」

「おはようございます！ いつもありがとうございます！」

などという会話を交わしながら、ソラは家へと向かう。

ソラの挨拶で、村が活気づく。みんな笑顔で、ソラに挨拶を返している。

辺境の村——ニギロの朝が始まった。

第一節 不思議な少年と優しき少女 1

ユリージア大陸北西部。そこにはヘルデイロと呼ばれる国があつた。大陸内五つの国の中で三番目に大きく、人口も多い国だ。

世界の中でも裕福な国であるヘルデイロだが、それでもやはり、個人の間には貧富の差があつた。

ヘルデイロで最も貧しいとされている辺境の村ニギロでは、今日も朝早くから農作に勤しむ者が多い。

村での暮らしにうんざりとした多くの若者は、既に金のなる仕事を探しに首都ブリアンテスに越している。

現在村に残っているのは、貧しくても今の暮らしが気に入っている若者か、都会へ行つても仕事の当てなどない年配の者たちだ。

それ故か、村の雰囲気はとても和やかであつた。皆が皆、友人あるいは家族のように仲良くし、協力し合うことで暮らしていた。

そんなニギロに暮らす者たちの中に、合計年齢最年少の家族がいた。少女一人と少年一人の家族だ。少女の方は幼い見かけの反面、もうすぐ二十になる。少年の方は、生ま

れてまだ六年しか経っていないかった。

その彼らが住む木造二階建ての家。その二階の寝室で、朝になってから大分経っているにも関わらず未だ寝ている者がいる。名はエイネーヴエゲグーヌング。一応は現在の家主である少女だ。

エイネは非常に朝に弱く、現在日が昇り切るまで二時間という時間であるにも関わらず、まだ起きていない。昨晩は遅くまで本を読み聞かせていたのもあつてかよく眠っている。

そんな彼女を起こさんと寝室へ急いでいるのが、もう一人の住人のソラであった。

「エイネー！ 朝だよー！」

扉を勢いよく開け、ソラはエイネの腹部目掛け飛び込んだ。

直後「ぐえっ」という情けない悲鳴がエイネの口から漏れ出る。

「ほらほら、朝だよー。もう村の皆も起きてるよー」

お構いなしにソラは甘える猫の如く腹の上を、左へ……右へと転がる。

腹に与えた衝撃とその鬱陶しさからエイネは顔を顰めている。眠そうに呻いている辺りまだ寝ていたのだろう。その証拠に。

「もうちよつと寝させて……あと少し……」

などと言っている始末だ。

「もお〜！ おーきーろー！」

未だに寝ようとするエイネに、馬乗りになってこれでもかと頬を引つ張るソラ。対する当人は全くの無反応でされるがままだ。挙句寢息まで立て始めた。

「エイネってば！」

今度はぺちぺちと頬を軽く叩いた。

しかし起きない。一体どれだけ眠れば気が済むのか疑問である。

「今日は一緒にピクニックに行く約束だったじゃん！」

「ん〜？ ピクニックう？」

ソラの言葉に反応し、エイネは微かに目を開けた。

（そんな約束したっけかな？）

エイネは眠ったままの頭を捻り、そして思い出した。

そう、昨日の晩御飯の際、お弁当を作り、二人で近場にある草原に行こうと話していたのである。

「楽しみにしてたのに……」

ソラの顔が、暗く、今にも泣きそうな表情に変わった。

するとエイネは馬乗りになっているソラの体を、無理矢理自分の隣に寝かせた。そして抱き締めて、頭を優しく撫でる。

「そうだった。ごめんね、ソラ」

「もう。いつつも遅いんだもん」

口を尖らせるソラ。しかしその頬は赤く染まっている。

暫しの間、頭を撫でる時間は続いた。

「さてと！ じゃあ起きよっか」

エイネはそう言つてソラを離すと、大きく伸びをしながら起き上がる。僅かに残った気怠さもこうすることで抜けていく。

「あの、エイネ。服が……」

「ん？」

ふとソラが少し顔を反らした。

というのも寝相からかエイネの服がはだけていたのだ。エイネの白く透き通った肌と胸が露わになっている。

「あちゃあ、ボタンが千切れてる。後で縫つとかないと」

特に気にすることなくそう言うのと、エイネは寝巻を脱ぎ捨てた。ついでに下も脱ぎ、肌着一枚の状態になった。

「ん？ どうしたの？」

そこで漸くソラの異変に気づき、エイネは首を傾げた。顔を真っ赤にして萎縮してい

る姿が、彼女の目には不思議に映っていた。

エイネの体の節々には幾つもの傷が残っている。どれも痛々しい物で、一緒に風呂に入るときはソラも決まって目を反らしていた。

だが今回はそれとは違う。彼も一人の男の子。その上多くの本を読んでいる。極めつけに今朝読んだ本の内容が、感受性豊かな少年に育った彼に今まさに、女性の肢体を眺めて例えようのない気分を味わわせていた。

「顔赤いわね。熱でもあるの?」

そんなことは露知らず。エイネは服も着ずにそのままソラの額に自分の額を当てた。

思わず生唾を飲み込むソラ。目のやり場を失い、これまで感じたことのない感覚に戸惑っていた。胸が騒がしく高鳴っている。

「え、えと、大丈夫! 先に下行ってるね!」

我慢出来ず慌てて退くと、ソラはそそくさと部屋から飛び出した。

「どうしたのかしら……?」

訳が分からず、一人取り残されたエイネは首を傾げる。

「まあ、いつか」

気にしても仕方ない。そう思い、エイネは身支度を始めた。

壁に沿って並べられた二つのタンス。その内左の物に、彼女の衣服が入っている。そ

の中から紺色のワンピースを選ぶと、下着を着ることなくそのまま腕を通す。

次に鏡台の椅子に座り、所々寝癖で跳ねた髪を櫛で梳く。引き出しに仕舞われた白いリボンで、整った白銀の髪を、後頭部の高い位置で一纏めにした。

そして最後に彼女が手にしたのは、ベッド脇の小机に置かれた蒼色透明の結晶である。ペンダント状になっているこれを首から下げること、粗方の身支度は終えた。

「これでよし、と」

独り呟くと、エイネは寝室を後にする。

彼女たちが住む家は二階建てだが大きくはない。部屋の数は大きく分けて四つ。寝室、風呂場、キッチンとダイニングと少ない。そのため二階から階段を降りるとすぐ、ダイニングに差し掛かる。ダイニングからはすぐ、外へと通じる玄関が目につく。余り大きな構造でないための一工夫である。

ダイニングでは、ソラが足をブラブラと振りながら椅子の上に座って待っていた。テーブルには、朝食の皿が並べられている。メニューはパン、ベーコンエッグ、スープ、サラダという簡単な物だが、これら全てソラ一人で作った物である。何分朝に弱いエイネと一緒に暮らしていることから、簡単な料理を覚えざるを得なかったのだ。

エイネは料理の品々を眺めて、微笑んだ。「自分のために作ってくれた」というのが嬉しいのである。

「ほら、早くしないと日が暮れちゃうよ」

「もう、分かっている」

頬を膨らませるソラに対してエイネは笑う。

ソラの向かいに座ると、エイネは早速食事を始めた。誰でも作れる簡単な物であるというのに、ソラが作ってくれたと考えるだけで口の中一杯に旨みが広がっていく。

「うん美味しいよ。ソラ、ありがとうね」

「あ、うん。良かった」

落ちていているとは言え、今日のソラはエイネの事を変に意識していた。食べる仕草から何まで、普段目にするものが特別なものに見えた。

「あ、そうだ。ソラ」

そんな時ふと、エイネが食事の手を止めた。

「ん？ どうしたの？」

何かあったのかと、ソラは首を傾げる。

するとエイネは、満面の笑顔で。

「おはよう」

と言った。

エイネの言葉とその表情に思わず面食らうソラ。暫しその笑顔に見惚れ、だがすぐ

に。

「うん、おはよう。エイネ！」

と、負けないほどに眩しい笑顔を返すのであつた。



エイネの朝食が終わり、二人はピクニックへ行くための準備をしていた。エイネはお昼に食べる物を、ソラは必要な物をそれぞれ用意していた。

パンに具材を挟みながら鼻歌を歌うエイネ。ソラとピクニックというのが楽しみで、嬉しくて堪らない様子だ。もっと早くに起きれば良かったという後悔の念も混じつてはいるが。

「エイネ、これでいいかな？」

バスケットを手に、ソラが顔を覗く。

「うん、それでいいわよ」

「敷物の色は？」

「んー、白いやつでいいんじゃない？」

「えー、汚れないかな？」

「汚れたらちゃんと洗うわよ」

会話を交わしながら、エイネはテキパキと手を動かして料理を箱の中に詰めていく。その色とりどりの食べ物を見て、見かけに寄らず食いしん坊のソラは唾を飲み込んだ。

「これでよしー！」

蓋を閉め、布で箱を包むと、エイネは手を叩いて言った。

「あとは……あそうだ。ソラ、飲み物は何がいい？」

「リンゴのジュースがいいー！」

「リンゴかあ……」

ソラの要望に、エイネは腕を組み考える。今は丁度リンゴを切らしている。かと言って村にはすぐ買える場所があるわけでもない。

「んー、というか」

よくよく見渡してみると今は果物類が何もなかった。これでは他のジュースを作ろうにもそもそも材料がない。

（明日は買い物に行かないと……かな）

苦笑して、エイネはソラの方を見た。先ほどまで出発の準備をしていた彼はしやがんで何かをしている。何をしているのかは机に遮られていて見えない。

まさか。そう思い覗き込んでエイネはギョツとした。ソラはなんと猫を抱き、撫でて

いたのである。

「ちよ、ソラ。あなたどこから」

聞かずとも答えは知っている。この村に猫がいて、ソラが行く場所と言えば一つしかない。その猫を一匹連れてきたのだろう。

「あ、見つかったよ」

「見つかったよ。じゃないわよ。ダメでしょ連れてきたら」

「だって可愛いし」

ソラの返答にエイネは額に手を当てて嘆息する。

ベル婦人は二人が最もお世話になつてゐる人物だ。ソラのことをこれでもかど可愛がり、同時にエイネのこともまるで妹を見るように接している。そんなベル婦人は大の猫好きとしても有名だった。

「あのねえ……うちでは猫飼えないって言つてるじゃない」

「知つてるよ？ だからこうして、たまに遊んでるんだよ？」

叱りつけを意に介さずソラは抱き上げた猫の右手を上げたり、左手を上げたりして遊んでいる。その表情は実に楽しそうだ。

エイネは呆れたように肩を竦めた。これが初めてというわけでもなく、別段問題があるわけでもない。ないのだが。

（最近、どうも私の言うこと聞かなくなったのよねえ）

エイネは少しばかり頭が痛かった。

「あ、そう言えば昨日ベルさんのお家でリンゴジュース、ごちそうになったよ？」

「あら、そうなの？ それ早く言つてよ。あとでお礼言わないと」

「うん、だからさ。分けてもらおうよ？ リンゴ無いんでしょ？」

「いや、そうだけど。さすがにそれはベルさんに悪いわよ」

「全つ然っ！ 問題ないわよエイネちゃん！」

突如背後から聞こえた声に、エイネは「うおお!？」と体を跳ねさせて驚く。

振り向いてみると、件のベル婦人その人がニコニコと満面の笑顔で立っていた。

「おはようエイネちゃん！」

そして物凄く元気だ。

「お、おはようございますベルさん。一体いつからそこに？」

「あなたがうん、それでいいわよつて、バスケットを持ったソラちゃんに返事した時からよ」

「それつてほとんど最初からつてことじゃないですか」

エイネは途端に頭を抱えなくなった。

そしてソラが猫を連れてきたわけではないということも理解した。

ベル婦人は魔法にも長けている人物だ。彼女がその気になれば、気配遮断と透明化の魔法を扱って簡単に姿を晦ますことも出来るに違いない。

しかし。しかしだ。魔法をとともじやないがこう、あまりにもどうでもいいことに使うのは果たして良いのだろうか。心配になった。本人からすればどうでもいいことではないのかもしれないが。

「いつも言ってるじやないですか。何も言わずにこそこそと入ってこないで下さいって」

「仕方ないじゃない。楽しいんだもの」

唇に手を当て、片目を閉じた仕草をする婦人。その様子は子供のようだが、容貌が故に艶やかさがある。

本当に自由な人だな。そうエイネは感服し、苦笑した。

「それでね？ リンゴのジュースだけど、全然いいわよお？」

まるで酒を飲み酔っぱらっているかのような口調で婦人が言う。

「でもせっかくお作りになったんですから、ご自分で飲んだ方が」

「それこそ、私が作ったんだから私がどうするかを決めるのは勝手じゃない？ それに、ソラちゃんが好きだからってことで作ったんだから、ソラちゃんのためになるのなら大歓迎よ！」

そう言つて婦人は親指を立ててエイネの顔に近づけた。

「は、はあ……それならお言葉に甘えても？　というか……」

ふと、あることに気づいた。

家の中が猫で一杯になっていた。

「あの、この子たちはいつの間に入ってきてたんですか？」

「もちろん、最初からよ」

エイネは大きなため息を漏らした。

彼女が家の中にやたら猫を入れたがらないのは、床に彼らの毛が落ちるからだ。綺麗な好きの彼女にとつては、家の中を汚す猫は天敵のようなものだ。それに。

「痛っ!？」

エイネは何故かベル婦人の飼っている猫に悉く嫌われていた。会う度に引つかき傷を付けられるのは、あまり心地の良いものではない。

「あらやだ。ごめんなさいね、エイネちゃん。この子たちどうもあなたを敵視してるみたい」

「どうしてですかね？　私、何もしてないのに」

婦人と話している間も、幾度か足を引つかかれていたエイネ。その度に彼女の表情が一瞬痛みに歪む。猫は別に嫌いじゃなく、むしろ好きな方な彼女だが、ここまで嫌われ

ているとなると少し近寄りかたかった。

「うーん、もしかしたらお姫様を取られると思っっているのかしらねえ」

「……お姫様？」

誰だろうと考える。そして答えに行きつき、エイネは当人の方に視線を向けた。

当人たるソラの周りには、これでもかと猫が集まっていた。皆、物欲しそうに各々の鳴き声を上げている。それに対するソラは、一匹一匹を抱えて撫でていた。撫でられている猫の表情はどれも幸せそのもので、元氣よく尻尾をフリフリと振っている。

ちなみに婦人曰く、飼っている猫はみな雌。雌の猫がお姫様に集まるというのは、如何なものだろうか。正確には王子様だからむしろ自然なのかもしれないが。エイネは苦笑した。

「うーん、別にソラとは親子みたいな関係なだけなんだけどなあ」

腕を組み、小首を傾げるエイネ。

それに対してベル婦人は「どうかしらねえ」と小声で吹き笑った。

「と、それでどうするの？」

「ええと、じゃあ頂いてもいいですか？」

「はいはい。じゃあ、家で待っているわ。みんな行くわよー」

婦人がそう掛け声すると、猫たちがみなソラから離れて家から出て行った。

初めてではないその不思議な光景を見るたびに、エイネは思う。本当に不思議な人だなど。飼ひ猫に懐かれるという当たり前の光景も、クリンベルトンリユーゲという女性が絡むだけで、まるでその人が世界に愛されているかのような錯覚がある。

そしてそれは、エイネが我が子のように育て、共に暮らしているソラにも言えた。

「ねえ、ソラ？」

「んー？」

「その抱えている茶色い猫を離してあげなさい」

「はーい」

エイネの言葉に従い、ソラは抱えていた猫を地面に下ろした。「またね」と彼が手を振ると、猫は一鳴きして家を去っていく。

そんな幾度と見ている光景に、エイネは毎度不思議なものを感じていた。

◇

ピクニツクのための支度を早々に済ませると、エイネとソラはベル婦人の住む家に足を運んでいた。彼女の家は村の中央にあり、その外見はまるで貴族の住む屋敷のよう大きい。というのもここは村の住人が何か大事な会議をする際にも使われているから

なのだが、それにしたつて一人で住むには少し大きすぎるようにも思える。

屋敷の前に佇む門を開き、庭の中に入っていく。庭では多くの花が植えられており、とても華やかである。

「そう言えばソラが見つけた花畑ってこんな感じなの？」

婦人の持つ花畑を眺めながら、エイネはぽつりと聞いた。

「ううん。もつとすごい！ 野原一面にいろんな色の花が沢山あつてね！ もうすつごく綺麗なの！」

満面に花を咲かせたような輝いた瞳でソラは手を大きく広げてその凄さを表現する。

ここにある景色だけでも十分綺麗で凄いのだが、それを越えるとなると一体どんな光景なのだろうか。エイネはこれから向かう場所に少し胸を躍らせた。

「ごめんくださいーい！」

エイネは屋敷の大きな扉を少し開け、空いた隙間から顔を覗かせると大声で呼んだ。

「あれ？」

いつもならすぐに返事があるのだが、今回は珍しく声が聞こえて来ない。まだ戻ってきていないのだろうか。

エイネはもう一度大きな声で「ごめんくださいーい！」と叫んだ。

「はいはーいー！」

次は返事が聞こえてきた。

安心すると、エイネは扉を開いて屋敷の中に入った。ソラもあとに続き、屋敷内に入っていく。

屋敷内は豪華な壺や綺麗な絵画が飾られていた。その雰囲気は素晴らしいが、貧しい村の中にあるにはあまりに相応しくないもので、浮いている。

だがそれに反し、ここは村の住人が少しの休憩の場としてよく訪れていた。皆、ベル婦人の人柄に心底惚れていた。客人が毎日のように訪れているのもそのためだ。エイネもソラも、そのうちの一人であった。

「ごめんなさいね、帰ったら村長さんが来ていて」

苦笑しながら、玄関から入ってすぐのところにある階段から婦人が下りてきた。

その後ろにはニギロ村の長であるヘンリー^{II}ニギル^{II}ベケツツがいる。丸くなった背中と、白く長いひげが特徴的な老人で、村人からは厚い信頼を得ている。

彼の名前にあるニギルは、代々ニギロ村の村長を引き継いでる証でもある。

そんな彼はエイネの姿を見るなり笑って挨拶した。

「おやエイネちゃん。おはよう」

「おはようございます、ヘンリーさん」

軽く会釈すると、エイネも笑う。

「さて、わしは話すことも話したから、お暇するかの」

一体何を話していたのか。エイネは少し興味があつたが、どうせ二人の談笑だろうというところで何も聞かないことにした。

「そうじゃエイネちゃん。道中気を付けるのじゃぞ？　まあ森の中はソラちゃんの友達だらけじゃから問題はないと思うが」

「はい、ありがとうございます」

エイネはもう一度帰っていく村長に会釈すると、婦人の方に向き直った。

「そうそう、リングのジューズね。待ってて、今持つてくるから」

慌てたように言う婦人はキッチンへと駆けて行った。

残された二人はそれとなく顔を見合わせる。特に理由はなく、お互いたまたま顔を伺っただけだった。

「どうかした？」

「えっ？　ううん、なんでもないよ」

少し頬を赤くしてソラが顔を反らす。その際エイネの手を取り、そつと握った。

エイネもそれに微笑むと、握り返した。

「お待たせ——　あら？　あらあらあら？」

帰ってきた婦人が突然、目を丸くした。

一体どうしたと言うのだろうか。エイネは首を傾げる。

「あの、どうかしましたか？」

いつまでも凝視しているのに耐えかねて、エイネは聞いてみた。すると婦人は満面の笑顔で、くすくすと笑い始めた。エイネはますます以て、わけがわからなくなる。

「んー？ そうしてるとなんだか恋人同士みたいねって」

「はい？」

恋人？ 親子ではなく？ そんなことを思ったエイネは目を丸くしてソラの方を見る。

（ソラが私の恋人？ いやいや、でもこの子に対してそんな気は……）

とは考えてみたものの、実際の親子ではないことを鑑みれば恋人の方が正しいのだろうか。そう意識した途端、エイネは少し恥ずかしくなった。

「いやいや、私たちはそういう関係じゃ」

というか、何故今そんなことを言うのだろうか。手を繋ぐなど今に始まったことではないだろうに。エイネは疑問に思いながらそう返す。

「あらそう？ でもソラくんはどう思ってるのかしらね」

言われてエイネはソラの方を見る。すると俯くソラの顔が、耳まで真っ赤になっているのに気がついた。

(ええと? これはどういう反応かしら?)

「もしかしてベルさん、私が寝ている間にソラに変なこと言いました?」

「さあ? どうかしらねえ?」

凶星だ。瞬時に理解すると、エイネは少し頭を抱えなくなった。一体ソラは何を言われたというのだろうか、甚だ疑問である。

「エイネはその……ボクのすごく大切な人、だよ?」

意表を突く言葉に、エイネは赤面してソラを見つめた。当人はまだ顔を赤くしたまま俯いている。繋いだ手の力が、少し強まった。

(やだ、ちよつとその仕事すごく可愛いんだけど!)

エイネは思わず抱きしめたい衝動に駆られてしまう。今は婦人の目もあるためしな
いが、もしこの場が二人だけの空間だったならば、迷わず行動に出ていることだろう。
それだけの衝撃が、ソラのひとつひとつの動作にあった。

「あら、良かったわねえ? エイネちゃん」

「か、からかわないで下さい」

「からかつてないわよ? 実際見た所嬉しそうだし。つと、そろそろ出ないと、日が暮れ
ちゃうわ」

話をはぐらかされムツとするエイネであったが、指摘自体は何も間違っていない。嬉

しそうという点も、そろそろ出なければという点も、どちらものを射ている。

「はいこれ。仲良く口移ししてねえ?」

「ベルさん、やつぱり酔ってます?」

「ええ、酔ってます。二人の可愛さに酔っぱらってますう」

「ああ、もういいです。行こう? ソラ」

エイネは呆れ返り、飲み物の入った瓶を受け取ってソラの手を引いた。その背中を婦人は手を振って見送る。その表情は満開の花そのものだ。

「またね、ソラちゃん。ちゃんとエイネちゃんのことエスコートするのよ?」

「気にしなくていいからね、ソラ」

「ううん、エスコート……する」

「えっ? あ、うん、そう?」

なんだろう、少し居心地の悪い雰囲気になった。そう心底から嘆くエイネであった。

婦人の視界から二人が次第に遠ざかっていく。その背中は本当の親子のようで、婦人は微笑ましく感じている。

その時彼女の脳裏に浮かんだのは、ソラが生まれる前に見た光景だった。ソラの実の母親と、まだ一緒に過ごして間もないエイネが、偽りのない母と娘のように暮らしていたのを。エイネとソラの背中は、まさにそれと重なった。

「あれからもう、六年が経つのね」

ソラの母親がこの村を出て行つてから、もうそれだけの年月が流れていた。そのことに感慨深さを感じ、婦人はホツと息を吐く。

そんな婦人の隣には、自宅へ戻つたはずの村長が立つていた。彼もまた、まだまだ幼い二人の背中を眺めている。

「大きくなつたものでしょ?」

一体誰に物を言っているのか、婦人は微笑んだ。

婦人はソラの母親・ヴェルティナと親友のように仲が良かった。魔法を学び、知る者として二人は切磋琢磨した。

だが二人の力量や技量の差は歴然としていた。ヴェルティナは文字通りの天才だったのだ。魔力の強さも然ることながら、新たな魔法を覚えるのも早く、また彼女オリジナルの魔法まで作つてしまうほどだった。

それでも婦人は、妬むことなくヴェルティナに接した。婦人にとって彼女は目標であり、憧れの存在だった。

「それで、いつまでその姿でいるつもりなのかしら? ヴェルティナ」

ベル婦人はくすりと笑うと、隣に立つ村長を見据えた。

当人は何事かと恍けるように首を傾げるが、婦人の笑顔に観念したのか溜息を漏らし

た。

直後、村長の体が淡い光に包まれた。丸くなっていた背中がすつと伸び、長い髭は無くなり、短かった白髪は長く見事なまでに鮮やかな銀髪に変貌していく。そして光が収まり現れたのは、一人の美しい女性だった。

「ふふふ、やつぱりその姿が一番よ。ヴェルティナ」

婦人の言葉に女性は呆れたように項垂れる。

ヴェルティナⅡゲフォルクスⅡヴィルレ。ソラの生みの親たる女性だ。整った目鼻、潤った唇、艶やかで梳くような銀髪、まるで人形技師にでも作らせたような洗練された体。彼女の全てが、まさに最高の「美」。その物のようである。その美しさ、百の男性が目にするれば、例え愛する者がいようと虜になつてしまうことだろう。

「ベル……どうしてあなたはいつもいつも」

「だっていつ見てもすごく綺麗なんだから。それなのに老人の姿、しかも男の姿だなんて勿体ないわ」

「だからってねえ」

「そんなこと言うなら、魔法解かなければ良かったじゃない」

この期に及んでそれを言うかと、ヴェルティナは頭を抱えた。というのも、もし魔法を解かなければこの婦人、村人に言いふらし兼ねない目をしていたからである。今の彼

女は身を潜めているのだから、なんとしても避けるべき事態であった。

「ふふふ、で、どう？　成長したあの子の姿は」

「……まだ小さいわね」

「それでも流石はあなたの子よ。あの年じや読むことさえおぼつかない子供も多いのに、あの子はもう大人が読むような物でさえ手に取ってるもの。しかもそれを理解までしてる。普通の子よりも成長が早いわ」

「……そう」

「あまり嬉しくないって顔ね」

ヴェルティナは奥歯を噛み締め、地面を睨んだ。強く握られた手のひらからは、爪が食い込み血が滲んでいる。

「あなたの気持ちは分かるわ。でも仕方がないのよ。あなたの子供として生まれた以上は」

「分かってる……分かってるわよ……」

「それに、あなたが今日ここに来たってことは——」

「ええ、動こうとしているわ。運命が」

ヴェルティナは前の道を見据える。先ほどまでであった小さな背中とは、もう見えなくなっている。その時の彼女の表情は、悔しさと悲しさに歪んでいた。

それを眺めていたベル婦人も、同様に沈んだ表情を浮かべる。

「一体あの子は、どんな答えを出すのかしらね」

婦人の問いかけに、ヴェルティナは答ええない。代わりに婦人に、背を向けて一歩進んだ。

「本当に、どうしてあなたが選ばれたのかしらね。何千、何万といる人の中から」

「ベル……あの子のことお願いね。一応言っておくけど、私のことは黙っておいて」

「あなたは一体、いつまで逃げているつもりなのかしら？」

「いつまでもよ。いずれ来る日に、あの子が私の前に現れるまで……ずっと……」

それだけ言い残すと、ヴェルティナは霧のように姿を消した。辺りにはもう彼女の姿はない。気配すら、無い。

婦人は消えたヴェルティナに向けて、ただ一言だけ呟いた。

「ホント、馬鹿ね」

その一言は誰かに届くわけでもなく、青い空に消えた。

第一節 不思議な少年と優しき少女 2

もう少しでお昼時という頃。エイネは昼食の入った小さな荷車を引きながら、ソラはエイネのの右手を引きながら村の南西に広がる森の中を進んでいた。木々が多く、天然のアーチを作っているため、あまり日差しが入らない森だ。大した広さは無いが、それでも抜けるためにはそれなりの時間を歩かなければならない。

森を抜けた先には広大な草原がある。その先にあるのは数日前にソラが一人見つけた場所で、それ以降「一緒に行きたい」と彼がずっと口語していた。

だからだろう。その思いが叶い、ソラはいつになく上機嫌であった。エイネの手を握りながら、鼻唄混じりに軽快なスキップをしている。

「フッフ、なんだか嬉しそうね」

「うん！ だってエイネとピクニックなんて久しぶりだもん！」

「そう。そうよね。私も嬉しいわ」

エイネは普段、村を出ることがない。出ることがあっても、北東の森を進んだ先にある町ドウエセに買い物へ出掛けるくらいだ。

ソラも大きくなり、大抵は村の住人たちの手伝いをしている。そのため、あまりソラと出掛けるということが出来ずにいた。

故にエイネも、今日という日を楽しみにしていた。寝起きの弱さから忘れるという愚行を犯したが、これからその挽回をしよう。

とも考えているが、それ以上にエイネはソラと過ごす時間が何よりも幸せだった。こうして手を繋ぎ歩いている間も、幸せと言う思いで溢れ返りそうになっている。

「あ、そろそろ抜けるよー」

ソラが指をさした。彼の言う通り、指した方向には明るい陽射しが差し込み、木々の列も途切れている。

木々のアーチを抜けると、草原からそよ風が吹く。草たちが揺れ、二人を歓迎しているかのようだ。

「気持ちいい風……」

エイネは立ち止まって、思わず目を細めた。

風がエイネの髪を靡かせる。太陽の光が、煌めく白銀をより一層輝かせた。

そしてそれは、ソラが見惚れるに十分であった。ソラはエイネ以上の美人を知らない。ベル婦人も美しい女性だが、ソラの目にはエイネが一番に映っていた。

そういう日ごろの目と、変に意識していることもあって、彼の胸は大きな騒ぎを起こ

している。今にもはち切れんばかりに、高鳴りは最高潮に達そうとしていた。

そんなソラの思いなど知らず、見惚れている姿にエイネは首を傾げた。

「ん？　どうかした？」

「え？　あ、えつと……エイネが綺麗だなんて……」

顔を真っ赤にして、ソラが俯く。

「……っ、そう？」

「うん、すごく綺麗」

「えと、ありがとう」

エイネも少し頬を染めて、目を反らした。

沈黙が二人の間に流れる。あるのは風が草木を揺らす音と、小鳥が囀る音だけ。二人を邪魔するものは、何一つない。

「う……」

突然、エイネが呻くように短く何かを呟いた。

「う……っ？」

ソラもそれに反応し、思わず顔を上げてエイネを見る。

エイネの体が震えていた。泣いているわけではなく、かと言って怒っているわけでもない。ただ何かを我慢するように、エイネは体を震わせていた。

「どうしたの？ エイ——」

「嬉しいこと言ってくれるじゃないのよ、もお——！」

ソラが名前を言い終えるより先に、エイネはソラに飛びついた。「ぐえっ」と苦悶の声を上げるソラを構うことなく強く抱きしめ、その顔に頬擦りする。

「ああ、もう！ 可愛すぎなのよ！」

「ちよ、痛い、痛いよエイネ！」

「あ、ごめん。でもやっぱりもうちよつと！」

「あー、もー、やあー！」

ソラは必死に抵抗し、身を振じらせた。別に嫌いというわけではなく、むしろエイネに抱き付かれるのは好きなのだが、さすがに今の心境では良しとしない。エイネに一抹の反抗心が芽生えていた。

が、抵抗も空しく、ソラは容易く抱き上げられる。その結果、先ほど見惚れていた顔がすぐ目の前にまで来た。

「ちよ、ちよつと……ボクはもう子供じゃ……」

「まだまだ子供よ。それともいやだった？」

「い、いやじゃないけど……むう……」

頬を膨らませ、しかしその頬は赤く染まりながら、ソラは視線を反らす。

その仕草はエイネにとって「可愛いもの」としか映らず、膨張した感情を抑えきれずにそつと愛するソラの頬に口づけした。

「……っ!?!」

「ふふふ、じゃあこのまま行きましようか」

エイネはソラを抱き上げたまま、草原を歩き始めた。

「ねえ、どつちに進めばいい?」

「……あつち。あつちの丘の方」

「了解しました、私の王子様」

くすくすと悪戯な笑みを浮かべると、ソラが指し示した方向へエイネは歩きだす。それを後押しするかのように、彼女の背中をそよ風が流れる。

風には人一人、今の場合は二人を引くほどの力は無いが、エイネにとって風もまた移動を急かしているかのよう思えた。きっとそれだけの光景がこの先に待っているのだろうと、期待した。

少しして、二人は目的地に到着した。

「凄い、綺麗」

エイネはそこに広がっていた光景を見て、感嘆を漏らす。

辺り一面、これでもかと花が咲いていた。風に揺られて踊り、燦々と照らす太陽の光

を浴びて輝く花が。あのベル婦人の花畑に引けを取らない、或はそれ以上の光景だ。

ソラもまた、花咲き乱れる草原に目を奪われていた。以前見たとき以上のものが、彼の目に焼き付けられていく。理由は——この世で最も大好きなエイネとともに見るこ
とが出来たから——に他ならない。

「こんなところがあつたなんて知らなかった」

長い間用もなく村の外に出ることが無かつたエイネは目を輝かせる。

「ねえ、エイネ」

「あ、うん？」

「一緒にここに來れて、良かった」

「……うん、私もよ」

二人は顔を見合せて笑つた。普段から一緒にいる彼らだが、このときの感情はいつも以上に特別なもの。改めて、お互いが相手のことを「好き」だと認識する瞬間であつた。

その直後、ぐうと間の抜けた音が、ソラのお腹から聞こえてきた。その大きさは話していても聞こえそうなほどで、エイネが吹き出してしまふのも無理はない。ソラは恥ずかしそうに頬を染めた。

「ご飯、食べましょうか」

「うん。えへへ」

エイネはソラをそつと下ろすと、持ってきた敷物を草の上に広げる。それから荷車から昼食のサンドイッチが入ったバスケット、ベル婦人から貰ったりんごのジュース、そしてコップを出し敷物の上に置いた。

「はい、準備できた」

敷物の上に座った二人は、早速サンドイッチを手に取り、口に入れた。

食べた瞬間、ソラは唸るような声とともに顔を綻ばせる。口に広がる味が、彼にいつも以上の至福を与えている。

「美味しい?」

「うん、すつぷくー!」

そんな嬉しそうな顔をされては、エイネも喜ばずにはいられない。彼女の顔もまた自然と緩み、笑っている。

彼らを邪魔するもの何もない。あるのは豊かで美しい自然だけ。

ここにいるのは、一人の少年と一人の少女だ。第三者から見れば、二人はただの友人同士にしか映らないだろう。だが二人の間には、例えば血が繋がっていなくとも確かなる“親子の絆”があった。

食事を終えたソラは、エイネの傍から離れて、咲き乱れる花たちの中にいた。身を低

くして、花たちを踏まないよう気を配りながら、目の前で観察する。

間近で見れば見る程、花の美しき、鮮やかさに心奪われる彼は、あることを考えていた。エイネに日頃の感謝を込めて、何かを贈りたいと。が、ここにあるのは花だけで他に何も無い。それに。

(なんだろう。エイネ、少し元気がない気がする)

不意に、風が吹いた。心地のよい風に煽られ、花が身を揺らす。

「え？ 私たちを使つてほしい？」

突然ソラが不可思議なことを呟いた。花と話すかのように、彼女たちを見つめている。

「いいの？ でも……」

再び風が吹いた。同様に花が身を揺らして、ソラの体に触れる。

「……ありがとう」

ソラは微笑むと、小さな手で優しく花を摘み取った。この一本を渡せば、エイネは喜んでくれるだろうか。ソラは振り向いて、エイネの方に向かおうとした。

一つ、強い風が吹いた。思わずソラは花の方に向き直る。周囲の花たちが、大きく身を揺らした。

ソラは目を瞬かせ、すぐに微笑んだ。

「うん、ありがとう」

一方、エイネは遠くから花を摘むソラの姿を眺めていた。遠目では特になにもない光景だが、エイネの目には別に映っていた。

「——あの子は、本当に不思議な子。ただ花たちの中にいるだけなのに、まるで花たちと遊んでいるみたい」

我ながらおかしな感性だと思いつつも、エイネはそのことを拭えずにいた。どれだけ一緒にいようと、それは変わらない。むしろ一緒に時を過ごせば過ごすほど、ソラのもっと不思議な魅力に心を惹かれていた。それが「親心」とは違うものとは知らずに。

エイネは幸せだった。ソラと過ごせるだけで、彼女は自分が世界で一番幸せだと感じるのだ。こんな日々がずっと続けばいい。ずっとずっと、ソラと居られればいい。それが最高の幸福で、何ものにも侵して欲しくない時間。

(でもいつまでも一緒に……居られないのよね)

自分の手のひらを見つめ、エイネは深く溜息を吐く。その時、ほんの一瞬、彼女の手のひらが透明になった。

彼女の時間は有限だ。しばらくすれば、ソラとの別れが来る。それが、抗うことの出ない運命であると、知っている。彼女は人ではない。人によって生み出された「使い魔」なのだから。

だが些細な問題だった。当の昔から、ソラを育てることになってから既に決まっていたことだ。覚悟はできている。エィネはきつと、潔い別れを告げることだろう。

(でも出来ることなら……)

ため息混じりに空を見上げる。青く澄み切った空だ。ソラの青い髪を連想させる、とても綺麗な。

「エィネ、エィネー！」

「ん、なあに？」

呼びかけに応じると、エィネは顔をソラに向け、小首を傾げた。後ろでに何かを隠している。そう取れるような姿勢でソラが立っている。

「あのね、エィネにいつもお世話になってるから、これプレゼント！」

満面の笑顔でソラは隠していた物を前に出した。彼の手には、花を編んで作られた冠あつた。

「これを……私に？」

思わず目を丸くして見つめる。そんなエィネの姿が可笑しくて、ソラは微笑する。

エィネは未だに状況を飲み込めていなかった。丸くした目のまま冠を見る。鮮やかな花たちの輪が、吹いた風により僅かに揺れる。

「もう、どうしたのさ。そんな顔して」

「いや、だって……その……」

上手く言えない喜びが、エイネの胸の中を渦巻く。ありたつけの気持ちが入められているのが一目で分かるそれは、彼女が生きてきた中で初めての物だった。ソラにプレゼントしたことはあれど、されたことはこれまでに無かったのだ。

故に嬉しさの余り、今にも泣きそうになっていた。目が潤み、視界がぼやける。零れそうに零れない涙が、目尻に溜まっていく。

「えっ？ あ、あの、嫌だった？」

顔を見て、戸惑いを見せるソラ。目が泳いでいることから、どれだけ動揺しているのかが伺える。

一方のエイネは、必死に涙を堪えていた。この場所に連れてきてくれただけでも最上の贈り物であるのに、花冠まで作って渡されては、堪えようのない何かが込み上げてくる。それは全て、喜び以外の何もでもない。

「ううん。ありがとう、ソラ」

エイネは浮かんできた涙を拭き、笑った。花冠を手に取り、そつと頭の上に乗せる。

「どう？ 似合う？」

丁度その時、風が吹いた。輪の中の花が僅かに揺れる。輝く白銀の髪が靡いて舞う。そんな光景に、ソラはまたしても見惚れた。このときのエイネの美しさは、この世の何

にも勝っている。そう彼は感じた。

「うん……」

エイネは、ソラの体を抱き締めた。ソラの感触を噛み締めるように、強く、強く抱き締める。

「え、エイネ？」

「ソラ、本当にいい子。大好きよ」

「……うん。ボクもエイネのこと、好きだから」

ソラは微笑むと、両手をエイネの背中に回した。お互いにお互いの温もりを感じる。消えることのない、確かな温もりを。

そんな二人のことを、遠くから見つめる者がいた。ソラの母親であり、エイネの主であるヴェルティナだ。

「まるで、本当の親子ね」

悲しみの混じった顔で、二人を見守る。もしもあそこに自分がいられたのなら、一体どれだけ幸福を感じられたのだろうか。

だが、ヴェルティナはあの中に混じろうとはしなかった。出来なかった。あの中に自分がいはいけないのだ。あの二人の間に、自分はいるべきではないのだ。まるで呪うかのように言い聞かせ、彼女は姿を消した。

そのことに気づくことなく、ソラとエイネは暫くの間、抱き締め合った。体を離すと、二人は顔を見つめ合う。どちらの頬も、紅に染まっている。

「これからもずっと、一緒にいようね……エイネ」

「うん、ずっと、ずっと一緒よ」

このときエイネは、自分がソラに対しどんな思いを抱いているのかを気づいていなかった。それが彼女が初めて抱く「恋」と知るのには、少し先のことである。

「ねえ、エイネ。ちよつと横になってもいい？」

「もう、甘えん坊さん。うん、いいわよ」

エイネの言葉に反感を抱くことなく、ソラは彼女の太腿の上に横になった。

澄み切った綺麗な空気。草原を吹き抜ける風。温かな陽射し。すべて肌で感じるだけで心地良い気分になり、ソラはいつしか目を閉じて寝息を立てていた。

眠る前に彼が目にしたのは、何の変哲もない青い空と、その手前に映るエイネの笑顔だった。

第一節 不思議な少年と優しき少女 3

「た、ただいまー」

「はい、おかえり」

家に戻ってきた二人の体はずぶ濡れだった。

あまりもの心地よさに眠ってしまったソラが起きるまでに掛かった時間は一時間。

その間ずっとエイネはソラの頭を自分の太腿の上に乗せて座っていたわけで、当然彼女の足は痺れてしばらくは使いものにならなくなったのだ。

そしてエイネの足が回復して帰路に着くころ、突然天候が変わり土砂降りの雨となつたため慌てて帰ってきたのだった。

肩で息をしながら、ソラはエイネを見る。エイネの体には濡れた服が張り付いていて、実に艶めかしい。生唾を飲み込み、ソラは目をそらした。

「すぐお風呂の準備するから待ってて」

そうとは知らずにエイネは浴室の方へ歩いていく。

浴室の前で立ち止まり、エイネはふと床を見た。水浸しになった靴と、服から滴る水のせいで床も濡れてしまっている。それだけならいいが、所々に泥が靴跡を作っていた。

(ああ、また掃除しないと……)

思わず肩を落とすと、エイネは靴を脱いで浴室に入った。

浴室には浴槽と、水を溜めるための大きな桶が設けられている。内桶の方には大量の水が入っていた。エイネはそこから小さな桶を使って水を掬い、浴槽の方へ流し入れる作業をする。

ある程度水を張ったら今度は浴室の前の小さなテーブルに置かれている赤い結晶体を手にとった。エイネが身に着けている物と同様「魔力結晶」だ。

しかし、エイネのものとは違い、こちらは赤色。これは魔力結晶の中でも少し特殊で、魔力を込めると一定時間熱反応を起こす。

別名「熱結晶」とも呼ばれており、一般家庭で多量の湯を沸かす際に用いられるものだ。

この熱結晶にエイネは少しの魔力を流した。すると赤い結晶が発光し、熱を発し始める。しばらくすれば触れることも出来ない程の熱さになるため、エイネはそうなる前に水の中に結晶を放り込んだ。

仕上げに、傍にあった小さな筒を出し、中にある粉を水の中にいれる。この粉は熱に反応して白くなる特性がある。熱に反応した粉は、より体を温めるだけでなく、疲労回復の効果、さらには魔力の回復を促すこともできる。

「これでよし」と

不意に、エイネは頭に触れた。そこにはソラが作った花冠が乗っている。

それを手に取り視界に持つてくると、彼女は落胆する。というのも、ソラが作った花冠は土砂降りの雨に打たれたためか、形が崩れていたからである。

「うっ……ぐう……!?!」

花冠を眺めていると、突然エイネの頭に言いようのない痛みが走った。足がふらついて立っていられず、その場に頽れる。

（そんな……!?! まだ少ししか魔力を使ってないのに……!?!）

左手で頭を抑えながら、右手を見る。右手が小さな粒子を出しながら、輪郭が消えようとしている。右手だけでなく、彼女の全身が同様の現象を起こしていた。

エイネは自分の体を抱えるようにして蹲った。

「ダメ……っ! お願いだから、まだ消えないで……っ!」

掠れた声で必死に自分の存在を保とうとする。消えたくないという、その一心で。

エイネの思いに呼応するかのように、彼女の胸に付けていた魔力結晶が淡い光を放

つ。魔力結晶が、その身に宿す魔力を注いでいるのだ。

浴槽から湯煙が上がった頃、エイネの体は元通りになっていた。

肩で息をしながら立ち上がり、ふらつく足で体を支える。

(私はもう……長くないのかな?)

エイネの視線は地面に向いた。花冠が落ちた衝撃でバラバラになっている。

崩れた花たちを拾っていると、エイネの頬を涙が伝った。

「あれ……なんで泣いてるんだろ?」

涙を拭って笑おうとする。が笑うことは出来ず、溢れ出る涙を止めることも出来ない。叫びそうになる声を押し殺し、唇を強く噛み締めて、花を拾う。

「嫌だよ……消えたくないよ……!」

切なる願いを吐露して、エイネは拾った花たちを抱きしめるように蹲った。

丁度その時、ソラが浴室の中に入ってきた。部屋の戸を開けた瞬間、立ち込めていた湯気が外へと逃げていく。

「エイネー、なんかベルさんがつてどうしたの!？」

ソラはエイネの姿を見て思わず叫んだ。

「あ……ソラ……?」

その声で漸くソラの存在に気づいたエイネは、何かを問われるよりも先に彼を引きよ

せ、顔をその腹の辺りに埋めた。

「エイネ……?」

「ごめん……ちよつとこのままで居させて……」

泣いているのがすぐに分かった。ソラは何も言わずそつとエイネの頭を撫で、優しく微笑んだ。

しばらくして、エイネは顔を上げた。恥ずかしさから顔を真っ赤にしている。

「えと、ありがとう」

頬を掻きながら、苦笑気味に感謝する。まさかあそこまで取り乱すとは思ってなかった。そう内心で呟きながら。

一方のソラはにこやかな顔で「気にしなくていいよ」と答える。
(それにしてもこの子、本当に成長が早いわよね)

ソラの心の成長はとても早かった。勿論子どもらしい一面の方が多いが、誰かを思いやる時の彼は誰よりも大きく見える。

「もしまだ泣きたくなったら言つてね? 傍にいてあげるから」

「泣かないわよもう。ちよつと弱い所見せたら調子に乗つて」

赤くなつた頬を膨らませて、エイネは顔を反らす。

「でも本当に、何か辛いことがあつたら言つて? ボクたち家族でしょ?」

家族。その言葉がエイネの心をくすぐった。思わず頬が緩む。

「だからエイネのことはボクが守ってあげる！」

「もう、生意気なんだから」

「いいわねー。二人ともいい雰囲気」

「別によくないですよ……ってなんでいるんですかベルさん」

いつの間にか、ベル婦人が浴室の入り口に立っていた。そう言えばベルさんがどうのとソラが言っていた気がする。思い出し、エイネは頭を抱えた。

「今日はやたら家に来ますね」

「本当は毎日来たいのよ？」

「本当も何も、毎日来てるじゃないですか」

エイネの受け答えに「あら、そうだったかしらー？」と恍ける婦人。それを聞いてエイネは溜息を漏らした。

「あまりそう溜息ばかり吐いてると、幸せが逃げちゃうわよ？」

「誰のせいで溜息が出てると思ってるんですか」

「それは、私のせい？」

「自覚があるなら少しは遠慮してくださいよ」

呆れて項垂れるエイネを他所に、婦人は周囲を見渡した。

「お風呂に入るつもりだったの？」

「ええ、まあ。帰ってくる時に雨に濡れたので」

「ああ、急だったものねえ」

そう言つて婦人は浴槽の湯に指を入れた。

「でももう冷たくなっているわ」

その言葉に「えっ？」と反応すると、エイネも浴槽に指を入れる。婦人の言う通り、冷たくなつていた。

「せつかくだし、三人で入りましょう？」

「なんですか急に」

「いや、私も雨に濡れたのよ。だから、ね？」

見てみると確かに、婦人の髪の毛には水滴が付いている。服がなんともないというのは少し気に掛かるが、雨に濡れたというのは確かなようだ。

エイネは少し考える。今から温かい湯に戻すにも、また熱結晶に魔力を込めなければならぬ。そうなれば次こそ、体が消えてしまう恐れがある。

風呂に入らないという選択肢もあるが、ソラのことを考えれば取りたくはない。

「でも三人一緒には無理だと思ふんですけど」

エイネの指摘に、ソラは三度首を縦に振る。というのも、さすがに女性二人に囲まれ

ての入浴はなんだか恥ずかしいという気持ちだがソラにはあつた。

一方の婦人はというところ。

「大丈夫よ。屋敷のお風呂なら三人で入れるから」

二人の意見を聞く耳など持っていないなかつた。

「ね？　ね？　入りましよう？」

ぐいぐいとエイネの顔に近づいていく婦人。

「わ、わかりました。わかりましたから」

危うく唇と唇とがくっ付きそうな程まで近づかれ、頬を少し赤らめつつも承諾する。

すると婦人は飛び上がるように喜び、「じゃあ先に帰って用意してるわ！」と言つて一

目散に去つていった。

「まるで嵐のようね」

エイネは思わずそう呟くと、ソラも「うん」と苦笑した。

二人は顔を見合させた。二人とも似た表情で顔を引きつつている。それが可笑しく

て、二人は同時に笑い出した。

「まあ、お言葉に甘えましようか」

二人は手を繋ぐと、浴室を後にした。このとき浴槽に沈んでいた熱結晶は、淡く青い

光を放っていたのだった。



婦人のお呼ばれに応じ、エイネとソラは屋敷にやつてきた。外に出た頃にはもう雨が止んでおり、雲の隙間から月が顔を出している。

二人が再び雨に打たれることなく屋敷にたどり着くと、玄関先で婦人が首を長くして待っていた。

「えと、お邪魔します」

「はい、いらつしやい」

今日ここへ来るのは二度目。一度目は朝、りんごのジュースを分けてもらいに。そして今、お風呂に入るためにである。

この婦人には以前からお世話になっている。働くことが出来ない身であることから経済的な支援も受けていて、正直この人には頭が上がらない。

故に、ここまでお世話になつてもよいのだろうか。そうエイネは思った。本人に言つても「全然気にしなくてもいいのよー？」と、のほほんとした顔で返されそうだから言わないが、エイネは一言謝りたかった。

「あ、そうそう。ご飯も食べてくわよね？」

「え？ いや、あの、さすがにそこまでは」

「でもお風呂に入って戻ってから用意してたら遅くなっちゃうわよ？」

婦人の言う通りだった。もし入浴後に帰宅し、夕食を作っていたら、普段よりも遅い時間になってしまふ。しかし、さすがに夕食までご馳走になるのは申し訳ない。

エイネは唸るようにして頭を悩ませる。

「それに私、普段は一人で食べてるから、たまには誰かと食べたいのよ」

婦人は何故か大きい屋敷に独り身で住んでいた。恋人や夫がいるわけでもなく、屋敷内にいるのはペットの猫たちだけ。幾ら猫たちがいるとは言え、彼女が人恋しくなるのも当然と言える。

「ね？ いいでしょ？」

入浴に招待した時と同様、婦人はエイネの顔に自分の顔を近づけた。

「じ、じゃあお言葉に甘えてもいいですか？」

「ええ勿論よ！ どーんと任せなさい！」

終始婦人のペースに吞まれている気がする。そうエイネは苦笑して婦人の後に続いた。

屋敷の中は少し薄暗かった。灯されている明かりは蠟燭の火だけ。広い屋敷を明るく照らすには些か足りないと言える。それが却って屋敷内の味を出していた。

夜にここへ来たことの無かったエイネとソラは、周囲を見渡しながら歩いた。朝では味わえない感覚に、ただ感嘆していた。

ふと、進む先にひと際明るい部屋があつた。あの部屋がなんの部屋なのか、二人は知らない。

「さあ、入って入って」

促されるままに二人はその部屋の中に入った。

その部屋は脱衣所だつた。二人が住んでいる家にあるものとは比べものにならないくらいに広い。三人入つてもまだまだスペースがある。ここにソファアなどを置いて部屋として扱つていてもおかしくないほどだ。

「さあ、脱いで脱いで」

そう言いつつ、婦人は着ている服を脱ぎ始めた。透き通つた白い肌が露わになる。彼女の裸などこれまで見たことなく、エイネとソラは思わず見惚れて頬を染めた。

ソラが特に釘付けになつていたのは、女性特有の胸の膨らみだつた。エイネにも勿論その膨らみはある。大きくもなく小さくもない、ごくごく普通の大きさだが、一方の婦人はエイネのそれよりも大きかつた。まさに大人の大きさと言えよう。

ソラが婦人の胸に釘付けになり、憧れに似た何かを抱くのも無理はなかつた。別に変な意味ではない。ソラは生まれてから一度も人間の、言うなれば母乳を口にしたことな

ど無いのだから。

どこにでもいる普通の赤ん坊は、母の出す乳を飲み育つという。そう本の知識で持っているソラだが、今の今まで、牛の乳以外に口にしたことがない。母に触れたことがないという事実が、無意識の内に彼の中で肥大化していった。

そしてソラの視線はエイネに向いた。胸ではなく、顔に。彼女は自分の母親ではない。それを彼は知っていた。教えられたのは言葉を話せるようになった三つの時だったか。

だがソラはいつしか思うようになっていた。母親はエイネしかない、と。エイネのことを「お母さん」と呼びたいと。

「ほら、エイネちゃんも脱いで脱いで！　　どうかお姉さんが無理矢理脱がせちゃうわ！」

「ちよ、なんですか。ひやつ!?　ど、どこ触ってるんですか!」

そんなソラを他所に、婦人はエイネの服を脱がさんと飛びかかった。

「ほらほら、脱いで脱いで!」

「じ、自分で脱げますから!　ちよ、やめ……て……!」

抵抗も空しく、エイネは服を無理矢理脱がされてしまった。恥ずかしさのあまり目を伏せて、体を隠すようにして立っている。

すると婦人は何を考えてか、エイネの肩を掴み半ば強引に歩ませ、ソラの前で並んだ。

「ねえねえソラちゃん？ どっちの裸が綺麗？」

「ちよつと何聞いてるんですか！」

エイネは思わず声を張り上げた。その反応は最もである。

「ソラ、無視していいからね？」

だが半ば方針状態のソラはぼうつと二人を眺めると質問に答えた。

「……エイネの方が、綺麗」

不意を食らったエイネの胸がドキリとする。今の彼女の顔は、熟れたトマトのように真つ赤に染まっている。

ソラもまた自我が戻り、顔を赤くして二人の体から目を反らした。

「あらあら、私の方が綺麗だと思ったのになあ」

残念。と婦人は唇に手を当てて恨めしそうにソラを眺めている。

ここだけの話だが、もしエイネと並んでいたのが実の母親だったとしても、ソラはエイネを選んでいた。例え傷だらけの体をしていても、ソラにとつてはエイネこそが、誰よりも美しくかけてかけがえない存在なのだから。

それを知ってか知らぬでか、婦人は内心で「ほんとに、残念ね」と呟いていた。

「ま、気を取り直してお風呂に入りましょう！ さあソラくんも脱いで脱いで！」

「わっ!? ベルさん!？」

ベル婦人がエイネと同様にソラの服を脱がせようとした時だった。

「もういい加減にしてください!」

反射的に、エイネは叫んでいた。

婦人が手を止めてエイネの方を見てみると、剣呑な瞳が婦人を突き刺した。

「あの、エイネちゃん?」

無言の圧力。エイネの瞳は「離れろ」と訴えている。

こんなに怒った姿を見たことがなく、婦人は思わずソラから手を離れた。ソラも同様に、口を開けてエイネの顔を見ている。

「あ、えと、その……」

ハツと我に返ったエイネは、顔を伏せて口をまごまごさせた。内心「どうしよう、どうしよう」と繰り返している。

それを見た婦人は僅かに笑みを浮かべる。

「ちよつとやりすぎちゃったわね。ごめんなさい。先に入ってるわ」

謝罪して、婦人は一人先に浴場へと入っていった。

残った二人は顔を見合わせる。

「ごめんね、ソラ」

「ううん、気にしてないから」

少し気ままずくなり、エイネは顔を反らした。何故あそこまで怒ってしまったのか、エイネ自身分かっていなかった。ただ何か、我慢できないものがあつたのは確かだ。

気を落としているエイネを見て、ソラは口を開いた。

「ねえエイネ。ボクの服、脱がせて？」

「え、何？ どうしたの急に？」

「いいから、お願い」

ソラの意図が分からないまま、エイネは言う通りにソラの服を脱がせ始めた。胸が騒がしく鳴っているのを自覚しながら、一枚一枚ソラの着ている物を脱がせていく。そして露わになった彼の肌を見て「相変わらずなんて綺麗な」と呟いた。

「ありがとう」

「うん、いいけど。急にどうしたの？」

「別に、なんでもないよ。ほら、早く入ろう？」

「あ、うん」

首を傾げながら、ソラに手を引かれるがままエイネは浴場の中に入った。

「わあ……」

「広い……」

浴場に入った途端、二人は同時に感嘆の声を漏らした。まるでお城の中に設けられたもののように広々とした空間が広がっていたからだ。その大きさ、二人の住む家のリビングほど、いやそれ以上である。

そして浴槽もまた、大きかった。人一人が入るにしては広すぎるほどのものだ。大人が七人ほど入ってもまだスペースが出来そうである。

辺りを見渡していると、二人の視界に、一人湯に浸かるベル婦人の姿があつた。

「あら、いらつしやい」

彼女は微笑むと手招きする。

それに応じて二人は浴槽の中のお湯を桶で掬つて身に浴びると、恐る恐る湯船の中に足を入れた。最初の内は熱く感じたお湯も、時間が経つごとに慣れていく。

じゃぶじゃぶと音を立てながら二人は浴槽の中を歩き、二人は婦人の横に並んだ。

「はあ……気持ちいい……」

肩まで浸かると、エイネは目を細めてほうと息を吐いた。ソラもその左横に並んで、気持ちよさそうに頬を緩ませている。雨に打たれて少し冷えた体が、一気に温まるのを感じていた。

「さつきはごめんなさいね。少しはしやぎすぎたわ」

「あ、いえ、もう気にしてませんから。私の方こそ、怒鳴つてすいませんでした」

「気にしなくていいのよ。ソラちゃんもごめんなさいね?」

「ボクも、気にしてないです」

二人の答えに安心したように笑うと、婦人は天井を見上げた。

悲しげな表情。その横顔を眺めていて、エイネはふと疑問に思った。何故この人は独りで大きな屋敷に住んでいるのだろうか。

何度か考えたことはあった。だが、猫たちと一緒に寂しくないと思っっているのだろうと、大して気にも留めなかった。

屋敷内の廊下を歩いて、この浴場に入つて、分かった。ここは独りで住むにはあまりにも大きすぎる。

「あの、ベルさん。ベルさんはどうしてこの屋敷に独りで住んでいるんですか?」

気がつけばエイネは、疑問をそのまま口にしていた。

問いに対する答えは、すぐに返つてこなかった。婦人は天井を見上げたまま、口を開こうともしない。

流れる沈黙に、エイネは困惑していた。今考えると、聞いてはいけないことだったのかもしれない。ここは何か別の話題を探さなくては、と。

「……どうしてなのかしらねえ」

エイネが新たな話題を探し当てるより先に、婦人はほつりと呟いた。

「ベルさん……?」

彼女の表情は今、より一層沈んでいた。普段元気な顔しか見せないだけに、その表情は意味深なものに取れる。

エイネはそんな婦人の姿を見て、やはり聞いてはいけないことだったと理解した。空気が気まずく、今すぐにでもこの場から逃げ去りたい。エイネはその気まずさに耐えられず、思わず顔を少し湯に沈めた。

「逆に聞きたいのだけれど、エイネちゃんは どうしてソラクんの面倒を見てるの?」

突然話題を振られて驚いたエイネは、慌てて顔を上げる。

「あの人に、ヴェルティナに言われたから?」

「いえ、違います」

即答だった。これにはさすがの婦人も驚いたのか、エイネの顔を凝視している。

「確かに今の状況のきっかけはヴェルティナかもしれない。でもソラを守りたいと思っただけは、まだ生まれたばかりだったあの子の手に触れてからです。小さな手で力一杯私の手を握り返してくれた時、ああ、この子を守ってあげなくちゃって。それは今でも変わりません。あの子は私が命を掛けてでも守りたい、大切な子ですから」

エイネの表情はとても穏やかなものだった。その反面、言葉には強い意志がある。

一方でソラは、天井を見上げて仰向けになったまま、湯に浮かんでいた。

母親の名前を聞いたことで、彼は思い出していた。今でもはつきりと覚えていて、自分が生まれた時のことを。記憶の光景に映っているのは、嬉しそうに赤子の手と頬に触れるエイネと、その赤子を抱きかかえて微笑む母ヴェルティナの姿。今でも感じる。あの時の母親の表情には、悲しみが潜んでいた。

それから数日して、母親は赤子のソラを置いて出て行った。

(ボクは望まれない子供だったのかな……?)

自分は未来で孤独になるのではないか。母親が自分を見捨てたように、今は優しく育ててくれているエイネも自分を見捨て、最後には誰一人として自分のことを見てくれないか。

かつての光景は、幼い子供が持つには不相应な不安と恐怖と、そして孤独を募らせた。

ソラは立ち上がると無言でエイネに近づいた。彼女の前に身を縮めて座る。

「どうしたの?」

その様子が心配になって、エイネはソラの顔を覗き見た。見て、胸を抉られる様な感覚を得た。ソラの目には涙が溜まっていたのだ。

表情で察したエイネは、ソラの小さな体を優しく抱き寄せた。

「大丈夫よ。私はあなたを置いてどこかに行ったりしないから」

耳元で囁き、あやすように頭を撫でる。

エイネの優しい言葉は、不安と恐怖で傷ついたソラの心を癒やして包み込んだ。

「だから笑って？ 私、あなたが笑っている顔が一番大好きなんだから」

「……うん」

鼻を吸って、涙を拭い、ソラは笑った。

安心したエイネも微笑んだ。

「さてと、じゃあソラ。髪の毛洗ってあげようか？」

「……うん。お願い」

「よし、じゃあ洗い場まで競争だ！ よーい、どん！」

「あ!? もうエイネったらずるい！」

わいわいと騒ぎながら遠ざかる背中を、婦人は悲しみに満ちた表情で眺めていた。二人の笑顔からは、幸せが伝わってくる。間近で見える方が、より一層に。

羨ましかった。あの中に入りたかった。だが彼女は、入れなかった。入れるはずもなかった。

「私にその資格はないんだもの」

そう自虐した言葉を呟いたときだった。

「何がですか？」

突然声を掛けられて、婦人は身を跳ねらせた。

声のした方向を見ると、先ほどまで洗い場にいたはずのエイネが座っていた。

「え、エイネ？ いつの間に……？」

「今さっき隣に」

どうやら物思いに耽りすぎたようだ。そのことを自覚し、婦人は迂闊さに嘆いて咳払いをした。

「ソラちゃんは？」

「先にも上がりました。なんでも猫たちと遊びたいそうで」

「なるほど、そっか」

「ところでベルさん、先ほど私たちのことじっと見つめてましたけど、どうかしましたか？」

「ああ、ううん別に？ 二人とも幸せそうだなあと思ってただけよ」

嘘は言っていないかった。

婦人の言葉にエイネは頬を緩ませる。

「そうですね。幸せです、とつても」

誰が見ても、エイネの幸福を感じることが出来た。

だが彼女の幸福な時間に、いつかは終わりが来ることを婦人は知っていた。誰も止めることの出来ない、抗うことの出来ない運命を。

そしてその運命が、近づいてきていることも。

「エイネちゃん、あなた……消えかかっているわね？」

婦人の言葉に、エイネは息を呑んだ。思わず婦人の顔を、丸々とした目で凝視する。

「どうして？ どうしてそのことを」

「そうね……ヴェルティナから聞いていたのよ。あなたがもうすぐ消えるかもしれないってことを」

「……え？」

ヴェルティナから聞いた。その発言は、エイネをさらに動揺させた。

「ヴェルティナは言っていたわ。あなたは保って、あと五日だつて」

エイネの顔が青ざめていく。それでもなんとか自分を保ち、婦人の顔を見て笑った。当然、そこに本当の笑顔はない。

「じ、冗談ですよね？」

「冗談を言っている顔に見えるかしら？」

婦人の声が、いつになく低い。それだけで、エイネは嘘ではないと察してしまっていた。

「そんな……そんなの……」

いつかは消える。それはエイネも覚悟していたことだ。しかし、彼女の中ではまだ先

の話だったのだ。

五日。それはエイネが絶望するのに十分な時間であった。

「嘘、嘘ですよそんなの。だってまだ私は——」

「さつき熱結晶に魔力を注いだとき、一瞬消えそうになったのよね？」

「——ツ!？」

どうしてそんなことまで。言いたくても、もはやエイネは声を発することも出来なかった。

「だって、あなたがソラちゃんに泣きつくなんてよっぽどなことだもの。すぐに察しがつくわ」

否定など出来なかった。そもそも事実なのだ、否定のしようがない。

湯面を見つめたまま、エイネは唇を噛み締める。その表情を見て、婦人は彼女の肩に手を置いた。

「エイネちゃん……あなたが助かる方法がたったひとつ存在するわ」

「え……？」

釣られて、エイネは婦人の顔を見た。この時エイネは、無表情な婦人の瞳に、冷酷さが宿っているようにも思えた。

「ソラちゃんと契約するのよ」

婦人の発言に、エイネは思わず立ち上がった。

「そんな、そんなこと出来るわけじゃないじゃないですか！」

自分でも驚くくらいに、エイネは声を張り上げていた。ただ彼女の怒りは留まることを知らない。

「あの子はまだ幼いんです！ そんな子に使い魔との契約なんてさせられるわけがない！」

半ば癡癡気味に怒鳴り散らす。興奮しきった彼女の顔は、真っ赤に染まっていた。

エイネが怒るのも無理はなかった。使い魔との契約、その維持には膨大な魔力が必要なのだ。多くの修行を積んだ者でさえも、維持に苦勞し、病床に着くこともある。最悪死に至る者さえいるほどだ。子どものソラが、耐えられるはずもない。

況してやエイネは人型の使い魔だ。使い魔には犬や猫と言った獣や、植物も使い魔として使役することが出来る。その中で最も魔力が必要とされているのが人型と言われている。

その上彼女は――。

「でも事実よ。それ以外に方法はないもの」

「だからどうしてソラなんですか！」

「だって今あなたの家族はソラちゃんしかいないでしょ？」

「それは！ それは……」

エイネは返す言葉が見つからなかった。見つかるはずもなかった。同時に「婦人と契約すれば」という甘えた言葉を一瞬投げそうになった自分を呪った。

「でも、あの子はまだ……」

「魔力に関しては全然問題ないわ」

「……どういう意味ですか？」

「あなたが今日行ったお花畑ね、ソラちゃんが独りで作ったところなの。それも、魔法を使つてね」

「え……？」

思わず耳を疑った。理解することを拒んでいた。

別に花畑を作ることぐらい、やろうと思えば誰でも出来ることだ。花の種を植えて、そこに毎日欠かさずに適量の水をやる。それで花は咲くのだから。

しかし、魔法を使つてとなるとわけが違う。魔力を注ぎ、花の成長を促す。場合によつては一日で花を咲かせることも可能だ。

もしあれだけの規模の花畑を魔法でもつて生み出そうとするならば、それ相応の魔力が必要となる。なんせ生命を吹き込むということなのだから。

そしてそのために必要となる魔力は、子どもが持ち得るはずのない量だった。

「エイネは信じたくはなかった。信じられるわけがなかった。ソラはまだ幼い普通の男の子なのだからと。」

「あの子の魔力は他の誰とも比べものにならない程の量があるわ。あなたと契約して維持することなんて容易いはずよ」

確かに、婦人の言うことが真実なのであれば、使い魔との契約も簡単なことだ。

「エイネは何も言い返せなくなっていた。何を考えればいいのかさえ分からなくなっていた。内心に「まだ生きていたい」という願望があるからに他ならないことも気づいている。」

「あのお花畑は一体誰のために作ったのか、よく考えることよ。エイネちゃん」
婦人はそれだけ言うのと立ち上がり、振り向きもせずに浴場から去っていった。

一人取り残されたエイネは佇んだまま、葛藤の渦に吞まれていく。生死の選択を急に迫られた少女は、その苦しみに唇を噛み締めた。

第二節 揺れる想いと動き出す運命 1

エイネが風呂から上がり廊下に出ると、一匹の猫がまるで待ち構えていたかのように立っていた。

この猫が案内をするつもりらしく、ひと鳴きしてついてくるよう促している。ついて行くと目的地である食堂へと辿り着いた。

食堂ではソラが席に座って待っていた。婦人の姿は、食事を持つてくるためか見当たらない。

それが却って、ソラといふことを気まづくさせていた。

「どうしたのエイネ？ なにかあったの？」

ソラはエイネの変化にはことさらに敏感だ。

ちよつとでも暗い顔をしようものなら、顔を覗き込み、心配した表情で見つめてくる。今がまさにそれだ。

エイネは咄嗟に顔を背ける。それが精一杯の行為だった。

「どうしたの？ ねえってば」

不審がったソラは、何度も声を掛ける。

それに対してエイネは体ごと見ないようにしたため、終いには肩を揺らし始めた。

「放っておいてよ！」

堪えられず、エイネは気がつくと呼んでいた。

直後、後悔した。

慌てて振り向くと、涙をポロポロと溢すソラの姿があつたのだ。

「ご、ごめんね。私は大丈夫だからさ」

「……………どうして？」

ここで漸くエイネは、ソラが悲しみだけで涙を流しているのではないと気がついた。肩を震わせているソラは、怒ってもいるのだと。

「ねえ、どうしてそうやって何かを隠すの？ ボクが子供だから？ ボクじゃ何も出来

ないから？」

「違う……違うわソラ。私はただソラに笑っててほしくて」

「エイネが笑ってないのに笑えるわけないじゃん！」

ソラの言葉が、エイネの心に深く突き刺さる。反論の余地もない。

「ソラ、ごめ——」

「もう知らない！ エイネのことなんか知らない！」

「あつ！ 待つてソラ！」

呼び止めるよりも先に、癩癩を起こしたソラは食堂から出て行った。

丁度その行き違いに、婦人が食堂に入ってくる。婦人の顔はきよんとしており、状況が呑み込めていない様子だ。

「何かあつたの？」

「あ、ええと、その……あはは……」

笑つてごまかすには少々無理があつた。そもそも笑いを作ることさえ出来ないほどに、エイネの心は傷ついていた。

エイネは仕方なく、事の経緯を婦人に話した。

「な、なるほどねえ……」

すると話を聞いた婦人は、あからさまに顔を反らした。

（まったくあの人は……）

苦笑する婦人の一方、エイネは沈んだ顔で床を見ていた。

「どうしたらいいんですかね……？」

初め、この問いが何を意味しているのか婦人はわからなかった。

が、理解すると顔を伏せて逆に問い掛けた。

「エイネちゃんは、どうしたいの？」

「私は……」

ソラが叫んだことが、エイネの頭から離れない。

エイネは考える。その言葉の意味を。その言葉の先にある未来を。ソラのために何をすべきなのかを。

「私はソラと一緒にいたいんです。出来ることなら、ずっと一緒にいたい」

「そう、じゃあ——」

「でも……でもわからないんです。それが、ソラのためになるのかが」

「……なるわよ。なるに決まってるじゃない。だってソラくんは、エイネちゃんのこと
が大好きだから」

大好き——その言葉が、エイネの胸をより締め付ける。

「お互い一緒にいたいのなら、答えは簡単だと思うのだけど。エイネちゃんは何をそんなに悩んでいるの？」

「わかりません。わからないんです」

エイネは自分の悩みの正体に気づいていなかった。一体何故こんなにも不安で胸を締め付けられているのかが。

答えは本来単純であるはずなのに、何故かその答えを拒んでいる。本来心を持たぬという使い魔故の弊害なのか、それとも自分は彼の母親の代わりにすぎないという思いか

らか。

どちらにせよ、エイネが答えにたどり着くまでに時間が必要なのは明白だった。

「そう……まあ時間はまだあるのだし、答えはあなたが考えることよエイネちゃん。それよりも」

見かねた婦人は笑うと、俯くエイネに大きな鍋を渡した。それは少し前に婦人が持ってきたものだ。中には手作りのスープが入っている。

「はい！ まずはおソラちゃんと仲直りしないと。これ持って行って！」

「え？ あ、あの」

「一緒に美味しい物食べたら、いつの間にか仲直りしてるものよ」

「いや、でもこれ」

「あ、お鍋のことなら気にしないで！ 明日取りに行くから」

有無を言わず、強引に鍋を押し付ける婦人。

戸惑いながらも鍋を受け取ったエイネは、自然と漏れ出るスープの匂いを嗅いでいた。

（あ……これ、すごく懐かしい匂い……）

思わず目を細めるエイネ。婦人の手料理は初めてのはずだが、このスープの匂いは初めてのものではないように思えた。

「さ、早くソラちゃんのとこに行つてあげて？ きつとお腹空かせて待つてるから」

「あの……ありがとうございます」

エイネは軽く頭を下げた。

「いいのよ」

「あの、明日は夜一緒にご飯食べましょう。今度は私がご馳走しますので」

「あら、それは楽しみだわ。じゃあそのためにも、ちゃんと仲直りしてね？」

「はい。それじゃあ」

もう一度頭を下げると、エイネは足早に部屋を出て行つた。

「だって、あなたたちに喧嘩は似合わないもの」

エイネの背中を見送つた婦人は深いため息とともに呟いた。

「全くあなたがいらぬこと言うから二人に亀裂が入るところだったじゃないの。しかも、いらぬこと言つちやつたあ、なんて半泣きになりながらスーパ作るだけ作つてさつさと出て行くなんて」

一人愚痴を漏らすとベル婦人も部屋を出ていく。その際彼女は一言口にした。「今度会つたらお説教よ、ヴェルティナ」と。



エイネが屋敷を出る頃には、雨はすっかり止んでいた。雲の隙間から覗く月が地面を照らしている。

エイネは帰りながら、ソラにどう声を掛けようか考えていた。こんな風に喧嘩をしたのは初めてだ。どう接すればいいのだろうか、と。

「そんなの、私が謝ればいいに決まってる……よね」

程なくして家に着いた。が、明かりは点いておらず暗闇に包まれている。

かろうじて射しかかる月明かりを頼りに、居間のテーブルに鍋を置いた。そして燭台に火を付け、それを手に二階へ上がっていく。

「まさか部屋にもいない、なんてことはないよね？」

不安になりながらも、エイネはソラの部屋の前に立ち、扉をノックした。

「ソラ？ いる？ 入るわよ？」

扉を開いて部屋の中を照らし、エイネは安堵の息を吐いた。部屋の隅で毛布に包まって蹲るソラの姿があつたからだ。

「ソラ、ごめんね」

エイネは近づき、ソラの前で屈んだ。

しかしソラは蹲ったまま顔を上げようとしない。ただ、時折鼻をすする音が聞こえる

ことから、泣いているのがわかる。

「ねえソラ？　ねえつてば。おーい」

エイネが何度呼びかけても、ソラは反応を示そうとしない。

(どうしたものかなあ……)

ここまで頑なな態度を取るソラは初めてだった。

エイネはどう接していいのかわからず、無言になる。

静寂が部屋を包み込んでいく。暗雲が立ち込む中、エイネは次第にこの空気に耐えられなくなっていた。

「しょうがない」

そして堪えきれずに彼女が取った行動は――。

「そんなに不貞腐れている子には……こうだ！」

これでもかと脇腹をくすぐる事だった。

「ふえ？　な、なに？　ちよ、ちよつと！」

これには堪らず顔を上げるソラ。

「やめ……っ！　ははっ、く、くすぐりたいよ！」

「うりうり、もつと笑え笑え――！」

「あは、あははは！　や、やめて……！　やめてえっ！」

エイネの手から逃れようとするソラ。だが出来るはずもなく、されるがままに足をバタつかせて笑い声を上げた。

「ひひっ……く、苦し……っ！ お、お願いだからもうやめ、やめてっば……っ！」

掠れた声を聞き、ようやくエイネは手を止めた。

ソラがぜえ、はあと息をしている一方で、エイネは満面の笑顔でその様子を見ている。
「むう……ボクは怒ってるんだよ？」

頬を膨らませて、そっぽを向くソラ。顔は少し赤くなっている。

「うん、ごめんねソラ」

エイネはそつと頭を撫でた。

ソラは少し俯いた。表情は暗く、申し訳なさそうに口を結んでいる。

「ボクも……ごめんなさい……」

「別にソラは謝らなくていいのに。悪いのは私なんだから」

「ううん。だつてわかってるんだもん。エイネは、ボクに心配をさせたくないんだつて。なのにボク、あんなこと言ったから……エイネのこと、傷つけちゃったから……だから

……っ」

「もう、泣かないの。ソラは何も悪くないの。悪いのは全部私なんだから」

次から次と溢れるソラの涙を、エイネは指で拭った。

「でも……」

「ほら、一緒に美味しいご飯食べよ？　それでもう全部終わり！　ね？」

「う、うん……」

「ほらそんな顔しないで？　私はソラの笑ってる姿が大好きだって言ったでしょ？　だから笑ってよ」

そう言つてエイネは手を出す。

「うん……ありがとう」

少し笑うと、ソラは差し出された手を握った。

そのまま二人は手を繋いで食卓に向かった。

冷めてしまっていたスープを温め、皿に盛り付け、テーブルの上に並べる。

「美味しそう……」

スープを見て、ソラは言った。

食事の前の祈りを捧げた後、エイネは微笑む。

「じゃあ食べよっか？」

「うん！」

匙を取るとソラはスープを頬張るように次々口に入れた。

「どっどっ？」

「うん、すごく美味しいよ！ エイネもほら！」

促されて、エイネもスープを一口飲む。

「あ……」

「ね？ 美味しいでしょ？」

「うん、美味しい……」

微笑んで答えると、エイネはスープを見つめた。

（懐かしい味……）

遠い日のことを思いだしながら、エイネはもう一口飲む。

（そっか……あの人が、今日来てたんだ。だからベルさん、あんなこと……）

「少しくらい、顔見せればいいのに」

「ん？」

「ううん、なんでもないの。さ、沢山食べてソラ」

「うん、沢山おかわりする！」

余程お腹が空いていたのか、はたまた美味しいスープ故なのか。新たに皿に盛っては、瞬く間に平らげていく。

そんなソラの様子を眺めながら、エイネもスープを口に作る。ゆつくりと、スープの味を噛みしめて。

(ありがたい……わたしの大好きなもう一人のお母さん……)

食事を終えて、エイネは自分の部屋で横になつていた。いつもならすぐに眠っているのだが、あの懐かしい味のスープのおかげでしばらく眠れそうにない。

天井を呆然と見つめていると、部屋の扉が開く音がした。

扉の方を見ると、眠そうな目を擦りながらソラが立っていた。

「どうしたの?」

体を起こし、ソラの顔を伺う。

「エイネ……一緒に寝よ?」

エイネは暫し間を置く。

「いいわよ。ほらおいで」

ソラを自分のベッドの中に招いた。

「もしかして、一人で寝るの怖くなつた?」

エイネはなんとなく少しからかってみる。

「違うもん……今日は一緒に寝たいの」

躊躇いもなく、ソラはエイネの隣で横になつた。

こうして二人で寝るのも久しぶりかもしれない。そんなことを思いながらエイネは、

ソラの顔を見る。

(ほんとこの子、かわいい顔してるわよね……)

ソラの顔は、まるで少女と見紛うほどに愛らしいものだ。見ず知らずの人に聞けば、半数以上が性別を「女の子」と答えることだろう。

(将来大きくなったら、あの人みたいなどびきりの美人さんになったりして)

冗談混じりに将来のソラを想像すると、真つ先に浮かんだのは母親ヴェルティナに瓜二つの姿だった。

と、そのとき、「ねえねえ」とソラが囁くように微かな声で言った。

「エイネは長い間、お母さんと暮らしてたんだよね？」

エイネの胸が驚きで弾んだ。

「まあ、ソラよりは長い……かな。急にどうしたの？」

「うん。お母さんつてさ、どんな人だったのかなつて」

母親に関することをソラは今まで聞いてこなかった。故に、エイネは少し悩んだ。どう答えたらいいいものかと。

ソラの母親のヴェルティナはとにかく不思議な人間であった。何年経つても衰えることのないその美貌は、人間ではないのではないかとさえ思えてしまう。なにより、ほかの人間とは違う何かを感じるのだ。

そのことをどう伝えたものかと考えて、ソラの顔を見て、エイネは少し笑った。

「そうねえ……変わった人だったわよ」

「変わった人？」

「そう、いつもなにかと話をしていたわ。動物だったり、植物だったり、時には吹いている風にも話しかけていたかしら」

「確かにそれは……変わったるね……」

ソラの表情が僅かばかり曇った。自分もまた同様なことをしていると理解しているのだ。

それでもエイネは言葉が続けて笑った。

「そしてなにより、とても優しくかったわ。私が出会ったどんな人よりも」

エイネは優しくソラの頭を撫でる。その心地よさに、ソラは目を細めた。

「あまりソラが満足のいく答えじゃなかったかな？ ごめんね」

「ううん、ありがとう。そっか、お母さんは優しくかったんだ」

撫でられながら、ソラは母親の面影を思い浮かべた。姿形だけの、顔のない面影を。しかしその面影はすぐに一人の少女に塗り替えられた。今日の前にいる、自分にとって最愛の人である少女に。

「でもボクにとつてエイネも大切なお母さん、だからね？」

ソラの言葉に、エイネは胸を撃たれたような痛みが走った。

自分はソラに母親であるかのように接してきた。だが自分は彼の母親ではない。母親にはなれない、なつてはいけけないのだと常々思つてきたからだ。

(そつか、この子は私のことをずっとそんな風に)

言葉が出なかつた。嬉しいはずなのに、なぜか言い様のない不安と己に対する嫌悪が生まれた。揺れていた。もうすぐ消えゆく命、すでに一度は潰えたこの命をこれからも未来に繋げていくべきなのだろうか。

答えはすぐに出なかつた。

「そつか……うん、そつか」

「エイネ？」

「ううん、なんでもない。さ、もう遅いわ、寝ましょ？」

部屋の明かりを消して、エイネもソラの隣に横になつた。

静寂が二人包み込む。あるのは僅かばかり窓から射す月明かりのみ。

ふと、ソラがゴソゴソと動き、エイネの方を向いた。

「ねえ、エイネ。あれ、久しぶりに聴きたい」

ソラの言うあれとは、赤ん坊のころからよく聴かされていた歌のことである。エイネはこれを守歌代わりによく聴かせていたのだ。

「ふふふ、今夜は甘えん坊さんね」

エイネは笑った。

「むう、嫌ならいいけど」

と、ソラが言い終わるよりも先に、エイネは歌を口ずさみ始めた。

—— 眠る顔を眺めて

—— 人知れず温もりを感じた

—— ずっと一人歩いてきたつもりだった

—— でも気がついたので

—— 瞼を閉じて思い出してごらん

—— きつと気がつくはずだから

—— ねえ ほら 星を見て

—— あなたは一人じゃない

—— あの瞬く星がきつと見守っているから

この歌がどこで生まれたものかはエイネも知らない。一体どこで聴いてなぜ知っているのかも思い出せない。

それでも、彼女もまたこの歌が好きだった。綺麗な旋律と誰かを鼓舞する歌詞ながらも、どこか切ないこの歌は、まるで何かを憂えているようにも、何かを求めているよう

にも感じさせる。

不思議と安らぎを与えてくれるこの歌とエイネの透き通るような歌声を聴きながら、ソラはいつしか眠りに落ちていた。

ソラが眠ったことに気がついたエイネは、そつと彼の髪を撫でる。

「おやすみ、私の大好きなソラ」

エイネは額に口づけすると、自分もまた眠りにつくのであった。

◇

暗がりの部屋の中に一人の男がいた。

蠟燭の火が周囲を淡く照らし、部屋の中を照らし出す。壁には塗料を塗りたくったように赤く染まっている。床も同様で、まだ生乾き状態だ。付着しているのは血液。血みどろの部屋、とでも言えば良いだろうか。

この血みどろの部屋で男は何かに向かつて作業をしている。

「くそっ……！」

男が突然叫び、テーブルを叩く。

「足りない……まだ足りない……あれを動かすには……あれを完全なる存在にするには

まだ足りない！」

男の目は狂気に満ちていた。顔には返り血が付着しており、作業をするテーブルの上には四肢を挽がれた子供の遺体が横たわっている。

男は真紅に染まった小さな心臓——ではなく、魔力を貯蓄するための器官を手にしてきた。切り離されても魔力がある限り動く器官であるため、まるで心臓が脈打つようにそれは蠢いている。

「だが、もう仕入れるための資金も無ければ伝手もない」

呟くと何かを思いついたのか、男は不気味な笑みを浮かべる。

「だったらこの街にいるガキどもを餌にすればいい。そのために温存していたんだろうが」

我ながら良い考えだと言わんばかりに、男はくつくつと笑い出す。次第に音量が変わり、大きな笑い声へと変貌する。

男の笑い声は扉を超えて、暗がりの廊下にまで響き渡っていた。

第二節 揺れる想いと動き出す運命 2

エイネは夢を見た。過去の夢を。

少女が生まれたのはヘルデイロから海を越えて遠く離れた国。今は無き王国で生まれた。その王国は酷く荒んだ国だった。

表向きは豊かな資源と豊かな暮らしをする者が多い国——という印象だった。魔法技術もほかの国に引けを取らないほど進歩しており、国の至る所に魔法を活用した道具が混在していたほどだ。

だが裏では、国がある政策を取ったことで大きな格差が生まれていた。いや、果たしてこれが格差と言えるのだろうか。

その政策とは、子供が二人以上生まれた場合、後に生まれた子供はすべて国が引き取り労働力とする。という内容だった。

勿論この政策が表沙汰にならないよう、国は親の記憶を操作したりして、その真実を常に隠してきた。

少女はこの国に住むとある一家の次女として生まれた。彼女は生まれてすぐ国に引き取られ、名前も与えられないままに育てられた。そして働けるであろう歳になったとき、国の地下にある魔石製造の工場で無理矢理働かされたのである。この時の歳はまだ十二歳であった。

来る日も来る日も、少女は無理矢理働かされた。休憩時間もろくに与えられず、僅かな食事と睡眠時間を与えられる生活に、まだ発達段階にある彼女の体は悲鳴を上げた。いつしか思うように動くことさえままなくなつていった。そして声を発する力も失われていった。

失敗も増えるようになり、何かミスをするたびに個室に入れられ、裸にされ、その体に無数の鞭を打たれた。その傷は今もなお、彼女の体に刻まれたままだ。

自分はなぜこんなにも不幸なのだろうか。おそらく、彼女と同じ境遇の人間ならば誰もが思い、考えることであろう。

だが少女は思うことも考えることもできなかつた。彼女は徐々に感情を失つていた。少女への仕打ちは次第に酷くなつていった。時には熱したナイフで体に切り傷をつけられたり、時には殴る蹴るなどの暴行を受けたり、挙げ句首を絞められて死ぬ寸前まで追い込まれるようなこともあつた。

しかし少女は悲鳴も上げなければ、涙を流すこともなかつた。

声を失い、感情を失った少女は人形のように扱われた。いつそ死んでしまいたい。そう思う余裕さえ少女には与えられなかった。

仕打ちに対し、彼女の体は限界を迎えていた。このとき誰もが口を揃えて言った。なぜ生きているのかわからない、と。

もう立ち上がることをさえてできなくなったある日のこと。彼女に残されたわずかな聴覚が、ある音を聞き取った。

悲鳴だ。

その日、世界を股に掛けて活動している結社「ギルド」の者たちが国に攻め入ったのである。そう、国の悪事が露呈したのだ。

国は一晚のうちに滅ぼされた。主権を握っていた王もそれを補佐する議会のものたちも全員殺された。魔石工場を取り仕切る者たちも全員殺された。

それだけじゃない。地上で暮らす罪も無い人々もこのとき全員殺されたのだという。生き残ったのは、抗う力を持つこともできず工場で無理矢理働かされた者たちだけだった。

少女はこの時個室でただひとり、横たわっていた。わずかな意識とままならない呼吸のまま、裸の状態だ。当然体には無数の傷跡があった。中にはまだ治りきっておらず血を流す傷もあった。

もはや彼女の命はいつ消えてもおかしくはなかった。

そこにある女がやってきた。それがヴェルティナだった。

少女を発見したヴェルティナはなんとかしてその命を救おうとした。だが彼女の力を持つてしても救うことは出来なかった。体がすでに限界を超えており、肉体を動かす魂も消えかかっていたのだ。今生きていることが不思議な状態だった。

残された唯一の方法は、使い魔契約だった。使い魔契約とは、契約者と使い魔の間で契約を結び、両者間に魔力供給のためのパスを繋ぐことを意味する。

この契約、生きた人間で契約を結んで成功した事例は少なかつた。そもそも生きた人間では契約するという行為自体出来ないに等しい。例外を除けば――。

それしか方法が無いと悟ったヴェルティナはすぐさま契約の魔方陣を描いた。

魔法陣に瀕死の少女を横たわせると、彼女は言った。

「エイネ。あなた、これから幸せになつてみる気は無い？」
と。

言葉はなかつた。言葉を発するだけの力も、言葉の意味を理解する力も、少女には残されていなかつた。だが彼女の体は最後の力を振り絞つて答えた。言葉では無く、涙で。

ヴェルティナは頷くと、二人の間に契約を交わした。

少女はエイネ・ヴェゲグ・ヌングという名前を与えられた。

エイネはヴェルティナから多くのことを教わった。発声できるほどに回復した後言葉を教わり、魔法を教えられ、身を守るための体術も教えられた。そしていつしか、ヴェルティナの仕事を手伝えるほどにまで成長した。

その過程でエイネは感情を取り戻していった。ヴェルティナとの日々、幸福を感じ始めたのである。次第に笑顔を見せるようにもなり、それに連れてヴェルティナとの仲も深まっていった。

それから少しして、ヴェルティナは仕事を引退した。ヴェルティナはニギロに移り住むことを選び、勿論エイネもそれについて行った。村での生活に馴染むのにさほど時間は掛からなかった。

そしてニギロに住むようになってから二年経ったある日。エイネは最愛の少年との、最初の出会いを迎えたのである。

◇

「ん、んう……」

何かが動く気配がして、エイネは目を覚ました。

「ふわあ……なんか懐かしい夢を見た気がするわ……」

珍しくエイネの方が先に起きたようだ。彼女の隣ではまだソラが寝息を立てていた。
(昨日は遅かったものね。それに泣いたりしてたし、疲れたのかしら)

いつものようにそつと髪を撫でると、エイネは起き上がった。

「ん、んんー!」

エイネは残った脱力感を抜くように大きく体を伸ばした。

と、同時にソラも目を覚ました。

「あ、ごめん。起こした?」

体を起こすとソラは目を擦りながら、首を横に振った。

「まだ寝てもいいのよ?」

「ううん、エイネと一緒に起きる」

口をもによもによと動かして、ソラは大きな欠伸をした。どうやらまだ覚醒するには至っていない様子だ。

それが愛らしかったため、エイネはくすくすと笑いソラを抱きしめた。

「ふふふ、もう可愛いんだから」

途端、ソラの意識は覚醒した。というのも、彼の顔がエイネの柔らかい胸に押し当てられたからである。

「——っ!? え、エイネ!」

なんとか離れようと藻掻くが、エイネの力はソラよりも強く、離れることが出来ない。されるがままにソラはエイネの体をしばし味わうこととなった。

「あ、ごめんごめん。可愛かったからつい」

少し苦しんでいることに気づき、エイネは力を緩めた。

慌てて離れたソラの顔は真っ赤に染まっている。

「きゅ、急にびっくりするじゃん!」

「ごめん。許して、ね?」

手を合わせて許しを請うエイネ。

対しソラは膨れっ面のまま顔を反らした。というのも、エイネを直視できないためであるのだが。

「ごめんってばあ」

エイネはソラの背中に抱きついた。それが却ってソラに追い打ちを掛けているとも気がつかずに。

ソラの胸は大きく跳ねるように動いていた。それだけ彼が一人の少女のことを意識しているということなのだが、果たして彼が自分に秘められた感情に気がつくことがあるのだろうか。

一方のエイネも自分の行動に我ながらなにをしているのだらうなどと思っていた。ただ例えようのない不思議な感情に押されての行動なのだが、彼女もまたそれがなんたるか気がついていない。

「もう、気にしてないから」

「ほんど？」

「うん……気にしてない」

「そっか。ありがとう」

二人は頬を赤く染めていた。

ふとあることを思い出し、彼らは同時に言葉を発した。

「おはようソラ」「おはようエイネ」

全く同じタイミングに、二人はしばし見つめ合った。そして二人は同時に笑った。

「朝ご飯食べようか、ソラ」

「うん！」

二人は手を繋いで下の階に下りていった。

下の階に行くと、テーブルの席に座って待っている者がいた。

「あ、ベルさん。おはようございます！」

「いや、なんでいるんですかベルさん」

そう、ベルさんことクリンベル婦人である。

「あらおはようソラちゃん、エイネちゃん。手なんか繋いじやって、仲良しねー」

「おはようございます。じゃなくて、なんでいるんですか。鍵掛けてたはずなんですけど」

「あんなのわたしにとつては掛かってないのと一緒によ」

「いや、そうかもしれないけど」

「鍋、取りに来たのよ」

言われてエイネは思い出した。昨日の夜、スープをもらった際鍋を借りたままだった。それでここに来訪したのだろうと考えて――

（いや、この人毎日うちに来てたか）

と考えを改め直した。

「でもよかったわ、ちゃんと仲直りできたみたいで。むしろ前より仲良くなったんじゃない?」

「そんなことはない、思いますけど」

婦人の指摘になんだか照れくさくなり、エイネは少し顔を反らした。

それを見て婦人は微笑むと、台所へと歩んでいく。

「今から朝ご飯でしょう?」
「一緒に歩んでもよろしいかしら?」

「断つても一緒に食べるつもりですよね？」

「もつちろん！ 昨日一緒に食べれなかったし！」

「せつかくだからボクもベルさんと一緒に食べたいな」

ソラにこう言われてしまつては断ることなど不可能。エイネは諦めるようにしてため息を吐き、しかしその顔は笑いながら承諾するのだった。

婦人が用意してくれた朝食は、いつもソラが出しているものと変わらない、簡単なものだった。それでも婦人が作るのだから、絶品は間違いない。

「わあ、おいしいそう」

並べられた料理に、ソラは目を輝かせていた。

(この子ほんと食べるのが好きよね)

そんな姿にエイネは微笑むと、彼女もまた婦人の料理に目をやった。

婦人が作ってくれたのは簡単な料理たちだ。誰にでも作れるものだが、味付けの工夫ひとつでその美味さは変わってくる。

「さあ、召し上がれ」

「いただきますーす！」

ソラが真っ先に料理を口に運んだ。

「んー！ おいしい！」

続けてエイネも口に運ぶ。確かに美味しい。

「ベルさん、これおいしいです」

「それはよかったわあ。さ、どんどん食べて」

婦人も加わり、朝食はいつもより賑やかなものとなった。

食べ終えた後、食器を片付けながらエイネはあることを考えていた。貯蓄していた食料の底が見え始めてきたのである。

「そろそろ買物にいかないのかなあ」

食料を揃えるには、村の中だけでは難しい。そのため食料を買う際には基本的に隣町ドウエセへと出かけなければならないかった。

ニギロからドウエセまでは徒歩で二時間。周囲を広大な森に囲まれているが故の弊害である。特にドウエセまでの道は、夜になると真つ暗闇になり迷いやすくなるためにあまり遅い出発では危険が及ぶ。

「今出発すればまだ間に合う……か」

今日は珍しく朝に起きたのが幸いしている。普段は予定として組み込んでいないとなかなか朝に起きることなど難しい。

「ソラ、悪いけどこれ片付いたら隣町に出かけてくるからお留守番してて」

「ボクも行きたい！」

「駄目よ。帰り遅くなるかもしれないから」

「やだ！ ボクも行く！」

どうしたものかなあとエイネは頭を悩ませた。いつもは素直に「お留守番してる」と言っていたけど、やっぱり最近あまり言うことを聞かなくなったような気がする、と。

「結構歩くよ？」

「大丈夫、ボクもう子供じゃないんだから！」

まだまだ子供よ、とエイネは苦笑した。

「どうしても行きたいの？」

「うん、エイネと一緒にいたい」

ここまで駄々をこねるのも珍しかった。これはおそらく昨晚のことも原因にあるな、とエイネは思った。昨晚、どうもソラは一人でいるのが不安な様子だった。その影響が今にも出ているのだろうと。

無理もない。彼は今、孤独になることに恐怖を感じているのだから。

こうあつては観念するしかなかった。

「わかったわよ。じゃあ一緒に行きましょ。まったく甘えん坊さんなんだから」

エイネはからかうように笑って、ソラの頭を数回優しく叩いた。

「むう……甘えてないもん」

ソラはぶいっと顔を反らした。

片付けを終えて、エイネは身支度をしに部屋へと戻った。

替えの服を出して、着ている物をベッドの上に無造作に投げ捨て、ふとエイネは自分の体を眺めた。

(ヴェルティナに頼んで残してもらったけど、やっぱり治してもらえばよかったかなあ)

過去を忘れないために残した痛々しい傷跡。今更ながらに、この傷を残したことを後悔しているエイネ。

(けどあの子、この傷だらけの体を見ても綺麗って言ってくれたんだよね)
昨晚の脱衣所でのことを思い出して紅潮する。

「と、急がないといけないんだった」

慌てて服を着ると、机の引き出しを開けた。中には一振りのナイフが、ベルト付きの鞆に仕舞われている。護身用にと、隣町に出かける際には常に持ち歩いている物だ。

これを太ももに付けると、エイネは部屋を後にした。

下の階に戻ってくると、ソラが椅子に座ってぼーっとテーブルの上を見つめていた。その視線の先には、ソラが作った、形の崩れた花冠が置かれている。

「ごめん、お待たせソラ」

声を掛けられ、ソラは顔を上げた。

「じゃあ、行こっか」

エイネは壁際に置かれた荷車を引いて外に出た。

外は雲一つ無い快晴の空だった。晴れやかな天気にも恵まれた、絶好のお出かけ日和と言えよう。

二人は手を繋いで、村の門を潜って森の中に入っていく。昨日花畑に行く際に通った道とは真反対の方から出てドウエセに行く。人が通れるよう舗装されているとはいえ、生い茂った木々の枝葉が太陽の光を遮っている。夜になれば暗闇の森になるのは、これが故であろう。

歩いている最中、森の動物たちが何匹かソラの方に寄ってきた。彼もまたそれに答えて抱きかかえたり、優しく撫でたりしてふれあう。勿論、時間も押しているため手短にはあるが。

森の動物は皆、ソラにとって友達のようなものだ。ベル婦人が飼っている猫たち同様に、彼らはソラのことを好んでいる様子だ。そこに例外は無く、危険だといわれている動物でさえソラに懐いているのである。

(ほんと、いつ見ても不思議な光景よね)

エイネは微笑みながら、懐かしい気分になっていた。ヴェルティナとこの森を歩いた時もまた、同様の光景が生まれていた。

(あの人に何回も聞いたつけ。どうして森の動物と仲がいいのって)

結局その答えはわからず終いであつたが、それでもこの光景に憧れたものである。

「ほら、今はお友達とあまり遊んでる余裕はないわよ?」

「うん、わかつてる。ごめんね、みんな」

動物たちに手を振ると、二人はドウエセへと足早に向かうのであつた。

第二節 揺れる想いと動き出す運命 3

ドウエセは小さな町だ。王都ブリアンテスと物資の交流が盛んで、この町だけでもそれなりの物を集めることが出来る。

ドウエセに着いたエイネとソラは、この町にある市場へと足を運んでいた。必要な物がすべてここに集められているため、この場所は毎日人で賑わっている。必要な物

今日もその例に漏れず、人々の活気で賑わっていた。至る所で店の者が人に掛ける声であつたり、人が買い物をする声が響き渡っている。

「ソラ、はぐれないようにしてよ？ 王都ほどじゃないとはいえ、見失ったら探すの大変なんだから」

「うん、大丈夫。それにしてもすごい人だね」

「そっか、ここに来るの初めてだっけ。いつも私ひとりで来ているから」

初めて見る景色に、ソラは目を輝かせて周囲を見渡していた。これだけの人が行きかう場所に来たことのなかった彼は、つつい景景色に心と目を奪われているのだ。人だけで無く、これだけの物が並んでいるのも見たことが無い。彼の顔は忙しく動いてい

る。

それが少し危なっかしく写り、エイネは一層強くソラの手を握った。絶対にはぐれないようにするために。

二人が最初に向かったのは、肉を専門に取り扱っている店だ。この店で売られている肉は、ヘルデイロ唯一の肉の生産地から首都を通じて入ってきた物。そのためこの肉を買っただけでもそれなりの値段がする。

「んー、一番安いものは——」

エイネは並んでいる物を眺める。この中でも一番安いものを選ばなければ、残った資金がすぐに底を突いてしまうからだ。日々節約、といったところだろう。

「すいません、これください」

そう言っただけ選んだのは、牛肉の塊だった。値段はほかのものより高くも見えるが、量的に考えてなかなか手頃な値段をしている。

エイネは選んだと同時にひとつの袋を渡した。

「はいよ。580ヘルツエね」

エイネいわれた金額を渡し、店主は袋の中に入れて彼女に肉を渡した。

先ほどエイネが渡したこの袋は、肉や魚といった鮮度が大事な物を保存するために作られた魔法道具のひとつである。この中にいれているだけで鮮度が一、二週間は保たれ

るといふ優れたものだ。

袋の縛り口付近に魔石の粉が入っており、これにより長期間の保存が可能になるのである。

同様にして二人は野菜、果物、魚の順で市場の中を見て回った。そのときソラの目が常にキラキラと輝いていたのはいうまでもない。なんせ初めての買い物なのだから。

「うん。これで大体揃ったかな。あとは——ん？」

買い物が終わりに近づいた時である。なにやら市場のなかを子供たちが駆けていくのが見えた。

「なんかあつちで笛の演奏会やるんだって！ 行ってみようぜ！」

そんな声も聞こえ、子供たちが走って行った方向を見るエイネ。だが市場を出たところらしく、詳しい場所は見えなかった。

ふと、ソラが子供たちの行った方向を呆然と見ていることに気がついた。

「もしかして行きたい？」

問われ、ソラは顔を上げた。その瞳には期待が込められている。

エイネはもう一度子供が向かった先を見る。やはりどこでやるのかは定かではないが、子供たちが集まり、外で笛の演奏もしているとなれば見つけるのは容易なことだろう。

微笑むとエイネは握った手を離した。

「仕方ないなあ。いつてきていいよ」

「いいの？　ありがとう！」

満面に笑顔を浮かべて感謝すると、ソラはすぐさま駆けだしていった。

「買い物終わったら迎えに行くから、そこで大人しくしてるのよー！」

「はあーい！」

手を振って走り去っていくソラを見送ると、エイネは買い物再開する。

「大丈夫……だよな？」

だがこの時、エイネは一抹の不安を拭いきれずにいたのだった。

エイネから離れたソラは子供たちに混じって、笛の演奏が始まるのを待った。場所はこういった演奏のために用意された小屋らしきところだ。座るための席が用意されており、席の前方には演奏者が立つための壇が設けられている。至ってシンプルな設備だが、小さな演奏会をするにはもってこいの場所と言えるだろう。

不意にソラは周囲を見渡す。ほかの同い年くらいの子供を見たのもまたはじめてだからである。それがなんだか嬉しくてソラは笑った。

（今日のはじめてが一杯の日になりそう）

待っている間に誰かと話しがしたい。そんな衝動に駆られて、ソラは隣にいた栗色の

髪をした少女に話しかけた。

「ねえ君。笛の演奏つてよくやってるの？」

問われた少女は首を横に振った。

「ううん。普段は笛なんて吹かない人なんだけど……」

少女の返答に少し首を傾げるソラ。そんな彼を少女は物珍しそうにまじまじと見ている。

「ねえ、あなたこの町で見たことないけど……」

「え？ あ、うん。ボクは森の向こうにあるニギロつていう村から来たんだ」

「ニギロ？ 聞いたことない名前……」

どうやら少女はソラに少し興味を引かれている様子でいる。

「きれいな髪……」

特に釘付けになっているのがソラの髪の毛だ。あの天に広がる蒼穹のような空色の髪は、少女に今までにない美しさを感じさせている。

「ねえ、君名前は？ ボクはソラ」

「わたしは……トウネリ……」

「そっか、トウネリ。いい名前だね」

そしてなにより、ソラ的笑顔は人を魅了するのに十分なものだ。トウネリはしばし、

ソラに見惚れていた。

「えへへ、なんか楽しみ」

一方のソラは、今から始まろうとしている笛の演奏に心ときめかせている。なんとなく、本で読んだ笛の記述を思い出したりもしていた。

待っていると、一人の男が子供たちの前に立った。その片手には笛が握られている。どうやらこの男が演奏者のようだ。

男の風貌は一際変わっていた。どこの国の物かはわからない不思議な形をした帽子を被っている。口元は布で覆い、全身をマントのような物を羽織って隠し、どこか不気味な雰囲気を漂わせている。

「やあ子供たち。これからお兄さんの素敵な演奏会のはじまりだよ」

見た目とは裏腹に、笑う男の口から出たのは優しげな声だった。

「これより始まりますこの演奏会。君たちのために組んだ特別な曲たちを披露させていただきます。みんな、楽しんでいってね」

男は覆っていた口を出すと、笛を当てた。

「さあ、まずは楽しいこの一曲だ」

笛の音が響き始める。流れるメロディはとても賑やかしく弾んでおり、人を楽しくさせることを目的とした一曲のようだ。現に子供たちはこの曲に合わせて体を揺らした

り、隣にいる子供と肩を組んで楽しんでる。

トウネリもまた、聴いたことのない曲に心を弾ませていた。が、すぐにあることに気づいた。隣にいるソラが首を傾げている。

「どうしたの？ ソラ」

「え？ あ、うん。確かに明るい曲だけど、なんか好きになれないというか」

ソラ自身もなぜこのような感覚に陥っているのかわからなかった。現にほかの子供たちが楽しんでるのだから、この曲は楽しいものなのは理解しているのだが。

「そうかな。わたしは楽しいけど」

トウネリもこのように言っている。

(ボクのが感覚がズレてるのかなあ)

ソラは苦笑した。

曲が終わり、子供たちは一斉に拍手した。それだけ彼らがこの曲に聴き惚れていたということだ。

ソラも演奏に敬意を込めて拍手する。自分好みとは言えなかったものの、演奏自体は確かに素晴らしいと感じたからだ。

男もそれに満足し、笑っている。

「みんなありがとう。それじゃあ次の曲を聴いてもらおうか」

男は再び笛を当てて、音を鳴らした。

次に流れた曲は、少し切なげな曲だった。笛の音色とメロディが綺麗なハーモニーを生み出している。

ソラはこの曲にも違和感があった。綺麗な音色は思わず聴き惚れてしまいそうなほどのものだが、やはりどうも好きになれない。

曲が悪いと感じているわけでも、笛の音が悪いわけと思っっているわけでもないのにある。

「ねえトウネリ?」

隣の少女に話しかける。しかし彼女もこの曲に聴き入っているのか返事がない。

ソラは思わず周囲を見る。みな目を閉じて、聴き入っている。それがソラにはなにか異様な光景のように思えた。

不安が募り始める。だがこれはただの笛の演奏だ。考えすぎなのだろうと、ひとまず終わるのを待つてみることにした。

曲が終わると子供たちは目を開け、口を揃えて「いい曲だったねー」と言い笑っている。

(やっぱり思い違いかな?)

ソラは苦笑して、話しかけようとトウネリの方を見た。直後、ソラの目が大きく見開

かれた。

「トウネリ？」

トウネリの様子がおかしかった。彼女の目から生氣を感じないのだ。

ハツとして、周りを見渡してみる。ほかの子供たちも同様で、目に生氣がなくまるで魂を抜かれたかのような状態になっているのだ。

「どうやら喜んでくれたようだね」

声に、思わずソラは男の方を見た。

「それじゃあ最後にとっておきの一曲を聴いてもらおうか」

男は笑っていた。これまでの優しげな笑顔とは打って変わり、服装以上に怪しげな顔で。

ソラはもしやと、ある本を思い出した。それは音楽と魔法に関することが書かれた本だ。その中にある記述が書かれていた。

音とは、人間の頭と密接に関係している。音が聞こえれば、その音を頭の中にある脳が認識し、処理する。この時もし音に魔力を込めると、人間の脳は魔力に感化され、場合によっては人間を操ることができるといふ。これを行うのに最も適したのが音楽なのだ。

(もしかしてあの笛の音は!?)

違和感の正体に至った瞬間だった。

奇怪な音色が、小屋の中だけでなく外にまで響き渡っていた。今までの曲とは明らかに違う、強い魔力の込められた音だとはつきり感じ取ることができる。

(そっか、だからなにかがおかしいって思ったんだ)

ソラはそれなりに魔法に精通している。知識もあれば、魔力の感じ方も自分なりに覚えてきたのだ。だからほかの子供たちとは違い、男の鳴らす笛の音色に違和感を感じていたのである。

(なんとかして止めないと！)

考えるよりも先に、ソラは行動に出ていた。

「やめて！ みんなをどうする気なの!」

ソラの叫びに、男が演奏の手を止めた。

「君、どうかしたのかい?」

男が首を傾げる。男の顔が笑っていない。

「お兄さんの曲、ボク嫌い。みんなを操って、どうするつもりなの?」

ソラは震える声で言う。

「お兄さんが鳴らす笛の音から、魔力を感じたんだ。本で読んだことあるの。これ、人を操る魔法……だよね?」

すると男は舌打ちをして、ソラを睨み付けた。

「おいガキ。てめえ、なんで俺の魔法が効かねえ」

鋭い目に、ソラは一瞬で吞まれそうになる。無理もない。彼はまだ子供なのだ。それでも勇気を出して、男の方をにらみ返した。

男が壇上から下りる。そしてソラの方へと近づいてきた。

ゴクリと生唾を飲み込むソラ。心臓が恐怖で張り裂けんばかりに動いている。手足が震え、歯もガチガチと音を立てている。それでもソラはここにいる子供たちのために、男を見るのをやめなかった。

「俺の魔法は完璧なはずだ。実際これまでこの魔法に掛からなかったやつはいねえ。お前、一体なんだ？」

「お兄さんは、何を目的にこんなことを——」

何をしているのか。そう問おうとした時、男がソラの腹に蹴りを入れた。

「ぐっ……え……!?!」

痛みに立っていられず、その場に座り込んで嘔吐くソラ。

「質問してるのは俺だぞガキが」

男は気にも留めず、ソラの髪の毛を掴み持ち上げた。

「あぐっ……痛っ……離して……っ!」

「ああ？ 大人には敬語を使えって教わらなかったのかあ？」

男は笑うと、腹部を何度も殴打し始めた。

その度にソラは短い悲鳴を上げ、咳き込む。目からは涙を流し、それでもほかの子供たちのためにどうするべきかを考える。

「なんで俺の魔法が効かねえかわからねえが、このまま大人しく気絶してもらうぞ」

ソラは痛みに耐えながら、この状況の打開策を模索する。だが今取れる行動は一つしかなかった。

「たす……けて……」

「あ？」

掠れた声で、精一杯声を張り上げる。

「たす……がっ……!？」

何をしようとしているか理解した男は、より激しくソラを殴った。腹だけで無く、顔面にも拳を入れる。このままでは声を出すことさえままならない。

(ごめん、エイネ。ボク……)

ソラはすでに限界に来ていた。もう意識を保っていることさえできなかった。

「エイ……ネ……」

最後に振り絞った言葉も空しく、ソラは意識を手放した。

「ガキのくせにしぶといやつだ」

男は吐き捨てるとソラの体を地面に落とす。

この騒動の中でも、子供たちは動揺する素振りさえ無かった。男の術に掛かり、意識を完全に支配されているのだろう。

「おいガキども、そいつを運んで俺についてこい」

男の命令のままに動く子供たち。まるで操られた人形のように彼らの動きはぎこちなく、またそこに彼らの意思は存在しない。男の魔法は完璧であった。

男はその動きに満足して、場所を移そうと立ち去るその時だった。

「うあああーッ!!」

轟音とともに、小屋の扉が破壊された。

「なんだ……?」

男が何事かと小屋の入り口に目をやる。

「お前……私の大事な子をどこに連れて行くつもりだ……」
そこには怒りの形相をしたエイネが立っていた。



「ソラ、どこにいろのかしら?」

「買い物を終えたエイネはソラを探していた。

ソラが駆けていった方に来たはいいものの、子供が集まっているところもソラの姿も見当たらないのだ。

「あの、すいません。子供たちを見かけませんでしたか?」

「いや、見てないな。どこかへ走って行く姿は見たんだが」

道行く人に聞いても、返答は皆同じだった。

「おかしいなあとエイネは頭を掻く。あれだけの人数の子供がいたのだ、誰か一人くらいはどこかに入っていくところを見ていてもおかしくないのだが、誰も見ていないのだという。

(もしかしたら、どこかの建物の中でやっているのかも)

ひとつ可能性も思いつき、エイネはひとまず周囲の人にいろいろ聞きながら歩いて回ることにした。

「あの、すいません。この町でなにか催すために作られた場所かなにかありますか?」

「いや、そんなのがあるなんて聞いたことないが」

「そうですか。すいません、ここまでなにか——」

何人も同じ質問を投げかけてみた。が、これも子供たちの行方同様にわからないと答

えるものばかりだ。

店を営む人間に聞いても、これまた答えは同じ。町の役場に聞いてもそんな場所は存在しないという答えまで返ってきた。

エイネは次第に焦り始めていた。これだけ見つからないとなると、どこかへと連れ去られたのではないかという不安が過る。

それに、聞いて回るうち町に違和感を覚えていた。子供の帰りを待っていると思しき親の姿も無ければ、子供を探す親の姿もないのだ。

まだ昼過ぎだから気にしていない、というのものもあるかもしれないが、それにしてもどうもなにかがおかしい。

(誰も彼も、なんだか答えの歯切れが悪いというか)

そう、これだけの人で賑わっているというのに、町に活気を感じられないのだ。来たときにはあれだけ話し声があったというのに、今は一切しない。まるで町が死んでいるかのようだ。エイネはもう居ても立ってもいられず走り出した。

取れる手段はもうひとつしかない。音だ、音を聞き取るしかない。これだけ静かになってしまったのであれば、笛の音を聞き取ることなどそう難しいことではないはずだ。

走り、ひたすら走って、エイネは耳を澄ませた。

「——っ!？」

不意に、耳に微かな笛の音が入ってきた。咄嗟に耳を塞ぐエイネ。

(今の音、まさか誰かが催眠魔法を!?)

「くっ……!？」

エイネは笛の音に魔力が込められていることを瞬時に感じ取っていた。それだけ彼女も魔力を感じることに長けているということだが、喜ばしい状況ではない。

今のエイネは魔力が少ない状態だ。そんな状態であれば誰にでも操られてしまう。魔法を使い耐性を上げることが出来るが、魔力を消費するわけにはいかない彼女にとつてそれは悪手ではない。

(でもこれじゃ音を聞くどころじゃ)

焦りがエイネの判断を鈍らせる。音が聞こえなければ、ソラの居場所を見つけるのは難しい。だが笛の音が聞こえたのであれば、場所はそう遠くはないはずだ。そう考え、エイネは周囲を見渡した。

見渡し、エイネは思わず息を呑んだ。町の住人がまるで操られたかのように、生気を失った目でその場に立ち尽くしている。異様な光景だ。

これはもはや猶予はないのかもしれない。エイネはそう判断し、魔力を高めて身に纏った。

「あぐっ……痛っ……!」

直後、エイネの視界が揺らぐ。頭に痛みも走る。魔力を使えばこうなるのは必至。だが堪えるしかなかった。

笛の音は聞こえなくなっていた。それでも気を緩めるわけにはいかない。いつ何時、またあの音が聞こえてくるのかわからないのだ。

魔力を身に纏ったままエイネは耳を澄ませる。どんな微かな音でも聞き逃さないように。

——たす……けて……。

「——っ!? ソラ!」

微かだが、助けを求める声が聞こえた。とてもか細い声だったが、エイネはそれがソラの声だと聞き逃さなかった。

エイネは再び走った。声の聞こえた方向に。全速力で。

そして行き着いたのは小さな建物だった。人がそれなりの人数入れるであろうこの建物は、子供に笛を演奏して聴かせるには十分な大きさだ。

すぐさま扉を開けようと手を掛けるが、どうやら鍵が掛かっているようで開かない。どうにかしてこじ開けようとした時、またエイネの耳にソラの声が入ってきた。

——エイ……ネ……。

この声で、エイネはすぐに悟った。ソラの身に何かあったのだと。

ギリツと歯を強く噛みしめる。堪えることの出来ない怒りが、エイネの胸の奥からこみ上げてくる。今までにない形相で扉を睨み、そして――。

「うあああーッ!!」

雄叫びとともに、エイネは扉を拳で吹き飛ばした。

「なんだ?」

笛吹ききの男は、破壊された扉の方に目をやる。

「お前……私の大事な子をどこに連れて行くつもりだ……」

男の目に映ったのは、微かな光を纏った少女の姿だった。

「答えなさい……ソラを、子供たちをどこに連れて行くつもり?」

エイネの問いに、男は鼻で笑った。

「ガキが一丁前に英雄気取りか?」

男の目にはただの幼い少女にしか映っていない。彼女が一人の母親だということを知りもしない。故に、エイネの次の行動に反応できなかった。

「あまり、私をイラつかせないでくれるかしら……?」

ほんの一瞬。ほんの一瞬だけ目を離した隙に、エイネと男との距離はほぼゼロになっていたのだ。

「なっ!？」

男は驚きを隠せず、ただ目を丸くするだけ。

エイネは拳を握り、男の腹に思い切りたたき込んだ。

「ぐがあ!？」

その衝撃に男の体は耐えられず、壇上に向けて弾き飛ぶ。壇を構成していた木材が砕け、パラパラと散る。エイネの放った拳がどれだけの威力を持っていたのか、一目でわかるだろう。

男は身を起こし、口に溜まった血を吐き捨てると目をぎらつかせた。

「くそが……さっきのガキといい、どうしてこうも邪魔しやがる」

気に入くわない。そう表情に出ている。唇を噛み、笛を強く握りしめて、怒りを露わにしている。

一方のエイネは涼しい顔で男を見ていた。

「相手を甘く見るからそうなんのよ」

エイネが笑う。

「くそが……くそがくそがくそが、くそがああああつ!!」

突然、男が叫び声を上げた。その圧は尋常では無く、空気全体が揺れている。エイネが思わず耳を塞いでしまうほどであった。

(この男、一体なにを)

これが何かの合図であると気づいた時、エイネの視界が大きく揺れた。

「がっ……!?!」

耳を塞いでいた隙を狙い、操られた子供の一人が椅子でエイネの後頭部を殴打したのだ。平衡感覚を失ったエイネは、バランスを保つことができず地面に伏してしまう。

それを見計らったかのように、ほかの子供たちが一斉に襲いかかった。エイネの背中や後頭部を目がけ、椅子で何度も強打する。

「みんな、やめて!」

エイネが必至に子供たちに呼びかけるが、彼らにその声が届くことはない。男の術中に捕まってしまった子供たちは、男のいいなりに動くしかなかった。

それが彼らの心を痛めつけているのか、子供たちの目には涙が溢れている。

エイネはそれに気づき、歯を食い縛った。この男はなんて卑劣な奴なんだと。

「あなた……子供たちに、こんなことをさせて……何も思わないわけ?」

男は高らかに笑い声を上げた。

「なにを思う必要がある? 俺はただ道具を上手く扱っているだけだろう?」

「道具? 道具、ですって……?」

子供たちの猛攻を受けながら、エイネは立ち上がった。

「あんだ、この子たちが涙を流しているのが見えないの？」

「見えないなあ？ そんな道具たちがどうなっているかなんてなあ」

瞬間、エイネは地面を強く蹴った。先ほどと同じように、男との距離を一気に詰めようとしたのだ。だが――。

「二度も同じ手が通用するかよ」

エイネの行く先に、二本の槍が現れた。

「しまっ……」

一度放たれた速度を緩めることが出来ず、エイネは咄嗟に両腕で防いだ。

「ぐう……」

槍の切っ先が腕に刺さる。

エイネは痛みに顔を歪めるも、槍を無理矢理抜いて距離を取った。が、背後に気配を感じすぐさま身を翻して、防ぐ体勢に入った。

振りかざされたのは、鉄で出来た護身用の警棒だった。それがエイネの傷口に直撃する。傷口がさらに開き、血が飛び散る。衝撃が骨にも響き、嫌な音を立てた。

使い魔の体が魔力で出来ているとは言え、構造も痛みも人間と変わらない。漏れそうになる悲鳴を必至に堪え、エイネはなんとか耐えた。

(まずい、意識が……かすむ……！)

流血は魔力を消費することと同義だ。今すぐに出血を止めなければ、魔力を減らす一方だ。ましてや今は身体強化の魔法を自身に掛けている状態だ。このまま下手をすれば、自身の体が消えてしまい兼ねない。

だが治療する余裕はなかった。エイネは完全に囲まれてしまっていた。「せめてあの子だけでも」

ソラだけでもどこか安全な場所に移動できないかと思考を巡らせる。容易なことではない。今もなお、男に操られた町の人々が集まってきているのだ。こんな状態では例えソラの身を救出できたとしても、そうしている間に逃げ場がなくなってしまう。

エイネは、思わず太腿のナイフに手を掛けようとする。掛けて、自分を呪った。町の人々はただ操られているだけだ。罪もない人間を殺すわけにはいかないというのに、それだけ彼女は追いつめられていた。

(ここはもう……撤退するしかない……か)

そう考えた瞬間、町の人々が一齐にエイネ目がけて襲いかかってきた。

必至にエイネは猛攻を躲す。が、彼女の息は上がっていた。体力の消耗も激しく、本来ならば立っているのもやっとな状態なのだ。

なんとか隙を見て、この場から脱出しなければならぬ。今いる場所はあまりに狭い。躲すスペースさえ見つけるのが難しくなってきた。

「あまりこういうことしたくなかったんだけど……」

ついに壁際にまで追い込まれた。

だがエイネにとってこれは却って好都合だった。

拳に魔力を込めて、壁に打ち放つ。すると激しい音を立てて破壊された。出来た穴は思惑通り外へと繋がっている。町の建造物を壊すのは気が進まなかったが、もはや気にしている余裕などない。

骨に響く衝撃を堪えながら、エイネは外に出る。足に魔力を込めて高く跳躍し、家屋の屋根に着地した。

逃げようとしたとき、彼女の体はすでに限界に達しようとしていた。それでも力を振り絞り、その場から退散する。最愛の子を救うために死んではならないのだと。

「逃げたか」

エイネが姿を消して間もなくして、開いた穴から男が出てきた。

空を見上げ、鬼気とした表情で笑みを浮かべる。

「だが、この笛の力があれば……もう誰も俺を止めることはできない」

男は天に向かって、大きな高笑いを上げた。

「これで俺の欲望が満たされるってもんだ！」

男は周囲に集まった操られた人々に目をやることなく、中へと入っていく。

「おい、いくぞガキども」

そして子供たちだけを連れて、その場から去って行った。

一方、エイネは町の外、森の中まで来ていた。この場所まで来れば、さすがに追ってくることはできないだろう。

木にもたれ掛かり、荒れた息を整える。額からは大量の汗が流れている。

服の裾を破り、それを包帯代わりにして傷口を覆った。これは気休め程度のものでしかない。完全に傷口を塞がなければ、魔力が減っていく一方だ。

しかしエイネにはもう思考するだけの余力が無かった。体が少しでも魔力を得ようと、睡眠を促す。睡眠と食事は魔力を得るのに必要な要素だ。

視界が暗くなっていく。体を起こそうとするが、力が入らない。

「戻ら……な……いと……ソ……ら……」

そのままエイネは意識を失った。

第三節 愛されている少年と裏切られた少女 1

(誰かが呼んでいる気がする)

真つ暗闇の世界に、ソラは一人立っていた。いや、果たして立っているとと言えるのか。不可思議な感覚にソラは戸惑う。

おとぎ話に出てくる、世界が誕生する前の状態がこれだったのだろうか。

——……ラ……起……ソ……。

また闇の中で声が聞こえてくる。

この声に、ソラは聞き覚えがあるような気がしていた。

(エイネ?)

果たしてこんな声だっただろうか。はつきりと聞き取れないため、判別できない。

ソラは耳を澄ませた。

——ソラ……きて……。

(違う……エイネの声じゃない……?)

だが確かに聞き覚えのある声だ。つい最近、聞いたことのある声。

闇の中に、一筋の光が見える。ソラはそれに向かつて、大きく手を伸ばした。

「ソラー！ お願ひ、起きてー！」

叫び声に、ハッとソラーは目を覚ました。

目前に一人の少女の顔があつた。少し赤みの掛かった綺麗な栗色の髪をした、少女の顔が。

「トウネリ？」

謎の男の笛による演奏会。そこではじめて知り合つた少女が、心配した表情でソラーの顔をのぞき込んでゐる。

「あぐっ……」

意識が覚醒した瞬間、体に痛みが走る。

「そうだ、ボクは……！」

なにが起こつたのかを、ソラーは思い出す。あれからどれくらいの間が経つてゐるのかの判断がつかない。

「大丈夫？ 無理に動かないで？」

トウネリが今にも泣きそうな声で言った。

しかしそういうわけにもいかなく、ソラーは身を起こして周囲を見渡す。

すすり泣く声が至る所で聞こえる。何人かが身を寄せ合つて、地面に座り込む子供たちの姿があつた。

「はいは……どハハ。」

周囲は明るくはなく、見通しが悪い。かろうじてあるのは、鉄格子を超えたところにある松明の明かりだけ。空気は冷たく、今にも凍えてしまいそうなほどだ。ぴしやり、ぴしやりとどこからか水が滴り落ちる音も聞こえてくる。

この不気味な空間に、どうやら閉じ込められているようだ。ソラは理解した。

「ごめんね……ごめんね……！」

ふと、トウネリが泣きながらソラの服を掴んでそう言った。

「どうしたの？」

ソラはあやすように、トウネリの肩に手を当てる。彼女の体は小刻みに震えていた。

「わたし……わたし……！」

歯がガチガチと音を立てて、声も震えている。

ソラはもう一度周りを見渡した。どうやら他の子供たちも寒さに凍えているようだ。

「ちよつと待つて。今ここ温かくするから」

震えるトウネリの頭を優しく撫でると、ソラは微笑んで立ち上がった。

「いてて……えーつと、こう？　かな」

ソラはそつと天井に手のひらをかざす。すると、手のひらから赤い光を放つ小さな玉が生まれた。それがパツと花開くように割れると、先ほどの寒さが嘘のように温かい部

屋に変わった。

「どうみんな？ 温かい？」

子供たちが感嘆の声を上げ、ソラの方を見た。

「きみ、魔法を使えるの？」

一人の少年が声を上げる。するとほかの子供たちも声を揃えて「これ、魔法？」と聞いてくる。

「ああそつか、子供が魔法を使えるのってごく稀なことなんだっけ」

対しソラは小声で呟いて、頬を掻く。だが後悔はない。凍えている姿は放つてはおけない。

「えっと、まあ、一応？」

すると子供たちから歓声が湧き上がった。

「すっげえ！ 魔法を使える子供なんてはじめて見た！」

「待ってきみ歳いくつなの？」

「え？ えっと、まだ六歳……かな……」

「すごい！ わたしと同一年なのに魔法が使えるなんて！」

わいわいと子供たちはソラを囲んだ。こんなに大勢の同一年くらいの子に囲まれたことのないソラは、それだけでなんだか嬉しくなった。だが。

『うるせえぞガキども！ 大人しくしてろ！』

どこからか響いてきた怒声に、子供たちは縮こまった。

ソラもその声に身の毛がよだつ。

(今の声、まさか!?)

そう、聞こえてきた声は笛の演奏を行った男のものだった。

どうやらこちらに近づいてくる気配はない。ひとまず胸をなで下ろし、ソラは怯えるほかの子供たちに「大丈夫だよ」と笑った。

とりあえず状況を整理しようと、ソラはその場に座る。座って、気がついた。

「ごめんなさい……ごめんなさい……!」

トウネリが体を震わせて、何度も何度も謝罪の言葉を口に行っていることに。

「大丈夫？ まだ寒い？」

今度は両の手のひらに魔力を込めて、トウネリの肩に手を当てた。

「違う、違うの……!」

「なにが違うの？」

「わたし、わたしの……わたしの……っ!」

トウネリの目からは止めどなく涙が流れていた。

きつとなにか辛いことがあったのだろう。そう思い、ソラはトウネリを抱きしめてそ

の胸の中に顔を埋めさせた。エイネにした時と、同じように。

「大丈夫だよ。ほら、泣きたいときは我慢しないでいいんだよ?」

ソラの言葉が、トウネリの箍を外す。

そしてトウネリはしばらくの間、ソラの胸の中で叫くように泣いた。

この時ソラは彼女の声を響かせまいと、周りに《音を遮断する魔法》を用いるのであった。

◇

ひとしきり泣いたトウネリは落ち着きを見せていた。

「もう大丈夫? 落ちついた?」

「う、うん。ありがとう」

トウネリを顔を真っ赤にして俯く。恥ずかしさから、ソラのことを正面から見れずにいるようだ。

恐る恐る顔を上げてみると、ソラは笑った。まるで太陽のように明るい笑顔に、トウネリは思わず見惚れる。が、すぐに顔を反らして別の方を向いた。顔がまだほんのりと赤い。

一方のソラは、落ちついた様子のトウネリを見て胸をなで下ろしていた。いぎ抱きしめたはいいものの、まだ会って間もない少女の涙には幾ばくかの戸惑いがあった。果たして自分の行動は正解だったのだろうか、少し不安にもなっていたのだ。

その心配は無用だった。トウネリの表情は先ほどよりも柔らかいものとなっている。少しでも彼女の不安を取り除けたのであれば、それは正しい行動だったのだとソラは自信を持てた。

これなら大丈夫と判断し、ソラは今の状況の分析に入る。ある本にも「危機的状況に陥ったときこそ、冷静に物事を見なければならぬ」と書かれていた。今それができるのは自分しかいないという責任感が彼の背中を後押ししていた。

まずはここがどこかを把握しなければならぬ。見たところ、町のどこかにある牢獄施設なのはわかる。鉄格子から隣を覗くと、今居る部屋と同じ構造の部屋が幾つかあるのが見受けられる。

そして今いる部屋の目の前には通路があった。この先の部屋のどこかに、あの笛吹きの方がいるのだと思われる。

もう一度、子供たちを見てみる。人数はざっと見たところ十数人。この人数を一度に収容しておける部屋を、果たして牢獄施設に設けるのだろうかとソラは疑問に思った。普通は一人が入るのに十分な大きさではないはずなのだが――。

ソラは気になり、地面を調べてみる。石畳で出来た床だが何やら少し湿っぽい。どこからか水の滴る音が聞こえていることから、昨晚の雨の水が隙間から落ちていると考えるのが妥当なのだが、ソラはどうしても気になり、床に僅かな光を当てて見てみた。

（——っ!? これは、血……?）

床に染みついた赤い何か。これが血だとすれば、この部屋は一体なんなのか。ますます疑念が深まるばかりだ。

ソラは一通り今居る場所を眺めて、考えた。どうにかしてこの場所を脱出することはできないだろうか。

そのときだった。

「さあて、そろそろお楽しみと行きますかねえ」

そう言って、あの笛吹きの方が部屋の前にやってきた。

ソラは思わず生唾を飲み込む。一体この男は何を目的として、子供たちを連れてきているのかわからないからだ。

ガチャリと鉄格子の鍵が解除され、扉が開けられる。

「ん？ やけに温かいな。まあどうでもいい。それよりもだ」

中に入ると、男は子供たちをなめ回すようにじつくりと眺め始めた。

「そこのお前は最後の楽しみに取っておいてやる」

男が不気味な笑みを浮かべて、ソラを指さした。

男の瞳に射されたソラは、立ちすくむ。男の目はおよそ人がするものとは思えないほどの狂喜に満ちていた。

男がここにいる今、絶好の逃げる機会のはずだ。そう思っている、一瞬にして恐怖に落とされたソラは動けなかった。

男はもう一度眺めると、近くにいた少女の手を掴み無理矢理立たせた。

「な、なにをするつもりだ!」

近くにいた少年が声を上げて、立ち上がる。

「あん? お前には関係ないことだろ。ガキは大人しくしている」

「お兄ちゃん! やだ! 怖いよ!」

「うるせえなあ。いや待てよ? ははっ、今いいことを思いついたぞ」

男が突然満面に笑みを浮かべた。

「お前たち兄妹か。なら一緒にここから出してやる」

男は少年の腕も掴むと、鉄格子の部屋から出て鍵を閉めた。

「さあ、俺と一緒に行くのか? 楽園の世界へ」

「やめろ、どこに連れて行くつもりだ! 離せえ!」

「やだやだやだ! 離してよ、離してえ!」

二人の子供は恐怖から涙を流して抵抗していた。二人とも本能的に感じ取っていたのだ。この男は、ここから解放するために出したのでは無いと。

二人の声が遠のいていく。それを聞いていたソラの顔は青ざめていた。

(あの人、なにをするつもりなの?)

残された子供たちも青ざめた顔で固まっている。

特にトウネリは体を抱えて、まるで何かを聞かんとするかのように耳を塞いで蹲っている。当然その肩は震えている。

ソラは震える足で近づき、通路を覗くようにして鉄格子を握った。そして耳を澄ませる。恐怖で息が上がる。

しばらくして、静寂を切り裂くように遠くから声が響いてきた。

「やめろ！ 妹になにをするつもりだよ！」

「やだ！ お兄ちゃん助けて！ 助けてッ!!」

「やめろ、なんだよそれ！ そんなのでなにを！ やめてくれ……やめてくれええええ!!」

突然、音が途切れた。かと思つた直後。

「うわあああああーっ!! あ、ああああアあああああーッ!!」
少年の悲痛な叫び声が響き渡ってきた。

一体向こうで何が起きているのか。最悪の想像がソラの頭を過った。

ソラの頭も真つ白になっていた。今まで冷静でいられた彼の心は、一瞬にして瓦解していた。もう冷静に物事を見ることなど出来そうにない。

「もうやめて……！ お父さん……！」

そんなときふと、掠れた声がソラの耳に入ってきた。

思わずハツとして、辺りを見回す。その声はまたしても聞き覚えのある声だった。

「まさか……！」

声の主に目をやる。声の主は蹲り、肩を震わせ、そして耳を塞いでいる。

ソラはそつと近づき、少女の肩に触れた。

ビクツと、体が跳ねる。そしてゆっくりと、少女は顔を上げた。

「ソラ……ごめんなさい、ごめんなさい……！」

すがるように、少女トウネリはソラの胸に飛び込む。

ソラは思い出した。トウネリが何かに対してずっと謝罪を言っていたことを。その理由が今わかった。

「——わたしはね、ソラの笑っている顔が大好きなんだから」

脳裏にエイネの言っていた言葉が響く。本当の母親ではない、しかし本当の母親のように接して育ててくれた人の言葉が。ソラはギリギリつと歯を強く噛み締めた。

「大丈夫。大丈夫だよトウネリ」

ソラの言葉にトウネリが顔を上げる。顔は涙に濡れ、ぐしやぐしやになっている。

ソラはそつと、トウネリの涙を拭って笑った。

「ボクがなんとかする。だから、君のことを少しだけ教えてほしいんだ。君と、あの男の人の関係を」

ソラの唇も体も震えていた。なんとかできないかもしれない。それでも、なんとかしなければならぬ。瞳だけはまっすぐ、前を向いていた。

トウネリは意を決して、ソラに話し始めた。

第三節 愛されている少年と裏切られた少女 2

ある男がドウエセに住んでいた。その男は家族を持っていた。一人の妻と、一人の娘が彼の家族だ。娘の名はトウネリと言った。

男の妻は病を持っていた。原因不明の、今の医療技術では治すことのできないと言われているものだ。その病を治すために研究を行っていたのだが、刻一刻と病は進行していった。

このままでは妻の命は助からない。そう考えた男は、妻と娘を置いて、最も学問に優れているという国イザルトニードへと向かった。ここならば何か治療法のきっかけとなる何かが見つかるかもしれないと考えたためである。

しかし空しくも、何か答えとなるようなものは見つからなかった。

男は途方に暮れた。このままでは最愛の妻が死んでしまうという恐怖が、男の心を蝕んでいた。徐々に彼の中の余裕は無くなっていったのである。

そして帰宅した男は、絶望した。帰宅したときにはもう、妻は息を引き取っていたのである。男は泣き叫んだ。なぜこうもこの世界は非情なのだ。

心が壊れた男は、次第に世界への恨みが募っていった。なぜ命は消えていくのかと。

なぜ永遠に生きていくことはできないのかと。なぜこんなにも妻を脆弱な体にしたのかと。なぜ、治すことのできない病を生み出したのかと。上げれば上げるほどきりが無いほどに。

男は思った。ならば妻を生き返らせるしかない。そのためにはどんなことをしてみせると、そう考えるようになったのだ。

男は研究に没頭した。家の地下にそのための施設を作り、引きこもった。ありとあらゆる学術書に目を通し、知識を得て、彼は一つの結論を出した。人間ではない生物を生み出すしか無いと。

男は手始めに別の国から密かに奴隷を買った。そして魔法を使い、他の生物と合成するということをやりはじめた。確かに男の目論見通り、人間ではない生物を生み出すことには成功した。しかし環境に適さないのか、すぐに死んでしまった。

失敗を繰り返すうちに、男はある行為に快感を覚えるようになっていた。値段の安い奴隷のほとんどが子供であった。そのため、子供の悲鳴をまるで奏でられる音楽を楽しむかのように酔いしれるようになった。男の頭の中から娘の存在が完全に抹消された。

男の行動の趣旨は次第に変わっていった。子供の体の中身を眺めることが楽しくて仕方なくなっていた彼はついに、町に住む子供たちを標的にしたのである。



「ママがいなくなつてから、パパはおかしくなつた。まるで何かに取り憑かれたようになったの。食事も与えられずにいたから、隣に住んでいたお爺ちゃんとお婆ちゃんが面倒を見てくれるようになってた」

トウネリは涙ぐみながら話す。自分の父親がまさかこんな恐ろしいことをするだなんて、思つてもみなかったのだ。だが起こつてしまつた以上、なんとかしてほしい、父親を止めてほしい。そんな思いで、ソラに話している。

「しばらく会つてなくて、心配になつたから様子を見に行つたの。そしたら、変な服装したパパが立つてて——」

トウネリはこの時なぜか信じて疑わなかつた。同じ年くらいの少年を。彼ならばなんとかしてくれるかもしれないと。

「パパ、どうしたのつて聞いたら、最初誰だお前つて言われた。でもしばらく会つてなかつたから、そういうこともあるのかなつて。それで、わたしはパパの子供だよつて言つたの」

「そしたら……?」

「パパ、言つたの。ああ、そうだつたごめんねつて。これから子供たちに笛の演奏をして

あげようと思うんだ。沢山の子たちに聴いてほしいから、町の子たちを呼んで集めてほしいって。それでわたし、嬉しくて……！ みんなを集めて……！」

トウネリが話している間、ソラは先ほどと同じようにして周囲には聞こえないように音を遮断していた。この話を聞いていれば、中には彼女を責め立てるものもいるかもしれないと考えたからだ。

「本当はわたし知ってた！。パパがこんなことをしてるって、本当は知ってたの！。だけれど怖くて、怖くて怖くて忘れたの！。忘れて、何も知らないって！。でもここにきて、全部思い出した！」

トウネリは訴える。自分の罪を。これは自分がしたのも同然なのだと、そう訴えるようにソラの顔を見る。

「お願いソラ。こんなことあなたに言うのはおかしいってわかってる。わかってるんだけど……でもお願い、パパを……パパを止めて……！」

トウネリの懇願に、ソラは頷く。

だが内心、ソラは思っていた。果たして自分にそんなことができるのだろうか。確かに魔法の知識は多少なりともある。冷静さもある。では力は？。そう問われると、強く頷くことができない。

故に迷いはある。それでも成さねばならない。そうしなければ、また新たな犠牲が生

まれるだけだ。先ほど動くことができなかつたことへの後悔もある。

ソラは決意し、どう動くかを考える。

なにをしているのか、男はまだこちらに来る様子はない。続けざまに子供を出すつもりはないようだ。ならば僅かでも猶予はあるはずだ。

(真つ正面から行つても、相手にならないよね)

子供と大人の力の差は歴然としている。それはソラでも例外ではない。

(魔法を使って、なにか少しでも隙を作ることができれば)

しかし、子供たち全員で逃げるだけの隙を作るとなれば、それだけ強大な魔法を使わなければならない。

ソラは考える。今自分ができる魔法の中から、打開策となるなにかは無いだろうか
と。

(そうだ。光。光で目くらましをすれば！)

今いる場所は薄暗い。であれば、それ相応の効果はあるはずだ。そしてその隙にみ
なで逃げ出せば、あとは出口に向かって走るだけである。

(でも、もし失敗したら……)

確実な手段はない。わかつていても、ソラは模索するしかなかった。少しでも成功率
の高い方法を取らなければ、最悪全員一斉に殺されてしまう可能性があるからだ。

(そういうえば、どうしてここには見張りがいないんだろう?)

この部屋の前に誰一人として見張りがいない。男は人を操る魔法を使えるはずだ。であれば、誰かを操り、その人間に見張りをさせるなどというのは容易いはずだ。子供だから必要ないと考えているのだろうか。或いは――。

(もしかして、まだみんなの中に魔法の力が残っている?)

その可能性は大いにあった。今は魔法を解いているだけで、何かの拍子に発現させてまたすぐに操る手段がある。そう考えれば、見張りの必要もなければ、子供たちが自分に反抗し逃げ出すという行為に心配する必要も無い。

それでも鍵を掛けるというのは、男なりに念のためを考えたのだろう。

(もしそうだとしたら、鍵は? 音……?)

ソラは頭を悩ませた。時間はもう無い。すぐに方法を考えなければ。その焦りがソラの顔に出ていた。

そんな時だった。

「ソラ……:なにか手伝えることがあったら、言つて?」

そう、トウネリが言つてソラの手に触れた。

思わずソラは彼女の顔を見る。まだ涙を流しているが、それでも何かしたいという意思が瞳には宿っていた。

「わたし、ソラみたいに魔法も使えないし、なにもできないかもしれない。でも、なにかしたいの。みんなを怖い目に遭わせちゃった原因は、わたしにもあるから」

トウネリが微笑む。明らかに無理をしている笑顔だ。ソラはその中に、他にはない強さが見えたような気がした。

そこでソラはひとつ、考えを思いついた。

(そうだ、ボクが囨になってみんなを出す隙を作れば)

トウネリに協力してもらい、自分があの男とともに別室へ行っている間に他のみんなを逃がす。幸い、解錠の魔法をベル婦人に教わっている。見たところ鍵の構造は単純であるため、そう難しくはないはずだ。

(それに、ボクひとりならあれも使えるはず)

あとは、あの男をどうにかして口車に乗せるだけである。あの男は言っていた。お前は最後にする、と。だがなにか大きなアクションを起こせば、その考えを覆してきつと標的にするはずだ。そうソラは考えた。

「トウネリ、お願いがあるんだけど……いいかな?」

「うん、なんでも言つて」

意を決し、ソラは自分の立てた計画をトウネリに話し始めた。

「そんな! そんなの危ないよ!」

内容を聞いて、トウネリは血相を変えて叫ぶ。その叫び声に、他の子供たちが何事かと静まり返って二人を見た。

「でもこれが一番みんなを助けられる方法なんだ」

「けどもし失敗したら、ソラが！」

「大丈夫。もし失敗しても、みんなは助かるはずだから」

「それじゃ意味ないよ！」

トウネリはソラの計画に反対だった。もし失敗すれば、ソラの命も危ない。そんなことをまったく望まない彼女としては、当然の反応である。

「だって……だってわたし、最初に会ったとき思ったんだよ？ この子と友だちになつてみたいなんて……なのにこれじゃ……」

「トウネリ……」

ソラはそつと、トウネリの髪を撫でる。

「お願い。ボクじゃこれしか方法が思いつかなかつたから。それに脱出して誰かが助けを呼んでくれたら、ボクも助かるかもしれないでしょ？」

ソラは笑う。もちろん、恐怖を和らげるために無理をしているのがわかる。

これ以上トウネリの言葉を聞くまでもなく、ソラは立ち上がり、他の子供たちを見渡した。

「みんな聞いて。次あの男の人が来たら、ボクがなんとかしてみんなをここから出してあげる」

「そんなことできるの……?」

「うん。少なくとも、みんなは出してあげられると思う」

子供たちが喜びが湧き上がる。

ソラは計画の概要を他の子供たちにも話す。

その間トウネリは、その背中を見ていた。近くにいるはずなのに、遠いどこかにいるような背中を。

「本当にうまくいくの?」

「うん、大丈夫。ボクを信じて」

直後、通路の方から足音が聞こえてきた。どうやら男がようやくこちらに来るつもりになったらしい。

「なんだか騒がしいなあ。まあいい」

そのことを確認し、ソラは目配せでみんなに合図を送った。子供たちが全員、部屋の奥へと移動していく。

トウネリの方にも目をやった。まだ動揺を隠せない様子だが、もう実行に移すつもりなのだと言念し、トウネリも渋々移動する。

「さて、次はどのガキにするかなあ？」

顔を血だらけにした男が、部屋の前に向かってきた。

その血を見て、ソラはすぐに理解する。想像通りのことが行われたのだと。恐怖で逃げ出したくなる体を必死に抑えて、ソラは男を睨むようにして見つめた。

「あん？ なんのつもりだ？」

ソラはみんなを庇うようにして、最前に立っていた。

男は訝しげな表情でその光景を見る。

「次は、ボクが行く」

「ああ？ お前は最後だって言ったよな？」

やはりこの男は自分が決めたことを変えないつもりらしい。ならばと、ソラは男に話しを持ちかけた。

「ね、ねえ？ どうしてボクがあなたの魔法に掛からなかったのか不思議じゃない？」

「あん？ たまたまだろ、たまたま」

上機嫌な男は、どうやら原因について興味がないようだ。

しかしそれでは困ると、ソラは続けて言葉を紡いで話す。

「ボク、人を操る魔法に関して少しだけ知ることがあるんだ」

「なんだと？」

ソラの言葉に、男の顔色が変わる。このまま押し切れば、考えを改めるはずだ。ソラは震える唇で、続けた。

「音を使った場合、その音が聞こえていなかったら対象に掛けられないってあった。でもボクはあなたの笛の音をすっかり聞いてたんだ」

ソラが話している間、子供たちはその背中を見守っていた。そして感じていた。この目の前にいるのは一体、なんなのだろうかと。このような状況でなぜ一人だけあんなにも臆せずにいられるのだろうか。

得体の知れない何かと出くわしたような、そんな感覚に。

「じゃあ他に何が考えられると思う？」

「お前、なにが言いたい？」

ソラはくすりと笑って、言い放った。

「もしかしたらボク、あなたより魔力があるのかもしれない」

瞬間、男の目の色が変わった。あり得ないと、そう訴えていた。

ソラが見た本に、こんな記述があつた。〃何を使うにしても、人を操る場合ある点に注意しなければならぬ。それは、術者が対象よりも魔力を持ち合わせていなければならない、ということだ」と。

つまりこの記述が正しいとした場合、ソラは先天的にこの男よりも強い魔力を持つて

これで計画のひとつが潰された。ソラはもう次の強行手段に移るしかなかった。

「さて、他のガキを——」

男が錠を開けた瞬間、ソラは叫んだ。

「みんな！ 目を瞑って！」

ソラの叫びに応え、子供たちは一斉に目を閉じる。

そのことに一瞬呆気にとられた男だったが、なにをしようとしているか理解した。

「てめえ、まさか!？」

直後、目も開けていられないほどの眩く強い光がソラの手から放たれた。

「ぐぎゃああああああ!!」

ガードする間もなく光をもろに浴びた男は、目を抑えて地面に伏す。完全に目を潰されていた。これではしばらくは目を使うことができないだろう。

「みんな、早く出て！」

その隙にソラは扉を開けて、子供たちに出るよう促す。

「くそが、くそがああああ!!」

男は悲鳴をあげる。男の耳に、遠のいていく足音が響く。

「止まりやがれ、ガキども！」

男は叫んだ。しかし、足音が止まる気配はない。

「悪いけど、あなたの声はみんなには聞こえないよ」

近くであの子供の声がした。蒼穹のように濟んだ青い髪をした、子供の声だ。

「てめえ、このくそガキ！ なにをしゃがった!!」

男は立ち上がり、気配で子供の位置を探る。そして目を閉じたまま睨んだ。

「別になにもしてないよ。ただボクとあなたの声が周りに聞こえないようにしただけ」

ソラの推測は正しかった。

男の声。それが一度魔法に掛かった者をもう一度操るための鍵だった。

ソラはまだ魔法を完全に使いこなせるわけではない。音を消す魔法も、自分とその他一人しか対象にできないのだ。

今回はそれだけで十分だった。ソラはまだ男の魔法に一度も掛かっていない。ならば男の声を聞いたとしても、操られる心配はない。

ソラの計画はこうだった。

男が挑発に乗り、部屋から連れ出し別室に移動した場合、移動際に鍵を解錠。トウネリが隙を伺い、みんなを誘導して外に出る。その間に発生する音は今とは逆に外の音を遮断する。

男が挑発に乗らず他の子供を連れ出そうとした場合は先に行ったこと、男が油断しているのは明白。そこを突いて逃げ出す隙を作ればいい。あとは全員が逃げ切るまでの

時間を稼ぐ。

どちらに転んでも、自分以外は助かる算段だ。

「ガキのくせに、二度も俺の邪魔をしやがって……くそが！」

男が両目に手をかざす。

「癒やしの精霊よ、星の息吹よ。汝、我が目を癒やしたまえ……」

詠唱の直後、淡い光が男の目を包んだ。

(この人、回復魔法を!?)

まずいと、ソラの顔に焦りが現れた。目が使えない状況ならばこちらに利がある。だが目が見える状態では体格差で負けてしまう。

ソラはすぐさま構えた。もう一度、目を開いた瞬間に光を放つ。そうすればまた目が使えなくなるはずだ。

「お前はこう思っているよな? 目をまた開けた時に同じ事をすればいいって」

男が笑う。そして腰のポーチに入れていた笛を取り出した。

「なにをするつもり? 笛の音はボク以外に聞こえないし、ボクは催眠魔法に掛からないよっ。」

ソラは不安を拭うため、男を挑発する。一体なにを企んでいるのか、探るためにも。

男は目を閉じたまま笛を口につけると、言った。

「知ってるか？ 音つてのはな、空気を振動して鳴ってるんだ」

「知ってるよ。ボクの魔法も、そこに干渉する魔法……だから……」

ソラの脳裏に男の目的が浮かびそうになる。だがまだ答えには行き着かない。

「お前の勇気に免じて教えてやるよ。この笛はな、魔装具のひとつだ」

「魔装具？」

その言葉に聞き覚えがあった。ソラは自分の頭の中から該当するものを探す。

答えを探すソラの代わりに、男は笑って言った。

「魔装具つてのはな、いわゆる魔法をさらに強大にする力がある物のことを指す言葉だ」

ソラは思い出す。

魔装具。特殊な加工をすることで、物に魔法を強める力を付与した禁忌の代物。それにより放たれた魔法は並大抵の威力ではないという。そしてその特殊な加工というのが――。

(まさか、この人が子供の体を求めてたのって!?)

人の血肉、特に心臓部――魔力を生み出す機関を大量に集め、それを材料とすることだった。

「確かにお前の考えた通り、お前は俺以上の魔力を持っているだろうよ。なんせこの笛を介して放たれた魔法に掛からなかったんだからな。だがなあ……経験が足りなかつ

たなあ？」

男が笛を吹く。途端、地面を砕くほどの暴風が吹き荒れた。

「ぐあ……がつ……!？」

ソラの体はいとも容易く吹き飛ばされ、背後の壁に叩きつけられる。地面の破片が体の節々を裂く。咄嗟に魔力を身に纏い衝撃を和らげた。だが完全に押し殺すまでには至らず、口から血が飛び出した。

「(づ)ほっ、(づ)ほっ……!」

そのまま壁伝いにずり落ちる。体に力が入らない。意識も朦朧としている。呼吸するたびに、苦しそうに血を吐き出している。

ソラは男の方を見た。笑っている。

(ダメだ……このままじゃ、またみんなが……!)

なんとか身を起こそうとする。だが痛みに力が入らず、立ち上がることができない。ぴちやりと、水が落ちる音がした。

ソラは音に釣られ、横を見る。ソラたちがいた部屋から最奥の部屋だ。

(なにか、いる……?)

かすむ視界の中になにかを捉えた。だがなにかまでははっきりと認識することができない。

「残念だったなあ。お前の負けだ。まあガキにしちやあよくやったんじゃねえか？ 褒めてんだ、喜べよ」

再び男の方に目をやる。男は笛に口を当てていた。このままでは、再び子供たちが操られ、振り出しに戻る。いや、今回の失敗で男は警戒心を強め、もう二度と抜け出すことができなくなってしまう。

ソラは必死に身を起こそうと力を振り絞った。痛みが全身に走る。それでも、立ち上がらなければならぬと身を振らせた。

一方少し前、トウネリと子供たちは地下室を抜けていた。

抜けた先は一階のリビング兼ダイニングルーム。そこから出口はすぐそこだった。

トウネリは急いで玄関の施錠を外し、扉を開ける。開いた途端、ほかの子供たちがなだれ込むようにして外に駆けだした。

(よかった。あとはソラが……)

直後、地響きが足下から響いてきた。

「——っ!?! ソラ?」

外に出ようとしたトウネリが足を止めて振り向く。

今の音、ソラになにかあったのではないか。そんな考えがトウネリの脳裏を過る。

「ど、どうしよう。ソラが……!」

引き返そうと、足を伸ばしたときだった。

「今……のは？」

一迅の風が——彼女の横を走り抜けた。

「残念だったなあ。お前の負けだ。まあガキにしちやよくやつたんじゃねえか？ 褒めてんだ、喜べよ」

男は高らかに笑う。勝利を確信し、もうこれ以上の邪魔は入らないと。

笛を口に当てて、子供たちを戻すために吹こうとする——が、男は吹くことが出来な

かった。

「ぐぼああッ!？」

何者かに顔面を殴られ、開いた牢屋の中に飛ばされてしまったのだ。

もしこの時、男が通路が交差する場所に立っていなければ、多少は結果が違っていた

かもしれない。

そう、男は失念していた。

男を最も邪魔していた存在を——。

蒼穹の髪を持つ少年を最も愛する存在を——。

「悪いけど、私の大切な人を返してもらおうわよ」

エイネⅡヴェゲグⅡヌングという使い魔の少女を——。

第三節 愛されている少年と裏切られた少女 3

薪がはぜる音が響く。コトコトと、何かが沸騰する音が鳴る。

薄暗い小屋の中に一人の男が座っていた。口を覆うほどの白く長い髭を生やし、同じく白い前髪は目が隠れるほどに長く、体格はまるで熊のように大きい。

男の住む小屋の中にはひとつだけベッドがあつた。木で出来た枠の中に、干し草が入れられている。その上にシーツを引いてこしらえたものだ。

そのベッドの上にエイネは眠っていた。両腕に包帯が巻かれ、血が滲んでゐる。瞼が微かに動く。

「うっ……うん……」

唸るような声を発すると、ゆっくり瞼が開いた。

体を起こし、朧気な意識のままエイネは周囲を見渡す。

「ハハ……は……？」

知らない場所だ。エイネは思うと、ハッと意識を覚醒させた。こんなところにいる場合じゃないと。

すぐに立ち上がろうとした。が、全身に痛みが走る。

「ぐう……」

体が悲鳴を上げている。それでも向かわなければならぬ。エイネは固い意志で立ち上がった。

「そんな体でどこへ行くつもりだ」

声を掛けられて、エイネは男の方を向いた。

男は動くなど睨んでいる。

「わかってます。でも、私は行かなきゃいけないんです」

エイネはこの男に見覚えがあった。いつだったか、ソラが森に迷ったときに保護してくれた男だ。当時名前を聞きはしなかったが、悪い人間でないのは確かである。

だからエイネは安心していった。きっとこの人なら理解してくれるだろうと。

「助けてくれたのは感謝しています。でも今すぐにでも行かなきゃ」

男は立ち上がった。鋭い眼光がエイネに突き刺さる。

エイネの体はまるで金縛りにでもあったかのように動かなくなっていた。何をされたわけでもない。ただ睨まれただけだ。

「わからんのか。今は行くなど言っている」

「で、でも私は……」

「……その口を閉じろ」

エイネは唇も思うように動かせなくなつた。何かを続けて言おうにも、呻き声を発することさえできない。

(なに……これ? どうなつてるの?)

エイネの額に汗が滲み出る。体と心が目の前の大男に恐怖し屈服していた。

「お前さん、この程度で息が上がっていてどうにかできるとでも思っているのか?」

エイネは答えられない。答える意思さえも剥奪されている。

「わかつたなら大人しくそこに座っている」

エイネは男に従うままに、ベッドに腰を掛けた。

するとエイネの体は何かから解き放たれたように軽くなる。気がつけば息も大きく荒れていた。

荒れた呼吸を整えながら、エイネは男の方を見た。

男は暖炉の前に腰を掛けると、火に掛けた鍋の様子を眺めている。

不穏な静寂が、小屋の中を漂う。もしここに入った者がいればすぐに逃げ出してしまふことだろう。

「そういえば自己紹介がまだだったな。俺の名前はアウルスⅡウィルⅡアニメ。この小屋で一人暮らしている老いぼれだ」

突然、なぜ自己紹介を始めたのかエイネはわからなかった。だが名前を言われればこちらも答えるのが礼儀というもの。エイネも男に続いて名前を言おうとした。

「お前さん、ヴェルティナに引き取られた使い魔だろう？」

エイネは思わず息を呑んだ。なぜそのことを、と。考えられるのは一つだけ。この大男もヴェルティナの関係者ということだ。

「名前は、ええと、なんと言ったっけか」

「エイネです。エイネⅡヴェゲグⅡヌング」

「ああそうそう、エイネだ。すまん、歳のせいで物忘れが多くてな」

男はため息を吐く。

「あの坊主は元気になっているか？」

「え、あ、はい。でも今あの子が——」

「皆まで言うな。お前さんの行動で理解はしている」

男は会話をしながら、肉、野菜を鍋に入れていく。

どうやら彼なりに場を和ませようとしているのだとわかると、エイネはホッと胸をなで下ろした。気がつけば不穏な空気は消えている。

「森の中でお前さんを見つけたときはヒヤッとしたぞ。なんせ体が消えたり戻ったりしていたんだからな。今も魔力結晶と多少の睡眠によりなんとか保っているといったと

「ころだろう?」

否定できなかった。現に今も、体の一部が消えようとしている。先の戦いで魔力を消費しすぎた結果、宣告された余命よりも早まっているのだろう。エイネは唇を結び、膝の上で握り拳を作った。

「今のまま向かってもすぐに消えちまう。それがわからんわけでもあるまい」

「はい、そうですね……すいません」

エイネはなぜ目の前の男が引き留めたのか理解すると、自分の浅はかさに嫌気がさした。目の前のものしか見えない盲目さが、ソラを救うチャンスを無下にするところだったのだ。

首から下げた魔力結晶がわずかに光を放つ。その光がすぐに消えたところを見ると、どうやらもう結晶内の魔力も限界が近づいているようだ。エイネは思わずため息を漏らした。

「よし、できたぞ。これを食べ。少しは魔力の足しになるだろう」

そう言つて男が器に入れて渡したのは白い色をしたスープだった。

「これは……」

「なんだ? 昨日の晩にでも同じものを食ったか?」

「い、いえ! そういうわけじゃ!」

間違っただけではなかった。

ただエイネが思わず声を漏らしたのは、男が作ったスープがどこか独特な雰囲気を感じさせていたからである。

「ああそうか、匙が無けりや食えんか。少し待ってろ」

食べるのを躊躇う姿を見て、男はそう呟いた。

ナイフを取り出し、近くにあった小さな木を削り始める。手際よくかつ素早く削って、スプーンの形にしていく。そして息を吹きかけて削りカスを飛ばすと、無言でエイネに渡した。

即席で作られたスプーンを受け取り、エイネは恐る恐る口に運んでみる。

味は普通のような。そう思った直後、ガリツとなにか硬い物を噛んだ。

「……なにこれ」

思わずその硬い何かだけを吐き出し、スプーンに乗せてみる。

「あの、これって……」

怪訝な表情の先に乗っていたのは、白色透明な魔力結晶の破片だった。

「食いもんと一緒にそれを食えば、魔力も十分に補えるだろう。人ならば食えんかもしれんが、使い魔であるお前なら食ってもさして問題はない。いいから食え」

「うう……」

これでは味もなにもあったもんじやない。エイネはそう思いながらも、渋々飴を噛むようにして、結晶を噛み砕き飲み込んだ。

もう一度、スープの中をよく見てみる。肉や野菜といった普通の具材の中に、他にも結晶の破片があるのが見えた。

「どうした？ 早く食べ。まだ量はあるんだぞ」

ギョツとして、エイネは鍋の方にも目をやった。ぐつぐつと煮えているスープはまだまだ残っている。

「あ、あの……さすがに私そんなに食べられないんですけど……」

「こんなもの俺の方が食えんだろう。いいから黙って全部食べ。残したら承知しねえぞ」

（こ、こんなの横暴だ！）

最初は躊躇っていたエイネだったが、男の視線の痛さに耐えられず、もうどうにでもなれとスープをがつついた。

スープを飲むにはおよそ鳴ることがないであろうガリツ、ガリツといった音が延々と鳴り響く。

こんな仕打ち今まで受けたことがあつただろうか。涙目になりながらエイネは魔力結晶の入ったスープを食べ進める。

「ほれ、おかわりだ」

器の中が無くなれば、一杯、二杯とどんどん盛られていく。

結局、鍋の底が見えるまで食べる羽目になるのであった。

◇

スープを最後の一杯まで食べ進めたエイネ。お腹はもうはち切れそうなほどに膨らんでいた。

さすがにこれの二つ前から食べるペースが落ちていた。

最後の一杯となると、もう手を動かすことも億劫になり、まとも進まない。

「もう無理……食べれない……」

許容範囲を超える量を食べたため、吐き気もやってきた。

そもそも使い魔といえど、吸収できる魔力にも限界があるというもの。

エイネは匙を置き、器をただ見つめるだけとなってしまった。

「まったくだらしがない。こんなことであの坊主を助けられると思うのか?」

それは果たして関係あるだろうか。そう思っても、反論する気力も湧かないエイネ。

第一こんなことをしている間にもソラの身に危険が迫っているかもしれないのだ。

今すぐにも出発したい気持ちだが、エイネの中に募り始めていた。

「ところで質問していいか？」

男がこんなことを言うので、エイネは小首を傾げた。

「あの坊主は、お前が命をかけるだけの価値があるのか？」

当たり前だ。叫ぶより先に体が動いていた。

立ち上がったエイネを男は睨み付ける。

「お前にとつてあの坊主はなんだ？」

それは昨晚、ベル婦人にされた質問と同じ内容だった。だから同じ答えをした。

「そんなの決まっています。あの子は私の大切な子、大好きな子。だから命をかけてで

も守る価値はあるんです」

「本当にそうか？」

「え？」

男の問いの意味が分からない。エイネは一瞬言葉を失った。

「お前はただ、自分の幸せがなくなるのが怖いだけじゃないのか？」

「そんなことは——」

否定しようとして、心のつつかえがそれを拒んだ。

「お前はあの坊主がいなくなることが幸せの喪失だと思っっている。また昔みたく不幸な

日々を送ることになると考えている。あの坊主の命は二の次で、本当は自分の幸せさえ確保されればどうなっても構わないと思っっているんじゃないのか？」

男の言葉が、エイネの胸を抉るように突き刺さる。

「本当はお前、幸せをくれるなら誰でもいいと思っっているんじゃないのか？」

エイネは黙った。心の声が、どこからか響いてくる。

そうだ。自分は生まれたときから不幸だった。本当の親に見放され、人から苛まれ、心を壊され、死ぬ寸前に追い詰められて、この世の誰よりも不幸と思えるような人生を送っていた。そんなことを考える余裕さえないほどに、不幸な人生だった。

しかし今はどうだろう。この上なく幸せだ。ヴェルティナと過ごす時間は幸せだった。ヴェルティナと住む世界は輝きを放っていた。ヴェルティナがいたからこそ、自分は笑って生きていくことができた。

ヴェルティナがいなくなった後も、ソラと一緒に暮らしていれば幸せだった。幸せな時間が押し寄せるようにやってきた。戸惑うほどに。

ヴェルティナがいなくなっても幸せに過ごせたのだ、別にソラがいなくなっても自分は幸せに過ごすことができることだろう。

(違う……)

ヴェルティナがいなくなつて、どうしてと泣き叫ぶ日があった。ヴェルティナがいな

くなつた穴埋めのためにソラを選んだに過ぎない。ソラは所詮、ヴェルティナの代わりとなる存在に過ぎないのだ。そしてソラがいなくなれば、またその代わりを見つけ――

「それは、絶対に違う！」

エイネは強い否定とともに、残りのスープ余すことなく食べ尽くした。

すべて飲み込み、エイネはアウルスを凝視する。その瞳には揺るがぬ信念が垣間見える。

「私は、あの子と一緒にだからこそ幸せと思えた。あの子のことが好きだから、いつまでもあの子と一緒にいた。ヴェルティナがいなくなつても、この子とだけはずっと一緒にいたいと願つた。だつてソラは私にとってかけがえのない――」

（ああ、そっか。私、あの子に）

「――大切な人だから！」

（ソラにいつの間にか、惚れてたんだ）

エイネはようやく、自分の思いに気がついた。なぜ他の誰でもない、ソラのことを大切に思つていたのかを。なぜソラから離れたくないと思つていたのかを。

それは至極単純で――しかし最も尊い感情だ。

アウルスは口元にほんの僅かに笑みを浮かべると、再び睨みを効かせた。

「それはお前の勝手だろう？ ああ坊主が本当に望んでいるかはわからん」

「それでもいい。私はあの子に生きててほしいから」

エイネは器と匙を近くのテーブルに置くと、出口へと歩んでいく。

アウルスはそれを引き留めない。元々彼に引き留める権利も、意思もないのだから。

「行くのか？ 言っておくが、お前が食ったもんは一時しのぎのもんでしかねえぞ。お

前を延命できるほどの代物じゃねえ」

「分かってます。アウルスさん、スープ美味しかったです。今度は魔力結晶無しで願

いしますね」

アウルスに笑顔を向けると、エイネは外へと飛び出していった。

「今度、か……」

残されたアウルスは、木の器と匙を手取る。

「これ以上俺はなにもしてやれんぞ。万が一のため、この森を守らにやらんからな」

アウルスが器と匙を虚空に渡すように動かすと、それを受け取る手があった。

今度は手の主に鋭い眼光を向けるアウルス。その先には、どこからかともなく現れた

ヴェルティナが立っていた。

「十分よ。ありがとう、アウルス」

「お前さんのこれは、誰のためだ？ ああ坊主のためか？ それとも、ああ娘のためか

「？」

「勿論、どちらのためでもあるわ」

ヴェルティナは器と匙を眺める。まるで骨董品でも吟味するかのよう。しかしすぐに興味を無くしたかのように、それらを暖炉の火に焼べた。

「あの娘はどうなつてもいいと？」

「あの子には悪いとは思つてる。でも仕方の無いことよ。それが、彼の意思なのだから」
「本当にそう思っているのか？　そこにお前さんの意思は……あるのか？」

アウルスの問いに、ヴェルティナは笑つて答えた。

「おかしなことを言うのね。私はただ、彼の意思に従うだけよ」

ヴェルティナはこれ以上の会話は必要ないと、立ち去ろうとする。

それをアウルスは、悲しげな目でただ背を見つめた。

「お前さん、変わつてねえな。いつもそうだ」

「そうかしら。うん、そうかもね。それが私だもの」

吐き捨てるように言うと、ヴェルティナは外に出る。

外に出て、彼女は空を見上げた。外はもう薄暗くなり、もうすぐ夜となる。

星空はどこにも無く、一面に分厚い黒い雲が掛かっている。

「今夜は一際強い雨が降りそうね」

ヴェルティナは呟くと、忽然と姿を消す。

「あの子の旅立ちのためには、必要な犠牲なのよ」

彼女の目には、涙が溜まっていた。



エイネは森の中を全速力で駆けていた。

魔力を行使し、身体強化の魔法を掛けてひたすらに走った。

（体が軽い……あのスープのおかげ、なのかしらね）

体中魔力で満たされているのがわかる。これならば、ある程度魔力を酷使しても、すぐに消えるようなことはないだろう。

それだけではない。体の痛みが嘘のように無くなっていった。腕の傷口も完全に塞がり、包帯の必要もなくなっていた。

存分に戦うだけの余裕が今はある。どれだけの群勢に囲まれて襲われようと、対処するのさして苦勞することはないはずだ。

エイネはそう自分を信じ、ソラを救うために走る。

もしかしたらもう一刻の猶予もないかもしれない。あるいはもう、彼の命は――。

「大丈夫、あの子は生きてる。私が信じなくてどうするのよ」

揺るがない心が、エイネの中に出ていた。

もう迷いはない。ソラの明日のために、大切な人のために、これからも全力を注ぎ
と。

「それにしてもそっか、私、そっか……」

それはそれとして、エイネは自分の気持ちに狼狽していた。無理もないだろう。今
で我が子のように接し、育ててきた少年に対して恋心が芽生えていたとなれば、誰であ
れそういう気分にもなる。

「でもあの子ほら、確かに今は可愛いなりをしてるけど、将来かつこよくなるかもしれな
いし？ あれでもちやんと男の子だし？ 別に私がおかしいわけじゃないし」

なぜこんなことを独りでに呟いているのか、エイネ自身にもわからなかった。はじめ
て恋をする乙女の反応とでも言えればいいのだろうか。ともかく今の彼女は言いようの
ない感情で一杯になっていた。

「つて、何考えてるのよ私。今はそれどころじゃないでしょうが、まったく」

我ながら呆れると、エイネは嘆く。しかし心は晴れやかだった。

そうこうしているうちに、ドウエセの町が見えてきた。

エイネは真つ正面から行こうとはせず、木々を足場にして、町を囲っている外壁の上

に降り立った。

「うげっ」

町を見下ろして、エイネは思わず不快感をあらわにする。

彼女の眼下、町の中では、操られた住民たちが唸り声とも呻き声とも判断がつかない声を発しながら彷徨っていた。

昔見た死人が彷徨っている姿と酷似していることから、ついつい苦い顔をしてしまったのだ。

「早くこの人たちも解放してあげなきゃね」

そのためにも一刻も早く、あの術者である男を見つけなければならぬ。

エイネは意を決し、眼下に見える屋根に向けて飛び降りた。

まずはあの笛を吹いていたところに向かおう。

着地してすぐに屋根を走り、跳躍して隣の家屋に移りを繰り返し、目的地へと走った。

「あそこが最初の現場……よね」

エイネは、笛の演奏が行われた建物が見えるところまでやってきた。

エイネが開けた穴はまだ痛々しく残っているが、見たところ人の気配は一切ない。

となると、別の場所ということになる。

「他に考えられる場所は……」

エイネは必死に町のありとあらゆる場所を走った。

しかし、そもそもあの男がどこに潜伏しているかの情報が一切ない。ただ体力を消耗するばかりだ。町の人間に思い当たる場所がないかと聞こうにも、あの状態ではとても聞けるはずもない。

それでもエイネは走った。

僅かな違いでもなんでも、見落とさないよう、目を凝らし、見渡しながら。

「くそ……一体どこなのよ……」

息を切らし、堪らず苦言を漏らすエイネ。

空はすっかり暗くなり、夜になっていた。

これでは時間もただ費やすだけではないか。そう思った時だった。

「ん？ あれは……」

ふと、一軒の家の扉が開くのを、エイネは見逃さなかった。

開いた扉から子供たちが逃げるようにして一斉に飛び出している。

「……見つけた。けどなんで」

なぜと考えて、すぐに答えに行き着いた。

エイネは口元を緩ませる。

「そういえばあの子、前から妙にかっこよかったわよね」

エイネは、ふうと一度深呼吸した。目を閉じ、少し乱れた呼吸を整える。そして一気に目を大きく見開き、屋根を強く蹴って一直線に跳んだ。

距離が足りず、そのまま地面に着地する。目の前には町人の群勢だ。存在に気づき、こちらを見ている。

エイネは構うことなく大地を蹴り、まるで疾風のごとき速さで、さらなる加速をしながら、見つけた目的地へと駆け抜けた。その速さは、誰の目にも止まることはない。

彷徨う住人の合間を縫うようにして抜け、子供たちの逃げる姿を横目に、その住居へと飛び込んだ。

「今のは……?」

すれ違った少女が、風が通り抜けるのを感じ、声を漏らす。何も見えなかった。だが確かに何かが通ったのを、少女は感じていた。

階段を駆け下りたエイネは、地下の薄暗い通路を走った。

途中途中、光が漏れている部屋があつたが無視した。

彼女は直感で感じていた。ソラがいるのは、この地下の最奥だ。そしてそこには、あの笛吹きの方も一緒にいるのだと。

目前に通路の曲がり角が見えてきた。

エイネはこれを減速することなく、むしろ加速して壁を走り、天井を走り、また壁を

走り、そして元の地面にという形で曲がった。速度を落とす、などという考えは一切浮かばない。

他の曲がり角も同様にして曲がり、ついに目標を捉えた。

「——っ！ 見えた!!」

視線の先に、男の姿が見える。

男が何かを言っているがそんなことはどうでもいい。見たところ、笛を吹こうとしている。おそらくは、逃げ出した子供たちを戻すためであろう。

(そんなこと、させるもんですか)

きつとあの子供たちは、ソラが身を挺して逃がしたのだろう。その行動を、勇気を、功績を、絶対に無駄にしてなるものか。エイネは歯を食い縛る。

走りながら、拳を作った。強く、強く握った。今までに込めたことのない力を、一杯に込めて作った拳だ。そこにはこれまでの色々な思いも込められている。中には一人の少女の、大切な人への強い思いも。

「よくも私の大切な人を傷つけてくれたわね」

それを使い魔エイネは、これまでの速度を保ったまま、ただ真っ直ぐに、男の顔面目掛けて打ち放った。

「ぐぼああっ!?!」

強い衝撃が、空気の振動とともに走った。

衝撃に耐えられなかった男の口からは、情けない悲鳴とともに血が飛び散る。

吹っ飛んだ体が、見事扉の開いた牢屋の中に入っていく。

手元にあつた笛は離れ、体とともに宙を舞った。

男は何が起きたのか、自分の身に一体何が降りかかったのか、理解が追いつかなかった。

男は勢いを保ったまま、牢屋内の壁に強く打ちつけられた。

「ぐあ……あがつ……」

折れた歯からも大量の血が噴き出す。

男は揺れる視界で、少女の顔を見た。失念していた少女の顔を。

「この……くそ……が……」

精一杯に毒を吐く男。しかし堪えることができず、吐き終わるより先に意識を失った。

拳を握った少女は、気絶した男に吐き捨てるように言い放つ。

「悪いけど、私の大切な人は返してもらおうわよ」

宣言とともに、エイネは落ちた笛を足で破壊した。

第三節 愛されている少年と裏切られた少女 4

エイネが笛を破壊したと同時に、町の人々の洗脳は完全に解けていた。

「あれ、俺たちは一体なにを？」

誰もが自分のしていたことに覚えがなく、また何故外を徘徊していたのかもわからな
い。

「パパー！ ママー！」

戸惑う彼らの中に親を見つけると、子供たちは一目散に駆け寄った。

安堵から、子供たちの目から涙が溢れている。

「怖かった！ 怖かったよお！」

「お前、急にどうした。ああもう、泣くな。一体なにがあつたていうんだ」

それぞれの親子が再会し、事態は収束へと向かつていく。

地下でも、同様に再会が果たされていた。

「ソラー！ ソラー！」

エイネは傷ついたソラーを抱き起こす。

「よかった。無事みたい」

息はある。ただ意識を失っているだけのようだ。

胸をなで下ろし、エイネはソラを抱えて地上へと向かおうとする。

その際、男の方に目をやった。まだ意識を失ったままだ。

地上では洗脳が解けているはず。その中には町を警護する兵士もいるだろう。彼らに引き渡せば、すべて解決となり、また平穏な日々が戻ってくる。

エイネは念のため、男を拘束しようと考えた。

「ごめん、ちよつとここにいて」

ソラを壁に寄りかけるように寝かせる。

拘束する道具がないため、エイネはナイフを使って服の裾を太い紐のように破いた。

これを二つ作ると、男の手足に縛り付ける。

「よし、つと」

事を終え、再びソラの元に歩み寄った。

「エイネ……う？」

すると意識を取り戻したソラの目が開いた。

エイネはすぐさまソラを起こし、その体を抱きしめた。

「まったく無茶して。でも……ふふ、かっこいいわよソラ」

「く、苦しいよエイネ」

まだ力が入らないのか、声が弱々しい。疲れも溜まっているのだろう。そう思い、エイネは再びソラを抱えて地上へと歩を進めた。

道中、エイネは光が漏れている部屋が気になり、扉を開けてみた。

「——っ!?! ソラ、見ないで」

咄嗟に、自分の体でソラの視界を隠す。

エイネの眼前に広がったのは、惨たらしい光景だった。

部屋中に血が飛び散っていた。

四肢をもがれた少女の頭がある。椅子に縛られた血だらけの少年の膝に置かれている。

他にも地面には色々な人間の部位が散らばっていた。まるで与えられたおもちゃを散らかしたように、無造作に置かれている。

こんな光景、まだ幼いソラに見せられるはずもなかった。

「エイネ……どうしたの? なにがあるの?」

ソラは気になり、体の隙間からエイネの視線の先を見ようとす。が、エイネがすぐに扉を閉めたために見ることは出来なかった。

「ううん、なんでもないわ。気にしないで」

一歩遅ければソラもああなっていたのかもしれない。一抹の恐怖心が、エイネの中で渦巻く。

この時、エイネは気がついていなかった。椅子に縛られた少年にはまだ息があり、目をギラつかせていたことを。

地下から出ると、一人の少女が立っていた。トウネリだ。

「ソラ！ 大丈夫!？」

トウネリは抱えられているソラを見て、すぐに駆け寄った。

「大丈夫よ。ちよつと疲れてぐったりしてるだけ」

「よかったあ。よかったよう」

堪らず涙を溢すトウネリ。

それを見てエイネは微笑んだ。

「あなたは、ソラのお友だち?」

「えっ?」

唐突な問いに戸惑うトウネリ。どう答えていいものかと悩み、答えた。

「あの、えつと……その……友だちになれたらいいなって」

「そっか、うん。じゃあ、これからソラのことよろしくね」

トウネリは小首を傾げる。どこか含みがあるような、そんな気がしたから。

ふと、トウネリは地下の方に顔を向けた。

「あの、パパは……?」

「ん? パパ?」

初めはトウネリの問いがわからなかった。

その視線の先と、意味に気がつくくと、エイネは笑った。

「大丈夫。下でちよつと寝てもらってるわ」

トウネリはその答えに安心した様子を見せた。

(そう、この子はあの男の……)

エイネはトウネリの顔を見た。頬伝いに、涙の跡がくつきりと残っている。

内心、怒りがこみ上げていた。自分の子供がいながら、あんな所業に走った男に対して。

だがそれを表には出さなかった。目の前の少女に良くないと考え、隠した。

「さ、行きましょ?」

エイネはソラを片手で抱くと、空いた手を少女に伸ばした。その顔は笑っている。

「あ、えつと……はい」

差し出された手に、トウネリは少し躊躇う。顔と手を何度か見る。そして同じように笑って手を握った。

外に出たと同時に、警護の兵と思われる男二人が駆け寄ってきた。

手には槍が握られていた。切っ先には微かな血の跡が見える。

「君たち！ 大丈夫かね！」

「子供たちから話しは聞いたよ。ここの主人が人攫いを行ったと」

「どうやら彼らの洗脳も、完全に解けているようであつた。

「その男なら、向こうの地下室に——」

エイネは安心すると、男の居場所を教えるため地下室の方に目をやった。

目を見開いた。何かがある、そんな気配を感じる。

エイネは咄嗟に抱えていたソラを放り投げる。次に手を握っていたトウネリと、警護

兵の二人を突き飛ばした。

振り向いた直後、強い衝撃がエイネを襲った。

「がっ、はっ……!?!」

何に襲われたのか認識する間もなく、エイネの体が宙を舞う。

口から大量の血を巻き散らして、そのまま地面に叩きつけられた。

「ひ、ひい！ な、なんだこいつ！」

兵士が悲鳴を上げたのを聞き、エイネは地面に伏したまま顔を動かした。

視界の中に、得体の知れない何かがあった。

顔は人の女性のものだ。髪が幾つも触手のように蠢いている点を除けば。その先には巨大な蛇の頭や、獅子の頭や、狼の頭など、肉食動物の頭がついている。

上半身も人間のものだが、皮膚が血のように赤く染まり、紫色の血管が浮き出ている。下半身にはイカやタコのような触手が、背には六本のか細い人間の手が生えていた。

「なによ、あれ」

口に残った血を吐き捨て、立ち上がる。

痛みから骨の何本かが折れているのを把握すると、エイネは正体不明の何かを睨む。

「ひ、ひい、ひい……」

座り込んだ兵士の片方は完全に怯えていた。見たこともない化け物に遭遇し、気が動転している。

槍から手を離し、戦意は消失している。

「くそー！ 君たちはすぐに逃げるんだ！」

もう一方の兵士は、槍を手に果敢に立ち向かった。

しかし、槍が突き刺さる一歩手前で、数ある触手により阻まれてしまう。

そして逃がさぬよう、背の腕を伸ばし、兵士の体を力強く掴んだ。

「ぐぎっ……や、やめろ……！」

掴む力があまりに強く、バキバキと骨の折れる音が鳴った。

化け物は「クケケケケケ」と嘲笑うかのような声を出す。そして髪の毛の先についた頭で捕食を始めた。

「ぎゃああああああああつ!!」

兵士の悲鳴が町中に響き渡る。

それに聞いた住人たちも、化け物の存在に気がついた。

見るも無惨な光景が、彼らの目に触れた。

四肢を、髪の毛のそれぞれの頭が食い千切る。男の頭部を、女性の頭部が鋭い歯で噛み砕く。

大量の鮮血が滝のように落ちた。

「ば、化け物だ! なんだあれは!」

「に、逃げる! 逃げる!!」

町が阿鼻驚嘆に包まれた。

各々悲鳴を上げて、化け物から遠ざかっていく。

それを気にすることなく、化け物は捕食を文字通り楽しんでいく。

首から流れる血を、女性の顔が口を開けて飲んでいく。そして大きな口を開け、鋭い歯で残った体を骨ごと咀嚼した。

「あ、ああ……」

仲間を目の前で殺された意気消沈している兵士も、軽々と持ち上げられ同様に捕食されていく。彼はもう抵抗する意思も、悲鳴をあげる気力も失っていた。

「なに？　なんで？」

目の前で起こった出来事に、ソラは驚きと恐怖を隠せずにいた。瞳孔が大きく開いている。呼吸もままならない。

思い出す。あの地下室の最奥で、何かを見た気がしたのを。その正体がこれだったのだ。一体あの男は、トウネリの父親は何をしていたのだ。そんな疑問が纏わり付く。

「うえっ……げえ……っ!？」

遂に耐えられず、ソラはその場で吐き出した。

一方トウネリは青ざめた表情で、声を発せずにただ座り込んでいた。原因は恐怖ではなかった。女性の顔に見覚えがあったのだ。いや、見覚えがないはずがなかった。

「ママ……」

震える唇でようやく出せた言葉が、その正体を物語っていた。

「ママ？　ママ！　なんで、どうして、そんな……!？」

そう、女性の顔はまさしくトウネリの母親のものであった。病に倒れ、死んだはずの。「くそ……そういうことか」

エイネは思わず毒づく。あの男の目的がようやくわかったと。

あの男は餌を収穫しようとしていたのだ。目の前の化け物、魔法生物——“魔物”の餌を。

魔物もまた、使い魔同様ある術式を組むことによつて生み出すことができる。

使い魔とは違い、魔物は魔力のパスを繋ぐようなことはしない。

肉体を魔力で生成するのではなく、実体を持った何かでその肉体を補う。そのためには、餌となる何かが必要だ。

また使い魔と違い、彼らには理性がない。知性はあれど、本能のままにただ暴れ回るだけだと言われている。それが故に、魔物を生み出すことは世界共通で禁止されているのだ。

だがあの男は事もあろうか、死んだ妻を魔物にすることで蘇らせようとした。勿論、それが成功したのは目の前の存在から証明されている。

当然魔物が制御できないことを男は知っていたのだ。だから肉体を用いて作る魔装具を生みだし、それを制御基盤とすることでこの魔物のコントロールを得ていた。

そして魔物の餌として選んだのが、子供の肉体——特に魔力を生成するための機関だった。子供の魔力は少量であれど、大人よりも濃度が高いと言われている。それを餌として与え続けることで、永遠にも近い命を与えようとしたのだ。

エイネは苦虫を噛むような表情で、思い出す。

魔物を制御していた笛は今しがた、彼女の手によって破壊された。もうあれを制御する術は残されていない。

(こうなったらもう、手段を選んでられないわ)

エイネは太腿に付けたナイフに手を掛ける。

「近づいちゃ駄目！」

エイネは叫ぶ。トウネリがさがるように、魔物に近づいていたのだ。

「ママ？ ママなの？ ねえママ、わたしだよ？ トウネリだよ？」

トウネリは必死に呼びかける。

食事を終えた魔物がトウネリの方を向いた。

(まずい、このままじゃあの子が！)

ナイフを抜き、魔物に突っ込もうとする。

が次の瞬間エイネは思わず面食らい、その場に立ち尽くしてしまった。

魔物ははおやが、少女の頭に優しく手を置いていたのだ。

「ママ？」

トウネリの顔に、笑顔が生まれる。

まさか理性があるのか。そんなエイネの考えは、次の言葉で打ち砕かれた。

「オマエ……ウマソウダナ」

言葉を発して、魔物はトウネリの頭を掴んで掲げた。

そして女性の口が、裂けるように大きく開く。その大きさは子供一人を丸呑みに出来るほどだ。

「やだ、やめて……わたしだよママ！ やめてよ！」

何をしようとしているのか理解して、トウネリはせがむように泣き叫んだ。

鋭い歯が、トウネリに近づいていく。

「やだ、やだあ！」

恐怖と悲しみから涙が溢れる。

しかし魔物は躊躇することなく、口に入れようとしていた。丸呑みにしようとしていた。

「くっ！ やめなさい——」

魔物の行動に気を取られたエイネは、遅れた初動を取り戻そうと地を強く蹴ろうとした。

が、何かが足に纏わり付いた。あの魔物を触手だ。

魔物の視線がエイネに向けられる。その瞳は、笑っていた。

「しまっ——!?!」

触手によりエイネの体は軽々と持ち上げられる。そしてそのまま、背後にあった家屋

へと投げ飛ばされた。

「ぐっ……くそ……っ！」

パラパラと木片が落ちる。

すぐに身を起こし、エイネを見た。トウネリの足がもう、魔物の口の中に入っているのを。

(ダメー！ ここのからじゃ間に合わない！)

今あの少女を助けられる者はもういない。そうエイネが思ったとき、唯一動いた者がいた。

「トウネリを……離せ……」

ソラだ。ソラが立ち上がり、腕を前に突き出していたのだ。先程まで吐いていたためか、呼吸は整っていない。

「ダメよ、ソラー！ 逃げて！」

エイネは叫んだ。しかしその声が今のソラに届くことはない。

ソラは怒りに震えていた。

あの男は、娘であるトウネリをも餌にしようとした。姿が変わってしまった母親も、理性を失い、自分の娘を躊躇いもなく捕食しようとしている。

本当の父親とも母親とも過ごしたことの無いソラにとって、それは許しがたい現実

この叫びが相手に届くはずがないとわかっていても、相手が反省を示せる存在ではないとわかっていても、叫ばずにはいられなかった。

本当の親ではない誰かに育てられたからこそ、本当の親ではない誰かに愛されているからこそ、その叫びはソラにとって大事なことだった。

「グギャアアアアアアア!!」

魔物は気にも留めない。食事の邪魔をされ、怒りのままにすべての触手を伸ばしてソラに襲いかかる。

「悪いけど、その意見には同感しかないのでよね」

しかし届くことは無かった。

一閃。一本のナイフの、たった一閃で、エイネはすべての触手を薙ぎ払った。

「ソラ、その子を入れて逃げなさい」

「エイネ！ でも！」

「こういう時くらい言うこと聞きなさいよバカ。その子のこと、守りたいと思ったんでしょ？」

言われ、ソラはトウネリの方を見る。

泣いている。顔を手で覆い、限界を超えた悲しみと恐怖で声も出せず静かに泣いている。

どれだけ彼女の心は傷ついているのであろう。どれだけ悲痛な思いが、彼女の心の中を巡り回っているものであろう。

ソラにはわからない。それでも彼女を、放っておけるはずがなかった。

「ごめん。すぐ、戻るから！」

ソラはトウネリを抱えて離れる。安全な場所に避難させるために。

その背中を見送り、エイネは呟いた。

「だから戻ってくるなつての」

エイネは少し笑っていた。

「さてと」

魔物の方に向き直る。見たところ再生能力があるのか、エイネが切り落とした傷口は新たな触手に生え替わり、元に戻っていた。

「トウネリちゃん、ていうのね……あの子」

エイネはナイフを構える。

呼吸を整えながら、目の前の魔物を見据える。

「悪いけどこれはもう、あなたの知るお母さんじゃないわ」

元は娘を愛する母親だったものを見据える。母親の代わりに一人の少年を育ててきた少女が、鋭い眼光を向けて。

「だから私が、こいつを止めてみせる」

かつて母親だった魔物と、凶らずも母親となった使い魔の戦いが——始まった。

第四節 最初の出会い
は光となつて 1

ソラは走る。両手でトウネリを抱えて。

背後では、戦闘の音と魔物の叫びが響いている。

町の人々は魔物から遠く離れたところに避難しているようだった。

普段なら付いているはずの家屋の明かりがない。人の気配が、一切感じられない。

「見えた！」

ソラの視界に、住人の集団が入ってきた。彼らが向かったのは、どうやら警護兵の駐屯所のように、押し寄せる波を抑える兵士の姿もあった。

人々の顔には、不安が現れている。中には「あんな化け物、どうするんだ！」と叫び声を上げる者もいる。

「ごめん、もうちよつと揺れるけど我慢してね」

謝りながら、ソラはトウネリの方を見た。

トウネリは呆然とソラの顔を眺めている。その目からは、止めどなく涙が溢れている。

「あの、すいません！ 誰かこの子をお願いできますか！」
集団に合流し、ソラは叫ぶ。

「トウネリちゃん！」

「おお、無事だったのか」

トウネリの姿を見て、老夫婦が駆け寄ってきた。

「どうやらトウネリの言っていたお爺ちゃんとお婆ちゃんのだとわかると、ソラは彼女の体を二人の前に下ろす。

「大丈夫かい？ 怪我はないかい？」

老夫の問いに、トウネリは小さく頷く。

「ああ、可哀想に。こんなに泣いて」

老婆がトウネリの体を優しく抱きしめる。

「よかった。トウネリにはまだ、大切に思ってくれてる人がいるんだ」

ソラはその光景を、安心した表情で見っていた。

「君がこの子を助けてくれたんだね、ありがとう」

「いえ、ボクはただその……友だちを助けたいと思っただけですから」

「それでもいいんだよ、ありがとう。こんなに小さいのに」

ソラは照れくさそうに俯く。

そんなソラの前に、一人の女がやってきた。少し裕福そうな格好をしている貴婦人だ。

「ねえ、うちの子は？　うちの子はどこなの!？」

どうやら情報は拡散し、すでに事の顛末が知れ渡っているようだった。

そしてこの女性は、母親のようである。

問われて、ソラは思い出す。最初に連れて行かれ、救うことの出来なかった兄妹のことを。

どう答えるべきか迷った。だがどれだけ嘘を取り繕おうと、現実には覆らない。

「……ごめんなさい」

ソラは一言、こう言うしかなかった。

「ごめんなさいって、どういうことなの？　ねえ、どういうことなのよ、答えなさいよ！」

「お前、止しなさい」

興奮し始めた女性を、一人の男性が止めに入った。彼が夫のようである。

「あなたは黙ってて！　ねえ、うちの子はどこなの！　連れてきなさいよ！」

癩癩を起こす女性に対し、ソラは俯くことしかできない。

彼らを連れてくることなど、もう叶わないことだ。故にただ「ごめんなさい」と言うしかなかった。

「どうしてよ！ どうして他の子は助けたくせに、うちの子は助けられなかったのよ！」

「この子だつて精一杯やったんだ。そう責め立てるな。相手は子供だぞ」

「じゃあどうしろつて言うのよ！ ただうちの子が死にました、はいそうですかつて言えつていうの!?! 言えるわけないでしょ！」

「いい加減にしろ！ 私だつて辛いんだ。頼むから抑えてくれ」

繰り返し広げられる言い争いに、ソラの胸は締め付けられる。

あと一步でも勇気を出していれば、彼らの命も奪われずに済んだかもしれない。

拳を握り、強く唇を噛み締めた。

「ソラを……責めないでください」

ふと、か細い声が聞こえた。

「ソラは何も悪くない。悪いのは……わたしだから」

声は、トウネリのものであった。

トウネリは女性の前に立つと、震えながら俯く。まるで何かを求めるかのように。

「全部、わたしが悪いんです。わたしがパパの言葉に従ったから」

「パパ？ そうか。そういえばあなた、あの男の娘だったわね」

女性がトウネリを見下ろす。その目には、怒りが垣間見える。

「待つておくれ。その子はなにも——」

「いいの、お婆ちゃん。私は罰を受けなきゃいけないの。人を殺した罰を」

女性は手を大きく振りかぶった。

「おい、お前！」

男性が引き留めようとして、止まった。

何かが、自分の頭の上に落ちてきた。トウネリは、顔を上げて女性を見る。

女性は泣いていた。自分が流したのと同じように、溢れんばかりの涙が頬筋を伝っていた。

「返して……返してよ……うちの子たちを……！」

女性はわかってているのだ。子供である二人を責めても、どうしようもないのだと。ただやり場のない怒りと悲しみの捌け口が欲しかっただけだ。

故に、制裁を加えることができなかった。できるはずもなかった。この少女の気持ちを考えれば、そんなことが許されるはずもないと。

女性は膝から崩れ落ちると泣き喚いた。

「お前……」

夫である男性は、女性の肩に優しく触れた。すると女性はそれにすがり、男性の胸で泣いた。

ソラとトゥネリは各々葛藤していた。片や救うことのできなかつた人間として。片や加害者の娘として。

子を嘆く夫婦の姿を見て、居たたまれなさを感じながらも、ただ立ち尽くすしかできない自分に弱さを感じていた。

「グギャアアアアアアア!!」

不意に、悲鳴にも似た、野太く一際大きな叫び声が響き渡った。

何事かと、聞いた全員が声の方を見る。

「なんだ、あれは……?」

誰かが呟く。

巨大な何かがいた。その何かは、あの魔物の姿をしていた。

「エイネ?」

ソラが呟く。

おかしい。あの魔物はあんなにも巨大な姿をしていなかったはずだ。大きさは大人になった女性ぐらいのものだったはず。なのに今視界に映っているのは、まるで高くそびえる時計塔のように大きくなっているではないか。

ソラは目を凝らした。

そして見つけてしまった。巨大な触手に縛り上げられ、苦しそうに悶えるエイネの姿

を。

「エイネー！」

ソラは駆け出す。あの巨大な魔物のいる方向に。

「君、待ちなさい！ 君！」

誰かが呼び止めている。だがソラにとっては些細なことだった。

ソラは走る、ひたすらに。

（嘘だ、嘘だ！ エイネ……！ エイネー！）

「いやあああああーっ!!」

魔物の下に着いたのと同時に、エイネの口から大きな悲鳴が上がった。

「エイネー！」

魔物は楽しそうに笑みを浮かべ、悲鳴を聞いていた。

そしてさらに強く縛る。

骨が軋む。肉が裂け、血が噴き出す。血が入り交じった胃液が逆流し、口から泡のよ

うに溢れ出す。圧迫感が、呼吸を奪う。

エイネの意識はもう風前の灯火だった。

「やめて……やめてよ！ エイネー！ エイネー！」

漸くエイネは叫び声に気がついた。

「ソラ……逃げ——」

言葉が途切れる。

魔物が突然拘束を解いたのだ。

エイネの体が宙に浮く。

エイネは魔物の方を見た。

笑っている。まるで嘲笑うかのように。

そして魔物は宙に浮いた体に巨大な触手を打ちつけた。

「エイネ!？」

エイネの体は悲鳴を漏らす間もなく、地面に叩きつけられた。

その衝撃は、地面を抉るほどのものだった。

大量の血がエイネの全身から飛び散り、赤い血だまりを作る。

彼女の意識は完全に途絶えていた。

「あ……あああああああ!!」

ソラの悲痛の叫びが闇夜の空に響き渡った。

◇

エイネと魔物の戦闘は凄まじいものだった。

魔物は形の反面、素早い動きが可能。触手を捕食のためだけでなく、それを利用した動きをすることで相手の意表を突く動きが得意のようだ。

一方のエイネは、万全に近い状態。肉体に強化の魔法を掛け、従来以上のスピードを出して魔物の攻撃に対抗する。迫りくる触手をすべてナイフ一本で対処し、腕による攻撃はすべて身を翻して躲した。

両者一步も譲らぬ戦いだが、エイネの方が分が悪かった。

魔物の動きは単純だ。すべて読み切ってしまうえば、被弾する恐れは少ない。

「光よ……その存在で魔を払い、切り裂けー」

エイネの詠唱とともに、ナイフの切っ先から光の斬撃が放たれる。

それらは魔物の腕、触手、皮膚を切り裂いていく。

動きは単純。だが傷ついた側から、魔物の傷口は元通りに治ってしまう。そのため現状この魔物を倒す術を見つけれられずにいるのだ。

魔物の攻撃を躲しながら、エイネは思考する。

(こいつ相当魔力機関を食らって吸収してる。並大抵の攻撃じゃ倒しきれない)
下半身の触手が足下を狙って伸びてきた。

エイネはそれを跳躍して躲す。

その隙を狙ってか、上半身と背中の手、髪の毛にあたる触手が迫り来る。

それをエイネは空中で体をひねって、ナイフから斬撃を飛ばして切り落とす。

「紅蓮の業火よ、我が身に降りかかる災厄を焼き払え……！」

さらに傷口目掛け、炎の球を数発撃ち放った。

痛覚はあるようで、傷ができる度に魔物は悲鳴を上げて仰け反っている。

しかしどれも致命傷にはならない。傷口を焼けば再生を阻止できるかと目論んでいたが、効果はない。焼けたとしても、すぐに再生し元の形に戻っている。

（魔力がある限りこいつは再生する。私の限界が来るか、こいつの魔力が底をつくかが分かれ目……かしらね）

着地して、エイネは距離を取るために後ろに跳んだ。

逃すまいと、魔物は弾かれた弾丸のようにエイネに迫る。

「まったく面倒なやつね！ 本当に！」

エイネは素早く反応し、突進を高く跳び上がって躲す。

勢いを殺せなかった魔物は、背後にあった家屋に激突した。

エイネは魔物との攻防の間に深く観察していた。

再生箇所が多いことから、この魔物が再生する際に必要とする魔力も必然的に多くなるはずだ。このまま削っていけば、魔力の消費を促すことはできる。

一方で見た目からでは魔力量を測ることはできない。どれだけ内包しているか、という計測をする方法は未だに発見されていないのだ。目測などでは不可能といえよう。

つまり、下手をすれば自分が先に限界を迎えてしまう。そうならないためにも、何か手を打つ必要があった。

(でも考えられる手段なんて、ひとつしかないわよね)

エイネは苦笑する。

魔力を生成するための核とも言える場所。そこに深い傷を負わせれば、魔力の消費を今以上に促せるはずだ。攻撃を躲しながら、その場所を探す。

考えられる場所は脳天、あるいは上半身が人体であることから心臓付近。これら目掛けて、まずは仕掛けるしかない。

「主よ……我が肉体に加護を……」

強化の魔法を重ね掛けし、エイネは地面を蹴って駆け出した。

まず狙ったのは心臓部。大概の人間はここに魔力生成機関を保有している。稀に心臓とは反対側にその機関があるものもいるが、それを考慮したとしても、両胸を一気に切り裂けばいい。

「グギャアアア!!」

目的を理解したのか、魔物はすべての触手を使ってそれを阻止せんとした。

エイネは冷静に対処する。

最短距離で行くために、自分には届かないと判断した触手は躲し、届きそうなものは切り裂く。

魔物は腕を伸ばして掴み掛かるが、これに対してもエイネは冷静に対処する。

今までの動きで、この魔物は速さはあれど細かい動きが苦手だとわかっている。同時に腕を伸ばしたとなれば、向かってくる場所は一点に集中するはず。エイネはその瞬間を見極め、屈むことで躲した。

(よし、これで届く！)

ナイフが当たる距離まで来た。地面を蹴り、エイネは腕を伸ばして魔物の心臓部と思われる場所——左胸目掛けてナイフを突き出す。

「グギャアアアアアアアアッ!」

魔物は一際大きな悲鳴をあげた。

エイネはそのまま、右胸目掛けて一気に切り裂いた。

血が噴き出す。その血は人や使い魔のそれとは違い、紫色に変色していた。

「ぐあ……熱っ……!」

血は焼けるように熱かった。

その熱さに思わずエイネは力を緩めてしまう。顔や腕に火傷を負い、堪らず距離を

取った。

血は確かに出た。その出血量は、人間が心臓を刺された時と同等といえる。

しかしどういいうわけか手応えがない。魔物の上半身の中はまるで空洞のような感覚だったのだ。

(違う！ 核はここじゃない！)

体勢を整え直そうとするエイネだったが――

「がっ……!?!」

腹部に衝撃を感じ、口から血を吐き出した。

「ぐあ……!?!」

魔物の腹を裂いて、腕が突き出ていた。突き出た腕は彼女の腹を捉えて、押し込んで
いる。

「がふっ……!?! ぐああっ!?!」

逃げようとする体を、背中の五本の腕が掴んで離さない。

このまま体を拳が貫いてしまいかねない程に、力が強まっていく。

「ぐあっ!?! が、あああああっ!?!」

苦しむ姿を見て、魔物は愉悦に浸っていた。にやにやと、口元に笑みを浮かべている。

そして拘束を離し、まるで弓を放つかのようにエイネの体を弾き飛ばした。

弾かれたエイネは地面を跳ね、背後の家屋に直撃する。

木造家屋とは違い、直撃した家屋はレンガで出来ていた。

「がっ……あ……」

強い衝撃が、エイネを襲う。

(これは……まずい……わね……)

意識が揺らぐ。体が重い。衝撃に耐えられず、ナイフも手放している。

エイネは追い込まれていた。

(参ったわ……格好つけといてこれか……)

可笑しくなり、エイネは笑みを溢す。

このままでは命の危険があるというにも関わらず、笑いが出る。

力を振り絞り、血反吐を吐きながらも身を起こし、魔物に視線を向けた。

「ははっ……なによそれ……」

さらに笑えてくる。

魔物はでかくなっていた。その大きさは、家屋など小さく見えるほどに巨大だった。

事もあるうか、エイネの一撃はただ火に油を注いだに過ぎなかったのだ。

エイネの開けた傷口を治すために、魔物は多くの魔力を注いだ。その結果流れる魔力の量に合わせて、体が膨張し始めたのである。

魔物が傷ついたエイネを見下ろす。

笑っている。格好の獲物となった彼女に向けている。

そして下半身の巨大な触手で、エイネの体を持ち上げた。

(ごめんソラ、ちよつと無理かも……)

抗う術はなかった。力が入らず、ただされるがままに拘束される。

エイネは走馬灯のように、ソラの笑顔进行を思い浮かべた。それに対し、笑みを溢す。

だがその笑みは長くは続かなかった。

触手がエイネの体を強く締めつけ始めたのだ。

「……あつー！」

痛みと苦しさに、エイネの顔が歪む。上空を見上げて、苦しさに悶える。

締め上げる力が強まった。

骨が軋む音が鳴り始める。血管が裂け、皮膚が破け、そこから血が流れ出す。

「がっ……あ……?!？」

さらに締める力が強まった。

エイネの口から泡のように血が入り交じった液体が溢れる。

「いやああああああああーっ!!」

力に耐えられず、骨が砕けた

痛みに耐えられず、エイネは悲鳴を上げる。

目から涙が溢れ、恐怖でどうにかなくなってしまっただった。

それでも魔物は力を緩めなかった。むしろ面白がって、さらに力を込めている。

「やめて……やめてよ！ エイネ！ エイネ！」

もう意識を保っていられなくなったその時、エイネの耳に声が届いた。

朦朧とする視界に、必死に泣き叫ぶソラの姿があった。

「バカ……なんで戻ってきてんのよ」

掠れた声で、エイネは眩く。

（ああでもそうか。私ちよつと期待してるのかな？）

そして微かに笑みを浮かべる。

（あの子みたい……かっこよく助けてくれないかな……つて）

エイネは自分の思考に嫌気がさしていた。こんな状態であるのに、ソラを見るとつい逸れた考えを行ってしまうことに。

「ソラ……逃げ——」

逃げて——そう言おうとして、彼女の口は動きを止めた。

突然、魔物の力が弱まったのだ。

「……うえ？」

思わずエイネは魔物の方に顔を向ける。

魔物の口が動く。まるでエイネだけに伝えるかのように。

「アツチノホウガ、ウマソウダ」

「——っ!?!」

瞬間、今までに感じたことのない痛みと衝撃に、ぶつりとエイネの意識は切れた。

第四節 最初の出会いは光となって 2

ソラは目の前の現実を直視できなかつた。

血だらけになったエイネが、地面に横たわっている。

「あ……あ……」

ゆつくりと近づく。

「エイネ？ エイネ？」

しやがみ込み、エイネの体を揺さぶった。

「エイネ？ ねえ、エイネってば」

名前を何度も呼ぶ。信じたくなくて、ひたすらに何度も名前を呼ぶ。

ヌメツとした何かに触れて、ソラは自分の手を見た。

血だ。赤い血がべつとりと手に付いている。紛れもない、エイネの血だ。

「ねえ、やだ。やだよ」

体を揺さぶり、エイネを起こそうとする。毎朝、寝坊する彼女を起こすように、何度も名前を呼んで。

ソラの気は動転していた。どうすればいいのかわからない。

このままでは、エイネが死んでしまう。そんな思いが、不安と恐怖を——絶望と孤独を与えた。

「誰かあ……誰かエイネを助けてよ……」

助けを呼ぶ。しかし誰一人として、その場に近づく者はいなかった。

「おかあさん……おかあさん、エイネを助けてよ……！」

母親にもすがる。だが、その母親も来る気配はなかった。

絶望するソラに、魔が忍び寄る。魔物の持つ触手が、ゆつくりと。

そしてソラの体を優しく包むようにして、巻き付いた。

体が宙に浮く。エイネから徐々に離れていく。

ソラは手を伸ばした。横たわるエイネに、手を大きく伸ばした。

「誰か、誰かエイネを助けて」

自分のことなどどうでも良かった。大好きなエイネの命が助かれればそれでいい。だから小さくとも声を発した。助けを求めた。

だがソラの声は誰にも届くことはない。聞いているのは、彼を食わんとする魔物だけだ。

魔物はソラを腹の中に入れようと、ゆつくり大きな口を開けた。

——何かが、ソラの中で鼓動する。

「エイネ……やだよ。だつて約束したじゃんか……」

——何かが、ソラの中で震える。

「ボクを一人にしないつて、約束したじゃんか」

——何かが、ソラの中からこみ上げてくる。まるで、鎖を引き千切るように。

「どうして……こんなことに……？」

——何かが。

「お前が……エイネを傷つけたのか」

——ソラの中で爆発した。

直後、魔物の触手が何かに切り刻まれた。

突然のことに、魔物も驚きを隠せない様子だ。悲鳴を上げることさえ忘れている。

魔物は見下ろす。

ソラはいつの間にかエイネを抱えて移動していた。

魔物は二人共々捕食せんと、口を大きく開けて躍りかかった。

二人共食らうことが出来た。魔物はそう思ったはずだ。

しかし口を閉じた瞬間、魔物の頭が謎の爆発ともに吹き飛んだ。

頭を吹き飛ばされた魔物は、ぐつたりと地面に倒れる。

ソラは気にすることなく、エイネを抱えて歩いた。

エイネを離れた家屋の壁にもたれさせると、ソラは魔物を見据える。

頭を吹き飛ばされたはずの魔物は、再生していた。

「グギャアアアアアアア!!」

魔物は叫び声を上げた。

魔物の傍らに、エイネが使っていた短剣が落ちていた。

ソラはそれを拾うと、魔物を睨み付けた。

「五月蠅い……」

たった一振りで、無数の斬撃が飛んだ。それらは魔物の体を引き裂き、いとも容易くすべての触手と腕を切り落とした。

「ギャアアアアアアア!!」

魔物が悲鳴を上げる。切られたところが、再生しようとしていた。

「五月蠅いって、言ってるだろ」

再び斬撃が放たれる。今度は魔物の頭を切り落とす。頭が無くては、叫び声も上げることも出来ない。

再生した触手たちが、ソラに襲いかかるが、触れる手前で突然発火し爆散する。

魔物を待ち受けていたのは、一人の使い魔にしたのと同様、圧倒的な力でねじ伏せら

れることだった。

再生しては切り落とされ、また再生をしては爆散し、また再生をしては——を繰り返す。

頭の方も再生する暇を与えず、爆発と切断が繰り返された。

一方的だった。もしその場に居合わせた者がいれば誰もが口にするのであろう。一体なにが起きているのかわからない、と。

ソラはもう無意識に動いていた。目の前の化け物に、ひたすら魔法を放つ。その爆風が建物を破壊しようと構う事なく、敵を排除することだけを考える人形のように。

「いい加減、しつこいよ……お前」

ソラの背後に、炎で出来た巨人が現れる。

巨人は魔物を取り込むと、燻すように燃やす。

燃やす間も熱量はあがり、次第に赤から青に変わる。そして巨人は雄叫びに似た音を上げた直後破裂した。

魔物の一部がそこら中に飛び散る。血も、腕も、触手も、頭も、体の肉片も、何もかもがガラクタのように町中を飛び回り落下する。

魔物の体は小さくなっていった。保有する魔力以上の再生を繰り返したためだ。今はもう、ねずみ程の大きさまで縮んでしまっている。もはや人と認識することさえ出来な

くなっていた。

「ギイ……ッ！　ギイ……ッ！」

なんの鳴き声か、もう魔物は空気を震わせるほどの声をあげることが出来ない。

ソラは小さくなった魔物に近づくと、

見下していた。普段の優しい表情からはとても想像のつかないほどに、憎悪と怒りで満ちた表情をしている。

そして告げる。

「……さようなら」

ソラは小さくなった魔物を踏み潰し、何度も念入りに地面にこすりつける。

魔物はもう再生する力を失い、灰となっていた。

斯くして、巨大な魔物は一人の子供の手により容易く葬られた。

事が終わり、ソラはエイネのいるところに歩み寄る。ゆつくりと、しかし覚束ない足取りで。

意識が混濁していた。度を越えた魔力の消費故か、それとも得体の知れない謎の力に蝕まれた故か、ソラは虚ろとした目で前を見つめている。

「エイネ……待ってて、今助ける……から」

そしてそのままソラは意識を失い倒れた。



風が頬を撫で、冷たい何か顔に落ちたのを感じ、エイネは目を開けた。

「ぐあ……痛っ……！」

全身に痛みが走る。

エイネは生きていた。魔力もまだかろうじて残っている。奇跡的にと云っていいだろう。普通ならば、彼女の体はもう消えていてもおかしくはなかった。

首から下げた魔力結晶に目をやる。魔力を完全に失い色が消えて白くなっている。生命線は経たれ、告げられた余命を生きることさえ、もう不可能だろう。

「そうだ、ソラは……？」

自分の身を案じている場合ではない。エイネは体を引きずって移動する。

ぼやけた視界に、蒼穹の髪の毛が微かに映った。

「ソラ……！ ソラ……！」

上手く声を出せない。酷く掠れた声だ。叫びたくとも、エイネにはそうするだけの力が入らない。

彼女は這いつくばり、必死に近づいた。

「良かった……息はしてる」

体に触れ、息をしていると分かるとエイネは安堵の息を吐く。

「そうだ、魔物は？ 魔物はどこに？」

「ここでようやく、エイネの視界が回復した。」

「なに、これ……？」

眼前に広がった光景にエイネは啞然とする。

多くの建物が倒壊していた。中には火が燃え広がっている物もある。

その中に魔物のもものと思われる部位が幾つもあった。光の粒子を出しながら、体の一部が消えていく。地面に付着した紫色の血が煙を上げているが、どこにも魔物の姿がない。

一体この場所で何が起きたのか、エイネは想像することが出来なかった。

唯一、思い当たることがあった。

「まさか、ソラが……？」

そう、ソラだ。ソラがこの惨状を、魔物と戦うことで巻き起こした。そうとしか考えられなかった。ソラが今眠っているのも、そのためだと。

エイネは動揺する。一体彼のどこにこんな力があつたのかと。

しかし恐怖はない。むしろ誇らしかった。自分が愛する者に秘められた何かがある

のだと思うと、エイネは少し嬉しかった。

「ほんと、あの人の息子よね」

くすりとエイネは笑う。

成長すれば、母親と同じくらい力を振るうようになるのかもしれない。あるいはそれ以上の力を秘めているのかもしれない。

ならば自分はどうするべきか、考える。自分の命は残り少ない。この少ない命で何かを成すのか、命を繋げ生きることと何かを成すのか。

今のエイネにはもう、答えは出ていた。

「ごめんねソラ。約束は……守れないや」

この言葉が、すべてを物語っている。

エイネはもうこれ以上生きることを考えていなかった。ソラと契約するという選択肢は、もう消えている。それがソラを旅立ちへと導く手段であると。

「なにが約束だ」

声に、エイネはハツとする。

聞こえた方向を見ると、あの男が立っていた。地下室に拘束したまま、放置されていたあの男が。

「このくそ女……てめえのせいで俺の研究が全部無駄になっちゃった。どう落とし前つ

けてくれるわけだ、ああ？」

エイネは立とうと力を振り絞る。が、敵わずに膝を立てることさえできない。

男は笑うと、エイネの髪を引っ掴んで無理矢理立たせた。

「うああっ！」

痛みにエイネが悲鳴をあげる。

もう限界に近い彼女に、痛みを耐えるだけの余力は残されていなかった。

そのまま男は暴行を加えた。

「やめっ……っ！」

「ああ？ ああ、あの威勢はどうしたよ。おら、どうしたよ！」

男は腹を蹴り、顔面を何度も殴り、よろけた背中に両腕を思い切り叩きつける。

エイネは地面に突っ伏した。苦悶の表情を浮かべて、咳混じりの呼吸をする。

「お前のせいで、俺の努力が全部水の泡だ！」

「ぐあっ……っ！」

男は伏したエイネを、蹴りを入れることで仰向けにした。

続けて胸と首の付け根あたりを踏み、ねじるように動かす。

器官を圧迫され呼吸を阻害されたエイネは、手でなんとかその足を退けようと藻掻

く。が、退けるだけの力がないのは明白。ただ男の足に弱々しく触れてもがくだけだ。

それを面白がった男は、今度は何度も踏みつけた。そのたびにエイネの口から、短い悲鳴が漏れる。

一方、眠っていたソラはエイネの悲鳴を聞き目を覚ましていた。

「エイネを……助けなきゃ」

身を起こし、腕を突き出して開いた手のひらに魔力を集中させようと試みる。

「あれ？　なんで？」

しかし魔法を放つための魔力は集まらなかつた。それどころか微量の魔力さえも感じられず、とても魔法を撃てる状況ではない。そもそも自分の中に魔力が感じられないのだ。

「なにか……なにか他に……！」

辺りを見回すとソラの視界に一振りの短剣が映る。

ソラはすぐにそれを拾うと、男を睨みつけた。これで男を刺せば、エイネを救えるはずだと。

（ダメ！　お願いソラ、やめて！）

エイネも気がついていた。ソラが短剣を取り、今にも男に飛び掛かるとしていることを。しかし声を出すことができない。叫ぶだけの力が出せない。

「エイネを離せええーッ!!」

ソラは叫んだ。短剣を握りしめた手は震えている。

「あ？　なんだガキ、起きてたのか。お前にも後で——てなんのつもりだ？」

男は、ソラが短剣を構えて突進していることに気がついた。その速さにはおよそ子供が出すとは思えない力が加えられている。

「うわあア—っ!!」

人を刺したことがないソラは、目を瞑り、刺さる瞬間を見まいとして顔を地面に向けた。これが悲劇を生むとは知らずに、男目掛けて短剣を突き出した。

「くそ……！　間に合わ——」

次の瞬間、男は息を呑んだ。

「ぐっ……がはっ……！」

血を吐く音を聞き、ソラは顔をあげる。

「え……？　なんで？」

守ろうとしていた人の顔が、そこにはあつた。

「なんで、どうして？」

ソラの顔が青ざめる。膝から崩れ、目の前の現実を拒んだ。

「だって、あなたに誰かを傷つけるなんてこと……してほしくないから」

エイネは微笑む。

彼女は最後の力を振り絞って男を突き飛ばし、ソラに覆い被さるようにして身を乗り出していた。

その結果、短剣はエイネの胸を貫いていた。

愛する少年が他人を傷つけないために唯一思いついた行動がこれだった。

ソラの手が短剣から離れる。手は流れた血によって赤く染まっている。

「なんで？ だってボクは——」

ソラは首を横に振り、現実を否定する。これは夢だと。幻だと。

しかし非情なことに、紛れもなく現実だ。ソラはよりにもよって、最愛の人を刺してしまったのだ。

「わかってる。あなたが私を守ろうとしてくれたのは十分わかっている。だけど私は、あなたのそんな姿を……見たくないの……」

掠れた声で、エイネは言う。

「だってあなたは……とつても優しい子だから……」

ソラの体を抱きしめる。弱々しくも、しっかりと。

「ふはっ！ ふはははははは！ 事もあろうか俺を庇いやがったこの女！」

男は笑った。滑稽だと。茶番だと。どれだけの思いで取った行動かも考えずに、ひたすらバカにする。この男はもう、救いようのないところまで来ていた。

だからエイネはソラを止めた。ソラの手を、こんな男の血で汚すわけにはいかない。この男は、この男だけは絶対に自分の手で仕留めなければならぬ。

「誰が……あんたを庇った……ですって？」

「だってそうだろう？ わざわざガキのナイフに当たりに行ってよお？ さてはお前俺に惚れたか？ ふはははははは！」

エイネは笑みを浮かべる。

「そんなわけ……ないでしょう？ 誰が……お前みたいな奴に——」

そう。そんなわけがないのだ。自分にはもうすでに心に決めた者がいる。だからこの行動だ。エイネは男を嘲笑う。

「私が愛する男は……ただ一人だけ——ソラっていうんだから」

エイネがそう言ったのと同時に、背中から光の斬撃が伸びる。

エイネの体を貫いた斬撃は、血しぶきを上げながら男の左目に直撃。目を抉った。

「ぎやあああああ!!」

目を潰された男は、悲鳴を上げて地面を転げ回る。抑えた手が赤く染まってもなお、血が流れ続けている。

「あんたのその腐った目を潰すのは……私で十分よ」

エイネは吐き捨てるように言う、地面に横たわる。もうこれ以上の力を出せない。

出し切ったと。

「くそ！ くそっ！ くそおおっ!!」

男は叫び、懐から何かを取り出した。それは朱色に光る魔力結晶だ。

男がそれを地面に叩きつけると、突然足下に魔方陣が描かれる。そして光に包まれ、男の姿は消えた。

一連の流れを見ていたエイネは思わず嘆息する。

「転移結晶……そんなものまで……持ってたなんて」

ひゅうひゅうと呼吸が音を立てる。

エイネは限界を悟った。今の攻撃で、魔力が完全に無くなったのを感じたのだ。あとはもう、維持できなくなった体が崩壊していくだけだ。

「ごめんね、ソラ。約束守れなくて」

エイネの言葉に、安心していったソラは我に返って彼女を見た。

体が、消え始めていた。

「エイネ？ どうして？ 体が……」

何も知らないソラは、必死にエイネの体を元に戻そうと触れた。

手のひらからありつたけの魔力を流し、回復魔法を使う。しかし消えていく体を元に戻すことはできない。

「酷い女だよ、私。ソラに怖い思いさせてさ。ほんと、酷い女だ」

「違う、違うよ。エイネは酷くないよ。ボクが！　ボク、ボクのせいだ……！」

ソラは魔法を使いながら泣きじゃくる。エイネをなんとかしてでも救おうとしている。

その姿はエイネにとって、健気で誇らしいものに見えた。

「バカね。誰もあなたのせいだなんて、思っていないわよ」

「でも、でも！　ボクが、ボクが……っ！」

エイネはまだ消えていない手で、ソラの涙を拭う。

“——ああ、上手くいかないなあほんと”

エイネは笑う。精一杯笑う。

本当は上手く躲すつもりだったのに、と。小さく呟く。

「ソラ、笑って？　泣いた姿を見たまま、私逝きたくないな……」

「笑えるわけない！　笑えるわけないじゃんか！」

ソラは必死に魔力を注ぐ。無駄だとは思えない、きつと助けられると信じて、魔力を

注ぐ。

「待ってて！　絶対、絶対に助けるから……っ！」

この時もソラが使い魔に関する知識を持っていたならば、あるいはエイネを救うことができただろうか。

だがソラにはその知識がない。彼が読んだ本の中に、使い魔に関する記述は一切なかったのだ。

いや、そもそも知識があつたとしてもエイネを救うことは出来なかつただろう。残酷にもソラのひとつ突きは、エイネの核を完全に破壊してしまつていたのでから。

「大丈夫、ボクが絶対に。絶対に助けるから！」

「ふふふ、ありがと。嬉しいなあ、愛する人にこんなに思つてもらえるなんて」

「何言つてるの、何を言つてるのさ！」

ソラはエイネの言葉の意味が理解できなかつた。

対して、エイネは終始笑つていた。死の間際だというのに、幸福感で満たされていた。

「ソラ……私、あなたといられてすごく幸せだったわ。ありがとう」

「嫌だ！ ボクを置いてかないで！ 一人にしないでよ！」

「大丈夫。あなたは一人にはならない。これからもつと沢山の人に出会うから」

「エイネがそこにはいないんじや、そんなの意味ないよ！」

ソラの叫びが、エイネの心を抉る。こんなにも彼は自分に依存していたのかと。

しかし掛ける言葉を考えるだけの余裕はなかつた。今言えるのは、自分が伝えたいことだけ。

「私ね、ソラの綺麗な髪が好き。優しい声が好き。ソラの全部が好き」

限られた時間の中、エイネは思いを繋ぐために言葉を紡ぐ。

「なにより私はソラの笑顔が大好き。だからその笑顔を、もつと沢山の人に見せてあげて？　そしてもつと沢山の人を笑顔にしてあげて？　今日あなたがしたことを、これからもつと沢山の人にしてあげるの」

「いやだあ、エイネとずっと一緒にいるの。エイネがいなきややだよお！」

「もう甘えん坊さん。そんなに甘えてると、いつまでもかっこいい男になれないぞ」

「ならなくていいよお……っ！　そんなのに、ならなくていいからあ……っ！」

「もう……なつてよ……お願い……」

消滅は胸から上が完全に消えるほどに進行していた。

エイネの目は、もう何も映さなくなっている。

「ああ、楽しかったなあ……」

エイネは天を見上げて、思い出す。ソラとの数々の思い出を。楽しいこともあれば、時には不安になることもあった。だがそのどれも、エイネにとってはかけがえのない思い出だった。

そして側には必ず、ソラの笑顔があった。

エイネは思う。

もつとその笑顔を見ていたかった。もつと側にいたかった。どうして自分は人間で

はないのだろうか。人間であつたのなら、もつと一緒いられた。人間であつたのなら――。

エイネの頬に涙が伝う。止めどなくボロボロと零れ落ちる。

「いやだ……いやだよお……っ！ もつと、もつと一緒になりたいよお……っ！」

自分の思い、そしてソラとの日々を思い出したことで、保っていた笑顔が崩れる。諦めていた生への欲求が、今になってこみ上げてくる。

「だって私は――」

言葉が途切れた。

「エイネ？」

少女の最後の告白は、言い終わることなく消えた。

残されたのは、彼女が着ていた衣類と首から下げていた青く光る魔力結晶だけ。

「どこ？ エイネ？ どこにいったの？」

少女の体は、もうどこにも残されていなかった。

――ぼつり。

地面に滴が落ちる。

――ぼつり。

またひとつ、滴が落ちた。

次第にその量は増え、遂には土砂降りの雨に変わった。

強い雨に打ちつけられながら、ソラは天に向かって泣き叫ぶ。少女が着ていた衣服を強く握りしめ、声にならない悲鳴とともに。

その声は、降り注ぐ強い雨の音によってかき消されていた。

第四節 最初の出会いは光となって 3

ニギロでは強い雨が降っていた。雷鳴も響いている。

村人たちはみな、もう家の中で眠っている。時刻は夜中を回っていた。そんな中、クリンベルⅡトンⅡリユーゲは眠れずにいた。

昼前には出かけたと聞いたはずの二人が、未だ帰ってきていないのだ。

「どうしたのかしら、あの子たち」

心配で眠ることなどできるはずもなかった。

何度か家の地下道を通って、二人の家を訪ねていた。

だが何度行っても、家に明かりがつかっていることはなく、人の気配も一切なかった。

「なにか、あったのかしら」

いつ頃だったか、町の方から何かの音が聞こえたような気がした。よもや何かに巻き込まれ、今も帰れない状況にあるのだろうか。クリンベルは不安を隠せない。

あるいはこの雨の中帰るのは危険と考えると、どこかの宿にでも泊まっているのだろうか。もしそうであるのなら安心ではあるのだが。

「やっぱりダメね。私、我慢できない性格だから」

クリンベルは意を決して、隣町に足を運ぼうと寝室の戸に手を掛けた時だった。呼び鈴の鐘が鳴った。

こんな時間に訪問者が来るだろうか。そんな疑問は、すぐにある答えに行き着いた。二人が帰ってきたのだと。

しかし、しかしだ。ではなぜわざわざこの屋敷に来る必要があるのだろうか。クリンベルは考え、目を見開いた。

「まさか!？」

クリンベルは部屋の戸を無造作に開け放つ。

どたどたと大きな音を立てて、階段を駆け下りる。

そしてその勢いのままに、玄関の扉を開いた。

「ソラちゃん……?？」

玄関の先に、ソラが立っていた。ずぶ濡れになったその手には、傷だらけになった衣類と魔力結晶のペンダントが握られている。

「ソラちゃん? どうしたの? こんな時間に」

聞かずにはいられなかった。

そんなことはあつて欲しくないと、願っていた。それが身勝手な願いだとわかつてい

ても、クリンベルは今、願わずにはいられなかった。

光を失った瞳で、ソラがクリンベルを見つめる。

「エイネが、いなくなっちゃったの……」

「——っ!？」

告げられ、クリンベルは思い出す。昨日の朝、彼の母親と話した内容を。

“——動こうとしているわ、運命の歯車が”

まさか、こんな残酷な運命が待ち受けているなどとは思ひもしなかった。

エイネという一人の使い魔は——一人の少女は、余命半ばにして死ぬ。一人の最愛の少年を置いて。それが彼らの運命なのだとは。

(ふざけ、ないでよ……!)

クリンベルは怒りを噛み締める。

こんなこと望んではいなかった。二人が別れるとしても、それは笑顔の別れになるはずだと思っていた。その考えは、甘かったのだ。

ソラはふらふらと屋敷の中に入っていく。背中にも生気が宿っていない。

クリンベルはその背中を見つめる。

(これが本当にあなたの望むことだって言うの?)

「ねえベルさん。エイネ、こっちに来ない?」

(この子にこんな絶望を味わわせるのが?)

「急にいなくなつて、ほら服も置いてつたから」

(もしそうなのだとしたら……)

「エイネ——? もう、風邪ひくよ。いるんでしょ、ねえ」

(私、あなたを許せない)

クリンベルは、ソラを抱きしめた。

「エイネ……返事をしてよ」

人の温もりに触れ、ソラの瞳に光が戻ってくる。一度枯れた涙が、再び溢れてくる。

「ベルさん……エイネが……エイネがあ……っ!」

「わかっている。辛いよね……寂しいよね。あの子の代わりにはなれないけど、私が一緒にいてあげるから」

今のソラに掛けられる精一杯の言葉を、クリンベルは告げた。いつも親しまれる友人の「ベルさん」としてではなく、彼の——新たな母親として。

求めていなくてもいい。求められることもないかもしれない。そう分かっている。今がそれがクリンベルにできる唯一の償いだつた。

「あ……うあ……うわあああつ!!」

ソラが泣き叫ぶ。

その声を聞き、屋敷内の猫が集まってくる。みな、ソラを慰めるように寄り添う。十匹の猫と、一人の女性に囲まれる中で、ソラはひたすらに泣き叫んだ。



魔物騒動の間、ドウエセの住人は警護兵のいる駐屯所に避難していた。

魔物が巨大化したのを見て、押しかけるようにして駆け込んだ彼らは、今も恐怖と不安で蹲っている。

万が一の避難施設としても利用しようと、駐屯所を大きく建てていたのが幸いしたといえよう。また偶然とは言え、この場所が魔物の危険から離れた場所にあったのも不幸中の幸いだ。

先ほどまで鳴っていた爆音が、いつの間にか止んでいた。

「おい！ 魔物が討伐されたぞ！」

警護兵が一人、声を上げた。

その連絡を聞き、住人たちは各々声を上げる。中には抱き合う者もいた。喜びの渦が、広がっていった。

「ママ……」

ただ一人、トウネリは違った。

あの魔物は母親のなれの果てだ。思うところもあり、素直に喜ぶことができない。

トウネリは静かに立ち上がり、駐屯所を出た。

「雨、降ってる……」

地面が弾く激しい水の音と雷鳴が、耳を刺激する。

その中をトウネリは走った。

「ソラは、無事だよな?」

一人魔物の方に走っていった、今日をはじめて会った少年。トウネリは彼のことを心配していた。もし魔物が倒されたというのであれば、彼もどこかに無事にいるはずだと。

向かったのは、魔物が出現した場所。自分が住んでいた家のある一画。

その一画で、少年の姿を見つけた。

「良かった! ソラ——」

声を掛けようとして、立ち止まった。

少年は泣いていた。強い雨の音でかき消されているが、叫んでいるのがその姿からわかる。

手には、服が握られていた。少年と一緒にいた女性の服が。

トウネリはすぐに察してしまった。あの女性は——死んだのだと。

「そんな……」

トウネリは跪いた。

彼女の胸に、絶望にも似た感情が芽生える。と同時に、ある実感が湧いてきた。自分もまた、母親を完全に失ったのだという実感が。

なにより、素敵な笑顔を見せていた少年が泣き叫ぶ姿に、罪悪感があつた。

二つの感情に押し流され、トウネリの目から涙が溢れた。

ふと、少年がふらふらと立ち上がった。手にあるものを大事そうに抱えて、どこかへと歩いて行く。

それを見たトウネリも自然と立ち上がっていた。そして彼を追おうと、一歩足を出した。

“——ソラのこと、よろしくね”

あの女性に言われた言葉を思い出す。あの言葉に秘められた違和感の正体にトウネリは気づいた。あの女性は、自分の死を悟っていたのだと。

だからあの少年を追いかけた。自分にはその義務があるのだと。それが、それだけが、彼にしてやれる行動だと。

ふと、何かが目当たった。

ナイフだ。しかもまだ血が付いている。その先には、女性の衣服の切れ端が張り付い

ている。

それを手に取り、しばし見つめた。

「まさか……」

何かを想像して、トウネリは青ざめた。

(もしそうだとしたら、わたしはあの人に何ができるの……?)

立ち尽くす。ナイフを握りしめたまま、抜け殻のようになった少年の背中を見つめる。

そのまま何も出来ずに、トウネリは少年を見失った。

◇

ひとしきりに泣いたソラは、その疲れからか眠りに落ちていた。

クリンベルは彼を自分の寝室に運び、ベッドに寝かせると、ソラの髪をそつと撫でた。

「よく眠っているわね……」

先ほどまでの顔が嘘のように、健やかな顔になっている。

憑きものが落ちたのか、今だけなのはわからない。だがクリンベルは少しだけ安心することができた。

ソラの頬をそつと撫でる。頬筋にはくつきりと涙の跡が残っている。

クリンベルは自室にあるタオルを出すと、小さな桶に用意したお湯でそれを濡らした。

濡らしたタオルで優しく、涙の跡を拭いていく。

拭き終わると、タオルを桶に投げ入れて部屋を出た。

彼女が向かったのは、屋敷の書斎だった。

立ち並ぶ本棚の中を歩き、目的の本の前に立つ。

そして手にしたのは「魔法生物」とタイトルの書かれた本——そう、ソラが読んでいた本であった。

クリンベルはその本の最後のページ——破られたページのところを開いた。

「もしこれが完全な状態だったのなら、違う運命があったのかしらね」

クリンベルは破られたページに書かれていた事を思い出す。

このページには、魔物と使い魔に関する記述が載せられていた。そう、エイネを助けるための知識がここには書かれていたのだ。

彼女は間接的に、エイネの命を奪っていたのである。

本を閉じ、元あった場所に戻す。すると、後ろに収められていた本が床に落ちた。

落ちた本の下まで行き、それを拾った。本のタイトルは「母と子と恋人」。

「なにが母親よ。あいつの……あれの言葉に付き従って行くせに」
クリンベルは吐き捨てる、本を乱暴に戻した。

寝室に戻ると、ソラが何か寝言を呟いていた。

「エイネ……エイネ……」

消えた少女の名前を呼んでいる。

「なんであなたは、あの子を引き取ったのよ」

クリンベルは怒りを露わにする。

唇が裂けて血が出るほど、強く噛み締めた。握った拳を、壁にぶつけた。

この時、ソラは夢を見ていた。エイネと話しをする夢を。

エイネはソラに言った。

「もつと沢山の人を、笑顔にしてあげて」

それは死の間際に告げた言葉と同じだった。

「でもボク、そんなことできないよ」

ソラの返答に、エイネは首を振る。

「できるよ。だって毎日、私を笑顔にしてくれてたじゃない」

「けど、それはエイネがいたから！」

「ううん、違う。私だけじゃない、ソラは村の人たちも笑顔にしてる。あなたには、誰か

を笑顔にする素敵な力があるの」

「でも……でも……っ！」

エイネの手が、ソラの頬に触れる。優しく、確かな温もりとともに。

「あなたならきつとできる。世界中のみんなを笑顔にすることだってできるはず」

エイネは笑う。そこに一片の涙もない。

「だってソラは、世界で一番の自慢の王子様なんだから」

エイネの手が離れる。ゆっくりと、エイネ自身も離れていく。

「待つて、待つてよエイネ！」

ソラは必死に手を伸ばした。手を伸ばし、エイネの体を引き寄せようと藻掻いた。

だが彼の手は届かず、エイネはどんどん離れていく。

「ごめんね。そしてありがとう——私の大好きなソラ」

エイネの姿が消えた瞬間、ソラは目を覚まして飛び起きた。

時刻はもう朝になっていた。

飛び起きたソラは、周囲を見渡す。

「(ソラ)は……っ！」

見知らぬ部屋に首を傾げる。

いや、それだけではなかった。

「ボクは……誰だっけ？」

ソラはシヨックから記憶の殆どを失っていた。自分の名前さえ、失っていた。だが不思議と焦る様子はない。呆然と、辺りを見回しているだけだ。丁度そのとき、クリンベルがエプロン姿のまま部屋に入ってきた。

「あら、おはよう。ソラちゃん」

ソラは首を傾げる。

（この人……誰だろう？）

目の前の貴婦人のことも、ソラは忘れていた。

「朝ご飯、食べましょう？」

貴婦人に誘われるまま、ソラは食事をする部屋に向かった。

部屋の中にはいい匂いが漂っていた。

テーブルには豪華な料理が並べられており、とてもじゃないが朝の食事にしては多い。
い。

というのも、クリンベルがソラを慰めるために張り切りすぎたためであるのだが。

「ソラちゃんのために腕によりをかけました！ さ、食べて食べて」

にこにこ笑う貴婦人に促され、ソラは席に座る。

目の前に、魚を使った料理が出されている。横脇にはナイフとフォークが置かれてい

た。

「どうやらこれを使って食べるようだ。そう理解すると、ソラはフォークをまず手に取った。」

次にナイフを握った瞬間だった。

「——っ!?!」

目を大きく開き、ソラの呼吸は一気に荒くなった。

「あ……あ……あ……」

ソラの中でフラッシュバックが起こる。エイネを刺した時の感触。エイネの胸から流れる血。そして、エイネの消滅の瞬間。

それらが同時に、ソラの中の記憶を呼び戻す。

次々と迫り来る記憶の渦が、締め付けるような痛みを生みだす。

思わずソラはナイフを落とし、頭を抱えた。

「ソラちゃん!?!」

ナイフに触れた手が震える。必死に左手で抑えようとしても、震えが止まらない。ソラはナイフという物に重度のトラウマを抱えてしまっていた。

「うぐっ……」

吐き気がやってくる。幸い昨日は昼から物を食べていなかったためか、吐くことはな

かった。

いやな汗が、ソラの額に滲んでいる。

「どうしたの!？」

慌ててクリンベルはソラに寄り添った。彼女は何が起こったのか知らない。いや、知るはずも無かった。ソラがエイネを刺したなどという事実を知らないのだから。

震える手を抑えながら、ソラは歯噛みする。

ソラの頭の中で、エイネの言葉が何度も反響する。

“——もっと沢山の人を笑顔にしてあげて”

エイネが最後に告げた願いが、頭の中を巡り続ける。

(ダメだ……こんな弱いボクじゃ誰も笑顔にできない……誰も守れない!)

手の震えが止まる。

ソラは落としたナイフを拾おうと手を伸ばした。

ナイフに触れるとまた、手の震えが出始める。それでも震えた手で、握りしめた。その瞳に揺らぎはない。

「ベルさん……ボク、もっと強くなりたい」

「ソラちゃん？」

「もっと強くなって、沢山の人になりたい」

決意の眼差しに、クリンベルは狼狽える。

(まさかヴェルティナは、最初からこうなるとわかってて)

クリンベルの中で、疑心が生まれる。一体目の前の少年はこれから、どれだけの重荷を背負うことになるのだろうか。それは果たして、この少年のためになるのだろうか。

「いいの？ もしかしたら、辛い現実を目にすることになるのかもしれないのよ？」

「うん、大丈夫。辛い現実になんて、絶対にボクがさせない」

ソラの眼差しは、もうどうすることもできないと物語っていた。

「そう、わかったわ」

クリンベルは諦める。これから彼は、自分の道を突き進むのだ。やれるのはもう、その道しるべになってあげることだけだと。

「ありがとう、ベルさん」

ソラは笑った。

そしてソラは食事を始めた。まるでかき込むようにして、料理を頬張る。なんせ昨日の昼から食事をしていないのだ。腹が空いて仕方がない。

「んー！ 美味しいよベルさん！」

「そう、よかったわ」

(本当に、よかった……)

クリンベルも、目尻に涙を浮かべて笑う。胸に手を当て、安堵の息を吐く。内心複雑な気持ちだが、今はソラが立ち直ったことを素直に喜んでいた。

ナイフを握るソラの手は、まだ小刻みに震えていた。

エピローグ

朝の食事を済ませ、ソラは一度家に戻ってきていた。

家に入った瞬間、エイネの姿が一瞬だけ映る。がすぐに消え、静寂が漂う。

「ただい……ま……」

溢れてくる涙を拭って眩くと、ソラは唇を固く結んで家の中を歩いた。

向かったのは自分の寝室だった。

着替えるために服を脱ぐ。

ソラの首には、エイネが身に付けていた魔力結晶のペンダントが下がっていた。その紐には、エイネが髪を結うために付けていた白いリボンが括り付けられている。

着替え終わると、次に婦人に渡された鞆に荷物をまとめ始めた。これからしばらく、家を留守にするためだ。

支度を終え、鞆を手に部屋を後にする。

階段を下りたソラは、そのまま玄関に向かい、出ようと扉に手を掛けた。

ふと、机の上にある花冠に目が行った。

荷物を置き、テーブルに近づく。

花冠を手にとると、花たちがぼろぼろと落ちる。冠は完全に枯れていた。

ソラは目を閉じると、花冠に魔力を送った。すると元の鮮やかな姿に戻っていく。新たな生命が、宿っていく。

ソラが目を開けたときには、花冠は元通りになっていた。

元に戻った花冠を持ったまま、ソラは再び二階へと向かう。

そしてエイネの寝室に入ると、花冠をベッドの上の壁に飾った。

「エイネ……いつてきます」

飾られた冠は、窓から射し込む太陽の光に照らされて輝いていた。



家を出て、クリンベルに連れられてやってきたのは森の中だった。

ソラはこの場所を知っている。一度だけ森で迷った時に来たことがあった。

そう、案内されたのは大男の住む小屋だった。

「アウルス、来たわよ」

婦人が声をかけると、小屋の戸が開いた。

「来たか。坊主、久しぶりだな」

「あのときは、お世話になりました」

ソラの返答に、アウルスは微かに笑みを浮かべる。

「あのときは？ ふん、これからすぐにお世話になるんだろうが。来い」

アウルスの後について、ソラは歩く。

その背中を、クリンベルは悲しげな表情で見送った。

「これからお前を鍛えてやる」

なぜアウルスの下に来たのか、それは特訓するためだった。

アウルスは過去にとある国の闘技場で剣闘士をやっていたのだという。その勝利は数知れず。どんな挑戦者をも滅多打ちにし、名を轟かせていた。

ソラの強くなりたいたいという思いに、これだけの適役は他にはいないだろう。

「いいか。返事は、はいしか聞かん」

「はい！」

「ちなみに今は聞いていない」

「理不尽だ……！」

斯くして、アウルスによるソラの特訓は始まった。

時には汗を流し、時には傷だらけになり、時には血反吐を吐きながら、それでもソラ

はアウルスの特訓に付いていった。ただ一心に、強くなりたいたいという思いで。

アウルスもその思いに答えた。自分が身につけた技をすべてソラに叩き込んだ。

中には「ソラ自身が考えた戦い方」を確実なものにするための特訓もした。

そして、特訓を始めてから六年の月日が流れた。

「ふう……参った」

ソラはアウルスを打ち負かすほどに成長していた。

「まったく。筋肉がろくに付いてなくせして、どこにそんな力がありやがる」

「何言ってるんですか師匠。身体強化ですよ、身体強化」

ソラの身長は六年前よりも大きくなっていった。

「まったく。歳には敵わんな」

「おかげでボクでも勝てるようになりましたしね」

髪の毛も伸びていた。伸びた空色の髪は、白のリボンを使い頭の後ろで一纏めにして
いる。

「生意気言いやがる。言っておくが、殺し合いじゃねえから手加減してるだけだぞ」

「わかってます。師匠の本気にはまだまだだついて行けそうにないですよ」

そして顔立ちはというと。

「お前さんが来て丁度六年か。その憎たらしい顔は母親にそっくりだ」

美少女と見間違ふほどの美人顔になっていた。

「そっくりつて、どういふ風に？」

「若い頃のまんまだ」

「ええ？ ボクそんなに似てるんですか？」

なお、本人にあまり自覚は無かった。

アウルスは思わず大きなため息を吐く。

「さて、この六年間お前は俺を通じて多くの経験を得た。だからその経験を武器に、お前にはこれからある場所に向かってもらう」

「ある場所？」

ソラは小首を傾げた。

対してアウルスは口元になやりと笑みを浮かべると告げる。

「王都ブリアンテス。そこでお前には世界を股に掛けて活動する——ギルドに入ってもらう」

それはソラにとっての旅が始まる宣言でもあった。



ソラが魔物と戦い、エィネが消えた夜の日のこと。

打ち付ける雨の中、ソラの母親ヴェルティナは一人森の中にいた。

「がはっ……!?!」

木に肘を突き、胸を押さえつけて口から大量の血を吐き出す。

これを何度か繰り返し返しているため、地面には血だまりが出来ていた。

「あれだけの魔力消費……さすがの私でも体が耐えきれないか……」

眩き、また血を吐き出す。

「けど……もう立ち止まるわけにはいかないのよ」

荒れた息を整えて、ヴェルティナは覚束ない足で歩き始めた。

彼女の足音を、雨がかき消していた。

第一章 旅の始まりと共に歩む者

プロローグ

ニギロの入り口に一台の荷馬車が止まっている。その手綱を握って静かな笑顔で座っているのは、ニギロの村長ヘンリーだ。

荷馬車の後ろには大勢の人がいた。今日村を出発する一人の少年を見送るため。それぞれが少年に向けて言葉を紡ぐため。少年の無事を祈るため。そして少年の出発を祝うために、彼らは集まっている。

「ソラちゃん。気をつけて行ってくるんだよ?」

「大丈夫だよ、おばあちゃん。ボクももう子供じゃないんだから」

「土産話期待してつから、たまには帰って来いよ?」

「うん。おじさんも元気でね」

「おじ?! お兄さんだろ!」

この場に悲しむ者はおらず、皆笑顔でソラを見送ると決めていた。

ソラもまたそれに応えて、眩しいほどの笑顔を見せている。

「ソラちゃん。無茶はしないかね？　自分が出来ることだけを頑張るのよ？」

ただ一人、ソラの旅路の行く末を心配しているクリンベルは笑顔を曇らせている。

「大丈夫だよベルさん。六年間、アウルスさんのところで色々と学んだから」

「そうだけど……でも、なにかあつたらすぐ私を頼ってくれていいからね？」

いつも明るく振る舞っている彼女がここまで表情を硬くしているのは珍しい。思わずソラはくすりと笑うと、クリンベルの両手を優しく取る。

「うん。いつもありがとう、ベルさん。でもボク、ベルさんには特に笑ってほしいな。

ベルさんの笑顔、ボク好きだからさ」

すると、周囲から歓声が巻き起こった。

「おい、ソラのやつベルさんに告白したぞ！」

「えっ、あ、いや違うから！　ボクそういうつもりで言ったわけじゃないから！」

「あらあら、顔を真っ赤にしちやって。ベルさんよかったねえ？」

「違うってば！」

慌てるソラに対して、村の人々は笑い声を上げる。

釣られて、クリンベルもまた笑みを溢していた。

「ベルさんやつと笑った」

「うえ？　あつ……」

ソラの指摘に、恥ずかしさから紅潮して視線を逸らすクリンベル。その仕草を見た村の男たちは皆揃って心の中でこう言っていた。「ソラ、美味しいところを有難う」と。

「みんなの笑顔見ながら行きたいからさ。ね？」

「そうだけベルさん。これが今生の別れじゃないんだ。それに案外、泣いて帰ってくるかもしれないぜ？」

「そんなことないよおじさん。ボクはもう子供じゃないんだから」

「あ、お前またおじさんって言ったな!？」

「言つてないよーだ。おじさん」

「てめえ、そういうところ子供だつて言つてんだぞ!？」

「あなた。その反応も十分子供よ」

「ほら、奥さんにこう言われてるよ？」

「俺に味方はいないのかよ!」

男の叫びにまたひとつ笑い声上がる。

その光景を見てクリンベルは思い直す。そう、これは彼にとつて晴れやかな旅の始まりなのだ。ならば自分こそが、彼を満面の笑顔でいなければならぬのだと。

(エイネちゃん……あなたが愛する人はこんなにも大きくなつたわよ……)

クリンベルの脳裏に、一人の少女が浮かぶ。彼を最初に育て、愛した少女の姿が。

「そうよね。うん。ごめんなさい、みんな」

クリンベルはひとつ深呼吸する。そして満面に花を咲かせて、いつもの雰囲気ですべてやった。

「よし！ じゃあ、次帰ってきたら今度は私をもつと沢山のことを教えてあげるわ！

それこそもう手取り足取り裸の付き合いだって——」

「いやあのベルさん。さすがにそこまでしてって言つてないですよ？」

「いやよお！ 可愛いソラちゃんを愛でたいの！ ちなみにあの本はどこまで読んだのかしら？」

「よ、読んでない！ 読んでないから！」

クリンベルの言う本とは、ある恋愛ものの物語を書いた本である。顔を真っ赤にして否定しているソラだが、その様子では説得力が無いのは言うまでも無い。

またひとつ、笑い声上がる。なお。

「おいソラ羨ましいぞ！ 俺を差し置いてベルさんから裸の付き合いを迫られるなんて！」

「ええ？ おじさん、そこで話盛り返すの？」

「ちよつとあなた……私という妻がいるのに、その発言は聞き捨てならないのだけど？」

「あいや冗談だ、冗談。だからお前、その鬼のような形相はやめてくれえ！」

一組の夫婦に僅かばかりの亀裂が走った気がしなくもないのだが。

ソラは苦笑して、村の人々を一瞥する。すると一瞬だけ、白銀の髪をした少女の姿が混じっていたが、すぐに消えた。

「さてと。いつまでも話してたら日が暮れちゃうから、もう出発するね」

「うん。気をつけるのよ、ソラちゃん」

「ベルさんも元気で。時間がある時に手紙送るよ」

「ふふふ、ありがとう。これ、持っていて」

ソラの言葉に微笑むと、クリンベルは持っていた物を差し伸べる。

「これは……」

手にあつたのは、ソラの好物であるリンゴだった。

「うん、ありがとうベルさん」

ソラも微笑むと、リンゴを受け取る。

二人の一連の様子を、村の人々は静かに見守っていた。

振り返り、馬車に乗り込むソラ。もう一度、村の人々を眺める。

笑顔で立つ少女の姿がまた、一瞬だけ見えた。

(いつてきます。エイネ……)

そしてソラは村人ひとりひとりの顔を頭に焼き付けていく。何があっても忘れない

ように。

「それじゃあ、お願いします」

「はいよ。出発じゃ」

鞭を打つ音、馬の嘶きとともに馬車は動き出す。

「いってきまーす!」

声を張り上げて、ソラは大きく手を振る。

「いってらっしやい!」

村の人々も同じようにして、手を振る。お互い、姿が見えなくなるまで振り続けていた。

馬車は森の中を駆けていく。木々の隙間から光が漏れ、幻想的な風景を生み出している。

ソラは人の姿が見えなくなっても、手を振り続けていた。森の動物たちが通り過ぎた道に現れ、見送るようにして馬車が走っていくのを見ていたからだ。

「みんなも、またねー!」

ソラの声に答えるように、動物たちは各々の鳴き声を上げた。その中には、アウルスの姿もある。

「いってきまーす。師匠」

手を振りながら、ソラは微笑んだ。

森を抜け、馬車はドウエセの街を走る。

六年前の魔物騒動が嘘のように、街は活気を取り戻している。当時子供だったものたちも成長し、親の手伝いをして生活している。店の品物を運ぶ者。店で売り子をする者。木材を加工する者など様々だ。

彼らはふと、馬車の方を向いた。中にソラがいることに気がつく、微笑んで軽く手を振っている。皆、当時のことを鮮明に覚えていた。誰もが恐怖していた中、たった一人脅威に立ち向かった少年を。

ソラは彼らに軽く手を振った。

ふと、ある夫婦の姿を見つけた。あの日、救えなかつた子供の母親だ。二人もまた、ソラに軽く手を振っていた。妻の腹部には子供がいるようで、膨らんでいる。

ソラは二人に対し、表情を曇らせて軽く会釈した。

ドウエセの街を抜けると、その先に広がっていたのは高原だった。舗装された道の周囲には、草が生い茂っている。この道を進むことで、昼頃には王都ブリアンテスにたどり着く。

着くまでの持て余した時間を潰そうと、ソラは鞆の中を漁った。

最初に出したのは、クリンベルに渡されたリング。

一口、また一口と齧っていく。口に広がる甘みに顔を綻ばせながら食べ進め、残った芯は魔法で粉末状にし、これを流し込むようにして飲み込んだ。

それでも時間は余っている。ソラは再び鞆を漁り、一冊の本を取り出した。

ソラにとって思い出の一冊。毎晩のように読み聞かせてもらっていた、世界の御伽噺が書かれた本だ。

彼が開いたのはその第一章のページ——人類誕生に関する話だ。



世界が最初に生み出した人間は八人と言われています。それぞれ男四人と女四人。みな姿形が整った美男美女だったそうです。私たちは最初に生み出された彼らを「最初の八賢者」と呼んでいます。

彼らは世界から知識を与えられ、この星で生活する権利を得ました。

しかし彼らには初め、知識はあれど今の私たちが当たり前に持っているあるものが欠けていました。それが感情——人間が人間であるために必要不可欠な要素です。

感情を持たなかった彼らは、世界に言われるがままの生活を送りました。獣を狩れと言われれば狩り。火を起こせと言われれば火を起こし。狩った獣を食えと言われれば

食う。そんな、操り人形のように生活を送っていたのです。

世界は次第に憤りました。ただ言われるがままに生きる彼らを欠陥した存在として、見放しました。

八人の賢者たちは最初は何もせず、一切動くことをしませんでした。当然です。彼らはただ言われるがままに動いていただけなのですから。

そんな日々が何日も続いたある日のことです。

一人の男がふと動きました。彼は空腹に耐えられず、食事をするため獲物を捕りにいったのです。この男は後に、グルトンと名付けられます。

一人の女が突然泣き出しました。女はなんでもいいから沢山の物が欲しいと強請つたのです。後にこの女は、ゲシルと名付けられます。

ゲシルの隣にいた女が怒り出しました。ゲシルが泣く声があまりに五月蠅く、またあまりに下らないと思ったからです。後にこの女はルエグナと名付けられます。

ゲシルとルエグナは終いに、喧嘩を始めました。

一人の女が、喧嘩しているの二人の間に割って入るようにして突然抱きつきました。この女は美しいものが何より好きでした。そのため、美しい彼女たちが傷つけ合うのを嫌ったのです。後にこの女はヴェルナーデと名付けられます。

そんな三人の様子を、一人の男は興味がなさそうに眺めていました。というのも、こ

の男は自分が誰よりも力が強いと思っており、他のものを蔑んで見ていたのです。後にこの男はアルガンセと名付けられます。

またある男は、アルガンセに対して明らかな敵意を示すようになっていました。この男はアルガンセの強さを誰よりも理解しており、そしてその強さに嫉妬していたのです。後にこの男はネイドと名付けられます。

ある男は突然立ち上がると、行きたいところへと走り出しました。彼は自由を求めて、自分のやりたいことを好きにやるようになったのです。後にこの男はファルティアと名付けられます。

各々が思うように行動し始める中、ただ一人だけ、ある女は何一つ動こうとしませんでした。きつとこの話の読者である皆様は、この女には感情が芽生えなかったと思うことでしょう。しかしそうではありません。彼女は八人の中でただ一人、世界を愛したのです。そのため世界の指示を待ち続けました。後にこの女は、イヴェルテラと名付けられます。

世界は彼らの行動を面白がりました。そこで彼はあることを考えたのです。彼らが他の人間を導いたらどうなるだろうか。その好奇心から世界は八人以外にも、大勢の人間を生み出しました。

人々を導くことを任された彼らは、自分たちが考えるままに導き始めました。

グルトンは自分の空腹が簡単に満たされるよう、土地を耕して作物を作らせました。また狩りの仕方を教え、食の大切さを説きました。

デシルは自分の周囲を物で満たそうと、グルトンに協力して人々に物の作り方を教えました。住むための家屋、狩りに必要な武器、土地を耕すための道具の作り方などです。ルエグナはというと、自分が選んだ人間だけを集めて、八人の輪の中から去って行きました。彼女は自分が好んだものたちと静かに暮らすことを選んだのです。その際彼女は、海のと真ん中にある小さな孤島に選んだ人々を導いたと言います。

ヴェルナーデもまた、ルエグナと同じように八人の輪の中から外れました。生まれた人間の中で自分が美しいと思つた女だけを連れて、遠く離れた土地へと向かつたのです。後に彼女は、女だけが住む国を生み出すことになりました。

アルガンセは弱きものに興味がありませんでした。そのため、人々を導こうとはせず、ただ一人だけどこかへと姿を消したのです。次の章でもお話しすることにはなりません。彼は近い未来、グルトンとデシルが生み出した国を守護するための唯一無二にして最強の騎士となります。

ネイドはアルガンセに対抗して、自分も同等の力を得るため、何より誰よりも強い存在になるため、生まれた人間の中でも特に屈強な者たちを集めて旅に出ました。後に彼らはひとつの国を作り、世に戦乱を招く存在となりますが、詳しい話はまた次の章でお

話ししましょう。

そしてイヴェルテラはと言いますと、愛する世界のためにそれぞれの陣営を監視することを選びました。この時彼女だけは、世に争いが起きることを予期していたと言われています。そのため彼女は一部の人間を集めて、同じ役割を担う組織を生み出しました。別の章でも詳しく話しますが、後にそれが、今の私たちの時代でも世界を股に掛けて活動する「ギルド」と名付けられるのです。

——「世界のおはなし」第一章 人類誕生のお話 より



「ソラちゃんや。見えてきたぞ」

ソラが本を読み進めていると、ふとヘンリーが中の方に呼びかけた。

言われて本を閉じ、前からひよつこりと顔を出す。すると、彼の視界に、巨大な壁が見えてきた。

「すごい……あれが……王都……」

今まで見たことのない巨大なそれに、ソラは思わず感嘆を漏らす。

「村長は結構行ったことあるんだよね？」

ソラの問いに、ヘンリーは笑う。

「そうじゃのう。村から王都に引越す者のために何度も来ておるよ」

「やっぱり、すごいのか？」

「うむ。ドウエセの街とは比較にならないくらいの賑わいじゃよ」

「そっか……」

ソラの瞳は好奇心で満ち満ちている。これから待っているであろう、新たな出会いに胸を躍らせる。この場所から、自分の夢を叶えるための第一歩が始まるのだと。

そんなソラの顔を見て、ヘンリーは微笑んだ。これまで孫のように思っていた一人の少年の旅立ちを、心から喜んでい。何より、きつと多くの人を笑顔にするのだろうかという確信があった。

「ありがとう、ヘンリーお爺ちゃん。送ってくれて」

「なに、孫の頼みじゃ。当然のことじゃよ。それに王都に入るには、わしの手続きが必要だからの」

馬車は壁の前に差し掛かった。壁に設けられた大きな門の前には二人の兵士が立っており、その傍らに閑所の建物がある。

「ソラちゃん、馬を頼めるかの？」

「うん。任せて」

ヘンリーは馬車を兵士たちの前で止めると、下りて関所へと入っていく。

関所に入り彼が懐から出したのは、木の板に紋様が書かれているものだ。板に彫られた紋様はどこの集落あるいは国に属しているかを指している。王都に入るためのいわゆる許可証で、誰か一人が必ず携帯していなければならぬ。ニギロではこれを村長であるヘンリーと、クリンベルしか持っていない。

これと同時に、王都に入る者の身分や出生を示す証明書の提示が求められる。これらの審査が通れば、漸く王都に入れるというのが、この国のルールである。

ヘンリーが手続きを済ませている間、ソラは荷車を引いていた馬を撫でていた。

「ご苦労様。乗せてくれてありがとうね」

ソラがそう言うと、馬がひとつ答えるように鳴く。その様子を、門番の兵士は不思議そうに眺めていた。

「ソラちゃんや、手続き終わったよ。これで中に入れるよ」

ヘンリーは手続きを終えて帰ってくる、そう微笑んだ。

それを聞き、ソラは必要な荷物を荷車から下ろす。

「はい、ソラちゃんの身分の書類。ギルド加入の手続きに必要なじゃから」

「ありがとう。いよいよ……だね」

「うん。頑張るんじゃぞ」

「はい、いってききます」

別れの挨拶をして、ソラは少し緊張した面持ちになる。いよいよここまでやってきた。もう後戻りはできない。これからどんな苦難があらうと、自分の力で乗り越えていかなければならない。

ひとつ深呼吸して、門の前に立つ。高くそびえる威圧感に少し圧倒されながらも、堂々と胸を張った。首から下げたペンダントに自然と手を添えて、握りしめる。

「開門！」

兵士の号令とともに、巨大な扉が開いていく。ゆつくりと、大きな音を立てて。

この扉が開いた瞬間、ソラの旅が本当に始まる。そしてそれは同時に、この世界に新たな歴史が刻まれていくことを意味していた。

第一節 再会と邂逅 1

門が開き、広がった光景にソラは目を輝かせた。

街の中は大きな賑わいを見せている。村長が言っていた通り、ドウエセとは比べものにならない程の人が行き交っている。

建物の数も多く、壁内の面積もニギロとドウエセを足しても尚足りない程だ。

「すごい……ここが王都……」

あまりの広大さに目眩がする。ずっと村の中にいた彼にとって、都会の街がこれほどのものとは想像もできなかつたのだ。

門を抜けたすぐ先には食材を買うための市場となっている。

また簡単な食事ができる店もあり、道を行くだけでいい匂いを漂わせている。

食べ物以外にも魔法道具を取り扱う店や魔力結晶を取り扱う店もある。他にも多くの店が混在していた。

ソラは都会の光景に心を奪われていた。これだけの店、人は見たことがない。なにより、行き交う人々は皆笑顔だ。

「お！ ちょっとその空色の髪をした可愛いお嬢ちゃん！」

ふと、店の男が大きな声をあげた。

その声量に思わずソラは辺りを見渡す。一体彼は誰を呼んでいるのだろうか。

「君だよ君！ そのきよろきよろしてのお嬢ちゃん！」

「え、ボク？」

半信半疑で自分を指す。

「そうそう！ 君だよ君！」

間違つてもお嬢ちゃんではないのだが、男が勘違いするのも無理はない。外見だけを見ればソラはまごうことなく可憐な美少女なのだから。

手招きされているため、ソラは近づく。

「これ、良かったら食べてみて」

男が渡したのは白くて丸い物体だった。

ソラは言われるがままにそれを手に取り、一口齧ってみる。生地は柔らかくてふわふわだ。

「なにこれ……美味しい……」

甘さの中に僅かな酸味がある。この味をソラはよく知っていた。何故なら好物なのだから。

「これの中身、りんごを使ってるんですか？」

「お、よくわかったね！ 切ったりんごに砂糖を掛けて煮込んだジャムを中に入れたんだ。昔ある人に作ってもらったんだが、その味が忘れられなくてね。レシピは教わってたから、今こうやって売り出してるんだよ」

店主の説明を聞きながらソラは黙々と食べる。あまりの美味しさについてい手が止まらなくなっている。気がつけばあつという間に平らげてしまっていた。

「どうだい、美味しかったかい？」

「はい、とっても」

ソラは満足そうに笑顔を浮かべる。その笑顔に店主も笑った。

「えっと、これ幾らですか？」

「ん？ ああ、お代はいらないよ。お嬢ちゃんがとっても可愛かったからね」

「いやでもボクは——」

「いいんだよ気にしなくて。次来たら払ってくればいいからさ。見たところ、今日はじめて王都に来たんだろう？」

「あ、はい。でもどうして？」

「あれだけ物珍しそうに見渡してれば誰でもわかるよ」

店主に指摘され、ソラは恥ずかしさから少し顔を赤らめる。どうやら相当わかりやす

かっいたらしい。

「だからまあ、王都に来たお祝いみたいなものさ」

店主が笑う。

一方ソラは頭を悩ませていた。自分は男だ、と打ち明けてしまえばいいだろうかとも考える。しかしそれでは店主の厚意を無下にするとどこるか、場合によっては恥をかかせてしまう。

ともなれば、取れる行動は一つしかなかった。

「じゃあ、同じの二つ貰えますか？」

「お、気に入ってくれたかい？」

「はい。ボク、りんごが大好きなので」

「それは良かった。代金は150ヘルツエね」

言われた金額を店主の手に乗せ、もう片方の手で渡された袋を受け取った。

ソラは袋の中を覗き、微笑む。

「ありがとうございます。また買いに来ます」

「こちらこそ。王都での生活、楽しんでね」

手を振って別れると、ソラはまた歩き出す。人混みの中へと消えていく。

その後に一人の少女が同じ店を訪れていたのだが、ソラが気付くことはなかった。

「それにしてもすごいなあ……」

店主に指摘されたばかりだというのに、またついつい辺りを見回しているソラ。それだけ新鮮な光景が彼の視界に映っているということなのだ。

「とそうだ。ギルドに行かないといけないんだった」

ようやく当初の目的を思い出したソラは、カバンの中から地図を取り出す。

目的地はギルドのヘルデイロ支部。ヘルデイロ内の依頼すべてを統括しているところだ。ここでギルドに加入するために必要な手続きと、試験を受けることが出来る。

「えーつと……こつちかな」

地図を頼りに歩き出す。

道なりに進んだ先にあつたのは大きな噴水広場だった。この広場は王都内の中央に位置している。そのため子供たちの遊び場であつたり、カップルたちの憩いの場となっている。

そのため広場でも多くの人で賑わっていた。子供たちが走り回る姿。寄り添う男女の姿が見受けられる。

「わあ……広お……」

広場は村にもドウエセにもあつたが、やはりその大きさも比べ物にならない。目の前の光景にソラは口を開けて見惚れる。

と、その時だった。

「わっ……!!」

ソラが広場に見惚れているとふと、転ぶ少年の姿が視界に入ってきた。

「うう……痛いよお……」

転んだことで膝を擦りむいたのか、少年は膝を抱えて蹲っている。それを見た他の子供たちが心配そうに近づいた。

ソラはふと昔のことを思い出す。エイネとのある日の思い出だ。

小さいころ二ギロの広場で走り回っていた時のことである。まだ年端もなく本を読むということもしていなかったころ、彼は村の広場で走り回るのが好きだった。

エイネが様子を見守っている中、走っている最中によく転ぶことが多かった。その度にソラは彼女に傷の手当てをしてもらっていたのである。

そのことを少年に重ねたソラは、すすり泣く彼に近づいていく。

「傷見せてみて」

ソラは少年の膝を覗き込む。余程の勢いで転んだのか皮が剥がれ、血が流れていた。痛みのため、少年の目には涙が溜まっている。

「うん、安心して。これくらいならすぐに治せるよ」

少年に微笑みかけると、ソラは傷口に手を翳す。そして目を閉じて、己の中の魔力を

循環させる。

すると淡い光が掌から放たれ、傷口を包んでいく。傷口は見る見るの内に消えていき、流れた血も無くなっていく。光が収まった頃には、傷はもう完全に治っていた。

「すごい……」

周囲で見ていた子供たちが感嘆の声を漏らす。

痛みと傷が無くなったことに少年も驚き、ソラの顔を見る。

「これでもう大丈夫。ほら立てる?」

ソラは抱えるようにして立たせると、少年の両肩を軽く叩く。

「ほかに痛いところはない?」

ソラの問いに、少年は無言で手のひらを見せる。見てみると手のひらにも擦り傷が出ている。

これを同様にして治してあげると、少年は目を輝かせた。

「お姉ちゃんすごい!」

「あはは……痛いところはまだある?」

「ううん、大丈夫!」

「そっか、良かった」

ソラは笑うと、少年の頭を優しく撫でる。

「走る時は気をつけないといけないよ？」

「うん、ありがとう！」

少年も満面に笑顔を咲かせると、他の子供たちと一緒にまた遊び始めた。

「お前いいなー！ あんな綺麗な人に治してもらってさー！」

「えへへー」

「俺も転んだら治してくれるかなあ？」

「ちよつと、やめなさいよ。迷惑になっちゃうでしょー！」

走り去る中、子供たちはそんな会話を交わしている。少年は余程嬉しかったのか、度々振り向いては手を振っている。

対してソラも笑って少年に手を振って、その場を後にする。

「ありがとう、お姉ちゃんー！」

「お兄ちゃん……なんだけどね」

思わず眩き、ソラは苦笑した。



子供の傷を治してから程なくして、ソラはギルドの前にたどり着いた。

王都に来てから大きい建物は珍しくはないのだと理解したソラであったが、ギルドの佇まいを見上げて大きな口を開けている。ギルドは一際大きな建物であったためだ。

「お……大きい……」

王都に来てからというものの規模に驚いてばかりいる。大きな建物といえは真つ先にクリンベルの屋敷が思い浮かぶが、それ以上の大きさの建物が今目の前にある。彼はひたすらに圧倒されるばかりだ。

興奮した心を落ち着かせるため、ソラは大きく深呼吸する。

アウルスから聞いた話によると、ギルド加入の際に受けなければならない試験は厳しいものであるらしい。というのも、ギルドに加入するということは、それ相応の実力を兼ね備えていなければならないからだ。

「よしー」

意を決して、ソラはギルドの扉を開いた。

ギルドの中は溢れんばかりの人がいた。その誰もが武装をしながらも、皆和気藹々とした雰囲気話している。中には、入った先にあるテーブルで酒盛りしている姿もある。

ここはギルドに登録した人間だけでなく、一般の者や商人、国を守る兵士たちなど様々な人が利用する場所なのだ。

ソラは周囲を見渡して、登録のための受付を探す。

なにやら、二人の女性が座る受けつけらしきテーブルを見つけると、ソラはそちらに歩みを進めた。

片方は金色で長い髪をした美しい女性だ。薄く化粧を塗り、ドレスのような煌びやかな衣装で身を包んでいる。

もう一方の女性は赤く短い髪をしていた。見たところ金髪女性より若く見える。化粧をしている様子もなく、服も質素なものだ。

金髪の女性の前には大量の書類が置かれていた。ぶつぶつと何かを呟きながら、女性 は書類に目を通している。

赤毛の女性とはというと、書類を見てはいるが、目の前に置かれている数は少ない。ひとまず忙しくなさそうな方ということ、ソラは赤毛の女性に声を掛けた。

「あの、すいません。ギルド登録の受付はこちらで良かったでしょうか？」

「あ、はい。私は依頼受付担当で、本当は隣にいる彼女が登録受付担当なんですけど――」

「ごめん無理ー。そっちで処理してくんない？」

「見ての有様でして……代わりに私が引き受けます」

どうやら職務内容が逆転してしまっているようだと思えると、ソラは引き攣った笑い

を浮かべる。赤毛の女性も同様だ。

「まずは試験費用として、500ヘルツエの支払いをお願いします」

指示通り、ソラは所持金の中から丁度の金額を取り出して女性に渡す。

「だあー！ もう、なんで私があのかバカの書類仕事を手伝わなきゃいけないのよー」

受付をしている一方で、金髪の女性が堪えられないと叫び声を上げる。どうやら不本意な仕事を押し付けられたようである。

「あの、こんな質問失礼ですけど……あの人は……？」

「ああ。ええと、うちの支部長は書類の仕事を溜め込んだじゃう癖がありまして。それを彼女は押し付けられたと言いますか」

「ちよつと、ルー！ 早く済ませてこつち手伝つてくんない！」

「あ、はい。その、とりあえず手続きを続けますね」

赤毛の女性のため息混じりに笑うと、一枚の紙と羽根で出来たペンをソラに渡す。

「こちらの紙にあなたのお名前と生年月日、出身地の記載をお願いします」

指示通りにソラは紙に自分の情報を書いていく。

「なにか証明できるものの提示もお願いします」

「ええと……これです」

鞆から村長が直々に作成した書類の束を取り出すと、それを女性に渡す。

女性はその書類の内容に目を通して頷くと、書類に確認を意味する印鑑を押し、背後の棚にしまった。

「あとこれも渡すように言われたんですけど……」

ソラは続けて鞆からひとつの手紙を取り出した。書いたのはアウルス。内容はギルドへ推薦文を書いたものであるらしい。

これを受け取った女性は差出人の名前を見て驚いた。

「アウルスさんからの推薦ですか!？」

「え、あ……はい」

女性はまじまじとソラの顔を見つめる。そしてハツとして、先ほど渡した書類を背後の棚から取ると、もう一度その内容を深く目を通し始めた。

何事かと、ソラは小首を傾げる。

「あの、すいませんけど……性別は男性、なんですか？」

なるほどそういうことかと、ソラは内心でため息を吐く。

「そ、そうですけど。そう書いてありますよね？」

「あ、え、でも、その……え？」

思わず何度も書類とソラの顔を行き来する女性。だが無理もない。

「化粧とか……してるの？」

女性は無意識のうちに、素で話し始めていた。

「いや、してないですけど」

「嘘……化粧もしてないのにすごく綺麗っていうか、美人っていうか。本当に男なの？」

あまりもの衝撃にたじろぐ女性。信じられないと、彼女の顔には書かれている。

そんな彼女に対してどう接したものか。ソラは頭を悩ませる。このままでは手続きも進まない。

その時だった。

「残念だけど、そいつ男よ」

背後で声がした。

ソラは振り返るが、すでに声の主の姿は離れたところにいる。

見たところ女性のようにだ。リボンで後頭部に一纏めになっている栗色の長い髪。服から見て取れる華奢な体。これらから、まだ成長途中の少女とわかる。年齢にしてソラと
同じ年くらいだ。

「あ、トウネリさん！ こちらの方を知ってるんですか！」

赤毛の女性は少女の声で我に帰ったのか、口調が元に戻っている。

一方少女は気に留めていないのか、歩を止める様子はない。

「トウネリ……？」

そして、女性が言った名前にソラは覚えがあった。

自分の記憶を辿り、その名に該当する人物を思い出す。あの忌まわしい事件の日にはじめて出会った、一人の少女を。

「待って！ 君は、あのトウネリなの？ ドウエセにいた！」

ソラの声に少女は立ち止まる。

少女が振り返ると、ソラにはすぐに分かった。成長して少し顔立ちが変わっているが、当時の面影が残っている。紛れもない、あの時の少女だ。

しかし、あの時とは明らかに目つきが違った。穏やかで優しい目をしていた彼女は、今は鋭く、まるで獲物を狙う狩人のようだ。

「あの——」

その変貌に、ソラは言葉を詰まらせる。一体彼女になにがあったのかと、立ち尽くしている。

ソラの様子を伺っていたトウネリは大きいため息を吐いた。

「悪いけど後にしてくれない？ 今わたし、忙しいから」

トウネリは吐き捨てるように言うのと、踵を返して人混みの中に消えていった。

以前会った時と口調も違う。ソラはただ狼狽るしかない。六年の間になにが彼女を変えてしまったのか、と。

「あのー、ソラさん？」

「え、あ、はい！」

女性に声を掛けられたことで、ソラは平常を取り戻す。

慌てて向き直ると、女性は指先を突きながらまごついていた。

「その……失礼しました。あまりに綺麗な方だったので」

「ああいえ、その、よく言われるので大丈夫ですよ」

ソラは「あはは」と苦笑する。

「すいません本当に」

「気にしないでください。それよりも手続きの方は」

「あ、そうでしたね。手続きは以上になります。その……試験を受ける前に支部長との面会がありますので、私についてきて貰えますか？」

「はい、わかりました」

女性の言葉にソラは微笑む。

対して女性はと言うと、取り乱した気恥ずかしさから顔を赤らめている。

「あの……私ルージュヴェリアって言います」

「ルージュヴェリアさん……えと、よろしくお願ひします」

ルージュヴェリアの案内の下、ソラは支部長室へと向かうのであった。

第一節 再会と邂逅 2

ある一部屋に一人の女がいた。

女は窓から外を眺めている。眼下では行き交う人々の姿がある。

彼女の背後に置かれたデスクの上には大量の書類が山積みになっているのだが、一切手をつけようという様子がない。詰まるところこの女、自分の仕事を放棄しているということなのだが。

ふと出入り口の向こうから声がしているのを、女は聞き逃さなかった。

「ようやく来たか……」

女は口元に笑みを浮かべて席に座る。そして書類を手にして、あたかも仕事をしているかのように装う。内容を頭に入れることはしない。ただのしているふりである。

扉をノックする音が三回鳴った。

「入っていいぞ」

女は毅然とした態度で言う、扉が開いた。

「どうしたルージュヴェリア」

「えっと、試験を受けたという方を連れてきました。こちら紹介状もあります」
手紙を受け取ると、女は表と裏を確認する。

「うん、ありがとう。下がっていいぞ」

女の言葉にルージュヴェリアは一度会釈すると、踵を返す。

「それじゃ、頑張ってくださいねソラさん」

「あ、えっと。ソラでいいですよ。ボク、あなたより年下ですし……」

「いいえ。逆にソラさんは私のこと気軽にルーって呼んでくれていいですから」

ルージュヴェリアはにこやかに笑うと、部屋を出ていった。

支部長と言われている女と二人きりとなったことで、ソラは張り詰めた表情をする。高鳴る心臓が今にも飛び出してしまいそうな程だ。というのもソラはこの女からだ。ならぬ雰囲気を感じ取っていた。

重い静寂が部屋を漂う。

最初に口を開いたのは女の方だった。

「いやーよく来たね、ソラレベリアレヴィルレ。話は弟から聞いている」

「は、はい！ え、弟？」

一体なんのことを言っているのか、ソラには分からない。彼女の言う弟というのに該当する人物が思い当たらないのだ。

ソラの様子を見て、女はくすりと笑う。

「なんだお前。あいつから聞いていないのか？」

女は立ち上がると、両手を大きく広げて高らかに宣言した。

「私の名前はヴェラドローネ・ウィル・アニム！　ここ、ギルド・ヘルデイロ支部の支部長であり、君の師であるアウルス・アニムの姉にあたる者だ！」

「……はえ？」

なにを言っているのか理解が追いつかず、ソラは素つ頓狂な声を上げる。

「なんだそのアホ面は。さては私のあまりの美しさに言葉を失ったか？」

實際目の前の女は美しかった。彼の婦人に引けを取らないほどの美貌が彼女にはある。

そう、そうなのだ。この女は美しいのだ。それもただ美しいのではない。若さがあ
る。年齢でいえば二十代程の外見をしているのだ。

そして女は言った。アウルスの姉であると。妹ではない、姉だと言ったのだ。アウルスの年齢はもう六十を超えている。そんな男の姉ともなれば、七十代に達していてもおかしくはない。

しかしこの女は何度も言うように、見た目が異常に若い。街を歩く若者の中に紛れ込んでいたとしても、その年齢に気づくことはないと言っている。ルージュヴェリアが横

に並んでも、誰もが同じ年だと言うことだろう。

「あの……本当に師匠の姉なんですか？」

「なんだ？ そんなにおかしいか？」

「いやだつて、あの……失礼ですけど、師匠よりも年齢が上だなんて信じられなくて」
「だろいなあ。あいつ老けてるからなあ」

いや、そういう問題ではない。そう思っけていても口にしないソラである。

「まあ見ての通りあいつの姉だよ」

「いや、見ての通りが分からないんですけど……」

「気にするな。そういう人間も世の中にいるってことだ」

それで済ませて本当にいいのだろうか。甚だ疑問である。

このままでは一向に話が進まないため、ソラは渋々飲み込む。

「ゴホンっ……あー、まずは遠路遙々ギルドへようこそ。とりあえずここに座りたまえ」
ヴェラドローネは椅子を自分の机の前に置く。

勧められた席に座ると、ソラの視界に書類の山が入ってくる。

「邪魔だなこれ。どうするか……」

書類の山を見て、ヴェラドローネは顎に手を当てて悩む。

「よし。ちよつと待っててくれ」

そして机にあつた書類を全部抱えると、部屋から出ていった。

ソラはそれを見て思い浮かべる。おそらく、あの書類の山を見ていた女性にまた押し付ける気なのだろうと。同情しつつ、自分ではどうしようもないためただ引き攣つた笑いを浮かべる。

しばらくしてヴェラドローネが部屋に戻ってきた。部屋の外で若干口論が聞こえていたが、ソラはこの際ににしないことにした。

「さて、じゃあ試験を始めようか」

「試験……」

一体どんなことをするのか知らされていないため、ソラは生唾を飲み込む。緊張のあまり心臓がはち切れそうだ。

対しヴェラドローネは笑みを浮かべている。どこか嫌味があるような、あるいは何かを企んでいるようなそんな笑いだ。

「と行きたいんだが、実は今試験官がいなくてねえ。どうしたものか——」

ヴェラドローネが何かを言い掛けた時扉が開いた。

入ってきたのは赤髪の青年だ。腰に一振りの剣を携えて、険しい表情をしている。身長はソラより十センチほど高く、年齢も少し上と言ったところだろうか。

この青年が入ってきたのを見て、ヴェラドローネは顔を引きつっていた。

「おい、ヴェラドローネ。自分の仕事は自分でしろっていつも言ってるよな？」

「いやいやいや、ユース！ 見てくれよほら、ここに希望者がいてさ！」

「お前のやることは面接だけだろうが。他の試験は試験官が受け持つもんだらう？」

「そうだけでも、いやというか怖い。どうかその殺気を鎮めてくれ！」

ヴェラドローネの必死の抗議に、青年は歎声を漏らす。そしてソラのことを一瞥し、「なるほどな」と呟いた。

突然の来訪にソラは首を傾げる。一体この青年は誰なのだろうか。

「ああ、そうだ。紹介しておくよ。彼の名はユース＝テア＝ガルディアン。ギルド内最強とも謳われている男だ」

ギルド内最強。その単語にソラは息を呑む。

確かに佇まいからして只者ではない。こうして話している間も一切の隙を感じさせず、鋭い眼光は細かな動きさえ見ているように思える。

「お前、名前は？」

「そ、ソラ＝レベリア＝ヴィルレです」

「ヴィルレ……やっぱりな」

ユースは呟くと、腕を組んでヴェラドローネに視線を向ける。

「んで、面接は終わったんだらう？ だったらさっさと自分の仕事に戻れ」

「そうしたいんだけどねー。今実は試験官が全員出払っててさあ」

「あ？ んな話俺は聞いてねえぞ」

するとヴェラドローネは笑みを浮かべた。先程と同様、何かを企んでいるような雰囲気を感じる。

何を考えているのか察したのか、ユースは呆れた表情で項垂れた。

「さてはお前……俺を待ってたな？」

「ご名答！ 君には彼の試験官をやってもらおうと思つてさー！」

「えっ？」

ギルド内最強と謳われている男が試験官となる。というのはどういふことか。その試験の全貌が見えて来ず、ソラはただ疑問に思うばかりだ。

対しユースは「やっぱりか」と眩き、ソラの顔を見る。話について来れていない彼に對し、同情の念を浮かべる。

「ああそうか、話してなかったな。このギルドでの試験は単純。試合をして、君の実力を見せてもらえればいい。実力がギルドに入るに値すると判断されたなら、晴れて君は所属できるというわけだ」

「まあ要するに、落とすも落とさないも俺次第つてことだ。一応手加減はするから安心しろ」

二人の説明にソラは思考を巡らせる。

手加減。つまりユースはすでに、実力を出すに足りない存在と判断しているということだ。それを覆さなければ、おそらく合格することはできない。

一体どれほどの実力の持ち主かはわからないが、事実敵わないというのは出会った時点で感じている。それ程に彼が纏うオーラは強大だ。

ソラは微かに頷く。どちらにせよ、この試練を乗り越えなければ前には進めないだろう。

「わかりました……やってみます」

「よし、よく言った！　ちなみにこいつが試験官やるなんて滅多にないからな！　存分に誇りに思うといい！」

何故ヴェラドローネが胸を張るのか、とユースは座った目で見る。内心で「こいつあとでぶん殴る」と呟いているあたり、一体どちらの立場が上なのかわかったものではない。

一方ソラは表情を固くして、ユースを見ていた。すでにどう動くのか、頭の中で模索している。生半可な動きではすぐに勝負が付いてしまうと理解しているからだ。

(なるほどな。闘う前からどう動くか考えるタイプか)

ユースはソラを観察し、頷く。これならばある程度期待できるかもしれない。

「では、闘技場に移動しよう」

ヴェラドローネは立ち上がり、そそくさと部屋を出て行く。

「いや待て、だからお前は書類仕事を——聞いてねえなあいつ。今ぶん殴るか」
物騒なことを口にしながら、ユースも外へ出て行く。

ソラもすぐに部屋を出ようとして、ふとペンダントに触れた。目を閉じ、呼吸を整える。

「よし……やれるだけやってみよう」

そして後続き、ソラも部屋を後にした。



ヘルデイロ支部の建物内は、すでに試験の話で盛り上がっていた。それだけあのユースという青年が試験官をやるとするのは珍しいことなのだ。

そしてその話はルージュヴァリアも例外なく聞き及んでいた。彼女は話を聞いた途端、焦りの表情を浮かべる。というのも、ユースが試験をした回数は少ないのもそうだが、彼が合格を出した事はこれまでに一度しかないからだ。

「ど、どうしよう。ソラさん大丈夫かな……？」

心配するルージュヴァリアに対し、隣に座る女性は不機嫌な顔で様子を見ていた。

「ちよつとルー？ 手が止まつてる」

「でもソラさんならきつと大丈夫……だよね？」

「おーい。ルー、聞こえてるー？」

「でもあの人、どれくらい強いのか知らないし。でも私、あの人にはぜひギルドに入つて欲しいし」

声は全くルージュヴァリアには届いておらず、女性は「ダメだこりゃ」と嘆く。

こうなれば奥の手と立ち上がると、女性は彼女の頭を思い切り平手で叩いた。

「痛い!？」

痛みに驚くルージュヴァリア。涙目になりながら、女性に対し抗議の表情を浮かべている。

「な、何するんですかシエルヴィアさん！」

「何つて、あんたが私の話聞かないからじゃない」

「だからつて何も叩く事——」

女性シエルヴィアはもう一度、ルージュヴァリアの頭を叩いた。

「痛つ!？」 なんて二回も叩くんですか！」

「いや、ごめん。なんとなく」

「最初はともかく、二回目のなんとなくつてなんですか!？」 なんとなくつて!」

あまりの理不尽さに、ルージユヴァリアは激昂する。確かに話を聞いていなかったのは悪いが、何も二度も叩く必要はないではないかと。

シエルヴィアの方はというと、反応が面白いと顔には出さずに思っていた。

そんな二人に近寄り、声を掛ける者がいた。

「ねえ、二人とも。なんか騒がしいけど、どうしたのよ？」

声を掛けたのは、トウネリだ。

「それが聞いてくださいよトウネリさん！ シエルヴィアさんが——」

「いやそつちじゃなくて、皆なんで騒いでるのかつてことよ」

騒ぎはそれぞれの声が混ざり合っているため、上手く何を言っているのか聞き取れない。ユースがどうのという話はわかって、その詳細がわからないのだ。

そのためトウネリは、接点のある二人に話しかけたのである。

ルージユヴァリアは少し顔を伏せて答えた。

「それが……ユースさんがソラさんの試験官を務めるそうです」

「なんですって!?!」

聞いた途端、トウネリは血相を変えて駆け出した。

「トウネリさん!?! トウネリさん!」

背後でルージユヴァリアが呼び止めているが、トウネリの耳には届いていない。一直

線に、試験会場である闘技場に向かった。

闘技場には人集りが出来ていた。全員、噂を聞きつけて観戦しに来た者たちだ。中には誰が勝つかという賭け事を持ちかけている者もいるが、誰もがユースが勝つと思つてゐるために応じない。

トウネリは人集りを掻き分けて、闘技場の舞台が見えるところまで顔を出した。

話の通り、対峙している。一人は天に広がる青空のような髪の色をした少年ソラ。もう一人は炎のような赤い髪をした青年ユース。どちらも睨み合つてはいるが、まだ構えてはいない。どうやらまだ試合は始まっていないようだ。

そう判断すると、トウネリは闘技場内を見渡して人物を探した。

「あいつはどこに? ……いた!」

探していたのは、支部長であるヴェラドローネだ。

「すいません、ちよつと通してください!」

姿を見つつけや否や、トウネリはヴェラドローネのいるところ目掛けて進み出す。人と人の隙間を掻き分けて、急ぎ足で向かう。

「あんた、一体何考えてんのよ!」

ヴェラドローネの下にたどり着くと、トウネリは叫んだ。

叫び声に気づき、ソラは顔を向けた。トウネリが怒りの形相で、ヴェラドローネに何か

を話している。が、周囲の音にかき消されて上手く聞き取れない。

神経を集中させて、ソラは音を聞き分ける。するとヴェラドーネの声とトウネリの怒鳴り声が聞こえてきた。

「おやおや、試験官ユースが唯一合格を出したトウネリちゃんじゃないか」

「バカ言つてないで、早く止めなさいよ！　なんであいつがユースとやらなきやいけなのよ！」

トウネリの激昂にヴェラドーネは不思議そうに顔を見つめる。

「おや？　なぜ止める必要があるんだい？」

「なぜって、ユースがどういうやつかくらい分かつて——」

「分かつてるとも。だがそれで止める理由にはならないよ。それとも君は、自分以外に彼の合格者は必要ないと言いたいのかな？」

「違う！　私はあいつを！」

不意に、トウネリは視線に気付いた。ソラが見ている。優しげな表情で頷いている。まるでなにかを言い聞かせているようだ。

この顔をトウネリは知っている。以前にも見たことがある。「大丈夫だよ」という声が、喋らずとも響いてくる。

（大丈夫なわけ……ないでしょ！　あんたの前にいるやつがどれだけの男だと思つて

のよ！)

トウネリは歯噛みする。彼女は身をもってユースの強さを体感している。だからこそ心配なのだ。自分はなし崩し的に合格しただけだ。ただの彼の気紛れがそうさせただけだ。そう理解しているつもりだ。

ソラは顔を前に向ける。正面にいる青年を見据える。なにも構えていないというのに、すでに臨戦態勢だというのが分かる。

構えようとした時、何かが舞台中央に置かれた。見てみると木製の剣や槍といった武器が樽の中に詰まっている。

「これはあくまで模擬戦だ。だから殺し合いの道具は使わない。今置かれたその中から、自分に合った武器を選んで身につけろ」

言いながら、ユースは樽に近づき、一振りの剣を選んで抜いた。

ソラは感じていた。ユースが手に持ったのはただの木製の剣だ。だが彼が触れた途端、それは刃のある真正正銘の剣へと変貌した。見た目が変わったわけでも、彼が抜いたのが実は真剣だったというわけでもない。ただ彼の纏う殺気にも似た何か、そう錯覚させているのだ。

「早く選べ」

ユースは試合が始められないと催促する。

ソラは一度目を閉じる。彼の脳裏に浮かぶは、これまで培った技術たち。それを全て駆使しなければ、到底彼には届かないだろう。

深呼吸をして目を開けると、ソラは告げた。

「ボクは……武器は使わない」

周囲が騒つく。これまで武器を扱わずに試験を受ける者は少なかった。いとすれば部類の武闘家くらいなもので、そういった場合は試験管が対等な状態を選択していた。

だが今回は違う。ましてや相手はギルド最強とも言われる男だ。そんな男に武器も無しに立ち向かうのは無謀にも等しい。

観客の一部が笑い声を上げた。

「おい、あいつ頭悪いのか？ ユース相手に武器無しとか」

同様の声が周囲から上がる。ソラはそれを気に留めず、ユースを見据える。

「俺も武器を使わないでやろうか？」

ユースの問いに、ソラは無言で被りを振る。

「一つ聞いてもいい？ 魔法は使ってもいいの？」

「身体強化の類、あるいはそれに付随するものなら可能。他の魔法も相手が死なない程度なら問題ない。要は、殺さないよう立ち回ればなんでもありだ」

「そっか……それなら少し安心した」

表情を変えず、ユースはソラを眺める。彼からは確固たる意志が垣間見える。自信からか、それとも自棄になったのか。どちらにせよ、それが選択だというのはなら尊重するのがユースの流儀だ。

「いいだろう。ただし後悔はするなよ？」

「大丈夫。ある時からボクは後悔のないように動くつて決めたから」

トウネリは息を呑み、ソラを見つめる。彼は選択すれば実行する人間だと知っている。故にもう、見守ることしかできないのだと悟っていた。席に座り、胸に手を当てて無事を祈るしかない。

一方隣に座るヴェラドローネは笑みを浮かべていた。選択の意図を理解しているわけではないが、面白い選択だと。

（なにを弟から学んだのかは知らんが、あまりそいつを見くびると痛い目に遭うぞ、ソラ）

だが止めはしない。止めるのは無粋なことだ。彼は自分にとって最善の選択をしたのだ。それを尊重しなければなんとするのか。ヴェラドローネは笑うと、立ち上がった。

「ではこれより！ ソラレベリアールヴィルレの試験を開始する！ 両者構えろ！」

ソラはユースを睨む。そして全身に魔力を纏う。身体強化の魔法——纏った魔力が

作用し、一時的に飛躍的な身体能力を得る魔法だ。

対しユースは武器を構えずにソラを見る。目は穏やかながらも、彼が向ける視線には異様なほどの威圧感がある。呼吸も静かで、まさに強者の佇まいだ。そして。

「では、はじめ！」

ヴェラドローネの号令とともに、戦いの火蓋は切って落とされた。その直後だった。

「……まずは初撃を防いでみる」

ソラの視界から、ユースが消えた。

「なっ……!?!」

ソラが捉えた時にはすでに目の前に来ており、武器を構えている。咄嗟に腕を交差して、そこに魔力を集中させた。

強い衝撃が腕を刺激する。衝撃にソラの体は耐えられえず、そのまま背後の壁に激突した。

「がっ……あ……!?!」

なにが起きたのか理解できぬまま、ソラは地面に伏した。

第一節 再会と邂逅 3

観客は固唾を飲む。一体なにが起こったのか、大半が目で見えることが出来なかった。

それはトウネリも同様で、言葉を失う。幾度かユースと戦ったことのある彼女でさえ、先の一撃は捉えることが出来なかったのだ。

「お、おい……見えたかよ今の……？」

そして何より、ユースが人前であれだけの攻撃を繰り出したことは無かった。

次第に会場が騒つく。中にはソラの安否を心配する者もいる。

「なによ……あんなの……わたしにはしなかったじゃないの……」

トウネリが動揺の声を発する。

すると隣にいたヴェラドーネが微笑した。

「そりやそうだ。ユースは相手に合わせて実力を出すからな。あれでも全力じゃない」

人を超えた化け物——それがユースという男に相応しいとトウネリは思った。常々感じてはいたが、今回のそれは確信に変わる。

「だからほら、あいつちゃんと防いでたろ？」

「え……？」

言われて、トウネリは気付く。

ソラが立った。体に傷一つ無く、痛みを感じている様子もない。

「ふむ……思ったより硬いな……」

ユースは攻撃した際の感触を分析していた。

ソラは咄嗟に一撃を腕で防いでいた。その際腕にありつただけの魔力を集中することで、腕の周りに防御壁を展開していたのだ。結果衝撃を和らげることに成功。普通であれば骨が砕けていてもおかしくはない一撃を、無傷で防いだのである。

一方ソラはユースの動きに驚いていた。想定していた以上の速度であった。目で追うのがやつとと言うべきか。また力も凄まじい。防ぎはしたものの、衝撃に腕が痺れている。体を支えることもできず、壁にも激突した。一瞬でも防御が遅れていれば、その時点で意識を刈り取られていただろう。

（これは……全力を出しても通じるかどうか……）

決定的な差があると理解する。それでもやるしかない。ソラは再び構える。

「今まで俺が試験で出した中で一番の速さだった。それを防いだのはまあ、及第点つてところか」

表情を変えずに、ユースは言う。

「で、なぜ向かってこない？」

「ボクの戦い方は、相手の動きに合わせてるやり方だからね……」

答えると、ソラは微かに笑う。

対しユースは「ふむ」と呟くと、地を蹴ってソラに近づいた。先程と同様の速度だ。

であれば同じように、また躲すことが出来ない。そう周囲の誰もが思った。

だがソラは躲す。素早く姿勢を低くし、横薙ぎの攻撃が当たるすんでのところで。そしてユースの持つ木剣に軽く触れて、続けて繰り出された蹴りを避けるために距離を取る。

直後、ユースの手元の木剣は砕けた。

周囲がまた騒つく。一瞬の攻防であるため、やはり理解が追いつかない。

「すいっ……」

トウネリも思わず感嘆を漏らす。

ソラは木剣に触れた時、魔力を流した。

武装破壊の魔法——対象に魔力負荷を掛ける魔法だ。負荷が対象の許容範囲を超えた瞬間、破裂するという仕組みになっている。

木剣に限らず、あらゆる武器に対して有効なものだが、対象に触れなければならぬ

というリスクがあるため、進んで使う者は少ない。

(やつぱりあいつは……わたしなんかよりずっと……)

トウネリは唇を噛む。

一方、ユースは破壊された木剣を眺めて嘆息する。

「これがお前のやり方か？」

問いにソラは軽く頷く。

「そうか……だが武装を破壊した程度じゃこの戦いは終わらないぞ」

ユースはまた地を蹴り、飛ぶように駆けた。踏んだ瞬間の衝撃に耐えられず、地面が
抉れる。

速度が上がった。そう感じたソラは目を凝らし、攻撃の瞬間を見極める。顔面に飛ん
できた右拳をまたギリギリのところ躲す。

「くっ……!?!」

拳が鋭く、掠めた頬に傷が出来る。直撃すれば一溜りもないだろう。

だがユースの攻撃はこれだけでは終わらなかった。今度は左拳が腹部目掛けて飛ん
でくる。

ソラはすぐさま両手のひらでそれを受け止める。

凄まじい衝撃を堪えて、しっかりと地面に足を付ける。

が、それが仇となったのか隙が出来てしまい、ユースは続けざまに腕を掴むとそのまま放り投げた。

このままではまた壁に激突する。しかも先程とは比べ物にならない衝撃が来るはずだ。

ソラは咄嗟に体を回転させて、足に魔力を集中させた。壁に足がついた途端、衝撃を受けて壁に窪みが出来る。

「痛っ……っ！」

衝撃が足に響く。身体強化で負荷を軽減してはいるものの、痛みが走った。

休む間も無く、ユースが突っ込んでくる。

ソラはすぐさま壁を足場にして高く飛んだ。直後ユースの拳が、ソラがいた壁に激突する。

「おいおい、いくらなんでもやり過ぎだろあいつ」

瓦礫と化した壁を見て、ヴェラドーネは苦笑した。

着地して、ソラは土煙の中を見据える。何かを感じ、すぐに腕を顔の前で交差した。

「ぐっ……っ！」

ユースの拳が、交差した腕を直撃する。これも衝撃を軽減しているとは言え凄まじく、痛みにソラは顔を顰める。

その隙に飛んできた膝蹴りが、ソラの腹部に直撃する。

「がはっ……!!?」

よろめいて咳き込むソラ。すぐさま体勢を整えて、頭部に飛んできた回し蹴りを左腕で受け止める。

「どうした？ 防ぐばかりじゃ一向に終わらないぞ?」

呟くように言うと、ユースは体を捻るようにして宙を舞い、左脚を振り下ろす。

ソラはすぐさまその場から飛び退くと、振り下ろされた脚が地面を直撃。これもまた威力が高く、地面を抉った。

一連の攻防に、見ていた者はただただ驚くばかり。息を呑み、見守っている。

ユースにここまで食い下がる者を見たことがなかったのだから当然の反応と言えよう。彼がこれまで試験した者の全てが、初撃の時点でダウンしていた。それはトウネリも例外ではない。

お互い息が上がっている様子もなく、睨み合っている。

しかし全員が疑問を感じていた。ソラは攻撃を防ぐばかりで、反撃を一切しない。ユースの言う通り、彼からは闘志が感じられないのだ。

訝しむ観客を他所に、ソラは思考する。

一瞬の隙、それさえ現れればすぐにでも反撃に移れる。だがユースの佇まい、動きか

らは一切の隙がない。このままでは何れ猛撃に耐えられないだろう。
(こうなったら取れる手段は一つしかない……！)

ソラは遂に自ら地を蹴った。その行動にユースは眉を潜める。

ソラは確かに駆け出した。だが彼はユースに向かう素振りを見せず、闘技場内外周を走り回るだけだ。

「なにするつもりかわからんが……まあ乗ってやるか」

ユースは嘆息気味に呟くと、拳を叩きつけようと突進する。

ソラはそれに反応し、高く飛び上がった。

拳はそのまま壁を直撃し、またも瓦礫と化した。

このまま空中においては格好の的。そう判断しソラは宙に氷の塊を生み出すと、それを足場にして素早く地面に着地する。

直後、土煙の中から壁の残骸が無数飛んできた。

ソラが地面を払うように手のひらを出すと、氷の柱が生成され、残骸を阻む。そして危険を察知し、すぐさまその場から飛び退いた。

氷の柱が砕け、破片が地面に突き刺さる。

ソラはこれを縫うようにして回避すると、今度はユースに向かって力強く踏み込んだ。
だ。

ユースもこれに対応し、ソラ目掛けて突っ込む。

両者の距離は一瞬にして縮まった。

だが二人が組み合うことはなく、ぶつかり合う直前でソラの姿が消える。

「……まやかしか」

ユースはこれがソラによる魔法だとすぐに判断する。気配からソラの位置を判断し、そこに向けて動こうとした。

「これは……？」

しかしユースは動きを止めた。否、止めざるを得なかった。

「なんだ？ どうしたんだ？」

急にユースが動きを止めたことで、見ていた者が騒つく。

ソラは息を切らし、彼から離れたところで片膝を突いていた。

「ほう……面白い戦い方をするじゃないか」

何が起こっているのか理解しているヴェラドローネは、口元に笑みを浮かべる。

「あれは……何？」

トウネリは目を凝らす。何か薄らと光るものが見える。あれは一体なんなのか。

「あれは……糸……？」

「正解だ、トウネリ」

トウネリの疑問に、ヴェラドローネは答える。

そう、ユースの体に無数の糸が巻きついてきているのだ。氷の残骸を縫うようにして張っており、その中心にユースがいる形になっている。

ヴェラドローネは得意げな表情で解説を始めた。

「あれは魔力を練って編み出された糸だ。普通魔力つてのは魔法の作用のために使われる。例えばさつきみたいに氷を生み出したり、肉体を強化したり、魔力を使って結果を生み出すのが魔法の基本だ」

だが、とヴェラドローネは笑う。

「中には魔力そのものを形とし、それを現界させる手法もある。あれはその中でも結構な難易度で——魔力糸と呼ばれている」

「魔力糸……?」

「ああ。全ての属性魔法を操る大魔法使いでさえ、扱える者は片手で数える程しかない。なんせ魔力糸を途中で切れないように編み出すには相当な魔力消費が必至だからな。使えたとしても燃費が悪すぎて、普段使いしてるやつはいない。ましてや人を捕らえるほどの魔力糸なんてどれだけの魔力が必要か」

ヴェラドローネが説明している間に、場内から歓声が巻き起こった。

「す、すげえ! あいつユースを捕らえやがった!」

「幾らユースが手加減しているとは言え、やるじゃないかあいつ」

「期待の新人ってやつか？」

皆口々に称賛の声を上げる。巻き上がる歓声は大きくなり、中には拍手を送る者もいた。

説明しながら、ヴェラドローネはあることに気がついた。そして苦笑して、額に手を当てて頂垂れる。

「ただまあ……相手が悪かったなとしか……」

肩で息をしながら、ソラはユースを見据える。魔力糸による捕縛を最初から狙っていたとはいえ、想定以上の魔力消費を余儀なくされていた。

幾ら無尽蔵な魔力を持っていると言っても、一度に消費すれば相応の負荷が掛かる。ましてやユース程の実力者を捕らえるとなれば、相当強固な作りにならなければならなかった。

額から汗が流れ、荒れた息が整わない。

「おい……」

ふと、ユースが口を開く。

それとほぼ同時に、ヴェラドローネも口を開いた。

「光の加護よ。その光であらゆる災厄から身を守るための障壁を生み出せ」

光の壁が詠唱とともに、闘技場の壁面を境にしてドーム状にゆつくりと展開されていく。

その間、隣にいるトウネリは体を震わせる。巻き起こっていた歓声も、嵐の前触れのように静まり返る。全員の視線が、ユースに向けられていた。

(なによ……なんなのよこれ……！)

悪寒が走り、トウネリの額から冷や汗が滲み出る。

それは周囲にいる者も同様で、肩で息をしているソラも例外ではなかった。

光の壁が闘技場を包んだ直後、ユースから爆発したように渦巻く炎柱が巻き上がった。炎は周囲の水を溶かし、魔力糸を焼いていく。

「今のはどういうつもりだ……？」

「あ……」

ソラはユースの問いに答えられなかった。恐怖に心を支配され、ただ目の前の存在に平伏している。

殺気。悍しい程の殺気が、ソラを突き刺す。

「いいか、よく聞け。こういうのはな、格下のやつにしか通じねえんだよ」

炎の中から、ユースが歩み寄ってくる。

「お前……なんのためにギルドに入るつもりだ？」

目の前に立ち、顔を覗き込むようにしてソラを見るユース。吸い込まれるような鋭い眼光が、戸惑うソラの目を見据えている。

「ボクは……ボクはただ誰かの笑顔を守りたくて……」

「じゃあ聞くが、相手が殺すつもりで襲ってきたらお前は どうするつもりだ？ もしお前より強いやつが、お前が守ろうとしているものを壊そうとしたらどうするつもりだ？」

ユースの問答に、ソラの脳内にかつての記憶が呼び起こされる。大切な人を守れなかったあの日のことを。

あんな思いはもう二度としたくない。そのために、アウルスから戦う術を学んだのだ。ソラの瞳が戸惑いから決意に変わる。

「絶対にそんなことさせない。なにがなんでも守り通す。そのためにボクは戦う力を求めたんだから」

「じゃあ、今のはなんだ？」

「あれがボクの戦い方だよ。極力、ボクは相手のことも傷つけたくない。その人もきつと、誰かに大切に思われているって信じてるから」

ソラの言葉は、トウネリの耳にも届いていた。

（それが……ソラの……あいつの思い……）

トウネリは胸に手を押し当てる。彼女もまた、同じ思いを抱えている。何より彼女は、あの時ソラの力になれなかったことを後悔しているのだ。そのために戦う術を得て、今ここにいる。

拳を強く握り、トウネリはソラを見る。

(だつたら……わたしは……)

「ここから立ち去れ。お前にこの場所は相応しくない」

「けどボクは！」

「お前は不合格だ」

吐き捨てるように言うと、ユースは踵を返して離れていく。その瞳は冷たい。

ソラは肩を落とした。ただ彼なりの思いでこの場所に来ていた。それは間違いではない。この思いは間違いであるはずがないのだと。

「なににもあそこまで言わなくてもいいのにな？」

落胆するソラを見て、周囲から同情する声が聞こえ始める。

彼らは皆、ソラの思いを否定する気はない。むしろ立派な考えではないかと思つてゐる者もいる。まだよく知らなくても、きつと彼は心優しい人間なのだろうとひしひしと感じていた。

「なにが気に食わなかったんだろうな？」

「さあな。案外全力出してて負けたとか？」

「なわけないだろ。少なくとも確実に手加減はしていたぞ、あいつ」

彼らがソラに対して感じているのは、あくまで上辺だけを見てのものだ。

だがユースは戦いの中で、しっかりとソラの心の奥に潜むものを捉えていた。故に彼はそれを否定し、立ち去れと言ったのである。そうしなければいずれ、ソラは身を滅ぼす。

歩きながら、ユースは背中越しに一つ呟く。

「誰かに与えられた思いだけでやっていけるほど、この世界は甘くないんだよ」

ユースが掛けたその言葉は、ソラの心を深く抉るのだった。



ルージユヴェリアは受付で書類を眺めていた。

シエルヴィアが押しつけられた仕事を手伝う彼女だが、ソラのことか心配で集中出来ずにいる。目を通して内容が頭に入らず、その処理の手が一向に進まない。時には「んー、うーん」と唸ることもあった。

その様子を隣でちらちらと見るシエルヴィア。これでは一人でやっているも同然で

あるため、嘆息を漏らす。

「ルー、そんなに心配なら見てきたら？」

「え、いいんですか!？」

食いつきが早い。シエルヴィアは苦笑する。

「そのかわり、終わったらすぐこれ手伝ってよね？」

「はい！ ありがとうございます！」

嬉々として立ち上がると、ルージュヴェリアは書類を卓上に放り投げる。一応は重要書類なのだが、そんなことも気にせず一目散に駆け出した。

闘技場に入ると、観客席はこの上ないほど静まり返っていた。観客の視線の先では、ソラが肩を落として立ち尽くしている。

「怪我はしていないみたいだけど……」

あの様子から察するに、不合格であったのだろうか。そうルージュヴェリアが考えていると、ふとすれ違う者がいた。

思わず振り返ると、黒いフード付きのマントを身に纏っており、なんとも怪しい雰囲気がある。

ルージュヴェリアはフードの影から覗く顔を、一瞬ではあるが見ていた。

「今の人……どこかソラさんに似ていたような……」

背中を見つめるルージユヴェリアを他所に、マントの人物は静かに歩いていく。フードの中にあるのは、輝くような銀髪。深く被っているため、口元以外は上手く判別できない。

歩きながら、不意に口元が微かに動いた。

「そう……それがあなたの答えなのね、ユース……」

その眩きは、誰の耳にも入らずに虚空へと消えた。

第一節 再会と邂逅 4

噴水広場に設置されたベンチに腰掛けると、ソラは深いため息を吐いた。

結局あの後、ヴェラドローネがやってきて、苦笑混じりにこう言ったのだ。

「試験官が不合格を出した以上、ギルドに入れないのが慣しだな。私はお前を迎え入れてやってもいいんだけど、例外が無い以上すまないが」

つまりは、ギルドへの加入が出来なかったということである。

肩を落とし、ユースに言われた事を思い出す。

「——誰かに与えられた思いだけでやっていける程甘くねえんだよ」

それはソラにとって、胸を抉るに足る一言だ。

俯くソラ。そんな彼に近づく姿があつた。

「なにシケた顔してんのよ、あんた」

顔を上げて、ソラは声を掛けてきた人物を見る。トウネリだ。

「トウネリ……?」

「隣……座つてもいいかしら?」

無言で頷くのを見て、トウネリは隣に腰掛ける。

腰掛けて、トウネリは天を見上げた。青く澄み渡っていた空は、日が暮れ始めていたためオレンジ色になっている。

「あいつの言葉、あまり気にしない方がいいわよ」

呟いて、トウネリは身につけていた鞆から二つの小包を出して片方をソラに差し出した。

「はい、これ上げるわ。美味しい物でも食べて忘れなさい」

包みを受け取り、ソラは中身を開いてみる。

「あ……これ……」

包みの中は、今朝方購入したリングゴのジャムが入ったパンだった。

「それ、わたしのお気に入り。まあ店主がやたら安い値段で買わせようとするから、なんでもかいつも適正価格で買うための交渉をするハメになるんだけど」

「ボク、これ二つ150ヘルツエで買った」

「あ、そうなの？ ちなみに材料費を考えたら、普通は二つ200ヘルツエかそれ以上よ。ちなみにわたしには常連だからって、最初二つで70とか言ってきたわ。まあ結局同じ150に落ち着いたんだけど」

値段を聞き、ソラは苦笑する。もしかすると、薄々男だと気づいていたのかもしれないな

いとも思いながら。

「なんでこんなことするのかって、あの店主に聞いたのよ」

「そしたらなんて?」

「そうしたいからそうしてるだけって、しれつと言ったわ」

トウネリは笑うと、ソラの顔を見つめる。

「あんたもさ、自分がこうしたいって思ったから、ああいう戦い方したんでしょ?」

「うん……」

「だったら胸を張って貫きなさいよ。周りがなんと言おうともね」

トウネリの言葉は、ソラの傷ついた心を癒していた。

同じ言葉を心の中で反復し、小さく頷く。そうだ。確かにきつかけはあの日、エイネに言われた事かもしれない。それでも自分がしたいと思ったのは、紛れもない自分自身が出した答えなのだ。

「ありがとう、トウネリ。少し気が楽になったよ」

「そう? それなら良かったわ」

ソラの笑う顔を見て、トウネリは安堵する。そして小さな声で呟いた。

「やっぱりあんたに渋い顔は似合わないわよ」

「ん?」

「なんでもないわよ。それよりほら、食べなさいよ」

「いやでもボクもこれ持つてるし」

「はあ？ あんた昼に食べたんじゃないの？」

「いやあの……最初に会った時にタダで貰ったからそれで」

ソラの言葉に、トウネリは大きく項垂れる。この男もこの男でお人好しすぎるのではないかと。気持ちは分からなくもないのだが。

「じゃあいらないわよねって、なんで食べてるのよ」

「いあ、ふおくおふおほうはんひようほほほっへ」

「食べながら喋るな」

「いやだから、ボクが買ったのと交換しようと思って」

「ごめん、意味わかんない」

呆れた表情で返して、堪らずトウネリは吹き出す。そのまま腹を抱えて笑い始めた。突然の行動にソラは小首を傾げるが、すぐに釣られて笑い出す。そして思っていた。ああ、彼女は優しいままなのだ。それが分かり、嬉しくもあった。

「まあいいわ。交換しなくて」

「え、でもそれじゃ悪いよ」

「いいのよ。わたしが上げたいから上げるんだから」

「じゃあボクは交換したいから交換する」

「それじゃあ話が一向に終わらないじゃないのよ」

言いながら、トウネリは内心思った。お互いがやりたいことを押し付け合うのも考えものだなと。

二人のやり取りはしばらく続くかに思われた。

「あ！ お姉ちゃん！」

そう呼んで、二人に近づく者がいた。

声に気づき見てみると、一人の銀髪の少年がいた。

「あ、君は……」

それはソラが怪我を治した少年だった。

「ほらお母さん！ この人に怪我を治してもらったの！」

少年をソラを指差すと、はしやいだ様子で母親を呼ぶ。すると一人の女性が歩み寄ってきた。

「もう、セシル。失礼でしょ？」

「わかってる！ ねえねえお姉ちゃん！」

「もう……本当にわかってるのかしらこの子……」

女性はため息を吐くと、二人に軽くお辞儀をして話し始める。

「その、うちの子がご迷惑をお掛けしたようで」

「そんなことないですよ。転んだのをたまたま見掛けて治してあげただけですから」
「ありがとうございます」

母親は深々と頭を下げた。

一方セシルはさらに近寄って、ソラの右手を取った。

「ねえねえ、お姉ちゃん名前なんて言うの？」

「ん？ ボクはソラっていうんだよ」

「ソラお姉ちゃん！」

お姉ちゃんと呼ばれているのを見て、トウネリは笑いを堪える。が、ソラとセシルが笑っているのを見て、ふと表情が曇り始めた。

それには気づかず、ソラはセシルの手を握り、その頭を優しく撫でる。なんとなく、小さい頃の自分と重ねていた。

「僕、セシルっていうの！」

「そっか、いい名前だね」

「お姉ちゃんも素敵な名前だと思うの！」

笑い合う姿を見て、母親も微笑む。

「セシル。あまり邪魔しちゃダメでしょ？」

母親の言葉に、ソラは微笑んで返す。

「大丈夫ですよ。ね？ トウネリ」

そして隣にいるトウネリの方に顔を向けた。が、そこに彼女の姿は無く、辺りを見渡しても見当たらない。

「あれ？」

「ん？ どうしたの？」

小首を傾げるソラ。釣られてセシルも同じ方向に顔を向けた。

「あれ？ 一緒にいたお姉ちゃんがないね」

セシルが首を傾げるのを見て、ソラは笑って答える。

「なにか用事でも思い出したのかな？ 彼女、忙しいみたいだから」

「ふーん。あ、ところでお姉ちゃんはここでなにしてるの？ 街であまり見掛けない人

だなあって思ってたの」

セシルの唐突な問いに、ソラはどう答えたものかと頭を悩ませる。が、隠す必要も思っていないため、ありのまま話した。

「うん。実はギルドに入ろうと思ってこの街に来たんだけ」

「ギルド！ ねえねえ、ギルドだってお母さん！ カッコいい！」

「え、えええそうね……」

声を掛けられた母親が、少し青ざめた表情で答えた。心なしか、唇が微かに震えている。

子供とは対照的な反応に、ソラは疑問符を浮かべる。が、そこで詮索はせず、セシルの頭を優しく撫でた。

「そうかな？」

「うん！ だって沢山の人を助けてるんでしょ？ すごくカッコいいことだよ！」

「そつか。でも入れなかつたんだよねー」

「え!? なんで!？」

「うん。まあ色々とあつて」

表情が暗くなったのを見て、セシルが少し考えるように俯く。が、すぐに顔を上げると、満面に笑顔を咲かせて言った。

「ねえお姉ちゃん！ 僕の家に遊びに来てよ！」

「え？ 今から？ でも急には悪いよ」

「大丈夫。ね？ お母さん？ お世話になったんだから、恩返ししてあげなくちゃ！」

セシルの言葉を聞き、母親は彼の顔を見つめる。満面の笑顔からは純粋な想いが伝わってくる。

すると母親も微笑んで答えた。

「ええ、そうね。良かったらうちに来てください。あまり豪勢なおもてなしは出来ませんけど」

「いや、でもさすがに……」

断ろうとすると、セシルがあからさまに沈んだ表情をする。瞳が潤み、今にも泣きそうだ。

「えと、その……じゃあお邪魔します……」

居た堪れなさに、ソラは苦笑しながらも承諾の意を示す。

するとまたセシルの表情がパツと明るくなり、ソラの手を引いた。

「じゃあ行くー！ こっちだよー」

「あ、もう待って。そんなに急がなくても逃げないからー」

走っていくソラとセシルの背中を、母親は呆然と眺める。手を繋ぎながら駆けて行く姿は、微笑ましくもある。

「なんだか……姉妹みたいね……」

母親は呟くと、後を追って歩み出した。

一方、ソラたちから離れたトウネリは、ギルドへと続く道を一人歩いていた。唇を固く結び、苦悶の表情だ。

ソラとあの少年が一緒にいる姿を見た時、トウネリの脳裏にはある光景と重ねてい

た。一人の少女が、一人の空色の髪をした小さな少年の頭を撫でてゐる様子だ。一度も見たことがないがはつきりと想像できた光景。その中で二人は満面の笑顔を浮かべてゐる。

拳を握り、トウネリは立ち止まる。歯を食い縛り、天を仰ぐ。

「わたしにはやつぱり……あいつと一緒にいる資格なんか……」

トウネリが独り呟いた言葉は、暗がり掛かる空へと静かに消えていった。



ヴェラドローネとユースはギルドの支部長室にいた。

ヴェラドローネがにこやかに笑っている一方で、ユースは険しい表情をしている。

「一体彼のなにが気に食わなかったんだユース？」

椅子に座りながら、ヴェラドローネの問い掛ける。対しユースは腕を組んで壁にもたれ掛かった。

「彼は実力も素養も十分だっただろう？」

返事がないため、ヴェラドローネは続け様に問いかける。

するとユースは嘆息混じりに答えた。

「確かに、あいつはギルドに入るのに十分な力を持っている」

「じゃあなんでダメなんだ？」

「戦い方だ。あんな戦い方は、命が幾つあっても足りない。それに時にはどうしようもない悪とぶち当たることだってある」

「その時、彼の戦い方では危険だと」

「ああ、そうだ」

ユースはソラの力を認めていないのではない。戦ったからこそ分かる。彼はこの先も大きく成長していくことだろう。だが持っている思想は、ただの理想にしかならないことも分かっている。故に認めなかったのだ。認めるわけにはいかなかった。

「まあそうだよな。お前とは対照的なやり方だしな」

「そういう意味じゃねえよ」

「いいや。そういう意味だ。お前は自分が諦めた道を歩ませまいとしているだけに過ぎないよ」

ユースは顔を反らすと舌打ちする。

「けどもしかしたら、ということもあるだろう？」

「いいや、無い。どうしようもない悪はその場で滅ぼすべきだ」

「それはお前の価値観に過ぎない。彼はただ救えるものを全て救おうとしているだけ

じゃないか」

「それが理想に過ぎないって言ってるんだよ」

話は平行線のまま、一向に終わりが見えない。

ヴェラドローネとしては、ソラをギルドに入れたいと考えている。が、試験官が不合格を出して入ったという事例は一度もない。例外を作らないためにも、ユースに決定を取り消させようとしている。

対してユースはその意思に反する考えだ。何よりは彼は、ヴェラドローネとの付き合いが長い。

「お前はあいつを利用してなにをしようとしている」

「おや、人聞きの悪いことを言う。私はただ、新たに入りたいという人間を歓迎したいだけだよ」

にこやかに笑うヴェラドローネを、ユースは睨み付ける。

「お前らはいつもそうだ。影でコソコソとなにかを企んでいやがる。そんな臭いが隠せてねえんだよ」

「おや、私はそんな臭いを出してるつもりはないのだが」

ヴェラドローネはわざとらしく、自分の体を嗅ぐようにして右腕を鼻に近づける。

その様子にユースは眉を寄せながら、ヴェラドローネの目の前に歩み寄って見下ろす。

「とにかく、お前がなんと言おうと俺はあいつを認める気はない。あいつはこっちの世界に来るべき人間じゃないからな」

吐き捨てるように言うと、ユースは部屋を出ていった。

ユースの背中を見送り、ヴェラドローネはくすりと笑う。そして立ち上がると、窓から外を眺める。

眼下では人が行き交う姿が見受けられる。その中には独り歩くトウネリの姿もあった。

見下ろしながら、ヴェラドローネは不敵な笑みを浮かべながら一つ呟く。

「別にお前がどうしようが、彼はこっちの世界に来る運命なんだよ」

ヴェラドローネの言葉は誰の耳にも届くことはない。太陽はゆっくりと沈んでいく。

第二節 重なる面影と不穩なる影 1

「ここが僕たちの家だよ！」

セシルの家は王都外壁の側にあつた。ここは王都に暮らす者の中でもそこそこ裕福な者が暮らす住宅街で、セシルの家はソラが住んでいた家よりも立派な作りになつてゐる。

「お姉ちゃん、早く上がつて上がつて！」

「えと、お邪魔します……」

家の中に入り、ソラは中を見渡す。玄関からすぐ向かつた先にはテーブルと椅子が置かれており、懐かしさを感じる。内装自体は、ソラが暮らしていた家と大した変わりはない。なかつた。

「もう、セシル。あまりはしやがないの。ソラさんが困つているでしょう？」

「大丈夫だよ、ね？ お姉ちゃん！」

「あはは……」

セシルの勢いに押されて、苦笑いを作るソラ。それを見て母親は少しため息混じりに

言った。

「ごめんなさい。セシル、あまり年上の人と接したことが無いから……」

「いえ、大丈夫ですよ」

にっこりと笑うセシルを見て、小さい頃の自分と重ねているソラ。自然と笑みが溢れた。

「ご飯もご馳走しますので、ゆっくりしていつてくください」

「え!? 流石にそこまでお世話になるわけには……」

「えー、一緒に食べようよー」

ソラの受け答えに、セシルは頬を膨らませる。どうやら最初からそのつもりで招いていたらしい。

観念し、ソラは小さく頷いた。

「じゃあその……ご馳走になります」

「あまり豪華なものには出来ませんけど」

「いえ。むしろ豪華なものが出てきたら気が引けてしまうので」

母親の言葉にソラは苦笑する。すると母親は思い出したように口を開いた。

「あ、と。すいません、申し遅れました。私はセシルの母親のレフィナと言います。この度はありがとうございます。重ねて感謝します」

「ああ、いえその、レフィナさんが思っている程大した怪我でも無かったのよ」

母親レフィナがまた深々と頭を下げたため、ソラは狼狽する。するとセシルが助け舟を出すかのように言った。

「もう、お母さんつてば固すぎ。お姉ちゃん困ってるじゃん！」

そしてソラの右手を引いて、ついて来るよう促す。

「僕の部屋に案内するね？」

「あ、うん」

引かれるがまま、ソラはセシルの後をついていく。その二人の背中をレフィナは微笑んで見送った。

セシルの部屋は二階の奥にあった。中に入ると、一つのクローゼットとベッドに加え、小さなテーブルと椅子が置かれている。ごく普通の、一般的な部屋だ。ベッド脇には小さな本棚も置かれており、子供が読むような物が並べられている。

「ここが僕の部屋だよ！」

嬉々として部屋に入ると、セシルは駆け足でベッドに飛び込んだ。

「もう、そんなことしてると危ないよ？」

苦笑しながら、ソラもベッドの小脇に腰掛けた。

もう一度ソラは部屋を見渡してみる。かつて自分がいた部屋を彷彿とさせる構造に、

自然と落ち着いている。

「ねえねえ、ご飯が出来るまで何かお話して？」

「お話？」

「うん！ お姉ちゃんが体験した面白いお話！ 何か無いかな？」

「面白いお話かー。でもどうして？」

「だってお姉ちゃん、なんか不思議な人だなんて思ったから」

セシルがなにを感じているのかはわからないが、少なくとも好奇心で尋ねていることだけはわかる。ソラは何か無いだろうか、自分の記憶の中を辿った。

「じゃあ……ボクが小さい時に迷子になったお話しようかな」

「え？ 迷子？」

「うん、そう。あれはボクが初めて村の外に出た時のことなんだけどね……」

ソラは当時の記憶を呼び起こすように話し始めた。

それはまだ三歳になって間もない頃のことだった。

好奇心の旺盛さからよく外を走り回っていたソラはある日、村の外、森の中へと入っていったのである。

広大な森の風景に心奪われていたソラだったが、歩き続けていく内に帰り道が分から

なくなっていく、最後には完全に迷子となつてしまつていた。

「エイネ？ エイネ……どこお？」

目に涙を浮かべて、ソラは辺りを見回すがあるのは木々だけでなにもない。

日も落ちてきて途方に暮れていた時、ソラの下に一匹の兎が跳ねて近寄つてきた。

「わあ、可愛い……！」

初めて出会うその姿に、ソラは目を輝かせる。

兎に触れようとゆっくりと近づき、しゃがんでその体を優しく撫でた。

「温かい……」

兎の体に触れて、ソラは落ち着きを取り戻していった。

撫でている、兎が顔を上げてソラを見つめた。鳴き声はなく、ただ見つめているだけだったが、ソラは不思議とこの兎がなにを伝えようとしているのか理解できた。

「どこかに案内してくれるの？」

ふとソラは周囲を見た。他の森の動物たちも集まつて、ソラを見ているのだ。本来ならば食うか食われるかの関係にあるはずの動物たちも、どういうわけか一緒になつて集まつている。それぞれが鳴き声を上げて、まるで何かをソラに伝えているかのよう。

「みんなについて行けばいいの？」

ソラが立ち上がると、動物たちは移動を始めた。

動物たちの後を追ひ、ソラは森の中を進んでいく。辺りは暗くなり掛かっており、しばらくすれば森は闇に包まれることだろう。

歩くこと少しして、一軒の小屋が視界に入ってきた。小屋には明かりが灯っており、火によるものなのか微かに揺らめいている。

「ここに行けばいいの？」

ソラが問うと、動物たちがまた各々鳴き声を上げた。

すると小屋の扉が開き、一人の大男が現れた。熊のような体格を持ったこの男。後にソラの師匠となるアウルスだ。

「なんだ、外が騒がしいと思えば。坊主、どこから来た？」

「えつと……ニギロから……」

体格から来る威圧感に、ソラは少し怯えながら答える。

アウルスはしばしソラを眺めると、空を見上げた。もう日が沈み、森の中は闇に包まれている。

「来い、小僧。村まで送ってやる」

小屋の中から明かりを持って来ると、アウルスはそう言った。

最初は怯えていたソラだったが、アウルスの中にある優しさを感じ取り、自然と安堵する。

「あの……おじさんはここに一人で住んでいるの？」

「ああ、そうだ。俺はこの森を守ることを使命にしているからな」

「使命？ 使命ってなに？」

「まあ……お前さんならいつか分かる日が来るだろうさ」

含みのある物言いと言うと、アウルスは大きな手をソラの頭に優しく置いた。

「ほら、早く行くぞ。お前さんの家族が心配しているだろうからな」

「あ、うん……」

早々に歩き始めたアウルスを見て、慌ててソラは後を追い掛ける。が、ふと立ち止まり振り返った。

「その、みんなありがとう！」

ソラは手を振って、動物たちに感謝を述べる。

「おい、坊主。早くしろ」

「あ、はい！」

ソラは慌ててアウルスの側に寄った。

道中、ソラはアウルスに色々なことを聞いた。森に住む動物たちのこと。どうして森を守っているのか。普段どのような生活をしているのか。どの質問にもアウルスは取り立てて答えることはなく、どれもあやふやな回答をしていた。

そしてしばらくして、アウルスの案内の下ソラはニギロに着いたのである。

「ソラ！ もう、どこに行つてたのよ！」

ニギロに着いた途端、ソラを探していたエイネが駆け寄つてきた。相当心配していたのか、若干目に涙を浮かべている。

「ご、ごめんなさい……少し森に行つてみたくて」

「バカ！ どれだけ私が心配したか！」

叱りつけるエイネだったが、すぐにソラの体を抱きしめた。

「でも良かった……何事もなくて……」

「ごめんなさい……」

「ううん、いいのよ。でも今度から行きたいときは私に言つて？」

「うん……そうする……」

ソラの体を離れた後、エイネはアウルスの存在に気がつく。

「その、ありがとうございます。あなたは……？」

「なに。たまたま森に住んでいた守り人だ。それじゃあ坊主。あまり誰かに心配を掛けるんじゃないぞ」

微笑に笑うと、アウルスは森の中へと去っていった。

「その日を境にして、ボクは森に行つて沢山の動物とお話するようになった……て話はい、おしまい」

話を終えて、ソラはセシルの顔を見てみる。目を輝かせて、まじまじと見つめていた。

「すごい！ お姉ちゃん、動物さんとお話もできるの？」

「うん。動物の言葉が不思議と分かるんだ」

「すごいすごい！ やつぱり僕が感じた通りの、すごいお姉ちゃんだよ！」

きやつきやとはしやぐセシルを見て、ソラは微笑む。

「ねえねえ！ 他に何か——」

セシルが嬉々として次の話を促そうとしたときだった。

ガチャン、となにかが割れるような大きな音が下から響いてきた。

「お母さん？」

何事かと、セシルは首を傾げる。

何か嫌な予感がして、ソラはすぐに立ち上がった。

「セシルはここにいて？ ボクが様子を見てくるから」

「あ、待つてよ！ 僕も行く！」

ついでに行こうとするセシルを止めようとも考えたが、今はすぐにでも状況を確認しなければならぬ。そんな予感がして、手でセシルを庇うようにしながらソラは一階に下

りた。

「いいか！ 答えは明日まで待つ！ それまでゆっくりと考えておけ！」

そんな怒声とともに、男複数人が外に出て行く場面に出くわした。

レフィナは明らかに落ち込んだ様子で肩を落としている。

「あの……どうしたんですか？」

「あつ……」

ソラとセシルが見ているのに気づき、レフィナはすぐに笑顔を作る。が、とても心情を隠している様子ではない。

「いえ、その……働き口の人と少し揉め事がありました。すいません、騒がしくしてしまつて」

「お母さん、大丈夫？」

心配そうに顔を覗き込むセシルを見て、レフィナは一瞬唇を噛み締めた。

「ええ、大丈夫よ……」

ソラはレフィナの表情に見覚えがあつた。

自分が消え掛かっていることを隠していた時のエイネが、同じ表情をしていた。

だが、何も言えない。きっと何を聞いてもはぐらかされるのが目に見えているから。

「お皿割れてる……」

床に落ちて割れた皿を、セシルは見つめる。

ソラは少しだけ目を閉じると、割れた皿に近づいた。

「大丈夫。ボクがなんとかするから……」

眩くと、ソラは散らばった破片に手をかぎす。すると淡い光が破片を包み、見る見るの内に元の皿の形に戻していく。

その様子をセシルとレフィナは呆然と眺めていた。

「ほら、直った」

光が収まると、割れた皿は元通りになっていた。

「すごい！ お姉ちゃん、やっぱりなんでも出来るんだね！」

セシルは目を輝かせて、満面に笑顔を浮かべる。

「出来ることなら、どんなことだってやりたいからね」

微笑みながら、ソラは拾った皿をレフィナの前に出す。

「はい。どうぞ」

「ありがとうございます……」

呆然としたまま、レフィナは差し出された皿を受け取る。そして受け取った皿をしばし眺めて、レフィナは漸く我に帰った。

「あ、その、晩飯の用意が出来ましたのでどうぞ」

「わあーい！ 僕お腹空いたー！」

「もう、セシルったら。御行儀よくしなさい」

「はーい！」

セシルの笑顔を見て、レフィナは自然と笑顔を浮かべた。

それを見てソラは安堵したように微笑む。が、少し険しい表情で家の出入り口を見つめる。正確には、先程の男たちを思い出す。

（さっきの人たち、なんていうか……すごく嫌な感じがした）

これは何かあるかもしれない。そんな不穏な感覚にソラは不快感を露わにするのだった。



一人の女性が街をふらふらと歩いている。

外はすっかり暗くなり、街行く人も減ってきている。店は閉まり、静寂が王都の街を包んでいる。

覚束ない足取りと、絶望に満ちたような表情から、女性に何かあったのは間違いないだろう。

「あ、ああ……」

目に涙を浮かべて、力無く声を発する。言葉に出来ない何か、彼女の心を蝕んでい

る。

ふと、女性は賑やかな声に立ち止まった。

女性は声の方を見る。明かりが灯るその建造物が何かを、女性は知っていた。

次第に女性の瞳に光が戻っていく。希望の光が宿っていく。

「お願い……私の子を……」

眩きながら、女性はギルドの扉に手を掛けた。

が、女性は踏み止まった。というのも、今彼女は金銭を持っていないのだ。

ギルドに依頼するには、その内容に応じた金額、あるいは同等の対価を支払わなければならぬことになっている。

「あつ……ああ……っ！」

女性の顔にまた絶望が現れる。

そんな女性の背後に立つ者がいた。

「あの……どうしました？」

声を掛けたのは、ギルドの受付嬢ルージュヴェリアだ。普段ギルドの受付に付きつきりの彼女は、仕事が基本的に無い夜に、よく散歩に出掛けているのだ。

小首を傾げて、ルージュヴェリアは女性の顔を見る。酷く寡れた様子から、何かあったことはすぐに理解できた。

「何かギルドに依頼でしょうか？」

「……子が……」

「えっ？」

何かを言ったのは分かるが、声があまりに小さく聞き取れなかった。

ルージュヴェリアの問いに、女性は涙を溢して、訴えるかのような表情で口を開く。

「私の息子を……助けてください……」

「それは一体どういう——」

意味なのか。そう問おうとして、背後に気配を感じ、ルージュヴェリアは振り返った。

「おう、探したぜえ？」

振り返った先に、男が複数人立っていた。

明らかに怪しい雰囲気のものたち。

（あれは……）

男たちを注意深く観察していたルージュヴェリアは、彼らの服に付いているバッジに目が行った。

（あれは、リベルトス商会の紋章……？）

リベルトス商会。数カ国を跨いで商売取引を行なっている大きな組織で、ここヘルデイロでも商品の取り扱いの大部分を担っている。王都内の土地の一部を売買しているため、ヘルデイロ内でギルドに並ぶ組織とも言える。

そんなリベルトス商会に登録している人間は、今男たちが身につけているバッヂの携帯が義務付けられていた。

「おう、その可愛いお嬢ちゃん。悪いがその女を引き渡してくれねえかな?」

女性は怯えた様子で、ルージュヴェリアの背後に隠れている。全身を震わせていることから、ただならぬ状況なのはすぐに分かる。

「この人が何かしたんですか?」

「その女はな、うちへの借金の返済が終わってないんだ。猶予を与えたが期限になっても一向に支払われないんでな」

「違います……私は……」

「ああ!? 何が違うってんだ!?!」

男が声を張り上げたため、女性は体をビクつかせて口を紡ぐ。

「その借金というのは、正当なものなのでしょうか?」

「ああ? そりゃそうさ。その女はうちが取り扱っている土地を買ったんだ。その支払いがまだ済んでないだけさ」

男の答えを聞き、ルージュヴェリアは女性の方を見る。女性は小刻みに首を横に振った。

「違うとこちらの方は言っていますか？」

「うるせえ女だなあ！ さっさとそいつを引き渡せって言つてんだよ！」

男が叫ぶと、全員が懐からナイフを取り出した。

それを見たルージュヴェリアはすぐに身構える。戦闘に不向きな彼女だが、正義感は強かった。

（助けを呼べば、誰かが来てくれるはず）

意を決して声を張り上げようとした時だった。

「ふーん……女二人相手に寄つてたかつて武器を構えるんだ。小さい男たちね」

どこからか声がした。

聞き覚えのある声にハツとして、ルージュヴェリアは振り向く。

「トウネリさん！」

声の主はトウネリだった。

「あ？ なんだお前」

「別に。たまたま通りすがつたその子の友達よ」

「おいおい、嬢ちゃん。あまり首突つ込むと怪我するぜ？」

トウネリの強気の姿勢を、男たちは笑う。

対しトウネリは心底呆れたようにため息を吐いた。

「そこあなた？」

「は、はい！」

トウネリが顔を向けると、背に隠れていた女性が体を跳ねさせた。

「後で事情、聞かせてもらいますから」

それだけ言うと、トウネリは男たちに向かって駆け出した。

「は！ ただのガキに何が出来るってんだ！」

男の一人がナイフ片手に、トウネリに向かつていく。

「別にあなた達くらい、すぐに片付くわよ」

吐き捨てるように言うと、トウネリは男の動きを見据える。

「生意気なガキだな！ 悪いが少し痛い目にあつてもらうぜ！」

男はトウネリにナイフを振り下ろそうとした。

「遅いつての……」

が、振り下ろすよりも先にトウネリは地を強く蹴つて距離を一気に詰める。

その動きに男は一瞬止まってしまい、出来た隙を狙つてトウネリは相手の顎目掛けて跳び膝蹴りを喰らわせた。

「ぐえ……!」

短い悲鳴とともに男は地面に伏す。

一連の光景に他の男達は思わず面食らっていた。

「くそ! かかれ!」

すぐに立ち直ると、男達は一斉にトウネリへと向かっていく。

トウネリは冷たい視線を男たちに送ると、ダウンさせた男のナイフを拾ってまた地を蹴った。

「このガキい!」

男の一人がトウネリにナイフを振り下ろす。

トウネリはそれを拾ったナイフで受け流すと、続け様に腹部を強く殴打した。

「ぐふっ……!?!」

衝撃に男は悲鳴を上げる。が、それだけでは終わらず、さらに追い討ちとして回し蹴りが側頭部に飛んだ。

また一人、呆気なく地面に倒れ伏す。

「ハ、ハ、ハッ!」

一瞬狼狽た別の男に対し、トウネリは容赦なく顔面に拳を打つけた。その威力により男の鼻は折れ、砕けた歯が宙を舞う。

呆気なく鼻を折られた男は、これも呆気なく氣絶した。

「い、こいつ強いぞ……!」

立ち止まって一步下がる男が、トウネリの視界に入る。

トウネリは一瞬でその男に詰め寄ると、ナイフを握る手を掴んで捻った。

「ぐぎや……!?!」

腕を折られ、男は握っていたナイフを落とす。落ちたナイフは切っ先が下を向いており、男の足を突き刺す。

「ぎやああああ!!」

「あ、ごめんなさい。そうなるとは思ってなかった」

意図していなかった結果に、トウネリは苦笑した。

「なっ……なんだよお前は……!」

残された男が、恐怖に打ち拉がれる。たった一人の少女を前に、なす術もない。

トウネリは残った男を睨みつける。

「く、くそが……見下しやがって!!」

男がナイフを構えた。

直後、その手にナイフが突き刺さる。投げたのは他でもない、トウネリだ。

「最初に見下してたのはあんたでしょ」

「くそ！ くそおおお!!」

最後の一人は、血が流れる右手を抑えて一目散に逃げ出した。が、程なくして失速し、地面に倒れた。

「ああ、ごめん。さつき投げたナイフ、即効性の睡眠薬塗っておいたから」
涼しげな表情で言う、トウネリは服についた埃を払った。

「す、すごい……」

ルージュヴェリアが思わず感嘆を漏らす。彼女にとつても、背後にいる女性にとつても、まさに一瞬の出来事だった。

「とりあえずこいつらは後で尋問するとして……まずはあなたの話から聞かせてもらえますか？」

トウネリは近づき、優しげな表情で問いかける。

すると女性は膝を突き、涙を流しながらトウネリの服を掴んだ。

「お願いします！ 私の……私の息子を助けてください！」

女性の悲痛の叫びに、トウネリとルージュヴェリアは顔を見合わせた。

第二節 重なる面影と不穩なる影 2

セシルの家で晩ご飯をご馳走になったソラは、食事中成り行きで今日の宿が無いことを話してしまい、結果セシルの家に泊まることになっていた。

食事を終えて、せめて後片付けくらいはと食器を洗っていると、セシルが隣に寄ってきた。

「どうしたの？ セシル」

「うんうん、特に意味はないの。ただちよつと隣にいたいなって思っただけ」

えへへと笑うセシルを見て、レフィナは微笑んだ。

「セシルったら、すっかりソラさんのこと気に入っちゃって」

「だって一緒にいたらなんだか落ち着くっていうか……なんだかお父さんというみたい」

セシルの何気ない一言に、レフィナの顔が曇る。

そういえばセシルの父親はどうしているのだろうか、そんな疑問がソラの脳裏に浮かび上がる。

が、レフィナの雰囲気を見るに、あまり口に出して聴く気にはなれない。

「ねえねえ、お姉ちゃん！ 一緒にお風呂入ろうよ！」

「え!? お、お風呂!? しかも一緒!？」

突然の提案に動揺し、思わず皿を落としそうになるソラ。というのもここまで自分の性別を隠していたわけで、風呂に入ってしまったえば一発でバレてしまうからだ。別にバレて困るものでもないが、セシルが幻滅してしまうかもしれない。

「嫌……かな……?」

どこか心細そうにセシルが見上げる。こんな表情をされては、断ろうにも断ることが出来なかった。

「う、うん。まあわかったよ」

苦笑しながら答えると、セシルの顔が無邪気に明るくなる。

「やった！ じゃあ僕準備してくる！」

上機嫌にセシルは浴室があると思われる方向に走って行った。

それを見送って、ソラは微かに笑う。本当に、小さい頃の自分を見ているようだ。

「ありがとうございます。セシルとこんなに仲良くしてくれて……」

不意にレフィナが感謝を伝える。その表情は穏やかだが、どこか陰りがある。

「いいですよ。なんだか弟が出来たみたいで楽しいですし」

ソラは笑って答える。するとレフィナは少し面食らった表情で顔を見つめた。

「あの、何か？」

その表情に小首を傾げていると、レフィナはくすりと笑って言う。

「いえ。すぐにわかりますよ」

その笑顔がより一層疑問を与える。

「ところでソラさんはどうしてギルドに入ろうと？」

ソラが不思議そうに顔を眺めていると、どこか暗い表情でレフィナが問い掛けた。

隠すつもりもないため、ソラはすぐに答える。

「誰かの笑顔を守りたいなって思って」

「誰かの笑顔を？」

「はい。もし笑顔を失ってる人がいたら、その人が心から笑えるようにしたいなって」

話しながら、ソラはあの日のことを思い出す。旅のきつかけとなる、忌まわしい日のことを。

「ある人に言われたんです。きつとあなたは沢山の人を笑顔に出来る。だから、沢山の人を笑顔にしてあげてって」

「ある人ってというのは……？」

「ボクを育ててくれた、大切な人です」

穏やかな表情と声音でソラは言った。

するとレフィナの表情がより一層暗くなり、俯いていた。

「その……大切な人っていうのは……」

レフィナがさらに問いかけようとした時だった。

「お母さん。これどうやって使うのー?」

浴室の方に行ったセシルが、赤い魔力結晶を手に歩み寄ってきた。

それを見たレフィナは、ギョツとしてセシルに駆け寄る。

「あなた、これどこからー!」

レフィナはセシルの手から放ったくると、セシルの肩を掴んだ。

「えっ……? えっと……お風呂場の隅っこの溝に落ちてたよ?」

レフィナの表情を怖いと感じたのか、セシルは微かに声を震わせながら答える。

「お母さん……なんか……怖い……」

セシルの言葉に、レフィナはハツとする。セシルの表情は萎縮し切っていた。

罪悪感から狼狽えるレフィナ。

一方二人のやり取りを見ていたソラは少し首を傾げながらも、微笑んで二人に近づいた。

「レフィナさん。それ貸してもらえますか?」

「えっ？ ええ……」

レフィナは言われるがまま、手に持っている結晶をソラに渡した。

「じゃあセシル。ボクがどうやって使うか見せてあげる」

「え!? ほんと!?」

ソラの言葉に、セシルの表情がパツと明るくなる。

それを見てソラは微笑みながら、セシルに空いた手を差し出した。

「うん。浴室に案内してくれる?」

「わかった! 行こ!」

セシルはソラの手を握り、につこりとした表情で部屋へと歩んでいく。

「あつ……」

レフィナが止めようと右手を伸ばす。が、すぐに自分の左手でそれを制する。二人の背中を見送りながら、レフィナは微かに唇を震わせた。

浴室に行くくと、ソラは部屋の中を見渡した。浴槽の下には薪木が敷かれており、どうやら火を起こすことによつて湯を沸かす形式のようだ。住んでいた家やクリンベルの屋敷と様相が違うため、新鮮味を感じる。

(でもこの様式だと、熱結晶はいらなによね……?)

ソラは疑問に思いながらも、浴槽を覗き込む。湯は湧いておらず、冷たい水が中に溜

まっていた。

少し汚れているようで、水面には人の皮膚片や垢が浮いている。

「ねえセシル。水は変えてないの？」

「え？ あ、うん。あまり水を変えるお金が無いんだって。だから一月に一回しか変えてないんだ」

肩を落として、セシルが答える。

（あまりお金が無いのに、ボクご馳走になっちゃったんだ……）

現実を直視して、ソラも表情を曇らせる。

ソラはほんの少し目を閉じて、すぐに開くと笑った。

「じゃあ、綺麗なお風呂に入ろっか」

「え？ でも綺麗なお水が無いよ？」

「大丈夫。任せて」

微笑むと、ソラは水面に手を翳して目を閉じる。手に魔力を集中させて、脳裏に起こる現象を思い浮かべる。すると手のひらが青白く発光し、光の粒子が水に降り注ぐ。

セシルは不思議そうに水を覗き込んだ。

「わあ……！」

光に包まれた水は見る見るの内に綺麗になっていく様を見て、セシルは感嘆を漏ら

す。

ソラが使ったのは浄化の魔法だ。水の中に混じっている不純物を無くし、綺麗な真水に変えることが出来る。他にも果汁入りのジュースや血液から真水を生み出すことも可能だ。

「やっぱりお姉ちゃんすごい！」

無邪気にはしゃぐセシルを見て、ソラは笑う。

（そう言えば、初めてエイネの浄化魔法を見た時……ボクも同じ反応してたっけ）

當時を思い出しながら、今度は握っていた結晶をセシルに見せた。

「これはね、熱結晶って言うんだよ？ これに魔力を注いで水の中に入れると、あつと言う間にお湯が沸いちゃうんだ」

「へえー！」

説明してから、ソラは結晶に魔力を注ぐとそのまま水の中に放り込む。

しばらくすると水面から湯気が立ち上り、冷たい水は温かい湯へと早変わりした。

「すごいすごい！ お父さんもこうやってお風呂の用意してたのかなあ」

「お父さん？」

思わずソラは疑問を口にしてしまう。内心しまったと思い、セシルの顔を伺った。

「うん、お父さん。今はもういないんだけど、お姉ちゃんに負けなくらいすごい人だっ

「たんだよ」

セシルの表情はとても穏やかで、どこか誇らしささえ感じられる。きっと自慢の父親だったのだろう。

「それよりお姉ちゃん、一緒に入ろうよ！」

「やっぱり入るの？」

「うん！」

「一緒に？」

「うん！」

無邪気に笑うセシル。

一方ソラは彼の父親のことが気になりつつも、どうしたものかと頭を悩ませるのであった。

◇

助けた女性が椅子に腰掛けたのを見て、トゥネリは安堵した。

「落ち着きましたか？」

息子を助けてください。そう叫んだ後、女性は酷く取り乱して説明出来るような状態

ではなかった。

そこで落ち着かせるため。あとはあまり人の目に触れないようにするために、部屋へと案内したのである。

女性は落ち着いた様子で、小さく頷く。

「それで、何があつたんですか？」

隣でルージユヴェリアが問う。彼女もまた出会した人間であるため、話を聞かずにはいられない。

「実は……」

女性は俯き、話始めた。

「私は息子とともにリヴェルトス商會が売却している土地を買い、そこに家を建てたんです」

「あの、お金に余裕がある方が購入する場所ですね？」

「はい……夫がそれなりの稼ぎをしていたので、せつかくだからと。支払いも早々に済ませ、それからはなんの苦もなく平穩に暮らしていました」

ですが。と女性は言葉を置く。

「つい一週間前のことです。突然この料金が上がったと言つて、更なる料金を支払うよう要求してきたのです」

「リヴェルトス商会が……ですか？」

「はい……」

おかしい、と各組織の情勢に詳しいルージュヴェリアは内心呟く。

リヴェルトス商会は確かに大きな組織だ。その分、取引は厳しくまた公平かつ公正に行うことを鉄則としている。そうしなければ組織はすぐに瓦解すると、トップが理解しているからだ。この商会の本拠地はここから遠く離れた島国リベルタにある故に、統制が上手く取れていないのだろうか。

ルージュヴェリアが疑問視している一方、女性は話を続けた。

「その金額はとも払えるような額ではなく、夫も急にそんな大金を出せるわけがないと憤りました。するとリヴェルトス商会と契約している傭兵たちが現れて、それならばお前の身で払えと夫を連れ去ってしまったのです」

「どうして、すぐにギルドや国の自警団に相談を持ちかけなかったの？」

トウネリの問いに、女性は答える。

「言ったら息子の命がどうなっても知らないと言われて……怖くて言い出せなかったんです」

女性の答えに、トウネリは眉を潜める。

「そして今、あなたの息子さんの命が危険に晒されていると……？」

「はい……夕刻に男たちがやってきて、お前の夫の力だけでは支払えないと言つて……」
「連れ去つていったんですね」

事情を話し終えて、女性はまた涙を流し始める。どうしていいかわからず、不安から心が押し潰されそうになっているのだ。

その心情を、トウネリはよく理解している。どれだけ辛いことであるのかも。

「わかりました。私がリヴェルトス商会に連絡を——」

「いえ、その必要は無いわ。ルー」

ルージュヴェリアの言葉を遮ると、トウネリは女性の側に寄つた。涙を流して項垂れる女性の視線に合わせて屈むと、微笑に笑う。

「わかりました。私があなたの息子さんを助けに行きます」

「ちよつと待つてくださいい！」

トウネリの発言に、ルージュヴェリアはすぐ様叫ぶ。

「まずは商会にこの旨を問い合わせて、もし部下の独断行動であれば正してもらおうよう進言しないと！」

「そんな悠長に構えてられると思う？ あいつらが何企んでいるかは知らないけど、一刻を争うかもしれないのよ？」

「そうかもしれないですけど、まずは内部情報を仕入れないと！ 下手をすれば、商会全体

と衝突することになるかもしれないですよ？ そうなったら私達の問題では済まされません！」

ルージュヴェリアの言い分も一理ある。相手の規模が未知数なのは確かだ。商會全体で女性の言うようなことが起こっているのか、それともブリアンテスでのみ起こっているのか定かではない。彼女の言う通り、大きな組織を敵に回す可能性がある。

だがトウネリにとつてそんなことは些細なことではしかない。今日の前で誰かが困っているのならば手を差し伸べないわけにはいかない。ましてや目の前で懇願されたのだ。

(もしあいつだったら、きつと……)

トウネリは一人の少年を思い浮かべる。ここにはいない、空色の髪をした少年だ。

「ルー。あなたの言いたいことはわかるわ。でも私は黙って見過ごすつもりはない」

「私だつてそのつもりです。そのためにもまずは情報を集めようつて言つてるんじゃないですか」

話は平行線のまま進まない。二人は睨み合い、お互いの立場と思いを譲る気はなかった。

女性はおろおろしながら二人の様子を眺めている。かと言って止め入るだけの勇氣も無く、行く末を見守るのみ。

しばらくして、トウネリは大きなため息を吐いた。

「わかった。じゃあ情報を少しだけ集めてから、商會に直談判しにいくわ。それなら文句ないでしょ？」

「出来るだけ有用な情報を集めてから、です」

「はいはい、わかったわよ」

再び嘆息すると、トウネリは女性に向き直った。

「そういうわけですので、ごめんなさい。少しだけ時間貰えますか？」

トウネリの言葉に、女性は小さく頷く。

「夫と息子が無事に帰ってくるのなら……」

「なら決まりね。ルー？ 一応ギルド経営の宿屋にこの人の部屋を手配してもらえるかしら？ あそこなら商會の人間でも下手に手出し出来ないでしょ」

「そうですね。急いで手続きしておきます」

ルージュヴェリアが部屋を出ていこうとした時だった。女性が少し心配した面持ちで二人を見つめる。

「あの……依頼料は……？」

女性の言葉を聞き、トウネリとルージュヴェリアは顔を見合わせる。そして同時に笑うと言った。

「とりあえず、今回は無しということだ」

本来ならば依頼としてギルドを通してから、女性の話を聞くべきだったのだ。それがギルドに所属する人間の義務である。が、今回のこれは場合によっては商会の人間に情報が漏洩してしまう可能性もある。

ともなれば、ギルドを介さずに助けるのが適切だと二人は判断していた。

「そうしましたらすいませんけど、私と一緒に来てもらえますか？」

「あ、はい……」

方針が定まると、ルージユヴェリアは女性を連れて部屋を出て行った。

二人を見送り、トウネリはふうと一息。少し伸びをして、気合を入れるように軽く頬を叩いた。

「さてと。じゃあまずは、捕らえた奴らから情報を聞き出しますか」

内心遠回りすることを齒痒く思いながら、トウネリは自分の部屋を後にした。

第二節 重なる面影と不穩なる影 3

ソラとセシルの二人は湯船に浸かっていた。

セシルは自分の背中を預けるようにしてソラの体にもたれ掛かり、頬を赤くして僅かに身を縮ませている。

一方のソラは苦笑しながら、天井を見上げていた。

衣服を脱いだ時、お互い相手の性別を知ってしまった。ソラはセシルが女の子であるということ、セシルはソラを男であるということ、身体的特徴を見ることが理解したのである。

それでも二人が一緒に風呂に入っているのは、セシルと一緒に入りたいと言つて聞かなかったからであるのだが。

「びっくりした。すごく綺麗な人だったからお姉ちゃんだと思つてたら、お兄ちゃんだったんだ」

「あはは……ここに來てからよく間違えられてるよ。セシルもその……女の子だったんだね」

短い髪であったことから、てつきりセシルを男の子だと勘違いしていたソラ。実際セシルの顔は可愛らしく、女の子と言われればその通りの顔立ちをしている。

「僕もたまに男の子に間違えられるんだけど、お兄ちゃんほどじゃないかな。うん」
セシルは改めてソラの顔を見てみる。

(どこからどう見ても綺麗な女の人なんだけどなあ)

あまりにまじまじと見るので、ソラは小首を傾げる。するとセシルはすぐさま顔を逸らした。

「でもどうしてボクと一緒に入ろうって思ったの？」

ソラの問いに、セシルは少し俯く。

「だってその……はじめて会った時にお父さんに似てるって思ったから……」

「セシルのお父さんに？」

「うん……」

セシルは小さく頷くと、父親のことを思い出しながら話しを始めた。

「僕のお父さんはね、ギルドで働いてた人なんだ。困ってる沢山の人を助けて、沢山の人を笑顔にするって言って、色んなところに行ってたっけ」

ソラは思い出す。母親のレフィナが「ギルド」の名を聞き顔を曇らせていたことを。

(そうか。それでレフィナさんは……)

「僕はそんなお父さんが大好きだった。僕も将来お父さんみたいな人になりたいって。でもある日、ギルドの人がやってきたんだ」

セシルは当時のことを思い浮かべる。

その日やってきたのは一人の女性だった。その女性は父親が身につけていた物を手を持ち、悲しげな表情で、しかし端的に言った。

「彼は命を落としました。我々の落ち度だ。申し訳ない」

それだけ言つて、女性は所持品をレフィナに渡して去つていった。

レフィナは夫の所持品を抱きしめて泣き崩れた。その声を聞き、セシルも次第に涙を溢れさせた。

「なんでもお父さんは、とても危険な依頼を受けてたんだって。その依頼の最中、魔物に襲われたつて後から聞いたんだ」

「魔物……」

ソラの脳裏に、あの日のことが思い浮かぶ。と同時に、溢れるように次々と当時の記憶が目の前に浮かんだ。

堪らずソラは口元に手を当てる。

それに気づいたセシルは心配した表情でソラの顔を覗き込んだ。

「お兄ちゃん？」

「ごめん、大丈夫」

「でもなんだか顔色が……」

「大丈夫だから心配しないで」

ソラは苦い表情で笑うと、セシルの頭を優しく撫でた。

その心地よさに、セシルは目を細める。

「お父さんね、よくこうして僕の頭を撫でてくれたの」

「そっか。ごめんね？ 嫌なこと思い出させて」

「大丈夫。それに今はお兄ちゃんが一緒にいるから！」

えへへとセシルは無邪気な笑顔を向ける。それを見たソラもまた、自然と笑顔になった。

「やっぱり僕、お兄ちゃんが笑ってる顔好き！」

「え？ そ、そう？」

「うん！ はじめて見たときも思ってたけど、すごく輝いて見えるから！」

ソラは思わず顔を紅潮させる。

「あ、なんかお兄ちゃん顔赤ーい」

「もう、からかわないでよセシル」

「えー？　だつてなんかお兄ちゃんの顔赤いし。大丈夫ー？」

「大丈夫！　大丈夫だからそうやって顔近づけないで！」

そんな会話をしながら、二人は満面に笑顔を咲かせる。そして二人は吹き出すと、笑い声を上げた。

浴室から聞こえる笑い声を、部屋の扉付近で聞いていたレフィナは顔を俯かせる。

「セシルが家で誰かと笑い声をあげるのはいつぶりかしら……」

微かに笑う。が、すぐに表情に陰りを見せて俯く。

「あなた……私はどうしたら……」

頬を伝う一雫が、床を濡らした。



風呂から上がると、ソラはある部屋に案内された。

「どうぞここを使ってください」

案内したレフィナは軽く会釈すると、部屋の扉を開ける。

部屋の中には一つのベッドがあるだけで、他には何も置かれていない。

初めは来客用の部屋だろうかとも考えたが、一つ答えが出てきた。

「ここは……セシルのお父さんの部屋ですか？」

問いに、レフィナは表情を曇らせる。

「セシルから聞いたんですね……？」

「はい。すいません。聞かないつもりではいたんですけれど」

ソラの答えは同時に、薄々気が付いていたことを表している。

レフィナは顔を俯かせると、微笑かに笑みを浮かべた。

「いえ、いいんです。きつと分かっているんだらうなと思って思っていましたから」

レフィナは部屋を見渡す。

「夫が使っていた家具は殆ど捨てました。ベッドだけは、何かに使えるかと思つて取つておいたんですけど」

レフィナはこう言っているが、実際は違う。彼女は心のどこかでは、夫がまだ無事に生きていて、いつか帰ってくるのだと思つているのだ。故に、夫が使う寝具だけは捨てられなかったのである。

それを知つてか知らぬか、ソラはベッドにそつと触れて言った。

「大丈夫ですよ。きつと取つておいて良かったて思える日が来ますよ」

微笑むソラに対して、レフィナも微笑む。が、彼女の表情はどこか硬く重苦しい。

「セシル、言つてましたよ。お父さんは誰よりもすごい人なんだつて」

「ええ。私にとつてもあの人は、自慢のできる素敵な人でした……」

とそこへドタドタと大きな足音を立てて、セシルが部屋に駆け入ってきた。

「お兄ちゃん！ 本読んで！」

「お兄ちゃん……？」

セシルの呼び方の変化に、レフィナは首を傾げる。

それを見てソラはこの後の反応に察しがついてしまう。思わず苦笑が顔に出た。

「ん？ お姉ちゃんじゃなくてお兄ちゃんだったんだよ？ だからお兄ちゃんって呼んでるの」

「え？ んん？！」

セシルの言葉の意味がいまいち理解できず、レフィナは頭に疑問符を浮かべる。実際セシルの説明は分かる者にしか分からないものであるため、彼女の反応は当然のものであると言えよう。

「だからー！ お姉ちゃんは女の人じゃなくて男の人だったからお兄ちゃんなの！」

やはり理解が追いつかないレフィナ。しばらく考えながら、ソラのことを凝視する。そして。

「えっ？ 男の人……？」

理解が追いつき始めるにつれて、レフィナの顔色が変わっていく。具体的には、次第

に目が丸くなり、驚きといった表情に変わっていつている。

「あの……本当なんですか？」

その反応にソラは既視感があった。

(あー……これ、ルーさんと同じ反応だ)

苦笑しながら、ソラは肯く。

「え、でも？　だつてそんな綺麗な顔していて、髪も長くて綺麗だし、体つきも……」

まるで吟味するかのように、全身隈なく眺めていくレフィナ。彼女の表情からは「とても信じられない」という言葉が強く現れている。

「えつと……そうじっくり見られると恥ずかしいというか……」

ソラの発言にハッと我に帰るレフィナ。顔を赤くして、すぐさま頭を下げた。

「ご、ごめんなさい！　そ、その……若い時の私よりも綺麗だから……」

「流石にそんなことはないかと……」

「いいえ、あります！」

レフィナの顔に「なんだか悔しい」という心の叫びが出ている。

「お兄ちゃんはまだ少し自分の姿を自覚するべきだと思ふの」

「ええ？　でもボク、そこまで言われるほどじゃないと思ふんだけど」

「お兄ちゃん。そんなこと言ったら、いつか男の人に求婚されるよ？」

「きゅ、求婚つて……というかよくそんな難しい言葉知ってるねセシル」

「お父さんがお母さんと会った時の話をする時、いつもそう言ってたから」

「ちよ、ちよつとセシル……!」

セシルの言葉に、レフィナが顔を真っ赤にする。

一体このやり取りはなんなのだろう。そんな疑問がソラの頭に浮かぶ。このままで一向に話が逸れることがないと考えて、口を開いた。

「そ、それで何読んで欲しいの? セシル」

「あ、これ読んで欲しいの!」

セシルが嬉々とした表情で差し出したのは、見覚えのある本だった。

「これ、セシルも読んでるんだ」

それはソラも持っている、あのお伽話の本だ。

「お父さんがお仕事休みの日によく読み聞かせてくれたんだ!」

セシルの言葉を聞き、ソラはレフィナの顔を伺う。レフィナは静かに微笑んで頷いた。

「そつか。じゃあ読んであげるよ。どこから読めばいい?」

「んとねー、最初から読んでほしい!」

「最初から?」

「うん！ 眠たくなるまで読んでほしいな」

ソラはくすりと笑うと、セシルから本を受け取る。

「わかった。じゃあ最初から読んであげる」

「やった！」

セシルは喜ぶと、ベッドの上に飛び乗った。後に続いて、ソラも隣に座って本を開く。

「それじゃあ、この世界のおはなしの始まり始まり」

その様子を眺めて、レフィナは思った。

（ああ、なんだかあの人が帰ってきたみたい……）

ソラが全くの別人であると分かっても、レフィナもそしてセシルも、夫あるいは父親の姿と重ねていた。

そしてソラもまた、幼い頃の記憶と重ねていたのだった。



それは八人の賢者が、国を生み出して数年経ったある日のこと。世界で最初の争いが巻き起こりました。

戦争を仕掛けたのはネイドが率いる軍です。

力を付けたネイドたちは、アルガンセの国に対してこう言いました。『俺はお前たちを滅ぼす。そのために力も得た』と。

しかしアルガンセは相手にせず、『お前たちではこの壁を墜とすことさえ出来ない』と吐き捨てました。

当然、ネイドはこうなることを予想していました。故に言ったのです。『ならば俺たちの力を思い知るがいい』と。

ネイドたちはアルガンセの国に攻め入りました。国を囲っていた壁を容易く突破して、平和に暮らしていた人々を惨殺し始めたのです。

これにはアルガンセの国の兵士たちも黙ってはいられず、応戦しました。

ですが、ネイドの軍の力は強大で、瞬く間に兵士たちを打ち滅ぼしていきます。

「こんなものか。下らない連中だ」

ネイドも彼らを見下して、次々と命を奪っていきます。

アルガンセは大きなため息を吐きました。彼は心底呆れ果てていたのです。確かにネイドの軍は屈強な精鋭の集まりです。ですが、アルガンセの前には、塵も等しい存在でした。

一振り。たった一振り剣を薙ぎ払うだけで、アルガンセはネイドの軍を壊滅させたのです。

そして一人残されたネイドに、アルガンセは剣を向けました。

あり得ない。ネイドはそう思ったはずですが、自分はこの男と時を同じくして生まれた存在のはずだ。なのに、どうしてこれだけの差があるのか、と。

絶望の淵、ネイドは周囲を見渡しました。仲間の亡骸が、辺り一面に転がっています。この時、彼の脳裏には仲間との日々が浮かんでいました。彼は共に過ごしていく内に、仲間に対して愛情が芽生えていたのです。

ネイドは震えました。目の前の男をなんとしてでも殺さなければならぬ。その思いは怒りと憎しみに変わっていき、アルガンセに対してドス黒い感情を露わにしたのです。

直後、ネイドの体から大量の黒い霧のようなものが溢れ出しました。

これには流石のアルガンセも驚き、ネイドから離れます。

黒い霧は見る見るの内に膨れ上がり、澄み渡っていた青空を覆い尽くし、世界中に広がりました。

他の賢者たちも、何事かと空を見上げます。まさにそれは、全てを覆い尽くす“闇”そのものでした。

闇は雨のように地上へと降り注ぎ、人々を包み込みました。

闇に触れた人々は、忽ち攻撃的になりました。隣にいる人間に対して怒りや憎しみを

抱き、攻撃するようになったのです。

そしてそれは、一部の賢者たちも例外ではありませんでした。

夫婦として仲睦まじく日々を過ごしていたはずのデシルとグルトンは、お互いの欠点ばかりが気になり仲違いをしました。その結果、彼と共に暮らしていた国の民も争いを始めたのです。

ルエグナと彼女が率いる民たちは、人間に対して強い恨みを抱きました。結果彼らの身体は変化し、後にエルフと呼ばれる種族に姿を変えたのです。

ヴェルナーデは、自分の美しさ以外を愛すことが出来なくなりました。その結果彼女は自分の国の民を皆殺しにし、自分の次に美しいと感じた血を欲するようになったのです。

ネイドの体から溢れた闇を間近で受けたアルガンセは、屈強な意志で自我を保っていました。彼と共にいた民たちは暴れ出してしまいました。これを止めるため、彼は民を殺そうと剣に手を添えたのです。

闇の影響で世界が混沌とし始めた時、これを止めようと動く者たちがいました。イヴェルテラとファルティア、そして彼らが率いる者たちです。彼らはこうなることを予期しており、闇から身を守るための加護を付与した衣服を作り出していたのです。

彼らはまず、攻撃的になった人々を正気に戻すためそれぞれの国を訪れました。

最初に訪れたのはアルガンセの国です。このおかげで、アルガンセは生き残った民たちを殺さずに済みました。

次に向かったのはヴェルナーデのいる国です。ヴェルナーデは闇の影響で強い力を持つていたため、アルガンセが力を貸しました。このおかげで、ヴェルナーデは正気を取り戻しました。が、同時に死んでしまった民たちも、ヴェルナーデとほぼ同じ特性を得て生き返ってしまいました。

ルエグナたちに対しては、残念ながら何も出来ませんでした。というのも、彼女たちは自我を失ったわけではなく、元から人間を嫌っていたのです。

デシルとグルトンも、イヴェルテラとファルティアたちのおかげで正気に戻りました。二人はこの時の仲違いを経て、より一層愛し合うようになります。

こうしてめでたく、世界で最初に巻き起こった争いは終わりを迎えたのでした。

——世界のおはなし 第二章 巻き起こった最初の争い より



ある程度本を読み進めると、セシルは眠い目を擦り始めていた。

その様子を見てソラは頭を優しく撫でる。

「そろそろ寝る?」

ソラの問いに、セシルは無言で首を振る。どうやらまだ寝たくないらしい。

それを悟ると、ソラは本を閉じてベッドに寝転がる。

「ほら、じゃあ一緒に寝よう?」

「やだー。だって明日帰っちゃうんでしょ?」

確かにセシルの言う通り、翌日には出発して一度帰るつもりでいる。故にセシルは出来るだけ、一緒にいたいという思いが強く出ている。

どうしたものかと頭を悩ませた時、ふとソラはあることを思いついた。

「わかった。じゃあ、唄を歌ってあげる」

「唄……?」

「うん。ボクを育ててくれた人が、よく口ずさんでくれた唄」

微笑むと、ソラは歌い始める。小さい頃よく聴いていた子守唄を。

ソラの歌声はとても透き通ったものだった。優しい旋律は、まるで全てを包み込むかのように響き渡る。

(エイネ、言つてたつけ。この子守唄は、歌う人によつて変わるものだって)

歌声を聞き、セシルは虚とした目で何度も瞬きする。次第に重い目蓋を閉じて、ベッ

ドに横になった。

セシルが眠っても、ソラはしばらく唄を口ずさむ。眠るセシルの頭をあやす様に撫でながら。

歌声は闇夜の空に昇っていく。天高く、昇っていく。そして瞬く星空の中に、静かに消えていった。

第二節 重なる面影と不穩なる影 4

「トウネリさん、起きてください」

誰かが呼ぶ声が聞こえ、トウネリは目を覚ました。ぼんやりとした頭で辺りを見回すと、ルージユヴェリアの姿が目に入る。

「あれ……？　もしかして寝てた？」

自分の状況を確認するトウネリ。今いる場所は自分の部屋だが、椅子に座り、テーブルに突つ伏して眠っていたようだ。そう認識すると、凝った体を解すように大きく伸びをした。

「おはようございます。昨日は何か情報を掴めましたか？」

「情報……？」

「ほら。昨日助けたお母様の」

ああ、とトウネリは思い出す。まだ意識が覚醒したわけではないため、直ぐその事に頭が回っていないかった。

「なにも無いわね。捕まえた奴らが下つ端も下つ端なのか、なにも知らないの一点張り

でね……」

「そうですか……」

「挙句、話したのがバレたら殺されるとさえ言つてたわ。ほんと、都合のいいことばかり言う奴らだわ」

心底呆れたように、トウネリは大きなため息を吐く。

「では、そんなトウネリさんに耳よりの情報を」

「……なに？ どうでもいいことじゃないでしょうね？」

「いえいえ。まさかそんな」

そう言うところ、ジュヴェリアは幾つかの書類の束をトウネリに渡した。

「これは？」

「シエルヴィアさんが無理やりやらされてた依頼整理の中にあつたものです」

何故そんなものをと一瞬疑問に思つたトウネリだったが、すぐに思い当たると書類に目を通し始めた。

「これ……どういふことよ」

依頼内容のどれもが、自分の子供を助けてほしいというものだった。

「どうやらここ数日、子供が何者かに連れ去られる事例が発生しているようです」

「でも私、昨日子供たちが遊んでいるのを見たわよ？　なのになんでこんな依頼が幾つ

も来てるのよ」

トウネリの問いに、ルーージュヴエリアは深刻な表情で言った。

「それ……殆どがこの国から出た依頼じゃないんですよ……」

「は？」

言われてトウネリは書類を注意深く目を通す。どの依頼も依頼発生の地がヘルデイロ以外のものであり、その数は数十にも及んでいた。

「本部から流されてきた依頼の中に、これだけの数があるって何かおかしくありませんか？」

「確かに。普通はそれぞれの国の支部が依頼を解決するものよね？」

「はい。昨日シエルヴィアさんと整理していて、おかしいなどは思っていたんですけど」
ギルドに集まる依頼の多くは基本、依頼が発生した地と本部に張り出されことになっている。それがどういうわけか、このヘルデイロ支部にまで回ってきているというのはおかしな話である。

ともすれば、それだけの大事が発生していると見てもおかしくはない。

「これは……いよいよ持つてきな臭くなってきたわね」

トウネリは思考を巡らせる。

「本部から通されてここに来ているってことは、各支部の人間が解決しづらなかつ

たつてことかしら？」

「そうとも取れず、純粹に依頼の報酬を見て判断された可能性もあります」

確かに。とトウネリは肯く。

ギルドに加入する者の多くは、依頼を完遂した際に発生する報酬内容を見て受けるかどうかを判断する。

が、渡された依頼のどれも、報酬金は安価ばかり。それこそ、人によつては一日で使果たしてしまふ量なのだ。

「調べたところ、依頼した人の殆どが貧困層でした。だから報酬金が少なかったんでしようね」

「結果誰も受けることがなく、本部を通してこつちにまで依頼が回つてきていた……と」
「はい。そして昨日助けた女性も、金銭に困つていてる方だった……」

「というよりは、金銭を巻き上げられていてる人だった……」

もし同様の件が他国にも発生しており、結果依頼という形で浮き彫りになっているのだとすれば、それは大問題だ。

「商会そのものが絡んでいてる可能性……出てくるわよね」

二人はしばし無言になる。

このままでは商会全体が敵となつてしまふ。そうなつてしまつては、さすがに二人だ

けの力ではどうすることも出来ない。

「仕方ない……か……」

トウネリは呟くと、徐に立ち上がった。

「あいつに協力を頼むわ」

「あいつって、ユースさんにですか？」

「ええ。一応は今のパートナーだし、協力してくれるでしょ」

そう言うと、トウネリは身支度を始める。

ギルド加入の際に支給される上着を羽織り、机の引き出しから一丁のクロスボウを取り出す。この小型のクロスボウは発射部が折り畳み式になっており、ホルスターに綺麗に収まっている。これを腰に巻くと、矢筒を太腿に括り付けた。

「あいつ、どこかで見かけた？」

「確か支部長室に入っていくのを見かけましたよ？」

トウネリは眉を潜める。

（そういえば、支部長のあいつなら普通この事態について知っていてもおかしくはないわよね？）

「わかった。とりあえず支部長室に行くわ。ルーは引き続き何か情報が無いか集めてもらえる？」

「わかりました。シエルヴィアさんにもお願いして、出来るだけ多くの情報を探しておきます」

宿舎を後にすると、トウネリは急ぎ足で支部長室に向かった。

「おや、どうしたトウネリ？ そんな深刻そうな表情をして」

部屋に入ると、まるで待ち構えていたかのようにヴェラドローネが言った。

その発言でトウネリは抱いていた疑念が確信に変わる。

「ヴェラドローネ。あなた、これのこと知ってて隠してたわね？」

トウネリは持っていた依頼の書類を、ヴェラドローネの目の前に投げ捨てる。

「おやおや。依頼は一応公文書なんだ。そう雑に扱うものじゃないよ」

「黙りなさい。あなたどういうつもり？」

「どういいうつもりも何も、私は何も知らないだけだよねー」

トウネリの問い掛けに、ヴェラドローネは笑みを浮かべる。

「惚けないで。まさか貴方達、わざと商会の連中を蔓延らせてるわね？」

「はて？ なんのことだかさっぱり」

ヴェラドローネの態度に、トウネリは奥歯を噛み締める。明らかに何かを知っていて隠している様子だ。

そこへ助け舟を出すかのように言う者がいた。

「俺も知りたいな。こいつが言っていることについて」

壁に寄り掛かっていたユースが、睨みを効かせながらトウネリの隣に立った。

「まさかあなたもこいつとグルじゃないでしょうね？」

「まさか。俺もシエルヴィアのやつに今朝言われてな。来ている依頼が明らかにおかしいってんで見てみたんだが……」

ユースは机に置かれた依頼の書類を取り、眺めるように掲げた。

「まさか、これだけ子供を助けてほしいって内容のものがあるなんてな」

ユースの言葉に、ヴェラドローネの顔から笑みが消える。どこか気怠げな表情で頼杖を突き、彼女もまた書類を手を取った。

「まあ、正直私もここまでやるとは思ってたんだけどな」

「やっぱり何か知ってるのね？」

トウネリの問いを聞き、ヴェラドローネは立ち上がる。窓から外を眺めながら、話し始めた。

「いつからだったかなあ。商會に登録している地売り業者が、不当に金を巻き上げている可能性があるって話が上がってな。なんでも土地の金を払った人間に、その時の倍以上の額をさらに要求していたらしいんだ」

「なんでそいつらを放つたらかきにしてんのよ！」

「手出し出来ないからだよ」

「は？」

ヴェラドローネの言葉に、トウネリは疑問を口にする。

「手出し出来ないって、どういうことよ？」

「そのまんまの意味だ。私たちギルドとリヴェルトス商会の間には絶対不可侵の契約を結んでいるんだ。私たちギルドの人間は商会に登録している連中に対して一切の手出しが出来ない代わりに、向こうもこちらに金銭の要求が出来ないという、まあ昔からある決まりみたいなものだ」

「そんな！　じゃああいつらが悪さをしても誰も！」

「そのためにいるのが国の兵士たちだ。まあ彼らも彼らで金で釣られて見逃すということもあるんだが。けど私たちもあくまで、依頼を受けるといふ形でしか他者に介入することが出来ない。依頼に関わることならば何をしてもいい一方で、依頼を受けていなければ何もすることが出来ないんだよ。だから多くの者は報酬金を見て依頼を受ける。場合によっては人生を失うことにもなるし、誰かの人生を奪うことにもなるんだからな。それがギルドっていう組織だ。まさか知らなかったわけじゃないだろう？」

トウネリは否定出来ない。ギルドには数多くの決まりがある。その中の一つが、依頼以外では勝手な行動が出来ないということだ。つまり、何をするにしても依頼を受けて

いなければ思うように行動することが出来ないのだ。これを破った場合、ギルドとの契約が切れ、数年間牢獄に入れられることになる。

逆に言ってしまうえば、依頼に関わっていれば例え人を殺したとしても咎められることはない。それがギルドに関わっている人間というものだ。

「ただまあ、世の中には例外ってやつが存在するんだが」

ヴェラドローネは笑みを浮かべると、ユースの方を一瞥した。

「お前が捕らえた者たちはな、商会の地売り業者に雇われたギルド登録者だ。残念だけど今はあいつらの罪を問うことは出来ないぞ」

「あんた……そこまで知ってて……」

トウネリは歯噛みする。入ってから薄々歪んだ組織だとは思っていた。しかしここまでのものとは考えてもいなかった。

「んまあ、正直私も昔からあるものを一切変えないのは如何なもんかと思っているがな。これが作られた当時の人間は感情が稀薄だったからな」

ヴェラドローネはそう言っただけ苦笑すると、席に座る。そしてトウネリの顔を見ながら言った。

「お前はとうしたい?」

問いにトウネリは俯く。

どうしたいかなど決まっている。この事件を見過ごすわけには行かない。かつての記憶が、後悔がそう叫んでいる。

トウネリは拳を握り、顔を上げる。決意の籠もった瞳でヴェラドローネを見据える。

「そんなの決まってるでしょ。助けるに決まってる」

答えを聞かぬや否や、ヴェラドローネは口元に笑みを浮かべた。

「そうか。なら話は早い。ここにある依頼を全部受けて、そして解決しろ。そうすれば、これに関わった奴らを捕らえることも出来るだろうさ」

依頼を束ねた書類を取り、トウネリの前に差し出すヴェラドローネ。

書類を受け取ると、トウネリは足早に部屋を出て行った。

「いやーほんと、純粹でいい子だなあの子。お前の相棒には勿体無いよ」

「あくまで俺があいつと組んでるのは仮の話だろうが。それよりお前……今度は何を企んでいる？」

笑うヴェラドローネに、ユースは鋭い視線を向ける。

「お前はいつもそうやって何を企んでいるだのなんだの——」

「お前はいつも何かを企んで行動するやつだ。そこそこの付き合いなんだ、よく知ってる」

ユースの言葉にヴェラドローネは苦笑する。

「酷い言い様だね、それは。そこまで私に信用がないかい？」

「お前から漂う雰囲気そのものが胡散臭いんだよ」

吐き捨てるように言う、ユースも部屋から出て行く。

ヴェラドローネはそれを見送ると、不敵な笑みと眼差しで閉じられた扉を眺めていた。

「おい、トウネリ」

急ぎ足で向かおうとするトウネリを、ユースは呼び止めた。

「なによ？ あんたも協力してくれるわけ？」

立ち止まって振り向くトウネリ。

「まあ、そのつもりだがな」

彼女の鋭い視線に嘆息すると、ユースは近くまで歩み寄っていく。

「お前はどう思う？」

「なにがよ？ ヴェラドローネのこと？」

「それもあるが、今回の件についてだ」

言っていることが理解出来ず、トウネリは小首を傾げる。するとユースは眉間にしわを寄せた。

「なんで今までこの依頼がこつちに流れて来なかつたんだろうな？ いや、そもそもこ

の依頼がどうして今になって出てきたんだろうな？」

問われて、トウネリは考えを巡らせる。

確かに、ユースの言う通り今回の件はいつ起こってもおかしくない案件だ。それこそ数年前から起こっており、その時から依頼で溢れかえっていてもおかしくないだろう。だというのに、依頼が作成された日付を見ると、ここ一週間に渡って作られたものだと書かれている。まるで作為的に隠されていたような、あるいは突然起こったかのような。

疑問が堂々巡りのように湧いて出てくる。トウネリはその処理が上手く出来ず、額に手を当てた。

「まるで何かを待っていたみてえだな……」

含みのある言い方で呟くと、ユースはトウネリを素通りして歩いていく。

「ちよつと！ どこに行くのよ！」

「悪いが俺とお前は別行動だ。お前はお前で、その依頼主を当たれ」

「あんたは？」

問いには答えず、ユースは去って行った。

一人残されたトウネリはただ立ち尽くす。彼女の頭の中では、ユースの放った言葉が延々と木霊していた。

第三節 あの日の約束と確かな想い 1

朝の日差しが差し込み、部屋を照らす。

眠っている顔に光を浴びて、セシルは微睡の中目蓋を開いた。

臆げな表情で上体を起こして小さく欠伸をする。眠気により頭が回らず、呆然と周囲を見回した。

ハツとセシルの意識が覚醒する。隣にいるはずの者がいないと気がついたからだ。

慌ててベッドから飛び降りると、大きな物音を立てて部屋を出る。ドタドタと階段を駆け下りた先に目的の人物はいた。

「あ、おはようセシル」

微笑むソラの姿に、セシルは安堵の息を吐く。

「どうしたの？ そんなに慌てて」

「だってなにも言わずに行っちゃったのかと思って」

「あはは、そんなことしないよ」

ソラは笑うと、近づいてセシルの頭を撫でた。

「あ、とそうだ。それより……はいこれ」

なにかを思い出したように言うと、ソラは一つ包みをセシルに手渡した。

「これはなに？」

包みを受け取って首を傾げる。中を開けてみると、ひとつパンが入っていた。昨日ソラが買った、りんごで作ったジャム入りのパンだ。

「昨日買ったやつなんだけど、良かったら一緒に食べない？」

ソラの手には同じ包みがもう一つ握られていた。それを見てセシルは明るい表情で強く頷く。

椅子に座ってパンを食べながら、ふとセシルは周囲を見渡すと、小首を傾げる。

「あれ？ お母さんは？」

母親であるレフィナの姿がない。今の時間であれば起きていてもおかしくはないのだが。それに朝食の準備がされている様子もない。

口の中のパンを飲み込んで、ソラは答える。

「朝早くから出掛けたみたい」

「そっか……」

二人の間に沈黙が流れる。昨夜は意気揚々と話していた二人だが、どこかぎこちな

「セシルはさ、お母さんのこと好き？」

「どうしたの急に？」

「なんとなく気になって」

「勿論大好き！ 優しいし、美味しいご飯作ってくれるし！」

「そっか……うん、そうだよね」

微かに笑うソラを見て、セシルは小首を傾げる。そして物憂げな表情でソラの顔を見つめた。

「お兄ちゃん、本当に今日帰っちゃうの？」

「うん。一度村に帰るつもりだよ」

「もう会えない？」

「大丈夫。また会いに来るから」

食べる手が止まり、セシルは俯く。

「僕……もつとお兄ちゃんと一緒にいたい」

セシルの目に微かな涙が浮かんでいる。そして何かを請うように顔を上げた。

「僕、お兄ちゃんみたいになりたい。お兄ちゃんみたいに魔法を使って沢山の人を助けられるようになりたいの」

「それは……どうして？」

セシルはまた俯く。唇を結び、食べかけのパンを見つめた。

「お母さん、最近元気が無いの。ずっと何かを無理しているような笑顔を向けてて、苦しそうにしてるの」

「セシル……」

ああ、そうかとソラは内心で呟く。セシルはどこか昔の自分に似ている。そう感じていた。だが実際は似ていたのではない。かつての自分と今の彼女は同じなのだ。彼女もまた母親の異変に気づき、なんとかしたいという思いを胸に秘めている。他の誰でもない、大切な人のために。

「だから僕、もつと色々なこと教えてほしいの！ 沢山のことを教えてもらって、そしてお父さんみたいな人になってお母さんを助けてあげるの。お母さんが前みたいに心の底から笑えるようにしたいの！ だから——」

セシルが何かを言おうとした時だった。

突然、玄関の扉が勢いよく開けられた。玄関の先にいるのは三人の男たち。その誰もが、腰に短剣を携えて物々しい雰囲気だ。

「おい、そのガキ。こっちに来い」

男の一人に睨まれて、セシルは体を竦ませる。

「大丈夫。安心して？」

ソラは手のひらを優しくセシルを撫でると、男たちを睨み返した。

「なんですか？ あなたたちは」

ソラはこの男たちに見覚えがあつた。昨夜、何かレフィナと揉めていた男たちだ。その男たちがなぜセシルを求めているのか。

「なんだお前。部外者は黙っているろ」

「そう言われて下がるほど、ボクもお人好しじゃないんで。それにこの子怯えているでしょう？」

中央に立つ男は舌打ちすると、腰の短剣を抜いた。

「悪いがこちとら忙しいんだ。そのガキをさっさと渡せ」

「断ると言ったら？」

「怪我程度じゃ済まないな」

男の言葉に続いて、脇に控えていた二人の男も短剣を抜いた。

ソラも身構えて、セシルを守る体勢を取る。

緊迫した空気が両者に漂う。

「待ってください」

今にぶつかり合いそうな両者。そこへ割って入るように、透き通った女性の声が響いた。

「ここは大切な家です。暴れられては困ります」

男たちの間から、一人の女性が姿を現した。

「お母……さん……?」

レイフィナの姿を見てセシルが眩いた。

対しレイフィナは、静かに落ち着いた眼差しでセシルを見る。彼女の瞳にはどこか、なにかを決めたような強い意志が宿っている。

「セシル、言うことを聞いてこの人たちに付いていきなさい」

「え? なんぞ?」

「今日からお前は、この人たちのところで暮らすの」

「え……?」

話が飲み込めず、セシルは戸惑う。

「レイフィナさん、それどういう意味ですか?」

「あなたに話す必要はありません。あなたは私の家族ではないのですから」

彼女の言うとおり、部外者であるのは事実だ。本来であれば口出ししてはいけないのかもしれない。

だがソラは感じていた。男たちから漂う嫌な雰囲気。何か嫌な予感がするのだ。故に簡単に見過ごせるはずがなかった。

「ソラさん。あなたはこの家の者でもなければ、この街の人間でもないはずですよ。でしたら大人しく引き下がってくださいませんか？」

返す言葉が見当たらない。自然とソラはセシルを庇うのをやめていた。

「お兄ちゃん？」

セシルの呼びかけにソラは歯噛みする。

「すいません、よろしくお願ひします」

レフィナの申し出を受けて、取り巻きの男二人がセシルの腕を掴む。

「待つてよお母さん！ 説明してよ！ どういうこと!？」

「おい、大人しくしろ！」

腕を引っ張られながらも、セシルは腕で抵抗する。が、レフィナはなにも答えようとせず、顔を伏せたままだ。

「これでこの家の借金は全額返済したことになる。せいぜい楽しく暮らすことだな」

吐き捨てるように言うと、男たちはセシルを連れて出て行った。その際、セシルは何かにすがらうような眼差しをソラに向けていたのだった。

男たちが去り、家の中を静寂が包む。

「レフィナさん……一体どういうことか説明してもらえませんか？」

ソラは拳を握りながら問いかけた。

一方のレフィナは答えない。顔を伏せたまま、昨晚使用した食器の片付けに取り掛かる。

「セシル……泣きそうな顔をしました。きつと……どうして？　って思ってたんだと思います。それはボクも同じ気持ちだ」

皿を洗う水の音が部屋に響く。

「答えてください、レフィナさん」

「出て行って下さい。ここは私の家です」

「嫌です。話を聞くまでボクは出て行かない」

レフィナは静かに皿を洗う。その手は微かに震えている。

「答える必要はありません。これは私が選んだんです。なにも後悔はしていません。セシルが幸せになるなら——」

「だったらどうして泣いてるんですか？」

ソラの言葉に、レフィナは唇を噛んだ。泣いていた。彼女の頬には一筋の涙が伝っていた。流れた一雫が皿の上に落ちる。

「後悔していいのなら、なんで泣いているんですか？」

「黙ってください」

「本当はそんなこと思っていないんじゃない——」

「黙ってよー！」

言葉を遮るようにレフィナは叫んだ。

「あなたに何が分かるの!? 私の気持ちがいかに分かってほしいのか、あなたに分かるわけが——」

叫びながら振り返り、ソラの顔を見て言葉を詰まらせた。

落ち着いた表情の中に、静かな怒りが彼の瞳に宿っている。故に何かを言う言葉を失ってしまった。偏に彼の笑顔を知っているから。

「分からないですよ。分かるわけがない。ボクはあなたじゃないんだ。でも……だから聞きます。あなたの本心を聞くために」

ソラは歩み寄る。涙を流すレフィナに。

「もう一度聞きます」

気持ちを落ち着かせるように、一度目蓋を閉じる。かつて言われた言葉が蘇る。そして、ソラは微笑んだ。

「あなたは……本当はどうしたいんですか?」

ソラの問いに、レフィナは唇を震わせた。

持っていた皿から手が離れる。皿は地面に衝突し音を立てて割れる——ことはなく、手から離れた瞬間ソラが受け止めた。

「あなたの願いを、ボクは聞きたい」

「私は……私は……ッ！」

レフィナは膝から崩れ落ちる。彼女の脳裏にセシルの姿が思い浮かぶ。一緒に笑い、一緒に過ごしてきた時間が思い浮かぶ。

手放せるはずがなかった。簡単に割り切れるはずがなかった。セシルは自分にとって大切な娘なのだから。

「私は……私はセシルと一緒にいたい……ッ！」

「うん。それを聞いて安心しました」

「でも私にはどうすることも出来ない……ッ！　あの子のために何もしてあげられない……ッ！」

「だったらボクがなんとかします。だから事情を話してください」

レフィナは泣きながら事情を話した。

レフィナの家と土地はリヴェルトス商会から購入したものだという。支払いは夫の稼ぎのおかげで早々に済ませ、この家で三人平穏に暮らしていた。

だが夫が亡くなつてからある日、リヴェルトス商会の人間に言われたのだ。

「この場所の支払いは終わっていない。そう言つて、当時購入した値段の倍の額を突然要求してきたんです」

そんな金額をすぐに支払えるはずがなかった。幸い期限を言われなかったため、働いて金を稼ぎ、少しずつ返済する生活を送っていた。

「どれくらいの期間を？」

「もう半年になります……そしてつい七日前に突然期限を言われて……」

「それはいつなんですか？」

「今日です……今日、支払いを終わらせると」

当然残りの額を一度に支払うだけの財産はなかった。そこで朝早くから出掛け、なんとか期限を伸ばしてもらえよう商会のところへと懇願しに行ったのだ。しかし帰ってきたのは。

「ならば子供か家のどちらかを差し出せって言われました。でも私にはどちらか一方だけを選ぶことなんて出来なかった。この家は夫ともに多くの時間を過ごした思い出の場所でもあるんです。それを簡単に手放せるはずがなかった」

「それでセシルを渡す方を選んだ……」

「差し出せばあの子の裕福な生活は保証するって。いつもあの子に何かを我慢させていたんです。だからあの子の幸せも考えたら、それが一番だと」

話を聞き、ソラは持っていた皿をテーブルの上に置いた。

「レフィナさん。セシルがさつき、ボクになんて言ったか知りたいですか？」

ソラの問いにレフィナは首を縦に振る。

「だったら教えてあげます。あの子、レフィナさんが心の底から笑えるようにしてあげたいって言ったんです。どうしてかわかりますか？」

ソラの問いにレフィナは被りを振った。

「そんなのあなたと一緒に笑ってほしいからに決まってるじゃないですか」

「じゃあ私は……どうしたら……！」

ソラは軽く息を吐くと、玄関へと歩んでいく。

その音を聞きレフィナは顔を上げた。ソラの背中が、彼女の視界に大きく映る。

「ボクを信じて待っていてください。絶対に連れ戻します。そしてあなたの肩に掛かっている重荷を無くしてあげます」

そう言い残すとソラは静かに出て行く。

残されたレフィナは唾然とした表情で扉を見つめ、そして叫んだ。

「どうして？ どうしてあなたはそうやって誰かのために動こうとするんですか！」

レフィナは理解できなかつた。赤の他人のために自分の身を賭ける、一人の少年の行動を。夫と重なるその行動の理由を。

問いに答えるように、扉越しにソラは呟いた。

「だってボクは……大切な人と沢山の人を笑顔にするって約束したから」

固い意思を胸に、ソラは駆け出す。誰かの笑顔を取り戻すために。

◇

ヘルデイロから遠く離れた国リヴェルタ。商業の国として広く知られ、この国が運営するリヴェルトス商会は世界を股に掛けて活動する商業組織だ。

複数国で売られている商品の大半はリヴェルトス商会が管理している。それはヘルデイロも例外ではない。言うなればギルドが商いを行うようなものである。そのためリヴェルトス商会に加入する者は厳正なる審査を受けることが義務付けられている。商会の掲げる理念は「公平かつ公正な取引を行うこと」だ。

さて、そんなリヴェルトス商会の本部があるリヴェルタの首都・リヴェルテスは現在夜だ。一日の仕事を終えた者が酒場に立ち寄りたり、あるいはどこかレストランに立ち寄りたりと夜の食事を楽しむ時間帯である。そのため街の至るところで賑やかな声が響いていた。

その街の中をユースIIテアIIガルディアンは一人歩いていた。腰には一振りの長剣を携えて、物静かな立ち居振る舞いをしている。

街の中央には一際大きな建物が聳え立っている。屋根付近の壁には紋様を象った装

飾が施され、その下には「リヴェルトス商会」の文字が刻まれている。リヴェルトス商会の本部だ。

ユースは本部の前で立ち止まると、建物を見上げて嘆息を漏らす。

「頼むからお前ら、面倒ごとだけは起こすなよ?」

腰の剣に触れて、ユースは一人呟く。彼の周囲に人は見当たらない。

「これ殴り込みじゃなくて、話を聞きに來ただけなんだからな。そこのところ分かってるか?」

ユースの問いに答える者はいない。側から見れば独り言を言っている人間だがしかし、彼は呆れ返った表情で扉に手を掛ける。

「まったたく。相変わらず先が思いやられる」

愚痴を言うのと、ユースは商会本部の中へと姿を消した。

第三節 あの日の約束と確かな想い 2

外に出てソラは周囲を見渡す。セシルの姿はもう見当たらない。

「確かりヴェルトス商会って言ってたっけ」

荷物の中から地図を取り出して、商会の建物がある場所を探す。

「ここからだ、あっちの方向か」

位置の目星をつけると、ソラは体内魔力を循環させて身体強化の魔法を使う。そして足に力を集中させて、高く跳躍した。

近くの家屋の屋根に降り立つと、目星をつけた方角を見据える。

「……あつた」

視界に大きな建物が見えた。建物の壁には、商会の証である紋様が装飾されている。その下にはリヴェルトス商会の文字も刻んである。

ソラは一つ深呼吸をして、地を強く蹴り高く跳んだ。屋根から屋根へと飛び移り、建物との距離を詰めていく。

屋根伝いに移動しながら、ソラは眼下の街を見下ろしていた。セシルの姿が無いか探

すが見当たらない。足を止めて周囲をよく確かめてみる。

（おかしい……セシルが出て行つてからそんなに時間は経っていないはず。普通に向かつたらまだ道中のはずなのに……）

あの家から商会建物まではそれなりの距離があるはずだ。だというのに道のどこを見てもセシルの姿が見当たらない。よもや同じように屋根伝いに移動したのか。

（ううん、違う。もしそうなら、どこかに魔力の痕跡があるはずだ。でもそれが無いということは……）

ソラは思考を巡らせて考える。ありとあらゆる可能性を列挙する。しかしどれも納得行くものがない。

「まさか……」

ふと何かを思いつき、ソラは地面に降り立った。

「なんだ!? 空から突然!」

道を歩いていた者たちがソラの姿を見てどよめくが、今はそんなことを構っている暇はない。ソラは地面に触れて目蓋を閉じた。

淡い光がソラの身を包み、手のひらから流れるようにして地面に広がっていく。すると閉ざされた視界に風景が浮かび上がってきた。

風景は地面の下へと潜り進んでいく。そしてその先にあるものを見つけた。

「そういうことか……」

ソラは魔法を解くと立ち上がり、周囲の人間に声を掛けた。

「すみません。この辺りにどこか地下の道に繋がる所はありますか？」

ソラの問いに通行人たちは首を傾げる。

「確か商会の連中が物資を運ぶために使っている地下道の入り口がこの辺にあつたはずだが……」

「あの、それどこか教えてくれませんか？」

ソラはすぐ様地図を広げて、場所を示すよう促す。

「ええと、確かこのあたりに小屋があつたはず。表向きは保管庫って話だけど。でもあそこは傭兵連中が常に警備してて——」

「ありがとうございます！」

通行人の男が言い終わるよりも先に、ソラは示された方向へ一目散に駆け出した。

(きつと彼らは地下道を使つたんだ。だから一般の道を見ても姿が無いんだ……！)

地下道を使うとなると、どこへ連れて行かれるか分からない。場合によつては商会建物以外という可能性もある。ともなれば、その地下道へと向かうしかなかつた。

走り出してから数分。向かう方向に小屋を見つけた。話にあつた通り、武器を携帯した男二人が警戒した様子で周囲を見ている。よく見れば、取り巻きのように一緒にいた

二人だ。

「お前はあの女のところにいた……！ おい止まれ！」

男たちはソラの姿を視認すると、短剣を抜いて構えた。対しソラは速度を緩めることなく無言で駆ける。

「くそー！」

男の一人がソラ目掛けて突進する。短剣の切っ先がソラの顔を捉えて、そのまま突き刺す。

「なっ……!!？」

ことはなく、短剣の刃は一瞬のうちに消え、代わりにソラの手ひらが男の顔に触れていた。

「悪いけど少し眠っててね」

男は意識を失うと、その場に崩れた。

「な、何をしたお前！」

相方の男が狼狽しながらナイフを向ける。対しソラは表情を変えずに、静かに男を見据える。

「別に何も。眠りの魔法を掛けただけだよ」

そう言うなり、ソラの姿が男の視界から消えた。

「なつ……どこに行きやが……た……た……」

男は身構えるも、突然意識を失って倒れる。その傍らには悠然と立つソラの姿があった。

「悪いけど、ここは通してもらおうよ」

そう言い残すと、ソラは小屋の扉を開ける。開くなり風が吹き抜けた。扉の先には確かに地下へと続く坂がある。

「待っててセシル」

ソラは躊躇うことなく、地下への道に入った。

地下道の中は薄暗く、空気も冷たい。また湿っぽさもあつた。

ソラは道を間違えないためにも、人が通つた痕跡を追う魔法^①を使い、それに従つて進む。この時足音が響かないよう音を消す魔法も使用して、周囲を警戒する。

物静かな道を進み続けていると、道の先に一つ扉が現れた。扉は一人が通れる程の大ききさで、およそ物流には向かない幅だ。

扉の痕跡を今一度確かめてみる。反応からしてほんの僅か前に、この場所を誰かが通つたようだった。

「二応、念のために……」

ソラは呼吸を整えて目蓋を閉じる。魔力を身に纏うと、ソラの姿は人には見えない状

態となった。透明化魔法だ。

それと並行して、扉の先の構造を透視魔法を使って確認する。扉の先にあるのは階段だった。

「よし、行こう」

ソラは扉を開くと階段を登っていく。

道中誰ともすれ違うことなく登り切ると、広い廊下に出た。左、右と見回すが人の気配はない。

(……どこだろうか?)

ここが商会建物内であるのは間違いない。だが今いる場所がどこに位置するのかソラには分からなかった。

幸い、追っていた痕跡とそれ以外の区別は出来ている。ここは痕跡を追って進むしかなかった。

痕跡を足がかりに歩いていると、向かう先から二人の男が歩いてきた。うち片方は胸のあたりに高価なブローチを付けていることから、商会内でも位の高い人間か或いはどこかの貴族だと分かる。

なにかの情報にはならないかと、ソラは彼らの話に聞き耳を立てた。

「最近やけに子供を連れてきているよなあの人」

「なんでもあれ、売り物にするらしいですよ。全く悪趣味もいいところですよ」

「そう言いながらあんたも楽しんでるんだらう？ クローネさん」

男の問いに、ブローチを付けた男・クローネは不気味な笑みを浮かべた。長い前髪で隠れた左目が、髪の間から怪しく光っている。

「それはもう。子供の持つ魔力核は色々な物に使えますからねえ。なんなら私が全部買い占めて実験材料にしてもいいくらいです。なんて、冗談ですけど」

「あなたの方がよっぽど悪趣味だと俺は思うけどな」

クローネの答えに男は引き攣った笑いを浮かべた。

「ま、明日にはあの子供たち搬送されるみたいですけどね」

（全員？ セシル以外にも子供たちがいるってこと？）

クローネの言葉にソラは歯噛みする。どうやらセシル以外にも複数人子供が捕らえられているらしい。だがこの情報は極めて有効なものだった。

「ところでクローネさん。あんた今回何を買いに来たんだっけか」

「いえ、今回は特に何も？ 魔法の使役を頼まれました」

「ああ、子供を搬送するための」

「ええ。彼の伝手での魔法を扱える者は、私くらいしかいませんからね」

話し声が少しずつ遠ざかっていく。二人の話、特にクローネという男の話は気になっ

たソラだったが、今はセシルたちを助けることを優先にしている。

ソラは男たちが来た方に向き直ると、痕跡を探る。痕跡は男達がやってきた方向へと伸びている。

痕跡を辿って進むと、ある扉の前でそれは途切れた。扉は至って普通の作りで、これもまた一人が通れるくらいの幅だ。

『これで依頼された人数が揃ったな』

扉に手を掛けた時だった。扉の向こうから話し声が聞こえた。

慌てて扉から離れ、様子を伺うソラ。扉が開くと出てきたのは、セシルを連れて行ったあの男だった。

「漸く向こうの嫌味を聞かなくて済むぜ。あとは今日中に運ぶ準備を終わらせて、明日には出発か」

男が去っていくのを待ちながら、ソラは考える。そもそも彼らに依頼した人物は何を目的としているのだろうか。

先の男たちの間では、子供の魔力核について話が出ていた。

確かに子供の持つ魔力核は大人よりは小さい物だが、その分蓄積されている魔力の濃度が高いとされている。原因については諸説あるが、ともかく子供の魔力核を扱った実験は過去に行われていたのも歴史として残っている。今では禁忌の行為としており、行

えば重罪人としてその身柄を永遠に拘束されることになる。

そうなる危険性を厭わず、果たして子供の魔力核を求めらるうか。甚だ疑問だ。

(それか別の目的があるのか……)

いずれにせよ、止めることに変わりはない。約束のためだけでなく、己の境遇が故に。

男の姿が見えなくなるのを計らって、ソラは扉に手を掛けた。鍵が掛かっているが、この程度の錠を破るのは造作もない。僅かな魔力を注ぐだけで、掛けられていた錠は容易く解かれる。

扉を開けるとその先に階段があつた。また地下へと続く階段だ。壁には松明が取り付けられ、淡い光が行く道を照らしている。

一歩一歩警戒しながら進んでいくと、声が近づいてくる。声音から察するに子供の声。それも複数だ。

階段を下り切ると、薄暗く開けた場所に出た。

「そんな……なんで……？」

飛び込んできた光景に、ソラは絶句した。

父親や母親を呼び泣き叫んでいる子供たち。檻に入れられているその数は十を超え、二十人程だ。

明らかに異様な光景だ。普通これだけの子供がいなくなれば、なんらかの騒動があつてもおかしくはない。だというのに、地上では何の変化も見られなかったのだ。まるで、住人たちが黙認しているかのような——あるいは別の何処から連れてきたかのような。

「お兄ちゃん!？」

聞き覚えのある声が響き、ソラは我に帰る。

「セシル! 良かった、無事だったんだね!」

檻の中にセシルの無事な姿を見つけて、ソラは胸を撫で下ろした。どうやら怪我をしている様子もない。

「お兄ちゃん、どうしてここに?」

セシルが近づき、顔を出す。

「セシルを助けるために来たんだよ。大丈夫? 怪我はしてない?」

「う、うん、大丈夫だけど……」

よく見るとセシルの目元には涙の痕があつた。

「でも僕……お母さんに嫌われたから……」

どうやら母親に嫌われたと思つたらしく、それ故に落ち込んでいたようだ。ソラは微笑むと、セシルの頭を優しく撫でた。

「大丈夫。レフィナさん言ってたよ。セシルと一緒に暮らしたいって」

「ほんと?」

「うん、ほんと。ボクを信じて?」

視線を感じて、ソラは周囲を見る。他の子供たちが不安げな表情を浮かべて、様子を伺っている。

(あの時と同じだ……)

かつて経験した忌まわしき事件と状況が似ている。囚われている大勢の子供。今助けられるのは、自分しかない。

微かに震える手を抑えて、ソラは唇を噛み締める。かつての記憶をかき消すように頭を振ると、他の子供たちにも笑いかけた。

「みんなもここから出してあげる。一緒にお父さんやお母さんのところに帰ろう?」

ソラの言葉に、子供たちは喜びの表情を浮かべる。それを見て微笑むと、ソラは周囲を見渡した。

(それにしても……なんのための部屋なんだろう?)

この部屋はどうにも不可解な点がある。周囲を見渡しても、子供たちがいる檻以外に何も置かれていない。だがその割には広い構造をしており、地下というのもあって用途が不明だ。

不意にソラは足元に視線を向けた。

「あれ？ 何か書かれてる……？」

何かが描かれているのは分かるが、薄暗くて見え難い。そこでソラは足元を照らすため、手のひらから光の球を発生させた。

光の球は周囲を明るく照らし、全貌を明らかにしていく。

「どういふこと……これ……？」

描かれていた物を見て、ソラは動揺した。

幾つもの線が、地面に描かれていた。線は詠唱文字を象っており、その周囲に大きな円を形作っている。

「お兄ちゃん、これ何？」

ソラが驚いているのを見て、セシルが問い掛ける。

「転移魔法のための陣だよ。でもこれ——」

詠唱の内容を黙読して、ソラは狼狽する。

「肉体と魂を別々にするものだ」

「肉体と魂を？」

「詠唱内容は口にしたら発動しちゃうから言えないけど、これ人の持つ魂と肉体を分けて、それぞれ別の場所へと転移させる内容になってる」

もう一度魔法陣をよく分析する。近づいてよく見ると薄くなつて文字も見受けられ
た。

「誰かが書き換えた痕跡がある。それもついさつき。でも……誰が何のために？」

ソラはハツとして思い出す。クローネと呼ばれていたあの男。男は何かの魔法のため
に呼ばれたと言っていた。それがもし、転移魔法を扱うためなのだとすれば、この魔
法陣はあの男が書き換えた可能性が出てくる。

まるで心臓を抉られたような気分、ソラの背筋に悪寒が走った。いやな汗が額に滲
み出ている。

「急いでここから出ないと」

檻を開けるため、急いで錠を外そうとした時だった。

——コツン、コツン。

と、誰かが下りてくる音がソラの耳に入ってきた。

(マズい……！　もう誰かが来た!?)

音から察するに、ここの関係者である可能性が高い。セシルを連れて行つた男が『ボ
ス』と呼んでいた者という可能性もある。

慌てて光を消すと、ソラは身構えて階段の方へ目をやる。音が徐々に近づいている。
あまりの緊迫感に、背後にいるセシルは堪らず生唾を飲む。他の子供たちも声を押し殺

した。

そして足音は、階段を下り切ったあたりで止んだ。

「何よ……? 暗いわね」

(あれ? この声、どこかで……)

聞き覚えのある声が響く。

「光よ……その加護で闇を照らせ……」

詠唱とともに、眩い光が部屋を照らした。現れた姿を見て、ソラは構えを解いて目を見開く。

「なんで君がここに?」

ソラの問いに――。

「なんでって、あんたの手助けをしに来たに決まってるでしょ?」

トウネリは笑みを浮かべて答えるのだった。

第三節 あの日の約束と確かな想い 3

レフィナはへたり込んだまま動かない。果然と地面を見つめて、夫のことを思い出していた。

レフィナの夫はギルドでもそれなりに名を馳せている人物だった。魔法も人並みに扱え、武術にも長けていたことから、高額報酬の依頼を完遂することも出来ていた。そうして稼いだ金を、彼は一切自分のためには使わず家族のために使った。

しかし彼は死んだ。レフィナが聞いた話によると、どうやらギルドからの依頼である人物について調べていたらしい。その人物は違法な魔法生物「魔物」を頻繁に生み出しているという噂が流れていたのだ。

調査するにあたって、彼は信頼できる者と組んで行動していた。その時組んでいたとされているのが最強の男とも言われている——そう、ユースである。

しかしユースは事を慎重に進める人間だった。例えば被害が出たとしても、確証がない限りは動かない。正義感の強い彼とは、真逆の考えを持っていたのだ。

調査していた街で被害が出始めた時、彼はユースに言ったという。

『例えあいつが犯人でなかったとしても、疑いがあるならば俺はあいつの所に行く。それでも大勢の人が助かる可能性があるなら、俺は迷わず行動する』

そう言つてユースの静止を振り切つて、彼は単身調査対象のいる屋敷に突入した。

結果は悲惨だった。彼の疑いの通り、屋敷には魔物がいた。だが彼の手には負えないほど、凶悪な魔物だったのだ。

ユースが現場にたどり着いたときにはもう、彼は屍と化していた。無惨にも魔物は、骨ごと彼の体を貪り尽くしていたという。

魔物はユースによつて早々に葬り去られた。そして残つたのは凄惨な血の海と、彼の所持品だけだった。

『すまない、助けられなかった』

女性が訃報を知らせに来た日、ユースもまたレフィナの元を訪れていた。開口一番に言つたのがこの言葉だ。

当然、レフィナはユースを糾弾した。夫を返してくれ、そう叫んだのを彼女は今でも鮮明に覚えている。目の前の男が悪いわけではないと分かつていても、悲しみの感情を吐き出さずにはいられなかったのだ。

当時のことを思い出して、レフィナはふらふらと立ち上がる。

夫との間に生まれた娘・セシル。愛する娘を一時でも手放そうと考えた自分を呪う。

裂けて血が滲むほど、唇を強く噛み締める。

(ソラさんは……あの人によく似ている)

娘のために単身乗り込んでいった青年。レフィナの目には彼の背中が、夫の背中と重なっていた。

「あの人と同じようなことになってほしくないから……!」

レフィナは意を決して家を飛び出した。

誰か彼の助けになれる者はいないか。考えるよりも先に彼女はギルドへと向かっていった。もしかしたらあそこには、彼の助けになれる者がいるかもしれないと。

息も切れ切れになりながら走り、ギルドに近付いたとき、レフィナは見覚えのある少女を見つけた。少女は書類の束を見ながら、ぶつぶつと何かを呟いている。

(あの子、確か昨日ソラさんと一緒にいた)

彼女ならばあるいは。そう思いレフィナは駆け寄った。

「あの一!」

声を掛けられて、少女がレフィナの方を向く。

「ん? どうかしましたか? て、あなたは昨日あいつといた……」

少女トウネリは小首を傾げる。

「お願いです! 私の娘セシルと、そしてソラさんを助けて下さい!」

レフィナの叫び声に、周囲を歩いていた者たちが一斉に顔を向ける。

周囲の視線を感じてトウネリはレフィナの手首を取った。

「ちよつとわたしの部屋で詳しく話してもらえますか？　ここだと人目につくので」

「あ、は、はい……」

トウネリに手を引かれるまま、レフィナは宿舎へと向かった。

部屋に案内されると、レフィナは事情を全て話した。セシルが連れ去られたこと。その原因。そしてセシルを取り戻すため、ソラが単身乗り込んでいったこと全てだ。

「あのバカ……また一人で背負おうとして……」

話を聞き、トウネリは唇を噛む。

「私は……彼のことか心配なんです。彼は私の夫に似ている……誰かのために自分を犠牲にする人だって……」

「そうですね。あいつは……自分には誰かを守れる力があるって自覚している。だから背負うとしてるんだと思います。それが力ある者の責任なんだって」

「あの……あなたは彼とはどういった関係なんですか？」

「あいつとはとも——」

トウネリは問いに答えようとして一瞬言葉を詰まらせた。

「いえ、あいつとはちよつとした縁があるだけですよ」

どこか判然としない答えにレフィナは首を傾げるが、今は気にしている場合ではなかった。

レフィナは立ち上がると、頭を深々と下げる。

「お願いです！ お金はいずれちゃんど支払います！ だから……ッ！」

「いいわよ、お金なんて」

「えっ？」

レフィナの驚く声に対して、トウネリは大きくため息を吐く。

「別にわたしはあなたからの依頼を受けて行くわけじゃないから。わたしが勝手に、少しでもあいつに恩返しをしたいっただけよ」

そう吐き捨てるように言うと、トウネリは席から立ち上がる。そして扉に手を掛けて、レフィナの方を見た。

「しばらくここで待っていて下さい。あなたの娘さんも、あいつのことも、それに一緒にいるであろう他の子供たちも全員助けて帰ってきますから」

言い残された言葉に、レフィナはまた深々と頭を下げた。

部屋を出て、トウネリは早足で廊下を歩く。足取りからどこか苛立ちが見える。

「あ、トウネリさん！」

外に出たのとほぼ同時に、ルージュヴェリアが声を掛けた。その傍らにはシエルヴィ

アの姿もある。

「どうしたの？ 二人揃って」

「それが聞いてください！」

「ユースのやつが、商会本部に乗り込んでいったらしいわ」

「はあ!？」

話の内容にトウネリは思わず叫ぶ。そして額に手を当てて項垂れた。

「どうしましょう！ まだ商会が本当に絡んでいるかわかっていないのに……トウネリさん？」

「どいつもこいつも……わたしが体裁を気にして行動している内に好き勝手行動しやがってえ……!？」

「あの……もしかして怒ってます?？」

「あつたりまえでしょ!？」

トウネリの叫び声に、ルージュヴェリアは肩を震わせる。それだけトウネリから溢れている怒りは凄まじい。シエルヴィアでさえ狼狽している程だ。

「大体あなたがあんなこと言わなければもつと早くに行動出来ていたのに!？」

「え、ちよ、ちよつとどうして私が責められているんですか!？」

「うるさい！ ああもう、何が依頼よ！ 何がギルドよ！ めんどくさいにも程がある

わよバカ！」

「う、うるさいってなんですか！」

何故こんなにも怒りを露わにしているのか分からず、その上理不尽にも矛先が自分に向けられたことで不快感を示すルージユヴェリア。

一方二人の様子を眺めるシエルヴィアは、呆れた表情を浮かべている。

「二人とも喧嘩はやめなさいよみつともない」

「シエルヴィアさん！ これ私悪くないですよね？」

「知らないわよそんなこと」

「そつ、そんなことつて！」

「それよりもどうするのよ。下手したら大事になるわよ？」

シエルヴィアの指摘に二人は言葉を詰まらせる。実際大事に発展しかねない状況であるのは間違いなかった。

トウネリは頭を掻き筆ると、立ち去ろうと動く。

「あのトウネリさん、どこへ行くんですか？」

「決まってるでしょ。バカの手助けに行くのよ」

「つまりユースのところに行くってことね？」

「そつちのバカは別に放っておいても一人でなんとかするわよ。どうせあいつらも一緒

にいるんだろうし」

「え、じゃあ誰のところか……？」

問いに、トウネリは軽く一息吐いて目蓋を閉じる。その様子を二人が不思議そうに眺めていると、トウネリは目蓋を開いた。

「わたしが守りたい人のところによ」

それだけ言うとトウネリは駆け出す。向かう先はリヴェルトス商会ヘルデイロ支部の建物。あの場所にいるであろうソラのところだ。

(だってわたしが力をつけたのは、そのためなんだから……)

「守りたい人って、誰のことだろう？」

「さあ？」

走り去った背中を見送りながら、二人は首を傾げるのだった。

走りながら、トウネリは考えていた。

もし誰かが商会建物に侵入していたならば、何か騒動が起こっていてもおかしくはない。それが無いということは、ソラは商会内部の人間に気づかれずに進んでいるということになる。そうなると思いが当たるのは、商会が管理して運営している地下道の存在だ。

「そっぴや八番街の地下道で誰か倒れてたらしい」

「え、うそ。誰かに襲われたのかしら」

「最近何かと物騒だよなあ」

（八番街……確かあそこって商會が土地を管理している区画よね……）

トウネリは自分の記憶を辿って、八番街に設置された地下道の入り口まで向かった。入り口の前では憲兵が倒れていたと思われる男二人に話を聞いている。

「だから覚えてないんだよ！ 誰かに襲われたような気がするけど、それが誰か思い出せないんだって！」

「しかし君たち、状況から見ると武装した状態で戦ったのは間違いないんだろう？」

「いやそうだけだよ！」

男たちの話を耳にして、疑問を浮かべるトウネリ。

（あいつ、記憶操作の類の魔法も使えるの……？）

男たちの様子から見ると、倒れるまで何をしていたか記憶にない様子だ。

（まあ考えても仕方ないか。それよりあいつら、多分商會に雇われてる人間よね）

男の腕に、商會のシンボルを象った刺青が入っている。鑑みるに、この男二人が傭兵であることは間違いない。

（てことは、あいつはここを通って行ったってことか）

トウネリは周囲を見渡す。人集りは出来ていない。元々人が来にくい場所であるの

が幸いている。

息を潜めて、見つからないように入り口に移動する。特に難なくこれを突破し、トウネリは地下道へと入っていった。

地下道を通ることで潜入に成功したトウネリは、探査魔法を使ってソラの魔力の痕跡を探した。

(これは……あいつの髪と同じ色の痕跡?)

魔力の痕跡は稀にその人間特有の色をしていることがある。ソラもまたその稀少な痕跡が出るのか、痕跡の中に一つ特徴的な空色の物が混じっている。

トウネリはこれをソラのものと考えて、痕跡を辿った。道中誰かに見つからないよう、気配を押し殺して進む。幸い誰かが通るといことがなかったため、ここも難なく進むことが出来た。

が、トウネリは却って不審に思えて仕方がなかった。

“——まるで、なにかを待っていたみたいだな”

脳裏にユースの言葉が蘇る。

今回の一件も、すんなりと潜入できる今の状況も誰かに作られたものだとしたら。

(違う……そんなわけない……!)

子供を連れ去られたと訴える者の表情は演技などではなかった。

子供たちに恐怖を与え、親に悲しみと絶望を与える。そんなことを意図的に起こす者を到底許せるはずがない。

トウネリは邪念を振り払うと、足早に痕跡を辿った。そして。

「なんでって、あんたの手助けをしに来たに決まってるでしょ？」

ソラとの合流を果たすのだった。

◇

「全く。お前たちが束で掛かっても勝てるわけがないと言っただろうに」

玉座のように豪華な椅子に腰を掛け、男が嘆息混じりに呟く。

男の視線の先には、円を描くようにして昏倒させられた複数の傭兵。彼らの近くには折れた武装が転がっている。

その中央に悠然と佇むのは、傭兵たちを単身で倒したユースと顔立ちが似た少女二人だ。

「ねえユース。こいつら頭悪いのかしら？ ユースの顔を見て気づかないなんて。どう思うアルマ姉様？」

ブロンドの長い髪を二つに結った銀眼の少女が、悪戯な表情を浮かべる。

「ラミナ……人の悪口は……ダメ……。事実を敢えて言わないのが大人の嗜み。事実だけだ」

対して銀髪の長い髪を二つに結った金眼の少女アルマが微かに頬を膨らませる。と言つても、無表情なのだが。

「そうは言つてもアルマ姉様？　こいつら素手のユースにすら敵うはずなのに立ち向かったのよ？　脳味噌足りてないんじゃないかしら」

ブロンドの少女ラミナは近くに倒れている男の頬を軽く踏みつける。さぞ楽しそうな表情で。

「ラミナ……仕方ない。だつて事実足りてないんだもの」

アルマは屈むと、近くに倒れていた男の頬をつねつて遊び始める。無表情ながらも、どこか楽しそうな雰囲気だ。

二人のやり取りを聞きながら、ユースは額に手を当てて項垂れた。

「お前らな。誰のせいでこうなつたと思つているんだ？」
「勿論、私がこいつらを侮辱に侮辱して煽つて」

「私が男の一人の股間に蹴りを入れたから」

「面倒ごととは起こすなつて言つたよな？」

ユースは深いため息を吐くと、椅子に座る男に顔を向けた。

「あー、その、なんだ。別に殴り込むつもりはなかったんだ。ちよつと話を聞きに来たくらいで」

「分かつている。大方、昨今好き勝手動いている輩たちについて聞きに来たんだろう？」

男は笑みを浮かべると、立ち上がる。

「ねえユース。なにこの男、気持ち悪いんだけど」

「ラミナ。思つても言つちやダメ。私も思つてるけど」

側の二人が話し始めるのを聞き、ユースはあからさまに大きく咳払いをする。すると二人は口を噤んでつまらなさそうに後ろを向いた。

「その口振りからするに、あんたの指示なんだろう？」

「そうでもあるし、そうでないとも言える。それはそれとしてだ。あの女の子が現れたのだろう？」

男の問いに、ユースは眉間にシワを寄せた。対し男は不気味な笑みを浮かべて言葉を続ける。

「事が発展したということはそういうことだ。ガルデイアンの名を持つものよ」

「お前ら、あいつに一体なにをさせるつもりだ？」

「はて、お前も聞いているはずだが……この先の未来で待ち受けていることを」

男の言葉に舌打ちすると、ユースは踵を返す。表情から静かな怒りが滲み出ている。

「おや、もうお帰りか？　もう少しゆっくりしていくといい」

「あんたとの下らない会話に付き合っている暇はない。お前ら帰るぞ」

「えー？　観光しないのユース」

「せつかくここまで来たのに」

「うるさい。お前らはそもそも歩いてないだろうが」

ユースと二人の少女が去っていくのを眺めながら、男は微笑する。

「お前がどう干渉しようと、変わることはない道なのだよ」

再び椅子に座ると、男は天井を見上げる。豪華な照明があるだけの、ただの天井だ。

しかし男は何かが映っているかのように目を細める。

「ようやく動き出すのか……この世界は」

男は呟きとともに狂った笑い声をあげる。瞳に宿るは狂喜、あるいは愉悦。待ちに待ちわびたこの時に、リヴェルトス商会の長ハンドレルは心を躍らせるのであった。

第三節 あの日の約束と確かな想い 4

「にしても……」

トウネリは檻の中を見て齒噛みする。

「これだけの人数集めるなんて、どうかしてるわね。一体何が目的なのかしら」

トウネリの怒りは最もだ。ソラも同意して、改めて檻の錠を外す。

「みんな出てきて大丈夫だよ」

ソラが微笑むと、子供たちの表情に希望が宿る。

檻から出ると歓喜の声を上げようとするが、まだ脱出に成功したわけではない。ソラは人差し指を口に当ててることですそれを制した。

「それで、ここからどうする？ 流石にこれだけの人数を一度に移動させるわけにはいかないわよ？」

トウネリの言う通り、密かに脱出するには困難な人数だ。一度に移動してしまえば確実に見つかってしまうことだろう。

腕を組み、脱出方法を考えるソラ。そこへ釘を刺すようにトウネリは言った。

「ちなみに前みたいなやつは却下するわよ？」

「前みたいなやつ？」

「ほら……あの時みたいな……」

あまり思い出したいくない記憶であるため、トウネリは表情を曇らせる。

「あんたが一人であいつらの気を引くなんてこと、私は絶対に嫌だから」

トウネリの意図を汲み取ると、ソラは軽く微笑んだ。

「うん、大丈夫。あの時みたいなことしないから」

「本当？ あんた、どうせあの時から大して考え方変わってないんでしょ？」

「んー、どうかな？」

くすくすと笑うソラに対して、トウネリは呆れ返る。悪戯な表情を浮かべるようになってはいるが、根っこの部分は何も変わっていない。トウネリはそう捉えていた。

あまり作戦に時間を掛けてはいるわけにもいかない。ソラは打開策を考えるため無言になる。

ふと、ソラは地面に目をやる。

「あつ……」

何かを閃き、ソラは声を漏らす。

その声に反応し子供たちは一斉にソラの方に顔を向けた。トウネリも同時にソラの

顔を覗き込む。

「なにか思いついた？」

「うん。トウネリは地面の魔法陣、気づいてるよね？」

「ええ。これ、転移のやつでしょ？ しかも大掛かりなやつ」

「うん。これを利用できないかなって思ってた」

ソラの発言を聞き、セシルは首を傾げた。

「でもお兄ちゃん。この魔法陣？ つて、危ないものなんですよ？」

セシルの言葉に反応し、トウネリは魔法陣を注意深く眺めた。

「なによこれ……」

魔法陣に描かれた内容を読んでトウネリは狼狽する。多少は魔法を心得ているため、その内容の意味を理解することが出来た。

「こんなの発動したら大惨事じゃないのよ……!」

トウネリの反応に、子供たちは不安を示す。すでにソラが説明した通り、もしこの魔法が発動したならばここにいる者は皆死に至ることだろう。

どういふつもりなのか理解できず、トウネリはソラの二の腕を掴んだ。

「あんた、こんなの利用できるわけじゃないでしょ！ 発動したらそれこそあつちの思惑通りじゃないのよ！」

「うん、確かにこのままだったらね。でも魔法陣の型は全部これで統一されているよね？」

「そうだけど——まさかあんた、この魔法陣を書き換えようってわけ!？」

トウネリの問いに、ソラは肯く。

確かにすでに描かれている魔法陣をもとに新たな魔法陣を描けば、魔法の効果は上書きされて結果を変えることが可能だ。だが。

「あんたね、転移魔法の陣がどういうものか分かって言ってるの!? 書き換えるための道具も無ければ、その知識が無かったら失敗するかもしれないのよ!？」

陣を描いて転移魔法を使役するには、幾つか必要なものがあつた。

まずは道具だ。すでに描かれた魔法陣を消すための何かが不可欠な上に、消した後新たな内容を書き込むための道具も必要になってくる。そして何より正しく使役するための知識が必要だ。

「大丈夫。知識はボクの頭の中にあるし、書き換えるための道具もボクが持つてる」

そう言うと、ソラは所持品の中から白石を取り出した。これは擦ることで地面に細かい白い粉が付着するため、魔法陣を扱う際には必ず用いられている。

「文字を消すのは魔法を使えば出来るはず。魔法陣を発動するためには文面に書かれた詠唱を口にする必要があるからね」

「でも肝心な文面はどうするのよ？　転移はただ詠唱を書けばいいってものじゃないのよっ。」

「うん、わかってる。どこに転移させるかはこれから決めるよ」

ソラは更に所持品の中から王都の地図と白紙、そして黒インクのペンを取り出す。

それを見て、トウネリは口を噤む。ソラの目は本気だ。彼は子供たちを守りながら戦うのは得策ではないと考えている。全員で移動するのも分かれて移動するのも危険が伴う。

だが転移にもそれ相応のリスクが発生する。果たして成功するだろうか。きっとこの場に他の協力者がいたならばそう考えるだろう。それだけ魔法陣を使った転移には高度な技術が必須なのだ。

「本当にできるのね？」

トウネリの問いにソラは頷く。

しばし顔を見つめて、トウネリは軽いため息を吐いた。

「わかったわ。あなたを信じる」

「ありがとうトウネリ」

「別に感謝されるほどのことじゃないわよ」

トウネリは少し照れ臭そうに顔を反らす。

「それじゃあすぐに始めるよ」

ソラは微かに笑うと、地図を地面に広げて傍に白紙を置く。そして魔法陣の全体を眺めて白紙にペンを走らせる。紙に描いていくのは、地面に描かれている魔法陣と同じもの。

素早くかつ寸分の狂いなく描くその手際に感心しながら、トウネリは踵を返した。

「それじゃ、わたしはあいづらが来ないように入り口で見張ってるわ」

「えっ?」

思わず手を止めて、ソラはトウネリの顔を見る。

「別におかしなこと言っていないでしょ? いつまでもあいづらが気づかないとは思えないし、それにあんたが倒したやつらも起きてたからここに来るのも時間の問題よ?」

「そうかもしれないけど……」

「なに? わたし一人じゃ不安?」

トウネリは少し呆れた表情でソラの顔を見た。彼女の瞳に微かな悲哀が垣間見える。

「わたしはね、もうあの時みたいに弱い女じゃないの。六年の間、必死になって力をつけたんだから」

「トウネリ……」

「わたしはあんたを信じた。だから、あんたもわたしを信じなさい」

ソラは唇を噛む。実際転移の陣を描いている間にこの関係者が来てしまつては、魔法の発動さえ危うくなる。最悪今の魔法陣が発動し、子供たちはおろか、自分たちも死に至りかねない。

何か他に案は無いかと、悠長に考えている時間もあるのかさえ怪しい。

「ソラ。今度はわたしがあんたの力になる番よ」

「……わかつた。出来るだけ早く描きあげるから」

「そうね。そうしてもらえろとわたしも樂ができるわ」

トウネリは笑うと、階段の方へと歩いていく。軽く拳を握り、固い眼差しで階段を上がつていく。まだ商會に動きがある気配はない。

階段へ姿を消したのを見送り、ソラは急ぎ魔法陣の作成に取り掛かつた。

まずは複写の続き。一切の違いの無い陣を、紙に素早く描いていく。これはいわば設計図のようなものだ。地面に描かれている魔法陣を利用するためには、まずはその構造を理解しなければならぬ。

構造を理解した上で次に必要になるのは文字の配置だ。陣の中に描く文字はただ闇雲に並べれば良いというものではなく、転移させる場所への方角や座標に合わせた配列が必要になってくる。

(どこかに転移させるか決めないと……)

一方トウネリは階段出入り口の裏に立っていた。商会関係者が来たならば音で判断が可能だ。そして察知した時、すぐに階下の広間にいるソラに報せることが出来る場所といえどここが適している。

耳を澄まして、外の気配に意識を向ける。まだ動きがある様子ではない。

「このまま何事もなければこっちとしても楽なだけだね……」

眩き、トウネリは少し物思いに耽ける。

あの忌まわしい事件から六年。トウネリはその年月の間死に物狂いで特訓した。そのため近所に住んでいた老夫婦の家を出て王都にやってきたのだ。全ては後悔と罪悪感からの行動だった。

今では暴漢数人を相手にしても無傷で戦えるほどにまで成長した。これは偏に、師として特訓に付き合った男が腕の立つ者だった故であるのだが。

手のひらを何度か握ったり開いたりするトウネリ。神妙な面持ちで自分の手を見つめる。

（大丈夫……わたしはあいつと肩を並べられる。そのためにも力をつけたんだから……！）

不意にトウネリの顔色が変わる。何かを感じたため、扉に耳を当てた。

『くそ！ 今すぐガキどもを移動させるぞ！』

叫び声と慌てたように走る音が廊下から響いてきている。距離にしてもう間も無くこの場所にたどり着く。

トウネリはすぐに入り口から離れると、階下に向けて叫んだ。

「ソラー！ あいつらが来た！」

トウネリの叫びが広間にまで響き渡る。

「くっ……早くしないと……！」

ソラは手を止めて頭を悩ませていた。紙に描いた陣は完成している。魔法陣の文字部分も消した。が、肝心の転移先がまだ決まっていなかった。

子供たち全員を転移させること自体は難しいことではない。だが転移先を選ぶ際に三つ考えなければならぬことがある。

まずは転移させる先の広さだ。転移魔法が発動すると、示した座標に描いたものと同様の魔法陣が描かれることになる。さらにはそこへ子供たち全員を送るとなれば、相応の広さが必要になってくる。

二つ目は距離。現在地から距離が遠ければ遠いほど、文字の配列は複雑なものになっていく。短時間で魔法陣を完成させるには、建物から可能な限り近い必要がある。

そして最後に、転移先に人がいるかどうかだ。広くかつ近い距離の場所を見つけたとしても、その場所に人が多くいる可能性があった場合除外しなければならない。という

のも、転移先に障害となる物が無いことが前提となってくるためだ。唯一の救いは、障害となる物があつた場合転移魔法が発動しないということなのだが、それでは時間を無駄にするだけだ。

(どこかいい場所は……)

地図と照らし合わせて、転移先を検討するソラ。焦りから額に僅かな汗が滲み出ている。

「お兄ちゃん……」

傍でセシルが不安げな表情を浮かべる。子供たちもソラの焦りが見えているため、同様の表情で見守っている。

(広い場所で……ここからそう遠くなくて……そして人があまりいなさそうな場所……)

そんな都合のいい場所がこの王都内に果たしてあるのだろうか。ソラは必死に地図と自分の記憶から、該当する場所を探し出すのだった。

第三節 あの日の約束と確かな想い 5

商会内の廊下では慌ただしく武装した傭兵たちが行き交っていた。まるで何かに備えているかのような様子だ。

「くそ、なんだってあの男が」

リヴェルトス商会ヘルデイロ支部を統括する頭領は、不満げに呟く。

一際大柄な身体。身から流れる貫禄のある雰囲気から、彼もまた長い間この役職に携わった人間だと見て取れる。

彼らはある情報を聞き入れ、慌てていた。商会本部にギルドのユースが乗り込んだという情報が入ったのだ。

故に彼らはこの場所に来ると考えて、襲撃に備えているわけである。

そして要因はもう一つ。

「お前ら、なんですぐに話しにこなかった！」

「だってポスト！ 俺ら街の兵士に見つかって、ずっと事情を聞かれてて——」

「言い訳はいい！ あのガキどもが連れてかれたら、俺たちの商売が水の泡だ！」

ソラが気絶させた男二人が商会建物にやってきて、侵入を許したことを頭領に話したのだ。結果彼らは襲撃に備えると同時に、侵入者の迎撃を行おうとしているのだ。

複数の傭兵を引き連れて、セシルを連れ去った男でもあるヘルデイロ支部の頭領は子供の監禁部屋へと急ぐ。

「とにかくガキどもだけは何んとしても移送しねえと、俺たちの命さえ危ういんだ。わかってるなお前ら！」

頭領の叫びに、傭兵たちは強く頷く。彼らの顔に明らかな焦りが見える。

「よし、急げー！」

頭領が促すと、傭兵の何人かが我先にと駆け出す。そして彼らが扉の前で立ち止まり、鍵を開けようとした時だった。

「んっ？」

ゆっくりと一人で扉が開いた。

先頭に立っている男が呆気にと取られて扉を見ていると、扉の向こうの闇から人影が現れる。

「はあーい？　こんにち……わっ！」

そんな緊張感のない挨拶とともにトウネリは飛び出し、先頭に立つ男の顎に膝蹴りを当てた。

「ぐえ……!?!」

男は短い悲鳴を上げ、頭部に与えられた衝撃に白目を剥く。

そのままトウネリは男の体を足場にして跳び上がると、背後にいた男目掛けて顔面に回し蹴りを喰らわせた。身体強化の魔法によって編み出された蹴りの威力は凄まじく、彼女の倍の身長はある男の体を軽々と宙に浮かせ、地面に伏せさせる。

「てめえ、この女どこから入りやがった!?!」

着地したトウネリの姿を見て、傭兵たちが驚く。

「へえー? 女一人に対してこれだけの大人数で襲ってくるんだ。だらしない男もいたものね」

「ほざけ!」

傭兵の一人が襲いかかる。

トウネリは男の剣撃を素早く躲すと、距離を取って人数を見計らう。

(今は十人つてとこるか)

太腿に付けた矢筒に入っている矢は限りがある。おそらくまだ傭兵たちがいることを鑑みれば、下手に数を減らすわけにもいかない。

かと言って時間が経てば増援が来てしまう可能性もある。

それでもトウネリは聞かなければならないことがあった。それは彼らの目的だ。

「見たところ、あなたがここの頭領よね？」

傭兵の集団。その背後に立つ大柄の男に視線を向けて、トウネリは指差した。

「一つ聞きたいんだけど、あなたあの子たちを一体どうするつもりだったのかしら？」

「問われていちいち答えると思うか？」

「そう……じゃあわたしが当ててあげる」

トウネリは人差し指を立てると、話し始める。ここまで来るまでにあつた僅かな時間を使い集めた情報。それらから得た推測だ。

「あんたはある貴族と取引をした。内容は子供の人体の提供。それも一人じゃない、複数人。けど子供を集めるなんてことをしたら、商會に登録されているあなたたちに重い処罰が下る。そこで土地を売った——特に子供がいる家族に多額の借金があると言い始めた。そして支払えないような額を提示された彼らへの救済として、子供の身柄を要求して公平性を謳った。でも中には暴力で捻じ伏せたこともあつたそうね？」

トウネリは言葉を区切ると、男たちを睨む。

「は、何が公平よ。あるはずのないものを偽っておいて。あなたたちみたいな奴を見るとほんと反吐が出るわ」

拳を構えると、トウネリはそう吐き捨てた。

「ガキが偉そうに……」

怒りを露わにする彼女に対して、傭兵たちは剣を構えながらじりじりと距離を詰める。

「おいお前ら、その女をさっさと殺せ」

頭領の合図とともに、傭兵たちは一斉に躍りかかった。

向かってきた男のひと薙ぎを受け流し、腹部に拳を打ち込む。腹部に与えられた衝撃に男が後ずさった。その隙にトウネリは身を翻しながら蹴りを当て、男を気絶させる。続け様に、立ち止まっている男との距離を一気に詰めた。男はそのまま投げ飛ばされて、背後にいた数人を巻き込んで地面に落ちる。

「ッ、ッの女強いぞ!」

傭兵たちはトウネリの動きに驚愕していた。ただ一人の女に、複数で掛かっても鎮圧できないその事実には。

「なに? 強いのは威勢だけかしら?」

狼狽える傭兵たちを嘲笑うと、トウネリは更なる迎撃体勢に移ろうとする——が。

「——ッ!? まずッ!」

身の危険を察知して、咄嗟に扉の中に飛び込んだ。それと同時に、破裂したような音が響き渡る。

「外したか……」

頭領が舌打ちをする。彼の右手には一丁の銃が握られていた。銃口から微かに立ち上る煙が、弾丸の発射を物語っている。

「お前ら！ たかが女一人に手こずってるんじゃねえ！」

頭領は叫ぶと、トウネリが逃げた方へと歩み寄っていく。

その音を扉越しに聞きながら、トウネリも軽く舌打ちした。

「ああ、もう。面倒なもの持つてるわねあいつ」

銃弾を掻い潜りながら、複数人を相手取るのは困難。トウネリは齒軋りを立てると、腰に付けた小鞆の中身を弄る。

取り出したのは手に丁度収まるくらいの球だ。球からは一本の紐が伸びている。

「火よ……」

簡単な詠唱とともに指先で紐を摘む。すると指先で触れたところから小粒ほどの火がゆつくりと燃え広がり始める。

音と気配でタイミングを計るトウネリ。男の足音が止まったと同時に、素早く球を廊下に転がした。

「なんだ？」

頭領は思わずその球に視線を向ける。直後ポフという音を立てて球は破裂し、中から大量の煙を吐き出した。

煙は見る見るの内に広がり、傭兵たちの視界を奪っていく。

「くそ、なにも見えねえ……!!」

頭領は毒づく息を潜めた。彼は戦闘慣れしてるのもあり落ち着いている。

「なんだ!?! 何も見えないぞ!」

一方で頭領の思惑とは裏腹に、他の傭兵たちは不測の事態に慣れていないのか騒ぎ立てていた。音を頼りに動くこうとして頭領にとつてそれは邪魔でしかない。

「お前ら黙れ!、これくらいで狼狽えるんじゃない!」

頭領の叫んだのと同時に、走る音が響き渡った。

「——ッ!? そこかア!!」

頭領はすぐさま銃を音の方向に構え、引き金を引く。乾いた銃声とともに弾丸が発射。弾丸は直線上に飛び、狙い定めた対象に着弾した。

「ギヤアッ!?!」

しかし煙の中から聞こえてきたのは男の悲鳴だ。血飛沫が頭領の顔に掛かる。

「なんだ……?」

頭領が眉を潜めた直後、目の前に人の影が現れた。

「ぐお……!!?」

咄嗟に躲すことも出来ず、頭領は煙の中から出てきた傭兵の体に巻き込まれてバラ

スを崩す。

それに続いて煙の中からトウネリが飛び出した。狙うはバランスを崩した頭領の顔面に飛び蹴り。頭領は地面に伏す。

煙が晴れると、傭兵たちは思わず目を見開いた。たった一人の女に、屈強なはずの頭領がいつも容易く倒された。その事実が彼らをさらに狼狽させる。

「さて……あんた達のボスはこの通り倒させてもらったわ。どうする？　まだ向かってくる？」

笑みを浮かべるトウネリに対し、傭兵達は後ずさる。もはや彼らに戦意は残っていない。

(よし、このまま逃げてくれれば……)

このまま行けばこちらの勝利は必至。そうトウネリが考えた時だった。

「ぎ、ひいひいひい!!」

「が、ぐあああ、がああああッ!」

突然傭兵達が頭を抱えて叫び声を上げた。

「え、なによ急に?」

トウネリはまだ、彼らには直接何もしていない。だというのに、まるで頭が割れるような痛みを感じているかのように悲鳴を上げているのだ。

傭兵達は悲鳴を上げながら充血した白目を剥く。頭や顔を、血が流れることもいとわず強く掻き巻る。

そんな光景にトウネリは息を飲んだ。明らかに異質だ。まるで何かに抗っているかのようにも見受けられる。

「なに？　この音？」

彼らの悲鳴にも似た雄叫びは、地下広間にも届いていた。

不気味な声に子供達が怯える。

「大丈夫だよみんな。安心して？」

怯える子供達を落ち着かせようと、ソラは微笑み掛けた。が、内心では彼も動揺していた。

（今の音……急いでトウネリのところにいかないとい！）

しかしまだ転移の魔法陣は完成していない。いまだに転移先が決まらず、進行が停滞している。

更なる焦りが、ソラの思考を鈍らせる。どこか無いか。どこか、子供たち全員を転移させられる安全な場所は。迅る気持ちを抑えながら、ソラは地図に目を走らせる。

（ダメだ、落ち着け……！　どこかあるはずだ！　どこか！）

まず初めに浮かんだのは噴水広場。しかしここは人が多く往来する場所だ。転移さ

せる場所には不向きだ。

では王都の外の草原はとも考えたが、それは却って子供たちを不安にさせる。仮に転移できたとして、子供たちだけを放置するわけにもいかない。

まだ王都に来たばかりのソラにとって、該当箇所を探すことは困難であった。

(そうだ……闘技場は……?)

ふとソラは、ギルド入会試験を行った闘技場を思い出す。記憶が正しければ、あそこは普段は使用していない場所のはずだ。闘技場の舞台はそれなりの広さもある。人がいる可能性が非常に低く、かつ広い場所。これほど合う場所はもう他に思い浮かばない。

(大丈夫……あそこならきつと行ける!)

ソラは自分の直感を信じて、紙に描かれた魔法陣の中に素早く字を書く。地図と紙を何度も目で追い、必要な詠唱を魔法陣の中に落とし込む。

地図から算出した距離。現在地からの方角。さらには現在地と転移先に生じている高さの違いまで。それらを地図内の情報、己の記憶と感覚を頼りに魔法陣を描き始めた。

一方、トウネリは傭兵たちの豹変にただ立ち尽くしていた。

雄叫びが止むと、傭兵たちは焦点の合わない目でトウネリのことを見る。牙を剥き出

しにし、まるで獣のようだ。

「な、なによこれ。一体なにがなんだってのよ」

トウネリは堪らず後ずさる。

「ううあー」

呻くような声を発して、頭領が体を起こす。その立ち上がり方も異常で、背中をくの字にしてゆつくりと立ち上がる。さながら屍人が人形に操られているかのような。

「まさかこれ、何かに操られてる……？」

疑問を抱く暇もなく、傭兵たちが群がるようにトウネリを襲う。

「ぐっ！ ちよつと気持ち悪いんだけど！」

嫌味を吐きながら、トウネリは迎撃態勢を取る。が、その顔はすぐに青ざめた。

「なっ……!? ちよ、なによあれ！」

傭兵たちの背後、自分の見る方向から大勢の傭兵が走ってくる。全員目の前に傭兵たちと同じ状態だ。

(マズい……！ 流石にこれだけの数を一人じゃ捌けない！)

撤退も考えるが、まだソラの転移が終わっていない可能性がある。ともなればここから退くわけにはいかない。

トウネリは襲い来る傭兵たちを素早く攻撃し、跳ね除けていく。が、地面に伏した傭

兵たちは痛みを感じていないかのようによくに立ち上がる。

「ああ、もうしつこい！」

トウネリはクロスボウを取り出すと、慣れた手際で矢を装填、傭兵に向けて撃ち放つた。

矢に射抜かれても怯むことなく掴みかかってくる。トウネリの行動はいたずらに彼らを刺激しているだけのようにも見える。

それでもトウネリは矢を撃ち、刺さった矢を引き抜いて別の傭兵に突き刺す。拳を穿ち、跳び蹴りを顔面に喰らわせる。必死の攻防をトウネリは行った。

「しまっ……いっ！」

だがついに、傭兵たちの雪崩に吞まれて、トウネリはバランスを崩した。

「痛っ……いっ！」

咄嗟に受け身を取るトウネリ。頭領はそんな彼女の細い右足を掴み、華奢な体を軽々と持ち上げた。

「ちよつと離しなさいよー！」

掴まれている左足で頭領の顔面に蹴りを入れるが、彼は微動だにせずトウネリの体を振りかぶった。

「うおおおおーッ!!」

頭領は雄叫びとともに、トウネリの体を床に叩きつける。

「ぐっ……がっ……!!」

強い衝撃にトウネリの意識が揺れた。

掴んだ足を離さず、頭領は力のままに周囲の壁や床に何度もトウネりを叩きつける。

その度に、トウネリの口からくぐもった悲鳴が漏れる。腰に巻いた小鞆から道具が転がり落ちる。太腿の矢筒から落ちた矢がパラパラと鳴る。

(これ……まつず……)

朦朧とする意識の中、トウネリは地下への扉に目を向けた。他の傭兵たちが一斉に中へとなだれ込んでいつている。

(このままじゃソラたちが……！)

しかし考える余裕は与えられず、床に叩きつけられる強い衝撃がトウネりを襲った。

「かつは……ッ!」

咳き込んだと同時に、血を吐き出す。節々に走る痛みにもそれでも耐えたのは、彼女に強い思いがあつたからだ。もうあの時のようなことになりたくないという強い思いが。

頭領がまたトウネリの体を振りかぶる。

「いい加減に……しろってのー!」

振りかぶる直前に拾った一本の矢。トウネリは体を丸くして、これを頭領の肩深くに

突き刺した。

「ぐ……おほ……」

握る力を失い、頭領の手が足から離れる。

トウネリはすぐに体勢を整え、地下へと乗り込もうとする。が、これを阻止せんと扉の向こうから三人の傭兵が飛び出した。

「邪魔!」

蹴りを入れようとトウネリは重心を傾けた。

「うっ……ぐっ……!?!」

しかし掴まれた足に負荷を掛けてしまい、痛みに反応が遅れてしまう。その隙に、傭兵たちは覆いかぶさるようにしてトウネリを拘束した。

「くそ! 離れ……ろ……ッ!」

身動きして脱出しようとするが、彼らの力は凄まじく、抜け出すことができない。

このままではソラや子供達に被害が出てしまう。なんとしなければ。そう思った矢先――。

「悪いけど、その子から離れて貰えるかな?」

三人の傭兵たちが、何かによって宙吊りにされた。

「えっ……?」

なにが起きたのか理解が追いつかず、トウネリは素っ頓狂な声を漏らす。

「大丈夫？ トウネリ？」

そんな声がして、トウネリは声の方へ顔を向けた。

「あんた……なんで……？」

そこにはまだ地下にいるはずのソラが立っていた。

「あんた……子供たちは……？」

「大丈夫。トウネリが時間を稼いでくれたおかげで、ちゃんとギルドの闘技場に転移させられたよ？」

微笑むソラに対し、啞然とするトウネリ。

「傭兵たちはどうしたのよ？」

「それも大丈夫。地下に入り込んできた人たちは全員魔力糸で拘束したから」

ソラの答えにただただ啞然とするトウネリ。地下に入り込んだ傭兵の数は二十を超えていたはずだ。それを短時間で全員拘束したという。見てみれば先ほどまで暴れていたはずの頭領も、拘束されて意識を失っている。

あまりの出鱈目さに力が抜けた。そして顔を覆い、トウネリは乾いた笑みが浮かべて言った。

「まったく……遅いのよ……バカ……」

それは、悔しさを隠すために放つ精一杯の言葉であつた。

第三節 あの日の約束と確かな想い 6

「いやー驚いた驚いた！ 突然闘技場の方から大勢の子供たちが出てくるんだからなー！」

盛大な笑い声とともに、ヴェラドローネはソラの肩を強く叩いた。

ソラとトウネリが直面した事件は収束へと向かっていた。子供たちは保護され、捕らえた商会関係者は憲兵に身柄を渡した。これで彼らによる不当な金銭の請求は無くなることだろう。

「しかし肉体と魂を分けて転移ねえ……危ないことを書く連中だ」

ヴェラドローネの言葉にソラは小さく頷く。

「多分、あの人たちは知らないと思います。あの魔法陣は何者かによつて書き換えられた痕跡がありましたから」

「つまり転移魔法に関してはまだ別の犯人がいると……ふむ……」

ソラの言葉に、ヴェラドローネは口元に手を当てる。

それを聞いたトウネリもあることを思い出していた。商會に雇われた傭兵や商會の頭領の様子が急変した時のことだ。

（あれは明らかに、誰かが操っていた。まさか魔法陣を書き換えたやつが……？）
彼らは途中から、明らかに異質な動きをしていた。

（それに聞こえてきたあの音……あれは音色は違つたけど、聴き間違えじゃなければ笛の音だった）

笛の音で人を操る。トウネリの脳裏に一人の男が思い浮かぶ。

「まさか……ね……」

「どうかした？ トウネリ」

「いえなんでもないわ。とりあえずこれで子供たちは無事親の元に帰れそうね」

「うん。トウネリは怪我の方大丈夫？」

「おかげさまで。あなたの魔法ほんと便利ね」

トウネリが笑うのを見て、ソラも微笑む。まだ不可解な点はあれど、二人は子供たちを助けられたことに安堵していた。

二人の様子を見て、ヴェラドーネも笑みを溢す。

「お前たち、なかなかいい相棒になりそうじゃないか」

「それでもないわよ」

なにか引つかかる物言いだと思いつながら、トウネリは笑う。

「それよりユースは？ あいつ単身本部に乗り込んだんでしよう？」

「心配の必要はないぞ」

問いかけに答えるように、背後から声がした。思わず振り返った先にユースの姿があった。

「騒がしいと思って来てみれば……お前が原因か」

ユースはソラの顔を見据えて呟く。射抜くような鋭い視線に、ソラは堪らず息を呑む。

「別にこいつだけじゃないわ。わたしもよ」

庇うようにしてソラの前に出ると、トウネリはユースを睨みつける。不穏な空気が両者の間に流れ始めた。

見かねたヴェラドローネは軽く咳払いをすると、ソラの両肩に手を置く。

「なんだユース？ 手柄を取られて怒っているのか」

ヴェラドローネの一言により、ユースは標的を彼女に変える。

「おいおい、そんなに怒るなよユース」

殺気に似たものを感じ、ヴェラドローネは苦笑した。普段平然としている彼女でも、これには冷や汗が滲み出る。

一触即発の雰囲気か漂う中、駆け寄ってくる者がいた。

「ソラさん！ トウネリさん！ 良かった、無事だったんですね！」

ギルドの受付嬢ルージュヴェリアだ。

「怪我は？ 怪我は無いですか？」

「大丈夫よルー。わたしもこいつも大した怪我はないわ」

「そうですか。良かったあー」

ルージュヴェリアは胸を撫で下ろし、安堵の息を吐く。その様子を見てソラとトウネリは同時に笑った。

二人が何故笑っているのか分からず、ルージュヴェリアは首を傾げる。

「あの、なんで笑ってるんですか？」

「別になんでもないのよ。うん、なんでもないの」

「ただちよつと可笑しかっただけですよ」

こちらが心配していたというのに、なにがそんなに可笑しいのか。そんな反感を抱いたルージュヴェリアは唇を尖らせる。が、ふと何かを思いだすと彼女は悪戯な笑みを浮かべた。

「そういえば、トウネリさんが言ってた『守りたい人』ってソラさんのことだったんですね」

「は、はあ!? だ、誰がそんなこと言ったのよ!」

ルージユヴェリアの発言に、トウネリの顔が爆発したように突然赤く染まった。「あれー? だつて言つてたじやないですかー。私が誰のところに行くんですか? っ
て聞いたら『わたしは守りたい人のところによ』ってキリツとした表情で——」

「だあー! 聞こえない! 聞こえないし、わたしはなにも言つてない!」

二人のやり取りを見て、今度はソラが小首を傾げる。

「トウネリ、言つたの?」

「だっ!」

トウネリは必死に否定しようとソラの方に顔を向けるが、動揺を隠せず真つ正面から
見ることが出来なくなつていた。

顔を逸らし、口をまごつかせて俯くトウネリ。その仕草にルージユヴェリアはニヤけ
た表情を浮かべている。

「だからわたしは別に! あ、あの時は! その……なんていうか……感極まつてい
たつていうか……あんたはわたしの恩人だし……だからその……」

次第に蚊の泣くような声を発し始めるトウネリ。そんな彼女のことをしばし見つめ
て、ソラは微笑んで言つた。

「そつか。うん、ありがとうトウネリ」

告げられる感謝の言葉に、トウネリの胸が大きく脈打つ。その音は彼女の耳にまで響きそうな程に高鳴っている。

「どっ……どういたしまして……」

心臓の高鳴りを抑えるかのように胸に手を当てて、トウネリは小さく呟いた。

この二人を眺めていたルージュヴェリアはと言うと。

（え、やだ、なにこの二人可愛すぎませんか？　なんでしようこの胸の感覚……！）

などと目を輝かせ、思考が暴走気味に陥っていた。

「ところでルージュヴェリア、お前今日受付当番だよな？　なんでこんなところに来てるんだ？」

「あ、いえその、騒ぎが気になったのでつい……！」

「うんうん。仕事しような？」

「は、はいすいません支部長！」

ヴェラドローネに指摘され、ルージュヴェリアはそそくさと退散する。

そんなルージュヴェリアの背中を見つめてトウネリは、「まるで嵐のようだった」と顔を真っ赤にしながら思うのであった。

一方、静かに成り行きを見守っていたユースは深いため息を吐いて項垂れていた。興が削がれたというべきか。気の抜ける状況に額に手を当てながら、視線はヴェラドローネ

に向けている。

視線に気がついたヴェラドローネは笑みを浮かべると、ソラの背中を強く叩いた。

「ま、なにはともあれ今回の事件は君の手柄だ！ これはなにか褒美をあげないとな！」
そうヴェラドローネは言うのだが、ふとソラは咳き込んでいることに気がつく。余程強い力で不意を突かれたからだ。

「おおう、すまない。ちよつと加減できなかつた」

「い、いえ大丈夫です」

呼吸を整えると、ソラはヴェラドローネの方に向き直る。そして微笑んで言った。

「大丈夫です。きつと素敵なものを見ることが出来ますから」

「んん？」

ソラの意図が理解できず、ヴェラドローネは疑問を口にする。

するとソラは顔を別の方向に向ける。すると遠くから「お兄ちゃん！」と呼ぶ声が響いてきた。

「お兄ちゃん！」

駆け寄って来たセシルは、勢いをそのままに飛びつく。それをソラは優しく受け止めると、彼女の視線に合わせて姿勢を低くした。

「良かったセシル。怪我はない？ 怖くなかつた？」

「大丈夫！ お兄ちゃん、みんなを助けてくれてありがとう！」

「いいんだよ。それより、お母さんとは仲直りできた？」

「うん！ ほら！」

セシルは振り返って指を刺す。その先に、歩み寄ってくるレフィナの姿があった。

「こら、セシル。危ないじゃないの」

「えへへ、ごめんなさーい」

レフィナは「まったくもう」と笑うと、ソラの前に立った。ソラも姿勢を戻して、レフィナの顔を見る。

「ソラさん。セシルを助けてくださって……なんとお礼をしたらいいか」

「お礼なんていいですよ。二人がまた笑顔で過ごしてくればそれで」

「ソラさん……」

しばしソラの顔を見つめるレフィナ。不意に深々と頭を下げて言った。

「本当にありがとうございませす！ これからより一層、この子のことを大切にします！」

レフィナの言葉に、ソラは静かに頷いた。

ソラ達の様子を離れて見ていたトウネリも微かに笑うと、小さく「良かった」と呟く。

ふと、セシルがトウネリの前に立って顔を見上げていた。

見上げるセシルの顔が一瞬誰かと重なり、目を逸らすトウネリ。するとセシルは口を

開いて、満面の笑顔を咲かせた。

「お姉ちゃんも助けてくれてありがとう！」

思わず面食らい、トウネリは真っ直ぐセシルの顔を見つめる。

セシルの言葉に、ソラとレフィナも彼女に顔を向けた。

動揺してトウネリはソラの顔を見る。彼は優しく微笑んで、頷いている。

「お姉ちゃん、すごくカッコ良かった！」

セシルの無邪気な笑顔が、トウネリの脳裏に重なった光景をゆつくりとかき消していく。

少女の視線に合わせると、トウネリは少しはにかんで頭を撫でる。

「うん……こちらこそありがとう」

えへへと笑うセシルに対して、トウネリも彼女に笑顔を向けたのだった。

二人の笑顔を見てソラは微笑む。だが約束はまだ終わらない。そう言うかのように彼は両方の頬を軽く叩く。

「さてと、じゃあそろそろ出発しようかな」

ソラの言葉に、全員が彼の方を向いた。

「出発って、どっか？」

トウネリが問う。それに続いてセシルは少し寂しげな表情を浮かべた。

「もしかしてお兄ちゃん、もう帰っちゃうの?」

「帰る? 帰るってニギロの村に?」

「いや、ボクはこれから——」

「その必要はないぞソラ」

ソラの言葉をヴェラドローネが遮った。

彼女はにんまりとした表情を浮かべている。そう、まるで「その言葉を待っていました」
とでも言うかのように。

「今回これだけの功績を残したんだ。お前には私の特別推薦でギルドに加入してもら
う」

「特別推薦? でもそれって、師匠の推薦状と同じなんじゃ」

「あれはただの紹介状さ。特別推薦は各支部長が持っている権限でな。ギルドに加入し
ていない者が大きな功績をもたらした場合、そいつに試験を受けさせることなく加入さ
せることができるんだよ」

そんなものがあるのかと、ソラは呆然とした表情を浮かべる。

確かにギルドに加入できるといふのなら加入することに越したことはない。この世
界はあまりに広すぎる。しかしギルドに入れば、困っている人を“依頼”という形で認
識することが出来る。

誰かの笑顔を守りたいと願うソラにとって、得以外のなにものでもない。

しかし一方で、ヴェラドローネの話を目を見開いて聞いている者がいた。トウネリだ。

(まさかこの女、最初からそのつもりで……!?)

彼女の脳裏にまたユースの言葉が過ぎる。

“——まるで何かを待っていたみたいだな”

その何かとはソラのことだったのだ。

ヴェラドローネは初めからソラをギルドに加入させるつもりでいた。そう考えれば、

ユースを試験官に選んだのも得心がつく。

ユースはギルド内では最強の男。彼が試験官をするとなれば、当然ギルド内の注目が

集まる。

そして今回の事件はリヴェルトス商会加入者による不祥事。リヴェルトス商会とギ

ルドは絶対不可侵の契約を結んでいる。つまり今回の事件は、ギルド未加入者が解決す

る方が都合がいいということになる。ましてや加入している者が進んで解決するとい

うこともないだろう。

そのためにはソラがギルドに入ってはならなかった。意味深に例外があると口にし

たのも、これを示唆していたのだ。ユースが不合格を出すということも、ヴェラドローネ

は見越していたということになる。

(けど……じゃあこの親子は？ この親子はなんなのよ？)

よもやこの親子も仕組まれた存在とでも言うのだろうか。

考えれば考えるほど泥沼化していく思考に、トウネリは一人囚われていた。

「それでどうだソラ。悪くない話だろう？」

嫌な予感がした。故にトウネリは話に割って入ろうと口を開く——ことはできなかつた。

「おい、ヴェラドローネ……」

彼女よりも先に、ユースが動いたからだ。

ユースの鋭い眼光がヴェラドローネを突き刺す。が、対するヴェラドローネは我知らずと言った様子でソラを見ている。

「君ほどの力があれば十分やっていける。それに君にとってギルドは好都合のはずだ」

ソラはユースを一瞥すると、俯いて彼に言われた事を思い出す。

(誰かに与えられた思い……か……)

ソラは自分の胸に手を当てる。

(確かにそうかもしれない。ボクはあの時言われたことに従っているだけかもしれない。でも……)

セシルとレフィナを一瞥する。

(でもボクのこの胸にある想いは本物だから……!)

「わかりました。その話、受けます」

「そうかそうか。君ならきつと世界にも名を馳せることにもなるよ」

ソラの答えを聞き、ヴェラドローネは笑って彼の肩を何度も叩く。まさに大歓迎といった様子だ。

一方ユースは軽く舌打ちすると、その場から離れようとした。だが。

「でも一つお願いがあります」

「ん？ お願い？ なんだいお金のことかい？」

ヴェラドローネの問いに、ソラは首を横に振った。

そしてユースの方に顔を向けて言った。

「ユースと……彼ともう一度戦わせてください。彼が認めてくれたら、ボクは入ります」

「え、いや、なんでだい？」

ユースは足を止めると振り返り、ソラの目を見た。

ソラもまた真つ直ぐユースの目を見ている。瞳の奥に宿る硬い意志を、ユースは感じ取っていた。

「別に試験なんかしなくても入れるんだぞ？」

思いもよらぬ発言にヴェラドローネは困惑する。

「それでもボクは彼に認めて欲しいと思ってるんです。ボクの持つ想いを」
「いやでも……」

何かを躊躇しているかのようになり、ヴェラドローネの表情から余裕が消えていた。彼女にとつてこのソラの発言は想定していなかったのだろう。

それを見てトウネリはくすりと笑った。内心でソラに対する尊敬の想いを秘めながら。

「別にいいじゃない。選択の自由はあるんでしょ？」

「いやそうだが……」

「それともなにか都合なことでもあるわけ？」

トウネリの問いに、ヴェラドローネは苦虫を噛み潰したように項垂れる。苦渋の選択を迫られている様子だ。

ヴェラドローネはしばし沈黙すると、不意に深いため息を吐いた。

「あー、ユース。それでもいいか？」

ヴェラドローネの問い。了承の意味も含んだ問いだ。

ユースは微かに笑みを浮かべると、ソラの目の前まで歩み寄る。

「わかった。その覚悟見させてもらうぞ」

吐き捨てるように言うと、ユースは踵を返す。

その背中をソラは、真っ直ぐと見つめるのであった。

第三節 あの日々の約束と確かな想い 7

「おい、昨日の子がまたユースと戦うらしいぞ！」

ソラとユースが再び対峙するという話題は瞬く間に広がり、ヘルデイロ支部内は騒然としていた。

「あいつが同じやつを相手にするなんて珍しくないか？」

「確かに。あの子以来だよな」

「あの子？」

「ほら、トウネリっていう女の子がいただろ？」

「あー。そういうや弟子にしたな。もしかしてユースつてき、女の子鼻肩なのか？」

などと根も葉もない話題も上がったりしているが、多くはあのユースが二日続けて同じ人間と戦う。というのが少ない事例であるため驚いている様子だ。

ギルドに所属し、彼のことを知る者は雪崩れ込むように闘技場へと向かう。

闘技場の観客席はあっという間に埋まっていった。彼らが期待しているのは、若くし

て「最強」と謳われている男の戦い。

そして二度も相対するというソラへの期待も強かった。

観客に混じって、トウネリは二人が向かい合っている様子を眺めていた。彼女の右隣にはヴェラドローネ。左隣にはセシルとレフィナが座っている。

三人が息を呑んで見守る中、ヴェラドローネは呆れ果てたような表情をしていた。というのも、彼女にとってこの戦いは無駄なものでしかないからだ。

「まったく、なんだって彼はユースと戦うことを選んだんだろうねえ。ユースが手加減するって、昨日の時点で分かっているだろうに。そんなに負けたのが悔しかったのかねえ？」

ヴェラドローネの言い分は間違っているわけではない。

だがトウネリは、彼女の発言を訂正しなければならぬと感じていた。

「重要なのは勝つことじゃないのよ、あいつにとつて」

トウネリの言葉に、ヴェラドローネは興味を示したように笑みを浮かべる。

「へえ、じゃあなんだっていうんだい？」

「あいつはただ、ユースの想像を超えて認めてもらおうとしているだけ。だからあいつは勝つことを考えていない。昨日と同じで、全力でぶつかっていく……ただそれだけのよ」

「けど昨日全力を出して認めてもらえなかったじゃないか」

ヴェラドローネが失笑するのに対し、今度はセシルが口を開いた。

「大丈夫。だつてお兄ちゃん、すごく強いんだもん」

まるで目の前でソラが戦う光景を見たかのように話すセシル。その眼差しにはソラへの期待と憧れが垣間見える。

一体この少女が何を見たのかは知らないが、トゥネリも同じ事が言えた。

(きつとソラならユースに認められる。結局わたしには出来なかったことを)

拳を握り、真つ直ぐソラの姿を目に焼き付ける。トゥネリにとつて彼の姿は今、遠い存在のように映っていた。

一方ソラはというと、目蓋を閉じて精神を集中させていた。確かな想いを目の前に認めてもらうためにも、全力を出すために。

静かに深呼吸をすると、目蓋を開いてユースの目を見る。

(こいつ……昨日と目つきが違うな……)

ユースはその真つ直ぐな目に宿る意志から、以前とは違う何かを感じていた。故に彼は思う。これならば、多少は手荒になつても問題ないだろうと。

長く忘れかけていた高揚感に、ユースは歯を剥き出しにして笑みを浮かべる。小脇に携えた剣に軽く手を触れて。

その一瞬の仕草をヴェラドローネは見逃さなかった。「まずいな」と小さく呟く。

「おい、ヴェラドローネ！ 合図しろ……」

ユースの呼びかけに、ヴェラドローネは深いため息を吐く。

（どちらにせよ、ここで死ぬのなら所詮はただの人……か……）

そして立ち上がり、高らかな宣言をする。戦いの火蓋を落とす合図を。

「これより！ ユースⅡテアⅡガルディアンによる、ソラⅡレベリアⅡヴィルレの試験を開始する！ 終了条件はただ一つ！」

ヴェラドローネの言葉が途切れる。闘技場内は静寂に包まれ、彼女の言葉の続きを待った。

「どちらかが、敗北を認めるまでだ。はじめ！」

合図早々、ユースが全員の視界から消えた。彼の足元にあった地面は砕け、陥没している。それだけ強い力で踏み込んだということだろう。

ソラは即座に反応し、防御の体勢を取る。直撃が来るであろう場所を予測し、そこに魔力を集中させる。

魔力によって生み出された障壁は瞬時に生成され、直後強い衝撃を阻んだ。

障壁に触れたのは、ユースの剣。鋭い刃がソラの尖った眼光を映す。

「久々だなあ、この一撃を防がれたのは。つつても、お前の力に合わせて打ったんだが」

ユースは笑みとともに、二撃目を放つ。

「くっ……!」

まさに閃光の如き一振りを、ソラは咄嗟に腕に魔力を纏って防いだ。

「あぐっ……!?!」

強い衝撃が全身を駆け巡った。

痛みに耐えながら、捉えた剣に魔力を集中させる。武装解除の魔法——武装を破壊するための魔法だ。しかし。

(この剣……砕けない……? どうして……?)

どれだけ魔力を注ぎ、魔法を掛けても剣が砕けることはなかった。

この魔法はどんな武装に対しても有効であるため、ソラはその原因を探ろうと思考を巡らせる。それが仇となり、隙を生んだ。

ユースは隙を見逃さず、蹴りを入れてソラの体を弾き飛ばす。

一撃を素早い反応で防いだものの、全ての衝撃を抑えることは適わず、ソラは地面を転がった。

受け身を取り、なんとか膝を突いて体勢を整え直すソラ。

「悪いな、この剣は特別でな。特に魔法じゃ砕くことはできないんだ」

しかし一度崩されたリズムを整えるには、相手があまりにも悪かった。顔を上げた瞬

間、目の前には剣を振り下ろすユースの姿が。

危険を察知し、ソラは前方に魔力の障壁を作る。が、その障壁ごと今度は背後の壁にまで弾き飛ばされてしまった。

「ぐあ……がつ……!?!」

もろに叩きつけられ、意識が揺らぐ。そのままソラは地面に伏し、闘技場内は鎮まり返った。

昨日とは明らかに違うユースの動きに、観客は息を呑む。

「どうした？ お前の言う想いつてのはこんなものか？」

薄々ユースは感じていた。ソラは知らず知らずのうちに、自分に枷をつけていると。そして同時にその枷を解く鍵にも。

ユースは地に伏すソラを見下ろす。侮蔑と落胆の込もった瞳でソラを映す。

「昨日と同じ戦い方でなんとかなるとでも思ったのか？」

ユースの問いに、ソラは微動だにしない。しかし彼は敗北を口にしていない。であれば、戦いは続く。例え気絶していたとしても。

「こんなんじや、お前の守りたいものは何ひとつ守れないな」

ユースの言葉に、ソラの指がぴくりと動いた。

微かな動きが、ユースに確証を与える。掛けられた枷を解くための鍵がなんであるの

かを。

故に口にする。その鍵となり得る言葉を。

「なんなら今から、俺がお前の守りたいものを壊してやろうか」

直後、ユースは頭上に気配を感じた。巨大な氷塊が落下してきている。

ユースはこれによる一振りで粉々に砕いた。

砕けた氷が光に触れて無数の星のように煌く。すると光が爆発し、ユースを包み込んだ。

（目を一時的に封じてきたか……）

強い光に耐えられず、ユースの視界に暗闇が広がる。あくまで一時的なものだが、常人であれば行動が制限されることだろう。

「だが俺は見えなくてもお前の位置も挙動も分かるぞ」

背後の気配を察知し、ユースは振り向きざまに身を退け反らせた。

顔面スレスレに、ソラの飛び蹴りが通り抜ける。それだけではない。蹴りが通り抜けた後に続き、吹き荒れるような強風がユースの体を吹き飛ばした。

空中で体勢を変えて着地するユース。何が起こったのかを瞬時に分析し、次に来る拳の一撃を手で受け止めた。

また強い風が吹き抜ける。

「なるほどな……体を動かすことで発生する風を魔法で増強。その力で相手を触れることなく吹き飛ばす……と」

ユースは呆れ返る。これでは昨日の戦い方に手を加えた程度だ。

(所詮はこの程度か……)

最早無益だ。そう判断し、最後の一撃を入れようとした時だった。

「ボクは……絶対に諦めない……!」

ソラが口を開く。

視力が回復したのを感じ、ユースは目を開けて見る。決意の込められた双碧の瞳を。

「ボクは絶対に誰も傷つけないし、誰も傷つけさせない! ボクの手が届くものなら、なんだって守る! それが善人だろうと悪人だろうと!」

ソラの言葉を聞き、ユースは堪らず大声で笑った。

「お前、頭イカれているのか? 善人ならともかく、悪人まで守るだと?」

「きつと悪いことをした人だって、最初から悪行をしようとして生きてきたわけじゃないはずだ。何か理由があるはずなんだ。だったらボクはその人の心を救いたい」

「笑わせるなよ。お前は悪に大切なものを奪われて何も学ばなかったのか? 学んだから、あのガキどもを助けたんじゃないのか?」

ソラはあの日見たものを思い浮かべる。

涙を流しながら消えゆく大切な人の姿を。

守れなかつた者の姿を。

命を奪つた者の姿を。

そして——愛する人たちに裏切られ、絶望の涙を流す少女の姿を。

「学んだよ。ボクはあの日沢山のことを学んだ。大切な人を失う悲しみも、守りたいものを守れなかつた苦しみも、悪意に満ちた人の心も。大切な人を奪つた人を恨んだし、憎しみと絶望で我を忘れそうになることだつてあつた」

そう、ソラは知っている。知っていてなお、この答えを出したのだ。

「昨日言つたよね？ 悪いことをしてる人のことも、きつと誰かが大切に思つてるんだつて。だつたらボクは、その人達と一緒に笑い合えるようにしてあげたい」

ソラは真つ直ぐな瞳でユースを見る。真つ直ぐな想いを彼に告げる。

「世界中の人が一緒に笑つて笑顔になれるようにしたいんだ」

ソラの想いを聞き、ユースは舌打ちする。

それはかつて、彼が捨てた理想——叶わないものだと言つた夢。

だからこそ切り捨てた。認めなかつた。そんなものは絵空事の物でしかない。一生を賭けたとしても叶わない夢物語だと。

「ふざけるな。悪人は一生悪人だ。悪の道に進んだものは二度と戻らない。例え悪行を

止められたとしても、いずれ同じことを繰り返す」

「それでもボクは……諦めないよ」

「だったら示してみろ！ お前にそれだけの力があるのかを！」

ユースは剣を強く握り締め、最強の一撃を振るわんと距離を取った。

剣を鞘に納めて、気を集中させる。抜刀の構えを取ると、彼の周りを炎が覆った。

「ユース、やめろ！ 街を吹き飛ばす気か!？」

いつになく感情的になり、力の加減が出来なくなっている。そう感じたヴェラドローネは堪らず立ち上がり、静止の言葉を投げかけた。

しかしユースは止まらない。彼の気が高まるに連れ、周囲の炎は大きな渦を巻き、天高く舞い上がる。

ソラは静かに猛炎の竜巻を見上げる。

「まずいぞ！ 急いでここから離れろ！」

「けど離れるたってどこに!？」

闘技場内は騒然としていた。ユースの全力はこの王都を吹き飛ばしても有り余る。という噂を信じている者たちが殆どであるため。何より、ユースと最も付き合いの長いヴェラドローネが明らかな焦りを見せているためだ。

（くそ……！ さすがに私でもこいつの全力は防げないぞ！）

「おいトウネリ！ お前もあいつを止め——」

トウネリにも静止を促そうとして、ヴェラドローネは止まる。

観客たちが阿鼻驚嘆とともに闘技場から出ていこうとしている中、彼女は静かに座って見守っていたからだ。

彼女だけではない。隣に座るセシルもレフィナも、固唾を飲んで見守っている。

「大丈夫。ソラならきつと……この一撃を止めるから」

「何を根拠にお前は」

「信じてるからよ」

トウネリの目に迷いも恐れもない。ただ一心にソラを信じていた。

セシルも同じだ。何より彼女は一瞬だけが見ていた。ソラが戦う姿を。

（だって——）

転移する寸前。光に包まれながら目にしたのは——。

（誰かを守ろうとしてるお兄ちゃん、すごくカッコ良かったんだもん）

常人ならざる速さで傭兵たちを無力化するソラの姿だった。

ソラは目を閉じ、呼吸を整える。一撃を防ぐために。この戦いを終わらせるために。

そしてついに、ユースは剣を引き抜いた。

業火を纏いし一閃は、切っ先から炎の塊を吐き出す。

炎塊は周囲の渦を飲み込み、地を穿つ。向かうは一直線、目蓋を閉じたまま立つソラ目掛けて。

巨大な炎を目前に、ソラは目蓋を開いた。迫りくる炎を見据えるは、金色に輝く瞳。太陽の如き輝きがソラを包み込むと、轟音とともに巨大な爆発を起こした。

観客たちは悲鳴とともに顔を覆った。中には衝撃から身を守ろうと、頭を抱えて丸くなる者もいた。

しかし衝撃が——彼らを襲うことはなかった。

恐る恐る観客たちが目を開けると、煙が観客席を境にして半球状になっている。

「これは……?」

見てみると、ドーム状に展開された光の壁が煙を遮っていた。

全員が啞然としていて、突如吹き荒れた暴風が煙をかき消す。

「あ、あれは!」

誰かが声を上げ、全員がそれに釣られて闘技場舞台に注目した。彼らの視界に映ったのは——。

「よくまあ、あれを防げると思ったな……お前」

ソラに組み伏されながら、呆れたように笑みを浮かべているユースの姿だった。

「だってユース、あれでも抑えてたでしょ? 火、天井に触れてなかったし」

「お前、それでもし俺が全力を出してたらどうするつもりだったんだよ？」

「その時はその時で、ありったけの魔力を使つて防ぐよ？　でもユースなら加減はしてくれるつて信じてたからさ」

目を反らした僅かな時間に何が起こつたのか。見ている者の大半は理解出来ていなかった。

煙が晴れるとユースが地面を這う鎖に捕らえられており、その上にソラが跨つている。あの最強と謳われているユースが、二度も同じ人間に拘束されているという事実を。

「お前のこのやり方……絶対にいつか限界が来るぞ？」

「そうならないよう、もっと強くなる。君が全力を出しても負けないくらいに」

ユースは天井を見上げる。

ユースの放つた一撃は、ソラの魔力障壁によって防がれていた。全力ではないとはいえ、常人であれば魔力障壁を展開したとしても即死級のものだ。被害もただでは済まなかつたであろう。

これをソラは無傷で防ぎ、さらには生じた衝撃まで抑え込んだ。偏に——彼の常人ならざる魔力が為せた技だろう。

そして防いだ直後の蔓延した煙の中、ソラはユースを捕らえて組み伏した。この時の

ソラの速さは、煙の中とはいえユースの反応が遅れたほど。

(なるほど……こいつは守るといふ思いが強ければ強いほど力を発揮するのか……)

こういうタイプは他にも見てきた。しかしソラの力の伸びは明らかにおかしい。

(やはりあいつの息子……てところか)

ユースは満足そうに、微笑んでソラの顔を見た。母親によく似た顔。ヴェルティナという母親の下に産まれたが故に、大きな宿命を背負っている彼はどんな答えを出すのか——それはユースにも分からない。

だが今回強力な一撃を放ったように、この少年のことを信じてみよう。そうユースは心に止めた。

「さて、退いてくれるか？」

「ん？ まだ認めてもらってないと思うんだけど」

「バカ言え、この程度で俺を拘束できるわけがないだろう？」

ため息とともに、ユースは力を込める。すると彼を拘束していた鎖は、いとも容易く砕けてしまった。

これには堪らず引き攣った笑いを浮かべるソラ。「これでも結構魔力注いだのに」と小さく呟く。

「俺を捕らえたきや、全魔力を集中させることだな」

ユースは笑って立ち上がると、周囲を見渡した。観客たちは哑然とした表情で二人を見ている。

そしてトウネリたちの方を一瞥すると、声を張り上げた。

「俺、ユース⇨テア⇨ガルディアンは！ ソラ⇨レベリア⇨ヴィルレのギルド加入を認めることを、ここに宣言する！」

高らかな宣言を口にした後、ユースはソラの前に手を差し伸べる。

「ま、全部認めたわけじゃないが、一応合格だ」

「なんか引つかかる言い方……」

ソラは口を尖らせて抗議するも、くすりと笑ってユースの手を取った。

観客たちが顔を見合わせた後、場内に大歓声が湧き起こる。この時彼らが目にしたのは、まさに期待の新星誕生の瞬間であった。

第四節 そして共に歩みだす 1

湧き上がる歓声の中、トウネリは静かに笑みを浮かべる。

(やっぱりソラはすごいなあ……わたしなんかより、ずつとずつと……)

自分は凡人だ。一方のソラは天賦の才能を持っている。まさに天と地ほどの差があると、トウネリは感じていた。

微かに笑顔が曇る。

彼女にはまだ迷いがあつた。やりたいことがある——だが自分に果たして、資格があるのだろうか。

考えていると、ソラと目があつた。ソラはトウネリに満面の笑顔を向けている。その笑顔があの日 of 光景を思い起こさせる。

(わたしに彼という資格はない。けどそれしか……それしかわたしには方法がないから……)

笑顔で返しながらも、トウネリの心にはドロドロとした淀みが生まれていた。 // 罪悪

“ という淀みが。

「ん？ あれは……？」

ふと、トウネリはある事に気がつき視線を向けた。

「あの人、どうしてここに？」

彼女の視線の向こうでは、ふらふらとした足取りで立ち上がり去ろうとしている女性の姿があった。

トウネリが気にするのもそのはず。女性はトウネリに「息子を助けてほしい」と依頼した人物であったからだ。

「お姉ちゃん、どうしたの？」

立ち上がったトウネリを見て、セシルが問い掛ける。

「ごめんなさい、ちょっと用事を思い出して」

そう笑いながら答えると、トウネリは急いで女性を追いかけた。

闘技場の外に出ると、女性の後ろ姿が見えた。

「あの一！」

トウネリは追いつくと、すぐに声を掛ける。

女性はゆっくりと振り向き、トウネリの顔を見た。少し青ざめた顔色をしており、どうにも具合が悪そうである。

「あなたは……昨日の……」

肩を落とし、フラついた足取りの女性にトウネリはどう話し掛けたものかと考える。

「あの……息子さんには会えましたか？」

「息子……？」

「えっと、昨日依頼しましたよね？ 息子を助けてほしいって……」

「ああ……そうでしたね……」

様子がおかしい。トウネリは女性の顔を伺いながら、警戒心を抱く。

対する女性はというと、どこか判然としない表情を浮かべてしばし黙した。

「大丈夫です。ちゃんと再会できました。今は助かって嬉しかったのか、友達と遊びに出掛けているんです」

笑って答える女性。別段おかしな返答でもないため、トウネリも警戒心を解いて笑った。

「そうですか。それは良かった」

「ええ、ありがとうございます。息子を助けていただいて」

「いえ。でもどうしてあの闘技場に？」

トウネリの問いに、また女性は少し黙った。まるで答えを考えるかのように。

「その……息子を助けてくれたっていうもう一人の方が、どんな人なのか見てみよう」と

思いました」

「ああ、それであそこに。でもその……あまり具合が良くなさそうに見えますけど」
「ええ。思ってた以上に激しい戦いだだったので、ちよつと」

「でしたら、お家まで送ります。なんだか足取りも悪そうなので」

そう言つてトウネリは肩を貸そうと近づく。が、女性は踵を返すと一人でまたふらふらと歩き始めた。

「あ、ちよつと！」

呼び止めようと手を伸ばした時。

「トウネリー！」

名前を呼ぶ声が背後から響いた。

思わず声に振り向くと、駆け寄ってくるソラの姿が見える。

しかし今は構っている場合ではない。トウネリは慌てて女性の方に振り返ると――
女性の姿は忽然と消えていた。

「消えた……？」

自分は幻でも見ていたのだろうか。目を大きく開き、虚空を見つめるトウネリ。

そんな無防備状態のトウネリに対しソラは――。

「トウネリー！ とりやー！」

どういいうわけか、走る勢いそのままに飛びついた。

「いふつ——!?!」

強い衝撃を受けて一瞬息を詰まらせるトウネリ。体を受け止めることも出来ず、尻もちをついた。

「な、なんなのよもう!」

状況が掴めずにトウネリは声を上げる。そもそも何故飛びついてくるのかさえ理解出来なかった。

「えへへ」と嬉しそうに笑いながら、ソラはトウネリの顔を見る。

「な、なによ?」

見つめられ、トウネリは赤面する。

「嬉しかったからつい。ごめんね?」

ソラの謝罪に、トウネリは口をまごつかせて答えを考える。この状況に思考が纏まらず、心なしか頭から煙が上がっていた。

「べ、べつにいいけど……心臓が飛び出るかと思ったわ……」

「あはは、ごめんごめん」

流石にやり過ぎたと苦笑するソラ。立ち上がり、そつとトウネリに手を差し伸べる。

トウネリは少し顔を見つめて、くすりと笑うと手を取って立ち上がった。

「おめでとう、ソラ。カツコ良かったわよ、あんたの戦い」

「ありがとう。トウネリのおかげだよ」

「別にわたしは……何もしてないわよ」

二人は笑い合い、自然と握手を交わす。片や喜びを分かち合うために。片や称賛を示すために。目的は違えど、思いは同じだった。

が、ふと視線を感じて二人は周囲を見渡した。というのも、二人を囲むようにして先程の試合を見ていた者たちが集まってきたからだ。

「お前すごいなあ！ あのユースに認められるなんて！」

「しかもお前、全部詠唱無しであれだけの魔法を唱えているなんてよ！」

称賛の嵐が巻き起こる。

ソラは照れ臭そうに、ほんのり赤く染まった頬を掻いて「そんなことないですよ」と笑った。

「なにか困ったことがあったら気軽に言ってくれ！」

「おう、ここに入った以上俺たちは家族みたいなもんだからな！ お互い手助けし合おうぜ！」

ソラを囲んで男たちがそう言葉を投げかける。

これにはどう答えたものかと困っていると、トウネリが「多分こいつらの殆どがあん

たを女だと思っているわよ」と小さく耳打ちした。

今後の活躍が期待される上に、絶世の美女とも言えるような容姿をしているソラ。そんな彼に対して何かしらアプローチする男がいてもおかしくはないだろう。

ここは誤解を解くために、自分は男だと公言するべきではないか。そう思い口を開いた時だった。

「おい、お前ら。集まってないでさっさと依頼を受けるなりなんなりしてこい」手を叩き、集団を割って入ってきたのはヴェラドローネだった。

支部長が直々に物申したともなれば逆らえるはずもなく、集団は程なくして解散していく。その際各々「じゃあこれから頑張れよ」などと云った激励の言葉をソラに投げかけた。

「その、ありがとうございます」

村の人々から囲まれることはあっても、見ず知らずの人間に囲まれるという経験はない。そのため妙な威圧感から解放され、ソラは胸を撫で下ろした。

ソラの謝意にヴェラドローネは「気にするな」と言いつつ、顔を眺める。

(ほんと、つくづくあいつによく似ている。まるで生き写しみたいだな)

あまりにヴェラドローネが顔を見るもので、ソラは微かに首を傾げる。

「あの、ボクの顔になにか？」

「ん、いや。なんでもないさ。それよりおめでとう。まさか本当にユースに認めさせるとはね」

「まだ全部が全部認められたわけじゃないですよ」

「それでも、あいつが君を認めたということは、君の中にある程度可能性を感じたつてことだろう。誇るといい」

そう言つて微笑むと、ヴェラドローネはソラの頭に数回軽く手を置いた。

「さて、じゃあいいものを見せてもらったし、私も自分の仕事に励みますかね！ トウネリ、お前は彼の先輩なんだ。ギルドについて教えてやってくれ」

「私が……？」

「よろしくね、トウネリ」

「え、ええ。その……まあわたしで良ければ……」

笑い掛けられたのと、自分が先輩であるという照れ臭さからトウネリは紅潮する。

そんなトウネリを見て笑うと、ヴェラドローネは去つていった。

二人になり、またソラとトウネリは呆然と見つめ合う。堪らず顔を逸らしたのはトウネリだが、彼女の心臓はまたも異様な程に高鳴っている。

「あれ、そういえばセシルとレフィナさんは？」

「ん？ そう言えば席を離れてから見てないわね……」

ソラとトウネリが集団から解放される少し前、セシルとレフィナはユースの後を追って外に出ていた。正確にはレフィナが追いかけて、その後をセシルが続いていた形だ。背後に気配を感じて、ユースは歩みを止めて振り返る。

「あんたは……」

ユースにとって忘れようにも忘れられない顔。かつて救えなかった男の家族の顔。

「どうした？ また何か恨み辛みでも言いに来たか？」

ユースの問いに、レフィナは被りを振った。微かに唇を震わせて、ユースの目をじつと見つめる。

彼女の意図が分からず、ユースは肩を竦める。答えを待ちながら、「そう言えば、あいつと一緒にいたな」と内心で呟いた。

二人の間に沈黙が流れる。

レフィナの背後に隠れながら、セシルは顔を上げた。神妙な面持ちに不安を覚えながらも、母親のことを待つ。

「ユースさん、あなたもしかして……あの人とソラさんを重ねていたんじゃないんですか？」

ユースの眉が微かに動く。

「何故そんなことを聞く？」

「いえ……ただその……なんとなくそう見えて。だからあなたは、ソラさんのやり方に肯定的ではないのかなと思って」

レフィナの煮え切らない物言いに、ユースはまた肩を竦める。

「別にあんたの夫のことは関係ない。ただ俺は、あいつのことをよく知っているってだけだ。逆に聞くが……あんたは重ねたのか？」

「それは！」

ユースの問いに、レフィナは口を紡ぐ。否定も出来ず、肯定を口にすることも出来ず、服を掴んでただ俯く。

「確かに考え方は似ているかもしれないな。あいつとあんたの夫は」

呆れた表情で振り返ると、ユースは再び歩み出そうとする。が、立ち止まって言った。「だがやり方が違う。あんたの夫は誰かのためになるなら多少の犠牲も厭わなかった。あいつはその犠牲さえ無くそうとしている」

「言いながら空を見上げる。雲一つない快晴の空。澄み渡った青が見渡す限り広がっている。」

「誰の上にも等しく広がる大空のように、あいつはすべての人間に等しく手を差し伸べようとしている。そんなのは長続きしない。いずれあいつは人の闇に触れて変わって

――」

「変わらないもんー！」

突然セシルが声を上げた。

言葉を遮られ、ユースは顔だけを向ける。

少女は目元に涙を浮かべ、なにかを訴えるように表情を険しくしていた。

「セシル？」

これまででないセシルの行動に、レフィナは驚く。彼女がここまで感情を剥き出すところを、レフィナは見たことがなかった。

「お兄ちゃんは絶対に変わらないもんー！」

なにも根拠はない。セシルはただ一心にソラのことを信じていた。込み上げてくる思いに呼応して、目尻に溜まった涙が溢れ出す。

セシルの様子を見てユースは嘆息を漏らす。

「まだ会って間もない相手になぜそこまで入れ込むのかは知らないが……そうだいいな」

ユースは止めていた歩みを進めると、静かに呟く。

「あ、いた！ セシルー！」

丁度その時、ソラとトウネリが駆け寄ってきた。

響くソラの声を聞き、セシルは慌てて涙を拭う。

「二人とも何かあった？」

来たときにはすでにユースの姿が無く、ソラは不思議そうに小首を傾げる。

「ううん、なんでもないよ。それよりお兄ちゃん凄かった！」

屈託のないセシルの笑顔に、ソラは安堵する。

「そっか。セシルもありがと、ボクのことを信じてくれて」

まるで一連の出来事を見ていたかのような言葉に、セシルは一瞬面食らう。が、すぐに笑うと彼に抱き、腹のあたりに顔を埋めた。

(セシル……あなた……)

一方レフィナはセシルとソラの二人を見て、やり場のない思いを胸に秘めるのであった。



王都ブリアンテスの住宅街の裏路地。薄暗く人があまり寄り付かないこの場所に、一人の女性がいた。トウネリに息子を連れ去られたと訴え、依頼した女性だ。

壁に手を掛け、荒い息遣いをしている。地面には赤い血溜まりが出来ていた。

支える力を失い、膝を突く。胸を抑えて蹲った。鋭く重い痛みが体を駆け巡って

る。

突然女性の体が淡い光に包まれた。

乱れた黒髪が白銀に変わり、素朴だった顔が極めて美しく変貌する。

光の中から現れたのは、ソラの母親ヴェルティナだった。

(まったく……あの子も無茶をするものね……)

ひとしきりに血を吐いた彼女は、呼吸を整えて顔を上げる。

(まさか……彼の一撃を受け止めることになるなんて思ってもいなかったわ)

立ち上がって嘆息すると、ヴェルティナは天を見上げる。すると薄暗い路地に太陽の光が差し込んだ。

「ええ、大丈夫です」

独りでに呟く。

一体誰に話しかけているのか。それを知る者は、本人の他には存在しない。

「愛しきあなたのため……こんな痛みなんともありません」

ヴェルティナは天に微笑みかける。頬をほのかに赤く染めて微笑む様は、まるで誰かを恋い慕う女のようなのだ。

「ええ、分かっています。これはまだ始まりに過ぎませんもの」

そして謎多き女ヴェルティナは花びらとなって消えていく。

彩り豊かな花びらは風に乗ると、何処かに向けて天高く舞い上がるのであった。

第四節　そして共に歩みだす　2

「それで？　これからあんたどうするのよ？」

注文した飲み物を口にしながら、トウネリはそうソラに問いかける。

現在ソラとトウネリの二人は、とある喫茶店に赴き軽い食事をしていた。昼食をまだ摂っていないかったことと、ソラの今後について話すためだ。セシルとレフィナの二人も誘って同席している。

口の中のサンドイッチを飲み込むと、ソラは「うーん」と唸る。

ギルドに入ると意気込んだはいいものの、その後の生活については特に考えてはいなかった。改めて問われると返答が出てこない。

「どうしようか？」

「どうしようかじゃないわよ。あんたが決めることでしょ」

「そうなんだけど……」

とにかく困っている人を助けるといふ目的しかない中、今後どう生活するのが正解な

のだろうか。

「んー、美味しいー！」とデザートの味に満面の笑顔を浮かべるセシルを見て微笑むと、ソラはふと疑問を口にした。

「トウネリはどういう風にしてるの？」

「わたし？ わたしはこの街を拠点に色々な国の依頼を受けているわね」

「色々な国の依頼？」

ソラは小首を傾げる。ここを拠点に活動するということは分かるのだが、どうやって他国の依頼を受けているのか分からなかったからだ。

合点がいかない様子の子のソラを見て、トウネリは項垂れる。

「まさかあんな、ギルドがどういふところなのかとか、ギルドに入るとどういふことが出来るのかとか聞かなかったわけ？」

「うん。師匠は『自分の目で見て知ることだな』って言ってなにも教えてくれなかったんだよ。師匠に釘刺されてたのか、ベルさんも教えてくれなかったし」

一体どういう教育方針なんだ。そうトウネリは疑問を抱かざるを得なかった。

「てことは、この王都になにがあるのかっていうのも詳しくは知らないわけね？」

「うん。だからこうして地図を持ち歩いているわけだし」

「ちよつと見せてよその地図」

トウネリに促され、ソラは鞆から地図を出すと手渡した。

地図を眺めて、トウネリはため息混じりにある一箇所を指差す。

「つまりこれのこと知らないわけね？」

そこには「転移の間」と書かれていた。

「なにこれ？」

「あんたこれのこと知らないでよくギルドなんかに入ろうと思ったわね」

「いやー、ははは。自分で調べようにも物が無かったから」

呆れ返るトウネリを見て、ソラは苦笑する。

実際ソラは、事前情報など無いに等しい状態でここまでやってきていた。聞いていたのは、人助けが出来る組織だということだけ。それ以外に知っていることといえば、よく読んでいる御伽話の本に出てくることくらいだ。

「よくそんなんでユースに認めてもらえたわね」

「あははは……」

トウネリの指摘にもはや乾いた笑いしか出なかった。

「だったらお兄ちゃん、僕たちの家で暮らさない？」

「ちよつとセシル？」

発言を窘めるレフィナ。それを見てソラは軽く笑った。

「んー……朝も言ったけど、そこまでお世話にはなれないよ。迷惑だろうしさ」
「い、いえ別に迷惑というわけでは」

「そうだよ！ お兄ちゃんが来て迷惑なわけがないじゃん！」
「ありがと。でもやっぱりやめておくよ」

するとセシルは落胆し肩を落とす。もつと一緒にいたいという思いが、彼女の中を渦巻く。これを逃せばもう二度と会えないのではないか、そんな不安が彼女の思いを一層掻き立てていた。

それを察してか、ソラは俯く彼女の頭を優しく撫でた。

「大丈夫。時間がある時に遊びに行くからさ」

「でも……」

「それに、ボクも出来るならここを拠点にしようと思っっているからさ。そしたらセシルも遊びに来れるでしょ？」

セシルは小さく頷いて、口を固く結ぶ。

そんなセシルの様子を見て微笑むと、トウネリの方に向き直った。

「トウネリはどこに住んでるの？」

「ギルドが用意した、ギルド加入者だけが入居できる宿舎よ。でもあそこもうちの部屋も空いて——」

「空いて?」

トウネリが不自然に言葉を切ったため、ソラは首を傾げる。が、ほんのしばらくしてトウネリは言った。

「まあ、空いてないわね」

「そっか……」

どうしたものか、とソラはまた頭を悩ませる。

「お言葉に甘えたら? 別に二人といるのが嫌ってわけじゃないんでしょ?」

「それは勿論そうだけど……」

「じゃあこうしたら? 宿舎の部屋に空きができるまではひとまず二人の家にお世話に

なつて、空いたらそっちに移るつて。それか——」

「それか?」

「いや……まあこれはもう少し考えさせて。うん」

一瞬間を反らすトウネリ。その際、彼女の顔はほんのりと赤くなっていた。

「それにあんた、どうせお世話になりつばなしじゃ悪いからとか考えているんでしょ?

だったら住まわせてもらつてる間、あんたが稼いだお金の一部をあげたらいいんじゃないかしら?」

「なるほど……」

確かにトウネリの言う通り、ずっとお世話になるばかりでは悪いために離れようとしていた。そもそもあまり裕福な暮らしのできない家庭なのだからと。

しかし彼女の言うように、住んでいる間だけお礼としてお金を渡すと言うのであれば——考え方としては悪くはなかった。

ソラはレフィナの方を見る。

判断の可否を問われているのだと気づいた彼女も少し考える。

レフィナもまた、ソラの迷惑になるのではないかと思っていた。あまり裕福な家ではないため、不自由をさせることにもなるだろうと。

セシルの方を一瞥する。期待の眼差しが向けられていた。

「私は大丈夫です。きつとこの子も喜ぶでしょうし」

ソラは少し間を置くと、軽く頷いた。

「それじゃあその……少しの間お世話になってもいいですか？」

「はい、勿論」

レフィナの答えに、セシルは満面の笑顔を咲かせるのだった。



喫茶店を後にしたソラは、トウネリと共に「転移の間」へと向かっていた。

セシルとレフィナの二人は、ソラを迎え入れる準備のために一足先に帰っていった。その際、二人は仲睦まじく手を繋ぎ、笑顔で手を振っていたのだった。

転移の間はギルドが管理している施設だ。他国と他国を転移魔法で繋いでいるという。

一体どんなところなのかと想像しながら向かうこと数分、転移の間にたどり着いた。闘技場の大きさを遥かに上回る外壁と門は、多勢の人間が一度に入ること想定しているのだろう。

そんな転移の間入り口の横には列が出来ている。列の先には街の兵士が手続きを行なっており、利用者は彼らに利用料を払う仕組みのようだ。

しかしトウネリは、列に並ぶことなく入り口の方へ歩を進めた。

「並ばなくていいの?」

ソラが疑問を口にする、トウネリは服のポケットを弄りながら答える。

「わたしたちギルド加入者はこの使用料も手続きも必要ないのよ。これが証明になるから」

そう言って見せたのは、手のひらに収まるくらいの小さなメダルだ。中央には紋様が刻まれている。

「なにこれ？」

「ギルド加入者の証よ。ほら、商会の人間もそれを証明するための物つけてたでしょ？」

言われてみれば、とソラは思い出す。

「でもボクそれ持っていないけど」

「あんたはまだ正式な手続きしてないから。ルーから書類もらったでしょ？」

「あ、うん」

「今回はそれが証明代わりになるから出しておきなさい」

転移の間に来る前にギルドに立ち寄った時、ルージュヴェリアから渡された書類を取り出す。

書類を手に入り口へ向かうと、受付とは別の兵士が寄ってきた。

トウネリは無言で兵士にメダルを見せると、そのまま入り口を素通りしていく。

兵士はソラの手には書類があることを知ると、手を伸ばして渡すように促した。

「書類の確認をさせていただきます」

要求に応じて、ソラは書類を渡した。

兵士はじつくりと書類を眺める。それからしばらくして小さく頷くと、書類を返却した。

「大丈夫です。どうぞお通りください」

「ありがとうございます」

軽く会釈をして、ソラは入り口の門を通る。

門の向こうには外観通りの巨大な広間があった。

広間中央には赤色透明の石柱が置かれ、それを中心にして簡素な魔法陣が描かれている。

石柱が度々輝きを放つと、人の姿が消えたり現れたりしていることから、これが大掛かりな転移の魔法だと見て取れる。

「なるほど……だから転移の間なのか」

思わず感嘆の言葉を漏らすソラ。名前から察することは出来ても、ここまで大掛かりなものだとは想像出来ていなかった。

「中央にあるのって、もしかして転移結晶？ 普通転移魔法って障害物があると危険なはずだけど」

「正確には転移結晶って言うんだけど、あれのおかげで従来の制限が無くなっているのよ」

「転移結晶……」

確か本でその名を目にしたはずだと、ソラは思い出す。

転移結晶は、従来の転移結晶の何千倍にも及ぶその大きさから世界で最も稀少な代物

だ。その特徴も摩訶不思議なもので、発見時には必ず同色の物が二柱存在すると言われている。

転移結晶は、魔力結晶に転移先と同様の魔法陣を書き込んだものだ。これは結晶を割った瞬間に発生する膨大な魔力を活用して転移するためなのだが、転移結晶の場合魔法陣を書き込む必要がない。

というのも、同色の結晶の間にはいわば“見えない道”が繋がっているからだ。そのため転移先の座標も必要がなく、また結晶が安全な場所を自動的に選んで転移させることから障害物も関係ない。転移結晶と同様、ほんの僅かな魔力を使うことで遠方に向かうことができる。

ただ一方で、本体に触れなければならないという欠点があった。便利さを考えれば大した欠点でもないのだが、それでも直接触れるとなると大人数を一度に転移させることは出来なくなってしまう。

そこで用意されたのが、周囲に描かれた魔法陣。この魔法陣が転移結晶の入り口の役割を果たすことで、遠方の行き来を可能にしたのである。

「正直これが使えなかったら、人の往来なんて微々たるものだったでしょうね」

トウネリの発言に、ソラは確かにと頷く。そして同時に先刻の言葉に合点がいった。これがあれば、他国にある依頼を受けることも容易くなる。

「あ、一応言っておくけど目を瞑っていた方がいいわよ。人によつては気持ち悪くなつちやうから」

「そうなの？」

「ええ。初めて使つた人が目を開けたまま転移して、その先で吐いたつて光景を何度も見てるから」

小さな声で「それに身をもつて経験したし」とトウネリが付け足すも、ソラの耳に届くことはなかった。

「そつか。じゃあ気をつけておく」

「ん。まああんたならなんか大丈夫のような気もするけど、念のためね」

微笑すると、トウネリは魔法陣の上に立つ。

「それじゃ、向こうで会いましょうか」

そして目蓋を閉じて僅かな魔力を魔法陣に注ぐと、光とともに忽然と姿を消した。

「おおー」

感心しながら、ソラも魔法陣の上に立った。初めての経験に期待を膨らませ、ソラも目蓋を閉じて魔力を僅かに注ぐ。

「はい、転移できたわよ」

注いだ次の瞬間、隣で声が聞こえてきた。

おそろおそろ目を開けて、ソラは目を輝かせた。

「す……い……い……！ こんな初めて見た！」

目の前では転移の間同様、人が行き来している。しかし王都のものとは違う光景が広がっていた。

見渡す限りの雄大な広間。ドーム状の天井には、大陸の形をした絵が並んでいる。

そして赤い転移結柱の他にも、青、黄、緑、白の四つの結柱が正五角形を描くように置かれていた。まさにここは国と国を結ぶための重要な拠点といえよう。

「ここで驚くのはまだ早いわよ？」

子供のよう目に目を輝かせているソラを見て、トウネリはくつくつと笑う。

「あ、そうだ。ここはどこなの？」

「それはここを出てからのお楽しみ」

そう言つてトウネリは、悪戯な笑みを浮かべて歩き出す。その後が続いて、ソラも外へと出た。

「わあ……！」

外に出てすぐ、ソラはさらなる輝きを目に宿す。その様はまさに無邪気な子供だ。

眼前に広がったのは街だ。大勢の人が行き交い、王都には無いような建物が多く存在している。中でも極めつけなのは、街の中央にそびえ立つ巨大な塔だ。塔の周囲には原

初の八賢者を模した石像が並んでいる。

「ここがわたしたちが所属するギルドの本部がある場所。どの国にも属さない絶海の孤島にある自由の街——ヴィグドラフよ」

第四節　そして共に歩みだす　　3

五つの大陸に囲まれた島イヴェルティラ。このイヴェルティラ一帯に広がる街ヴィグドラフは、どの国にも属さずまた国という概念がない唯一の場所。

この街で暮らす人々は自由を約束され、己の好きなように生活することができる。と言つても当然、*「倫理の範囲内で」*となるのだが。

それでも街の人々は豊かな暮らしを送り、平和に暮らしている。

この平和を保つためにも活動しているのが、街中央にそびえ立つ巨大な塔——ギルドの総本部だ。

この総本部では、加入者の個人情報管理。世界各地の依頼の収集ならびに揭示。加入者の評価付け等、様々な役割を担っている。

そのため利用者が非常に多く、中は多くの人間で混雑していた。

そんな中、ソラは受付で書類に名前を記入していた。正式な加入手続きのために、ギルドにおける決まりごとの確認や個人情報の確認。これらを済ませた上で、加入に同意

を示すサインを施すのだ。

「以上で手続きは終了となります。こちら、ギルド加入者の証です。今後のご活躍、期待しております」

「ありがとうございます」

ギルドの紋様が入ったメダルを受け取り、ソラは受付嬢に軽く会釈した。

手続きが無事に終わったため、ソラはトウネリの姿を探す。

「なんですつて!?!」

辺りを見回していると、トウネリが叫ぶ声が聞こえてきた。ソラが何事かと顔を向けると、二人の少女と言いつ争っている様子のトウネリの姿があった。

「トウネリつてば、ほんといい反応するから弄りがいがあるわねえ? アルマ姉様」

「うん。トウネリ……やっぱり面白い……」

「わたしはちつとも面白くないわよ!」

今にも取っ組み合いそうな勢いのトウネリを見て、ソラは慌てて駆け寄った。

「トウネリ、どうしたの?」

「どうしたもこうしたも、こいつらがねえ!」

「あらあら、そんなに鼻息を荒くして可愛いわあほんとに」

「誰が鼻息荒いですつて!?!」

「ちよつと落ち着いてトウネリ！ 何があつたの？」

掴み掛かろうとするトウネリを見て、ソラは肩を掴んで制止する。余程癪に触るようなことがあつたのか、怒りを露わにしている。

対し二人の少女たちが浮かべているのはニヤけた表情。改めてよく見ると似た顔立ちであるため、彼女たちは双子のようだ。

「別に何も無いわよー？ 私たちはただその子をかからかつただけ」

からかわれたくらいでトウネリがここまで怒るだろうか。そう疑問に思っているソラを見て、くすくすと双子の少女は笑う。

「ところではじめましてね、ソラⅡレベリアⅡヴィルレ」

「え、どうしてボクの名前を？」

快活そうな少女の、まるで「面識があるような物言い」にソラは首を傾げた。これまでに二人と会つた覚えはない。

すると物静かな少女が疑問に答えた。

「生意気にもユースの一撃を止めた……知つてて当然……」

「どうやらこの双子は闘技場での戦いを目にしていたようだ。合点の行く理由にソラは頷く。」

「ほんと。あれだけの一撃を防げるなんて思っていなかったわ」

「けどユースは防げると思つて放つていた……要は手加減……」

「ま、そうよねえ。彼の本気の一撃なんて、この世界の誰にだつて防げないもの」

「当然……その気になれば国一つ滅ぼせるユースの一撃を止められる人はいない……」

「例えそれが彼の父親だとしてもね」

意味深な言葉を重ねる双子に対し、トウネリは舌打ちで反応を示す。

「あらなにトウネリ。人前で舌打ちはダメつてお姉ちゃんが教えたわよね？」

「誰がお姉ちゃんよ。あんた達まさかこいつに嫌味でも言うつもりで来たのかしら？」

「もしそうだと言つたら、どうするのかしら？」

「こいつ……！」

「ちよつとトウネリ！」

剣呑な二人を見て冷や汗を滲ませながら、ソラは必死にトウネリを止めに入る。

「二人の言つていゝことは間違つてないよ。実際あれ以上の力を出されていたら、限界が来て防げていゝなかつたから」

「でもこいつら、あんたのことを……！」

「ボクは大丈夫だからさ……優しいトウネリが誰かと喧嘩するの見ていたくない。だからお願い」

ソラの言葉に、トウネリは唖る。彼にここまで言われてしまつては、さすがに引き下

がることしかできない。

すると二人の様子を見て、ブロンドの髪をした少女が堪らず吹き出し、腹を抱えて大笑いし始めた。

「今の聞いた姉様？　優しいトウネリが喧嘩するのを見たくないですって！」

「何か可笑しなこと言ったかな？　ボク」

「ええ。だってあなたのその言葉、矛盾してるんだもの」

「矛盾……？」

笑うのをやめると少女は接近し、目と鼻の先まで顔を近づけた。口元には含みのある不敵な笑みを浮かべている。

「だってあなたもそこにいるトウネリも、暴力が当たり前の世界にいるんだもの。それなのに今の言葉……じゃあどうしてあなたはトウネリをギルドから離れさせないのかしらっ？」

「それは——」

言い返そうとするが、言葉が浮かばない。

「それに事件解決のためにあなたはトウネリを利用したのでしょう？」

「そう……トウネリには悪い人たちと戦わせて……」

「なのに今、あなたは喧嘩を止めようとした」

「ちよつと待ちなさいよ。それはわたしが提案したことであつて——」

「あなたは黙つてなさいトウネリ」

怒気の込められた低い声に、トウネリは言い淀む。

少女はそのまま言葉を続け、吸い込まれるような銀の瞳で真つ直ぐソラの目を見つめる。

「私はね、あなたみたい矛盾を孕んだ人間が大嫌いな。やり方も何もかも中途半端。ユースは言わなかつたけど、あなた本当に壊れたお人形さんみたいよねえ？ 傷つけたくないっていう考えも、傷つける恐怖から来る思いでしかないのに、まるで気づいていないその振る舞いが気持ち悪い。どうして彼が多少は認めたのか——」

「おい、そこまでにしておけラミナ」

ソラが少女の指摘に絶句していると、ユースが歩み寄ってくる。

ブロンドの髪の少女はすぐに離れると、ユースの体に飛びついた。

「ようやく見つけたわユース！ もう退屈で死ぬかと思つた！」

「退屈すぎて……二人を弄つて遊んでた……」

「なにが退屈で死ぬかと思つただ。目を離せばいつもこれだ」

唾然としているソラとトウネリに目を向けると、ユースは深いため息を吐いて項垂れる。

「悪いなソラ。こいつに言われたことは気にするな」

そんなことを言われても無理な話だった。あれだけの事を言われて気にしないなど、幾らソラでも出来なかった。

頭の中で反復する少女の言葉に対し、次第にソラの胸の中で黒い物が渦巻いていく。ユースに向けられたものとは違う感情に、ソラは押し流されそうになっていた。

「ねえユース！ それより早く行きましょうよ！ 悪いやつらをとつちめて、報酬がっぽがっぽよ！」

「はいはい。まあ悪いが、俺たちは行かせてもらうぞ。ちよつとした依頼を受けたんだな」

「あ、うん……」

唾然としたままの二人を置いて、ユースは踵を返して歩き出す。

双子の少女達はユースの左右に並ぶと、それぞれ腕に抱きついて歩きだす。側からみれば両手に花といったところだろうか。

その際、ブロンドの少女は振り向くと一言だけ置いていった。

「あ、そうそう。でもあなたの魔力は結構美味しかったわよ、ソラ。今まで食べたことがない変わった味だったもの。良かったらまた食べさせてね」

ソラはこの時少女が放った言葉の意味を全く理解できないまま、去って行く背中を見

送ることしか出来なかった。

「ソラ、大丈夫?」

言葉を失ったまま立ち尽くすソラを見て、トウネリは顔を覗き込む。

至近距離で、今にも唇と唇が触れてしまいそうなほどの近さであったために、ソラの体は驚きで微かに跳ねた。

「あ、うん。大丈夫」

「そ、なら良かったわ」

どこか安心した様子で胸を撫で下ろすと、トウネリは顔を離した。ほんのりと頬が赤く染まっている。

「金髪の方がラミナで、銀髪の方がアルマっていうの。双子で、理由はよく知らないけどユースといつも一緒にいるやつらよ」

いつも一緒。その言葉にソラは小首を傾げる。これまで何度かユースと出会ったが、彼女たちの姿を見ることはなかったからだ。

それに加えてもう一つ気になることがあった。それは二人とも、どこか生氣を感じられる瞳をしていなかったことだ。まるで本当は感情が無いかのような雰囲気。彼女達にはあったのだ。

「あいつらの言葉、あまり真に受けない方がいいわよ。ただの嫌がらせだから」

果たして本当にただの嫌がらせなのだろうか。指摘が的を得ていたのを、ソラは自覚していた。

(矛盾している……か……)

指摘の意味は理解している。確かに矛盾しているかもしれない。それでもソラが立ち止まるはずがなかった。それだけ硬い意志を持っているのだから。

「ところでトウネリはなにを言われたの？ あれだけ怒るなんて、多分珍しいと思うんだけど……」

「わたしは！ わたしは……」

答えようとして、トウネリは顔を見つめる。

その不自然な行為にソラが小首を傾げていると、トウネリは「別に大したことじゃないわよ」と言って、突然歩き出した。

影を落とす背中を見るに、あまり口にしたくはないのだろう。そう考え特に詮索することなく、ソラも追いかけて歩き出す。

歩きながら、トウネリは双子に言われたことを思い出していた。

「——あの子が……あなたが力を得ようとした理由……会えるかも分からないのに求めていた理由……」

「——なるほどね。確かに危うい感じの子だったわねえ。でも本当にあなたの力が、

彼に必要なのかしらねえ？”

“——所詮あなたがやろうとしていることは……他人の真似事。あなたがその誰かになることは……絶対にない……”

“——そもそも、あの子にとってあなたはどんな存在なのかしらねえ。本当はお荷物なのかもよ？”

思い出し、トウネリは奥歯を噛み締める。

（誰かの真似事？ ソラにとつてわたしはお荷物？ そんなこと……そんなこと分かつてるのよ！ でもわたしは……わたしには……！）

双子が放った言葉は、確実にトウネリの心を抉っていた。

唇を噛み締め、泣きそうな思いを必死に堪えて、トウネリはソラの隣を歩く。他でもない、ソラのためなのだ——そう言い聞かせて。

一方、ユースと双子のアルマとラミナは会話を交わっていた。

「お前ら、何しにわざわざあいつらにあんなことをしたんだよ？」

「そういうあなたこそ、どうして途中まで見守っていたのかしら？」

ユースの問いに、ラミナはくすくすと笑う。

「つーかお前ら歩きづらい」

「あからさまな話題逸らし……ユースは都合が悪くなるいつも話を逸らす……」

「そういうんじゃないやねえよ。ただあいつらの心がどれだけのものか見ていただけさ」

「それで結果は？」

ユースは問いかけに対し、鼻で一度息を吐いてから答えた。

「ソラはともかく、トウネリが危ういだろうな」

「それは分かっていたことでしょうか？ 分かっている、あなたは訂正しなかったのだから」

「まあ……な……」

ユースは思い出そうとする。トウネリが訪ねてきた日のことを。元々弟子を取るつもりなどなかったユースが、彼女を弟子として迎え入れた日のことを。

だが今となってはどうでもいいことだ。

思い返すことをやめたユースの脳裏に、一瞬だけ浮かんだ声があった。幼いトウネリが、まるで訴えかけるように放った声だ。

「わたしは、あの人になりたいの！ あの人になって、代わりに側にいるの！」

「お前があいつになれるわけがないだろうが……」

ユースは浮かんだ言葉に答えるように、一言吐露するのだった。

第四節　そして共に歩みだす　4

ギルド本部を後にしたソラとトウネリの二人は、ヴィグドラフの街を散策していた。道中トウネリが行きつけの店を紹介したりと、平穏な時間を共にするのであった。

そして今二人はヘルデイロに帰還していた。

ヴィグドラフとヘルデイロの間にも時差があるため、現在王都は夕暮れ時。街の人々が夕食を口にするために準備に取り掛かる時間帯だ。

「さてと、今日はここで解散かしらね」

「うん。色々教えてくれてありがとう」

「大したことしてないわよ。ま、これからお互い頑張りましょ」
「だね」

会話が途切れる。このままいけば二人はそれぞれの道を行き、帰路に着くことだろう。別になんのことはない、当たり前前の光景だ。

しかしトウネリの中で、ある思いが燻っていた。この思いを明かすべきかと悩んでい

る。

「それじゃあ、ボク行くね？」

別れを告げて、これから世話になるセシルの家に行こうとするソラ。

「ごめん、待って」

そんなソラをトウネリは呼び止めた。人差し指を突き合わせて、何か言いたげに口元をまごつかせる。

「どうかした？」

なにを緊張しているのか、トウネリの目は泳いでいる。左を向いたり右を向いたりを繰り返す彼女は赤面している。

それがどう映ったのか、ソラはくすりと笑った。

「なにこよっ？」

トウネリが訝しげな眼差しを向けると、ソラは「ごめんごめん」と平謝りして言った。

「いや、なんか可愛いなって思って」

「か、かわいい!!？」

より一層赤くして、トウネリは驚く。

「うん。なんか村にいたワンちゃんみたいだなあって」

「は？」

「村で飼ってた犬がいてね。その子よく悪さをしては申し訳なさそうにオドオドしてたからさ、なんかそれ思い出しちゃって」

「い、犬……」

深いため息とともに、トウネリは項垂れる。てつきり自分の顔なり仕草なりを見てそう思ったなどと勘違いして、なんだかバカらしくなっていた。

「てのは冗談で、本当にトウネリのが可愛いなって思ったんだよ？」
「がっ……!?!」

不意打ちの言葉に、トウネリの顔から爆発したように蒸気が発する。

「ばっ……ばか言ってるんじゃないわよ！」

「あ、照れてる」

悪戯な笑みを浮かべるソラに対し、トウネリはもはや真つ正面から顔を見ることが出来なくなっていた。

「それで、なにか言いたそうにしてたけどどうしたの？」

「それは……その……」

赤くなった顔を逸らしながら、トウネリは問いに答えるように言った。

「良かったらどこかで食べないかって思って……その……二人で……」

「うん、いいよ」

向けられた笑顔に、トウネリはしばし見惚れていた。初めて見た時に惹かれたものと同じ笑顔に。

「でも一応セシルたちに伝えてからでいいかな？　もしかしたら作って待っているかもだし」

「あ、うん。わかった……」

本人は気づいていなかったが、この時トウネリは一瞬幼い頃の口調と雰囲気に戻っていたのだった。



街中のレストランに足を運び、ソラとトウネリは向かい合って食卓を囲んでいた。

まだ注文した料理が届いていないため、グラスの中の水を飲みながら二人は談笑に浸る。ということもなく、無言でお互いの顔色を伺っている。

「あのさ、トウネリ」

最初に口を開いたのはソラだった。ずっと気になっていたことを問うために。

「どうしてトウネリはギルドに入ったの？」

彼女がギルドに入った理由を一度も聞いていない。大方の予想はついているが、それ

でも彼女の口から理由を聞いてみたかったのだ。

トウネリはしばらく黙し、コップの中を見つめる。ゆらゆらと揺れる水面が、彼女の戸惑う瞳を微かに映している。

「あの時……あの日……わたし無力だったから……」

「そんなことないよ。トウネリがあの時協力してくれたから」

「そんなのただの慰めでしかないわよ」

トウネリは唇を固く結んで、目を伏せる。

「わたしはあの時、あんたの力に何一つなれなかった。本当はわたしがどうにかするべきだったのに、あんたの力に頼りきって……そしてあんたから大切な人を奪ってしまった。だから強くなろうと思った。それだけよ」

「そっか……」

もしあの日全てを救えていたならば、彼女がこの道を歩むことはなかっただろうか。そんな罪悪感にも似た思いがソラの中で渦巻く。

テーブルの下で握り拳を作りながらも、ソラは微笑んだ。

「でもびつくりしたよ。トウネリがいたからさ」

「それはわたしも同じよ。まさか本当に再会できるなんて思ってたから……」

「うん……ボクも嬉しかったよ。トウネリとまた会えてさ」

ソラの言葉に面食らうトウネリ。よく恥ずかしげもなくそんなことを言えると、微かに紅潮する。

丁度そこへ、注文した料理が運ばれてきた。

テーブルの上に豪華な食事を盛った皿が置かれる。皿の中央には肉の塊が乗っており、そこに特製のソースが掛けられている。

香ばしい匂いに空腹感が増し、ソラの腹の音がひとつ大きく鳴った。

「あ、あはは……さすがにお昼あれだけじゃ足りなかつたみたい……」

「まあそりゃ、あんだだけ魔力使ったら腹も減るわよね。はい」

言いながらナイフとフォークを取り、ソラに渡す。

ソラは少しそれらを見つめてから受け取ると、一度祈るように目を閉じた。

「そういえば昼にもやってたけど、それなにしてるの？」

ソラの不可思議な行動に、トウネリは小首を傾げる。

「エイネによく言われたんだ。ご飯を食べるってことは、何かの命を食べるってことだつて。だからその命に感謝の祈りを捧げなさいって」

それは森の動物たちと仲良くなったソラが、初めは拒んでいた食事を受け入れさせるために放った言葉だった。

初めは無言で見つめていたトウネリだったが、その意図と意思を理解すると一緒に

なつて祈りを捧げる。

「じゃ、食べよつか」

「ええ……」

祈りを終えた二人はナイフとフォークを手に取った。

トウネリは巧みナイフを使つて肉の塊を一口大にすると、そのまま口に運んだ。

「んー!」

口いっぱい広がる旨味に、トウネリは思わず唸る。ここは彼女のお気に入り店のひとつなのだが、いつ来ても飽きる気がしなかつた。

「どう? ここの結構美味し——」

味の感想を聞こうとしてソラの方を見ると、トウネリは言葉を失つた。

「あんた、どうしたの?」

ソラの手元に注目すると、ナイフを握る手が小刻みに震えていた。

「あ、気にしないで。大丈夫、食べてるうちに止まるから」

「でも……」

「大丈夫だから」

ソラは笑うと、震えたままの手でぎこちなく肉の塊を切る。そしてフォークを使つて口に運んだ。

「ん!? これ美味しい!」

「ほんと? それは……良かったわ……」

複雑な心境で笑うと、トウネリはまた一口肉を運んだ。

(なんか……いつもより美味しいって思えないわね……)

初めは感じていた旨味が何か別の物になってしまったような、そんな感覚にトウネリは見舞われるのであった。

食事を終えて一息ついた二人は、グラスの中の水を飲みながらまた無言になっていた。

トウネリは軽く深呼吸すると、兼ねてから話そうとしていたことを意を決して切り出す。

「ねえ、ソラ。ひとつ提案があるのだけど、いいかしら?」

「ん、なに?」

トウネリの問いかけにソラは耳を傾ける。

「あのさ、良かったらわたしと組まない?」

「組むって、一緒に行動するってこと?」

「ええ。ギルドではね、依頼の難易度に関係なく二人以上で行動することを義務つけているの。万が一予期せぬなにかがあったときに対処できるようにね」

「そうなんだ」

しかしそうなると、彼女は今までどうしていたのだろうか。そんな疑問がソラの顔にはつきりと出ていたため、トウネリは顔を逸らしながらすぐに答える。

「二応仮の形でユースと組んでたのよ。けどあいついつもわたしを置いて勝手にどっか行くし……それにわたしも本当に組みたい人が来るまでって決めてたしね」

「でもそうなるとユースが一人にならない？」

「大丈夫よ。あいつほどなら一人で十分だし、それに一人になることがないし」

言われてソラは先程出会った双子の姉妹を思い出す。きつとあの二人が常にそばにいるのだろうか。

その上ユースほどの実力者が対処できないとなると相当な依頼となってしまう。つまり必然的にユースは一人で事足りてしまうということだ。

「あいつは例外中の例外。正直わたしなんかじゃ足でまといよ」

「そんなことないと思うけど……」

「いいえ、そんなことあるわよ」

言つて、トウネリは小声で「それにあんと肩並べられる自信も本当は無いし」と付け足した。

ソラはしばらく考えるようにトウネリを見つめる。

あの日助けた少女はこんなにも逞しく成長している。きっと多くの困難を乗り越えて現在があるのだろう。それは喜ばしいことのはずだ。

しかし頭から離れないあの日の光景が不安を募らせる。いつか彼女にも大きな災厄が降りかかり、命を奪ってしまうのではないかと。

それにソラは気づいていた。なぜ目の前の少女がここまで自分に良くしてくれるのかも、なぜ彼女がギルドに入って力をつけていったのかも。

投げかけた問いの答えが全てを物語っていた。全てはあの日の贖罪のためなのだ。ならば共に行かなければならない。あの日の贖罪をさせるためではない。彼女が本当の意味で前を向いて歩みだせるように。

ソラは微笑んで手を差し伸べた。

「うん、わかった。これからよろしくね?」

トウネリは差し伸べられた手を見つめると、くすりと笑ってその手を握った。

「ええ、よろしく」

二人は握手を交わす。これから共に歩み出すための握手だ。

「それじゃ、明日からどうしましょうか? わたしの相棒さん?」

「それなんだけどさ……実は……」

片やあの日護りたいと願った少女の未来のために。片やあの日の贖罪のために。目

的は違えど二人は確かに今この瞬間、肩を並べて一歩前に進んだのであった。

第四節　そして共に歩みだす　5

食事と明日以降について話し合ったソラとトウネリは、ギルドの宿舎まで来ていた。

トウネリが住んでいる部屋の前まで来ると、二人は顔を見合わせる。

「その……わざわざここまで送ってくれてありがとう」

「ううん、気にしないで。じゃあ明日朝ここに迎えにくるから」

「あ、うん」

「じゃあおやすみ。トウネリ」

手を振って去っていくソラを見送ると、トウネリは部屋の中に入った。

扉に背中を預けて、ホッと息を吐く。赤くなつた頬に触れると熱を感じる。

「どうしよう。本当にこれから毎日……ソラと一緒に……」

熱は頭にまで上り、目眩を起こさせる。

しかしある光景を思い出した途端、その熱は冷めていった。

扉に鍵を掛けて、トウネリは机の前に立つ。引き出しに手を掛けて、動きを止めた。

脳裏に浮かんだのは、食事の最中——震える手でナイフを握って肉を切る、痛ましいソラの姿だ。彼の言う通り、食べていく内に震えは収まっていったが、あの瞬間のことが頭から離れないでいる。

「あいつやっぱり……あの時これで……」

引き出しを開くと、そこには一本の短剣が入っていた。綺麗な装飾が施された鞘に納められたそれは、かつてある女性が使っていたものだ。

「あんなの見せられたら……返せるわけ……っ！」

短剣を手にとると、トウネリは唇を強く噛み締めた。

一方その頃、ソラは一人夜道を歩いていた。

寝静まる時間帯なのか周囲に他に人の姿はなく、静寂が王都の街を包んでいる。

ふと立ち止まり、右手を天に掲げた。天に一際輝く星——そこへ呆然と大きく手を伸ばす。

届きそうで届かない星を見つめて、ソラは笑った。

「エイネ……ボクは大丈夫。ちゃんと前に進んでいるよ？」

誰に向けての言葉か、ソラは小さく呟く。

手を伸ばすのをやめると、首から下げた魔力結晶を手にとる。空色に輝く結晶が天に広がる星々を映す。

結晶を握り締めると、また歩み始めた。

一軒の家の前にたどり着くと、家を見上げた。数ある窓からは一切の光が無い。

「さすがに寝ちやつてるかな?」

扉に手を掛けると、鍵穴からゆらゆらと光が揺れているのが見えた。

おそるおそる扉を開けて、中を覗く。

「おかえりなさい、ソラ」

扉を開いて飛び込んだ言葉に、ソラは思わず面食らう。

蠟燭の火を灯して待っていたのはレフィナだった。彼女はまるで母親のように微笑んで、その言葉を投げかけたのだ。おかえりなさい、と。

無言で立ち尽くすソラの姿に気がつく、レフィナは慌てふためく。

「あ、その、これからしばらく一緒に暮らすということは家族みたいなものですし? そう呼んでみようかと思ひまして……」

たじろぐレフィナを他所に、音を聞きつけてきたセシルがどたどたと足音を立てて二階から駆け下りてきた。

「お兄ちゃん、おかえり!」

立ち尽くすソラを見て、セシルは首を傾げる。

「どうしたのお兄ちゃん? 入らないの?」

「えっ？ あっ……えーと……」

二人の顔を眺める。まだ出会っても間もない中、まるで本当の家族のように歓迎してくれる二人を。

込み上げてくる思いを堪えきれず、ソラは満面の笑顔を咲かせた。

「えへへ、ただいま」

二人はその笑顔に一瞬見惚れた。太陽のように眩く、美しい笑顔に。

「お兄ちゃん！ 昨日の続き読んで！」

「こらセシル。今日はもう寝なさい」

「えーやだー。ね、お兄ちゃんなら読んでくれるでしょ？」

「じゃあ少しだけだよ？」

「やったー！」

楽しげで賑やかな声が家の中に響き渡る。

その家を見守るように、天で一際輝く星は光を放っているのであった。



十二年前、ソラが生まれてまだ間もないある日の夜。

ヴェルティナは部屋で一人、一冊の本を睨んでいた。本の表紙には『世界のおはなし』と書かれている。

一枚一枚ページを捲り、中身を流し読みしていく。彼女の表情からは、どこか懐かしさを感じているようにも見える。

しかし彼女の表情はあるページに差し掛かった途端険しくなった。

そのページには『第五章 予言の章』と書かれている。

ヴェルティナは静かに唇を噛み締める。

と、そこへ部屋の扉を開ける者がいた。

「ヴェルティナー。ソラ、眠ったわよ？」

エイネだ。エイネは扉の隙間から顔を出すと、部屋を見渡す。

ヴェルティナはそんな彼女を見て、微笑みながら近づいた。

「いつもありがとうエイネ。助かってるわ」

そう言うとうヴェルティナは、優しくエイネの頭を撫でる。

「別に大したこととしてないってば」

エイネは顔を赤らめると、恥ずかしそうに俯く。

「何か変わったことはあった？」

「んー、変わったことか……あ！　そういえばあの歌聴かせてあげたらすごく喜んでた

！」

「あの歌？」

「ほら、私がなんでか知らないけど覚えてるっていう歌！」

嬉々とした表情で答えると、エイネは鼻唄を口ずさむ。

「もしかしたら、あの子もこの歌が好きなのかも！」

上機嫌なエイネの姿にくすりと笑うと、ヴェルティナはポケットの中を弄った。取り出したのは、無色透明の魔力結晶を付けた首飾りだ。

「エイネ、これあなたにあげるわ」

「なにこれ、綺麗……もしかして魔力結晶？」

「ええ、これにはたくさんの魔力が込められてるの。万が一あなたの魔力が足りなくなったら、きつと助けてくれるわ」

ヴェルティナの言葉に、エイネは首を傾げる。

二人は今契約を結んでいる状態。であれば、魔力が枯渇するということはないはずだ。

もの問いたげな様子の子のエイネを他所に、ヴェルティナは首飾りの紐を彼女の頭に通した。

「ヴェルティナ、なんか様子が変よ？」

「気のせいよ。さ、今日はもう遅いから寝なさい」

ふと、壁越しに隣の部屋から泣き声が響いてきた。

「げ、もう起きちゃったの?」

「きつと寂しがつてるのよ。ほら、行ってあげて?」

「うん、まあわかった。じゃあおやすみ、ヴェルティナ」

「ええ、おやすみなさい」

部屋を出ていくエイネを見送り、ヴェルティナは一息吐いた。

そして次の瞬間、まるで何かの衝動に駆られたかのように御伽話の書かれた本を手に取り、五章以降のページを破り始めた。

破る音が廊下にまで響いていたため、エイネが鍵穴の隙間から様子を覗いているのだが、気づく気配はない。

そして破ったページを丸めると、火が燃え盛る暖炉に放り投げた。

「ええ、わかっています。それが私の使命ですから」

ヴェルティナは呟くと、体を花びらに変えて姿を消していく。

「えっ……?」

それを見ていたエイネはあることを感じていた。それは契約が切れたことを意味する感覚だ。

「ヴェルティナ!？」

思わずエイネは扉を開け、部屋の中に飛び込む。が時すでに遅く、ヴェルティナの姿は完全に消えていた。

「なんで? どうして?」

エイネの目尻から涙が溢れる。つい先程まであんなに優しく接してくれていた彼女が、なぜ今突然契約を切り姿を消したのか理解ができなかった。

エイネは暖炉の方に目を向ける。

破られたページはすでに黒くなっているが、僅かに冒頭の部分だけ読むことが可能だった。

そこには次のように書かれていた。

“この章でこれから語られるのは、一人の少年の物語——幸か不幸か、世界に選ばれてしまった少年の物語です。

少年は大変素晴らしい魔法使いの子供です。この魔法使いの女は世界に愛され、彼女もまた世界を愛していました。

それ故に少年は、生まれたこの世界で大きな宿命を背負ってしまいます。

彼にはこれから多くの困難が降りかかります。大切な人を失うこともあるでしょう。

あるいは誰かの大切な人を奪ってしまいかもしれません。

それでもこの少年には、宿命のために前を進まなければならないのです。

少年は、自分が背負っている宿命に気がついていません。

世界を救うため——いえ、人類に審判を下すために生み出された彼は世界中を渡り歩きます。

彼は人の光を知るのが、人の闇を知るのが、人類の存亡はすべて、彼の出会いに委ねられているのです。

ですが世界は、魔法使いの女にこう言ったのです。

——人類は彼の手によって、
確実に滅ぼされるのだと”

エピソード

小鳥が囁り、朝の訪れを知らせる頃。セシルは目蓋を開けて、微睡の中あたりを見回した。

「あれ？ お兄ちゃんは……？」

隣で眠っていたはずのソラの姿がない。

昨日の朝と同じ状況に少々不満を抱きつつも、セシルは身を起こして大きく伸びをする。

そしてベッドから下りると、下の階に向かった。

「おはよー、お母さん」

「あらおはようセシル。今朝ご飯の用意するから待っててね」

下の階では母親が使った食器の片付けをしていた。この様子を見るに、ソラはすでにどこかへと出掛けたようだ。

「お母さん、お兄ちゃんはー？」

大きなあくびをしながら、セシルは質問を投げる。

「ソラさんなら、あなたが起きてくるだいが前に出て行ったわよ。なんでも、街の人たちに朝の挨拶をしてからトウネリさんのところに行くんですって」

トウネリの名を聞き、セシルは唇を尖らせる。言ってしまうばただのやきもちである。

一方その頃、ソラは一人で朝の王都の街を歩いていた。

これからこの街で過ごしていく。ともなれば、街の住人たちと少しでも仲良くなるうと、ソラは見かけた人に朝の挨拶をして回っている。

「おはようございますー！」

大きな声でハキハキとした挨拶を投げかけるソラ。しかし首を傾げる者がほとんどで、挨拶が帰ってくることは少ない。それでもソラは挨拶をして回った。

市場の通りに差し掛かった時、ソラの目にふとある光景が映った。

「よいしょと……ふう、あと少し」

一人の老婆、店の外に重い箱を移動させて開店の準備をしていた。箱の中身を見るにどうやら野菜や果物を売っているようだ。

だがその重さに苦勞している様子で、腰を摩りながら深いため息を吐いている。

ソラは老婆に近づくと、まずは朝の挨拶を投げかけた。

「おはようございますー！」

すると老婆はソラの顔を見てにこやかに答える。

「あらおはよう。ごめんなさいね、お店まだ準備できてないのよ」
するとソラは微笑んで言った。

「良かったらボク、手伝いますよ」

「え、でも……重たいわよ？」

「大丈夫。ボク結構力持ちですから」

笑顔を向けると、ソラは店の中に残っている箱に手を掛ける。

「これ、どこに置いたらいいですか？」

「ああ、ええと、ここに置いてもらえる？」

「わかりました」

了解の意を示し、ソラは箱を軽々と持ち上げる。そしてそのまま指示された場所まで持っていく、地面に置いた。

以降は他の箱も同様に動かして、開店の準備は滞りなく進んだ。
全てを運び終えると、ソラは一息吐く。

「ありがとうねえ」

老婆は満面に笑顔を浮かべた。

「気にしないでください。ボクが好きでやったことですから」

ソラも笑顔で答える。

「あなた、好きな果物はあるかい？」

「好きな果物？ えっと、りんご……かな」

突然の問いかけに首を傾げていると、老婆は商品の中からりんごを一つソラの前に差し出した。

「じゃあはいこれ。ひとつ持っていて」

「えっ？ でもこれ売り物じゃ……」

「いいのよ。手伝ってくれたお礼」

ソラはしばし差し出されたりんごを見つめる。

この時ソラは、昨晚トウネリが話題に出したことを思い出していた。

「それじゃあえっと、一個だけ」

ソラが戸惑いながらもりんごを受け取ると、老婆は「ありがとうね」と改めてお礼を言うのであった。

昨晚トウネリがソラに対して口にしたのは、次のような内容だ。

「——あんたさ、これからこのギルドでやっていくんなら、誰かから報酬をもらうことに慣れていきなさい。それはあなたの働きに対する敬意の現れなんだから、受け取らないのは失礼つてもものよ」

それは、人からの報酬を貰うことに躊躇いを見せるソラに向けて放った。戒めの言葉
“ だった。

王都の街を歩きながら、ソラは貰ったりりんごを見つめる。見つめながらふと、老婆の
顔を思い出す。老婆の笑顔を。

(誰かが笑っているのを見ればボクはそれで十分なんだけど……慣れないと、だよね
……)

だがトウネリの指摘には一理ある。これからのためにもソラは、他者からの報酬に対
して躊躇いを見せないよう心がけるのであった。

「あ、このりんご美味しい……」



挨拶周りを終えたソラは、トウネリと合流するために彼女の住む宿舎に足を運んでい
た。

「トウネリー、起きてるー?」

部屋の扉を軽く叩き、中にいるであろうトウネリの返事を待つソラ。

しばらくの静寂の後、施錠を開ける音とともに扉が開かれた。

「ごめん、お待たせ」

「おはよう、トウネリ」

「あ、うん……おはよう……」

ソラの「おはよう」の一言に、トウネリは一瞬顔を赤らめる。

「それじゃ、出発しようか」

宿舎を出ると、二人は肩を並べて街を歩く。向かう場所はすでに決まっており、そこに向けて足を運んでいた。

「目的地はこの街の留置場よね？」

「うん。昨日の人たちから話聞かないと」

ソラたちの目的は、昨日捕まえた者たちと話をすることにあつた。

昨晚、ソラはそのことを話題に出していた。そのことを思い出しながら、トウネリは会話を交わす。

「本当にあいつら、誰かに操られていたのよね？」

トウネリは相対した当時のことを思い返す。

初めは彼らも自分の意思で行動しているようにも思えた。だがふと聞こえた異様な音の後、彼らは人が変わったように動き出していた。

感じていた違和感の正体にトウネリは眉を寄せる。

「なんとなくおかしいって思ってたけど、今回の事件まだ裏がありそうね」

「うん。もしかしたら最初から誰かに操られていたのかもしれないって考えてさ。その原因を突き止めるためにも、あの人たちから話を聞こうと思って」

「確かにね。操っていたやつがまだうろついているんなら、また同じことが起きかねないもの」

会話を交わしながら共に留置場へ向かうトウネリ。

ソラと肩を並べて歩いていた時、黒い服に身を包んだ男とすれ違った。

トウネリは不意に立ち止まり、振り向く。

「どうしたのトウネリ？」

突然立ち止まったトウネリを見て、ソラは小首を傾げる。

「いや、なんか今……見覚えのある誰かとすれ違ったような……？」

振り向いた視線の先には、すれ違った男の姿はなかった。

「ごめんなさい、気のせいかも」

トウネリは苦笑すると、また足を動かした。

(さっきの男……いや、まさかね……)

この時トウネリは気がついていなかった。路地の裏で不敵な笑みを浮かべる男の姿に。

程なくして留置場にたどり着くと、看守を通して中を案内してもらった。

「君たちが捕まえた者たちはここにいますよ」

案内された鉄格子の向こうに、昨日捕まえた商会関係者が薄汚れた服で身を包み座っていた。

頭領としてあの場にいた男はソラたちの存在に気がつくくと、顔を上げて睨みつける。

「なんの用だ、小娘ども」

男は明らかな敵対心を見せている。対しソラは微笑みながら話しかけた。

「少し話を聞きたくって。どうしてあなたたちはあんなことをしたのかなって」

ソラの問いかけに、男は舌打ちを鳴らした。

「知るかよ。俺たちでもあまり覚えてねえんだ」

「本当に？」

「ああ、本当だよ」

ソラの瞳が黄金色に輝いている。そのまま真っ直ぐと男を見つめて、鋭い視線を向けている。

一呼吸しながら、ソラは目蓋を閉じる。そして再び開くと、彼の瞳は元の色に戻っていた。

「どうやら本当みたいだね」

「ソラ、まさかこいつの言葉信じるの？」

一連の会話を見ていても、トウネリは一切信用に値する人間ではないと判断していた。

しかしソラはどこか確信を持っている様子で男の方を見ている。

「うん。この人は嘘はついていない」

ソラは鉄格子に近づき、中を覗き込んだ。

「話してください。どうして昨日あんなことをしたのか」

「だから覚えてねえって言ってるだろうが」

男の言葉に対し、ソラは首を横に振った。

「あなた達は最初、ちゃんと自分たちの意思で動いていたはずですよ」

「何を根拠に言ってるやがる」

「あなた達が所属する商会の規律について少し調べました。厳しい規律が数多くあった。規律を破った者には重い罰則が下されるはずですよ」

でも、とソラは言葉を続ける。

「あなた達は堂々と行動していた。それはあなた達が、罰則の対象にはならないと確信を持っていたからじゃないと説明がつかない」

ソラは真つ直ぐに相手の目を見て話す。まるで何かを訴えかけるように。

すると一緒に收容されていた手下の一人が声をあげた。

「指示されたんだ！ 商會を仕切っているヘンドレル様から！」

「おいお前……！」

手下の言葉を遮ろうとするが、すでに時は遅い。

男は二度目の舌打ちとともに、ソラを睨みつける。

「俺たちは自分の意思でやった。あの人は関係ない」

頑なに拒む男の姿を見て、トゥネリはソラの肩に触れる。

「もう行きましょう。こいつら話すつもりないみたいだし」

諦めることを促すトゥネリ。しかしソラは動こうとせず、代わりに口を開いた。

「あの場所にあった転移の魔法陣、書き換えられました」

「なんだと？」

男は眉間にしわを深く寄せて、ソラを見る。

ソラは話を続けて、自分が見たものをそのまま彼に話す。

「あの転移の魔法陣は子供の命を奪う内容でした。肉体はリヴェルテス北東部・市街地のどこかに、魂は天にある星空の中に。それがあの魔法陣に書かれていた」

そして確信を持った表情ではつきりと告げた。

「これはあなた達の仕業じゃない。別の誰かが隠れて意図的に仕組んだものだ。大勢の

子供達の肉体を手に入れるために」

男は見つめる。ソラの真っ直ぐな眼差しを。屈託のない瞳を。

その瞳を見て観念したのか、男は話し始めた。

「おそらくクローネの作業だ」

「クローネ……」

ソラは思い出す。潜入した際に見かけた男のことを。

（やっぱりあの男の人が……でもなんで……？）

「あいつはうちで雇った魔法技師だ。転移魔法を扱えるやつを探していた時に見つけてな。それ以来、あいつに頼んで物資の移送を行っていた。かれこれもう五年の付き合いか」

「そんな人がどうして？」

「あいつは一年ほど前、ある疑いを掛けられていたんだ」

男の代わりに、後ろで聞いていたトウネリが口を開いた。

「クローネ……確か魔物の量産をしているって疑いを掛けられていた男ね。当時ユースが追っていた男よ」

「ユースが？」

そこでソラはハッと気がつく。それに答えるように、トウネリは言った。

「あんたが会ったセシルって子の父親も、一緒にその男を追っていたわ」

男は言葉を続け、語り始める。

「あいつは度々口にしていた。商会では子供の体は取り扱っていないのかつてな。おそらく魔物の材料に使うつもりだったんだろう。疑いを掛けられたあの日に姿を消していたが、一週間前突然俺たちの前に姿を現した」

男は当時のことを思い出す。

姿を現したクローネは開口一番にこう言ったのだ。「子供の肉体が足りなくなったので力を貸してほしい」と。

「当然俺たちは手を貸すつもりはなかった。俺はガキが嫌いだが、それでも命を奪うつもりはなかったからな。だが——」

「その男と会ってから、記憶が曖昧になっている……と」

「ああ。お前のおかげで目が覚めてから最初に呪ったさ。俺はなんてことをしでかしたんだつてな」

男の悔いる表情を見てソラは同情する。きつとこの男は心を痛めているのだ。かつての仲間に裏切られ、尊い命を奪おうとしたことを。

「ありがとうございます、話してくれて」

微笑むソラを見て、男は暗い眼差しを向ける。

「お前は変わったやつだな。名前は？」

「ボクはソラ。ソラⅡレベリアⅡヴィルレ」

「そうか……お前が……」

男がどこか懐かしげな表情を浮かべていると、そこへ看守が歩み寄ってきた。

「面会はここまでだ」

脱獄防止のために留置場では面会時間に制限を設けている。その制限が来たようだ。

まだ聞きたいことはあるが、こうなれば仕方がない。どちらにせよ必要な情報を聞き出すことはできた。

ソラがそう思い立ち去ろうとすると、男がその背中を呼び止めた。

「おいソラ。クローネには気をつけろ。あいつはかなり危険なやつだからな」

男の言葉に一瞬面食らうソラだったが、すぐに微笑むと「ありがとうございます」と言うのだった。

「道理で似ているわけだ」

二人が去った後、男はソラの顔を思い出す。

「ボス、あの女のことを知ってるんですかい？」

手下の問いに、男は答える。

「あれは女じゃねえ。男だ」

男の答えに手下たちが騒つく。

そんな中男は一人、

「バンドレルさん、あんた一体あいつから何を得ようとしているんだ……?」

と呟くのだった。

一方留置場を後にし、ソラは思考を巡らせながら街を歩く。

今回の一件がもし全て、クローネという男に原因があるとするならば早く対処しなければならぬ。何せ、魔物を生み出していると疑われた人物だ。セシルの父親のことを考えれば、黒と断定するべきだろう。

しかしやはり目的がわからない。なんのために魔物を生み出しているのかが。

「トウネリ、君はどう思う? トウネリ?」

振り向いて見ると、トウネリはどこか浮ついた表情で歩いている。

「トウネリ? トウネリ!」

「えっ? あ、なに?」

ようやく呼ばれていることに気づいたトウネリは、慌てて返事をする。

「どうしたの? なんかあった?」

「どうしたのはこつちだよ。呼んでもすぐに返事が返ってこないし」

「ご、ごめん。考え事してたから……」

ばつが悪そうにトウネリは俯く。

どうやら彼女も彼女で思うところがあつたらしく、考えに耽つていたようだ。だがどこか青ざめた顔をしているため、ソラは心配したように顔を覗き込む。

「大丈夫？」

原因がひとつ思い当たる。クローネという男とその男の目的が魔物を生み出すこと。そのために子供を集めたとなれば、考えられるのはひとつしかない。

「もしかして、あの時のこと思い出しちゃった？」

ソラの問いかけに、トウネリは唇を噛みしめる。正解だ。

「ええ少し……ね……」

無理もない。ソラは内心そう呟く。

事件の首謀者が父親で、知らずとはいえ加担してしまった。そう彼女は考えているはずだ。

「ねえ、ソラ。私あんたにひとつ話すことが——」

そんなトウネリが何かを話そうと口を開いた時だった。

「ソラさん！ トウネリさん！ 大変です！」

話を遮るような大きな声とともに、ルージュヴェリアが駆け寄ってきた。

「どうしたんですか？」

ソラが問いかけると、肩で息をするルージュヴェリアは答えようとする。が、周囲を見渡すとソラの手首を掴み引っ張った。

「とにかく大変なんです！ 今すぐギルドに来てください！」

ソラとトウネリは顔を見合わせると、小首を傾げる。

「早く！」

そしてルージュヴェリアに促されるまま、二人はギルドに向けて駆け出すのだった。

短編 I

最初の出会いは甘い果実

二ギロ村にある小さな家。その一室にて、少女エイネは祈りを捧げていた。

隣の部屋からは、彼女の主人ヴェルティナの呻く声が微かに聞こえてくる。

今ヴェルティナは出産を迎えようとしていた。

必死に子を産むための痛みに耐えるヴェルティナ。額には汗が滲み、唇を噛み締めている。

傍らでは友人のクリンベルとクリンベルが連れてきた女性医師が、出産のために尽力していた。

何もできないエイネは、ただ無事を祈ることしかできない。両膝を床につけ、両手を合わせ、目蓋を固く閉じる。

不意に、普段のヴェルティナからは考えられないような甲高い悲鳴が響いた。

耳を塞ぎたい気持ちを抑え込み、祈りを続けるエイネ。

しばらくして、悲鳴が途切れた。

エイネは祈りをやめて、思わず顔を上げる。まさか最悪の事態に陥ったのか。不安が

過ぎる。

その不安をかき消すように、大きな泣き声が響き渡った。赤子の声だ。

「産まれた!？」

はやる気持ちを抑えきれず、エイネは部屋から飛び出す。

「ヴェルティナ!」

隣の部屋に飛び込んで真っ先に視界に入ったのは、元気な産声を上げる赤子の姿だった。

「エイネちゃん、産まれたわよ。元気な男の子が」

腕の中にいる赤子をあやしながら、クリンベルが笑う。

しかしエイネは、ヴェルティナの方へ一目散に駆け寄った。

「あらおはよう、エイネ」

横になって息を切らしながら、ヴェルティナは微笑む。

「おはようじゃないわよ、バカ……ッ」

ヴェルティナの無事な姿を見て安心したのか、エイネは涙を溢れさせる。

「ああ、もう。なんで泣いてるの?」

「だって……だってヴェルティナがすごく苦しそうな声出してたから……ッ!」

「それはもう苦しかったわよ。でもほら……見て?」

ヴェルティナに促され、エイネは赤子の方に顔を向ける。吸い込まれるような澄み渡った碧眼と目が合った。

「ほらヴェルティナ。抱いてあげて」

クリンベルは抱えていた赤子を、ヴェルティナに差し出した。

ヴェルティナは身を起こすと、赤子を抱き抱える。

「おはよう、ソラ」

「ソラ？」

聴き慣れない響きに、エイネは小首を傾げる。

「ええ、ソラ。ソラレベリアレヴィルレ……それがこの子の名前よ」

「ソラ……」

エイネはその名を頭の中で繰り返す。何故か心地良い響きだ。

「ちなみにその名前、私の占いで決めたのよ？」

「占い？」

「そう。文字を書いた紙をたくさん並べてね、その中から——」

「はいはい、そんな話はどうでもいいから」

ヴェルティナに話を遮られ、クリンベルは頬を膨らませた。

二人が他愛もないやり取りをしている中、赤子のソラは不思議そうに辺りを見回して

いる。

そんなソラとまた目が合い、エイネは彼の綺麗な瞳を見つめた。

「ほらエイネ。触ってみなさい」

ヴェルティナの言葉のままに、エイネは恐る恐る人差し指を近づける。

別に初めて赤子に触れるというわけではないのだが、何故か異様なほどに緊張していた。

ゆつくりと近づいていく指。それを迎え入れるようにソラは手を伸ばすと、小さな手のひらで包み込んだ。

（あ……温かい……）

ソラの持つ温もりに、エイネは顔を綻ばせる。

するとソラも応えるように笑顔を咲かせた。

「あ、笑った！ 笑ったよヴェルティナ！」

まるで我が子にでも触れたかのように、エイネは喜びを露わにする。

今度はそつと、ソラの柔らかい頬に触れた。

「あらあら、エイネちゃんつたら」

目をキラキラと輝かせるエイネを見て、クリンベルはくすくすと笑う。

「どうやらもう彼女に懐いちゃったみたいですね」

きやつきやと笑うソラの姿を見て、女性医師も笑った。

「わざわざ隣町から来てくれてありがとうね。とても助かったわ」

「いえいえ、何を隠そうヴェルティナさんとベルさんのお願いですから」

女性医師は笑うと、荷物をまとめ始める。

ちらりとソラの方に顔を向けると、女性医師は「羨ましいです」と呟いて部屋を後にした。



ソラが産まれてから早六ヶ月。エイネは母親の代わりに彼を育てるようになっていた。

母親のヴェルティナの姿はもう無い。彼女はソラが産まれた七日後、忽然と姿を消し行方知れずとなつてしまつていた。

ヴェルティナをよく知るエイネは思った。きっと何か理由があるに違いない。それが何かは分からないが、自分がソラを育てようと。

姿を消す前、ヴェルティナから頼まれたというのものもある。だが何よりも、愛おしいソラの事を見捨てられるはずがなかった。

「んー、どうしよっかなあ……」

そんなエイネだったが、今ある問題に直面していた。それはソラに与える食事についてである。

これまでは牛の乳を温めて飲ませていたのだが、ここ最近はそのだけでは満足いかなのかよく夜中に泣くようになっていた。

歯が生え始めているため、そろそろ何か食物を与えるべき時期なのだろう。

だが何分知識が浅く、何を食べさせればいいのか分からない。赤子が噛みやすい柔らかい物がいいというのは知っているのだが、該当する物が何かまでは思い浮かばないでいた。

「せっかくはじめで食べるんだから、美味しい物がいいわよねえ」

美味しくくて柔らかい物。真っ先に思い浮かんだのは肉だったが、これはあくまで自己基準でしかない。

「そもそも肉は結構噛まないとだからダメよね」

あれはダメ、これもダメと繰り返すエイネ。頭を使いすぎて、今にも頭から煙が吹きそうになっている。

「んー、どうしたものか」

思考が堂々巡りを始めた時だった。

「何か悩みごとかしら？ エイネちゃん？」

背後で陽気な声がした。

エイネは「またか」と小さく呟いて振り返る。

「気配を消して現れるのやめてもらえますか？ ベルさん」

クリンベルの姿を見て呆れかえるエイネ。一体もう何度目だ。正直心臓に悪い。そう言いたげな表情をしている。

「えー、だってえ……」

対しクリンベルは人差し指を咥えて、わざとらしく体をくねらせた。

「だってじゃないですよ、まったく」

エイネにジトツとした視線を向けられ、クリンベルは身を縮こませる。が、すぐ忘れたかのような満面の笑顔になると、もう一度問いかけた。

「で、何を悩んでいるの？」

さては反省していないなこの人。思っても口にしないエイネである。

「いや、そろそろあの子に何か食べさせてあげようと思って」

「あの子ってソラちゃんに？」

「はい」

予想だにしていなかったのか、クリンベルは目を瞬かせた。

「へえー、もうすっかりお母さんが板についてきたわね？ エイネちゃん」

「もう、茶化さないでください」

エイネは唇を尖らせて抗議する。頬が微かに赤い。

「別に私はただあの人の代わりをやっているだけで——」

何か言いかけた時、二階の部屋から大きな泣き声が響いてきた。

「ああ、もうどうしたのかしら。すいません、ちよつと行つてきます」

慌ててエイネは階段を駆け上がっていく。

その背中を見つめてクリンベルは、

「その代わりが、あの子にとっては特別なことになるのよエイネちゃん」

と微笑むのだった。

部屋の扉を開けると、ソラの泣き叫ぶ声が廊下にまで響き渡る。

「どうしたのー？ ソラ」

エイネは小さな体を優しく包み上げると、軽くポンポンとお尻の辺りを叩きながら揺り籠のように揺すった。

「おー、よしよし」

「おー、よしよし」

いつもはこれですぐ泣き止むソラだったが、今回は一向に泣き止む気配がない。

困り果てていると、クリンベルが「大丈夫？」と部屋の中を覗き込んできた。

「どうやらお腹が空いたみたいで」

どうしたものか。エイネは頭を悩ませる。これではきつとミルクを飲ませたとしても、変わらないだろう。

方法を考えながらソラの顔を見つめる。

「あ、そうだ」

ふと閃きが訪れた。

エイネはすぐさま行動に移そうと、ソラを抱えたままクリンベルに近づく。

「すいませんけど、ちょっとこの子の相手してもらえますか？」

「えっ？ ええ、いいけど」

泣き続けるソラを預けると、エイネは急ぎ足で台所に向かった。

保存用の棚の中を開けて、一個のりんごを取り出す。調理用のナイフで丁寧に皮を剥き、細かく擦り下ろていく。

そして擦り下ろしたりんごを熱が伝わりやすい器に移し、お湯の入った鍋に器を入れた。

「うん、こんなものかな」

味見で熱さを確認してから、お湯から取り出す。

完成したものを小さな器に入れると、木の匙と一緒に部屋に持っていった。

「べー。あばらばば、んー…ばあー」

部屋に入ると、奇行に走るクリンベルの姿があった。

正確にはソラを笑わせるために変な顔をしていたのだが、どうやら逆効果だったようだ。泣き声は激しさを増している。

苦笑しつつ、エイネは匙でりんごを掬うと、ソラの口元まで持っていく。

「はいソラ。ご飯だよー」

その声を聞いた途端、ソラは泣き止んだ。

「口開けて？ はい、あーん」

エイネが口を開けると、ソラも真似をして精一杯口を開く。

そこへ匙を持っていくと、ソラは自然と口を閉じた。

「はい、あむあむ」

匙を口から出し、エイネが咀嚼する素振りを見せる。すると同様にソラは口を動かした。

「じゃあ、ごっくん」

そしてエイネの言葉に従うように、ソラは口の中のりんごを飲み込んだ。

「どう？ 美味しかった？」

エイネの問いかけに、ソラは目を輝かせることで答える。

「良かった」

「もっ……もっ……」

「ん？ もっと欲しい？ 大丈夫、まだまだあるよー」

自分の腕の中で美味しそうに食べる姿を見て、クリンベルは感心する。まるで子供の好みを予知したかのようだ。

「エイネちゃん、どうしてりんごを上げようと思ったの？」

クリンベルの問いかけに、エイネは食べさせながら笑う。

「いやー、顔を真っ赤にして泣いてるの見たら、なんかりんごが思い浮かんじゃって」
要はただの偶然だった。

それでも喜んでる姿を見れば、この選択は間違いではなかったのだろう。なにせソラはこの時食べたりんごの味を、忘れられなかったのだから。

そして六年経った今でも。

「エイネー！ りんご食べたーい！」

「またあ？ほんと好きねー」

「だって美味しいんだもん」

ソラはりんごを食べるのが好きなのであった。

第二章 月明かりと忍び寄る影

プロローグ

周りを高い壁で囲まれた街、王都ブリアンテス。ヘルデイロの首都であるこの街に入るためには、ひとつしか設けられていない門を潜らなければならぬ。

その門を潜り直線状に突き進むと、ヘルデイロを統べる王が住む城——ブリアンテス城がそびえ立っている。

城の敷地内には王族だけでなく、城を守る兵士、王族に仕えるメイド、王の側近である大臣らも暮らしており、常にヘルデイロや世界の情勢に目を配っている。

そんなブリアンテス城であるが、現在中で大きな騒ぎが起きていた。

「城の守りを固めろ！」

「城内に不審な者がいたらすぐに捕らえるのだ！」

「城周辺にも目を張り、異常が無いか逐一報告しろ！」

城に駐在する兵士たちが、険しい顔で廊下を行き来している。武装を手に物々しい様

子だ。

彼らが足早に移動する中、一人のメイドと煌びやかな衣服で着飾った少女が、姿勢を低くして歩いている。

「一体なにがあつたのです？」

状況を把握出来ていない少女は、メイドに問いかける。

「ご心配なさらずに。ただの訓練ですわ」

メイドは少女を庇うようにしながら答える。

少女はメイドの腕の中から周囲を見渡す。兵士たちの表情から、訓練という雰囲気ではない。

「とてもそうは見えないのですけど……」

「気のせいですわ。さあ、急いで部屋に戻りましょう」

メイドの明らかに不審な態度に、少女は不安を抱き始める。

もしやこの城内で何か事が起こったのか。そんな考えが浮かび、動揺が現れる。程なくして少女の自室にたどり着き、メイドは急ぎ部屋の鍵を開けた。

「さ、中へ。鍵を掛けて、しばらく大人しくしててください」

「城の中で何かあつたの？」

少女の問いかけに、メイドは一瞬言葉を詰まらせる。が、首を横に振ると微笑みかけ

た。

「大丈夫。なんにも心配ありませんわ。あなたのことはこの身に代えてもお守りいたしますから」

言い残すと、メイドは部屋の扉を閉めた。

扉を背に、メイドは肩を落とす。まるで何かを嘆くかのように。

「……の警備をお願いします」

「はっ！」

メイドは通り掛かった兵士に場を預けると、足早に部屋から離れていった。

部屋の外の音を聞きながら、少女は拭い切れない不安に胸を抑える。一体全体なにが起きているというのか、どれだけ考えても答えなどは見つからない。

窓の外から城の庭を見下ろす。ここにも兵士たちが、何かを警戒するかのように見回っている。

「一体なにがあつたというの……?」

幾度と繰り返す少女の問いに、答える者は誰一人としていなかった。



ギルド・ヘルデイロ支部支部長室。ルージュヴェリアから突然の呼び出しを受けたソラとトウネリは、ここに足を運んでいた。

部屋には支部長のヴェラドローネだけでなく、ユースの姿もある。

ヴェラドローネの背後に立つと、ルージュヴェリアは彼女が話し始めるのを待った。

「悪いな、急に集まってもらって」

全員揃ったのを確認し、ヴェラドローネは口を開く。

「あの、なにかあったんですか？」

言われるがままにやってきたソラは、状況がまったく掴めていない。だが支部長に呼ばれ、その場にユースもいるとなれば、大事であるのは理解できた。

ソラの問いかけにヴェラドローネは、ルージュヴェリアに説明を求めため顔を向ける。

ルージュヴェリアは一步前に出ると一枚の書状を見せた。書状には王族にしか与えられていない印鑑が押されている。

「城からの要請か」

ユースがそう言うと、ルージュヴェリアは頷く。

「実は先ほど、城の方から緊急の要請が送られてきました」

「緊急の要請？」

経験も聞いたこともないことに、トウネリは小首を傾げる。

「皆さんはセレネーラ姫をご存知ですよね？」

「ヘルデイロの第二王女、セレネーラⅡモントⅡブリアンテス姫のことですよね？ 公に出ることが無いため、その姿を見たことがある人はいないとか」

ソラの答えに、ルージュヴェリアはまた強く頷いた。

「実はそのセレネーラ姫の暗殺を仄めかす手紙が、城に送られてきたそうなんです」「えっ？」

あまりに突飛した内容であつたため、ソラは思わず素っ頓狂な声を発する。

「その反応は最もだよソラ。正直それを聞いて私も動揺してね」

ヴェラドローネがため息混じりに言う。彼女とてこんな話を信じたくはなかった。

一国の姫殺害ともなれば、国だけでなく世界中から目を向けられることになる重罪だ。それを決行する者が果たして本当にいると言うのだろうか。甚だ疑問でしかない。

だが王自らが要請を出したともなれば、否応なしに信憑性が出てしまう。疑う余地などないほどに。

「一体だれがなんのために？」

「それは現在調査中だそう。王は内部の人間によるものだとお考えらしい」

「なるほどな、それで俺たちが呼び出されたわけか」

ルージュヴェリアは頷き、書状を読み上げ始めた。

「ギルド・ヘルディオ支部支部長ヴェラドーネ殿。昨晚、私のもとにある一通の手紙が届いた。内容は私の二人目の娘、セレネーラの命を狙うといったもの——つまりは殺害予告だ。この手紙が私の寝室に置かれていたことから、これは内部の人間によるものと考えてまず間違いないだろう。そこで貴殿に要請する。至急、貴殿が最も信頼を置いている者たちを送ってほしい。内部の人間全員を信用できないことを鑑み、その者たちに娘の警護を任せたいのだ。返答はその者の到着をもつて確認とする」

内容を聞き、ソラとトウネリは顔を見合わせる。

最も信頼が置ける者としてユースが選ばれるのは分かる。だが自分たちはまだ実績が伴っているわけではない。言ってしまうえばまだまだ半人前だ。

そんな自分たちが何故この一大事を選ばれたのか疑問に思ったのだ。

確認を取ろうとソラが口を開いた時、それよりも先にルージュヴェリアが答えた。

「お二人は私の提案で、ユースさんと同行してもらおうことになりました」

「ルージュヴェリアさんが？」

「はい。セレネーラ姫はお二人と年が近いんです。だからお二人といれば、多少は不安が和らぐと思つて支部長に進言したのです」

なるほど、と二人は同時に頷く。

立場を考えれば、年齢が近いものと接する機会は極端に減ることだろう。その上年齢でいえば目上の者が、遜って接してくるともなれば肩身の狭い思いをしてもおかしくはない。

「こいつの意見には私も納得したからな。そこでお前たちにも来てもらったというわけだ」

「そういうことでしたら受けます」

「そうね、私も受けるわ」

「ありがとう。助かるよ」

承諾の言葉を聞き、ヴェラドローネは笑う。そしてルージュヴェリアから送られてきた書状を渡すよう指示を出した。

「悪いが事態は緊急を要する。今すぐ向かってくれ」

ソラとトウネリは同時に強く頷くと、足早に部屋を出た。

書状をルージュヴェリアから受け取ると、ユースも部屋を出ていこうとする。が、はたと立ち止まり、ヴェラドローネに視線を向けた。

それに気づいたヴェラドローネは深いため息を吐くと、声には出さずに「今回ばかりは関与してないぞ」と答える。

唇の動きで内容を読み取ると、ユースは怪訝な表情を浮かべたまま部屋を出て行っ

た。

部屋が静かになり、ルージユヴェリアは俯く。

「どうした？ 心配か？」

思い詰めた表情のルージユヴェリアを見て、ヴェラドローネは問いかける。

「そんなに心配なら、別にあいつらと一緒に行ってもいいんだぞ？」

するとルージユヴェリアは首を横に振った。

「いえ……私が行っても足でまといになるだけですから……」

微かに声を震わせながら答える。そして一礼すると、ルージユヴェリアも部屋を出て

行く

「さて、今回はどういう結果になるかな？」

部屋に一人残されたヴェラドローネは扉を見つめ、静かな笑みを浮かべた。

第一節 月明かりの少女 1

ブリアンテス城へ向かうまでの道中、ソラは歩きながら思考を巡らせていた。

「どうしたのよ？」

真剣に考える姿を見て、トウネリが問いかける。

「うーん、相手はなにが目的なんだろうって思ってたさ」

トウネリは周囲を見渡す。万が一にも話を聞かれることを留意している。

会話を聞かれないためにも、ソラは周囲の人間に聞こえないよう魔法を掛けた。これならば不用意に国の一大事が知られることはないだろう。

「話の通りなら、姫の暗殺……でしょうね」

答えつつも、トウネリも引つかかるものがある様子で口元に手を当てる。

「ねえ、なんで犯人はわざわざ予告状なんて書いたのかしら？」

「ボクもそれが気になったんだ。セレネーラ姫暗殺が目的なら、城内部を警戒させる利点がないし、ちょっと不思議だよね」

二人の疑問。それはなんのために予告状を送るなどという、不利益に繋がるようなことをしたのかである。

普通であれば、暗殺を仄めかすようなことはせず、すぐ行動を移すはずだ。でなければ周囲が警戒し、目的達成が容易でなくなってしまう。

自信があるのか、まったく別の目的があるのか。どちらにせよ、今回の一番の謎だ。

「おそらく王も同じことを考えている。ギルドに要請を出したのも、内部の誰によるものなのか分からないことに加え、まったく別の目的も見越してのことだろう」

「でも、一体誰が……?」

「さあな。だがそれを明かすのも、俺たちの仕事になるだろうさ」

話している間に一行は、城門の前まで迫っていた。

警備の兵士二人が、三人の姿を見て門の前に立ち塞がる。長槍を手に険しい顔をしていることから、警戒している様子だ。

「お前たち、そこで止まれ!」

兵士の指示に従い、三人は足を止める。

「現在城は厳重な警備を行なっている。用件を述べよ!」

質疑に対し、ユースが一步前に出て、懐から送られてきた書状を取り出す。

「俺たちはヴェラドローネの指示でギルドから派遣された者だ。ここにヘルデイロ王が

送った要請の書状がある。確認願いたい」

ユースの言葉を聞き、兵士たちは顔を見合わせて小さく頷く。

書状の確認をした兵士たちは、これが王によるものだと判断し、門を開くように指示を出した。

門が開いている最中、兵士二人はユースの前に立ち、深々と頭を下げる。

「すみません、ガルディアン卿。あなただと分かっていますが、簡単に通すわけには行かず」

「別に構わないさ。それがお前たちの仕事だ。ただまあ、その呼び方はやめてくれ」

ユースは苦笑した。

門が完全に開き切ったのを確認し、兵士たちは遮っていた道を開ける。その際、どうぞお通りくださいと一言置いて下がっていく。

一連のやり取りに、ソラとトウネリは顔を見合わせた。まるですでに面識があるようなやり取りだ。

疑問に思っている二人を見て、ユースは頭を掻く。

「何度か訓練に付き合ってたんだよ」

ユースの答えに、二人はなるほどと感心する。確かにユースほどの実力者ともなれば、その分教育者として支持されることもあるのだろう。

二人が納得していると、不意に背後で気配を感じた。ソラは咄嗟に警戒し、振り向き、すぐに警戒心を解いた。

「昨日ぶりね？ 壊れたお人形さん？」

「やつほー」

ソラの顔を見て、双子の妹ラミナがほくそ笑んでいた。その隣には姉のアルマの姿もある。

「なんであんた達までいんのよ？」

ラミナは笑っているが、呼び方に明らかな悪意がある。敵意を剥き出しにするトウネリであったが、それをソラが手で制した。

「二人ともいつの間？」

まったく気配を感じることなく現れたため、ソラは疑問を投げかける。するとラミナは近づいて、ソラの胸に人差し指を突き立てて、

「この程度も気づけないなんて、あなた本当にお姫様の護衛が務まるのかしら？」
と嘲るように笑った。

姉妹はあの場になかったはずだ。だというのに、何故その話を知っているのか。本当に謎が多い姉妹だと、ソラは内心で呟く。

「おいお前ら。今回はついてくるなと言ったはずだが？」

「嫌よ。ユースといられないなんてとてもつまらないもの」

悪びれる様子もなく、ラミナはユースの腕に抱きつく。対しユースは、まあ分かっていただけなどと項垂れた。

「さあいきましょ！ 久々にあの王様、もといじじいの面白い顔が見れるんだもの！」

「あのおじいちゃん……元気にしてるかな……？」

この二人の一言で、何故ユースが待機を命じたのか理解した。要するに彼女たちは恐れ知らずなのである。

ソラが苦笑していると、トゥネリが渋い顔でそつと耳打ちする。

「ねえ、まさかこいつらもついてくるの？ わたしすぐく嫌なだけけど」

どうやらトゥネリは彼女たちを相当嫌っている様子だ。度々喧嘩になっているという話を聞いたことから納得ではあるのだが。

ソラは内心、このままで大丈夫なのかなと心配するのであった。



城の中に入ると、入り口の先にある階段の前で一人のメイドが目蓋を閉じて待っていた。黒く長い艶のある髪が特徴的で、使用人の服を身に纏っている。

両手を揃えて静かに佇んでいた彼女は来訪を感じ取ると、目を開けて一行を認識する。

「お待ちしておりました。やはりあなたが来たのですね、ガルディアン卿」

またその呼び名か、とユースは眉を寄せる。

「なんでこの奴らは毎度毎度……」

「お父上のことを考えれば当然かと。ガルディアン王国を守護する騎士たちの長にして、未だかつて一度の敗北も無いと言われている最強の英雄……アーガストⅡシユテルクⅡガルディアン。その血を最も色濃く引き継いでいるのがあなたなのですから」

その名を聞き、さすがのソラも驚きを隠せなかった。

大国家ガルディアン王国——世界で最も影響力があるとされているこの国には、ガルディアン騎士団と呼ばれる精鋭揃いの集団がいた。彼らにかかれればそこの国の兵士は為す術もなく敗北を喫すとさえ言われている。この騎士団を統べる男がアーガストだ。

アーガストの強さは世界中に知れ渡っている。かつて巻き起こった大戦で彼は、幾千もの兵士をたつた一人で相手し、壊滅させたという。彼が放つ本気の一撃は大山を砕いても、大海を真つ二つにしても有り余るといふ。彼がその気になれば、この世界はたちまち破壊されるだろうとも。

その男の血を、ユースは引いているのだという。彼のもつ力は並々ならぬものだ。もし話が本当ならば、彼の強さの説明がつく。

「トウネリは知ってたの？」

「まあ一応ね。ただあいつ、父親の名前出されるの相当嫌ってるから」

言われてソラは気がついた。ユースが怪訝な表情を浮かべていることに。

「この女殺す？ ユースの前であのじじいの話をしたわよ姉様」

「そうだね……今すぐ、きつぱりと……」

「お前ら落ち着けての」

双子が動こうとするのを止めて、ユースは深いため息を吐く。

一方でメイドはどこ吹く風といった様子で、ソラとトウネリの方に目を向けていた。まっすぐ見つめて、まるで物珍しいものでも眺めるかのように。

「そちらのお二人は？」

問いかけにユースは、二人を一瞥してから答えた。

「こいつらには姫の護衛として側にいてもらうつもりだ」

「このお二人に……ですか？」

メイドは側まで寄ると、二人のことを上から下まで隈なく眺め始める。

あまりに凝視されているため、ソラは思わず生唾を飲んだ。

「あ、あの……どうかしましたか？」

耐え兼ねたトウネリが問いかける。

「あまり強そうには見えませんか」

「なっ……!!？」

比較基準がユースであるのは分かっているが、それでも聞き捨てならない台詞だった。

トウネリは思わず目を鋭くさせて、メイドの顔を凝視する。

「うちの兵士たちの方がまだ強いのではないのでしょうか？」

明らかに人をバカにした態度だ。

憤るトウネリに対し、ソラはメイドに微笑みかけた。

「それでも任されるからには、精一杯お守りします」

「当然のことを言われても困ります」

棘のある物言いに、ソラは苦笑する。もしかして彼女は自分たちのことを嫌っているのではないだろうか。

するとユースが助け舟を出さんとばかりに口を開いた。

「右にいるソラは昨日ギルドに入ったばかりだが、俺が試験官を務めて認めた男だ。左にいるトウネリも俺が何度か稽古をつけて力をつけている」

「なるほど、ガルディアン卿自らそのようなことを言うということは、それなりの實力をお持ちのようですね」

そう笑みを溢すと、メイドは一步下がって二人に軽く頭を下げた。

「無礼を失礼いたしました。私はメルヒェモントシェンテール嬢。セレネーラ姫の使用人を務める者です。以後お見知り置きくださいませ」

シェンテール嬢。この名も、ソラはヘルデイロに関する歴史書で目にしたことがあった。

シェンテール嬢——代々から王家に仕える女性に与えられる称号だ。彼女たちはこの称号に加えて、仕える者の名の一部を与えられ、その名とする風習があるという。セレネーラ姫の持つ「モント」が入っていることから、目の前の女性が姫に仕えているというのは間違いなさそうだ。

メルヒは下げていた頭を上げると、小首を傾げる。

「宜しければ、お二人のお名前を聞いても？」

「あ、えつと……ソラです。ソラレベリアヴィルレ」

「わたしはトウネリよ」

「ソラ様とトウネリ様ですね。見たところ姫様と年が近いご様子。宜しければ、仲良くしてあげてください」

先程の態度とは打って変わり、気さくに笑うメルヒ。

一体さっきのはなんだったのだと、トウネリは不満げにしている。それを気づいてか、メルヒは再び頭を下げて答えた。

「申し訳ございません。私は使用人としてだけでなく、姫様の護衛としてお側にいる身私の代わりが務まる方なのか、判断しなかったのでございます」

なるほど、それならば少しは納得がいく。トウネリは微かに頷くと、ソラの顔を見た。彼はにこやかな表情を見せている。

不意にメルヒはソラの顔をまじまじと間近で見始めた。

「ちよ、ちよつとあなた近いわよー」

あまりに近いため、トウネリは赤面して割って入る。

「いえ、先程ユース様から聞き捨てならない言葉が聞こえましたので」
「聞き捨てならない言葉？」

その正体にトウネリはすぐに気がついた。

一方のソラは気がついていない様子で、小首を傾げている。

「はい。先程男——と申ししていたのですが、私にはどこからどう見ても女性の方にしか見えなくて」

「えっ？ あ、ああ……」

そういうことかとソラは苦笑する。

「よく間違われるんですよ、あはは……」

そんなに自分は女性に見えるのだろうか。男のソラとしては複雑な気分だが、髪を女性のように結んでいる手前口に出すことは出来なかった。

「ふむ……」

納得してかしないでか、メルヒはそう呟くとトウネリの耳元に近づく。

一体今度はなんなのか。トウネリはメルヒに対し、警戒心を露わにする。が、

「こういう方が好きなのですか?」

「は、はあ!」

メルヒの一言に思わず叫んだ。狼狽えるあまり顔がさらに赤くなっている。

「いえ、どうやらあなたは自分のことではなく、この方がバカにされたことをお怒りのようでしたので」

「わ、わわわ、わたしは別に!」

ソラが首を傾げて見ていたため、トウネリは慌てて顔を逸らす。一体この女なんなのよ、と内心叫びながら。

いつまでここにいるつもりなのか。そうユースが呆れていた時、階段の上から声が響いた。

「貴様ら！ 一体ここで何をしている！」

声に振り向くと、少し小太りした中年の男性が立っていた。険しい表情で、階下にいる一同を睨んでいる。

「これはクローリヒ様。どうなされましたか？」

「どうなされましたか？ ではないだろう！ 見たところそこにいるのは、王の要請を受けてギルドから送られてきた者ども。国の一大事に呑気に油を売っている暇があったら、さっさと王の下まで連れて来んか！」

「確かにその通りでございます。これは失礼いたしました」

メルヒが頭を深々と下げると、男クローリヒは鼻を鳴らしてずかずかと去っていった。

「なによあいつ。偉そうに」

姿が見えなくなったのを見計らい、ラミナが毒づく。

「実際偉いんだよラミナ。あれは王の側近である大臣の一人、クローリヒⅡラニⅡストルツだ。お前も見たことあるだろうが」

「ああいう小汚いおっさんは顔も名前も覚ええない主義なのよ」

実に酷い言いようである。

しかし指摘されたことは何も間違っていない。実際、こんなところで立ち止まってい

るわけにもいかなかった。

「では謁見の間までご案内いたします」

メルヒの後に続いて、一向は移動を始める。

道中、トウネリは小声でソラに話しかけた。

「あのクローリヒって人、怪しくなかった?」

「そうかな?」

「だって考えてもみなさいよ。なんで王の側近である人が、わざわざあそこまで出てきてるのよ?」

確かにトウネリの疑問は的を射ている。

クローリヒが口にしたように、国の一大事だ。だというのに彼は王のそばを離れて、城の中を徘徊している様子だった。

「確かにそうかも?」

だがソラはなんとなく感じていた。今回の件、あの大臣は何も関与していないと。根拠と言えるものは無いが、少なくとも見た目や行動だけでは判断できない何かがあるように思えた。

「わたし、一応あの男のこと警戒しておくわ」

「あ、うん……」

「どうしたの？ 浮かない顔して」

「ううん。なんでもないよ。気にしないで」

「そう？」

どこか容量を得ない答えを気にしながらも、トウネリは引き下がる。歩きながら、ソラがある一点を見ていることに気づかずに。

(ボクはあの人よりもむしろ……)

その視線はまっすぐ、メイドのメルヒに向けられているのであった。

第一節 月明かりの少女 2

メルヒの案内を受けて、ソラたち一行は謁見の間にたどり着いた。

部屋の前には兵士が二人立っており、周囲を警戒している。

兵士たちはメルヒの姿を見て頷くと、部屋の扉を左右同時に開いた。

開放された扉の先に玉座が見えた。玉座には白くて立派な髭を伸ばした老人が座っている。頭には王冠を乗せ、手には何やら先端に宝石のついた杖。そう、この老人こそがヘルデイロの王だ。

王の他には二人の男と二人の女が椅子に座っていた。その中には先程叱声を浴びせたクローリヒの姿もあつた。

「では、私はここに」

メルヒは一行に軽く会釈すると、部屋から出て行つた。

ソラとトウネリ、ユースの三人は部屋の中央まで歩み、片膝をついて頭を垂れる。

双子姉妹はきよろきよろと辺りを見回し、部屋の中を歩き回っているのだが――。

「ガルディアン卿、ならびにその付き人たちよ。よく来てくれた。まずは協力を感謝す

る」

ヘルデイロ王は気に留めることなく、話し始めた。

「久しぶりね、ヘルデイロ王」

「いえーい、久しぶりー」

ラミナとアルマが手を振って笑う。

「貴様ら！ 王の前でなんたる無礼を！」

すると玉座から見て右側の席に座っていたクローリヒが立ち上がり、怒りを露わにした。立場を考えれば当然の反応だろう。

「クローリヒ、良いのだ」

「しかし王！」

ヘルデイロ王は下がるよう目で促す。

それを受けてクローリヒは渋々席に座った。

「お前たちも息災のようだなによりだ」

「ふん、あなたは相変わらず偉そうにしてるわね」

「おいラミナ、あまり失礼な態度を取るな」

ユースに注意されると、ラミナは鼻を鳴らして顔を逸らす。頬を膨らませていることから、不満なようだ。

「私の付き人が失礼いたしました」

「いや良いのだガルディアン卿。ああいう風に接してくれる者は家族以外におらんのである」

王は笑うと、玉座から立ち上がる。そしてソラの前まで歩を進めた。

「ところで貴殿、名は？」

「は、はい。ボク、いや私はソラレベリアヴィルレと言います」

自分が問われているのだと分かり、ソラは即座に答える。ここに来て緊張してしまい、しどろもどろになっていた。

名を聞いて、周囲が微かに騒つく。

「ヴィルレというと、貴殿の母親の名はヴェルティナゲフォルクスヴィルレか？」

予期せぬ母親の名を聞き、ソラは思わず顔をあげた。ヘルディロ王は真つ直ぐ、ソラの顔を見つめている。

「その様子だと当たりのようだな」

「え？ えつと……はい……」

動揺を隠せず、目が泳ぐソラ。そんなソラをまじまじと見つめて、王はどこか懐かしむように目を細めた。

「確かに、彼女の生き写しのように美しい顔立ちをしている」

「あ、えっと、ありがとうございます……ます……」

「母親は元気にしているのか？」

「母はボクがまだ赤子のころに行方を——」

「そうか。それはすまないことを聞いた」

「い、いえ……」

ソラの右隣で会話を聞いていたトウネリ。床を見つめるその瞳は揺れていた。

彼女は知らなかった。ソラが本当の母親に捨てられた身だということを。

胸を締め付けられるその事実、トウネリは歯を食い縛る。そして思った。自分はただ彼のこと知らない事が多いと。

「王よ。世間話はそこまでに」

玉座から見て左隣の席に座る中年の男が声を掛ける。右目に掛けた片眼鏡に軽く触れ、手には何かの書物を持っている。

ソラはその書物の背表紙に注目する。大抵書物のタイトルがここに書かれている。が見たところ何か書かれているという様子はない。この場合、外部に漏らせない重要な情報が書かれていることが多いと言われている。

「それもそうだな」

自重を促された王は、どこか物惜しそうに玉座に戻っていく。

「ねえ、あの人は誰なの？」

城内部の全てに精通しているわけではないため、ソラは片眼鏡の男について、ユースに小声で問いかける。

すると王がその事を聞いていたのか、

「それについては私が答えよう」

と言った。

ソラの心臓が思わず跳ね上がる。まさか聞こえているとは思っていなかったのだ。なにせ、周囲に音が聞こえないようにする魔法を扱っていたのだから。

「すまん。耳だけはいいのだ。それにここで魔法を使えば、感知できるようになって
いる」

王は杖に軽く触れる。どうやら杖がその感知を可能にしているようだ。

「それは聞き捨てなりませんね。王よ、さてはそこにいる者が手紙の差出人では？」

片眼鏡の男が睨むようにしてソラを見据える。

すると意外な人物が声をあげた。

「待てトルテス。あの方の子供だ、そんなことをするはずがないだろう」

クローリヒだ。

「それに王は言っていたはずだ。犯人はこの城にいる人間だと」

「分かっていますよ。言ってみただけです」

トルテスと呼ばれた片眼鏡の男は、忌々しそうにクローリヒを見る。

「よさんか」

二人の諍いを手で制すると、王は両者に顔を向けた。

「クローリヒ、それにトルテス。知らぬ者もいるのだ。まずは彼らに自分の名を明かすのが先だろう？」

「それもそうですね。ではまずは私から」

片眼鏡の男、トルテスが立ち上がる。

「私の名はトルテスⅡレニⅡステル。王に仕える側近の一人です。主に貿易と外交を担当しています」

トルテスは名乗ると、隣の女性に顔を向けた。

「そしてこちらに座っている女性は私の妻であり、私の補佐を務めている者です」

「シエーラと申します。まさかヴェルティナ様のご子息にお目にかかれるなんて、光栄ですわ」

トルテスの妻シエーラは軽く膝を曲げて会釈する。

「クローリヒ、あなたも」

「ああ、わかっておる」

続いてクローリヒが立ち上がり、口を開いた。

「おそらくガルディアン卿から名前は聞いているのだろうが、改めて名乗らせてもらおう。私はクローリヒⅡラニⅡストルツ。同じく王の側近であり、主に国内情勢とその管理を担当している」

クローリヒは隣の女性に視線を落として促す。すると女性は立ち上がり、シエーラと同じようにして会釈した。

「私はシャーロットと言います。クローリヒ様の補佐として働いています」

「ところでその娘。あなたも自分の名を名乗りなさい」

唯一名乗っていないトウネリに、トルテスが突然目を向けた。肩が一瞬びくりと動く。すぐに答えないうため、大臣の二人は怪しんでいる様子だ。

唇を噛み締めて、トウネリは黙り込む。

理由を知っているユースは一切咎める様子はない。双子の姉妹は何か言いたげにしているが、ユースに怒られるのが嫌なのか口を噤んでいる。

注目を受ける中ようやくやく意を決し、トウネリは震える声で答えた。

「トウネリです……トウネリⅡゾルⅡキアンロレス……」

「キアンロレス……どこかで聞いた事がある名ですね」

トルテスが片眼鏡に触れて、記憶を辿り始める。すると隣の女性が代わりに答えた。

「確かドウエセで魔物を生み出し、騒動を起こした者の名がそうではなかったかしら？」
「ああ、そうだ。そうでしたね。娘、あなたはその関係者ですか？」

問われて、トウネリは微かに肯く。

そこでようやくソラは、何故名乗ることを拒んでいたのか理解した。ここはヘルデイ口を統べる王がいる城だ。ともなれば、ヘルデイ口内の情報は全てここに集まると言ってもいい。つまり彼女の父親のことが、知れ渡っている可能性があるということだ。だが、

「王よ、どうやらここに相応しくない者がいるようです」

「ほう？ それはどういうことかね？」

「その娘は、六年前ドウエセで巻き起こった魔物騒動の首謀者の子供と思われ、犯罪者の娘が国の拠点たる城で、国の大事にあたるというのは笑止。早急にお引き取り願うべきかと」

何故ここまで言われなければならないのかわからなかった。トウネリのことをよく知っているが故の考えなのは分かっている。それでも謂れのない罵倒を受けているというのであれば我慢ならなかった。

「待ってください！ 彼女は——」

ソラが食い下がろうとした時、ユースが手で止めた。

「落ち着け」

「でも！」

「いいから落ち着け。判断するのは王だ」

言われてソラは王の方に顔を向けた。王は真つ直ぐにトウネリの方を見ている。

「トルテスよ。今は過去のことなどどうでもよいのだ」

「しかし王よ。そこにいる者が今回の件に関わっている可能性もあります」

「もしそうなのだとすれば、尚更目の届くところにいた方が良いでしょう？」

「ですが——」

「それに証拠はあるのか？」

「——っ！　　そ、それは……」

「無いであろう。であればその娘を排除する必要はない。彼女とて被害者なのだぞ」

被害者——その言葉にトウネリは反応を示し、顔を硬らせる。

（私は……被害者じゃない……！）

こんなことなら来なければ良かった。そんな思いがトウネリの中で募っていく。

「このことは今後一切話題に出すな。よいな？」

「は、はい……」

「すまぬな、トウネリよ」

「い、いえ……わたしは……」

トウネリはそれ以上何も言えなかった。

「しかし王よ、いくら内部の人間を疑っているとはいえ、ギルドの人間に姫護衛を任せるのは……」

「お言葉ですがトルテス卿」

不満げに言い淀むトルテスに対し、ユースは立ち上がり異議を唱える。

「何故そこまで我々の介入を拒むのでしょうか？ 何か不都合なことでも？」

「いや、そういうわけでは……」

「そういう風にしてると怪しいわよねえ？ お姉様」

「うん、怪しい……怪しい匂いが漂ってる……拷問したら進展があるかも？」

「あら！ 拷問、それ私大好き！」

双子があまりに不敵な笑みを浮かべたがために、トルテスの顔が青ざめる。それだけ二人の笑みには威圧感が込められていた。

二人を視線で咎めると、ユースは言葉を続ける。

「それともあなたは我々を送りつけたヴェラドローネを信用しないということだろうか？」

内心では「まああいつは信用できない人柄だけだな」と付け足しているのは、言うま

でもない。

トルテスは返す言葉が思い当たらず、口を閉ざす。隣に座っている夫人もどこか呆れた様子でため息を吐いた。

「どうやら話をついたようだな。ではようやく本題に——」

ヘルデイロ王がそう話を切り出そうとした時だった。

姫様、なりません。そう叫ぶメルヒの声が廊下の方から響き渡ってきた。

謁見の間入り口の扉が勢いよく開けられ、一人の少女が足早に入ってくる。

その姿を見て、王は項垂れる。

「セラ……どうしたのだ？」

「どうしたのだじゃありませんお父様！ 一体城で何が起こっているのですか！」

少女の背後にはメルヒの姿もある。彼女は申し訳なさそうに、王に視線を送っている。

ソラはその少女の姿に思わず見惚れていた。

服装もそうだが、まるで月光のような白銀の髪が、彼女の持つあらゆる美しさを際立たせている。

「それにこの方たちは一体……？」

城で見かけることのない姿に少女は眉を擡める。

「今日からこの者たちにお前の護衛を任せるつもりだ」

「護衛？ やはり何かあつたのですね？ 教えてください、何があつたのですか？」

王と側近の大臣たちは顔を見合わせる。明かすべきか明かさないでおくべきか、未だに決め兼ねている様子だ。

その姿がどう映つたのか、少女は不満を露わにする。齒を噛み締めて、堪えきれない怒りと悲しみに体を震わせた。

「もういいです。やはりお父様は私には何も話してくださらないのでですね？ お姉様のことも、今回のことも」

「姫様。王はあなたのことを思つて——」

「隠し事をされている私の気持ちも考えないで、なにが思つていますか！」

憤りの声を上げ、少女は踵を返して部屋を出て行つた。

「今のが——」

「うむ、わしの娘セレネーラだ」

ソラの疑問に王が答える。

セレネーラが去つていくのを見て、ユースは肩を竦める。どうやら別の意味で悠長に話している場合ではないらしい。

「王よ。詳しい話は私が聞きますので、この二人には先に姫の側に行ってもらいます。よろしいですか？」

「うむ、そうしてくれるとこちらも助かる」

「そういうわけだ。お前ら頼めるか？」

ユースの問いかけに、ソラは即座に肯く。

「わかった。あとでちゃんと教えてね？」

「ああ、わかつてる。トウネリも頼んだ」

ユースが声を掛けるが、トウネリからの返事がない。どこか上の空といった様子で、呆然と立ち尽くしている。

ソラはしばしトウネリの顔を見つめた。何を考えているのかはつきりとは分からな
いが、おおよその見当がつく。それはきつとユースもだろう。

トルテスの方を一瞥してから、ソラはトウネリの手首を掴んだ。

触れられた事で我に帰り、トウネリの肩が微かに跳ねる。動揺から心臓が高鳴つてい
た。

「行こうトウネリ」

「行くって……でもわたしは……」

「いいから。行こう？」

ソラは微笑みかける。彼女に今掛けられる言葉が思いつかない。それでもこれくらいは、と。

「それじゃ、行ってくるねユース」

ユースの返事を待たずに、ソラはトウネリの手を引いて走り出す。その後をトウネリは、狼狽えながらもついて行く。

そんな二人が部屋から出ていくのを、ラミナは不満そうに鼻を鳴らして、

「人がいいんだか悪いんだか、ほんと分からないわねあいつ」と呟いた。

第一節 月明かりの少女 3

城の中庭に設けられた噴水の前で、セレネーラは一人立ち尽くしていた。

水面を見つめて、唇を強く噛み締める。

何故。彼女は何度も問う。何故父は何も話してくれないのかと。父親だけではない。側近の大臣たちも、使用人のメルヒでさえ何も明かしてはくれない。

今回に限った話ではない。重要なことはいつも隠されてきた。一番慕っていた姉の行方も、どこかで生きているという母親の行方も。

まるで一人だけ別の世界に生きているのではないか。そんな孤独が彼女の中で日々募っていた。

ふと誰かが背後に立ったのを感じ、セレネーラは振り向く。

「姫様……」

使用人として仕えているメルヒの姿があった。

「あなたも話して下さいませんか、メルヒ」

メルヒは目を伏せる。

「申し訳ございません。不用意に不安を煽つてはならないと、王から仰せ使つてますので」

「そうですか……」

却つて不安を煽つているというのに。そうセレネーラは思わずにはいられなかった。

セレネーラはまた噴水の水を見つめる。澄み渡るほどに綺麗な水が、彼女の物憂げな表情を映す。

「これからしばらく姫様のお側を離れることになります」

「お父様からそう言われたのですね？」

「はい。私がないだ、代わりの者が姫様の身の回りを守つてくれます」

「代わりの者？」

「どうやら来たようですね」

セレネーラは振り返った。

「あなたは先ほど謁見の間にいた」

ソラとトウネリの姿を見て、セレネーラは眩く。

「この二人がしばらく姫様の警護にあたります。では私はこれで」

「メルヒ……」

「はい、どうしましたか？」

メルヒはセレネーラの発言を静かに待つ。

言いたいことがある。だが果たして口にして良いものか。セレネーラはしばらく悩んだ末、

「いえ、なんでもありません。引き止めてごめんなさい」

「何かあれば呼んでください。そうすれば駆けつけますので」

「ありがとうございます」

メルヒは一度深く頭を下げると、踵を返してどこかへと去って行った。

残った三人は無言で顔を見合わせる。会話がない。三人ともどう話を切り出したものかと頭を悩ませていた。

「えと、先ほどはすみませんでした」

最初に口を開いたのはセレネーラだった。謁見の間で取り乱したことを気にしていた彼女は、申し訳なさそうに頭を下げる。

「別に気にしないでください」

「いえそういうわけには。それに私たちの問題にあなた達を巻き込んでしまつて……」

「ボク達は自分の意志で来たんです。巻き込まれたなんて思つてないですよ」

ソラは微笑む。

「それにセレネーラ姫が悪いわけではないですから」

「あなたは優しいのですね」

セレネーラも思わず笑みを溢す。

「そういえばあなた、お名前はなんと言うのです」

「ソラって言います」

「ソラ……素敵な名前ですね」

「姫様のお名前も素敵ですよ」

早くも打ち解けた様子の二人を見て、トウネリは俯く。

ここにいていいのだろうか。ソラと二人だけならばいい。だが先の叱責を受けて己の立場を痛感してしまった。自分は犯罪者の娘である、と。

そんな自分が王族を守るといふ、重責のある任務について良いものか。

心を蝕む悩みに、トウネリは唇を噛み締めた。

「あの……」

「は、はいー！」

不意に話しかけられ、トウネリは裏返った声で返事をする。前を向くと、眼前にセレネーラの顔があった。

「あなたのお名前、教えていただけますか？」

トウネリは丸くした目で、ソラの方を見る。対しソラは頷いた。

答えるべきか、それとも答えずにこの場を去るべきか。トウネリは一瞬迷いを見せる。

「私は……」

だが王族に問われ、答えないわけにもいかなかった。

「私はトウネリ……です」

「トウネリさん。見たところあなたは何か悩んでいるみたいですね。良かったら話してくださいませんか？」

「あの……どうしてですか？」

内容次第ではこの場から排除するということだろうか。そう邪推しトウネリは萎縮する。

「私はこの国を守る定めを受けた王家の一人です。民の悩みを聞いて解決するのも使命かと。それに……」

セレネーラが突然顔を背けたため、トウネリは小首を傾げた。

「それにその……年が近い人と話したことがないので、お話ししてみたいなと思って」

「えっ？」

思いもよらぬ発言に、トウネリは呆氣に取られた。

セレネーラの顔は恥ずかしそうに赤く染まっている。その反面、体が微かに震えていることに気がついた。

トウネリは思い出す。ルージュヴェリアがなんと行って自分とソラを選んでいたのかを。

“——お二人といれば、多少は不安が和らぐかと思つて”

不安なのだ。自分が置かれている状況が分からず。どう接すればいいのかも分からず。それでも気丈に振る舞い、他者にはその不安を見せまいとしている。

(そっか。この人は……似ているんだ……)

トウネリはまたソラに視線を向ける。

似ていた。弱さを見せようとはせず、誰かに寄り添おうとするその姿が。

トウネリは拳を握る。

自分は弱い。過去のことを指摘されれば迷いが生じるほどに、脆い心を持っている。それでも叶うことならば、今は彼女の支えになつてあげたい。そんな思いが、トウネリの心に募っていく。

「あの……ダメ、でしようか？」

不安げな表情を浮かべるセレネーラ。対しトウネリは被りを振つて答えた。

「いえ、私もその……姫様と話がしてみたいです」

答えを聞き、セレネーラの顔が明るくなる。

「良かったら私の部屋でお話しませんか？」

「いいですよ。ソラもいいでしょ？」

「うん。大丈夫」

ソラが頷いたのを見て、セレネーラは嬉々とした表情を浮かべた。その様子から、彼女が普段どれだけ肩身の狭い思いをしているのかが分かる。

「では案内します。すぐに行きましょう！」

それが例え気を紛らわせるものとしても、トウネリは少しでも不安が和らぐならばと思うのであった。



謁見の間に残ったユースは、腕を組み考えを巡らせていた。

「王よ。ひとつお伺いしても良いでしょうか？」

「なにかね、ガルディアン卿」

相も変わらず気に入らない呼び方をされ、ユースは眉を微かに動かす。

「実際のどのようなものが置かれていたのか拝見しても？ 連れの人にも見せたいのですか」

「ああ、それもそうだな」

ヘルデイロ王はクローリヒに視線を向ける。それを受けてクローリヒは立ち上がり、手紙の入った封筒をユースに渡した。

手紙を開き、ユースは内容に目を通す。

「愚かなヘルデイロの王よ。近々、お前の娘セレネーラの命を頂戴する。全てはあの方に捧げるために」

以上が手紙に書かれていた内容だ。

短いながらも、確かに姫の命を狙う内容が書かれている。この予告が本当ならば、今狙われているのはセレネーラ姫と言える。

ユースは手紙を眺めながら、どうにも腑に落ちないと考えていた。

確かにセレネーラは第二王女であり、いずれはこの国を担っていく一柱となるだろう。ヘルデイロ王も歳を重ねており、いつかは世代を変えることになるはずだ。

だがそれはまだ先の話だ。国家転覆を狙うのであれば、まずは王暗殺を考えるのではないか。

そうでなくともこのような予告状を出すのは、ここへ来る前にソラが指摘していた通

り、警戒を促すだけになる。

「ガルディアン卿よ。あなたはどうか考えますか？」

トルテスが問いかける。彼らも同じ考えなのは間違いないようだ。

「はつきり言つて、不審だと思えますね。姫の暗殺を目論むのであれば、このような予告状を出す利点がない」

「やはりそう思いますか。王もそうお考えなのですよ。この予告状を送りつけたものは、別の目的があると」

「何か心当たりでも？」

「おそらくは、この城に封印されている秘宝が目的なのだろう」

「秘宝というと……あれですか」

ユースはブリアンテス城に封印されているという秘宝について思い出した。

その昔、ある暴虐な王がヘルデイロを総べていたという。

彼は人の意見には一切耳を傾けず、全ては己の支配下に置かなければ気が済まなかったそうだ。

そんな彼が国の民を支配するために生み出した宝玉には、人の心を支配する力があるという。その力はブリアンテスの街だけに留まらず、国内全域に行き渡るとさえ言われている。

その事を疎んだ。『原初の八賢者』の一人イヴェルテラがこれを退け、宝玉を城の地下に封印したというのが伝承のあらましだ。

「彼の秘宝は確かにこの城の地下奥深くに封印されている」

「なるほど。それを狙った賊の仕業だ」と

「しかしあの秘宝に関しては一部例外を除き、城内部の人間しか知らないはずなのです」
「そこで王は内部の人間の仕業だと考えているわけだ」

確かにそう考えれば合点が行く話ではあった。

何者かが国をあるいは世界を支配せんとして宝玉を狙っていると考えれば、警備の目を姫に集中させるために予告状を送り込むということもあり得る話だ。

（だがあの宝玉は確か、封印されたのではなく破壊されたと聞いたが……）

自分の記憶とは相違がある。これは確かめなければならない。

ユースは腕を下ろすと、ヘルデイロ王に進言した。

「差し支えなければ、その宝玉を見せていただきたいのですが」

ユースの発言に、クローリヒとトルテスは顔を見合わせる。

「幾らガルディアン卿と言えど、宝玉の在り処を見せるわけにはいかん」

「そうです。予告を送った何者かが我々の動向を監視している可能性がありますから

ね」

二人の意見は至極真つ当な答えだった。しかし、

「いや、良いだろう。ガルディアン卿であれば、万が一誰かに見られていたとしても気づけるだろう」

ヘルデイロ王は気兼ねる様子もなくそう言った。

「しかし王！」

トルテスが異を唱えようとするが、ヘルデイロ王はそれを手で制する。

「トルテス。儂は彼が来ると予期して手紙をヴェラドローネに送ったのだ。何故だか分かるか？」

「それは……まさか王よ」

「ああ、儂は彼に宝玉の警備を任せたいと考えている」

クローリヒとトルテスは驚きの表情を見せる。

「た、確かに彼ほどであれば宝玉を任せるのに十分すぎるほどではありませんが……」

「そうであろう。もし賊がああな宝玉を狙っているというのであれば、これほど心強い味方はいないはずだ」

ユースは眉を寄せる。どこか引つかかる物言いだ。まるで狙われているものを確信しているかのような。

「ガルディアン卿……頼めるかね？」

確かにもしも伝承にあるような宝玉があり狙われているのだとすれば、姫暗殺と並ぶ或いはそれ以上の一大事だ。

現状どちらに転ぶのか確証がない。であれば取れる手段はひとつしかない。

「おい、ラミナ。お前はあの二人の方を頼めるか」

「はあ？　なんで私があの人のお守りをしなきゃいけないのよ」

「お前の方が戦闘に特化しているだろうが。それに万が一のことがあつた時自由に動くやつが欲しい」

指名されたラミナはあからさまな仏頂面で苛立ちを示す。

それを見てユースは呆れたようにため息を吐くと、アルマの方に視線を移した。

「じゃあアルマ。頼めるか」

「了解。じゃあユースの方はラミナに——」

「だあー！　もう分かったわよ！　お姉様にあんなやつらのお守りさせるくらいなら私がやるわよー！」

「最初からそう言つてればいいんだよ」

「相変わらず捻くれ者のラミナ……お姉ちゃんは少し悲しい……」

「ひん曲がつた性格してるお姉様よりはマシよ！」

ふん、と鼻を鳴らすとラミナは部屋を出て行った。

「あの子……なんで今日はあんなに不機嫌なんだろう?」

「さあな。それより王、宝玉を見せてもらえますか?」

「ああ、こちらに来るがいい」

ヘルデイロ王は立ち上がると、杖の先端で玉座に触れた。すると突然何か動く物音とともに、玉座の背後にある壁が扉のように開いていく。

(こんな仕掛けが城にあったとはな……)

仕掛けの動きに感心するユース。この様子であれば確かに宝玉はあってもおかしくはないのかもしれない。

扉が完全に開き切ると、向こうには下へと続く螺旋階段があった。階段は暗く、また道幅も狭い。

ヘルデイロ王は杖を階段部屋に翳す。杖の宝石が赤く発光すると、壁に取り付けられた蠟燭が火を灯し、階下へと続く道を照らした。

「この先に宝玉が封印されておる」

「こんなものがあつたなんて……驚き……」

無表情のままアルマは静かな感嘆を漏らす。本当に驚いているのかは怪しいところだが。

「では行こうではないか」

「アルマ。お前は一応入り口を見張っててくれ」

「りよーかーい」

ユースは警戒心を高めて、ヘルデイロ王とともに階段を降りていく。側近の者たちはいない。彼らは元より入るつもりが無い様子だった。

湿気った空気を肌で感じながら階段を下ること僅か。階下の先に青白い光が差し込んでいるのが見えた。

光は淡く、まるで人の心を惑わせるような輝きを放っている。

その正体を見て、ユースは思わず目を見開いた。

「これはまさか——」

月だ。正確には月を模したような宝玉が、石で象られた台座に納められていた。

「かつてこの宝玉を作った王は、月明かりには人を惑わせる力があると考えたという。その考えから生み出されたのがこの宝玉……月のような光を放ち、その光によつて人意のままに操る宝玉。国だけでなく世界まで混沌に陥れようとした宝玉」

王は静かに、紡ぐようにしてその名を告げる。

宝玉にはある人物と同じ名前が与えられていた。ヘルデイロに住む者ならば誰もが知る名でありながら、城に仕える者でなければ目にすることがない人物の名を。

「その名は——セレネーラ」

第一節 月明かりの少女 4

セレネーラの部屋に案内され、トゥネリは口を開けて中を見回していた。

王族の部屋というだけあって、その作りはおよそ一般市民が手にできる部屋とは大いに違っていた。

まずは広さだ。人一人が暮らすには有り余る広さの部屋がセレネーラには与えられていた。

壁際に寄せられた、三人は一緒に眠れるほどの大きな寝台。木製の衣装棚と衣装合わせのための鏡。客人をもてなす為のテーブルが一つと四つの椅子等、一部屋に多くの家具が置かれている。そのどれもが高級感漂うものばかりだ。

「なんていうか、流石にこんな自室を見せられると圧倒されるわね……」

「あ、うん……そうだね……」

一方ソラはというと、そこまで驚いてはいなかった。というのも、クリンベルの屋敷にある部屋も似た構造をしていたからだ。

そのため今更ながらにソラは、クリンベルが一体何者なのだろうかと一瞬疑問を抱いていた。

「気楽にくつろいで下さって大丈夫ですよ」

椅子に腰掛けて、セレネーラは微笑みかける。

「は、はい」

さて、いざこうして来てみたものはいいものの実際どう接したのか。ソラは少し頭を悩ませた。

相手は王族だ。つまり身分が違う。ともなれば、失礼がないように接さなければならぬ。

「いつもでしたらメルヒに頼んで何か出してもらおうのですが」

「ああ、えっと、気にしないでください」

「ああでもせっかくの客人なので、私がもてなしをするべきなのでしょうか？」

セレネーラは相当気を使っていた。同年代と話すことに不慣れな故に緊張もしている様子だ。実際何を話せばいいのか分からずに混乱していた。

そんな彼女の様子を見て、ソラは思わずくすりと笑う。

「ど、どうしましたか？ 急に笑ったりして」

何か失礼なことでもしたのだろうか。セレネーラは不安げな表情を浮かべる。

「いえ。その、姫様も氣を楽にしてもらつていいんですよ?」

ソラの指摘を受け、自分がいかに落ち着きのない行動をしているのかを自覚し、セレネーラは紅潮した。

一時の静寂が部屋を包む。

「その……よろしければ姫様ではなく、名前で呼んでいただけませんか?」

募る思いをセレネーラは口にする。

「それによろしければ、私とその……普通に接していただけませんか?」

王族の名を気安く呼ぶのは流石に恐れ多い。ソラは狼狽した表情を浮かべたまま顔を逸らした。

「ダメ……ですか?」

セレネーラは氣を落とす。

そう返答は分かっていた。それでも多少の期待はしていたのだ。はじめての友人として接することができるのではないかと。

「私、できればお二人とはお友達になりたいなと思つていのですけれど……」

突拍子もない発言だと分かっている。叶わぬ夢だと分かっている。これまで生きてきて、セレネーラは痛いほど実感していた。

自分は王族だ。目の前にいる二人とは違う。生まれも育ちも、世間からの扱いも違

う。それでも一目見たときに思ってしまったのだ。この人たちと友人になりたいと。

ソラはトウネリの顔を伺う。するとトウネリは微かに頷いた。

(やつぱり、ダメですよね……)

セレネーラが諦めかけたその時、彼女の手をソラとトウネリは優しく包んだ。

「ボクたちでよければ喜んで」

セレネーラは期待に胸を膨らませた。片隅に実はあげて落とすつもりなのではないかなどと疑いながら、瞳を輝かせる。

「よろしいの……ですか？」

「はい」

問いかけに二人が同時に返事をする。

「本当に？」

「どうしてそんなに疑ってるんですか？」

「わたしたちは本心で言っています」

「でしたらその、他人行儀な話し方はやめてもらえますか？」

二人は顔を見合わせると頷いた。

「うん、わかった」

「じゃあ私のこともトウネリでいいわよ」

「でしたら、私のことはセラって呼んでください。お父様はいつもそう呼んでくださいます」

「わかったわ。よろしくね、セラ」

「ボクもソラでいいよ」

セレネーラは嬉しさのあまり顔を綻ばせる。生まれて初めてこんな会話を交わした。これまで出会ったどんな人間も、どこか余所余所しい態度で接して来ていた。あの父親でさえも、普段は他人のように会話を交わしていない。

そんな彼女に今、生まれて初めて「友達」が出来たのだ。喜ばないはずがなかった。

「ソラ……トウネリ……ありがとう。私は今すごく嬉しいです」

感極まり、涙が溢れそうになる。抱えていた不安が微かに和らいでいた。



「まったく、なんなのよ!」

城の外壁を囲うようにして設けられた庭。その庭で一人ラミナは愚痴を吐いた。

ユースの指示を受けてソラ達と合流しようとしたはいいものの、彼らの姿をすでに見失っていたラミナは合流などできず城の中をさ迷うこととなってしまった。

城の者に聞こうにも彼女のプライドが許さず。かといってユースのところへ戻ることでもできず。ひたすらに歩くこと僅か、結局あてもなくこうして城の庭で膝を抱えているのだ。

「大体なんで私があいつらと一緒にいなきやなんなのよ」

ラミナはひたすらに愚痴を漏らす。あらぬ毒さえ吐きかねないほどに、今の彼女は不機嫌だった。

そもそもラミナはあの二人のことをあまり好いていない。トウネリはともかく、ソラに対しては否定的な思いを抱いている。ともなれば、彼らに同行することに対して億劫になるのは仕方のないことではあるのかもしれない。

地面を見つめて、庭の草を弄るラミナ。頬を膨らませて、早くユースのところに戻りたいと嘆息する。

そんなラミナの耳に、ふと鳥が羽ばたく音が聞こえてきた。

ラミナは思わず立ち上がり、周囲を見渡す。

「あれは……？」

すると視界にメルヒの姿が映った。離れた位置にいる彼女の腕には、一羽の鳥が止まっている。

ラミナはしばらくメルヒの動向を観察した。怪しい。直感的にそう考えて。

メルヒは腕に止まっている鳥の足に何かを括りつけている。目を凝らして見てみると、どうやら何かの紙のようだ。

(へえ……面白そうじゃない。ちよつと鎌をかけてみるか)

ラミナは口元に笑みを浮かべると、メルヒに近づいた。

「あら？　こんなところでお姫様の使用人が何をしているのかしら？」

ラミナが話しかけたのと同時に、鳥が天に舞い上がっていく。そのまま鳥はまっすぐ町のどこかへと向かっていった。

「あなたはガルディアン卿の……」

「誰かに手紙を送ったのかしら？　こんな時にちよつと怪しいわよねえ？」

ラミナの指摘に、メルヒの肩が微かに動く。

「私を疑っているのですか？」

「そりや、容疑者はこの城にいる人間全員なんだから。当然じゃない？」

「残念ですが、私はただ王の命を受けてヴェラドローネ様に手紙を送っただけですよ」

メルヒの答えに、今度はラミナが眉を擡める。

(あの女に……？　けど今あの女に手紙を送るようなことあるのかしら……？)

もう少し探ってみるか、とラミナは口を開く。

「へえー、王様がねえ？　それは本当かしら？」

「確かめればわかることでいちいち嘘など吐きませんよ。そういうあなたこそ、ここで何を？」

「別に？ ただの散歩よ」

「なるほど、行く当てがなくて途方に暮れていたと」

「はあ!?! 誰がいつそんなこと言ったのよ!」

メルヒの発言にラミナは反発を示す。と同時にラミナは内心で「しまった」と叫ぶ。

「その反応……概ねソラ様とトウネリ様と合流しようとしたけど居場所が分からず、右往左往しているうちに嫌になって不貞腐れていたといったところでしょうか？」

まるで見透かしたかのように言い当てるメルヒに対し、ラミナは齒軋りを鳴らす。やはりこの女いけ好かないやつだと。

「あんたほんと気に入らないやつね」

「それは奇遇ですね。私も同じことを思っていますから」

二人は睨み合う。まさに火花を散らす寸前といったところだ。

が、メルヒは先に踵を返し、顔を逸らした。

「こんなことしてる場合ではありませんでしたね。ちなみにあのお二人は姫さまの部屋にいますよ。案内しましょうか？」

メルヒはくすりと笑う。

「誰があんたの案内なんか受けるかっての！」

「そうですか。まあ好きになさってください。私には他にも仕事がありますので」
メルヒはそう言つて足早に去つていった。

ラミナは軽い舌打ちをして地面を見つめる。一体なんなのだと。不機嫌さが一層増している。今すぐにも口から火を吹いてしまいそうなほどに。

こんな惨めな姿を晒していることが姉に知られれば、どんな小言を言われるか。想像しただけでもさらに腹立たしい。

ここはひとつ落ち着こうと深呼吸しようとしたとき、背後で気配を感じた。

ラミナは慌てて振り返る。

「なに？ わざわざ戻ってきてなにか用かしら？」

振り返つた先に、去つていったはずのメルヒの姿があつた。

訝しげな表情を浮かべて、ラミナはメルヒの顔を睨む。今にも殴りかかりそうな剣呑な目をしている。

対しメルヒは涼しげな表情を浮かべたまま、どこかへと指を差して、

「あの辺」

と眩くように言つた。

「は？」

ラミナは首を傾げる。

「城のあの辺に姫様の部屋があります。あとはご自分でお探しになってください」
メルヒはそう言い残すと、今度こそ姿を消す。

「なんなのよあいつ……」

ラミナはメルヒのいた場所を見つめ、虚空に呟いた。

第一節 月明かりの少女 5

「お二人にそんなことが……」

セレネーラがそう小さく呟く。

ソラとトウネリの二人は、セレネーラから何故ギルドに入ったのかを問われ全てを話していた。過去に起こった出来事も、その時に感じた思いもすべて。

それを聞いてセレネーラは、申し訳なきように俯いている。唇を固く結び、後悔に苛まれる。

「すいません……辛いことを思い出させてしまった」

知りたい気持ちが進んで、踏み込んでほしくないものにまで踏み込んでしまった。そんな思いからセレネーラは謝罪の言葉を口にする。

するとソラは微かに笑って、頭を横に振った。

「大丈夫。確かに辛い過去だけど、ボクたちはこうして前を向いているからさ。ね？
トウネリ」

ソラの問いかけに一瞬躊躇いつつも、トウネリは小さく頷く。

「私もこいつも、あの時のようなことは嫌だから……だからギルドに入ったの」

「そう……ですか……」

二人がこうして大丈夫だと言ってくれても、セレネーラの中ではまだ整理がつかない。自分にはない過去。自分にはない苦しみ。それを知って自分は彼らに何ができるのだろうか。セレネーラは考える。

だが誰かと親しく接する機会がなかった故の弊害か、考えても答えが見つからない。

「私もその事件については話を聞かされました」

気づけばセレネーラは、自分の思いのままに話し始めていた。

「ドウエセの街で起こった魔物事件。幸い犠牲者は少なく済んだものの、街には大きな爪痕が残ったと」

「うん。でも今は街も復興して、みんなまた笑って生活しているよ」

「ですがお二人にはまだ心の傷が……」

思ひ詰めた表情のセレネーラを見て、ソラは思った。ああ、この子は優しい子なんだな——と。

「トウネリさん、ごめんなさい。きつと誰かがあなたに心無いことを言ったのですよね？ だから先ほど、暗い表情をしていたのでしょうか？」

否定することもできず、トウネリは目を伏せる。それが相手への返答となると分かっていても、そうすることしかできなかつた。

「あなたも同じ被害者なのに……」

「……違う」

「えっ?」

反射的にトウネリは否定を口にしていった。セレネーラが首をひねって顔を伺っている。

しまった。トウネリは思わず毒づく。別に今口にするようなことでも、ましてやソラの前で言うことではない。

「いや、ごめん。なんでもないわ」

トウネリは謝りつつも、ぼつが悪くなり顔を反らす。

「トウネリさん、もしかしてあなた——」

何かを察し、セレネーラが口を開こうとした時だった。

「姫様、少しいいですか?」

軽いノックとともに、メルヒの声が扉越しに聞こえて来た。

「メルヒ? どうしましたか?」

セレネーラの返答を聞き、メルヒは中に入って来た。

「そろそろお食事の時間ですのでお持ちしました。そちらのお二人の分もありますよ」

メルヒは軽く微笑むと、持っていた皿をテーブルの上に置いた。

三人は皿の上を覗き込む。皿にはパンに様々な具材を挟んだサンドイッチが乗っている。

「これ、メルヒさんが？」

「ええ。姫様の食事は私に任されていますので」

王族のほとんどが専属の料理人を雇っているという話を耳にしたことがあり、ソラはなるほどと頷く。どうやらこの城も例外ではないらしい。

「ひとつ聞きたいんですけど、王の食事は誰が作っているんですか？」

「王、並びにその側近の方の食事は、ここに長年勤めている料理長が担当しています。兵士たちの場合は人数が多いですから、食堂専属の料理人たちが作っています」

はて、とソラは小首を傾げる。その話の通りであれば、セレネーラの食事だけ別個に作られていることになる。王族といえど家族同士で食事をすることはあると思うのだが。

「それでは私はこれで。お二人とも、姫様をよろしく願います」

一礼するとメルヒは部屋を出て行った。

三人は顔を見合わせる。

「じゃあ食べよっか」

「そうですね」

「私これ貰い」

我先にとトウネリは何か肉の挟まったサンドイッチを手に取り、一口かじる。

「ん、なかなか美味しいわねこれ」

さらに一口、また一口と頬張りひとつ平らげると、一息吐く。

その様子を見てセレネーラは、

「メルヒが作る料理はとっても美味しいですから」

と言つて笑顔を咲かせた。

ソラも続いて色とりどりの野菜が挟まったサンドイッチを手に取り、一口かじつて咀嚼する。新鮮な野菜に加えて、特製のドレッシングがいい味を出している。あまりもの美味しさに、次の一口で丸々放り込んだ。

「んんふ、んんおふ」

「あんたねえ、行儀悪いわよ？　口の中いっぱいにして喋るとか」

「んぐ!?!」

トウネリに指摘され、ソラは慌てて飲み込む。が、喉を詰まらせてしまい、顔を真っ赤にして胸のあたりを叩き始めた。

「ああもう。ごめんセラ、何か飲み物」

「ああ、はい！ これどうぞ！」

サンドイッチの側に置かれていた水をグラスに注ぎ、セレネーラは慌ててソラにグラスを渡す。

ソラはグラスを受け取ると、すぐさまサンドイッチを水で流し込んだ。

「あ……危なかつた……」

苦笑混じりにため息を吐くソラ。

「だから言わんこつちやない」

「いやあれはトウネリが急にあんなこと言うから」

「でも事実でしょ？」

「うっ……それはその。ごめんなさい」

まるで母と子、あるいは姉と弟であるかのようなやり取りを交わすソラとトウネリ。

すると二人のやり取りを眺めていたセレネーラが、思わず吹き出すようにくすくすと笑い始めた。

急に笑い出したため、二人は同時に小首を傾げる。

「ああ、ごめんなさい。お二人が面白かったのでつい」

謝罪しながらも笑うことを止められないセレネーラ。こんなに笑うのはいつ以来だ

ろうか。そう内心で呟く。

顔を見合わせるソラとトウネリ。しばらくして、二人も我慢できずに笑い出した。

三人の笑い声が廊下へと響き渡る。扉の側には、壁に背中を預けて立つメルヒの姿があった。

メルヒは三人の笑い声を聞いて静かに微笑む。その優しげな表情にはどことなく、子を思う母親の姿のようにも見える。

「良かったわね……セラ」

メルヒは微かな声でそう呟くと、部屋から離れていくのだった。



昼食を終えて、三人は一息吐く。

メルヒが作ったサンドイッチはどれも美味しく、ソラとトウネリは唸りながら食事を進めていた。

その間セレネーラは食べながら、二人の様子を笑いながら眺めていた。誰かと楽しい食事をするという初めての経験に胸を躍らせながら。

「それでね——」

話を続けようとソラが口を開いた時、部屋の扉が三回ノックされた。

三人は扉に注目する。またメルヒが来たのだろうか。

「ソラ。悪いが少しいいか?」

しかし扉越しに聞こえてきたのはユースの声だった。

「ユース? ごめん、ちよつと出てくる」

ソラは首を傾げて部屋を出る。

部屋を出た先には、ユースだけでなく無表情のアルマと膨れっ面のラミナの姿もあった。

「悪いな」

「あの……どうして彼女は不機嫌そうな顔なの?」

ユースの話よりも先に気になってしまったため、問いかけてみる。

「え? ああ、これは——」

「あなたたちに合流するよう指示したのに……ラミナだったら、道に迷ってたの。こんな不出来な妹だとは思わなかった」

「違うわよ! 私はあのメルヒっていう女が指した方に行っただけで!」

「そしたら目的地とはまったくの逆方向だったの。いつも一緒に行動していたから気づ

かなかつたけど……この子がこんなにも方向音痴だったなんて……お姉ちゃん悲しい」
「だー！ だから私はあの女の言う通りにしただけって言ってるでしょうが！」

涙を拭う真似をするアルマ。どうやら彼女は相手が妹であろうと容赦がないらしい。その証拠にラミナは顔を真っ赤にして抗議をしている。

彼女たちのやり取りに苦笑しつつも、ユースの方に向き直る。見たところ深刻そうな顔をしていることから、何か大事な話があるのは間違いない。

「それで話って？」

ソラに問われて、ユースは部屋の扉を見る。

「ここじゃ話ができない。場所を変えるぞ」

おそらく姫暗殺に関する情報をなにか得たのだろう。そう理解しソラは小さく頷く。頷きを見て、ユースは双子のほうに目を向けた。

「お前らはここを頼む」

「了解。ほらラミナ、中に入るよー」

「はあ？ 別に中に入らなくていいでしょ。入りたければ姉様一人で入れば？」

「残念。ラミナに拒否する権利は……ないよ？」

「え……？」

戸惑うラミナと珍しく満面の笑顔を浮かべているアルマを置いて、ソラとユースは場

所を移した。

人目のないところに移動した二人。

「なにかわかったの?」

ソラの問いにユースは神妙な面持ちで「ああ」と一言置き、自分が見聞きしたものを話し始めた。

数刻前のこと。謁見の間から地下へと延びる階段を下った先に、月を模したような宝玉が置かれていた。

「セレネーラ……?」

宝玉の名を聞き、ユースは自分の記憶を辿る。

そのような名は耳にしたことがない。確かにかつてこの国には人を意のままに操る宝玉があったという伝承は耳にしたことがある。だが宝玉には名が与えられていなかったはずだ。

ユースの様子を見て、王はさらに話を進めた。

「この宝玉は封印されて以降、王家の血筋の中で鍵を握る者の名が与えられるようになっていた。以前はわしの名を冠していた。その前はわしの父の名を、そして今は娘の名を持っている」

「まさか……」

「鍵——つまり、この結界を解くための魔法が王家の者に引き継がれる。この魔法は対象に乗り移る魔法でな。王家の血筋を持つ中で一番若い人間に付与されるのだ」

その内容の魔法はユースも知識として持っている。

封印魔法——その中でも最も特殊な形式の魔法に、代償として一人の人間を鍵とする。ものがあるといふ。鍵となる人物が命を落とさない限り封印を解くことができないう上、鍵となった人物はどんな病にも掛からなくなるため、最も強固な封印魔法とされている。

だが病に掛からずとも人間の命は有限。寿命を迎えれば自然と死に至る生き物だ。そうなれば封印は簡単に解かれてしまう。そこで付与されたもう一つの特性が、鍵となった人間の血筋を持つ者を対象に選び新たな鍵とする。というものだ。

「どこから情報を聞き入れたのかは知らないが、おそらく手紙を置いた者はセラが鍵だと知っていて命を狙っているのだろう」

賊の真の狙いがここに置かれた宝玉であり、そのために必要な過程の一つだと考えれば、姫の命が狙われるのも道理と言える。

だがなおさら理解ができない。それが目的なのだとすれば、予告状を置くことになんの意味があるというのか。

ユースの話の聞き、ソラも同様のことを考えていた。

「ソラ、お前はどう思う?」

「やっぱりおかしいよ。もし本当にその宝玉が狙いなら、城内を警戒させることは不都合にしかないよ」

「お前も同じ意見か」

ユースは腕を組む。犯人の動機がいまいち掴めない。

「ひとまず俺は王の考えの通りに宝玉を守ろうと思う。お前には姫の命を任せてもいいか?」

「わかった。大丈夫、セラのことは任せて」

「セラ?」

「あ、ええと……」

ソラは思わず顔を逸らす。王族の人間に対しあだ名で呼ぶことはあまり好ましくない行為だ。

しかしユースは微かに笑った。

「どうやらルージュヴェリアの迷惑通り、多少は仲良くなったみたいだな」

「あ、うん。よくない……よね?」

「いや。それなら尚のこと任せられる。お前は守ると決めたら力を発揮するやつだから」

思いもよらぬ信頼にソラは口を開けて呆然とする。

しばしユースの目を見つめてから、ソラは意を決したように表情を硬くするとはつきりと言った。

「セラのことは絶対に守るよ。なにがなんでも」

「ああ。だが気をつけろ。相手の目的も得体もわからない状態だから」

「わかっている。すでにセラの部屋には予防線を張つてあるから」

「そうか。あと一応これも渡しておく」

ユースは懐からひとつ封筒を取り出すと、ソラに手渡した。

ソラは封筒を開けて中身を確認してみる。入っていたのは手紙だ。

「これ、予告状だよね？」

「ああ。お前に渡すつもりで王から預かってきた」

ソラは手紙の内容に目を通す。短い文でセレネーラの命を狙うと間違いなく書かれている。

（あれ……？）

ふとソラは手紙を繰り返し読み始める。

どこかでこの筆跡を見たことがある気がした。しかし記憶を辿ってもどこで見たのかは全く思い出せない。気のせいなのだろうか。

「とにかく俺とアルマは別行動になる。ラミナには念のためお前たちと一緒にいてもらうつもりだ」

「あ、うん。わかった」

ソラは慌てて頷く。今は気にしていても仕方がない。

ユースはソラの動きに眉を顰めながらも、踵を返す。

「俺は先に謁見の間に戻ってる。部屋に帰ったらアルマに来るよう伝えてくれ」

「わかった。ユースも気をつけてね」

ソラの言葉に、ユースは後ろ手に手を振る。

謁見の間へと行く道中、腕を組んで考えを巡らせるユース。彼もまた、言い様のない違和感を覚えていた。

それは、王家に隠されていたとされる伝承と宝玉についてだ。

確かに宝玉の存在は過去の文献にも書かれている。大戦期に生み出された宝玉がその力を示す前に封印されたことも。

しかし宝玉を実際に目にした時、違和感が纏わりついて離れないでいた。

「どうにもきな臭いな。試しに鎌をかけてみるか」

ユースは真つ直ぐ前を向き、足早に王のもとへと向かった。

一方でユースの背中を見送ってから、ソラは再び予告状に目を通していった。何度見て

も、この手紙にはどこか違和感がある。

「やっぱりこの字、どこかで見たことがあるような。それに、なんだろう……殺意を感じない気がする」

謎の違和感を拭えないまま、ソラはセレネーラの部屋へと戻るのであった。

第二節 小さな灯は影を照らす 1

部屋の椅子に座り、セレネーラは縮こまっていた。

ソラが出て行ってから少しして、双子の姉妹が入ってきた時から、部屋の中は刺さるような張り詰めた空気が漂っていた。というのも、双子姉妹を毛嫌いしているトウネリが攻撃的な視線を送っているからだ。

対する姉妹のラミナも、アルマに弄られたことを根に持つており明らかに不機嫌。

アルマはいつも通りの無表情なのが却って場を重くしており、この状況にセレネーラは狼狽するしかなかった。

「で、なんであんた達がいるのよ？」

ついにトウネリが口を開いた。声音に棘がある。

「は？ 別に好きでこんなところにいるんじゃないわよ」

「私はユースに待機を命じられた。ラミナはあなた達と一緒に姫の警護」

「別に私とソラで問題ないわよ」

両者間に火花が散る。アルマはともかく、トウネリとラミナは敵対心がむき出しに

なっている。

どうすればいいのか。セレネーラは頭を悩ませる。誰かの喧嘩とは無縁の生活を送ってきたことに、因縁のある二人の仲裁は酷な話だ。

しかしセレネーラは思った。この場を収めてこそ王家の人間というもの。ここは自分がなんとかしなければ、と。

「あ、あのお二人とも落ち着いてください」

「大丈夫よセラ。私はこの上なく落ち着いてるから」

「あら？　王族であるお姫様にため口なんて、あなたいつからそんなに偉くなったのかしら？」

「はあ？　王様に常時ため口だったあなたに言われたくないわよ」

「ふふふ、面白いことを言うのね。少なくとも私はあなたより偉いわよ？」

「ふん、あなたのどこが偉いんだか」

とても聞く耳を持つような様子ではなかった。

あわあわと口を動かすセレネーラ。果たして自分にはこの場を収めるだけの力があるのだろうか。

自信を失いながらも、はじめての友人が誰かと喧嘩をするとところを見たくはない思いから、セレネーラは呼びかける。

「お、お二人とも。ここは私の部屋です。私の顔に免じて喧嘩はやめてもらえませんか？」

「別に喧嘩なんてしてないわよお姫様？ 私たちはいつもものように会話しているだけ。ねえ？ トウネリ？」

「ええ、そうね。いつも通り腹立たしい態度だわ」

「あら？ この程度で腹立たしいなんて、あなた怒りっぽいのね。どこかで犯罪をしないか心配だわ」

「なんですって？」

食って掛かろうとトウネリが立ち上がる。犯罪——今の彼女にその言葉は禁句でしかなかった。

立ち上がったのを見て、ラミナは口元に笑みを浮かべる。

「あらあら、なあに？ 私と喧嘩でもしようってわけ？」

多少の退屈しのみにはなるだろう。ラミナは身構えて、トウネリの次の行動を待った。

が、そこに意外な人物が割って入った。

「はい、そこまで。二人とも」

アルマだ。普段であればラミナと一緒にになってトウネリを挑発する彼女が、二人を制

したのだ。

これにはトウネリも思わず動きを止めた。

「なによ。あんたいつもは一緒になって私を罵るくせに」

「いくら私でも場所も弁えている。ラミナ、ここはお姫様の部屋。何が言いたいかは……わかるよね？」

ラミナは内心唸る。

今のアルマはいつになく真面目な状態だ。理由はラミナでも量ることはできないが、少なくとも今の彼女に逆らおうならば痛い目にあうのは目に見えている。

押しとどまり、ラミナは口を噤んだ。それを見て、トウネリも元居た席に座る。

再び重苦しい静寂に部屋が包まれた。

(き、気まずい……！)

膝に手を置き、セレネーラは現状を嘆く。これほど息が詰まるような空気を経験したことはない。きつとこの二人は仲が悪いに違いない、と。

どうすればいいのだろうか。ソラならばこの場の雰囲気を変えてくれるのだろうか。そんな思いがセレネーラの中で芽生えていく。

とにかくこの場の雰囲気少しでも明るいものにしなければ。そう考え、セレネーラは唇を震わせながらも声を発した。

「そ、それにしてもソラ遅いですね。一体なにを話しているのでしょうか？」

その問いかけに、アルマとラミナは顔を見合わせる。

「もしかしてあなた、知らないの？」

「え？ 何をですか？」

セレネーラは小首を傾げる。その仕草を見て、ラミナはトウネリの方に視線を向けた。

視線が何を意味しているのかを察し、トウネリは思わず顔を逸らす。

「そう、あなたそいつらから聞いていないのね」

「何をですか？」

「薄々気づいてはいるのでしょうか？ 自分が置かれている状況に」

問いかけに、セレネーラは息を呑んだ。

彼女の言う通り、薄々勘づいてはいた。しかし仲良くなりたいたいという一心から、この話題を切り出せずにいたのだ。

セレネーラは恐る恐るといった様子で口を開いた。

「やはり……私の命が狙われているのですね？」

セレネーラの問いに、トウネリは小さく頷く。

「そう……ですか……」

セレネーラは俯く。唇を噛みしめて、事実を受け入れようと試みる。

自分は王族だ。であれば、見知らぬ誰かが自分の命を狙おうと考えることはあるかもしれない。それは歴史から学んだことだ。

かつての王は謀略を恐れて世界を掌握しようと考えたという。しかし結局はその行為を止められ、新たな王によって処罰された。それから続いているのが今の家系だ。

そのかつての王の子孫が、今の時代にもどこかで生きているのだという。もしかしたら復讐を考えて、この命を狙っているのかもしれない。

「私の……命が……」

思考が纏まらない。到底受け入れられるはずがなかった。体の震えが始め、セレネーラは自分の体を抱えるようにして身を縮めた。

「大丈夫。大丈夫よ。あなたの命は私たちが絶対に守るから」

震える姿を見て、トウネリはいてもいられず彼女に寄り添う。

その様子を見て、ラミナは聞こえるようあからさまに鼻で笑った。

「なこよよ」

トウネリは睨みつける。

「別にー？ この短時間でよくもまあそこまで仲良くなれるものだなあと感心してたの

よ」

そう言つてラミナは、まるで滑稽だと言わんばかりの笑みを浮かべる。

トウネリは奥歯を噛みしめる。だがここで憤慨してもなにも良いことはない。たとえ気に食わなくても堪えるしかなかった。

「それにしてもあの子遅いわねえ。何を話し込んでいるのかしら」

「うん。彼が帰つてこないと、私ユースのところに戻れない」

「別に無視して行けばいいじゃないの」

「それはダメ。ラミナが余計なこと言いかねないから」

「なんか今回はやけに真面目なのねお姉さま」

いつものように他愛のない会話を始める双子の姉妹。

二人を無視して、トウネリはセレネーラの体を抱きしめる。彼女の恐怖を和らげるためには、これしかできなかつた。

一方、セレネーラは震える体を止めようと、必死に別のことを考えようとしていた。今寄り添つてくれているトウネリとどんな楽しいことを話そうか。ソラが帰つてきたらどんなことを話そうか。そういう思考に持つていこうとも、恐怖によつて一瞬でかき消されてしまう。

（お姉様……私は一体どうしたら……）

セレネーラはここにはいない姉の姿を思い浮かべる。しかし浮かんだのは、まだ幼い

ころの姿だけだった。



ユースと話を終えて部屋に戻ろうとしたソラは、廊下である人物と出くわしていた。王に仕える大臣の一人、クローリヒだ。傍らには彼の補佐を務めるシャーロットの姿もある。

出会ってからしばらく、無言で顔を見合っている状況にソラは頭を悩ませる。一体なにを話したのかと考えるが、クローリヒから感じる妙な威圧感に声が出しづらい。

ソラが思わず生唾を飲み込んだと同時に、ふとクローリヒの口が開いた。

「大きくなられたものだ。以前見た時はまだ赤ん坊だったものを」

クローリヒの言葉に今度は息を呑む。

「あの……小さい頃のボクを？」

「うむ、そうか。眠っている時だったからな。顔を見ていないも同然か」

口元の髭に右手で触れながら、クローリヒは思い出すように語る。

「生まれて間もない頃にな、貴殿が生まれたという一報を受けたのだ。それで私とシャーロットはその顔を一目見ようと訪れたのだよ」

「そうだったんですね」

ああそうか、とソラは思い出す。

クローリヒは階段で出会った時、一瞬だがソラに何かを懐かしむような眼差しを見せていた。故にソラは初見で「この人は悪い人ではない」と感じていたのだ。

思い出し、ソラは微笑んだ。

「それにしてもよく似ておられますね」

シャーロットがまじまじとソラの顔を眺める。

「おいこら。あの方の子供なのぞ」

「わかっていますよ、あなた」

二人のやり取りを見て、ソラは首を傾げる。傾げてすぐ、二人の関係に察しがついた。

「もしかしてお二人は……」

「ええ、夫婦ですわ」

シャーロットが笑う。

もう一人の大臣であるトルテスが補佐に妻を置いているのだ、クローリヒがそうしていてもおかしくはないだろう。

しかしあの場でなぜ隠す必要があったのだろうか。ソラは疑問に思った。

それを察して、クローリヒは頬を掻きながら言った。

「ああいう公衆の面前では夫婦であると言わないようにしているのだ」

「真面目な方なのですよ。別に気にする人もいないでしょうに」

「いいや。大臣の補佐を務める者が妻だという国はほかに無い。であれば取り繕うのも

——」

「はいはい」

謁見の間で出会ったときとは全く違う雰囲気の二人。一目で二人が仲睦まじい夫婦であるということがわかった。

二人のやり取りに戸惑うソラ。このままでは自分を置いて二人だけの世界に入ってしまうのではないだろうか、などと懸念してしまっていた。

「あ……と、すみません引き留めてしまって」

それに気がつき、シャーロットが謝罪を述べる。

「あ、いえ。ちなみにその……母さんはここでどんなことをしていたんですか？」

ふと気になっていたことをソラは口にする。

王族と面識があり、かつ親しまれているともなれば何かここで大きなことをしていたのは間違いない。

ソラの問いかけに、クローリヒとシャーロットは顔を見合わせる。

「ふむ。あまり母親のことは聞かされていないのかね？」

「あ、えと、はい。ボクが聞かないようにしていたから……」

「そうですか」

ソラの答えに、シャーロットは肩を落とす。

「あなたのお母さまはこの国だけでなく、世界中で知られているほどの偉大な方なのです」

「偉大な方……?」

「はい。ですが今は私たちの口からは多くを話すことができません」

「母さんから口止めされている……ですか?」

ソラの問いにシャーロットは頷く。

「ただそうですね。私はあなたのお母さまにとっても良くしていただきました。私たちが結ばれたのも、あなたのお母さまのおかげなのですよ?」

「お、おい。そんな恥ずかしいことを」

「あらいいじゃないですか」

「あの……何をしたんですか?」

ソラはまた首を傾げる。二人が夫婦になるほどの事となると、一体何をしたのだろうかと。

するとシャーロットは口元に人差し指を当てて、少々色っぽく答えた。

「恋文ですよ。恋文」

「恋文？」

クローリヒが額に手を当てて項垂れた。微かに顔を赤くしている。

「ほら、この人見たまんま素直じゃないんですよ。でも私に告白したいとヴェルティナ様に相談したそうで、だったら手紙を書いたらって」

「なるほど。その時書いた手紙で二人は結ばれたってことですか」

「ええ。それはもう熱烈な——」

「ええい！ もうその話はいいだろう！ 今思い出しても顔から火を吹きそうなことだからな！」

「あらあら照れちゃって」

クローリヒの反応を見てシャーロットはくすくすと笑った。

二人の笑顔を見てソラも思わず笑いを溢す。やっぱりこの人たちは悪い人じゃない。そんな考えが芽生えていく。

「ですから、私はあの人をお慕いしているのです」

「そっか……そうなんですわね」

ソラは微笑む。いつだったか、エイネにも母親はどんな人だったかを聞いた。どうやら彼女の言う通り、母は優しい人柄だったようだ、と。

「その恩返しもかねて、あなた様にも色々手助けしたいと思っておりますので、なんなりと言つてくださいね?」

「はい。あ、じゃあ」

不意に思い至り、ソラは慌てて懐から封筒を出す。中に入っているのは、セレネーラ暗殺を予告する手紙だ。

これの中を開き、一枚の紙を広げて二人に見せた。

「この字にどこか見覚えはありませんか?」

「これは姫暗殺の予告状ではないか。どうしてこれを」

「ユースから預かったんです。それで、どうですか?」

問いかけに二人は顔を見合わせると、同時に首を横に振った。

「実は私たちも見覚えのある字かどうか判断したのです」

「今朝がた貴殿たちが来る前に、城の者全員を集めて字を書かせてみたのだ。しかし結果は誰一人として、この字に似たものを書く者はいなかった。不審な動きをする者もな」

「犯人が上手いこと字を偽装したとも考えられますが、現状では判断しかねるといった感じですよ」

「そう……ですか……」

城の者全員に字を書かせた後とあっては、答えも簡単に見つかりそうにはなかった。だがソラはどうしても、この字に見覚えがある気がしてならなかった。この違和感は一休なんだというのだろうか。

(ここじゃないどこかで見たととなると……もしかしてギルドで?)

試しにあとでギルドに向かったほうがいいのかもかもしれない。そ考えながら予告状を片付けると、ソラは二人に軽く頭を下げた。

「少しお話を聞けて良かったです」

「いえいえ。私たちもあなたと話せてよかったですわ」

「じゃあ、さすがにもう戻らないといけないので」

「はい。姫様のこと、よろしくお願いしますね」

また一度軽くお辞儀すると、ソラは足早に去っていく。

ソラの背中を見送り、クローリヒとシャーロットは顔を見合わせた。

「もう。緊張して全然話せないなんて、あなたって人は」

「うるさいぞ。それに緊張などしてない」

「はいはい。もう、あの方のこととなるといつつもそうなんだから」

他愛のない会話を交わしながら、二人もその場を離れるのだった。

第二節 小さな灯は影を照らす 2

「それじゃ……私はユースのところに戻る。ラミナのことよろしく」

「うん、ありがとう」

部屋から出ていくアルマを見送って、ソラはため息を吐いた。

振り返り、セレネーラの顔を伺う。先程まで恐怖から青ざめていた顔が、今は落ち着きを取り戻している。

「ごめん」

ソラはセレネーラの前で深々と頭を下げた。

「ボクもいつ言うか悩んで……結果的に君を苦しめる形に……」

言い訳のような謝罪だと分かかっていても、今はこれが精一杯の行動だった。

謝罪を受けてセレネーラはしばしソラを見つめる。

「いえ、大丈夫ですよ」

セレネーラは微かに笑みを浮かべる。

「私も同じ立場であれば、きっと同じことになっていたでしょうし」

命を狙われている人間にその旨を伝えることは難しい。相手のことを思えば、つい隠してしまうのも仕方のないことだろう。

セレネーラは理解していた。理解していたからこそ、誰にも深く言及できずにいたのだ。薄々気づいてはいても、聞いてはいけななことなのもかもしれないと。

「お二人の気持ちは分かっていますから」

ソラは俯き、唇を噛み締める。

（セラの気持ちは分かっていたはずなのに……）

誰かに何か大事なことを隠されること。そこから来る不安や疎外感などは身をもつて知っているはずだった。

だというのに、自分は同じことをしてしまった。己の行動を恥じ、罪悪感からソラはもう一度頭を下げた。

「セラ……本当にごめん」

拳を強く握り締める。

「あなたは優しいのですね、ソラ」

思わず顔をあげるソラ。が、すぐに顔を逸らした。

「ボクは優しくなんかないよ。だって君を——」

「いいえ。そうやって他人のことを重く受け止めてしまうのは優しい証拠ですよ。優しすぎるくらいです」

セレネーラは言いながら思い出していた。彼が語った、ギルドに入った理由を。

（ソラは大勢の笑顔を守りたいと願っている。なのに私が——民を導き笑顔にする私が笑わずにどうするというのです）

意を決し、セレネーラは立ち上がった。

「ソラ、こつちを向いてください」

言われて、ソラは半ば恐る恐る顔を向けた。

「ソラ、私はもう大丈夫です」

セレネーラはそう言つて満面に笑顔を浮かべた。

その笑顔に、ソラは思わず見惚れる。きつとまだ無理をしているのだろう。それでも今の彼女の笑顔は美しかった。

「トウネリもありがとう。あなたが寄り添ってくれたおかげで、心が休まりましたから」
「私は別に……大したことしてないわよ」

不意打ちを受けて、トウネリは仄かに紅潮する。

（そう……大丈夫）

胸に手を当てて、セレネーラは目を閉じる。今はもう、彼女の中に恐怖は無くなつて

いた。

「私は二人のことを信じていますから」

二人に対する信頼が、セレネーラの心に安寧を与えていた。

「話は済んだかしらー？」

窓際の壁に寄りかかっていたラミナが、半ば退屈そうに呟く。三人が話している間静観していたことで、若干不満が溜まっている様子だ。

「それで？ ユースからなにを聞いたのか教えなさいな。今更隠すなんて言わないわよね？」

問われてソラは頷くと、席に腰掛けて話始めた。

「セラはこの城にいた昔の王様の話について知ってる？」

「それは、かつての王が世界を支配しようとしていた……というものですか？」

答えにソラは頷く。

無言であることから詳細を求められているのだと察し、セレネーラはさらに続ける。

「その王がいた時代は戦乱の世だったと聞いています。他国からの侵略を恐れた王は、侵略するものを支配するため宝玉を生み出した」

ですが、とセレネーラは一言置く。

「彼の王が生み出した宝玉の力があまりに強大であったため、八賢者の一人イヴェル

テーラが破壊した……そう聞いています」

やっぱり。とソラは内心で呟く。

実は彼女が語った伝承は、ソラの持つ御伽話の本にも書かれているものだ。八賢者が関与していることからこの御伽話にも綴られたのであろう。

そしてこの本にも、宝玉は破壊されたと書かれている。これと同じ内容しかセレネーラが知らないとなれば、つまり宝玉の存在並びに宝玉の封印を解く方法を外部の人間が知る手段は限られていることになる。

「ねえ、セラはその話誰から聞いたの？」

「えつと……小さい頃にお姉様から……」

「お姉様？」

問いかけにセレネーラは物憂げな表情で頷いた。

「私には姉がいるんです。ただ六年前に突然いなくなってしまうて……」

姉——その言葉にソラは思い出す。そういえばセレネーラはあくまで第二王女であつたと。つまり別に第一王女が存在するわけだ。

「いなくなつた？ どうして？」

トウネリが問いかける。よもや何者かに連れ去られたのか。そんな邪推が浮かんだためだ。

「お姉様は次期王になる方です。そこで世俗を知るために旅に出た……と父から聞きました」

「そうなの……それで今も無事なの？」

「はい。定期的に連絡を取り合っているらしく、つい二日前に手紙が届いたと言っていました」

「二日前？」

ソラは口元に手を当てる。

二日前に第一王女からの手紙が届き、その翌日にセレネーラの暗殺を予告する手紙が届いた。一見偶然のようにも思えるが、どうにも違和感がある。まるで、第一王女からの手紙が引き金となったかのような。

「お姉さんがどこにいるかは知らないんだよね？」

「ごめんなさい。私にはなにも教えてくれないので」

「そっか……」

もし第一王女の身に何かあり、それが原因で宝玉の存在が知れ渡ったのだとしたら。

そう考えて、ソラはすぐに否定する。

第一王女を拷問するなりして秘密裏に情報を手に入れた者が、予告状を置くなどといった非合理的な行為をするとは考えにくい。

(もしかして、そもそも前提が間違っている?)

まだ何か情報が足りない。決定的な情報が――。

ソラが思考を巡らせている一方で、トウネリは口を開いた。

「そういえば気になったことがあるんだけど、ひとつ聞いていいかしら?」

「あ、はい」

「あのさ、いやあまり聞かれたくないと思うんだけど……セラのお母さんってどこにいるのかしら?」

問われて、セレネーラは息を呑んだ。

「謁見の間でもそうだったけど、セラの母親の姿見てないと思つて」

「母は……母は私を産んですぐ病に倒れたそうです」

「そう……ごめんなさい、嫌なこと聞いて」

「いえ、いいんです。物心がつく前のことですし、それに私にはメルヒがいますから」

セレネーラは微笑むが、それでも気に病んでいることは隠せていない。

同じ母親がいない身として、トウネリは胸が締め付けられる。なんとか思いを誤魔化すため、さらに口を開いた。

「メルヒさんって素敵な人よね。初対面の時は、ちよつと嫌味を言われたけど」

「そうなんですか? メルヒはとつても優しい人ですよ。きつとソラにも負けないくら

いに優しい人です」

「へえ、そうなんだ。例えばどんな風に？」

「そうですね。小さい頃、寝付けない時はいつも隣で一緒に寝てくれましたし、色んなお話も聞かせてくれました」

メルヒの話をし始めると、セレネーラの表情にまた明るさが戻っていく。それを見てトウネリは胸を撫で下ろした。

「八賢者の伝承をはじめ、実際に見聞きしたことや経験したこと。あとは母のこともよく話してくれました」

「お母さんのことも？」

「はい。メルヒは私に仕える前は母に仕えていたらしいので。母は高明で誰にでも手を差し伸べる人で、よく父の代わりに文書も作っていたそうです」

「へえー。公の文書って王様が作ってるもんだと思ってた」

「基本はそうですが、公務があまりに多い場合は母を頼っていたそうです。母が亡くなつてからは、メルヒが担当しているんだとか」

セレネーラの話聞き、ソラは目を見開いた。

懐から予告状を取り出し、もう一度内容を眺める。正確には書かれている文字を。そして徐々に曖昧だった感覚が鮮明になっていく。

「どうしたのソラ？」

突然手紙を見始めた事から、話していた二人は首を傾げる。

しかしソラは答えずに、手紙をじっと見つめているだけだ。

「へえ、そういうこと」

静観していたラミナが不意に口を開いた。

「だからさつきあの女、伝書をつけた鳩を飛ばしていたのね」

「なによそれ」

「いやね、たまたまそうしているところを見かけたのよ。でも王様の代わりにやる時があるってことは、あれは本当だったのね」

くつくつとラミナは不穏な笑みを浮かべる。

「ちなみにあの女、ヴェラドローネに手紙を送ったって言うてたわよ」

ラミナの発言を聞いた途端、ソラは立ち上がった。

「思い出した……」

「思い出したってなにを？」

「ねえトウネリ、ここに来る前ギルドに送られてきた王様の書状って誰が持つてるっけ？」

「は？ ええと、確かユースが持つてるはずだけど」

「ごめん！ ボクちよつとユースのところに行つてくる！」

そう叫ぶと、ソラは慌てて部屋を出て行った。

「急にどうしたのよあいつ」

「なにかに気づいた様子でしたけど」

「それなら何に気づいたのか先に教えてから行つてほしいわね」

トウネリはため息を吐く。そもそも一緒に行動しているのだから、情報を共有してほしいものだ。

一体ソラは何に気がついたというのだろうか。考えようとした時、ふとトウネリもあることに気がついた。

「あれ？」

部屋の中を見渡す。

「どうかしましたか？」

その行動に気づいたセレネーラは首を傾げて尋ねる。

「いや、ラミナのやついつの間にかいないと思つて」

そう、部屋の中に先程までいたはずのラミナの姿がなかった。

「なんなのよ、あいつら」

まるで仲間外れにされたような感覚を受け、トウネリは口を尖らせて不満を露わにす

るのであった。



ギルド・ヘルデイロ支部支部長室。この部屋の椅子に、ヴェラドローネはいつものように座っていた。彼女の眼前には書類の山。すべては、完了した依頼の結果報告書だ。これに目を通し、印鑑を押すのが彼女の仕事のひとつである。

だが彼女はそれらには一切手をつけず、一枚の紙に目を通して見る。

「ふむふむ。宝玉の守りにユースをねえ」

見ているのは、王から送られてきた手紙だった。達筆な字で書かれた手紙の傍には、王族が扱う印鑑が押されている。

手紙を読んでいると、ふと扉が開いた。

「やあ、そろそろ来ると思ったよ」

手紙を置き、相手の顔を見るためにヴェラドローネは立ち上がる。

「呼び出してなんですか、支部長。その書類の肩代わりはしないわよ？」

部屋に入ってきたのはシエルヴィアだった。今日も今日とて、彼女は煌びやかで高貴な衣装で身を包んでいる。今回は灰色のドレスだ。

「えー、それは困るなあ。君にはいつも色々支援してあげてるじゃないか」

シエルヴィアは軽く舌打ちする。それをヴェラドローネが聞き逃すはずもなく、ほくそ笑んだ。

「うわー、感じ悪いなあ。まあいいよ？ 君がそういう態度取るならこれからは——」

「あーもうわかつたわよ！ わかりました！ やればいいんですよ！」

怒鳴るように言うと、シエルヴィアはさすがと書類の山に向かつていく。が、ヴェラドローネが突然手のひらを出して彼女を制した。

「ま、冗談なんだけどね」

「は？」

なんなんだこの女は。シエルヴィアは内心で毒づく。いつになく気に食わない態度に、いつそ何も聞かずに部屋を出て行こうかとさえ思えた。

「ルージュヴェリアから話しは聞いているんだらう？」

問われてシエルヴィアは気怠げな様子で頭を掻く。

「ああ、まあ概ね。それが何か？」

「ルージュヴェリアの様子はどうだい？」

「あの子ならやれソラさんは大丈夫かなあとかトウネリさんは大丈夫かなあとか言つて落ち着きがないですよ」

「そうかそうか。うんうん、それを聞いて安心した」

訝しげな目でヴェラドローネを見る。一体全体なにを言いたいのか読むことができなかった。

シエルヴィアが真意を推し量っていると、ヴェラドローネは引き出しを開いて、中から数枚の紙と黒い液体の入った瓶、そして先を尖らせた鳥の羽根を取り出した。

「実は王から先程手紙が送られてきてね。その返事を書かなきゃいけないんだが、私はこの通り忙しいのでね。君に書いてもらいたいんだよ」

「はあ、どうして私がそんなことを。支部長がやればいいじゃないですか」

「いや私は字を綺麗に書くのが苦手だね。何より面倒だから、字が綺麗な君にお願いしたくて」

「本音は面倒だからでしょう。よくもまあそんなので支部長が務まりますね。嫌ですよ、そんな恐れ多いこと」

「えー？　じゃあ支援を——」

「はいはい。わかりましたよ、やりますよ」

シエルヴィアは深いため息を吐くと、引き出しから取り出した物を受け取る。

「返事はなんて？」

問いかけに対しヴェラドローネは笑みを浮かべた。

「了解しました。つてことささえ書いてくれれば、あとは好きに書いてくれ
ヴェラドローネの返答に、シエルヴィアは項垂れるしかなかった。

第二節 小さな灯は影を照らす 3

「その……二人きりになりましたね？」

「そう……ね……」

トウネリとセレネーラの二人はお互いの顔色を伺う。どちらも少し気まずそうにしている。

「ソラ、急にどうしたんでしょね？」

「わからないけど、何か大事なことに気がついたんだと思うわ」

つい先程出て行つたソラのことを思い出す。

明らかに取り乱した様子だった。考えられるとすれば、何か事件の真相に関わること
に気がついたということ。それが何かは不明だが、彼がいない現状どうすることもでき
ない。

二人はまたお互いの顔を見た。

「あの方……ラミナさん？　はどこに行つたのでしょうか？」

「さあね。あいつ好き勝手動くやつだし」

会話が續かない。ラミナがいた時とはまた違う気まずさがあった。

しばしの沈黙が二人の間に流れる。

「ねえ、セラ。良かったらなんだけど……お姉さんについてももう少し教えてくれるかしら？」

「お姉様についてですか？」

「ええ。名前は知っているのだけど……確か——」

「シエルヴェリア……シエルヴェリア＝ルネエール＝ブリアンテス。それがお姉様の名前です」

「そう、そうだったわね。シエルヴェリア様」

名前を呟き、トウネリは俯く。

聞き覚えはあつても、姿もどういった人物であるかも一切の情報が無い。それもそのはず。第一王女シエルヴェリアもまた、セレネーラ同様公の場に姿を現したことがないからだ。

つまり民衆が名を知っていてその姿を目にしたことがあるのは、現国王のみということになる。それがトウネリはずっと不思議でならなかった。他の国では、王家に纏わる者すべての顔と名、そしてどのような生活を送っているかを知っているのだから。

「そうですね。お姉様は昔の伝承とかが大好きでした」

「伝承？」

「先程も言ったように、誰もが知る八賢者のお話とか」

「あー。この世界の成り立ちとかそういう」

「はい。特にイヴェルテラが関わる伝承が書かれた本をよく読んでいましたね」

イヴェルテラは八賢者の中でも、世界を救った偉大な存在として描かれている。そのため彼女に関する書物は世界各地に存在しており、国ごとに書かれている伝承や内容も変わっているのだ。

「お姉様はよく言っていました。私はいつかイヴェルテラみたいにな、沢山の人を笑顔にしたいんだって」

「あいつと同じこと言ってたのね」

トウネリの指摘に、セレネーラは微笑んで頷く。

「ええ。だからソラの話聞いた時、お姉様の顔が浮かびました」

「シエルヴェリア姫は、今だと歳はいくつくらいなの？」

「私よりも十歳上ですから、今は二十二ですね」

「思っていたよりも若いのね」

年齢を聞き、トウネリはなんとなく二人の女性を思い浮かべる。

(そういえばルーもシエルヴィアさんも同じ歳だったわよね)

ギルドの受付嬢をやっている二人。どちらも外見が美人であるため、男性からの人気が高い。特にシエルヴィアは他を寄せ付けないような美貌を持っていることからよく求婚されているところも見かけた。

(名前も似ているし、まさかシエルヴィアさんがシエルヴェリア姫なんてことは……)

考えて、トウネリは考えをかき消す。なにせシエルヴィアは普段から面倒くさがりの女性だ。がさつな所もあるため、そんな伝承を読み耽るようなお姫様とはとても思えなかった。

(でもあれが全部演技だったってこともあり得るわよね)

まあこんな身近なところにいるわけもないか。とトウネリは苦笑すると、次の質問を投げかける。

「年齢で思ったのだけど、メルヒさんて歳いくつなの？」

セレネーラに仕えているメルヒ。彼女も謎が多い女性だ。現時点では、幼い頃からセレネーラの身の回りの世話をしてきたということ。王が書く公文書を稀に代行することがあるということくらいだ。

「実は私も知らないですよね。お父様よりは若いのでしょうか？」

「まあ、見た目があの若さだものねえ」

トウネリは持っている情報からメルヒの年齢を推測する。

セレネーラの母親に仕えており、彼女の母親が亡くなったのが十二年前。その時点ですでにこの城に仕えていたともなれば、三十代はすでに超えていることだろう。

と、ここでトウネリはソラのことを思い出す。正確には、彼が見ていた紙のことを。

「——そういえばあいつ、飛び出していく時に何か見ていたわよね。あれ、なんだったのかしら？」

封筒に入っていたことから手紙であるのは間違いない。

（手紙……今回の事件に関わる手紙と言ったら——予告状？）

はたりとトウネリの思考が停止する。

（待って。もしあれが予告状なんだとしたら、なんであいつはそれを見て飛び出していったのよ？）

思考が加速し始める。当時の状況を順を追って思い出す。ソラが部屋から出ていく前、何をきっかけにして紙を見ていたのかを思い出す。

“——母が亡くなってからは、メルヒが担当しているんだとか”

思い出し、トウネリは息を呑んだ。

（まさかそういうことなの？）

状況を整理すればするほど、行き着いた考えと辻褃があつていく。

(でも、一体なんの目的があつて……?)

分らない。おそらくソラと同じ考えに行き着いた。しかし肝心の答えが見えてこない。

トウネリは頭を悩ませる。もう少しで見えない何かが見えてきそうなのだが、その正体が掴めない。

「どうしました? トウネリ。顔色あまり良くないですよ?」

「あ、いえ大丈夫よ。大丈夫」

なんとか動揺を隠そうと表情を取り繕った時だった。

扉をノックする音が部屋に響いた。

「はー?」

セレネーラが返事をする。すると扉の向こうから声が聞こえてきた。

「姫様、私です。そろそろお食事が済んだ頃だと思ひまして、お皿の回収に参りました」
聞こえてきたのはメルヒの声だった。

トウネリは思わず身構える。

というのも、犯人の候補としてメルヒが浮上してきたからだ。長年仕えてきた最も身近な存在となれば油断も現れる。その隙を突いて、セレネーラの命を狙っているのかもしれない。

生唾を飲み込み、トウネリは成り行きを見る。

「失礼します」

一言置いて、メルヒが部屋の中に入ってきた。手には皿を乗せるためのトレイが握られている。

「おや？ ソラ様はどうされましたか？」

部屋を見渡して、メルヒは首をひねって問いかける。

「ソラなら、何か紙を眺めていたと思つたら突然どこかに行つてしまつて」

セレネーラの答えに、トウネリは「マズい」と齒噛みした。

もしメルヒが今回の事件の犯人であるならば、この答えで勘付かれてしまう。場合によつては今すぐ行動を起こしてしまう可能性がある。

静かに悟られぬよう、対処できる体勢を取つて動きを見る。

「ふむ、そうですね」

メルヒに動揺している様子はない。或いは次にどう行動するか考えているのか。

一方トウネリが警戒するのは他所に、メルヒはどこか申し訳なきさうに口を開いた。

「実は先程、シエルヴェリア様から短い手紙が届きました——」

「っ!?! お姉様は……なんと?」

「気をしっかり持って。きつと大丈夫だから。そう書かれていました」
返答を聞き、セレネーラは俯く。

「そう……お姉様も知っているのですね」

「一大事でしたので」

話を聞きながら、トウネリは考える。

セレネーラの話によればつい二日前にシエルヴェリア姫から手紙が届いたという。そして予告状はその翌日の晩。幾らなんでも、話が行き渡るのが早すぎはしないだろうか。

(まさか。話のどこかに嘘が混ぜられている……?)

トウネリは警戒心を強めて、メルヒの動向を探る。

「そういえばもう一人、誰か来ませんでしたか?」

「もう一人? それはラミナさん、という方のことですか?」

「はい。その返答が来たということは、彼女は無事着けたようですね」

「それは一体どういう意味ですか?」

トウネリは睨んで問いかける。

するとメルヒは肩を竦めて答えた。

「いえ、私が指し示した方向と真逆の方に向かわれてしまったので。まさかあそこまで

捻くれた性格をしているとは思っても寄りませんでした」

メルヒは呆れたように嘆息を漏らす。嘘をついている様子はない。

が、ラミナが廊下で叫んでいたことを信じるならば、彼女はメルヒが示した方向に移動したことになるのではないか。

（あいつは……どうだろう？ あいつなら気に入らないと真逆のことし兼ねないし）

トウネリの思考がわずかに反れる。

「ともあれ、楽しい食事はできましたか？ 姫様」

「はい。二人とも素敵な友達です」

「そうですか。それは良かったですね、姫様」

セレネーラの答えに、メルヒは笑みを溢した。

トウネリは思わず呆然と見つめる。思い出の中にある母親の笑顔とメルヒの笑顔が、そっくりそのまま重なっていた。

（そうか……そうよね。この人はセラが赤ん坊の時から一緒にいたんだもの）

それだけではない。脳裏にたった一度だけ向けられた笑顔が浮かび上がる。かつて自分を救ってくれた女性の笑顔が。その笑顔もまた、メルヒの笑顔と重なっていた。

トウネリは警戒を解く。犯人はメルヒではない。メルヒがセラの命を狙うはずがないと。

気づけば微笑みながら、二人の様子を見ていた。

「トウネリ様、どうかされましたか？ 何か良いことでも？」

「いえ。なんかお二人、まるで本当の親子みたいだなと思ひまして」

トウネリは笑つてそう答える。

するとセレネーラとメルヒの笑顔が曇つた。

「そう……ですね」

瞬時にトウネリは「しまった」と内心で毒づく。明らかに軽はずみな発言だ。

「あ、す、すいません。無神経なことを」

「いえ、大丈夫です。そうですね。姫様は私にとって大切な方ですから。娘……という

のもあながち間違つてはいないかもしれませんね」

「ふふふ、そうですね。メルヒは私にとつてのもう一人のお母様みたいなものですから」

「ダメですよ姫様。私はあくまであなたに仕える者。そんな私にそのようなお言葉」

「自分から言つたのにどうして恥ずかしがる必要があるのです？」

「いえ、別に恥ずかしがつてなど——」

顔を赤らめるメルヒと、笑うセレネーラ。

そんな二人を見てトウネリは胸を撫で下ろすと、一緒になつて笑う。

二人の姿はトウネリの思い出と静かに重なるのであつた。



ブリアンテス城、謁見の間。現在ここにはユースとアルマの二人しかない。王の姿も、彼を補佐する宰相たちの姿もない。

ユースは静かに、宝玉の下へと繋がる階段を見下ろしていた。

「ねえ、ユース」

アルマは問いかける。

「気づいてるんだよね？ 今回の事件について」

問いかけにユースは答えない。しかしアルマは問いを続けた。

「いつ気づいたの？」

ユースは項垂れる。そして口を開き、はつきりと答えた。

「王様の口からあいつの母親の名前が出た時だ」

アルマは首を傾げる。

「あいつって……彼の？」

「ああ……」

ユースの返答を聞き、アルマは「そっか」と静かに呟く。

「彼も大変だね」

「そうだな」

「道理でラミナが不機嫌なわけだ。あの子……嘘に敏感だから」

「そうだな」

「だからあの子を彼の下に行かせたの？」

「さあ、どうだろうか」

アルマは頬を膨らませると、ユースの足を蹴り始めた。

「返事そんなのばかり。つまんない」

「別にお前を面白くさせたいわけじゃないからな」

蹴りを受けながら、ユースは深くため息を吐く。

「兵士の警備もまばらで杜撰。如何にも気づいて下さいつて言っているようなもんだな」

「処す？ 処しちゃう？」

「しねえよ。これはあいつが解決すべき事柄だ。俺が出る幕じゃない」

飽きたのか、アルマは蹴るのをやめて体勢を戻す。代わりにユースの背後でくるくるとその場で回り始めた。

「ヴェラドローネは分かっていたのかな？」

「だろうな。あからさまに今回は関係ないみたいな顔してやがったからな」

「ふーん……帰ったらお仕置きしてやる」

「程々にな」

ユースは振り返り、出入り口の扉を見つめる。まるで何かを待つかのように。

「さて、そろそろ来る頃か」

「ねえユース……彼はどんな答えを出すのかな？」

アルマの問いに、ユースは物憂げな表情を浮かべて答えた。

「あいづらい答えが出ることを、俺は祈ってるよ」

直後、出入り口の扉が勢いよく開けられた。

第二節 小さな灯は影を照らす 4

足早に謁見の間に急ぐソラ。その道中、誰一人として見回りの兵士とすれ違うことはなかった。

不安を抱きつつも謁見の間にたどり着く。ユースがいると踏んでなのかは不明だが、来たときには扉横にいたはずの兵士が立っていない。

「ユース！」

扉を開けるなりソラは叫ぶ。その先にはユースが立っていた。

「どうした、ソラ？」

「今朝ギルドに送られてきた書簡持つてるよね？ 見せてもらえる？」

「ん？ ああ」

ユースは言われるがままに懐から紙を出す。

それを受け取って中身を眺めると、ソラは予告状を広げて見比べてみる。

「やっぱり……」

ソラの眩きを聞き、アルマが後ろから覗き込む。

「どうしたの?」

「見て。王宮から送られてきた書簡に書かれている文字と予告状に書かれている文字。これ書いた人が同じなんだ」

言われてアルマも見比べてみる。確かに筆跡が同一のようにも見える。

「じゃあ犯人は王様?」

アルマは小首を傾げて尋ねる。

「それは——」

答えそうになり、ソラは口を紡ぐ。まだ筆跡が同じだと分かっただけだ。今彼女の名前は出すべきではない、と。

「もう少し調べてみないとわからない」

「なんだ……犯人が分かったんだと思ったのに」

落胆を示すアルマに対し、ソラは俯く。

そもそも断定して目的を聞くわけにもいかなかった。万が一彼女でなかった可能性も考えれば、下手に動くわけにもいかなかった。

ふと、周囲を見渡してソラは疑問に思ったことを口にした。

「そういうえば、王様はどこに?」

「王なら今自室で休んでいるところだ。他の宰相たちは昼食を取っている」

王が自室にいるのは好都合だ。今は王だけに聞きたいことがある。ソラはそう考え、重ねて問いかけた。

「そっか。ねえ、王様の部屋はどこにあるの？　ちよつと尋ねたいことがあつてさ」

「王の部屋なら、丁度姫の部屋の反対側にあるはずだ」

「なんなら私が案内するわよ」

「そっか。ありがとつて、え？」

背後から声が聞こえて、ソラは思わず振り返る。振り返った先には、ラミナが腕を組んで立っていた。

「王様のところに行くのでしよう？　だったら私が案内してあげるわ」

「でもどうして？」

ラミナはあまり協力的な態度ではなかったはずだ。それがどうして突然協力する気になったのか。ソラは不思議に思った。

それに答えるようにラミナは近づき、耳元で囁くような声で、

「あの女に目星をつけているのだったら協力してあげるわよ」

と言った。

ラミナはくすくすと笑うと、ソラから離れる。そこから流れるような動作でユースの腕に抱きついた。

「ねえユース。今回の件、私が活躍したらご褒美くれない？」

「ご褒美だと?」

「そ。ご褒美。だってこんな下らないことに付き合っただけだから」

「下らない?」

ラミナの発言に対し、ソラは眉を潜める。

幾らなんでも聞き捨てならない言葉だった。今回の一件でセレネーラは不安な思いをしているはずだ。それを下らないというのはどういふことなのか。口には出さずとも、その怒りが彼の顔に出ている。

ラミナはソラの反応に対し鼻で笑う。

「だってそうでしょう? 今回の件は明らかに大きな嘘が絡んでいるんだもの。それが何かはわからないけど、これだけははっきりと言えるわ」

ユースから離れると、今度はソラの目前にまた立つラミナ。そして人差し指を、ソラの胸の辺りに突き立てた。

「その大きな嘘の中心は、あんただってことが」

「ボクが……?」

指摘に対してソラは困惑する。

言っている意味がわからなかった。なぜこれまでこの城に来たことがない自分が、事

件の中心に立っているというのか。

考えて、ひとつ思い当たるものがあつた。

「まさか……母さんが……？」

母親だ。母親のヴェルティナはこの城に深く関わっていたのだという。

しかし本当に母親が今回の事件に関連しているとも言うのか。

戸惑うソラを見て、ラミナはくすりと笑つた。

「ま、軽い冗談よ。そう捉えることも出来るわよね？　つて話」

確かにラミナの言う通りではあつた。なにせシエルヴェリア姫から手紙が届いたとされている二日前は、丁度ソラが王都に訪れた日なのだから。

強く否定することもできず、ソラは言葉を詰まらせる。まるでラミナの言っていることが事実であるかのように捉えていた。

そんな様子を見て、ユースは肩を竦める。

「とにかく事件の手がかりは見つけたんだ。調査してもらえるか、ソラ？」

「う、うん……出来る限りのことはするよ」

ソラのどこか気のない返事にユースは嘆息して、ラミナの方に顔を向ける。

「ラミナ、お前もな」

「まあ今回はちよつと面白そうだから、この子に協力してあげるわよ」

ラミナの方は乗り気の様子で、ニタニタと笑みを浮かべている。

対象的な表情をする二人に、先行きの不安を募らせるユースであった。

ユースとの話を終え、ソラとラミナは王の部屋へと足を運ぶ。

その道中、先程とは打って変わって複数の兵士たちとすれ違っていた。

もしやただの思い過ごしなのか。ソラの中で見えかけていた答えが、また見えなくなっていく。

「これはちよつとした独り言なのだけど」

ふと、無言で隣を歩いていたラミナが口を開いた。

「ユースは多分、もう事件の真相に辿り着いてるわ。その上で彼はあなたに任せるって言った」

確かにユースの持つ雰囲気からソラも感じていた。もしかすると彼はすべての真相に行きついているのかもしれないと。

では何のために。事件の真相を暴きそれを明かすだけでは足りないというのだろうか。

「あなたは何のためにこの件を解決したいと思ったのかしら？」

「ボクは……」

「あ、答えなくていいから。独り言だし」

ふとソラの脳裏にセレネーラの顔が浮かぶ。

母親を失くし、姉は彼女の前から行方を晦まし、父親とは交流が少ない。そんな中残ったのは、母親の代わりに育ててくれた使用人との時間。

彼女はこれまでできつと孤独を感じていたに違いない。幼い頃に感じたようなあの孤独を。

その証拠に彼女が浮かべる笑顔にはいつも影が掛かっていた。彼女自身も気づいていない影が。心の底から笑っているように見えても、本当は周りに悟られぬようただ誤魔化しているのだ。

(そんなの決まっている)

思えば考えるまでもない答えだ。

セレネーラと出会った時から抱いていた答えを改めて自覚し、ソラはしっかりと前を向く。

「さあ、着いたわよ。あそこが王様の部屋ね」

前を向いた先に、一際豪華な扉をした部屋があった。部屋の横には二人の兵士が立っている。

兵士たちは二人に気がつくくと、手に持った武器を軽く構えた。

「お前たち、そこで止まれ！」

言われた通りに二人は立ち止まる。

「私たち王様に用があるのだけど」

「現在王は休んでおられる。すぐに立ち去れ」

「はあ？」

兵士の物言いにラミナは憤りを示す。

「あんた達、私に指図するわけ？」

このままでは無用な争いを生みかねない。慌ててソラが割って入ろうとした時、部屋の戸が開いた。

「何事だ？」

王が出てきたのを見て、兵士二人はすぐさま姿勢を正す。

「いえ、あの者たちが近づいてきたので」

ソラとラミナの姿を見て、王は眉を潜める。

「彼らは私の客人だ。通してくれ」

「し、しかし——」

「いいから通してくれ」

言われるがままに、二人の兵士は武器を下ろして扉から離れる。

すると王は扉を開いたまま、部屋の中へと姿を消した。

ソラとラミナは顔を見合わせてから、無言で王の部屋へと入っていく。
「し、失礼します」

妙な緊張感に、ソラは部屋の中を見回す。

部屋の中はセレネーラの部屋と同じ作りになっている。置かれているものも殆ど同じで、大きな違いがあるとすれば部屋の中央に大きな魔法陣が描かれていることくらいだ。

「そう身構えず、気を楽にしてくれ」

魔法陣を注意深く観察しようとしたソラだったが、王の発言に思わず顔をあげた。

「私に用があつて来たのだろうか？」

そうだ。今は王の部屋について考えている場合ではない。ソラは書簡と予告状を取り出す。

「実は少しお聞きしたいことがあつて——」

「メルヒの文字……そう言いたいのだな？」

二枚の紙を見せようとして、ソラは動きを止めた。

「やっぱり気づいていたんですね」

薄々勘づいてはいた。王は何か確信を持っている様子だった。

だが考えれば当然のことだ。王とメルヒは長い付き合いなのだ。であれば、彼女の字

を知らないはずがない。

王は頷く。

「見た時は、何かの間違いだと思ったがね」

「どうして最初に言わなかったんですか？」

「あの場に、裏で手を引いている者がいると考えたからだ」

「それは……誰のことですか？」

王は一瞬答えることを躊躇ったのか、間を置く。が、すぐにはつきりとその名を告げた。

「トルテス卿……おそらく彼が今回の首謀者だ」



ブリアンテス城内の一階にある一室。ここには様々な書物が置かれている。立ち並ぶ本棚の中央には、ひとつ大きな机が置かれている。

この机を背にして立つ一人の男がいた。トルテスⅡレニーステル。ヘルデイロ王の側近を務める宰相の一人だ。

彼は一冊の本を手に、職務を行うための自室で佇んでいる。傍らには妻のシェーラも

一緒だ。

トルテスは手に持っている本を一枚一枚開いて静かに眺めていた。表紙にも背表紙にも文字が刻まれていない本を。

「またあなたはそんなものを眺めて」

シエーラは呆れた表情で椅子に腰掛けた。退屈そうに自分の手指を見つめて、爪先を弄っている。

「そんなに気にかかるのなら、異を唱えればいいじゃない？」

シエーラの言葉には耳を貸さず、トルテスは本を眺める。彼の視線の先には、人の名前が書かれた頁が続いている。

「私はあの方に忠誠を誓っているのです。異を唱えるはありますがありません」
「でも不満だつて、顔に書かれていますわよ？」

表情ひとつ変えずに、トルテスは本を眺める。一瞬だけ「キアンロレス」と文字が書かれているのが見えたが、彼は気にすることなく頁を次々開いていく。

「それにしても罪づくりな方ですわよね。愛する子供にこんな仕打ちをするなんて」
トルテスは手を止めると天を仰いだ。

「仕方ありませんよ。あの方はこの時をずっと待っていたのですから」
開いている頁の左には人の名前が、右は空白となっている。

トルテスは視線を落とすと、最後の頁に書かれている名前に人差し指で触れた。そこには四つブリアンテスの名が。

内ひとつは、セレネーラⅡモンストⅡブリアンテスと書かれている。彼女の上には姉シエルヴェリアの名もあつた。その傍らには何やら文字が書き連ねられている。

「今宵で現王政は終わりを告げ、新たな時代が幕を開く……これはそのため序章に過ぎないのですよ」

眩くと、トルテスは持っていた本を閉じた。

ふと本の表紙を、机の上に置かれたランプが照らした。魔力結晶の内のひとつ「光源結晶」を使う高価なランプが。

すると本の表紙に文字が浮き上がっていく。先程までは見えなかった文字がはつきり。

そこにはこう書かれていた。

犯罪者目録——と。

第三節 消えることのない過ち 1

「ありがとうございました」

一礼してから部屋を出ると、ソラは一呼吸置いて歩き出す。

人の気配がないところまで来た時、ふと背後を歩いていたラミナが口を開いた。

「あなたはどう思ってるのかしら？ ああ王様が言っていたこと」

「……ごめん、少し考えさせて」

歩きながらソラは王の話を思い出す。

数刻前のこと。ソラとラミナは、王の犯人に対する推察を聞いていた。

「どうしてトルテスさんが？」

ソラの問いに、王は口元の髭に触れながら答える。

「おそらく、新たな王家を擁立しようとしているのだろう」

「新たな王家？」

「元々この国は一つの家系が王を継いでいるわけではないことは知っているだろう？」

その話はソラも知っていることだ。

ヘルデイロは八賢者がいる時代から続く長い歴史を持つ国のひとつだ。

初めに建国したのはイヴェルテラとされており、その後には彼女が選んだ家系が王家として国を束ねていくこととなる。

しかしある時、野心を宿した者が王の座についたことで、イヴェルテラは家系そのものを変えた。そう、ユースが今守っているという「人を操る宝玉」を生み出した時のことだ。

「今でこそ我々の家系が何百年と続いてきてはいるが、それでも中には今の王家に不満を抱く者もいるのだ。トルテスはそのうちの一人なのだろう」

「あの……根拠となるものはあるのですか？」

「少し彼の家系について調べたことがあつてな。彼は追放された初代王家の末裔だったのだ」

確かに、もしその話が本当であるならば動機としては十分だ。先祖を王家から追放したことが許せず、その無念を晴らすために自分が返り咲こうと考えているのならば、現王に反旗を翻すことも領ける。

宝玉の存在やその封印を解除する方法を知っていることについても、初代王家の末裔であるならば辻褄が合うだろう。

しかしソラはすぐにその話を飲み込むことができなかった。仮に事実だとして、なぜ

今になって行動を起こす気になったのか。長年仕えていたのならば、機会は幾らでもあつたはずだと。

何よりメルヒが協力する理由が思いつかない。彼女はセレネーラのことを大切に思っているはずだ。それは彼女の立ち振る舞いからも感じられた。そんな彼女が果たして、愛する娘も同然の命を奪うことに賛同するだろうか。

「あの……ひとつ聞いてもいいですか？」

「なにかね？」

「メルヒさんが王様に命じられてヴェラドローネに手紙を送つたと聞きました。これは本当ですか？」

質問の内容を聞き、王の肩が僅かに動いたのをソラは見逃さなかった。

「ああ。貴殿らの今回の警護の配置について報告しようと思つてな」

「手紙は王様を書いたんですか？」

「いや。ガルディアン卿がある場所に案内せねばならなかったからな。メルヒに書くよう指示した」

ソラは「そうですか」とだけ言う。すると王は嘆息すると、

「なぜメルヒに指示したのか、気になるのかね？」

と逆に問いかけた。

問いに対しソラは静かに頷く。

「彼女の動向を探りたくてな。念のため監視の目もつけていた故、間違つた行動はして
いないはずだ」

微かに笑いを吹き出すような音が聞こえた。

ソラはラミナの方を一瞥する。表情は変えていないが、目が笑っている。

「兵士の殆どに二人を見張るよう指示しているとはいへ、貴殿らも気をつけてくれ。見
張りの兵士の中にも彼らの賛同者がいないとも限らないからな」

「わかりました」

ここまでは、王と話した内容だ。

歩きながら、ソラはこれまで自分が目にしたトルテスの動向も思い出す。

彼の動きでまず目についたのは、まるでトウネリを犯人に仕立てあげるかのような言
動を取っていたことだ。

加えて、今回のギルドへの依頼に反対意見を持っているようにも見えた。

（トルテスさんが本当に犯人……？ けど証拠が無いし、何よりボクは王様から話を聞
いただけだ）

王を疑うわけではないが、早急な判断は事をし損ずる。正体不明の違和感を今も拭い
きれずにいる。

ソラが考えを巡らせていると、ふと疑問に浮かぶことがあった。

「ねえ、ラミナさん。王様はトルテスさんがいる目の前で扉を開いたのかな？」

「でしようね。それがどうかしたのかしら？」

「いや。疑っているのなら、どうしてわざわざ見ている前で開いたのかなと思って」

「普通に考えれば、ここは最強の男が守っているぞって知らしめるためかしら」

「普通に考えなければ？」

ソラの問いかけに、ラミナは薄らと笑みを浮かべて答える。

「本当は警戒していないから——かしらね」

ラミナの答えは暗に「王は嘘をついている」と言っていた。

ソラは立ち止まり、王の表情を思い出す。淡々と話すその表情は険しく、何ひとつ嘘をついているようには見えなかった。

だが一瞬だけ、表情が変わった時があった。それはギルドに送られたであろう手紙を誰が書いたのかについて聞いた時だ。

「ラミナさん。これからトルテスさんの話を聞きに行きたいと思っっているんだけど——」

「あらそう、じゃあついて行く。ユースの前で言った以上、最後まで協力するわ。嘘は大嫌いだし」

嘘——そう、今回の件には何か重大な嘘が絡んでいる。そうソラは感じ始めているのであった。

◇

「それでは私はこれで失礼します」

メルヒはそう言つて軽く頭を下げると、空となった皿を手に部屋から出て行つた。

再び二人きりとなつたことで、トウネリとセレネーラは次の話題を探して始める。

ふとセレネーラは、トウネリの顔色を伺う。

「ずつと言うべきか言うまいか悩んでいることがセレネーラにはあつた。こんなことを言つてしまえば、また彼女が傷ついてしまうかもしれない。そんな思いから口に出せないでいる事柄が。」

それは今のトウネリのあり方について指摘することだった。

「セラ、どうかした？ そんな浮かない顔でこつちを見て」

顔を見られてに気づき、トウネリは小首を傾げる。

「あ、いえ！ なんでもないです」

セレネーラは慌てて顔を逸らした。

薄々思っていた。トゥネリがこれまで心から笑っていないと。彼女が見せているのはあくまで慈愛からくる笑顔だと。そしてそれはきつと、彼女の今のあり方故に出ている笑顔なのだと。

(トゥネリは私の初めての友達です。だからこそ……楽しい時は心から笑っていてほしい)

これはソラにも言えることだ。

二人が何を抱えているのかは、過去の話を聞いて理解している。二人は気にしていないと言ったがあれは嘘だ。気にしていないのであれば、二人のあり方は決して成り立たない。

(でも私は……当事者じゃありません)

気軽に踏み込んでいいものではない。そう思っているからこそ、セレネーラは悩んでいた。

だが同時にこうも思っていた。全くの第三者だからこそ、言えることでもあるのではないかと。

「ひとつ……聞いてもいいですか？」

「ん？ どうかした？」

唇が震える。嫌われるのではないかという恐怖を抱えながらも、セレネーラは意を決

して口を開いた。

「あなたは……自分のこと加害者だと思っていませんか？」

問いかげに、トウネリの顔色が変わる。はつきりと息を呑んでいるのが見て取れた。

「な、なんのことを……」

「六年前、あなたのお父様が起こした事件のことです」

唐突になぜこんな話題が上がったのか分からず、トウネリは動揺する。目が左右に忙しなく動き、呼吸することもままならない程だ。

「あなたがソラと一緒にいるのは、そのためですよ？ 私は加害者だって」

否定の言葉を返そうとするが、トウネリの喉から出ることはなかった。額にいやな汗が滲み始めている。

「エイネさんの……ソラの大切な人の命を奪ったのは自分だって」

セレネーラの言っていることは間違いではない。

再会した時、トウネリは葛藤の末ソラと共にいることを選んだ。

一緒にいる理由として言った「ギルドに属する者は二人以上で行動しなければならぬ」というのは嘘であり、本当はただ彼らに抱いている罪悪感からきた選択でしかなかった。

自分が彼女の代わりになるのだと。彼女が守ろうとした命を、今度は自分が守らなけ

ればならないのだと。それが精一杯できる償いだと考えて。

「気持ちばかりです。でもそれではあなたが救われない。だから——」

「救われない……ですって?」

怒気の入った声音に、セレネーラはハツとする。トウネリの目頭に涙が溜まっていると、漸く気がつく。

「私は……それでいいのよ……」

拳を強く握り、肩を震わせて、興奮で赤くなつた顔のままトウネリは叫ぶ。

「私は救われたくてあの人と一緒にいるんじゃないの! あなたの言っていることは認めるよ? けどそこに救いなんていらぬ! 私は救われていい人間じゃないから!」

なぜそこまで言うのか、セレネーラには理解できなかった。

父親の犯罪に多少なりとも加担してしまつたからというのは分かる。だがなぜ、そこまでに押し潰されそうなほどの重い感情を抱えているのかが分からない。

「この身を投げ打つてでも、私はあの人を守らなさいけないの! だって私は取り返しつかないことをしたから、あの人の大切な人を奪つたから! だから私には救いを求める資格も、幸せな時間を送る資格も——」

止めどなく燃え上がる感情を吐き出すように、トウネリが叫び続けようとした時だつた。

不意に乾いた音が部屋に響く。

痛みを感じ、トウネリは頬に触れる。言葉を失い、目の前の少女の顔を見る。

セレネーラは唇を噛み締めて睨んでいた。先程鳴ったのは、彼女が平手打ちをトウネリの頬に放った音だ。

「どうしてですか……？」

我慢できるはずもなかった。気持ちを汲み取れるはずもなかった。友人として見過ごせるはずもなかった。

ここまで重く苦しい感情を抱えているとは思わなかったセレネーラは、真つ直ぐトウネリの目を見てはつきりと言う。

「どうしてあなたはそうやって、自分ばかりを責めるのですか……？」

胸に手を当てて叫ぶ。このままにしてはおけない。このままではいずれ、彼女は己が生み出した呪いで身を滅ぼしてしまう。それでは誰も救われない。トウネリ自身も――彼女が守りたいと願っているソラも。

ならば自分が論さなければならぬ。それが友人としてするべきことなのだ。

「どうしてそうやって自分を否定しようとするのですか……！」

しかし頭に血が昇るに連れて、セレネーラの口調は激しさを増していく。

「私にはどうしてあなたがそこまで自分を責め立てるのかわかりません！ あなたがな

にをしたというのです！」

それに反発して、トウネリも声を荒げる。

「さつきから言ってるじゃん！ 私はある人にとって大切な人の命を奪ったから！ だから！」

「その原因は魔物です！ その魔物だって、あなたが生み出したわけじゃないでしょう！？」

「違う！ そもそも私が生まれなかつたらあの魔物は生まれなかつた！ ママが死ぬことも、パパがおかしくなつちやうこともなかつた！」

「そうやって自分を否定して、その先になにがあると言うのですか！」

「なにもないわよ！ いいじゃんなにも無かつたって！ それが当然の報いなんだから！」

激化していく口論。どちらも涙を溢れさせて叫び合う。

セレネーラはトウネリのあり方を正そうとして、トウネリは自分のあり方が正しいのだと信じたくて——引くに引けなくなつた二人は、自分が思つたことをそのまま吐き出し合う。中には興奮のあまり罵倒が飛び出ることもあつた。

そうして取っ組み合いには発展しないものの、彼女たちの口喧嘩はしばらく続いたのであつた。

第三節 消えることのない過ち 2

「それにしてもそのトルテスって男はどこにいるのかしらねえ」

城の中を歩きながら、ラミナが唇を尖らせる。

「王様の言葉を信じるなら、多分周囲に兵士が沢山いる部屋だと思う」

ソラはなにを聞くべきか整理しながら、ラミナの疑問に答える。

ふと向かう先に兵士が複数立っているのが見えた。彼らの近くには両開きの扉がある。それなりの大きさの部屋のようにだ。

「とりあえずあの人たちに聞いてみよっか」

おそらくあの部屋にトルテスがいるのだろうと予想はしながらも、ソラはそう言った。

「ほいほーい」

ラミナの気のない返事に苦笑しつつ、ソラは兵士たちに近づく。

「なんだお前たちは？」

城にいる兵士の大半とは初対面であるため、二人の姿を見て全員が警戒する。

ソラは特に臆する様子はなく、兵士たちに一礼した。

「ボクたち、ギルドの協力者ですけども」

「お前たちのような子供がか？」

兵士たちが怪訝な表情を浮かべる。彼らからすれば、姫護衛といった重要な任務に子供がつくというのが信じられないのだ。当然の反応である。

「はあ？」

しかしプライドの高いラミナにとっては聞き捨てならなかったようで、発言した兵士に鋭い眼光を向けた。

「ま、まあ、落ち着いてよラミナさん」

宥めるソラに対し、ラミナは牙を剥き出しにする。

「ふん！ 下らない発言に反応しないのが大人よねえ」

どこか挑発的な口調でそう言うと、ラミナは渋々といった様子で後ろに下がった。

眉が動いていることから気にしているのは明白のだが、無益な争い事を起こす気はないようだ。

ソラは安堵の息を吐いてから、本題を投げかける。

「あの……ボクたちトルテスさんを探しているんですけど、どこにいるか知りませんか

「？」

「トルテス様ならその書庫にいらつしやる。だがくれぐれも無礼のないようにな」
「はい、ありがとうございます」

また一礼して、ソラは指示された部屋の前に立つ。指示されたのは予想通り、彼らの側にある二枚扉の部屋だった。

念のために部屋の扉を軽く数回叩き、中の返事を伺う。すると中から「どうぞ」という声が響いてきた。

ソラは両手で扉を開いて部屋に入る。その後が続いてラミナも入っていく。

部屋の中には大きな本棚が幾つもあった。本を読むのが好きなソラにとっては、思わず目移りしてしまうものばかりが棚に並べられている。

「これはソラ様。どうされましたか？」

扉から入って真っ直ぐ向かったところ。本棚に囲まれた机と椅子の付近にトルテスの姿があった。

(ソラ様……?)

呼ばれ方を少し気にするソラであったが、今は大した問題ではない。

辺りを見回しながら、まずは素朴な疑問を投げかけた。

「……がトルテスさんの部屋なんですか？」

「いえ。ここはあくまで城が管理している本の置き場ですよ。まあこの部屋の管理は全て私に委ねられているので、あながち間違いいではないかもしれませんが」

軽く微笑みながらトルテスは答えた。

彼の言葉通り、ここにはヘルデイロにとつて重要な書物も多く保管されている。歴史に纏わるものや、これまで国が行なつてきた貿易や政策の記録など様々。中には伝承の類の物も置かれている。

トルテスは普段からここで仕事を行なつていた。書庫の管理も兼ねてよく利用しているのである。物静かな空間であるため、誰にも邪魔されないのが利点だと彼は笑つて語つた。

「それで、なにか用があつて来たのでしょうか？」

問われて、ソラはまず切り出すべき疑問を口にした。

「王様から聞きました。トルテスさんは初代王家の末裔だつて」

「なるほど、その話ですか……」

トルテスは嘆息を漏らす。

「やはり王は、私のことを疑つておいでのようですね」

物憂げな表情でトルテスは扉の方を見つめる。正確には、扉の向こうにいる兵士たちを。

「私の周囲に兵士が多くいるため、薄々感じてはいたのですが」

「それで、本当なんですか？」

「ええ、事実ですよ。だから私は宰相としてこの城に仕えているのです」

一体どういった意味なのか分からず、ソラは小首を傾げる。

するとトルテスは魔法で操り、一冊の本を机の上に広げた。

「私は幼い頃から、父や母加えて祖父母からこう言われてきたのです。私たちはこの国で罪を犯した者の血を引いている。故に私たちは、この国のために身を捧げなければならぬのだと」

頁を捲りながら、トルテスは表情を曇らせて答える。

「そんな……だってトルテスさんたちはなにもしていないじゃないですか」

「そうですね。ですが私たちの家系を遡れば、歴史上に残るほどの大罪を犯した者の名が上がる。これはどう取り繕っても覆すことのできない事実です」

ソラはそのことを強く否定はできなかった。

実際そういつた血を引くものが迫害され、死に至ったという例が歴史書物に記されているほどだ。その結果滅びた家系も存在するという話もある。

「でも、だったらどうして王様はトルテスさんを迎え入れたんですか？」

「あなたのお母様の推薦ですよ、ソラ様」

「ボクの？」

「はい、そうです」

トルテスは思い出すように目を細めると、語り始めた。

当時まだ二十を迎えたばかりだった頃。トルテスは親の言いつけの通り、国に貢献できる人間を目指し勉学の日々を送っていた。時には国外へと赴き、その国の文化や歴史を学んだりとしていたのである。

そんなある日のこと。彼の下に一人の女が訪ねてきた。それがヴェルティナだ。彼女は当時の彼にこう言ったのだという。

「あなたは確かに彼の王の血を引いている。もしそれを負い目に感じているのであれば、現王のために尽くしてはみないか」

当然トルテスは、その話をすぐに飲むことは出来なかった。だが同時に、それが自分の求める最高の場であることも理解していた。

数日後、彼はヴェルティナの誘いを受けてヘルデイロ王の側近となったのである。

「あなたのお母様にはとても感謝しているのですよ。おかげで私は忙しくはありますが、幸せな日々を送れていますから」

謁見の間で見せた厳しい表情とは変わり、トルテスは今朗らかな笑顔で話している。その笑顔が、彼にとってどれだけ救われた話であったかを物語っている。

嘘偽りなどない。彼は本心で話している。そうソラは感じていた。

このまま思わず母親について聞きそうになるが、ソラはぐつと堪える。今はそんなことを聞いている場合ではない。

ふとトルテスが開いている本に目が行く。

(あれって……もしかして……)

視線を落としたと同時に、トルテスは頁を開く手を止めた。

思わずソラは彼の顔をまじまじと見つめる。目が何かを語っている。

もう一度本の頁に視線を向けて、ソラは察した。トルテスが何を求めているかを。

故に最後にひとつ、このような質問を投げかけた。

「トルテスさんは……かつての王のことをどう思っているんですか？」

問いかけに対しトルテスは本を閉じると、ソラの顔を見る。ソラは真つ直ぐな瞳で答えを待っている。嘘偽りのない答えを。

少し間を置いて、トルテスは口を開いた。

「イヴェルテラは正しい選択をしました。彼の王は追放されて当然の行いをした。自国の民を操るなど、王としては失格です。ですが……こうも思うのですよ。彼はもしかしたら、ただ国を守りたかっただけなのかもしれないと」

ソラはトルテスの答えを噛み締めるように目を閉じる。そして、

「わかりました。聞きたかったのはこれだけです。ありがとうございました。朗らかな笑顔で一礼すると、部屋を出て行った。

「は？　ちよつと。まだ聞くことあるんじゃないの？　ちよつと待ちなさいよ！」

あまりに突拍子もなかったために、ラミナは困惑しながらも追いかける。

「ちよつと待ちなさいって言ってるのよ！」

ラミナの叫びにソラは立ち止まった。

「どうかしたんですか？　ラミナさん」

「あんたねえ、もつと他にも聞くことがあるんじゃないの？　本当は末裔じゃないんじゃないかとか、全部王様が仕組んだことじゃないのかとか」

ラミナは自分が考えていたことをあげるが、ソラはその全てに首を振って否定する。

「うん、無いよ。もう十分わかったから」

「は？　あれで何が分かったっていうのよ」

「少なくともトルテスさんは犯人じゃないし、彼が末裔だつて話も嘘じゃないことが分かった」

なおのことわけが分からず、ラミナは奇怪な物を見る目でソラのことを見つめる。

「あれが全部あいつの嘘だつて可能性もあるんじゃないの？」

「大丈夫。あの人は全部正直に答えてくれたよ。ねえ、ラミナさんは見てた？　トルテ

スさんが開いていた本を」

「はあ？ ごめん、私は本とか興味ないから見てなかったわ」

「そっか」

ソラは思い出す。トルテスが開いていた本を。あれは彼が謁見の間でも手にしていた本だ。その中には、大勢の人間の名前が書かれていた。

「あの本ね、多分ここ数年で犯罪を犯した人の名前を綴ったものなんだ」

「へえ……つまりあの男は解決の鍵をこつそりあんたに見せてたってわけ？」

「うん。きつとあの人も、心の中では今回の件を快く思っていないんだよ。それでね、あの人が最後に開いていた頁にこう書かれてたんだ」

ソラが囁くような声で口にした内容を聞き、ラミナは珍しく目を見開く。それだけの真実が秘められていたからだ。

「あんた、それ本当なの……？」

「うん。おかげで漸く全部が結びついたよ。あとはボクの考えが正しいかどうか、真実を確かめるだけ」

微かな笑顔を消し、ソラは表情を曇らせる。

ふとラミナに言われたことを思い出していた。謁見の間で指摘されたことを。

(ラミナさんの言う通り、今回の一件はボクに原因があったみたいだ)

そしてもうひとつ思い出す。まだ生まれたばかりの頃に目にした、母親の顔を。

(お母さん……ボクはお母さんが何を考えているのか分からないよ)

唇を噛み締めて、ソラは頭に浮上したものをかき消す。真つ直ぐ前を向いて歩き出す。

「急いでトウネリたちのところに戻ろう」

ソラは足早にセレネーラの部屋へと向かっていく。

その背中を見つめながら、ラミナはニヤついた笑みを浮かべて「へえ、面白くなってきたじゃない」と呟いたのだった。

一方、書庫に残ったトルテスは机に置かれた本を手にとって嘆息する。

「良かったのー？ あんなことして」

本棚の影から、シエーラが顔を出す。

「あれ、立派な裏切り行為じゃない？」

「私は確かにあの方への恩義があります。かと言って全てに従うつもりはないということですよ」

トルテスは本の頁に指を添える。

そこにはこう書かれていた。シエルヴェリア姫はギルドにいる——と。

第三節 消えることのない過ち 3

「え、ええと……これは……？」

セレネーラの部屋に戻るなり、ソラはきよとんとした表情になった。

トウネリセレネーラの二人が、お互いの顔を見ないように体ごと別の方向を向けている。目元には涙の跡がくつきりと残っており、ギスギスした空気が漂っている。

いまいち状況が理解出来ずに困惑するソラ。対し全てを察したラミナが背後で腹を抱えている。

「えつと……二人ともどうしたの？」

「なんでもないわよ」

「ええ、気にしないでください」

声音が低い。何かあつたのは明白だ。

すると笑いを堪えていたラミナがげらげらと笑い出した。

「あなた達ほんと仲良いわねえ？ どうして出会って一日も経っていない者同士で喧嘩なんて出来るのかしら！」

ラミナが大きな笑い声を上げると、トウネリが軽い舌打ちをした。

「喧嘩？ どうして——」

どうしてこんな時に。そう言い掛けて、ソラは言葉を飲み込む。喧嘩するほどのことだ。二人にはきつと、何か重い事情があるのかもしれない。

「別に大したことじゃないわよ」

顔を逸らして、トウネリが問いかけに答える。

「そうです。大したことじゃありません。気にしないで下さい」

セレネーラも唇を尖らせて言う。

「で、でも……」

だがソラとしては気に止めないわけにもいかない。友人である二人が喧嘩したとあっては、なんとか仲直りしてほしいと思うのが友として当然の心理である。

（どうしよう……）

友人同士の喧嘩を止めるという経験が無いに等しいソラは、頭を悩ませる。どうすれば二人は仲直りしてくれるだろうか。

そう考えていた時、トウネリが突然立ち上がった。

「それより、戻ってきたってことは何か分かったってことでしょうか？ 話さないよ」

どこかトゲのあるトウネリの物言いに、セレネーラも立ち上がった。

「どうしてあなたは人に当たっているんですか？」

セレネーラの指摘に、トゥネリは眉をしかめる。

「別に当たってないわよ。どこをどう取ったらそう聞こえたわけ？」

「だってあなた今、明らかに低い声だったじゃないですか？」

「低い声だからってどうして当たってるってことになるのよ」

「それにその強い口調が当たってるって言うてるんですよ」

「はあ？」

二人の間に火花が散っているのが見える。

「ちよつと二人とも落ち着いてよ」

ソラはおろおろしながら宥めようとするが、二人は同時に「あなたは黙ってて」と言つてひと蹴りした。

「なによ。わたしの何が気に食わないってわけ？」

「別にそんなこと言っていないじゃないですか」

「言ってるでしょうが。じゃなかったらどうしてわたしにあんなことを言うのよ」

「それはあなたのことを思つてのことです」

二人の口論がまたエスカレートしていく。お互い睨み合い、今にも掴み合いを始めそうな程の剣呑な雰囲気だ。

「わたしのことを思っているなら何も言わずに黙ってなさいよ」

「出来ません」

「なんでよ」

「なんででもです」

セレネーラの言葉に、トウネリはあからさまな舌打ちをした。

「意味わかんない。自分がお姫様だからって偉そうに——」

「トウネリ！」

トウネリの言葉を遮るように、ソラが声を上げた。

普段温厚な彼が叫ぶのを知らないトウネリは、肩をびくりと跳ねさせる。

「ごめんね、驚かせて。でも今のはさすがにどうかと思うよ？」

言われて、トウネリは自分の発言の過ちを理解した。思わずセレネーラの顔を見る。

「あっ……」

セレネーラは涙を溢しながら、声を堪えるように唇を噛み締めていた。

「私だつて……私だつて好きでここに居るわけじゃないのに……ッ！」

嗚咽するように声を震わせるセレネーラ。その姿を見て、トウネリは堪らず顔を逸ら

した。

「ごめん……ちよつと頭冷やしてくる」

それだけ言うと、トウネリは足早に部屋から出て行く。

「トウネリ……」

止めることも出来ず、ソラはただトウネリの背中を見送った。

セレネーラは扉が閉まったと同時に、ソファーにへたり込むように腰を落とす。両手で顔を隠し、小さな声で泣き始める。

「ごめんなさいソラ……ごめんなさい……!」

ソラは静かに隣に座る。そしてセレネーラの肩に優しく触れた。

「こんな時に……私……!」

「ねえ、良かったら何があったのか教えてくれる? 何が原因なのか」

ソラの言葉にセレネーラは顔を上げる。上げて、首を横に振った。

「できません」

「うん、そっか。でもどうして?」

「だって……トウネリがきつと、あなたにだけは知られたくないと思ってるから」

「そっか……」

ソラは優しく微笑むと、セレネーラの頭を優しく撫でた。

「うん、わかった。セラがトウネリのことを思っただけ行動したことも、トウネリが何かを抱えていることも。それだけ分かれば十分だよ」

「ソラ……」

撫でながら、ソラは内心で深く項垂れる。二人の喧嘩もまた、自分が原因なのだ。それでも表には出さず、ソラはセレネーラのことを慰めていた。

「あなたは本当に優しいのですね」

「ううん。ボクはただ当然のことをしているだけだよ」

そして同時にこうも思っていた。果たして今の彼女に、たどり着こうとしている真実を明かすべきだろうか。



部屋を飛び出したトウネリは、城内にある噴水の前で立ち尽くしていた。

「——私だつて好きでここに居るわけじゃないのに……ッ！」

はつきりとしたセレネーラの声が頭に響く。

（わたし……あの子になんてことを——）

言葉を切つて、唇を噛み締める。

トウネリはセレネーラとここで初めて話した時のことを思い出す。

あの時、きつと彼女はここで泣いていたのだ。自分の置かれている状況がわからず、不安と裏切られたという思いから泣いていたのだ。

そんな彼女が笑つて暮らせるようにしてあげたい。そう思い、ここで彼女に優しく声を掛けたはずだ。だということに、自分は一体何を口走つたのか。

「——お姫様だからって偉そうに」

思い出し、トウネリは自分の行動を呪う。

セレネーラとて、今の生活を望まない日もあつたことだろう。自分の命が脅かされようとしている今ならば、尚更思つていてもおかしくない。

そんな中軽々しくあんな発言をしたことを、何より彼女が自分のことを思つているとを理解しながらも口論にまで発展させてしまったことを、強く後悔していた。

「わたしはどうしたら……」

答えはすでに出てきている。だがトウネリはその答えを行動に移せずにいた。

「あらあら、子犬ちゃん泣いて泣いているわあ」

不意に背後から声が出た。

聞き覚えのある嫌味な声に、トウネリは奥歯を噛み締める。

「なによ？ 何か用？ ラミナ」

振り返り、ラミナを睨みつける。

「あら怖い。狂犬が私を威嚇してくるう」

対しラミナは笑みを浮かべて、侮蔑の視線を向ける。

トウネリは不快感を露わにして舌打ちすると、また噴水の方を向いた。

「あらあら、どうしたのかしら？　いつもはあんなにも嘯み付いてくるのに」

「うるさい。わたしはあんに付き合っているほど暇じゃないのよ」

「へえー。そんなこと言うなんて、やっぱり将来は父親と同じ道に行くのかしらねえ？」

「なんですつて？」

聞き捨てならない発言に、トウネリは振り返る。

「あら？　だつてそうでしょう？　別に私にも悪いことしてないのに、そういう態度

を取るんだもの。そうなると思えないわ、私」

「は？　あんたが私を蔑むような目で見てたからでしょうが」

「そうそれそれ。そう勝手に思ったから、お姫様にあんな発言したのよねえ？」

「それは——」

言い返そうとして、トウネリは口を噤む。否定はできなかつた。実際そう捉えられて

もおかしくはない発言だつたからだ。

それを見て、ラミナはくつくつと悪戯な笑みを浮かべる。

「ほら否定できない。やっぱりそういうことだつたのねえ？」

「ちが……ッ！」

「じゃあどうしてそうやって言葉に詰まるのかしらねえ？　本心ではあのお姫様のこと

疎んでいたんでしよう？ 自分のことを見下しているって」

「ちがう……わたしは……」

やはり強く否定できない。事実口論になった時、そういう思いが少なからず芽生えていた。自覚しているからこそ、トウネリはラミナに食ってかかるほどの力を持てなかつた。

「あの普段優しい彼だって、本当はあなたのことを見下しているかもしれないわねえ？」
「違う！ ソラは絶対にそんなこと思っていない！」

「あら、本当にそう言い切れるのかしら？」

「それは——」

また言い淀むのを見て、ラミナは蔑んだ瞳で笑った。

「あなたはただそう信じただけ。自分は違う。自分はそうありはしないと、なんの根拠もなく抱いた思いにただ寄り縋っているだけ。本当は臆病なだけのくせに、誰かの真似をして気高く振る舞って自分を偽っているだけ。そうあのお姫様にも指摘されたのではありませんか？」

ラミナの指摘を受けて、トウネリの目から涙が溢れ出す。

「けどそれを認めたくなくて、あなたはあんなにもお姫様に強く反発した。それって、死んだことを受け入れられずに生き返らせる衝動に駆られたあなたの父親と、一体どんな

違いがあるのかしら？」

「違う……違う、わたしは……ッ！」

「いい加減認めなさいよ。あなたはただの弱虫ちゃん。誰かと一緒にいないと自分のあり方を決められない、ただの臆病者だって」

なにも言い返せない。それでも言い返そうとして、トウネリは涙声で叫んだ。

「どうしてもあなたはそうやって！ わたしのことを否定するのッ！」

別に認められたいわけでもない。ただ疑問に思っただけだ。いつもいつも、何故そうやって自分を強く否定するのかと。

問いかげに対しラミナは近づくと、微笑んでそっとトウネリの頭に手を置いた。

「だって私、あなたみたいな嘘つきで弱虫なやつが大嫌いなもの」

トウネリは息を飲む。ラミナの瞳に宿る、暗い闇の奥底に吸い込まれていく。

「自分が抱いている思いを偽ってるくせに、偽ったまま平気で他者に近づくやつが嫌い。例えば抱いた思いが本物だとしても、それを本物だと他人に胸を張れない弱虫が嫌い」

ラミナはトウネリの頭を徐々に締め付けていく。

「だから私はあの彼も嫌いなよ。あの子も自分の本心がただ臆病から来ているものだって気づいていないもの。人を傷つけたくない？ 違うでしょ。あの子はただ自分が誰かを傷つけたという恐怖を捨て切れず、その本心を無意識に偽っているだけ。誰か

の笑顔を守りたいって思いも、その傷つけてしまった誰かに言われたからそうしているだけ——」

ラミナは溜め込むように一度間を置くと、はつきりと言った。

「どうせ本心ではそんなこと思ってたなくせに」

そこでトウネリは我に帰った。頭を掴んでいる腕を掴み返し、奥歯を噛み締めて引き剥がそうと力を込める。

「違う……ッ!」

「は? なにが違うって言うのかしら?」

ラミナは首を傾げる。

するとトウネリは唇を震わせながら言った。

「わたしのことは別に否定されたたっていい。けど本心から誰かの笑顔を守りたいって思ってるあの人のことを否定なんかさせない!」

「あんたほんと気持ち悪いわよね。あの子のことになると、どうしてもそんなに盲目的になれるのかしら?」

「あなただって、ユースには対して盲目的でしょ!」

トウネリの発言に、ラミナは大きく聞こえるように舌打ちする。

「違うわよ? 私は確かに彼にべったりくっついてるけど、それは彼の使い魔だからだ

もの」

「えっ……っ？」

トウネリは我が耳を疑った。ラミナが使い魔——そんなことはユースからも聞いたことがなかった。

「私もお姉様も、あなたと違って嘘もつけないし一人では生きていけない——魔力を失えば消滅する使い魔。そんな相手を否定する資格が、あなたにはあるのかしら？」

トウネリは言葉を失う。

使い魔と聞き、彼女の脳裏にはある顔が浮かんでいた。自分を助け、亡くなつてしまった女性の顔が。

(ラミナも……あの人と同じ使い魔……!!?)

次々と昔の記憶が蘇ってくる。当時の雨音が噴水の水音と重なる。

そして——強い雨の中、女性が着ていた服を抱えてふらふらと立ち去っていくソラの姿が視界に映った。

「うう……ぐっ……え……！」

耐えられず、トウネリは蹲つて胃の中にあつた物を吐き出す。嗚咽とともに「ごめんなさい」と言葉を繰り返す。

「私が……私が……ッ！」

その姿を見て、ラミナは心底あきれ返った表情で見下した。

「ほんとあなたにも変わってないのね。せつかくユースがあれだけ鍛えてあげてたっていうのに」

ふとラミナは周囲を見渡す。トウネリの叫び声を聞きつけたのか、いつの間にか城の見回りをしていた兵士たちが立ち止まって二人を見ていた。

ラミナは舌打ちすると、兵士たちを見回して鋭い眼光を向ける。

「悪いけど私今機嫌が悪いの。持ち場に戻らないと……切り刻むわよ?」

一際低い声とともに、ラミナの右腕が鋭い刃へと姿を変えた。

それを見た兵士たちはどよめくと、早々にその場を立ち去っていく。

兵士たちの様子を眺めてから、ラミナは腕を元に戻す。そしてトウネリの方へと視線を落とした。

いまだに誰かに対し、謝罪の言葉と自分が悪いのだと繰り返している。

「ほんと……情けない女」

ラミナは落胆した声でそう言うと、屈んでトウネリの髪を引つ掴んだ。

「答えなさいよトウネリ。あなたは本当は何がしたいのよ?」

「わたしは……わたしは……っ」

「醜いわ、あなた。そんなんで本当に何かを守れると思っっているわけ?」

トウネリは何も言い返せず、すすり泣く。

ラミナは大きく嘆声と出すと、突き飛ばすように髪を離した。

尻もちをついて、トウネリは震えながらラミナの顔を見る。まるで幻滅でもしたかのように、心底落胆した表情を浮かべている。

「今のあなたじゃ、今回の任務は務まらないわ。さつさと家に帰りなさい」

吐き捨てるように言うと、ラミナは踵を返して立ち去っていった。

残されたトウネリは蹲って咽び泣く。言われたことは何も間違っていないと理解しているが故に、悔しさで唇を噛み締める。

自分が何のために戦うのか。見つけて掴んだはずの答えが手のひらから消え、悲鳴にも似た声で泣き叫んだ時——誰かが彼女の体を優しく包み込んだ。

第三節 消えることのない過ち 4

六年前。魔物騒動が起こってからからのトウネリは、数日塞ぎ込んでいた。

食事を出されても一切手をつけず、両親と過ごした部屋の片隅で膝を抱える日々を送っていた。

彼女は考えていた。

父親が狂ってしまった時、側にいて支えることが出来たならばこんなことにはならなかったのではないか。あるいは母親が息を引き取る原因を作った自分が生まれなければ良かったのではないか。

考えても取り返しのつかない事だと分かっているながらも、
「自分はどうすれば良かったのか」ということばかり考えていた。

それだけではない。彼女の脳裏には離れることのない、消すことの出来ないものがあつた。

雷鳴轟く嵐のような豪雨の中、一人歩く少年の背中。その少年の手には、失くしてし

まった大切な人が着ていた泥だらけの衣服が握られている。

事件の時に初めて出会い、救ってくれた少年ソラ。彼に対しても、取り返しのつかないことをしてしまったと。

胸に渦巻く罪悪感。両親がいなくなってしまうことで生まれた虚無感。そして何よりそれらから来る孤独感が心を蝕んでいた。

もはや涙は枯れ果て、生きる気力すら失っていたトウネリ。そんな彼女をなんとか慰めようと、共に暮らしていた老夫婦たちは必死になった。

毎晩必ず彼女のいる部屋で寝泊りし、例え食わずとも食事を用意し、どんな時も彼女の側を離れなかった。

老夫婦の温もりを感じたトウネリは、徐々に生気を取り戻し、いつしか少しだけ笑うようになっていた。

それでも彼女の心の中に、罪悪感は居座り続けていた。

少しずつ食事を取るようになったある日のこと、一人の女性がトウネリの下に訪れた。

女性の肩書はこの国にあるギルドの支部長——そう、ヴェラドローネだ。ヴェラドローネはトウネリが「魔物騒動の首謀者の娘」であることを知っていて訪ねてきたのである。

ヴェラドローネは言った。「今お前は、今回の騒動に対して罪悪感を感じているな」と。

彼女の言葉にトウネリは静かに頷いた。

ヴェラドローネは「ならば」と言つてこう続けた。「もしお前があの騒動と同じことが起きてほしくないと思うのならば、ギルドに來い」と。

トウネリは答える。「わたしにはその力がありません。力がないから、あの時なにもできなかったんです」と。

トウネリの答えに、ヴェラドローネは笑つてこう言つた。「ならばギルド最強の男を、お前の師匠にしてやろう。そうすれば力がつくはずだ」と。

もしもお前が望むならば、王都のギルドに來い。そう言い残し、ヴェラドローネは去つていった。

その翌日。トウネリはドウエセの街を出て、王都へと旅立つた。

もしもあの時自分に力があつたならば、事件が起きたとしても誰も犠牲になることはなかった。

あの日犠牲になつた者のためにも、贖罪のために生涯を過ごさなければならぬ。あの日救つてくれた少年のように、今度は自分が救えるようにならなければならぬ。

そんな呪いにも似た思いを抱えながら。



噴水の縁に座ると、トウネリは一息吐く。

「ありがとうございます」

トウネリは右隣に座るメルヒに感謝を述べる。

咽び泣いている間、彼女は体を優しく抱き締めていた。母親に包まれているかのような感覚に、トウネリは次第に落ち着きを取り戻して今に至る。

気恥ずかしそうに縮こまり、トウネリはメルヒの顔色を伺う。心配そうに見つめる彼女の瞳は慈しみに満ちている。

「すみません……庭を汚してしまつて」

何も答えてくれない気まずさから、トウネリは思いついたことを口にする。

「大丈夫ですよ。あれだけのことを言われたのですから仕方ありません」

やはりラミナとの会話を聞いていたらしく、メルヒはそう言つて微笑む。

「あの……いつから聞いていたんですか？」

「最初から聞いていました。暗い表情で出ていくのが見えたので」

自分で聞いておきながらどう返せばいいか分からず、トウネリは顔を伏せる。

「本当は割つて入ろうかとも思つたのですが、いらぬ衝突を生むと思つて。こちらこそ助けに入らず、すみません」

「いえ、いいんです。あいつが言っていたことは、別に何も間違っていないから」

トウネリはセレネーラやラミナに言われたことを思い返す。

彼女たちの指摘はなにも間違っていない。全体的を射ている。

常々自覚していることだった。自分はまだ弱い。その弱さがいずれ、あるいは今すぐにでも災いを起こしてしまうかもしれない。かつて父がそうであつたように——いつかまた罪を犯してしまうかもしれない。

その恐怖から自分のことを否定し、例えやり方を間違えようとも、決して父親のようにはならないようにと足掻いてきた。もう二度と同じ罪は犯すまいと強い力を求めた。

「わたし、分らないんです。自分が本当はどうしたいのか」

ソラと再会した時、トウネリは嬉しさのあまりすぐその場を離れた。また再会できなかった。自分の命を救ってくれた人が会いに来てくれた。そう思ったのだ。

自分の部屋に戻り、トウネリは自分を呪った。彼の大切な人は自分がこの手で奪ったも同然だ。そんな自分が、どうして再会を喜ぶ資格があるのかと。

「あの人は関わらないでおこう。再会した時、最初はそう思つたんです。でも気づけば、あの人と一緒にいたいと思うようになってた。そんな思いを正当化しようと、わたしはあの人を守らなきゃいけないんだって考えました。わたしはあの人の大切な人を奪つた。だつたらわたしには彼の命を守る義務があるって」

メルヒは静かにトウネリの話を聞いていた。相槌は打たず、繰り返し領きながら聞いていた。

「わたしは……どうしたいんでしょうね？」

問いかけに対し、メルヒはトウネリの肩に左手を優しく置いて答える。

「それは、あなたが考えて導き出すものですよ」

「でも……すぐには分からないかもしれない」

「いいじゃないですか。沢山時間をかけて、ゆっくり一歩一歩答えに近づいていけば」

トウネリは俯く。それではダメなのだ。それでは、自分は弱いままなのだ。

表情で思いを察すると、メルヒは微笑む。

「それでも今すぐに答えが欲しいというのなら、ひとつ解くための鍵を教えます」

「解くための……鍵……？」

「ええ……」

そしてメルヒは右手で優しく、トウネリの心臓付近にそつと触れた。

「あなたはすでに答えを持っていますよ。あなたはただ、そんな資格はないと言って封

じ込めているだけ。自分のことを許す勇気——それがあなたに必要な唯一の鍵です」

「自分のことを許す勇気……？」

「自分を許せないという気持ちは私にも分かります。ですがそれだけではダメなんで

す。時には自分の過ちを必要以上に責めず許してあげる勇氣も必要なんですよ」

果たして今の自分にそれが持てるだろうか。トウネリは自分の胸に手を当てて考える。

ソラや彼を慕っていた女性にしまったことを。それだけではない。あの時一緒にいた子供たちや父が狂うきっかけを生み出してしまったこと。様々なことが彼女の中で罪として渦巻いている。

それらを許すことはできるだろうか。

(わたしには……そんなこと……)

唇を固く閉ざし俯く。今のトウネリには、自分を許せるほどの心の余裕がなかった。

「まず手始めに、姫様と仲直りすることからやってみてはどうですか？ 喧嘩してしまつたのでしょう？」

「セラと……仲直り……」

トウネリはメルヒの提案に同意する。頭に血が上っていたとはいえ、彼女にはひどい一言を放つてしまった。そのことを謝らなければならない。

だがトウネリはラミナに言われたことを気にしていた。彼女の言う通り、今の自分では足手纏いにしかならない。そんな状態でおずおずと彼女の前に姿を出していいのだろうか。

ふとセレネーラが口にした言葉を思い出して口を開く。

「メルヒさんは今の生活や今の自分が好きですか？」

トウネリの問いに、メルヒの表情が一瞬だけ強張った。

「そうですね」

一息置いて、メルヒは黙する。そして立ち上がり、噴水の方に体を向けた。

「好きか嫌いかでいえば、あまり好きではないですね」

「それは生活ですか？ それとも自分が？」

「どちらもです。すいません、先ほど偉そうに言っておきながらこんな答えで」

トウネリは俯く。メルヒもまたなにかを抱えているのだとすぐに察することができた。

「姫様がそう言ったのですか？」

「はい。好きでここにいるわけじゃないのにつて」

「そうですね。そんなことを」

二人の間に会話が途絶える。

水の流れる穏やかな音だけが響き渡る。

「メルヒさん、わたし——」

ふとトウネリがなにかを言おうとした時、

「トウネリ様。ひとつ聞いてもよろしいですか？」

メルヒがその言葉を遮った。

「あなたはソラ様のことが好きですか？」

唐突なその問いかけに、トウネリは言葉を失う。一体彼女はどのような意味で、どうして今そんなことを問いかけるのかを。

「どうしてそんな急に」

答えが出ず、トウネリはそのままの疑問を投げかけた。

するとメルヒは天を仰いで、答えの代わりに自分の思いを口にする。

「私は姫様が好きです。あの方のことを大切に思っています。あの方の苦しみや悲しみを無くしてあげたい。そう常々思っております」

メルヒは真剣な眼差しでトウネリを見る。

「あなたは どう思っていますか？」

「わたしは……」

自然とトウネリは口を開き、答えようとした。

「わたしだって——」

答えようとして気がついた。

（ああ……そうか、わたしは……）

自分には彼に償わなければならない罪があるから。あの日お願いされたから。だから自分はソラと一緒にいることを選んだ。そうトウネリは思っていた。

だが違うことに、彼女は気がついた。

(わたしはただ……ソラ笑顔を守りたいだけだったんだ……)

ラミナの言う通りだった。ただ本心を偽り、別の形で本当の想いを正当化しようとしていただけだ。それは結局ただの嘘でしかない。

トウネリは目蓋を閉じる。そして笑みを溢す。ようやく一つだけ、答えが見つかったと。

その答えがただの依存でしかないのは分かっている。それでもこの気持ちは紛れもない本心であり、捨てることのできない想い。

「あいつが誰かの笑顔のために戦うなら、あいつの笑顔を守るために戦いたい」

「……トウネリ様」

「メルヒさん、ありがとうございます。おかげで少しだけ、前に進めた気がします」

トウネリは立ち上がる。今の彼女の顔は少しだけ晴れやかなものになっていた。

「いえ、私はなにもしていませんよ？ トウネリ様がご自分で見つけたのです」

メルヒも微笑みかける。

「メルヒさんって優しいですね。抱き締められた時、まるでお母さんに包まれているみ

「たいでした」

「母親……ですか……」

トウネリの言葉に、メルヒの顔が一瞬だけ曇る。

「あつ、すいません。余計なことを」

つい思ったことをそのまま口に出してしまう癖を治さなければ。トウネリは反省し

謝罪する。

「いえ、お気になさらず。もしそうであればどれだけ良かったかと、そう思っただけです」

するとメルヒはすぐに笑顔を取り繕い、頭を深々と下げた。

「トウネリ様。同じ言葉をあなたに掛けることになりましたが、どうか姫様のことをよろしく願います」

「はい。わたしもあいつと一緒に、セラが心から笑えるようにしてあげたいですから」

トウネリも頭を下げると、駆け足でその場を去っていった。

その背中を見送り、メルヒはまた表情を沈ませる。彼女の頭の中では、トウネリに言われた言葉が反響している。

「今の私にその資格はありませんから」

何かを憂うようなメルヒの眩きは、噴水の穏やかな音に吸い込まれるように消えた。

第四節 嘘という名の大罪 1

「ごめんなさい！」

トウネリが部屋に戻るなり、セレネーラはそう言つて頭を深々と下げた。

「私トウネリの心に踏み込んで——」

トウネリが部屋にいない間、セレネーラはずっと後悔していた。彼女にとって踏み込んでほしくない事柄だということも、安易に指摘するべきでないことも。彼女を思つての行動が、却つて彼女を傷つけてしまう。そう分かつていたはずなのに、と。

そんなセレネーラの行動を、ソラはただ黙つて見守つていた。二人ならちゃんと仲直りできると信じていた。

「お願いです、私の頬を叩いてください」

セレネーラの懇願に、トウネリは無言で手をあげた。

思わず目を瞑つて身構えるセレネーラ。

すると彼女の思いとは裏腹に、トウネリは優しくセレネーラの頬に触れた。

「そんなことしないわ。あなたの言つていた事はなにも間違つてない。おかげで少しだ

け、前を向けた気がするから」

トウネリは笑う。今の彼女の心には、ほんの少しだけ晴れ間がさしている。

「わたしの方こそごめんさい。色々酷いこと言って」

「トウネリ……」

二人はお互いを見つめ合う。二人の間に走った亀裂が、少しずつ修復されていく。

「気持ち悪い……」

そんな二人に釘を刺すように、壁に寄りかかっていたラミナがぼつりと呟いた。

しかしトウネリは一切動じず、ラミナにも微笑みかける。

「一応わたし、あなたにも感謝しているのよ？」

「なにそれ、寒気がするからやめてもらえろ」

ラミナが身震いするような素振りをするのを見て、トウネリは肩を竦める。別にどう

という事はない。なにを言っても彼女が同じ反応を示すのは分かっていた。

(やつぱりこいつ苦手だわ)

内心苦笑しつつ、ソラの方に視線を向ける。視線を受けて、ソラは静かに頷いた。

「さてと、じゃあソラ、なにが分かったのか教えてもらえろ？ さつきは話の腰折っ

ちやつたから」

トウネリは笑って向かいに腰掛ける。その横にセレネーラも座った。

ソラは全員の顔色を眺める。そうして意を決すると、話し始めた。

「まずセラにひとつだけお願いがあるんだ」

「はい、なんででしょうか？」

「これからボクが話す推測に君は動揺すると思う。だから覚悟してほしいんだ」

ソラの言葉に、セレネーラは話を聞くことを躊躇する。彼がこれから話す内容に一体どんな真実が隠されているのか怖かった。

すると隣にいたトウネリがそつと手に触れた。

「トウネリ……」

しばしその顔を見つめて、セレネーラは意を決する。大丈夫とそう言い聞かせて、セレネーラは真つ直ぐな目でソラを見る。

「わかりました。続けてください」

セレネーラの返答に少し間を置くと、ソラは言った。

「今回の事件……全部嘘だ」

突拍子もない発言に、トウネリとセレネーラの二人は目を見開く。

「多分これは、セレネーラが生まれる前……あるいは生まれてすぐから仕込まれた嘘だったんだよ」

「まさか……」

ここから先、ソラがなにを言わんとしているのかを理解した。

セレネーラも話の行き着く先を理解したようで、青ざめた顔をしている。

「ま、待つて。あくまでそれって推測……なのよね？」

問いかけに対しソラは頷く。

「それを確認するためにも、ボクは今からギルドに向かおうと思ってる」

「ギルド？ どうしてそんなところに」

言いかけて、トウネリはハツとする。

脳裏にヴェラドローネの顔が浮かんだ。彼女は何かと裏の事情に詳しく、その上何か企んでいる節が見られる。前回の時と言い、彼女が何か関係しているのではないか。

「まさかヴェラドローネのところに？」

だがトウネリの問いかけに対し、ソラは首を横に振る。そしてはつきりと告げた。

「ボクはこれからセラのお姉さん——シエルヴェリア姫に会いに行く」



「ねえ、ユース。暇」

「そうか」

ユースの返答にアルマは頬を膨らませる。

二人はソラが去った後、宝玉が保管されている部屋にいた。

部屋の中は少し湿気があり、空気もあまり良くはない。その上宝玉以外にはなにも無いため、二人は時間を持て余している状況だった。

「そうか……じゃないよ。暇だよー」

ユースの声真似をしてから、アルマはその場に仰向けになる。そして「つまらない」と繰り返しながら、左へ右へと転がり始める。

それを見てユースは呆れた表情で項垂れた。

「お前は どうして そんなに 落ち着き がないんだ」

「私は逆に どうして そう 落ち着いて られる のかが わからない」

アルマは動きを止めると、ユースの顔をじつと見つめる。

「大体ユースは真相に行き着いてるんだから、さっさと解決しちやえばいいのに」

「言っただろ。俺が動いても解決にならないって」

「むう……それじゃあ私たちが損」

だらけた格好で不貞腐れるアルマ。余程退屈なのか、今度は仰向けになって指先で空

中に字を書く真似をし始める。

「ラミナはいいなあ。面白そうなことできて」

「お前退屈だと本当に子供っぽくなるよな」

普段はおつとりと物静かな少女といった雰囲気のアルマだが、今の彼女はまるで子供のように無邪気でハキハキとした声を発している。

「だって私はいつまでも子供のままですし」

アルマの一言に、ユースは表情を曇らせる。

「悪いな。俺がもつと早くに動いていれば、お前は人間のままでいられただろうに」

「結果は変わらなかつたと思うよ。それにおかげでこうして大好きになつたユースとずっといられるわけだし」

いつもの落ち着いた声音でアルマは微笑む。その発言が却つてユースを縛り付けるものだと知らずに、彼女は「だからありがとう」と言った。

ユースの視界に、脳裏に焼きついた光景が一瞬だけ映る。周囲がすべて燃え、聞こえてくるは阿鼻驚嘆の声。甲冑を身に纏つた兵士たちは皆真つ二つにされ、まさに地獄絵図といった光景が広がっていた。

「感謝されるようなことは何もしてねえよ」

目蓋を閉じ、ため息を吐く。ユースの視界から過去の記憶は消えていた。

ふと、封印を解かされた宝玉に目をやる。

宝玉から溢れているのは妖艶な光。まるで人を虜にしてしまいそうなほどのその淡い光は、常人であれば一目で魅了されてしまうことだろう。

「しかしまあ、よく出来てるもんだなこれは」

「ほんと。まるで本物みたい」

ユースの眩きに、アルマはくすりと笑う。

そう、これは精巧に造られた偽物だ。

初め見たときは分からなかったユースだが、今こうしてじっくり眺めれば、この宝玉が早急に造られたものだと分かる。

宝玉が放つ淡い白光は、ひと目では見えないよう台座に設置された白色光を出す魔力結晶「白光結晶」によって生み出されたものだ。宝玉自体も、その辺で売られているインテリア用の水晶球が使われている。

周囲に張り巡らされた結晶も封印のためのものではなく、白光結晶の光の見え方を調節するために施されたものだ。

そして極めつけはこの地下だ。

言い伝えでは宝玉が真の力を発揮するためには太陽の光が必要とされていた。これは古来から月光が「太陽と月が重なりあうことで出来ている」という説があり、彼の王

はそれを魔法術式の鍵にしたのだという。

おそらくその名残で出来たものだろう。不要な時は宝玉の存在を隠すために。

「確かにこれだけの材料があれば伝承通りの代物になる。誰がどう見てもこれは伝承にある宝玉そのものだ」

ユースは称賛にも似た言葉とともに、落胆した表情で天井を見上げる。

「これだけの贋作を生み出したんだ。きつとこれを作ったやつは相当な覚悟を持って作り上げたんだろうな」

ふと、階段の方から足音が聞こえた。ユースは嘆息とともに顔を音の方に向ける。

「すまぬな、ガルディアン卿。お主に損な役回りをさせてしまつて」

そう言つて暗闇の中からヘルデイロ王が姿を表す。手元に王の証である杖は無く、物憂げな表情を浮かべている。

「それはどういう意味で言っているんだ？」

ユースに蔑んだ眼差しを向けられて、王は肩を竦める。

「そのままの意味だ」

するとアルマが立ち上がり、王の周りを歩き始めた。

「ねえ王様……私今すごく暇。話相手になつて」

アルマの言葉に、王は顎髭に触れながら自嘲気味に笑う。

「いいだろう。お主への謝罪の意も込めて」

「わーい、やったー」

アルマは万歳して喜ぶのとは裏腹に、どこか気のない声でそう言った。

第四節 嘘という名の大罪 2

ギルドヘルデイロ支部——その受付にて、ルージュヴェリアはいつになく暗い表情をしていた。

「おうルーちゃんどうしたよ。なんか今日元気ないぜ？」

通りすがったギルドメンバーの多くが、普段は明るく振る舞っている彼女を心配して声をかけている。

そのたびにルージュヴェリアは微笑して、

「そんなことないですよ。いつも通り私は元気です」

と返していた。

「そうかい？ 何かあれば俺たちに依頼してくれていいんだぜ」

「ありがとうございます。でも特に問題はないですから」

笑顔を取り繕って人が遠ざけた後、決まってルージュヴェリアは大きくため息を吐く。明らかに気落ちした表情であるため、たまたま通りかかった者が声をかける。とい

うことを朝から繰り返していた。

そんな様子を終始無言で眺めていたシエルヴィアだったが、さすがにもう我慢の限界だった。

「ちよつとルー、あんたしつかりしなさいよ。さつきから何回同じやり取りしてんのよ」「そんなことないですよ。いつも通り私は——」

「しかも話しかけられたらまったたく同じことしか返事しないし！」

まさに心ここにあらざという様子のルージュヴェリアに、シエルヴィアは額に手を当てて項垂れる。長い付き合いの彼女でも、今の状態を見るのは初めてだった。

原因を知っているシエルヴィアは、嘆息混じりに話を切り出す。

「ねえルー？ そんなに気になるんならあんたも一緒にいていけば良かったじゃない」

シエルヴィアの指摘に、ルージュヴェリアは口を噤む。

深刻な面持ちで俯くのを見て、シエルヴィアは続けて言った。

「何をそんなに気負う必要があるのよ。彼とはまだ出会ったばかりでしょうに」

「だからこそですよ。私はまだあの人のことを何も知らない。そんな状態で果たして、あの場所へ向かわせて良かったのだろうか」と

あの人の、あの場所。何も知らない人間が聞けば、一体何のことか欠片も理解できない

だろう。

だが、そんな会話を交わそうとしていた二人に声をかける者がいた。

「そのあの人つていうのはボクのことですか？」

聞き覚えのある声にルージユヴェリアは思わず顔をあげる。

「ソラさん？ どうして……ここに……？」

本来ここにはいないはずのソラの姿を見て、ルージユヴェリアは口を閉じることを忘れる。よもや夢を見ているのではないかと、と言わんばかりの表情を浮かべている。

隣には一緒に行動しているトウネリの姿——ではなく、薄汚れた布で身を隠す見知らぬ姿があつた。

「あの、そちらの人は？」

問いかけに対しソラはルージユヴェリアの顔、そしてシエルヴィアの顔を順に伺う。

そして隣にいた見知らぬ人物の方に無言でフードを取るよう促した。

「あつ……」

フードから出た顔を見て、ルージユヴェリアは堪らず声を漏らす。

シエルヴィアもこの来訪を予期していなかったようで、目を丸くしていた。

「何年ぶりにそのお姿を見るでしょうか、お姉様方」

ソラの隣にいたセレネーラはそう言って、二人の顔を少し哀しげな表情で見ている。



ヘルデイロのギルドに足を運ぶ数刻前のこと。ソラの発言に、トウネリとセレネーラは驚きを隠せない様子でいた。

「シエルヴエリア姫に会いに行く……？」

確かに今回の一件、そのシエルヴエリア姫も関わっているのではないかとトウネリも推測していた。だがその場所が特定できない以上、彼女の存在をあてにするわけにもいかず、考えないようにしていた。

ところがソラはその姫君の場所があたかも分かっているかのように言い始めたのだ。

「あんた、そのお姫様がどこにいるのか見当がついてるわけ？」

トウネリの問いにソラは頷く。

「セラから姫の話聞いて不思議に思ったんだ。どうしてシエルヴエリア姫はこの城にいないのか。どうして事件が起きる前日に彼女から手紙が送られてきたのか」

「それは偶然なのでは？」

セレネーラの問いに今度は被りを振るソラ。そして極めつけとして、はつきりと言葉を置いた。

「そしてその手紙が何よりどうして、ボクが初めてこの街に訪れた二日前に届いたのか」
ソラの突拍子もないように思える発言に、二人は言葉を失った。

僅かな静寂が部屋を包み込む。

「ちよつと待つてよ。まるであなたが今回の一件に関わつてゐるみたいに言うじやない」

「うん、そうだよ。今回の事件はボクが王都に来たせいと言つてもいいくらいだ」

「いや。いやいやいや、ちよつと言つてゐる意味がわかんないんだけど」

確かにソラの言う通り、まるで彼の来訪が起因になつてゐるようにも思える。今回の件に選ばれた理由もそれで筋が通る。

だが理由がわからない。仮にそうだととして、一体なぜ彼の来訪が起因になつてゐるのかの説明がつかない。

トウネリは信じられないと言わんばかりに困惑する。それはセレネーラも同じだ。

「これからボクの考えを順に追つて説明するね」

ソラはそう一言置いて、話を聞くよう促す。トウネリとセレネーラはそれに従つて耳を傾けた。

「まずシエルヴェリア姫が手紙を送つた時期。これはさつきも言つたようにボクが王都に来たときと一致しているんだ。理由は簡単。彼女は今、ギルドで受付嬢をしているからだ」

トウネリは息を呑む。

ヘルディオ口支部の受付嬢といえは二人しかない。彼女たちの顔がトウネリの脳裏に浮かんでいた。

「内容の詳細はわからないけど、多分ボクが王都に来たことを知らせたんだ。ずっと用意していた嘘を実行するためには、ボクが存在が必要だったから」

「それはどうしてですか？　そもそも用意していた嘘って」

「そのあたりの詳しい事情を聞くためにも、君のお姉さんに今から話を聞きに行こうと思ってる」

ソラの考えにセレネーラは俯く。

これまで何年も会っていなかった姉のことが上がり、彼女の中である思いが募っていた。

姉に会いたい。会って話したい。幼い頃のように、仲良く一緒に笑い合って、好きなお伽話についてや一日何があったのか語り合いたい。

そして何より今、自分の周りで一体何が起きているのか。その真実を知りたい。

手のひらを強く握りしめると、セレネーラは立ち上がった。

「でしたら私も一緒に行きます。私も知らなければ」

するとソラは首を横に振った。

「悪いけどセラにはここに残ってもらわないと」

「どうしてですか？ 私だって聞く権利は——」

「その気持ちは十分に分かつてる。けど君がここからいなくなれば騒動になり兼ねない。最悪の場合、それが決め手になってしまいかもしれないんだ」

セラネーラは何を言っているのかすぐには理解できなかった。なぜ城の外に出れば決め手になるのか。

「おそらく王様は、今の王家を潰そうとしているんだ」

「そんな。どうしてそんなことを」

「それまではボクにもわからない。ただ今の王家が初代王家とは繋がっていないことが関係しているんだと思う」

セラネーラはまた俯く。

今の王家を潰すなどと、とても父親がそんな考えをするようには思えなかった。父はこの国の王であることを誇りに思っているはずだ。民を愛しているはずだ。そのためこれまで、国と民のために尽くしてきたではないか。

そう考えていても、セラネーラはソラの考えを否定することができなかった。自分の父親のことを何もわかっていないが故に。

「もしセラが外に出たことが分かれば、君に罪を着せる口実ができる。君は城の外に出

ないことを命じられている。その掟を破ったのだとしてね」

「ちよ、ちよつと待ちなさいよソラ。いくらなんでもそれは——」

我慢できず、トウネリが割って入る。するとソラが頷き、彼女が言いたいことについて理解を示した。

「そう、これはただのボクの思い違いかもしれない。けど否定できるものが何もないんだ。だから」

ソラは一言置いて、真剣な顔でセレネーラの目を見る。

セレネーラも顔を上げて、ソラの顔を見た。彼女の表情はもうどうしていいのか分からず、困惑し切ったものになっている。

「もしついて来るなら覚悟してほしいんだ。どんな真実だろうと、受け入れる覚悟を」
「受け入れる……覚悟……？」

ソラはセレネーラと一緒に来ようとするのが分かっていた。

彼女だって真実を知りたいはずだ。家族が知らぬ間に何か重大なことに関わっているのだ。知りたいと思わないはずがない。

だがその思いだけでは足りない。そうソラは思っていた。

「受け入れる……覚悟……」

セレネーラは自分の胸に手を当てる。心臓の鼓動が今にもはち切れんばかりに高

鳴っている。動揺を隠せず、意識が朦朧としている。

ソラの言う通り仮に悪い真実だったとしたら、今の状態で受け止め切れるだろうか。唇を噛み締める。服を強く握り締める。そうしてセレネーラは真つ直ぐとソラの顔を見た。

「わかりました。大丈夫です。例えどんな真実だろうと、私は乗り越えてみせます」
「本当にいいんだね？」

決意の確認のためソラは聞き返す。するとセレネーラは強く頷いた。

「わかった。じゃあ一緒に行きよう」

そして今、ソラとセレネーラはギルドに足を運んでいる。

二人の姿を見て、ルージュヴェリアとシエルヴィアは顔を見合わせる。そして観念したように笑みを溢すと、ルージュヴェリアはセレネーラの顔を見た。

「見ないうちに大きくなっちゃったね、セラ」

その優しい微笑みは、セレネーラの記憶にある姉のものと寸分違わぬものだった。

ルージュヴェリアは周囲を見渡すと、席から立ち上がった。彼女の顔は先ほどとは違い、憑き物が落ちたように晴れやかになっている。

「シエルヴィアさん、少しここお願います」

「はいはい。喧嘩しないようにね」

「大丈夫ですよ。そんなことしませんから。じゃあ二人ともついて来てください」
ルージュヴエリアに促され、ソラとセレネーラは後をついて行く。

外を出たところでふと、ルージュヴエリアは問いかけた。

「ソラさん、いつから気づいていたんですか？」

問いにソラはその時を思い出しながら、自重気味に笑った。

「気づいたっていうより、少し引つかかってたんですよ。だってルーさん、まるでセラのことを知っているかのように話してたから」

確かにとルージュヴエリアは笑う。妹を心配するあまり、隠すべきことを隠し切れていなかったようだ。いや、あるいは本当は気づいてほしくてそうしたのかもしれないと。

三人はギルドが管理している宿舎に足を運んだ。二階、三階と階段を上り、最上階四階の最奥に位置する部屋の前で止まった。

ルージュヴエリアは部屋の鍵を取り出すと、鍵に自身の魔力を通す。錠には使用者の魔力が登録されており、それを検知することで鍵が開く仕様だ。

「さあ、入ってください」

扉を開き、ルージュヴエリアは部屋の中に案内する。

部屋は質素なもので、ベッドが二つと衣装棚の他には何一つ置かれていなかった。

「椅子とテーブルはないので、そちらのシエルヴィアさんのベッドに座ってください」
薦められるまま、ソラとセレネーラは左側のベッドに座る。

二人が座つたのを見計らい、ルージュヴェリアも右側のベッドに腰掛けた。

「話をする前に、この姿では少し失礼ですね」

ルージュヴェリアは自分の髪の毛を梳かうように触れた。すると彼女の少し燦んだ赤毛が見る見るの内に色を変え、セレネーラと同じ鮮やかな銀へとなっていく。

その様子を二人が不思議そうに眺めているのに気がつき、ルージュヴェリアは微笑んだ。

「すいません。変装のためにいつもは髪の色を変えているんです。今の服装は変えられませんけど、せめて本来の姿にしておこうと思ひまして」

ルージュヴェリアの弁明にソラは納得する。彼女とて一国の姫君なのだ。まだ公に素性を知られていないとはいえ、俗世に紛れるのであれば用心することに越したことはないだろう。

髪色が完全な銀となると、ルージュヴェリアはひとつ深呼吸する。

「さて、では改めてご挨拶を。この姿では初めましてソラ様。そして久しぶりねセラ」

白銀の髪をした女性は微笑むと、改めて自分の名を口にする。ギルドの受付嬢としての名ではなく、

「私がシエルヴェリアーモルヌブリアンテス。さあ、何かからお話しましょうか？」
ヘルデイロの第二王女としての名を。

第四節 嘘という名の大罪 3

ルージュヴェリアあらためシエルヴェリアは、朗らかな笑顔を浮かべている。

それを見てソラは訝しんだ表情で口を開いた。

「詳しい話を聞く前にひとつ聞いてもいいですか？」

「はい。なんですか？」

ソラの真剣な物言いにシエルヴェリアは目を瞬く。

「ルーさんは……いえ、シエルヴェリアは誰の味方ですか？」

ソラの問いに、シエルヴェリアは一瞬だけ言葉を詰まらせる。

そして息を飲むようにじつと顔を見ているセレネーラを一瞥して、目蓋を閉じると微笑んだ。

「当然、私は家族の味方ですよ」

一拍置いて、ソラはシエルヴェリアの言葉を噛み締める。

「それを聞いて安心しました」

ソラは微笑むと、セレネーラの方を見る。彼女もどこか安心したのか、胸を撫で下ろ

している。

「それで、何から話せばいいのでしょうか？」

聞くべきことがあまりに多く、いざ何から手をつけたものかとソラは頭を悩ませる。すると我先にとセレネーラが口を開いた。

「あの……お姉様はいつからこの事に加担しているのですか？」

「あなたが生まれた時からずっと」

姉の答えに、セレネーラは胸のあたりを抑える。

苦虫を噛み潰すような妹の表情を見て、シエルヴェリアから微笑みが消える。罪悪感から目を伏せた。優しく接してきたとはいえ、これまで騙していたことに変わりはないのだから。

どちらにも笑顔は無く、ソラは唇を噛み締めて顔を下げる。本来仲のいい姉妹であるはずの二人が、なぜ笑顔も無い会話を交わさなければならぬのかと。

「ヘルデイロ王は何を考えて、こんな大掛かりな嘘をしているのか」

問いにシエルヴェリアはソラの碧眼を見つめてから、

「あなたをこの国の王にするためです。ソラ様」

と答えた。

想定外の答えにソラとセレネーラは目を見開く。

「ボクを……王に？」

「はい」

言っている意味がわからず、ソラはただただ困惑する。なぜよりもよって自分を王にするなどという考えが生まれたのか。理由を考えるとするならばひとつしか思い浮かばない。

「母さんが原因……ですか？」

ソラの問いにシエルヴェリアは肯く。

「三十年前、隣国であるネルヴェエノと戦争が起きようとしていたのは知っていますか？」
ソラは肯定する。

ヘルデイロから東に進んだ国ネルヴェエノ。ユリージア大陸の中でも最大の国土を持ち、最も歴史が古い国のひとつとして数えられている。

そんな国と三十年前、ヘルデイロは戦争を間近にしていたという話がある。要因は転移結柱が設置されたギルド支部の存在。転移結柱は数が少ないため、それぞれの大陸にひとつしか設置されていないためだ。

当時のネルヴェエノの王はこの転移結柱に関して、大陸の中心であるネルヴェエノが保有すべきだと主張していた。

「主張自体は理に適ったものでした。事実大陸の端に位置するこのヘルデイロに置くよ

りも、ネルヴェノに置いた方が転移結柱の恩恵を受けやすい。他の大陸から周辺四国への移動も楽になりますから」

しかしそうしなかったのには理由があった。

当時ネルヴェノは最大の兵力を以って、ヘルデイロとは反対に位置する小国を占領していた。結果ギルドの本部は大戦の火種になり兼ねないと考え、転移結柱の移設に反対したのである。

この転移結柱の設置はイヴェルテラが決定したものであるため、おいそれと移設するものではないというのもギルド側の主張にあった。

また当時のヘルデイロ王はこう言ったという。ネルヴェノは最も古い国のひとつだと主張しているが実際は違う。イヴェルテラが最初に建国したヘルデイロこそが最古の国のひとつであり、ネルヴェノはその後に栄えた国に過ぎないと。

「反発したネルヴェノの王は、兵力を掲げてヘルデイロに脅しをかけてきました。転移結柱の移設に同意しろ。さもなければあの小国のように滅ぼしてやると」

「でもヘルデイロ王はその要求を飲まなかった」

「はい。当時まだ王子であった父は屈するべきではないと祖父に言ったそうです。もし屈すれば、彼の国は歴史を捻じ曲げてすべてを支配しようとする。それは当然祖父も同意見でした。そして打開策を考えようとした時、あなたのお母様が仲介人として現れ

たのです」

ソラは息を飲む。

ヘルデイロとネルヴェエノの戦争が起きようとした際、一人の仲介人がいたという話は知っている。だがその正体は明言されず、どの文献を調べようとも仲介人の名は記されていない。

それがまさか自分の母親だとは思いつかなかった。

不自然なまでの歓迎を受けたのにはそういう裏があつたのだと知り、ソラは狼狽する。

「あなたのお母様は言ったそうです。すべて私に任せて欲しいと。そう言つて忽然と姿を消した彼女は、翌日ネルヴェエノの王が要求を取り下げたという報を持つて帰つてきた」

「それはどうして? どうしてネルヴェエノの王は——」

「彼女の背後に立つ存在には勝てないと考えたからでしょう。あなたのお母様は、当時ギルドに加入していたガルデアアナ王国最強の騎士アーガスト様と親しい仲でしたから」

確かにおかしい話ではなかった。アーガストはまさに一騎当千の騎士。例えネルヴェエノの兵力をすべて投入したとしても、一夜にして壊滅させられるだろう。そうなれ

ば損害どころの騒ぎではない。

「ま、待つてくださいい！」

だがおかしいと、セレネーラは割って入った。

「戦争が起きようとしたのは三十年前ですよね？　でもアーガスト様の名が広がったのはそれ以降のはず」

アーガストは今では知らぬ者がいない程にその名が広まっている。だが三十年前当時はまだその名が上がることはなく、彼の名が世に轟いたのはその翌年に起こったガルディアナ王国とその隣国が巻き起こした戦争の際。つまり彼が如何なる人物か言ったとしても、その信憑性は無いに等しかった時代なのだ。

そんな状態で果たして、一日で交渉を終わらせるほどの材料になるとは思えない。

セレネーラのその指摘にシエルヴェリアは頷く。彼女とて知らないはずがなかった。

「ええ、そうです。ですがヴェルティナ様には信用させるだけに足る実力と裏があつた。そう父は考えているのです」

「その裏というのが、ソラを王にすることと関係があるというのですか？」

シエルヴェリアはまた頷き、そしてはつきりと言った。

「父は……ヘルディロ王はヴェルティナという名は仮のものであり、その正体は賢者の一人イヴェルテラー様だと考えているのです」

ソラは既に理解することを拒み始めていた。

自分の母親は伝承に出てくる賢者イヴェルテラであり、それ故に王にするという話が持ち上がったなどと言われても信じられるはずがない。

仮にイヴェルテラが実在していたとしても、彼女の誕生からもう千年は経っている。それだけの年数を生きられるのは、人間の血を求める代わりに永遠の命を与えられた吸血鬼か実在しているかも知れない種族エルフくらいなもの。しかし伝承でイヴェルテラは人間であるとされているはずだ。

「根拠は……根拠はあるんですか？」

堪らず声を震わせるソラ。

「いいえ。ただ以前ヴェルティナ様にお会いした時、彼女は三十年前と全く変わらない姿だったそうです」

「でもそれはヴェラドーネさんだって——」

「さらに遡れば祖父の幼少期、さらには曾祖父の幼少期にも彼女は今と全く変わらない姿で城を訪れていたそうです。その年数は百年以上も前。ヴェラドーネさんが生まれるよりもずっと前のことです」

話が事実であれば、それはヴェルティナが不老の存在であることを示していた。

動揺を隠せず、ソラはただ瞠目したまま肩を震わせる。

シエルヴェリアの話は憶測に過ぎず信憑性もない。ただの夢物語として片付けられるものだ。そうであるはずなのに、ソラはどういうわけか真実として捉えていた。まるで本当は知っていたかのように。

「ソラ様。私はあなたに、父の行いを止めて欲しいのです。だから私が知り得た情報を……どうか聞いてください」

シエルヴェリアの願いを聞き、ソラは耳を塞ぎたい気持ちを抑え込む。

そうだ。覚悟はしていたことだ。自分の母親が原因にあることは推察していた。例えどんなことを言われようと、それを受け入れて行動に移さなければならぬのだと。

ソラは顔を上げて、真摯に聞く姿勢を取る。目的はただひとつ。守りたいと願った笑顔のために――。

「ヴェルティナ様もイヴェルテラと同様、この世界が混沌とするようなことがあれば即座に行動してきました。十四年前、ヘルデイロから遠く離れた国がギルドによつて滅ぼされたのは知っていますよね？」

「はい。確か当時は魔法の研究で最先端を走っていた国でしたよね？ 表向きは国の至る所に魔道具が設置されている、豊かで平等な国だったって」

「はい。しかし実際は各家庭に生まれた第二子以降の人間たちが全員地下で強制労働させられていました」

それに関してはソラも知っている情報だ。

この国では秘密裏に、禁断とされている魔導兵器の研究をしていたとされている。数々の兵器を設計しては、地下施設の人間に作らせていたのだという。その情報が外部に漏れた結果、世界の近郊を目的として作られたギルドが総動員してこの国を滅ぼした。というのが事の顛末だ。

「この事件にはヴェルティナ様が関わっていたとされています」

「母さんが？」

「はい。その時ヴェルティナ様はこう言ったそうです。あれはこの世界にあつてはならない物。だから国ごと存在を抹消する——と」

魔導兵器の仕組みは公にされていないが、ある文献では周囲にある魔力源をすべて吸い取って尚足りない程の魔力を用いて強大な砲撃を放つとされている。

魔力の源は無限にあるわけではない。消費されればすぐにこの世界に補充されるわけではなく、消費に際して何らかの力が働くことで循環されているというのが定説だ。この循環が間に合わないほどの魔力が消費されれば世界にあるはず魔力の源は枯渇し、最悪大地が枯れ果ててしまい兼ねないのだという。

この説が正しいのであれば、魔導兵器はこの世界に仇なす代物だと言えよう。

「この世界のためならばどんな手段も使う。そんなヴェルティナ様に対し、当時の父は

恐怖と同時にある尊敬の念を抱いたそうです。あくまで人間ではなく世界を選び行動しているに過ぎないのかもしれない。しかしその結果、この国を救うことに繋がっているのだと。他にもヴェルティナ様はこの国に助言することもありました」

確かに王の考えは間違っていない。

もしネルヴェエノとの戦争が起きていたならば、ヘルデイロに大きな損害が出たのは間違いない。

もし魔導兵器が完成し使用されていたのならば、ヘルデイロが滅亡の危機に瀕していたのは間違いない。

ヴェルティナの行動がなければ、ヘルデイロは大きく衰退していたことだろう。

「父は言っていました。ヴェルティナ様がいるおかげでこの国は繁栄し、その豊かさを維持出来ている。彼女がいなければこの国は成り立たず、本来ならば何もしていない自分よりも彼女がこの国の王であるべきなのだ。そもそもこの国はイヴェルテラが生んだ国のひとつですからね」

漸く話が繋がったと、ソラは内心で呟く。

つまりヘルデイロ王は、ヴェルティナが本来の王であるべきだと考えている。しかし彼女は世界を渡り歩き、ひとつの拠点に身を置くことはなく行動している。そこで彼女の血を引く自分を王にしようとしているのだ。

「あなた様が生まれたと聞いた時、父は大変喜んでいました。あの方によくこの国を返せるって」

ヘルデイロ王の考え自体は理解できる。理解できるが、ソラはそれを肯定することが出来なかった。

確かにこの国はイヴェルテラが生み出したものだ。そのイヴェルテラが影で国を支えている存在だというのならば、王のように国を捧げようとすることもあるだろう。

しかしそれでは、歴代の王が国を支えてきた努力を否定するようなものではないか。

「そして父はこの大掛かりな嘘を考えたのです。父の考えた筋書きは大体予想できているのでしょ？」

「先代王家のような重罪を犯すことで追放されようとしている……ですよね？」

ソラの答えにシエルヴェリアは頷く。

「先代王家によって生み出された秘宝。この封印を解いた罪を父は被ろうとしています」

どうかしている。そうソラは歯噛みする。

重要なのは封印を解いたという結果ではなく、封印を解くために殺そうとした結果新たな王によって止められた——ということなのだろう。そのためにセレネーラ暗殺を

灰めかす手紙を作り、ギルドに依頼するという形で回りに回って自分に声が掛かった。何よりそのために王はこれまで、セレネーラに度重なる嘘をしてきたのだ。

「じゃあお姉様はそのためにギルドに潜伏していたのですか？ ソラがギルドに来た時、それを報告するために」

「うん、そうだよ。お父様からはそういう指示を受けたわ」

でも、とシエルヴェリアは一言置いた。そして目に微かな涙を浮かべて、訴えかけるような震える声で言った。

「私はお父様が何もしていないだなんて思っていない。お父様は立派にやっつて知っている。だって街に出た時、みんな言っていたから。この国は今の王様のおかげであるんだって。王様たちが何もしなければ、ここまで繁栄していないって」

シエルヴェリア立ち上がり、深々と頭を下げる。

「お願いします！…どうか…どうか父を説得してください！」

父親の考えが実は正しいのかもしれない。それでもシエルヴェリアは自分が信じる者のために懇願する。そこに嘘偽りなどなく、ただ単に愛する家族を思つて。

しかしソラは険しい表情を彼女に向けた。

「シエルヴェリア姫……ひとつ答えてください。あなたは別にボクが王都に来たことを報告しなくても良かったはずだ。けどそうしたのは、何故ですか？」

「それは……」

シエルヴェリアは言葉を詰まらせる。

「本当は心のどこかで、あなたもヘルデイロ王と同じことを望んでいたんじゃないんですか？ あなたはイヴェルテラに関する文献をよく読んでいたとセラから聞きました。それはあなたに、彼女を崇拜する心があつたからだ」

シエルヴェリアは否定することができなかつた。事実イヴェルテラに対し憧れの思いを抱いている。いつか自分も彼女のように、何かのために行動するようにしたいと。

ふとシエルヴェリアはセレネーラの顔を見た。明かされた真実を受けながらも、彼女は毅然とした表情で座っている。きつと心のどこかでは必死に動揺を隠しているのかもしれない。それでも真つ直ぐな目を向けている姿に、シエルヴェリアは心を打たれていた。

（ああ……ほんと……私が知らない内に大きくなっちゃったなあ）

目蓋を閉じてシエルヴェリアは思い出す。セレネーラと一緒に、無邪気に城内の庭を駆ける姿を。それを父親と使用人のメルヒが微笑ましそうに見ている光景を。

「もう一度聞きます。シエルヴェリア姫……いえ、ルーさん。教えてください。あなたは どうしたいんですか？」

目を開けてシエルヴェリアは——否、ルージュヴェリアははっきりと言った。

「私の家族を……元に戻したいんです。だからソラさん、あなたの力を貸してくれませんか？」

その答えに安心し、ソラは張り詰めていた表情を綻ばせる。そして微笑とともに、

「わかりました。その依頼、引き受けます」と答えるのだった。

第四節 嘘という名の大罪 4

「でもお姉様。 具体的には何をすれば、お父様を説得できるのでしようか？」

セレネーラの疑問は最もだ。ヘルデイロ王は兼ねてから覚悟を決めて今回の計画を練っていた。それを説得するなど容易な話ではない。

ソラが方法を思案していると、ふとシエルヴェリアが立ち上がった。

立ち上がって上げ下げ式の窓を開けると、一羽の鳥が部屋の中に入ってきた。鳥の足には何か小さな紙が結ばれている。

「メルヒさんからの手紙ですか？」

問いにシエルヴェリアは頷く。

やはりと言うべきか。ラミナが見たというメルヒの行動は、彼女に手紙を送るためだったようだ。

推察通りだったことを確認した時、ソラの脳裏にひとつ内に秘めた推測が浮上する。きつと彼女ならば、これの答えも知っているだろうと。

「メルヒさんはなんて？」

「手筈どおりに事は進んでいる。今夜、計画の最後を実行すると」

計画の最後。それはつまり、用意した予告状どおりにセレネーラの暗殺を決行するということだ。

「そう言えば気になっていたので、どうしてセラも連れてきたのですか？　セラがいなくなれば、城で騒ぎになるはずでしょう？」

「それに関してはまだ大丈夫だと思えます。今セラの部屋には、セラの姿に変身したラミナさんとそんな彼女と仲良く話すトウネリがいますから」

なるほど、とシエルヴェリアは頷く。

セレネーラ本人がいなくなったとしても、その姿をした者がいるのならば城内部の人間が気付くことはそうないだろう。そもそもセレネーラが自分の部屋から出ることは少ないため、城の兵士たちが気づくことはまず無いと言っている。

しかし常に一緒にいるメルヒであれば気づく可能性がある。故にソラは手紙の内容を気にしているのだ。

事情を悟り、シエルヴェリアは手紙の最後の一文を目にする。「少しの間、姫様との楽しい時間を過ごしてください」と。

「こちらの気持ちも知らないで」

「ルーさん?」

「いえ、大丈夫です。メルヒもおそらく気づいていないでしょうから。でもあまり長居するのは危険ですね」

シエルヴェリアの指摘にソラも同意する。

メルヒがセレネーラの身の安全を全て任せているとはいえ、時折心配して部屋を訪れることもあるだろう。一度であれば気づかないことはあっても、二度三度と会っていれば気づく可能性が上がっていく。

もし気づいた時どう行動するかわからない以上、彼女の言う通り長居するのは得策ではない。

「ソラさん、ひとつお聞きしていいですか?」

改まった様子でシエルヴェリアがソラの顔を見つめる。

それに対しソラは小首を傾げた。

「ソラさんは自分が王にされようとしていると聞いて、どう思いましたか?」

「それは……」

ソラは俯く。

誰かの笑顔ためにありたい。その願いを叶えるのであれば、国を治める王になるというのもひとつの手段だろう。

しかし王になれば相応の責任を負うことになる。自国内のことだけでなく他国との関係についても考慮し、さらには未来を見据えて行動しなければならぬ。

「私はソラさんならたくさんの人を笑顔にできるいい王様になれると思っています。だから父のやり方は反対ですが、あなたが王になること自体は反対ではありません」

「ボクにはできないですよ。ボクがやっても、きつといつか不幸にしてしまうから」

目の前の笑顔のために手を差し伸べるので手一杯な自分が、国全体のことを考えて行動できるとは到底思えない。それ故ソラは、自分には王になる資格はないと考えていた。

「ボクはまだ何も知らないから。この世界のこと、自分のことでさえも」

「ソラ……」

ソラの呟きにセレネーラは顔を見る。何かを思い詰めるようなその表情に、胸を締め付けられる。彼もまた、拭いきれない孤独を抱えているのだと。

「それにこんな形でボクが王になったとしても、誰も喜んだりしないと思うんです。だから止めないよ」

セレネーラは俯く。

話の間彼女は考えていた。父親を止めるために、一体自分はなにが出来るのだろうか。その答えは一向に見つからず、今もどうすればいいのか考えている。

「ごめんね、セラ。あなたに辛い思いばかりさせてしまつて」

ふと俯くセレネーラに、シエルヴェリアが声を掛けた。

顔を上げて、姉の顔を見つめる。申し訳なきように目を伏せている。

「こんなこと言つたら責任逃れに思ふかもしれないけど、私はお父様を説得できるのはあなただけだと思つているの。だから私はあなたに答えを示すことはできない。ずっとあなたに嘘をついてきたのに、本当にごめんね」

「お姉様……」

自分も嘘に加担した人間だ。だからこそ自分には説得する力がない。シエルヴェリアは暗にそう言つていた。

「大丈夫です。きっと私がお父様のことを説得してみせますから」

それを捉えてか、セレネーラの眼差しから僅かに迷いが晴れていた。

「行きましようソラ。早く戻つて、皆さんとどうすればいいのか考えたいから」

「うん、わかつた」

二人は同時に立ち上がる。各々の思いを抱えて、真つ直ぐと前を見る。

それを見たシエルヴェリアは、期待を胸に微かな笑みを溢した。きっと二人ならば、この長きに渡る嘘に終止符を打つてくれると。

「それじゃルーさん。ボクたち戻ります」

「はい、父のことをお願いします」

シエルヴェリアは謝罪の意も込めて、深々と頭を下げた。

部屋から出て行こうとした時、不意にソラは足を止めた。セレネーラは先に部屋から出ており姿はない。

「ソラさん？」

立ち止まったのを見て、シエルヴェリアは首を傾げる。

「そうだ。ひとつ聞いてもいいですか？」

「なんででしょうか？」

「あなたの母親についてです。もしかして本当は——」

ソラの推測を聞き、シエルヴェリアは目を見開く。そしてしばらくして、彼女は頷いたのであった。



ソラとセレネーラが城を出てまだ間もない頃。部屋に残ったトゥネリは居心地の悪そうな表情でソファアーに腰掛けていた。

その原因は隣に座るセレネーラ——ではなく、セレネーラの姿をしたラミナにあつ

た。

ソラからの依頼を受けて、ラミナは得意の変身魔法を使って姿を変えていた。その顔立ちにはラミナの面影は一切無く、どこからどう見てもヘルデイロウの次女セレネーラである。服も本人から借りたことにより、知らぬ者からすれば誰が見ても本物だと思われることだろう。

「はあ……なんで私こんなことしてるのかしらね」

周りにトウネリしかいらないことを良いことに、ラミナはセレネーラの声でありながらいつもの口調で愚痴を漏らす。

「別に、嫌なら断れば良かったじゃない」

「残念だけど、今日はあの子に全面協力することになってるのよ」

「それは……ユースの指示？」

「いいえ。確かに彼に言われたからってのもあるけど、私の意思でこうしているわ」

いつもはすぐに喧嘩に発展する二人であったが、どういうわけか今は会話が成立していた。

先程罵声と忠告を浴びてきた時とは打って変わり、やけに大人しいラミナに困惑するトウネリ。彼女の思惑がわからず、警戒心を露わにして座っている。

「ほら。自然としてないとすぐ偽物だって分かっちゃうわよ？」

「そうだけど……あなた嘘は嫌いって言ってなかった？」

今のラミナはどう考えても人に嘘をつけている状態だ。嘘が嫌いだとあそこまで振りまいていた彼女が、こうして嫌悪感も示さず大人しくしているのは少しおかしな話だ。

怪訝な表情を浮かべるトウネリに対し、ラミナはくすりと笑った。

「そうよ。嘘をついている奴は大嫌いだし、まだまだ自分の本心に気づいていないあなたの事も嫌いよ」

「じゃあなんで——」

「けど私自身が嘘をつくこと自体は嫌いじゃないから」

「なによそれ……ただの自分勝手じゃない」

ラミナの返答にトウネリは唇を尖らせる。

「そうよ。人間なんてみんな自分勝手な生き物よ。それは誰かの使い魔になつてようと同じ。自分の理想や思想の為に誰かを傷つけて、時には嘘だつてつく。あなたが会つたつていう使い魔の女も、あの子の心に深い傷を残してまで自分の理想を押しつけた。だからあの子は自分の行動がその理想から来るものだと気づいていない。その理想が自分勝手なものだと気づいていない」

トウネリはラミナの言っていることを否定することができなかつた。

彼女の言葉はなにも間違つてはいない。誰かの笑顔を守りたい誰かを笑顔にしたいという思いは、言い方を変えてしまえばその誰かに笑顔でいることを押し付けるということだ。仮にそこに本人の意思があろうと、誰かに促された結果であることに変わりはない。

しかしトウネリは同時に、そのどこが間違つているのかも理解できなかった。ラミナはまるでそれが間違いであるかのように語っているが、誰かの笑顔を守りたいというその志は立派なものではないか。そこに一体間違いがあるというのか。

問い質そうと口を開こうとした時、扉を叩く音が響いた。
思わず体を跳ねさせて固まるトウネリ。

「はい。誰ですか？」

ラミナは動揺することなく、セレネーラの声で返事をする。

「姫様、私です。お茶と菓子をお持ちしました」

「メルヒでしたか。どうぞ入ってください」

返事を聞いてから、メルヒが部屋に入ってくる。右手にあるお盆の上にはティーポットとカップ、そしてお茶請けとして用意した丸い形の焼き菓子が乗っている。

「おや。ソラ様とあのラミナという女はまだ戻ってきていないのですね？」

メルヒの一言に、ラミナが微かに眉を寄せる。

「はい。今回の事件についてまだ調べることがあると言つて出かけて行きました」
「そうでしたか。お二方の分も用意したのですけれど、まあ仕方ないですね」

二人の目の前にあるテーブルの上に、菓子、カップ、の順に置いていくメルヒ。カップを二人分だけ置いてから、セレネーラ（ラミナ）の顔を一瞥する。

「お二人とも、仲直りされたみたいで安心しました」

我ことのように嬉しそうに微笑むメルヒ。それを聞いて二人は顔を見合わせると、同時に笑顔を作った。

「ええ。以前よりさらに仲良くなりましたよ。ね？ トウネリ？」

「は、はい」

動揺してぎこちない返事をするトウネリを見て、メルヒはくすくすと笑う。

「それは良かったです」

そう言つてメルヒは余計な皿と盆を脇に置くと、紅茶をカップの中に注いでいく。一気に入るカップの中へと注ぐのではなく、二つのカップにゆつくりと少しずつ交互に注いでいく。

「今回用意したのは、姫様が気に入っている地域で栽培されたものです」

注ぎ終わると、まるで二人の意図を見透かしているかのようにメルヒはそう言った。

「気に入っている地域？」

疑問を口にしながら、トウネリは内心で「まずい」と呟く。

今ここにいるのはセレネーラ本人ではなく、その姿をしたラミナだ。であれば彼女の好みなど答えられるはずもない。仮に当てずっぽうで答えたとしても、その風味まで分かるだろうか。

思わずラミナの顔色を伺うトウネリだが、一方の彼女は動揺することなく涼しげな表情で座っている。

「なるほど……」

カップを手に取り、ラミナは紅茶をひとつ口につける。

「この風味は確かにガルディアナ王国でよく収穫されているものですね。やはりいつ飲んでも美味しいです」

ラミナの発言にギョツとするトウネリ。まるで味の違いを知っているかのような口振りだ。

しかしガルディアナ王国産であれば彼女が分かるのも納得できる。彼女の主ユースの出身国であるのだから、日頃から嗜んでいてもおかしくはないだろう。

「さすがは姫様。一口飲んだだけでしっかり判別なさってますね」

「ほら、トウネリも遠慮しないで飲んでください」

「え、あ、うん」

促されるままにトウネリは紅茶を飲む。柔らかい風味が口の中に広がっていく。普段から飲んでいるわけではないため正直味に疎いのだが、それでもこの紅茶が上質なものであることは分かった。

「美味しい……」

顔を綻ばせて、トウネリはまた一口飲んでいく。

「ほら。この焼き菓子も美味しいですよ？」

「ありがと。うん、ほんとだ」

二人が仲睦まじく楽しんでいる姿を見て、メルヒは微笑んだ。

「それではまた少ししたら戻ってきますので」

「はい。ありがとうメルヒ」

メルヒは軽く会釈すると、使わないカップとともに部屋を出て行った。

足音が遠ざかっていくのを確認してから、トウネリは大きなため息をとともに胸を撫で下ろす。

「なんとか誤魔化せたわね」

安心するトウネリに対し、ラミナは焼き菓子を口に頬張りながら言った。

「残念だけどあいつ最初から気づいてたわよ」

「えっ？」

そんな様子も素振りも見せなかつたため、トウネリは驚きを露わにする。

「だつてあんたあんなにも演技してたじゃないの」

「そりや相手が気づいているからつて、わざわざ正体を明かす必要はないじゃない？」

「いや、それはそうだけど」

「どちらにせよ、あの女はお姫様が外出していることを話すつもりはない。今はそういうことにしておけばいいのよ。それより早く食べないと全部私が食べちゃうわよ？」

納得のいかないトウネリは扉の方を見つめる。一体メルヒという女性がなにを考えているのか分からず、額に手を当てて項垂れる。

本当は彼女も今回のやり方に納得していないのか。それとも実はラミナとの関係を憂いているのか。答えは何も出ないままただ自分だけが取り残されているような感覚に、トウネリの胸の内ではもやもやとした感情が渦巻いていた。

一方で、セレネーラの部屋から離れたメルヒは外に出ていた。

木で出来た小さな笛をひとつ鳴らすと、メルヒの手に一羽の白く小さな鳥が止まる。その鳥の足に一枚の小さな紙を結びつけると、

「今夜……この国が大きく変わる。そうですよね？ ヴエルティナ様」

物憂げな表情で呟き、鳥を空に放った。

白い鳥はまるで業火の中を飛び回るように、赤焼けの空の中を羽ばたくのであった。

第五節 偽りは月明かりの下に 1

ブリアンテス城内の書庫にて、トルテスは本を片手に椅子に座っている。

彼が手にしている本「犯罪者名簿」は、彼が日頃から兵士たちの報告を受けて書き記しているものだ。その内容はおおよそ王都内で犯罪を犯した者の名前を記すだけでなく、他の街や村で起こった事件の犯人の名も書かれている。

この本を眺めていると、書庫の扉が開き一人の男が入ってきた。

「トルテス……少し時間をいいか？」

もう一人の大臣クローリヒ。彼は剣呑な表情で入ってくると、トルテスの目の前で立ち止まった。

机を挟んで相對する二人の大臣。彼らの間に張り詰めた空氣が漂う。

「どうやら今夜、実行に移されるようだ」

クローリヒの報告を聞き、トルテスは本を閉じる。

「そうですか。王は今どちらに？」

「今はあの地下でガルディアン卿と一緒にいる」

「なるほど。彼も大変ですね。全てを把握しながら、彼女の子供のために成り行きを見守る立場になっていられるのですから」

トルテスが苦笑すると、クローリヒは目を伏せる。

「なあ、トルテス。本当にこれでいいのだろうか?」

クローリヒの問いかけに、トルテスは嘆息する。

「それは言わない約束でしょう」

「だが、いざ実行されるとなると躊躇してしまうのだ。ここまでする必要があるのだろうか?」

「我々は全てを承知の上であの方たちの計画に協力しているのです。もう忘れたのですか?」

「そうなのだが……」

クローリヒの物怖じする姿を見て、トルテスは立ち上がった。

「これも全て彼の者復活を阻止するための下準備です。もし彼が今のまま世を渡り歩けば確実に黒く染まってしまう。そうなれば我々は終わりです」

「分かっている。分かっているのだが……そのためにあの方や姫君たちを犠牲にして良いのか」

「深い闇を見る前に、彼をこの国の王にすることで踏み留まらせる。しかし王にするためには現王家の存在が邪魔なのです。あなたの気持ちは私も分かりますが、これもこの国や世界を守るために必要なこと。今更引き返せるはずありません」

トルテスの論するような物言いに、クローリヒは言葉を詰まらせる。これまでそれを十分に理解し、計画に加担してきたのだ。トルテスの言う通り、後戻りも出来なければ計画を止める資格があるはずもない。

「そう……だな……」

項垂れるクローリヒが漸く絞り出したのは肯定の言葉。もはや自分にはどうすることも出来ないという諦めだった。

「すまん。急に」

「いえ。先程言ったように、私もあなたの気持ちはわかりますから」

言いながらトルテスは、先刻行ったソラとのやり取りを思い出す。真っ直ぐな瞳で真実を求める姿を。

（ですが彼にも選択の余地が必要でしょう。我々大人が勝手に決めたことに振り回されるのですから）

トルテスは再び本を開き、何かを嘆くような表情で最後に書かれた名前を指でなぞった。



「なによそれ。下らないわね」

戻ってきたソラとセレネーラから話を聞き、ラミナが放った第一声がこれだった。

一部始終を聞いていく内にラミナの表情は険しくなり、話が終わる頃には不快感を露わにして歯軋りを立てていた。

まさか自分がここまで下らないことに付き合わされていたとは。そういう怒りの念が包み隠さず顔に出ている。苛立つあまり足を揺すり、今にも立ち上がって近くの壁を蹴り壊してしまいそうな程だ。

「これまでの全部が全部、あなたを王様にするために仕組んだ茶番劇だったってことじゃない」

ラミナの指摘に返す言葉が見つからず、ソラは押し黙って俯く。

「あなた達どこかの劇団に入ったらどう？ きつと傑作ができるわよ？」

こればかりはトウネリもどう反応すればいいか分からなかった。

事件の真相がよりにもよってソラを王にするためだったなどと、全くもって予想だにしていなかった。否、予想できるはずもなかった。

新たな王を擁立するためには現王家を排除しなければならぬ。そのために仕組まれたのが今回の大掛かりな嘘——国を支配しようと目論む現王を止めた英雄に仕立てあげて、その英雄を新国王にするという筋書きだった。などと言われて納得できるはずもない。

「悪いけど、私はこれ以上は協力できないわ。あまりにも下らなさすぎる。そういうのは仲良しが勝手に集まってやってなさい」

ラミナは吐き捨てるように言うと、部屋を出て行こうと立ち上がった。

「待ってください」

するとセレネーラが制止しようと声をあげる。

「私たちはあなたの力も必要だと思ってるんです。だから——」

「だからなに？」

しかしラミナは嘲笑を浮かべながらセレネーラの言葉を遮った。

「私になにを協力しろっていうのかしら？ あの王様の筋書き通りその坊やを王にすればいいじゃない。どうせ誰も犠牲にならない優しい筋書きなんじゃないの？ それとも自分は王様になんかなりたくないから、協力して王様を説得しようって考えてるわけ？ そんな子供のわがままに協力するほど私はお人好しじゃないわよ」

反論する余地もなく、セレネーラは掛ける言葉を失う。

子供のわがまま。その一言がソラの胸に深く突き刺さっていた。

彼女の言う通りこれは我がままではない。自分なりにたくないから。自分には王に相応しくないから、説得して拒もうとしている。それは覆しようのない事実だと。

「わかりました」

ソラは立ち上がって、ラミナの顔を見る。鋭い彼女の眼差しと指摘を真摯に受け止めて、深々と頭を下げる。

「協力ありがとうございます。あとはボク達でなんとかします」

そんなソラの姿をしばし見つめてから、ラミナは軽い舌打ちをして部屋を出た。

扉を背にすると、ラミナは奥歯を噛み締める。

(ユースはこれを分かっていた上で、私に協力させてついでなの?)

自分の主であるユースに対しても、苛立ちの矛先が向いている。抑えきれない感情がふつつつと湧き上がってくる。

これまで感じたことのない忌まわしい感覚にまた舌打ちすると、ラミナは何処かへと去っていった。

足音が遠ざかっていくのを聞きながら、ソラはトウネリの方へと顔を向ける。困惑した表情から彼女も、聞いた内容を快く思っていないのを見て取れる。

すでにどうするかは決めてある。しかしラミナの発言を受けて、トウネリも巻き込む

べきか悩んでいた。

「トウネリは……どうする？」

ここまで付き合わせておいて、勝手な問いかけなのは分かっている。それでもソラは聞かずにはいられなかった。

対しトウネリは微笑む。ソラが実は賢者イヴェルテラの子供かもしれないとも聞かされたが、今の彼女にとってはどうでもいいことだった。

確かにヘルデイロ王の考えた計画やその意図については受け入れ難いものがある。しかしそれを聞いてトウネリが感じた不快感はソラに対するものではなく、ソラの顔から笑顔が消えそうになっていることに対してだった。

「いちいち聞かないですよ。何がなんでもあなたに協力する。そう決めて私は戻ってきたんだから」

「ごめんね……巻き込んだりして」
「お互いさまでしょ？」

もし彼女が生きていて、今もソラの側にいればこんなことにはならなかったかもしれない。そんな一抹の思いがトウネリの中に湧き上がる。

（大丈夫。私があの人への代わりにソラの手を握るんだ。あの人を守りたかったように、私も守りたいって思ったから）

思いを掻き消すと、トウネリは話を聞く姿勢を取った。

「それで？ これからどうするの？ なにか計画は練つてあるんでしょ？」

トウネリの問いにソラは頷く。

「実はひとつ、ボクがどうしても解決したいことがあるんだ」

「どうしても解決したいこと？」

含みのある物言いに、トウネリとセレネーラは首を捻る。

「うん。そのためにも、セラとトウネリには王様の説得をしてほしいんだ」

「でもあんたはどうするのよ？」

ソラは一度目を閉じる。ルージユヴェリアと交わした約束と、彼女の部屋から出る際のやり取りを思い出す。

そして問いかけに対しこう答えた。

「ボクは今夜襲撃してくる人を説得する。セラとルーさんの家族を元に戻すために」
二人の姫が家族とまた笑い合える日が来ることを願つて。

第五節 偽りは月明かりの下に 2

赤い夕焼けが王都を照らす頃。ルージユヴェリアは一人で街中を歩いていた。

周囲では「灯し屋」という、日が落ちきるまでに街灯のろうそくに火をつける職業の者が、梯子をかけてせっせと働いている。広い王都の夜道を照らす彼らは、人々が生活する中で欠かせないものだ。

そんな彼らの働きぶりを横目に、ルージユヴェリアは一直線にある場所へと向かっていった。

八番街——リヴェルトス商会が管理していた区画だ。現在、ここの管理は国が請け負っている。長年の契約の下続いていた支配が終わりを告げ、不当な高額請求の心配も無くなっていた。

そんな八番街にある一軒の家の前に着くと、ルージユヴェリアは一枚の紙を見た。紙に書かれているのは簡略な地図だ。

「……ですか」

地図に示されている場所と一致していることを確認し、ルージユヴェリアは呟く。

家の窓からはろうそくの柔らかな明かりが出ている。留守ではないようだ。ひとつ深呼吸吸して、ルージユヴェリアは玄関の扉を叩く。

すると扉越しにドタドタという音が聞こえた直後、勢いよく扉が開いた。

「お兄ちゃんお帰り！」

歓迎の言葉とともに出てきたのはセシルだった。

「あれ？ お兄ちゃんじゃない。お姉さんだれ？」

どこかで見たことのあるような、しかしあまり見覚えのない顔にセシルは小首を傾げる。

「ごめんね、セシルちゃん。ソラさんに伝言を頼まれてここに来たの」

「お兄ちゃんの知り合いの人？」

セシルは人差し指を唇に当てて、自分の記憶を辿る。

「あ！ 昨日慌ててた人！」

そして思い出してそう叫んだ。

その見解は何も間違っていない。いないのだが、ルージユヴェリアはその覚え方に些か複雑な表情を浮かべて頬を掻く。

「セシル、お客様？」

奥から母親のレフィナが、タオルで手を拭きながら出てきた。

「あ、うん。お兄ちゃんからなにか伝言を頼まれたんだって」「ソラさんから？」

レフィナはルージュヴェリアの顔をしばし見つめて「ああ」と思いだす。

「確かギルドで受付をされている方でしたよね？」

「はい。ルージュヴェリアと言います」

そう言つてルージュヴェリアは軽く頭を下げる。

対しレフィナは空模様を少し一瞥してから微笑んだ。

「ルージュヴェリアさん。立ち話もなんですし、良かったら中に入ってください」

「あ、いえ。あまり長い話ではないので大丈夫です」

提案にルージュヴェリアは慌てて首を振る。ソラを巻き込んでしまった立場である故に、彼を待つていたであろう二人といるのは正直気まずい。伝言を済ませたら早々に立ち去りたかった。

その思いを汲んだわけではないが、無理強いするわけにもいかずレフィナは「そうですか」と答える。

「それでお兄ちゃんはなんて言つてたの？」

「えっと……今日は依頼で忙しくて帰れそうにないからごめんねって」

「そっか。帰ってきたらまたお話し聞こうと思つてたのになあ」

内容を聞いてセシルが大きく肩を落とす。名前を呼びながら一目散に出てきたことから、彼女がソラの帰りを心待ちにしていたのは明らかだった。

セシルの様子を見て、ルージュヴェリアは表情を曇らせる。

「ごめんねセシルちゃん」

「どうしてお姉さんが謝るの？」

ルージュヴェリアは一瞬言葉を詰まらせた。

「その……今回ソラさんがやっている依頼、私が薦めたものだから」

曖昧な答えを聞き、セシルは無邪気な笑顔を向ける。

「でもお兄ちゃんが決めたことなんでしょ？ だったら仕方ないよ」

セシルの言葉にレフィナも微笑んだ。

「そうですね。なにもあなたが気負うことないじゃないですか」

「でも……」

二人の前向きな考えに、ルージュヴェリアは俯く。自分の素性も含めて真実を明かしてしまおうか。そんな考えが頭に浮かぶ。

「もし……もしソラさんがこの国の王様になるって聞いたらどう思いますか？」

気づけば質問を投げかけていた。

「お兄ちゃん、王様になるの？」

セシルの問い返しにルージユヴェリアはハツとする。ほぼ無意識に飛び出た質問に思わず口に手を当てた。

「あ、えと、別にそうなるっていう話じゃなくて！ あくまでもしもの話です！」

一体なにを口走っているのか。そう自分を戒めながら、ルージユヴェリアは慌てて捕捉した。目が泳ぎ、額に冷や汗が滲んでいる。

レフィナが質問の意図を図りかねていると、セシルが先に口を開いた。

「ぼくはやだなあ。だってお兄ちゃんやんが王様になったら、もう一緒に遊んだりお話したりする機会が無くなっちゃうかもしれないもん」

唇を尖らせて不貞腐れるような顔をするセシル。子供らしい理由だが、ルージユヴェリアの心を刺すには十分なものだった。

胸を締め付けられる思いをしながらも、ルージユヴェリアは反論を考える。子供相手になにをムキになっているのか、という思いよりも自分の考えが否定されたような感情が先行していた。

「でもソラさんならきつと王様になってもセシルちゃんと遊んでくれるんじゃないかな？」

「んー……それでもやだ！」

「それはどうして？」

「だつてお兄ちゃん言つてたもん。沢山の人に笑顔になつてもらうために頑張るんだつて。相手がどんな人でも笑顔にしてあげたいんだつて。でも王様になつたら思うようにできないかもしれないじゃん」

確かにセシルの考えは一理あつた。国の王になればその分重い責任を負うことにならう。責任を負えば負うほど自由からは遠ざかつていく。言つてしまえば、王にするといふのはその人間をひとつの国に縛りつける行為だ。

そしてそれはソラが抱えている願いや思いが届く範囲を狭めるのと同義と言つていいだろう。

家族が元どおりになつた後、ソラを正式な形で王にする。そう考えていたルージュヴェリアの中に迷いが生じる。果たしてソラを国に縛り付けていいのだろうか。何より自分は、その王という責任から逃れようとしていただけなのではないかと。

唇を噛み締めるルージュヴェリアの様子を見て、レフィナはふと口を開いた。

「ルージュヴェリアさん。あなたがどうしてそのような質問をしたのかは分かりませんが、私もセシルと同じ意見です」

微笑むレフィナの顔を、ルージュヴェリアは見つめる。

「私もセシルもまだソラさんとは会つたばかりで、まだ彼のことはなにも分かつていません。けれどこれだけは分かるんです。私の夫と同じように、彼はなにか強い責任を感

じていて、その中には彼が本来抱えるべきではないものまで混じっているのだと。だから私たちは少しでも、そんな彼の支えになれたらいいなと思つています。そうよね？
セシル」

「うん！」

ルージュヴェリアは二人の笑顔が眩しかった。誰かの笑顔のためにありたい。その思いがこんなにも素敵な笑顔をもたらしたのだと。

「そうですか。すいません、変なことを聞いて」

「いえ。ほらセシル、先に入つてお皿の用意をして。お母さんはこの人を見送るから」
「はーいー！」

元氣よく返事すると、セシルは家の中へと入つていった。

「素敵なお子さんですね」

「ええ。父に似て、優しい子に育つてくれています」

ルージュヴェリアとレフィナは軽く笑いながら、皿を運ぶセシルの様子を眺める。

この時ルージュヴェリアは、家族と過ごした幼い日々を思い出していた。

「お邪魔してすいませんでした。私帰りますね」

「あ、ルージュヴェリアさん。少しお伺いしてもいいでしょうか？」

帰ろうと踵を返したルージュヴェリアを、レフィナが突然呼び止めた。

彼女の低い物腰から「もしや正体がバレてしまったのではないか」とルージュヴェリアは身構える。

「あの……ギルドの受付つて私でもできるでしょうか？ その……昨日の一件から仕事を变えようと考えていて……」

どうやら思いは杞憂であったようだ。ルージュヴェリアはホツと胸を撫で下ろしながら、軽く笑みを浮かべた。

「大丈夫だと思えますよ。もし良かったら私が支部長にお願いしてみましようか？」

「ああいえ、さすがにそこまでは——」

ルージュヴェリアの返しに、レフィナは少し言葉を詰まらせる。まだ働き先との話を済ませていない以上、すぐには判断できなかった。

しかし一方で、またとない機会であるのも違いはない。少し悩んでから、レフィナは口を開いた。

「でしたらその……もう少し考えてから伺います」

「わかりました。お待ちしますね」

そう頷くとルージュヴェリアは頭を軽く下げた。

帰路を歩きながら、ルージュヴェリアは茫然とした表情を浮かべる。

一体自分はどうするべきなのか。一体どうしたいのか。これまで幾度と考えてきて

は結論を出してきたはずのことをまた考え始めている。

揺らいでいた。あの親子の言葉でルージュヴェリアは、姫シエルヴェリアとして何を成すべきなのかわからなくなっていた。自分の思いがわからなくなっていた。

気がつけば彼女は噴水広場に足を運んでいた。

噴水広場には観光する人の姿も、遊んではしゃぐ子供の姿もなく、あるのはただ静寂のみ。

広場のベンチに座り、流れる水の音を聞きながら、ルージュヴェリアは妹セレネーラのことを思い出していた。

彼女はこれからどうするのだろうか。どうやって父親の考えと向き合っていくのだろうか。聞かなかった答えを探し始める。

「こんなところで何してるの？ ルー」

考え事に耽ける背後からそう呼ぶ声が聞こえ、ルージュヴェリアは振り返る。

「シエルヴェリアさん……」

ギルド・ヘルディ口支部のもう一人の受付嬢シエルヴィア。その裏の顔は密かに行動する姫シエルヴェリアを護衛する騎士だ。

その彼女が澄ました顔でルージュヴェリアの隣に座った。

「あまり一人でうろろしないで頂戴。前はトゥネリがたまたま通りかかったから良

かったものの、あの時下手すれば怪我じゃ済まなかったかもしれないのよ？」

「その時はあなたが駆けつけてくれるって信じてますから」

シエルヴィアの心配に対し、ルージユヴェリアは微笑んで答える。

するとシエルヴィアは顔を歪ませて、怒りを露わにした。

「あのねえ……」

シエルヴィアは口元を引き攣つたまま、ルージユヴェリアの頬を両手で強く引つ張つた。

「あなたになにかあつたら私の首が飛ぶのよ。分かる？ 最深の注意は払ってるって

言っても、目を離れた隙にどこへでも行かれたらさあ？ 流石の私でも探すのに時間が

かかっちゃうわけ。ねえ、分かる？」

「あひゃ……いひゃい……いひゃいれす……」

痛みで涙目になるルージユヴェリア。本来彼女はシエルヴィアよりも立場が上であるはずなのだが、そんな関係は一切感じられない。側からみれば友人の愚行を叱りつける女性と、それに対し抗議も出来ずされるがままの女性といった光景にしか見えない。

威厳のカケラもない主の姿に呆れ果てると、シエルヴィアはため息とともに手を離れた。

ルージユヴェリアは両頬を撫でながら、唇を尖らせる。

「別にいいじゃないですか……共鳴石のおかげで大体の位置は把握できるんですから」
共鳴石——掌に収まるほどの魔力結晶に特殊な魔法陣を刻んだ物だ。この石に魔力を流すと同じ魔法陣同士が共鳴を起こし、強い光を天に放つという特性を持っている。この特性が男女を引き寄せるものだとして、古くから婚約指輪の装飾として使われていた。

「共鳴石も万能じゃないんだから。あなたが別の国にいたりしたら分からないのよ？」
「さすがにそこまで好き勝手動かないですよ」

「はあ……まったく、わがままなお姫様ね」

我がまま。その言葉がルージユヴェリアの胸に深く突き刺さる。

「わがまま……なんででしょうか……」

ぼつりと呟く。

「私はソラさんが王様になれば、きつと素敵な国にしてくれると思っと思っています。だから今でなくても、あの人にいつかはこの国を治めてもらいたい。でも本当はただ、私が王位につきたくないという我がままなのでしょうか？」

問いかけにシエルヴィアは答えない。答えない代わりに、そつとルージユヴェリアの頭に手を置いた。

普段はしない行動にルージユヴェリアは目を瞬く。

「なんですか?」

「別に。まだほんの少し時間があるんだし考えてみたら? 自分が何をしたいのか。何をしなければならぬのかを改めて」

ルージユヴェリアは俯く。

ヘルデイロの第一王女シエルヴェリアとして成さなければならぬことは分かっている。いずれは父の跡を継ぎ、この国のために身を捧げること。それが王族として生まれた自分の本来の使命だと。

しかし自信がなかった。これからを生きる人々を果たして導いていけるのか。国民たちが笑っていつまでも過ごせるように出来るのか。そして何よりこの国を守っていけるのか。

重くのし掛かる責任を忘れたいが為に城を離れた。責任から逃れたいがために父の計画に加担してきた。受付嬢のルージユヴェリアという在り方も気に入っている。

その一方で、壊れかけた家族の関係を元に戻す為、ソラに止めてほしいと願った。

我がままだ。何もかも全部、自分の我がままだ。

そう自覚して嫌気がさし、ルージユヴェリアは深い嘆息とともに項垂れる。こんな人間がこの国を治めていいはずがないと。

「ルー……いえ、姫様。私はあなたの考えを尊重する立場の人間です。だからあなたが

何を選ぼうと止めるつもりはありません」

「ずるいですね、シエルヴィアさんは」

「人間なんて大体そんなものよ。そんな中で譲れない思いのために真つ直ぐ突き進もうとするんじゃない？」

「譲れない思い……ですか……」

ソラにもセレネーラにもその思いはきつとあるのだろう。だからこそ彼らは立ち上がり、長年続いてきた嘘を終わらせようとしているのだ。

しかしそんなものが自分の中にあると、ルージュヴェリアはとも思えなかった。

「時に聞きたいんだけど、私がどうして騎士になつてあなたの側にいることを志願したか分かる？」

「それは……お金のためとか地位のためとかですか？」

「あなた私をなんだと思つてるのよ。まあその辺も理由の内であるのは否定しないけどさ」

シエルヴィアは空を見上げた。夜の帳が薄らと掛かる中に、輝きを放つ一番星が見える。

「憧れだったんだよね。綺麗で素敵なお姫様を守るカッコいい騎士にさ。だから沢山努力して、強くなつて、そして騎士団の試験を受けた。こう言っちゃなんだけど、私はソ

ラにも負けないくらい力があると思つてる。それが認められて、今あなたの側にいる」

「シエルヴィアさん……」

「だからさ、いいんじゃない？ 憧れが行動の理由であつてもさ」

憧れ。それは長らく忘れていた思いだった。

幼い頃、伝承に出てくるイヴェルテラに強く憧れて、彼女の足跡を辿つた。彼女が出てくる話は全て覚えていてるほどに本を読み漁つた。

文字通り「世界を守る」という大きな枠の中で、彼女は常に一人で奔走していた。例えどんな犠牲を払おうとも、世界のためになるならばと生涯の全てを捧げたのだ。

その誇り高い姿に憧れ、姫シエルヴィアとしてヘルデイロの人々を守つていきたい。そう思つていたはずだ。

（ああ……そういえば私、ヴェルティナ様があのイヴェルテラ様かもしれないって言われてなんて思つたっけ？）

ルージュヴェリアは思い出す。本来あるはずの家族の形が失われた時に、一緒に失つてしまった思いを。

「ふふふ……」

思い出して、自然と笑いがこみ上げてくる。自信が舞い戻ってくる。

「ありがとうございます、シエルヴィアさん。思い出しました。私が何をしたいと思っていたのかを」

「あらそう？　じゃあこれからどうする？」

シエルヴィアの問いかけに、ルージュヴェリアは立ち上がる。

「城に戻ります。そしてセラと一緒に、私たちの意思を父に伝えようと思います」

その瞳には受付嬢のルージュヴェリアとしてではなく、第一王女シエルヴェリアとしての覚悟が宿っていた。

第五節 偽りは月明かりの下に 3

月が昇り切る頃、ブリアンテス城では異様なほどの静寂に包まれていた。王都内も寝静まり、あるのは街灯の明かりと軽く吹き通る風の音のみ。

城内では兵士たちが見回りをしていた。主に目立つのは槍を持つ兵士。彼らは警戒心を露わにして周囲を見渡しながら歩いている。

そんな城を遥か上空から影が見下ろす。時を待つかのように静かに佇む影は一点、蠟燭の灯る部屋ヘルデイロ第二王女セレネーラⅡモントリブリアンテスの部屋を見つめている。

月明かりが雲間から射し込むと影を照らした。影は闇に紛れるかのような黒いマントをはためかせている。顔も体格も隠し、ただ静かに何かを待っている。ふとセレネーラの部屋の明かりが消えた。

正体不明の影は、口元に笑みを浮かべる。彼はこの時を待っていたのだ。部屋の明かりが消えてからすばらしくして、影は窓の側にまで下降した。

窓から部屋の中を覗く。部屋の中に警護する人間の姿はなく、人と認識出来るのは

ベッド上の膨らみのみ。膨らみが微かに上下していることから、就寝したセレネーラがいるのだろう。

影は窓に手をかざす。細く華奢な指先でそつと触れると、窓が一人でに開いた。

息を殺し、影は眠るセレネーラに近づく。暗闇に慣れた瞳が、白銀の長い髪を捉えていた。

影はまた笑みを浮かべた。手には一振りの短剣が握られている。

逆手に持った短剣を掲げると、影は口を動かして言葉を発した。

「さようなら……セラ」

その声は女のものだった。

女は掲げた短剣をベッド上に眠るセレネーラに振り下ろす。

このまま切っ先が貫くかと思ったその時、女の体は突然動かなくなった。

「っ……!?!」

何かに縛られている。そう女が認識した時、ベッド上の膨らみが立ち上がった。

「やっぱり……あなたが来たんですね」

ベッドで横になっていたセレネーラ——ではなく、偽装していた空色の髪を元に戻したソラが碧眼を光らせる。

「ずっと待っていたんです」

ソラは真つ直ぐとその顔を見つめて言い放った。

「メルヒさんが来るのを」

影は息を飲む。

否定しようにも、この状況では出来るはずもなかった。いや、そもそも彼女は否定する気などなかった。

縛られていない方の手でフードを取ると、メルヒは素顔を晒した。

「いつから気づいたんです？ 私が姫様の命を狙っていると」

「いつから……と言われると、最初に出会った時から違和感を持つてました。この人には何かあるって」

「勘……というものでしょうか？」

「そうですね。あなたがユースに最初に言ったことが、まるでユースが来ることを期待していたみたいだなって思ったんですよ」

メルヒは自嘲気味に笑う。たかだかそんなことでずっと警戒されていたのかと。

「姫様は今どちらに？」

メルヒは辺りを見回す。ソラ以外の姿は見当たらず、出てくる様子もない。

「ルーさんと、いえシエルヴェリア姫と一緒に王様のところに向かっています。今ごろ話している頃だと思いますよ」

「あの方も一緒にですか。一体いつの間に？　あなたが姫様を連れて戻ってきたには、そのような気配はありませんでしたか」

「彼女を警護している騎士シエルヴィアさんが颯爽と」

なるほどとメルヒは肯く。彼女であれば誰にも悟られずに連れてくる手段を持っている。なにせ彼女は一時期、騎士団の団長を務めていたのだから。

こころも相手の都合よく事が運んでいることにメルヒは笑う。全ては想定の内とはいえ、いざ直面すると笑うしかなかった。

「流石はヴェルティナ様の息子といったところでしょうか」

ソラは首を横に振る。

「ボクはあくまできつかけを作っただけですよ。あとは皆の意思でここまで来たんです」

「なるほど。ですが残念ながら、その皆というのには含まれていませんよ」

メルヒは嘲るように笑うと、短剣を持った手を軽く捻る。すると彼女を拘束していた魔力の糸が全て切断されて消滅した。

動揺することなくソラは刀身を見つめる。青白い光りを纏う刀身は、怪しくも美しい。

「その短剣……なにか特殊なものですね？」

「王家に伝わる短剣ダルナシア。魔力で生成されたものを断ち切って無力化する力が備わっています」

短剣の持つ力は魔法を多用するソラにとっては天敵だ。まともに相対すれば不利と言えらるだろう。

だがソラは構えない。敵対する意思はなく、ただメルヒの動向を伺っている。

その姿勢にメルヒは眉を寄せる。

「ソラ様はどうして構えないのですか？ 目の前に敵がいるのですよ？」

「あなたのことを敵だと思っていないだけです」

明らかかな敵意を示すメルヒに対しソラはそう言い放つ。

メルヒはしばし呆然とした表情を浮かべた後に項垂れる。そして短剣を構えて切り掛かった。

ソラは素早く反応すると、接近してきた腕を受け止めた。顔に当たる寸前のところで切っ先が止まる。

「ここまでしても、私を敵だと認識しないのですか？」

問いかけにソラは真っ直ぐな目で頷く。

「甘い考えですね」

メルヒは鼻で笑うと、空いた手のひらをソラの眼前に翳す。

短い詠唱とともに魔力が収束。直後、小さな爆発が起こった。

メルヒは距離を取って様子を伺う。

「あなただって本気で戦おうとはしてない」

煙が晴れると、ソラは瞬時に距離を詰めてメルヒの右手を掴んだ。

「魔力糸をなぎ払った時に使った芸当を使えば、ボクを切る事もできたはずですよ。でもそうしなかった」

無理やり引き剥がそうと試みるが、予想以上の腕力にメルヒは驚愕する。

「ボクは武器を持っていない。そうなれば防ぐ手段は魔力の障壁を纏う事しかありません。でもあなたの持つ短剣であれば、それを断ち切ることができるはずだ」

「だから手を抜いている。そう言いたいのですか？ つくづく甘い考えですね」

笑みを浮かべると、メルヒは手首を捻る。

危険を察知したソラはすぐさま後ろに飛び、メルヒから離れた。

ソラがいたところに見えない斬撃が幾つも飛び交う。

明らかに致命傷を狙ったものだったが、ソラの表情に動揺はない。彼の視線は自然と地面に向いていた。

「今あなたはこう考えていますね？ 床を斬らないように配慮していたと」

「メルヒさん。もうやめましょう。こんなことしたって何も意味がない」

「意味がない?」

メルヒは眉を潜める。

「だってそうでしょう? 大切な家族を欺いてまでやることじゃない」

「その物言い……シエルヴェリアから聞いたのですね?」

ソラは肯く。

「あなたの正体が、亡くなったとされている母親だつてことを」

メルヒは否定することなく俯く。対しソラはそのまま話を続けた。

「セラが生まれた後、あなたは使用人に扮して彼女を育てた。全てはこの偽りの筋書きが終わった後、彼女の心が壊れないようにするために」

セレネーラが生まれる前のこと。

ヘルディロ王とメルヒはある計画を立てていた。それは成長したソラが王都を訪れた時、彼を王として擁立すること。そのためには現在ある王家が邪魔であると二人は考えていた。

しかしすでに赤子を身籠っていたメルヒは、苦肉の策として母親であることをこれから生まれてくる子供には伏せようと考えたのである。

いざれ罪人として裏切る身。その罪人が母親であったなどと悟らせないためにも必要なことだと。

あまりに突拍子もない考えだと分かっているとしても、それが子供のためであるのだと信じてメルヒは決行したのだ。

「でもこんなの間違っている。相手が誰であろうと、親愛を寄せていたのなら、その人をじつの母親のように思っていたのなら悲しいに決まっている」

「だからもうやめろと仰るのですか？ そんなの無理ですよ。だってもう……後戻りできないのだから」

そう言つてメルヒは扉を一瞥する。

その瞬間をソラが見逃すことはなく、口を開いた。

「兵士なら入つてこないですよ。さっきの爆発音、この部屋以外には聞こえないようになってますから」

「なるほど……音を遮断する魔法ですか……」

部屋全体を覆うほどの魔法であれば、仮に短剣の力があるとしても簡単には断ち切れな
い。おそらく短剣の存在を聞いていたのだろう。

メルヒはそう睨み、ソラを凝視する。得た情報を最大限に活用する姿、そのやり方は母親に似ていると。

ソラとヴェルティナの姿が一瞬重なり、メルヒは奥歯を噛む。

「あなたはどうしても私を止めると言うのですかね？」

「今度は家族として、ルーさんやセラと一緒にいて欲しいから」

それがソラの願い。だがメルヒは聞き入れるつもりはなかった。ある目的のためにも、このまま終わらせるわけにはいかないのだと。

「だったら外に出るまでです」

そう言い放ち、メルヒは短剣を懐の鞘にしまう。そして隠し持っていたひとつの結晶を取り出した。

結晶に魔力を込めて放り投げると、結晶は強い光を放出する。

「くっ……!?!」

ソラはすぐさま光を直視しないように顔を逸らした。直視してしまえば、視力が回復するまで時間が掛かるからだ。

その隙を狙ってメルヒは外へと飛び出した。

「これで騒ぎを大きくすれば——」

上空を飛んで街中に逃げようとした時、背後に気配を感じてメルヒは振り向いた。

「メルヒさん!」

背後にいたのはトウネリだった。

城の屋根から飛び降り、自分目掛けて急降下してくる彼女を見てメルヒは目を剥く。

「なんて無茶な!」

咄嗟にメルヒは身を翻して躲そうとする。が、脳裏にトウネリと交わした会話がちらついた。

「……っ！」

軽い舌打ちとともに、メルヒはトウネリの体を受け止めて落下する。

なんとか受け身を取ったメルヒだったが、その代わりにトウネリに組み伏せられていた。

「街には行かせません。行かせたらあなたは騒ぎを立てて、事を大きくしちゃうから」

呆れた表情で、メルヒはトウネリの目を見つめる。真っ直ぐながらも微かに潤っている瞳を。

「私が受け止めなかったらどうするつもりだったのですか？」

「きつと受け止めてくれると信じてましたから」

トウネリは自嘲気味に笑う。自分でも危険な行為だと分かっていた。それでもメルヒを信じたのだ。母親としての優しさを隠し切れていなかった彼女を。

その思いを察して、メルヒはため息を吐く。

すべて読まれていた。読まれていたからこそ、ここまで周到な準備が短時間で成されていたのだ。

「トウネリ、大丈夫？」

心配した顔でソラが降りてくる。

「うん、大丈夫」

「そっか。良かった」

ソラはそつと胸を撫で下ろす。もし外に逃げた場合は任せて欲しい。そう言われて任せたものの、まさか城の屋根から飛び降りてくるとは思ってもいなかったのだ。

その様子を見て、メルヒはくすりと笑う。

「どうやら何も言わずに無茶をしたのですね、トウネリさん」

メルヒの指摘に一瞬目を逸らしながら、トウネリは笑った。

「やっぱりメルヒさんは優しいですね」

笑うトウネリの顔を一瞥してから、メルヒは天を仰ぐ。

自分は覚悟したつもりだった。この日までずつと、覚悟を忘れずにいたはずだった。

ずつと誤魔化し続けていた感情を認識してメルヒは涙を溢す。

娘たちと笑って過ごしたい。時に悩み、時に苦しみなながらも、家族同士支え合って生きていきたい。そんな思いが込み上げてくる。

「ずつとこの日のために……あの子を騙し続けていたのに……」

吐露する思いを聞いて、ソラは目蓋を閉じる。

きつと彼女にもただならぬ思いがあったのだろう。そのために犠牲者となることを

選んだのだろう。

だがその思いは少しずつ変わっていったのだ。本来と違う形とはいえ、愛する娘と時間をともにしていく内に。

「もうその必要はないんですよメルヒさん。今から始めましょうよ……嘘偽りのない家族としての時間を」

すべての原因は自分にある。そう自覚していてもソラは、ひとつの家族がまた笑い合えるように言葉を投げかける。

「あなたたちの思いはわかりました。でもこんなやり方じゃなくてもいいはずですよ」
「では……王になるのですか？」

問いにソラは首を横に振る。

「ボクはまだまだ未熟です。それに彼女たちの意思を踏みにじりたくないから」
「彼女たちの意思？」

ソラは微笑むと、仰向けのメルヒに右手を伸ばした。

「行きましょう、メルヒさん。あなたの大切な娘さんたちの思いを聞きに」

メルヒは差し伸べられた手を見つめた。微かに震えている。

(そういえば幼い時に……)

自分が向けたものを思い出し、胸を締め付けられるメルヒ。目の前にいる彼はきつ

と、目を逸らしたくても真っ直ぐ見ていたのだろうと。

そして同時に悟った。もうこれ以上は無理だと。

諦めて、メルヒは微かに震えている手を取って身を起こす。

「わかりました。あなたに同行します」

微かに笑うと、メルヒはそつと震える手を両手で包むのだった。

第五節 偽りは月明かりの下に 4

薄暗い謁見。その間の玉座にヘルデイロ王は静かに腰を下ろしていた。

彼が真つ直ぐ見つめる先には、第一王女であるシエルヴェリアと第二王女のセレネーラが立っている。

「その顔を見るのは久しぶりだな、シエルヴェリアよ」

「そうですね……ここを出てからは一度も会っていませんでしたから」

両者に笑顔は無く、真剣な面持ちで対峙している。

「お父様。なぜ私がここへ来たのかはわかっていますよね？」

「ああ、わかつておる。だが彼にこの玉座を託すのはすでに決められたこと。覆すことはない」

シエルヴェリアの問いかけに、王は目を逸らすことなく答える。

するとセレネーラが一步前を出て発言した。

「どうしてですか？ どうしてそうまでして彼を王にしようとしているのですか？」

姉から理由の推測は聞いた。だが本人から直接その意味を聞いたわけではない。

父の口から理由を聞きたい。そう考えた問いかけに、王は目蓋を閉じて嘆息する。

「すべては彼のためだ」

納得のいかない答えに、セレネーラは拳を握る。

「一体なにがソラのためだつて言うんですか？ 彼の知らないところで勝手に決めたことなのになが！」

「そうだな。我々が勝手に決めたことだ」

違う。そうセレネーラは内心で否定する。

本当はもつと別の目的がある。嘘に敏感になつてしまった彼女はそう感じ取つていた。

故に聞き出さなければならぬ。本当の目的を。なんのためにこんな嘘を実行したのかを。

「お父様。答えてください。本当はなにが目的なのですか？」

「なにが言いたいのだ、セラよ？」

「お父様は何かを隠しています。彼のためという言葉も本当は嘘で、もつと根にある物を隠している。違いますか？」

セレネーラのこの問いに、王は初めて表情を変えて眉を潜めた。杖を握る手が強張っている。

「根にあるもの……だと?」

初めて怒気の込められた声を聞き、セレネーラは口を噤む。

「では聞く……お前たちは王になることを望んで生まれたのか?」

王は杖先を向けてシエルヴェリアとセレネーラに詰め寄る。

「お前たちは望んだのか! 自分が王になることを! 王となり、自由のない生活を送ることを! 民のことを第一に考え、あらゆる方法を模索することを! この国を守る責を負うことを!」

王は叫んだ。己の境遇を呪うかのように、怒りを露わにして叫んだ。

「私は望んでなどいない! 選択肢がなかったただけだ! 王の子供として生まれ、王家の血筋ということとで王座につくことを約束されただけだ! この国の風習に則り、己の名を捨ててヘルディオ王として生きることが強制されただけだ! ただ生まれる前から用意されていた道をひたすらに進むことを余儀なくされただけだ!」

王の叫びは部屋の外にまで届いていた。外にはソラとトウネリ、そして事情を知っているメルヒが静かに聞いている。

吐露する思いを耳にし、ソラは考えていた。

王の思いを否定することは出来ない。血筋によって定められたことを真つ当し、これまで生きてきた彼の思いを。

その思いを汲み取るのであれば、今王になることを決断するのが最善だと言えるだろう。しかし。

「お前たちだつて望まないだろう？ お前たちもいずれは王になる。そして誰かと子を育み、その子供が次の王となる。そうやって代替わりを重ねて、永遠と血筋という名の呪いを受け継いでいくことなのだぞ」

「それが……なんだというのです……？」

シエルヴェリアが口を開いた。

「私は王を受け継ぎたいと思つていますよ、お父様」

「なに？」

胸に手を当てて、真つ直ぐな眼差しで訴えかける。己の覚悟とその思いを伝えるために。

「私も最初はお父様と同じことを思つていました。どうして私は王族として生まれてしまったのだろうか。それはきつと、一番の被害者であるセラだつて思つたはずですよ」

セラネーラは頷く。何度も呪つた。この王族として生まれたが故に、自分は家族と笑う時間を奪われてしまったのだと。

だがそれでも彼女は誇りに思つていた。父親が国のために尽くして頑張っている姿を見て、幼心に憧れていたのだ。いつかは父のような王になり、ヘルデイロに住まう民

のために全力を尽くしたいと。

「私には憧れの人があります。それが誰かは、お父様もご存知のはずです」

「イヴェルテラ……か……」

その名を口にして、王は怒りの形相で齒軋りを立てる。

「あの女は己が建てた国を放棄した。あの女が王の座を別の人間に与えた結果、この呪いがいつまでも続いているのだぞ！」

「お父様だって気づいているはずです。あの方はこの国に留まらず、この世界を守るために行動しているのだと」

「世界を守るためなどとあの女がいつ言った！ ただ自分の責任から逃れたいだけだろう？ 永遠に近い命を持つというのならば、己が生み出した物を永遠に管理する責任があるはずだ！」

「でもお父様は言っていたじゃないですか。あの方のおかげでこの国は繁栄したって。立派にその責任を果たしているではありませんか」

シエルヴェリアも負けじと、論すように話しかける。

王の言い分はなにも間違つてなどない。イヴェルテラは他の賢者とは違い、己が生み出した国やその民を導くことを拒んだ。それは本来王になるべき彼女が責任逃れのための行動を取ったと見てもなんらおかしくはない。

しかしこのままでは言い合いが激化するだけで何も解決しない。そうセレネーラは感じていた。

きつと否定したいのだ。今の自分の立ち位置を。これまでの自分の行いを。そしてその先にある、自分の娘が新たな王となる宿命を。

そんな父親をどうすれば落ち着かせることが出来るのか。セレネーラはずつと考えていた。

「お父様……」

その答えを示すために、セレネーラは王に歩み寄った。

「セラ。お前だって本当は——」

王が言い終わるよりも先に、セレネーラはその体を抱きしめるように寄り添った。

続けようとしていた言葉が、王の喉に引っかかる。

「お父様の気持ちは私もよくわかっていきます。でもお父様はずつと頑張ってきたじゃないですか。私は知っています。お父様がどれだけの責任を背負い、それを全うしてきたのかを」

セレネーラはずつと陰ながら見ていた。父親が日々悩みながらも、より良い国にするために多くのことをしてきたことをずつと見てきたのだ。

「だから一緒に考えましょうお父様。一人でなんでもやろうとしなくていいんです。あ

なたの側には私があります。お姉様もいます」

これがただの慰めの言葉でしかないのは分かっている。それでもセレネーラは言わなければならなかった。ずっと蚊帳の外で、何も協力することが出来ないもどかしさを感じていたからこそ、彼女の思いは強固なものだった。

「それでもお父様が辛いというのなら、お姉様と私が王位を引き継ぎます」

「何故そうまでして、彼を王にしたくないのだセラよ」

体を離すと、セレネーラは微笑んで答えた。

「だってソラの優しさは、国に縛り付けておくには勿体無いから」

セレネーラの言葉にシエルヴェリアも頷く。

「私もセラと同じ気持ちです。まだ出会って間もないけれど、あの人の優しい手のひらをもっと沢山の人に伸ばしてほしいと思っています」

そして姉妹は並び、真っ直ぐな眼で王を見た。

「お父様。私たちはもう覚悟は決めています」

「確かにセラも私も、王家を望んで生まれたわけではないかもしれませんが。これから生まれる私たちの子供も望まないかもしれません」

「でも今の私たちは思っているんです。この国で暮らす人たちの支えになってあげたい。この国で暮らす人たちが笑えるようにしてあげたいって」

「そしてソラさんやあの方が、この国の人たちに手を伸ばさなくても一緒に笑い合えるようにしてあげたいんです」

それが姉妹で選んだ道だった。

いつかは行き詰まり、立ち止まってしまふ道かもしれない。血によつて定められた道かもしれない。それでも二人はこの道を進むことを選んだのだ。

二人の覚悟を聞き、王は啞然とする。知らないうちに、見ないうちにこんなにも大きくなつていたのかと。

「あなた……もういいじゃないですか」

声がして、王は入り口の方に顔を向けた。

メルヒが微笑みながら歩み寄つて来ている。その背後にはソラとトウネリの姿もあつた。

「もうこれ以上、私たちの我がまままで子供たちを苦しめるのはやめましょう?」

「メルヒ……お前はいいのか? 望んでいただろう? 普通の暮らしを」

王もその妻メルヒも望んでいた。子供たちと一緒に、王家という血筋に縛られず平穩に暮らす日々を。

だがそれはただの我がままだ。子供たちの居ない間に勝手に決めて、ただ振り回すだけの我がまま。それを二人は十分に理解し、計画を実行した。

「ええ……でもこの子たちは自分の目で見て、考えて、その上で答えを出した。知らない内にずっとずっと大きくなっていったわ」

その言葉を聞き、王も諦めたように肩を落とした。そして微かな笑みを浮かべると言った。

「そうだな。私もずっと幼い頃思ったことを思い出した。我が父や母が苦悩しながらも、ずっとこの国で暮らす人々のことを思って日々頑張っていた。それを見て思ったのだ……いつか二人の支えになりたい。二人に誇れるような王になりたいとな」

「もう一度やり直しましょう。今度は家族みんなで悩みながら、前に進むの」
メルヒはそう笑ってから、セレネーラの方に体を向けた。

頭を優しく撫でられ、セレネーラは目を細める。これまでと何も変わらない温もりに触れて、張り詰めていた思いが綻ぶ。

「ごめんなさい、セラ。ずっとあなたを騙して……あなたのためだと思って、酷いことをしたわ」

「いいえ……いいえお母様……私はずっと思っていましたよ？ きつとこの人は私のことを守ってくれているって。もしかしたらこの人は、本当は私のお母さんなのかもしれないって」

母親の手のひらを握り、セレネーラは曇りのない満面の笑顔を浮かべる。

「だってこんなにも温かくて優しい手だから」

感極まり、メルヒはセレネーラとシエルヴェリアの体を抱き寄せた。目頭には涙が溜まり、精一杯の謝罪を口にする。

「ごめんなさい、二人とも……ごめんなさい……っ！」

そんなメルヒの体を、二人の娘も優しく受け入れる。

その三人の体を、王は大きく手を広げて抱きしめた。

四人の姿を見てトウネリは微笑む。今この瞬間、十二年という時の中続いていた偽りの日々が終わりを告げたのを感じていた。

「終わり……かな？」

トウネリの問いかけに、ソラは静かに頷いた。

第五節 偽りは月明かりの下に 5

「さて、そろそろ終わった頃かな」

そう言うと、ヴェラドローネはカップに入った白湯を飲んだ。

砂糖も何も入っていないただの湯の味と熱さに不満げな表情を浮かべる。

「あちち……参ったなあ、まったく。こんな時に茶葉を切らしてるなんて」

愚痴を溢す一方、彼女の表情はほくそ笑んでいた。

湯面から立ち昇る湯気を少し眺めてから、机の上に置かれた手紙を一瞥して「まったく、本当に」と呟く。

「こんな下らないことに付き合わされる彼の身にもなつてほしいものだ。いくら王族とはいえ、限度というものがあるだろうに」

呆れたような言動とは裏腹に不敵な笑みを浮かべるヴェラドローネ。そんな彼女の首筋に鋭い刃が不意に向けられた。

「おやおや。相変わらず唐突に物騒なことをするじゃないか、ラミナ」

切っ先を向けてきたラミナに視線を向けて、ヴェラドローネはくつくつと笑う。別段恐

怖するわけでもなく、むしろこの状況を楽しんでいる様子だ。

対するラミナはと言うと、静かな怒りが滲み出ていた。鋭い眼光と刀身に変異した腕がヴェラドローネを今にも突き刺そうとしている。

「あんた達の目的はなんなのかしら？」

「目的？」

質問の内容にヴェラドローネは笑いを堪える仕草をする。

明らかに人を馬鹿にした態度だが、ラミナは動じず答えを待った。

「何を聞くかと思えば。珍しく他人に入れ込んでいるじゃないか」

「あなた自分の状況がわかっているのかしら？」

「ん？ 君の機嫌を損ねれば私が死ぬかもしれないということかい？ 無理無理。君程度じゃ私を殺すことはできないよ」

ヴェラドローネは笑いながら、向けられた切っ先を人差し指でつつく。

本来ならば軽く力を入れるだけで指先を切り落とせるはずだが、どういうわけか彼女の指に傷ひとつつく気配もない。

不可思議な感覚に眉を寄せると、ラミナはそのままの体勢でヴェラドローネを睨んだ。

「前々から思ってたのだけど、あなた人間じゃないわね？」

「いや、私は人間だよ。君だって特殊な人間の使い魔なんだから、それくらい理解できる

だろうか？」

「いちいち癩に触る物言いに、ラミナは遂に舌打ちをした。

「確かにユースは特別な人間だし、それは私もよく分かつてる。けどあんたからはそのユースからさえ感じる人間特有の気配を感じない」

「ふむ、なるほど。面白い考え方だ。けど君が分かることを、君の主も気づかないとでも？」

「何が言いたいのよ？」

ラミナの問いにヴェラドローネは口を吊り上げて笑った。

その邪悪にも似た笑みを見て、ラミナの背に悪寒が走る。

「要するに、君が何をしようと私の立場は揺るがないということさ」

奥歯を噛み締めて、一抹の恐怖を拭い去るとラミナは腕を元に戻した。額には微かに嫌な汗が滲んでいる。

「ふん、あんたの立場とかはどうでもいいわ。けどもしその立場とやらであの二人に何かあるようなことがあれば、例えユースが動かなくても私がお前を殺す。肝に銘じておくことね」

「本当に、やけに珍しく二人のことを心配するじゃないか。あんなに罵声を浴びせているくせに」

言いながらヴェラドローネは白湯に口をつける。時間が経ち、最初に口にした時よりも冷めていた。

「でもまあ、君は興味ない相手にはそもそも罵声すら浴びせないからねえ。二人のことがそんなに気に入ったのかい？」

「はあ？ 氣にいるわけないでしょ。あんな半端なやつら」

「つまり半端なものだから、いつか突然死んだりしないか心配ってことか」

ヴェラドローネの指摘に、ラミナは顔を逸らす。

「そういう反応をすると正解だと言っているようなものだよ。ユースからそう教わらなかったのかい？」

「うるさい」

「まあ仕方ないか。大好きだった妹分が守った命だもんなあ。守ってやりたいと思うのは当然のことさ」

「誰があいつのこと大好きなもんですか。ひとつも笑いもせず、ただあの女に従っていただけのあいつが」

「うんうん、君は本当にわかりやすいやつだ。姉のアルマとは大違いだよ」

不満の限界も来て、ラミナは大きな舌打ちを立てた。

そしてヴェラドローネをひと睨みすると、何も言わずに部屋から姿を消した。

「あの女だつてき。君も嫌われたもんだねえ」

訪れようとした静寂をかき消し、ヴェラドーネは背後に感じた気配と会話を交わすためにぼつりと呟く。

「今夜は沢山お客様が来る日だから、やっぱり茶葉の確認はちゃんとしておくべきだったよ」

一口白湯を飲むと、ヴェラドーネは背後にいる人物に顔を向けた。

「君も飲むかい？」

背後に立っていたのはヴェルティナだった。彼女の身を包む白の衣服が神秘的な輝きを放っている。

「その服眩しいからやめてくれと前にも言つたらうに」

軽く目を細めてから、ヴェラドーネは前を向いて机に両肘を突いた。

「あなたと無駄話をするためにここに来たわけじゃないわ。質問に答えて頂戴」

「ふむ。どうやら今夜は物騒な客が来る日のおようだ」

「彼女は一体なんなのかしら？」

問いかけにヴェラドーネは目を大きく開いた。

「驚いた。君ともあろうものがラミナの言葉に傷ついてるなんて」

ヴェラドーネは笑う。

しかしヴェルティナから放たれる無言の圧力を受けて、ため息を吐く。

「そう怒らないでくれよ」

「あんなのが一緒にいるなんて聞いてないわよ?」

「聞いてなくても知ってはいたんだろう? 昨日は商会の人間を操って排除しようとしたようだけでも」

ヴェラドローネの問いに答える代わりに、ヴェルティナは殺意のこもった眼差しを向ける。

「別に排除しようとするのは構わないが、すでに彼らの間には絆が生まれている。君が消そうとすればするほど、君の息子は守ろうとして傷つく」

「絆? よくもまあそんなことを言えたものね。そうなるように仕組んでおきながら」

「おや、彼女に同情しているのかね? けど彼女自身は、彼との絆を心から感じているはずだ。それを哀れむなんて、どうやら君は人の心を忘れたようだ」

ヴェラドローネの淡々とした物言いに、ヴェルティナは奥歯を噛む。

「どの口がそれを言うのかしら?」

怒りのこもった声音を発すると、ヴェルティナは手をゆつくりとヴェラドローネに向けた。するとヴェラドローネはくすりと笑って、

「私を消すかい？　けど君は出来ないはずだ。なにせ君には制約がある。その手で人間を裁くことが出来ないという制約がね」

と言いつつ。

その言葉に齒軋りを立てると、ヴェルティナは手を下ろした。

下ろした手で握り拳を作り、苦虫を噛み潰したような表情をするのを見て、ヴェラドーネは頷きながら笑う。

「まったく不便なものだねえ。世界を選んだ結果、人間には手出し出来なくなつたんだから。その上自分の子供に真実を伝えることも出来ないなんて、ほんと哀れな存在だよ君は」

「あなたの目的は理解しているわ。そう簡単に達成できるとは思わないことね」

そう言い残すと、ヴェルティナは花びらとなつて姿を消した。

舞い落ちる花卉を眺めながら、ヴェラドーネは笑う。

「君が私の考えを理解できるとは思えないけどね」

花卉の一枚を拾うと、ヴェラドーネはそれを握り潰す。

「さてと。とりあえず計画の邪魔になるお客様にはお引き取り願わないとね」

そしてカップを置いて席から立ち上がると、ヴェラドーネは部屋を出て行った。

机に残されたカップの中には、握り潰された赤い花卉が入れられていた。



ブリアンテス城玉座の間。天井に付けられた発光結晶のシャンデリアが明るく照らすこの部屋で、ヘルデイロ王はソラとトウネリに頭を下げていた。

「今回の件、本当に申し訳ないことをした」

「そ、そんな気にしないでください」

謝罪の言葉を受けて、ソラとトウネリは慌てる。

身分や立場が明らかに上の王に頭を下げられては、どうすればいいのか分からない二人。

対し王は申し訳なさから中々頭を上げれずにいた。

「此度は私たち王家の勝手な都合で二人を巻き込んでしまいました」

メルヒもそう言って申し訳なさそうに顔を伏せている。

「いいんですよ。皆さんがまた一緒に笑い合えるようになった。ボクはそれだけで十分ですから」

「わたしもそうです。だからそう謝らないでください」

確かに巻き込まれる結果とはなったかもしれない。だが二人にとってそんなことは

重要なことではなかった。

笑いたくても笑えずにいる。そんな誰かがいるのなら心から笑えるようにしてあげたい。それがソラの願いであり、信念だ。

であれば原因がなんであれ、自分の選択で関わったことに変わりはない。

「お二人には感謝しないといけませんね。こうしてまた家族で笑えるようになったのですから」

シエルヴェリアは微笑むと、溢れそうになった涙を拭う。

「ルーは……シエルヴェリア姫はこれからどうするんですか？」

トウネリの問いかけに、シエルヴェリアは王と顔を見る。そして頷くと笑って答えた。

「それなんです、先ほど家族で話し合ってもう少しだけルージュヴェリアとして生活することにしました。まだまだ王としてやっていくには未熟ですし、学ぶことも沢山ありますから。だからまた皆さんの友人ルージュヴェリアとして、一緒にいさせてください」

「そっか……うん、これからもよろしくね。ルー」

「はい、トウネリさん」

二人が笑い合う一方、ソラはセレネーラのことを気にしていた。結局はこれまでとそ

う変わることなく、姉と離れ離れの生活になるかもしれないのだ。そう考えた時、彼女はこれからどうして行くのだろうかと。

ソラの視線に気がつくつと、セレネーラは微笑みかけた。

「大丈夫ですよ。私のことは心配しないでください」

「でも……」

「お姉様と決めたんです。お姉様は皆さんの側で国の人々を見て、私はここから皆さんのことを見るつて。だから大丈夫です」

セレネーラの笑顔に陰りはなかった。彼女もまた己で次の選択をしたのだ。これから先の未来で、自分もまた王としてこの国のために働いていく。そのために必要なことを学ぶために。

そんな笑顔を見ては、ソラも心配はすれどこれ以上何も言うことは出来なかった。

「でもひとつだけ聞きたいことがあるのですけど、いいですか？」

「あ、うん。なに？」

「えつと……その……これから毎日というか……いえ、毎日でなくても何日かに一回手紙を二人に送つてもいいですか？」

きよとんとした目でソラはトウネリの顔を見る。

トウネリもまた同じような表情をしており、それが可笑しくて二人は笑いを吹き出し

た。

「あ、あの……ダメですか？」

「そんなに心配しなくても大丈夫だよ。うん、わかった」

「わたしたちもちゃんと返事を書いて送るから」

二人の返答を聞き、セレネーラは満面に花を咲かせる。余程嬉しかったのか二人に抱きついて喜んだ。

「じゃあ毎日送りますね！」

「別に毎日でもいいけど、そんなに書くことあるかな？」

「あるわよきつと。わたしたちまだ友達になったばかりだし」

三人は仲睦まじげに笑い合う。

そんな三人の様子を見て、王とメルヒそしてシエルヴェリアも笑っている。

紆余曲折を経て、こうして十二年にも渡って続いていた嘘はようやく幕を閉じたのだった。

第五節 偽りは月明かりの下に 6

暗い夜道の中を一人の男が歩く。

高級な紳士服に身を包み、木で作られたステッキを手に歩く姿はまるで貴族のようだが、同時に不気味さを匂わせている。

男の左目には傷が出来ており、閉じた目蓋を長い前髪で隠している。

男が歩いているのはブリアンテス城へと続く街道だ。夜も更けているため、街灯が照らす道を歩く者は他にはいない。

男は不敵な笑みを浮かべると、不意に立ち止まった。

「なるほど……私が来ることは予想されていたということですか」

男の視線の先にいたのはシエルヴィアだった。

小脇に一振りの剣を携えて、彼女は男を睨む。

「城内で何か事が起きれば動きがあるとは思っていたわ。でもまさかあなたがここに来るなんてね」

「なに。私の傑作の様子を見るついでですよ」

男の発言にシエルヴィアは眉を潜める。

「傑作ですつて？ もう一度同じことを言ってみさなさい。即座に斬るわよ」

「怖いことを言いますねえ。別に私が生み出したものをなんと言おうと、あなたには関係のないことでしよう？」

「あるわよ。あの子は私の友達だもの」

シエルヴィアの答えを聞き、男は笑いを吹き出す。

「友達！ あんな人形を友達と認識するなんて可笑しな方ですなえ、元騎士団長様は」

笑うのをやめると、男は視線を奥の方へと向ける。彼が見据えているのはブリアンテス城だ。

「あなた一人程度であればここを抜けるのは容易いことです。無駄話などせず、さっさと王の命を——」

言いかけて、男は背後で感じた気配に顔を向けた。

「おやおや、懐かしい顔だ。こうして話すのは久しぶりですね、ヴェラドローネさん」

笑みを浮かべて向いた先にヴェラドローネが立っていた。

彼女もまた不敵な笑みを浮かべ、腕を組んで立っている。武装は何一つ持っていないが、佇まいからは一切の隙を感じない。

「相変わらず演技が上手い男だよ君は」

「元役者ですからね。まあ六年前のような演技は御免被りたいですけれども」

男は笑うと左目に触れる。

二人が何を話しているのか不明だが、何か良からぬ内容であるのだけは理解できる。シエルヴィアは警戒心を露わにして二人のことに鋭い眼光を向けた。

「ヴェラドローネ支部長とこの男は知り合いなのですか？」

明らかな敵意を示すシエルヴィアを見て、ヴェラドローネは肩を竦める。

「知り合い……まあそうだね。だが私は彼の味方ではないよ」

「でしようねえ。あなたの目的は——」

「おっと、それ以上はいけない。それ以上口を滑らせては君を殺さなければならなくなる。それは私も本意ではないからね」

「そんなに殺意を剥き出しにして言われては、私も恐怖で何も言えませんねえ」
笑う男の額に冷や汗が滲む。

ヴェラドローネが一瞬纏った殺気はシエルヴィアも感じる事ができた。生半可なものではなく、彼女は思わず生唾を飲み込む。

「今はクロローネと名乗っているんだっか？　うちの部下が世話になったね」

「あなたの部下？　ああ、そういえば私の屋敷に乗り込んできた男がいましたねえ」

くつくつと笑い、クロローネは左の目蓋を開けて眼を怪しく光らせた。

「彼は結構強かったですからねえ。私が生み出した作品の丁度いい特訓相手になりました」

たよ」

「相も変わらず君は向こう側の人間か。良い趣味とは思えないよ」

「そうでしようか？ 私は楽しんでますけどね。それに——」

クローネは建物の影を一瞥して、嘆息を漏らした。

「あなたのお気に入りも、盗み聞きとは良い趣味だと思えませんけどね」

クローネの一言が合図となったのか、建物の影から何かが飛び出してきた。

「おっと。殺しはいけないよユース」

影から飛び出し放とうとした拳を、ヴェラドローネは割って入り受け止めた。

「お前……：どういうつもりだ？」

「いやいや。こんな街中で殺しなんてしたら騒ぎになるだろう？」

軽い舌打ちをして、ユースは距離を取ってシエルヴィアの横に立った。

(なによこれ、なに？ どういう状況よこれ)

状況が飲み込めずにシエルヴィアは困惑する。

狼狽た様子で隣にいるユースの様子を眺めると、彼はいつになく怒りを露わにしていた。

「前々からお前は胡散臭いやつだと思っていたが、お前もこいつらの仲間か？」

「違う違う。私は私で計画があつてね。そのために彼の存在は都合がいいんだよ」

奥歯を噛み締め、ユースは拳を作り次の構えを取る。

殺意の込められた拳を見て、クローネの口元に乾いた笑いが出た。

「いやあ、助かりました。私もまだこんなところで死ぬわけにもいきませんからねえ」

「なに、いいんだよ。利害の一致というやつさ。ただし——」

ヴェラドローネは笑顔で振り向くと、クローネの顔を驚掴みにして握り潰さんばかりに力を込めていく。

「王様には手を出さないでくれるかなあ？ 彼にはまだ役割が残っているからね」

ヴェラドローネの表情を見て、クローネは薄ら笑いを浮かべた。危機的状況にも関わらず、彼の態度のどこかには余裕さえある。

「いいのですか？ 彼らの前でそんな発言をして」

「別に問題ないよ。どうせ誰にも私の目的は分からないしね」

「そうですか」

そう言うくとクローネは懐に手を入れた。

「でもまあ確かに、私としても今彼を殺す気はありませんからね。隣国からの依頼ではありませんが、状況が状況故に断念したということにしましょう」

「なるほど。てことは彼は向こうと接触しているってことか。情報ありがとう」

「いえいえ。礼には及びませんよ」

クローネは笑うと、懐から結晶体を取り出す。

それを見てヴェラドローネは拘束を解き、彼から離れた。

「待て。お前には聞きたいことが山ほど——」

ユースが言い終わるよりも先に、クローネは地面に結晶体を落とした。すると結晶が割れたと同時に足元に魔法陣が現れる。

「残念ですが、私も忙しいのでね。また次の機会があればお会いしましょう。ギルド最強の男さん」

まるで嘲るような口振りで言い残すと、クローネは光とともに姿を消した。

後に残った静寂が、物々しい雰囲気漂わせる。

怒りと殺意に満ちたユースの視線が、ヴェラドローネに向けられている。

「おいおい、そんな怒るなよ。今のお前じゃ私を殺すことも出来ないんだからさ」

ヴェラドローネは笑う。

「どうかな？ 必要があればお前でも俺は殺すぞ？」

腰に掛けてある剣に手を添えようとして、ユースは思い出す。

剣を納める鞘はあれど、今はラミナが——普段身につけている剣がない状態だ。

『ユース。落ち着くべき』

鞘の状態となっているアルマが声を発する。

するとユースは舌打ちをしてから、無言でその場を立ち去っていった。

状況を飲み込めぬまま立ち尽くしていたシエルヴィアは、はつと我に帰る。

「ヴェラドローネ支部長。一体あなたは何を企んでいるんですか？」

剣を構えて、ヴェラドローネに問答する。

いつになく真剣な表情のシエルヴィアを見て、ヴェラドローネは笑いを吹き出した。

「いつもそういう風に真面目ならいいんだけどねえ」

「話をはぐらかさないで下さい。あなたは一体誰の味方なんですか？」

笑いを堪えると、ヴェラドローネは空を見上げて答えた。

「別に？ 私には私以外に味方するつもりはないよ」

ヴェラドローネの視界には幾千もの星々が散りばめられていたが、それらが彼女の目に止まることはなかった。



ブリアンテス城内にある一室にて、ソラとトウネリの二人は柔らかいベッドの上で横になっていた。

夜も遅いということで、王から客人用の寝室が提供されたのである。

誰を想定したものなのかは不明だが、ベッドは二つ部屋の中に用意されていた。「そ、その……今日は色々あったわね……」

布に包まりながら、トウネリは顔を赤くして口をまごつかせている。ソラと部屋に二人きりという状況に緊張してしまい、なかなか寝付けずにいた。

とにかく何か会話を交わそうとするトウネリに対し、ソラは無言で天井を見つめている。それも相まって部屋の空気は少し重い。

(うぐつ……気まずい……)

トウネリは内心嘆く。というのも、無言のソラからはいつもと違う雰囲気を感じているからだ。

彼が今何を考えているのか分からない以上、話題を広げることも敵わない。それどころか今すぐにも逃げ出したい気分には駆られていた。

「ねえ、トウネリ……トウネリはさ。お母さんのこと覚えてる？」
「えっ？」

不意に問いかけられて、トウネリは啞然とした。

ほぼ無意識に出た質問であったため、ソラはハツとして起き上がる。

「ご、ごめん。嫌なこと聞いたよね」

慌てて謝罪するソラに対して、トウネリも起き上がって微笑みながら首を横に振つ

た。

「うん。大丈夫。お母さんのことはよく覚えてる。すごく優しくて、笑顔が素敵な人だった」

トウネリの答えにソラも自然と笑顔になる。

「そっか……」

そして俯くと、微かに震えた声でソラは言った。

「ボクはさ……母さんとの思い出が無いんだ。物心つく前に、母さんはボクたちの前から姿を消していたから」

「うん」

その話は、セレネーラに過去を話していた際にも聞いたものだった。

本当の母親との思い出がない。それがどれだけ辛いものなのか、トウネリには想像もできない。母親を失いはしたが、確かに思い出はあるのだから。

「ずっと考えないようにしてたんだ。どうして母さんはボクの前からいなくなっただろう。どうしてエイネを助けてくれなかったんだらうって」

どこか恨みにも近い言葉に、トウネリは胸を締め付けられる。

もしもエイネという彼にとつての母親が生きていたのなら、こんな言葉は出なかったのではないだろうか。どうしても考えてしまう。

「今日さ。母さんがイヴェルテラかもしれないって聞いた時、ボク……本当はどうしたらいいのか分からなくなったんだ」

「そりやそうよ。実はそんなすごい人だったかもしれないなんて聞いたら私だって――」

母親との思い出もなく、母親のことも知らない状態でいきなり明かされたその正体。もし仮にそうでなかったとしても、母親の名があがった時点で動揺を隠せるはずもなかった。

ソラは胸元を抑える。黒くどんよりと重い感情が終始纏わりついて離れようとしないう。これまで感じたことのない感覚にソラは戸惑っていた。

「ボク……ずっと考えないようになってきた。本当はボクに母親なんかいないんじゃないかって思っちゃうから。けどそうじゃないんだよね」

少しの安心と戸惑い。そして何より知りたいという思いがその感情を生み出している。

ソラは一呼吸すると、真剣な顔をトウネリに向けた。

「ボク、決めた。これから母さんのことも探そうと思う。そして色々聞きたいんだ。どうしていなくなったのか。どうしてこんなことをしなければならなかったのかを」

それは覚悟を決めるための発言でもあった。誰かに宣言することで、自分の心を改め

るための発言だ。

ソラの思いを聞き、静かに聞いていたトウネリも思い起こす。自分のもう一つの目的を。

「そつか。うん。じゃあわたしと一緒にね」

「トウネリと……一緒に？」

「うん……」

トウネリは俯く。これはソラに話すか悩み避けていたもの。今朝話そうとしていざ切り出した時に、結局話せずにいた事柄。

「私はね、お父さんを探しているの」

父親——それを聞いてソラは思い出す。

彼女の父親は六年前のあの日、エイネに左目を負傷させられて姿を消した。おそらく死んではいけないはずだ。

「覚えてる？ 牢屋で聞いた話。あれにクローネって名前が出たでしょ？」

「う、うん」

クローネ——リヴェルトス商会のヘルデイ口支部に転移魔法の専門家として招かれていた人物だ。

セシルの父親とユースがその男を追っていたという話も聞いた。

その名前が何故今浮上するのか。ソラが考えられる答えはひとつだった。
「もしかして……」

「ええ……そのクローネって男が、おそらくわたしの父親なの」
ソラは思わず息を呑む。

クローネという男とは商会の建物ですれ違った。その風貌や見た目からは分からなかったが、もしも六年前のあの男だというのならば――。

思い出そうとして、ソラは慌てて考えをかき消す。余計なことまで思い出して、トウネリに心配を掛けるわけにもいかなかった。

「正直あのセシルって子には合わせる顔が無いわ。わたしの父のせいで、彼女の父親を奪ってしまったかもしれないんだもの」

そういえば、とソラは思い出す。セシルを見かけた時、トウネリは一度避けるようにしてその場を立ち去っていた。あの時彼女はその事を気にかけていたのだろうか。

「でも変に接して嫌なこと思い出せちゃいけないと思って……出来るだけ普通に接してはいたんだけど」

「そっか……」

今トウネリはどんな気持ちで話しているのだろうか。ソラは想像できず、唇を噛み締める。慰めの言葉も何も、彼女を却って傷つけてしまう可能性がある。そう考えると掛

ける言葉が浮かばなかった。

「それがわたしの目的。私がギルドに入ったもう一つの理由」

ソラと一緒にならばこの不安と向き合っていていける。そんな思いがトウネリの中にあつた。また彼を巻き込んでしまうという恐怖も当然ある。

「わたし、最低だよ。あなたに辛い思いさせたのに、また巻き込んだじゃうかもしれないのに……」

俯くトウネリの言葉を聞いて、ソラの脳裏にある光景が浮かんだ。

それはエイネが消え行こうとしていた時のこと。彼女もまた消える際に、こんなことを言っていたのだ。

“——酷い女だよ、私。ソラに怖い思いをさせてさ”

今のトウネリと、その時のエイネの言葉が重なっていた。

ソラはゆつくりと立ち上がる。そしてトウネリに近づいた。

「ソラ？」

急に立ち上がったため、トウネリは驚いた表情をする。彼女の体は強ばり、心臓は高鳴っていた。

嫌われる。そんな思いが彼女の中に過ぎる。

「その、ごめんね？ わ、わたし——」

謝罪を口にしようとした時、トウネリは次に言おうとしていた言葉を失った。

「気にしないでいいよ。ボクたち、友達でしょ?」

そう言つてソラはトウネリの体を優しく抱きしめる。

「だからさ。そんなに自分のこと責めないで? 君と一緒に行くつていうのは、ボク自身が決めたことなんだからさ」

ソラの言葉はトウネリの心を優しく包み、不安を取り除いていく。

「ソラ……ありがとう……」

トウネリは微笑む。

それは一時のことかもしれない。本来許されないことなのかもしれない。そう感じている、その温もりは確かにトウネリの心に許しを与えていた。

エピローグ

ブリアンテス城の一件から二日経った日の朝。この日もソラは朝早くから出掛け、外に出ている人々に笑顔で挨拶をして回っていた。

最初にした時とは違い挨拶を返してくれる人が増えていることに喜びを感じながら、ソラの足は自然とある場所に向かっていった。

「おはようございませす」

ソラが向かったのは、野菜や果物を売る店を営んでいる老婆のところだ。

老婆は彼の顔を見るなり驚いた表情をして、「おや、どうしたんだい？」と言った。

「今日も手伝いますよ」

ソラがそう笑って言うのと、老婆も嬉しそうに微笑んで、

「いいのかい？ 助かるよ」

と優しくゆつくりとした口調で答えた。

「そういえばあなた、名前はなんて言うんだい？」

ソラが木箱を運んでいると、ふと老婆が尋ねてきた。

「ボクはソラって言います」

木箱を下ろしながらソラは答える。

「ソラちゃん……ここいらではあまり聞かない名前だねえ」

「ニギロっていう小さな村からここにやって来たんですよ」

「ニギロ……そうかいニギロか。懐かしい名前だねえ」

村の名前を聞き、老婆は何かを思い出すように目を細めた。

ニギロの名を知っている人はそういない。王都に住む者にはあまり馴染みのない名前だからだ。

「おばあちゃんはニギロについて知ってるの？」

「知ってるも何も、私もあの村の出身だからねえ」

当たり前のことのように発言する老婆。

村を離れて王都に行く者の話は聞いていたが、この人もその一人だったのかと。思わぬ巡り合わせにソラは驚く。

「そうだったんだ……」

少なくとも彼女がニギロにいたのは自分が生まれるよりも前のことだろう。ともなれば母ヴェルティナについて何か知っているかも知れない。

そんな思いがソラに過ぎる。母親の情報は出来る限り聞きたい。どんな些細なことでも、母親に会うことに繋がるかもしれない。

「どうかしたのかい?」

表情が強張ったのを見て、老婆は小首を傾げた。

「あ、ううん。なんでもないです。ちよつと驚いただけで」

ソラは慌てて笑って誤魔化す。

(違う……ボクがここに来たのはそんなことのためじゃない)

別に今知る必要は無い。ここに来たのはこの人の助けに少しでもなればいいと願ったからだ。

そう自分が抱いていた考えを飲み込み、ソラは最後の木箱を持ち上げた。

木箱を全部運び終わると、ソラは一息吐く。

「ご苦労様。今日もありがとねえ」

老婆は嬉しそうに感謝する。その手には何やら小さな包みが握られていた。

「これ。ほんの少しだけど、持っていておくれ」

首を傾げながら包みを受け取って、ソラはその重みに思わずギョツとする。

「あの……おばあちゃんこれ……!」

「前の時はりんごしか上げられなかったから、今回はお金を上げようと思ってねえ」

「そんな! 流石に貰えないよ!」

自分はお金目当てで手伝いをしたわけではない。ソラはそう慌てて返そうとする。

が、老婆は首を横に振って金を返そうとするソラを制止した。

「いいんだよ。私はそう長く生きられるわけじゃないからね」

「でも……」

ソラは唇を噛む。

そして苦悩の末にソラが出した答えは、

「ううん。やっぱり貰えないよ」

受け取らないことだった。

相手の気持ちが無碍にすることなのは分かっている。それでもソラにとってお金よりも大事な報酬があった。

「お婆あちゃんが笑っててくれれば、ボクはそれでいいから」

ソラの満面に浮かんだ笑顔を老婆はしばし見つめる。

「そうかい？　じゃあせめてお札にこのりんごを一個持つていっておくれ」

そして商品の中からりんごを一つ取ると、ソラの手に優しく乗せた。

「今度良かったら、今のニギロについて話しておくれ」

「うん。ボクもお婆あちゃんがいた頃のニギロについて聞きたいな」

二人は笑い合うと、そう約束をするように言葉を交わした。

老婆のところを後にしたソラは、りんごを片手にギルドへと向かう。

前日、レフィナがギルドの受付嬢として雇われていた。今日は受付嬢として初めてギルドに立つ日ということで、彼女も朝早くから準備して出掛けている。

そこでトウネリと合流する前に、まずは様子を見に行こうと考えていた。

ギルドの扉を潜り中に入ると、受付ではルージュヴェリアに仕事の内容を教わっているレフィナの姿があった。

「それから依頼が来た際の依頼書の発行は——」

「おはようございます、ルーさん。レフィナさん」

受付に足を運ぶと、話し合ってる二人にソラは挨拶を投げかけた。

「あ、おはようございます。ソラさん」

ソラに気がつくと、ルージュヴェリアは微笑んで頭を下げる。

「おはようございます、ソラ。朝食はどうでしたか？」

「今日も美味しかったです」

「それは良かったです」

レフィナも微笑んでソラと朝の挨拶を交わした。

「どうですか？ ギルドの受付嬢は」

「仕事の内容を聞く限り、私が前にやっていた仕事とそう変わりはないと思います」

「そっか。それは良かったです」

返事を聞いて、ルージユヴェリアは小首を傾げる。そしてソラの顔をまじまじと見つめた。

あまりにじつくり見られているため、ソラは少々困惑気味に笑う。

「あの……どうかしましたか？」

「あ、いえ。なんだかいつもより少し元気がないように思っています……」

ルージユヴェリアの指摘にソラは息を呑む。

つい先刻老婆から話を聞いてからまだ動揺を隠せていなかったようだ。ソラはそう思いながら、笑顔を作って答えた。

「気のせいですよ。それよりトウネリは見ましたか？」

「トウネリさんならまだ宿舎の方にいると思いますよ。私が出る時に様子を見に行きましたが、寝過ごしたって慌ててましたから」

「そうなんだ。じゃあ迎えに行こうかな」

そういうばとソラは思い出す。

城の部屋で寝泊まりした朝も、トウネリは少し眠そうにしていた。ここ数日色々あったことから疲れが溜まっているのかもしれない。

手に持っているりんごを見つめて「会ったらこれあげようかな」とソラは小さく呟いた。

「あ、そうだ。セラからお二人に早速手紙が送られてきましたよ」

「え？ セラから？」

先ほどまで少し暗くなっていたソラの顔に僅かな光が射す。

「はい。それとこれ。何かトウネリさん宛に手紙が来ていたのでこれも渡しておきます」

「ありがとうございます。ふふふ、何が書かれてるのかな？」

セラからの最初の手紙というのもあり、ソラの中の好奇心が高まっていく。

別に何のことはない友人からの手紙だが、これまで誰かから手紙を送られたことのないソラにとって心が躍るのに十分だった。

「じゃあ早くトウネリと読まない！ また後で来ますね！」

「あ、はい！ 後でどんな内容だったか教えてくださいね！」

ソラは嬉々とした表情を浮かべると、そそくさとその場を離れギルドから出て行った。

ソラの背中を見送ったルージュヴェリアとレフィナは思わず顔を見合わせる。

「なんだか今日は慌ただしいですね、ソラさん」

「ええ。でもちよつと微笑ましいです」

「ふふふ、そうですね。さ、気を取り直して話の続きを！ どこまで話しましたっけ？」

「依頼書の発行の仕方ですね」

「ああ、そうでした」

そして二人はまた、仕事について話を進めるのであった。

◇

ギルドを後にしたソラは、足早にギルドの宿舎に向かった。

トウネリが住む部屋へと勇足で向かっていくソラの顔は、どこか落ち着きがない様子だ。

部屋の前にたどり着くと、ソラは少し強めに扉を叩いた。

「トウネリいる?」

扉の向こうに声をかける。すると「ちよつと待ってて!」という慌てた声が響いてきた。

声に従って待つこと僅か。扉が開き、隙間からトウネリが顔を覗かせた。

「お、おはようソラ」

少々頬を赤く染めて、トウネリはそう挨拶する。

「あ、うん。おはよう。大丈夫?」

何があつたかは分からないが、ソラは心配したように顔を覗き込んだ。

「あ……ええ、大丈夫。ちよつと寝癖があまりに酷かったからその」

目を逸らしながら、トウネリは「えへへ」と笑った。

ここへ来るまでに髪を整えていたとなると、余程酷い髪型になっていたのだろう。ソラは内心そう苦笑する。

「くつそ……あいつら見かけたら文句のひとつは言つてやらないと……」

「あいつら？」

「ああ、いえ。気にしないで」

何となく原因を察して、ソラは同情の念をトウネリに送った。

「わざわざここまで来てもらつて悪いわね」

「ううん、気にしないで。その様子だと朝ご飯まだなんですよ？ はい、これ」

ソラは笑いながら、持つていたりんごをトウネリに渡す。

「えつ？ ああ、ありがとう」

りんごを受け取り、トウネリはしばしそれを眺める。少々状況を飲み込めていない様子だ。

「あの、どうしたのこれ？」

「えつ？ ああ、うん。さつき野菜とか果物を売っているおばあちゃんのお手伝いをし

たら貰つてさ。食後にいいかなって」

「ふーん。じゃあ……」

両手でりんごを持つと、トウネリは力を入れる。するとりんごは中央から真つ二つに割れ、その片方をソラに差し出した。

「はい。あんたに食べて欲しくてそのおばあちゃんは渡したんでしょ？ だつたらあんたも食べなさいな」

言われてソラは「確かに」と内心で頷く。そして受け取ると、

「そうだね。うん、ありがとトウネリ」

と笑った。

「別に……感謝するのはわたしの方よ」

その笑顔を見て、トウネリは真つ赤になった顔を逸らした。

トウネリの食事が終わってから、二人は部屋に戻る。セラから送られてきた手紙を読むためだ。

ソラは手紙の封を切ると、中に入っている二枚の紙を取り出す。

「なんて書いてある？」

紙を広げたのを見て、トウネリは近づいて覗き込む。

冒頭に「ソラとトウネリへ」と添えられて、手紙には次のように書かれていた。

「初めて友達に送る手紙ということで少し緊張しています。えっと、何かから話したらいいのでしょうか？」

あ、そうだ。ごきげんよう、二人とも。セレネーラです。二人と別れてから一日が経ちました。なんだか長い時間が経ったようにも思えます。二人は変わりなく元気にしていますか？

私は元気になっています。お父様もメルヒ——いえ、お母様も元気にしています。側近の大臣の二人とその奥様も元気です。

あれからお父様は、私たちにこの国を託せるように、より一層いい国にしようと励んでいます。例えばこの国には他国のように大きな催しものが何もありませんでしたから、今度私の誕生日を祝して王都で祭りを開こうと言っていました。

大臣の二人とお母様は苦言を呈していましたが、私は二人と楽しい日々が送れるかと思うと、やってほしいなあと思っています。

お母様は以前と変わらず優しく接してくれています。変わったことといえば、今夜は一緒に寝ようと言っていることです。私もこれまでお母様と一緒に床へ入ることがなかったのが楽しみです。で仕方ありません。

他にもまだまだ沢山書きたい事があるけど、二人のお仕事の邪魔をしてはいけないので今回はここまでとさせて頂きます。

どうかまた、二人の元気な笑顔を見せてくださいね。セレネーラより”

一枚目の手紙を見て二人は堪らず満面の笑顔を浮かべる。どちらも友人から手紙を貰うのは初めてのことだった。

「なんていうか、微笑ましい手紙ね」

「ほんと。最初の方なんて、目の前で話してるのかと思っちゃったよ」

微かな笑い声とともに、二人は手紙をもう一度見る。

ふとソラは、封筒の中にまだ何か残っていることに気がつく。出して見ると、黄色い花びらが二枚入っていた。

「なんだろこれ？」

ソラが花びらを見つめていると、トウネリが二枚目の紙に目を通した。

「ほら、これ」

くすりと笑うと、トウネリは二枚目の紙をソラに見せる。

それを見てソラは口に出して読み上げた。

「えつと……友達に送る手紙には何か贈り物を入れると良いとお母様から聞いたので、慌ててこの花びらを入れました。この花びらを咲かせる花には、親愛なる友情という言葉が込められているそうです。私も同じものを身につけています。良かったら連れて行ってあげてください」

「だつてさ。どうする?」

「じゃあ、連れて行つてあげないとね」

二人はそれぞれ黄色の花びらを持つ。

同時刻、セレネーラも黄色の花びらを見つめて微笑んでいた。

三人の友情は、またひとつ深まったのである。たったひとつの手紙によつて。

「ちゃんと返事、書かないとね?」

「うん。なんて書くのかなあ」

笑いながら手紙の返事を考えようとした時、ソラはふとあることを思い出した。もう一つルージュヴェリアからトウネリ宛の手紙を貰っていたのである。

「あ、そうだ。なんかトウネリに手紙が来てたらしいよ?」

「えっ? わたしに?」

トウネリは少し驚いた表情を見ると、ソラから手紙を受け取る。

小首を傾げて封筒を表裏の順に見て、トウネリは思わず「あつ」と声を漏らした。

「どうしたの?」

「あ、うん。おじいちゃんとおばあちゃんからだ」

おじいちゃんとおばあちゃん。それを聞いてソラはトウネリと暮らしていた老夫婦を思い出す。

「どうやらあの二人もまだ元気に暮らしているようだ、ソラは内心で微笑む。でも急にどうしたのかしら？」

封を切つてトウネリは手紙の中身を読んでいく。

はじめは久しぶりに二人の近況を聞けると思い心を躍らせていたトウネリだったが、その顔色はすぐに変つた。

「えっ？ どういうことよ……これ……？」

「どうかしたの？」

青ざめるトウネリを見て、ソラは問いかける。

「あんたさ……六年前に亡くなつた兄妹の両親つて覚えてる？」

忘れるはずもなかった。

六年前のあの日、救えなかつた命。その兄妹のことも、あの日涙を流していた親の顔もすっかりとソラの頭に刻み込まれている。

「うん。もちろん覚えてるよ？」

王都へ来る際にはその顔を見かけたことをソラは思い出す。母親の腹が膨らんでいたことから、きつと新しい命が生まれようとしていたのだろう。

「わたしさ……罪滅ぼしにと思つて、時々あの二人に手に入れた報酬の一部を贈つていたの。おじいちゃん達を通してね」

「そう……なんだ……」

そんなことまでトウネリは背負っていたのか。そう思うと心臓を抉られるような気持ちになり、ソラは痛みのような感覚が纏わりつく胸を抑えつける。

一方のトウネリはと言うと、呼吸が荒くなっていた。額には嫌な汗が流れ、瞳孔が開いている。

少しして。トウネリは意を決するように生唾を飲み込むと、震える声で告げた。

「その二人とお腹にいた赤ちゃんが……殺害されたって……この手紙に……」

先程まで和気藹々としていた空気は、一瞬にして凍りついた。

第三章 深き闇の中の怨嗟

プロローグ

闇夜の帷幕がドウエセの空を包み込む。

月は雲に隠れ、瞬く星々の光も分厚い影に阻まれ地上へ降りることはない。

ドウエセを照らしているのは、街灯の蠟燭のみ。この蠟燭も蠟が溶け切った物もあり、静かな街を疎らに照らすだけだ。

いつもとは違う、どこか不気味な雰囲気纏った街の中に一軒の家があった。二階建てのこの家にはある夫婦が住んでおり、妻のお腹には新しい命がいた。

夫婦はいつも一緒に寝室で寝ている。寝相がいい夫ではあるのだが、念のためということで部屋に二つベッドを用意し、それぞれの床で眠っていた。

そんな夫婦はお腹に赤子が出来てから、毎日のように同じ会話を交わしていた。寝る前に話すそれは、六年前に失った兄妹のことを思い出して交わされる。

「ねえ、あなた……」

「どうしたんだい？」

「私たち、本当にこの子を産んでいいのかしら？」

妻はあることで悩み恐れていた。今お腹にいる子供を産むことで、あの兄妹のことをいつしか忘れてしまうのではないかと。

「当たり前じゃないか。言っていただろう？ あの子達に分まで、この子を幸せにするんだと」

「でも……」

「お前の気持ちはよく分かるよ。でもこれは私たちが望んだことなんだ。そしてその望んだ通り、新しい命が産まれようとしている。だったらその責任を私たちは果たさないといけない」

「それは……そうよね……」

命を産み出すことを望んだ以上、その産まれる命に最大の愛情を注ぐのは親として当然の責任である。それが夫の考えだった。

その考えに妻も同意している。今日の前にいないだけで、このお腹の中には確かに命があるのだと実感しているのだから。

それでも彼女の中に迷いが生じているのは「失った命とどう向き合えばいいのか」と、六年という長い時間が流れても答えを出せずにいるからだ。

「さ、もう遅い。寝ようじゃないか」

街はもう寝静まっている。どの家も床に入り眠っている時間帯だ。

「そうね……」

返事をして、妻が目蓋を閉じようとした時だった。

カランカラン。と寝室に備え付けられた呼び鈴が鳴った。

「こんな時間に誰だ？」

蠟燭の火を消そうとしていた夫が疑問を口にする。

「さあ？」

「なにか緊急の用かもしれないから、ちよつと見てくるよ」

「ええ……気を付けてね」

夫が燭台を手に部屋を出ていく。

部屋が真っ暗になり、妻の中に言いようの無い不安が渦巻く。

そしてまたも彼女の中に、あの迷いが出ていた。この子を産んでいいのか。この子と幸せな時間を過ごしていいのか。あの日守れなかつた命を、今度こそは守れるのだろうか。そんな先行きが見えない故に起こる不安が。

夫が出て行つてから間も無くして、静かな音とともに部屋の扉が開いた。

「おかえりなさい。誰だったの？」

問いかけてから、妻は異変に気がついた。

夫は燭台を手に出ていったはずだ。だが蠟燭の火が部屋を灯すことなく、まだ暗闇に

包まれている。

「あなた、蠟燭はどうしたの?」

騒つく胸をどうにか落ち着かせて、妻は問いかける。

しかし返事はない。人の気配は感じるが、それが誰であるのかは見当もつかない。

「ねえ? どうしたの?」

震える声で、部屋の中にいる人物に問いかける。

すると漸く部屋に明かりが灯された。

「ひっ!」

妻は短い悲鳴をあげた。立ち上がって逃げようとするも、足がもつれてベッドから転げ落ちる。

彼女が見つめる先には黒い影。蠟燭の火がゆらゆらと影を照らす、その正体までは明かすことはない。ただその手に一振りの長剣が握られているのが分かる。

火に灯されて妖艶な光を放つ刀身からは、鮮血が雫となつて滴っている。

「あ、あなたは……誰なの……?」

突如現れた正体不明の人物に、妻は震えた声で問い掛ける。

しかし黒い影は何も答えない。

ふと影の背後にもう一つ、小さな影があることに妻は気がついた。手に燭台を持って

いる。

恐る恐る目を凝らし小さな影を見て、

「あつ……ああ……」

妻は絶句した。

少女だ。そう認識した途端、あり得ないと思考が拒絶した。

しばらくして、妻の口から笑い声が漏れる。彼女は狂ったように満面の笑顔を浮かべた。

直後、彼女の首は黒い影によって切り落とされた。

ゆらゆらと蝋燭の火が揺らめく。

微かな灯は、黒い影が一点を見つめているところを照らした。影の視線は妊婦の腹に向けられている。

ゆっくりと影は姿勢を低くして、妊婦の腹に触れた。腹の中の赤子が微かに動いた。

影は伸ばした手をゆっくり長剣の柄に移動させる。

両手で剣を握った次の瞬間、刀身を赤子が眠る腹に突き立てた。

何度も何度も、執拗に腹を突き刺す影。肉体がぐちゃぐちゃになるまで、幾度となく刺突を繰り返す。

その様子を少女は眺めていた。感情の揺らぎもなく、ただ呆然とそこに立つかのよう

に。

「ふふ……ふひひつははっ！」

手を止めると、黒い影は堪らず笑いを吹き出す。

その視界に映るのは八つ裂きにされた妊婦の姿。顔に塗れる大量の血が面影さえも消し去っている。

その無惨な姿を笑って眺めてから、黒い影は冷ややかな眼差しを少女に向けた。

「おい、悲鳴をあげろ。外に聞こえるほどのでかい声でな」

「かしこまりました……主様……」

少女は指示を承諾すると、甲高い悲鳴をあげた。

夜が明けると、夫婦の宅に兵士たちが押し寄せていた。

一人の若い兵士は険しい表情でしゃがみ込むと、被せられた布を取って床に転がる死体を眺める。

「こりやひでえな」

若い兵士は軽い舌打ちと共に奥歯を噛む。

「腹ん中の赤子もろとも殺害か。しかも赤子の方を執拗に狙ったかのような殺し方だな」

「アルガスタ隊長！」

若い兵士が死体を分析していると、これまた一人若い兵士が入ってきた。

アルガストと呼ばれた若き隊長は立ち上がると、駆け寄ってきた兵士と向き合う。

「家の中を調べましたが、特に何か盗まれたという形跡はありません。強盗……というわけではないようです」

「そうか……」

アルガストは呟いてから、死体を一瞥する。

「まあ、正確には何も盗まれてないわけではないわけではないんだがな」

「ええ。玄関前で殺されていた男もこの女性同様、心臓がありませんでした」

二人の言葉通り、夫婦の死体からは心臓が消えていた。まるで元からそこになかったかのように、体を貫通して心臓部に大きな穴が開いているのだ。

この奇妙な死体もまた、アルガストにとっては六年前を思い出させる光景だった。

とある男の地下室で発見された子供の死体。腕に足、首など体の各部位が細かく切断されて床に散らばっていた一方、心臓だけはどこにも見つからなかったのだ。

「魔物の餌にするためか……それとも夜の国へ売り捌くためか。どちらにせよ、気分がいい話ではないな」

「ええ。私はここへ配属される前はギルドに入っていましたし、こういった死体を見る

こともあったので多少は耐性がありますが——」

アルガストは兵士の小話を聞きながら、窓から眼下を見つめる。そこでは気分を害した兵士数人が蹲っていた。

「まあ……ここはかなり平和な街だからな。こういう死体は珍しいし、気持ち悪くもなるわな」

「あの……隊長。一体誰がこんなことを？」

兵士の問いかけに、アルガストは項垂れる。

「さあな。だが殺し方からして、明らかにこの夫婦を狙った殺人だ。大きな恨みを持つてゐる奴の犯行と見てまず間違いないだろう」

自分の分析と遜色ないことを確認し、若い兵士は頷く。

その時だった。

「た、隊長……」

青ざめた兵士が、口元を布で覆いながら部屋に入ってきた。

「どうした？　気分が悪いなら無理して入ってくることないぞ？」

言いながらアルガストは死体に掛けられていた布を再び被せる。

それを見て青ざめた兵士は、一瞬吐き出しそうになるのを堪えながら震える声で報告した。

「つい先程……王都の方からこのような伝令が……」

兵士から一枚の紙を受け取ると、アルガストは開いて中の内容を確認する。

「どうやら今回の事件のために、二人の調査員が派遣されてくるそうです」

兵士の言葉通り、文面にはその旨が簡略的に書かれていた。最後には王が直筆したことを示す印鑑が押されている。

「やけに情報が回るのが早いな」

今の時刻は正午より少し前。事件の発覚は今朝。情報が伝わるには早すぎる。

しかし送られてきたのは紛うことなき王の勅令。この印鑑を複製することは不可能にも等しい。

「まあいい。その調査員とやらの裏に何かあるのかもしれない。出迎えの準備はしておけ」

「わかりました」

「それと街の住民にはできるだけ外には出ないように忠告しておけ。もしかしたらまだ犯人が街の中にいるかもしれないからね」

「はい！ おい、肩を貸してやるから行くぞ」

「あつ……ああ……すまない……」

部屋に一人となり、アルガストは嘆息する。先ほどから嫌な記憶がちらついている

が、それよりも気になっていることがあった。

アルガストは再び覆っていた布を取り、妊婦の顔をじっくりと眺める。

血塗れの顔だが、その表情ははつきりと認識できた。夫とは違うその表情が。

「なあ？　なんであんたは……そんな幸せそうな顔で死んでんだ？」

優しげに微笑むような表情で眠る姿に、アルガストは小さく問いかけた。

第一節 静寂に包まれし暗雲の空 1

舗装された高原の道を馬が走る。

ソラは手綱を握り、トウネリはその背中にぴったりと張り付いて身を固定している。時を遡ること数刻前。ドウエセで暮らしている老夫婦からの手紙の内容に二人は凍りついていた。

「あの人たちが……殺された……？」

六年前のあの日、救えなかった兄妹。その親である夫婦が何者かに殺害されたのだという。

その内容に信じられないとソラは目を開く。一体誰がなんのために。そんな疑問が纏わりつく。

「わたし……わたし、急いでドウエセに行つて確かめないと！」

トウネリも同様で、居てもいられず部屋を出て行こうとする。

「待って！ 今から走つて向かつて、着くのは夜になつちやうよ！」

飛び出していこうとするトウネリを、ソラは慌てて呼び止める。

王都からドウエセまではそれなりの距離がある。馬車で向かうならばともかく、徒歩

あるいは走って向かって時間も要するだけだ。

「じゃあ大人しくここにいろってこと!？」

「違う。違うよトウネリ。落ち着いて? 馬を借りよう。そうすればお昼頃には着くから」

すぐに状況を確かめたい気持ちはソラも同じだった。

しかしここで焦っても事態が好転することはない。一刻も早く事態を把握するにはそれなりの準備が必要だ。

「馬って言ったって、一体誰から……」

ソラは考える。一人だけ思い当たる人物がいた。

「ルーさんに相談しよう。彼女なら騎士団が使っている馬を貸してくれるかも」

他に当てもなくルージユヴェリアに相談したところ、彼女は快く承諾し手紙を送ってくれた。

王としても平和な街であるドウエセで殺人事件が起きたとはにわかに信じられないらしく、二人を調査員という形で捜査に協力できるように手配もしてくれている。

その証となるのが、二人が今乗っている白い馬だ。馬に着せた布には王道騎士団を表す紋様が描かれている。盾の絵に、国を象徴する証を描いたものだ。

無言で手綱を握っていたソラは、ふと背中に視線を向ける。

黙ったまま俯き、唇を噛み締める。そんな笑顔のないトウネリの姿を見て、ソラは胸を抑えつける。

「ごめんね？　こんな重い空気で」

気を紛らわせようと、ソラは馬に声をかけた。すると馬はひと鳴きして、軽く頭を高くあげる。

「うん、ありがとう。君は優しい子だね」

しかし却って塞ぐような気持ちになり、ソラは俯く。こんな時どう声を掛けたらいいのか分からない、情けないと。

あの兄妹を助けることが出来なかった。もしもあの時もう少しの勇氣を持っていたならば。その罪悪感が今もソラの中に渦巻いている。忘れようとしても忘れられない後悔として。

一方トウネリはそれ以上のことを抱えていると、ソラは思っていた。密かに報酬金をあの夫婦に送っていたという話からも明白だ。

故に掛けるべき言葉が見つからなかった。何を言っても彼女が心の底から笑うことはない。自分と同じように、きつと夫婦の死も抱え込んで離すことはないと分かっている。

「トウネリ……もうすぐで着くよ」

顔を上げたソラの視界に、ドウエセの門が見えた。太陽の位置から推測するに、時刻はすでに正午を過ぎたあたりか。

ソラの知らせを受けて、トウネリの唇が微かに動く。

「そう……わたし……帰ってきたのね……」

彼女の儂げな声は、望まぬ形の帰還であることを物語っていた。

「おい、そこ！ 止まれ！」

ドウエセの外門に差し掛かった時、門番の兵士が停止を促した。

門番として立っていたのは二人の兵士。どちらも槍を手に物々しい形相で立っている。

「今この街は故あって封鎖している。用なき者は立ち去れ」

どうやら事件を受けて厳戒態勢が敷かれているようだ。

そう判断して、ソラは懐からひとつの書類の入った封筒を取り出した。

「ボクたちは王の勅令を受けて事件の調査に来ました。それを証明する書類もここにあります」

「お前たちが？」

兵士の一人が書類の確認をしている間、もう一人の兵士は訝しみながら二人の周囲を歩く。

「おい、乗っているのはどちらも子供だぞ？」

兵士がそう問いかける。

すると書類を確認していた兵士は中身を見て嘆息を漏らした。

「どうやら嘘ではないようだ。王直筆の証である印鑑も押されている」

「本当かよ？」

疑いをやめない兵士も二人から離れて書類の確認する。

確かにソラが渡した書類には王直筆の勅令が書かれており、それを証明する印鑑が押されていた。

半信半疑であつた兵士もこれを見せられては信じるしかなかった。

「こんな子供が……お前たち、王都所属の騎士なのか？」

問いかけに対し、ソラは首を横に振った。

「ボクたちはギルドに所属しています」

「ギルドに？」

言われて兵士は、ソラが着る服の襟元につけられた紋章に気がつく。

「なるほど。いや、疑つてすまなかつた。通つてくれ」

「いえ、ありがとうございます」

軽くお礼をしてから、ソラは馬を歩かせた。

門を潜り中に入ると、ドウエセの現状が目の前に飛び込んできた。

誰一人として出歩いていない。普段あるはずの活気もなく閑散としている。あるのは蹄の音だけだ。

「これがドウエセ……？」

予想だにしていなかった光景にソラは絶句する。

トウネリもまた街並を見て言葉を失っていた。

「とにかく今は兵舎に向かおう」

我に帰り、ソラは手綱を強く握る。

ふと家屋の窓を見ると、不安げな表情で外を見つめる住民の姿があった。

笑顔で溢れていたはずの街がひとつの事件によって見る影も無くなっている。それがソラにとつてもトウネリにとつても、心苦しいものでしかなかった。

兵舎の前にも外門同様、警備兵が立っていた。

「お前たち何者だ！」

兵士は馬を見るなり驚いて声を上げる。

叫び声を聞き、ソラは馬に止まるよう指示した。

「ボクたちは王都から来た調査員です」

「調査員？ 王の勅令の件か」

そう呟いてから、兵士はまじまじとソラたちの顔を見る。

「しかしこんな子供が送られてくるとは……」

大人からしてみればソラたちはまだまだ子供だ。外門の時もそうであったが、よもや王が子供を調査員として送るとは思っていなかったのだ。

だが外門を通つたということは偽りではないことの証明にもなる。兵士は頷くと、兵舎の扉を開いた。

「話は聞いている。隊長の元まで案内しよう」

「ありがとうございます」

トウネリはそう言うと、馬から下りて兵舎の中に入っていく。

「ここで待つてね」

馬の背中を優しく撫でてから、ソラも後に続いた。

兵士の案内に続いて二人は廊下を歩く。

兵舎の中も街同様に静けさで包まれていた。人の気配も少ない。

「あの……どうしてこんなに静かなんですか？」

「隊長の命令でそれぞれの家に一人の兵士がついているんだ。極力外に出ないよう指示しているとはいえ、犯人がどこにいるかも分からないからな」

「そうか。それで街もこんなに……」

「ああ。それにもし住民の誰かが犯人ならば、監視という形にもなる。あまり疑いたくはないんだがな」

確かに兵士の言う通り、住民の誰かが夫婦に対して恨みを持っており、結果殺害したという可能性もある。むしろその線を考える方が自然だろう。

「トウネリ、どうしたの?」

ソラはふと隣を歩くトウネリに顔を向けた。どこか落ち着きのない様子の彼女が心配になったのだ。

「あ、ううん。なんでもないわ」

そう答えるトウネリの表情はどこか冴えない。

何を心配しているのか、ソラはなんとなく察しがついていた。

トウネリは気にしているのだ。六年前のあの日のことを。

気がつけばソラはトウネリの手を優しく握っていた。その温もりに触れて、トウネリの緊張していた顔が微かに綻んでいく。

そうこうしている内に、案内の兵士がとある部屋の前で足を止めた。

「隊長! ロトウスです! 王からの手紙にあつた調査員を連れて来ました!」

案内をした兵士ロトウスの声に「入れ」という返事があつた。

それを受けてロトウスは扉を開くと、二人に入るよう促す。

「行こう……トウネリ」

「……うん」

互いに顔を見合ってから、ソラとトウネリは部屋の中に足を踏み入れた。

第一節 静寂に包まれし暗雲の空 2

部屋に入ってきた二人を見て、アルガストは啞然とする。

王都から急遽調査員が送られてくるといふことで多少身構えていた彼であったが、よもや子供が送られてくるとは他の兵士同様に思っていなかったのだ。

（まだまだ子供じゃねえか。なんだって子供が王都から……う）

王都から派遣される調査員といえば、基本的に王都直属の兵士が担当するものだ。それもただの兵士ではない。何においても目敏く、長年の経験から調査に長けた兵士が選ばれる。

そんな中で送られてきたのが子供とあつては、王に忠誠を誓っているアルガストでも、その考えに対し疑問を抱かざるを得ない。

「お前たち、名前は？」

だがこの部屋にまで来たといふことは、王が発行した公の文書を持っていることの証左でもある。

ひとまず素性を知るべく、アルガストは二人に問いかけた。

「ボクはソラ。ソラレベリアヴィルレです」

「ソラ……か。変わった名前だな」

どこかで見覚えのある髪色と顔立ちだ。ソラに対してアルガストはそう印象を受けていた。

「えつと、私は……」

一方で隣に立つ赤茶けた髪色の少女は、少し躊躇うかのように口を動かす。

「トウネリ……です。トウネリⅡゾルⅡキアンロレス」

「キアンロレス……？」

聞き覚えのある響きに眉を顰める。その時トウネリの肩がピクリと動いたのをアルガストは見逃さなかった。

記憶を辿り、キアンロレスの名を思い出すと納得した。

「そうか。キアンロレス……六年前起こった魔物事件の首謀者もそんな名だったな」

アルガストの呟きに、トウネリは唇を噛み締める。

「お前はそいつの娘か」

トウネリは静かに頷く。

アルガストの脳裏にかつての光景が蘇る。あの日失った者の顔も。

「別にそう身構えるな。誰もお前のことを責めたりはしない」

そしてもう一つ、アルガストはあの日いた一人の少年のことを思い出していた。その

少年もまたソラと同じように空色の髪をしていたと。

(そうか……こいつらは……)

奇異な話だ。そうアルガストは笑う。

よりよって今回起こった事件の調査に、六年前起こった事件の関係者が送られてきた。そんな偶然もあるものなのだなと。

「或いは偶然じゃないのかもな」

アルガストの独り言にソラが小首を傾げた。

「いやすまない。こつちの話だ」

微かに笑うと、アルガストは崩していた姿勢を正す。

「紹介が遅れたな。俺はこの街の兵士を取り仕切っているアルガストだ。まずは王都からの旅ご苦労だった。しかしまさか子供が来るとはな」

アルガストの言葉にソラは身を縮める。確かにこの身に不相応な来訪だと自覚はしていた。

「王に無理を言ってお願ひしたんです」

「なるほど。お前らがなぜ王と通じ合えたのかは知らんが、相応の覚悟をもって来たのだろう。歓迎する」

ソラとトウネリは顔を見合わせる。アルガストの反応から察するに、すぐに追い返さ

れるかもしれないと身構えていたのだ。

胸を撫で下ろす二人を見て、アルガストは嘆息を漏らす。彼とてただの子供であればあの凄惨な光景を見せる気はない。二人の事情におおよその心当たりがある故の判断だった。

「それで、事件現場はどんな風に？」

「遺体はまだ動かしていない。お前たちが来るといふことで、発見された当時の状態を保たせてある」

ソラの問いに答えると、アルガストは机に置かれた鈴を鳴らした。

すると部屋の前で待機していたロトウスが中へと入ってくる。

「ロトウス。二人を現場まで案内してくれ」

アルガストの指示を聞き、ロトウスはわずかに目を泳がせる。

「あの……よろしいのですか？ 二人はまだ子供ですが……」

ロトウスの気の迷いに対してアルガストは頷く。

「こいつらは相応の覚悟を持ってやってきたんだ。見せないわけにもいかないだろう」

アルガストとロトウスの会話を聞いて、トウネリは思わずソラの手を握った。

二人の話から察するに、余程見せるのを躊躇われる光景が待っているのだろう。そう思うと、不安が胸の中を渦巻いていた。

震えるトウネリの手につき、ソラは優しく握り返す。

「ロトウスさん、お願いします。ボクたちは知らなきゃいけないんです」

二人の只ならぬ眼差しにロトウスは項垂れる。彼らはまだ子供のはずだ。なのに、一体どれだけの重荷を背負っているのだろうか。

「わかった。だが気分が悪くなったらすぐにその場を離れるんだ。いいね？」

「はい。ありがとうございます」

同時に礼を言つて、ソラとトウネリは頭を下げた。

そしてロトウスに続いて部屋を出て行く。

「おい、トウネリと言つたか」

その時ふとアルガストはトウネリを呼び止めた。

「は、はい？」

声を震わせてトウネリは振り返る。

突然のことに肩が僅かに跳ね、握った手のひらを微かに震わせていた。その様子を見てアルガストは嘆息を漏らす。

「いやすまない。なんでもない」

謝罪を入れてから、アルガストは背中を向けた。

一体なにを言おうとしていたのか気になるトウネリだが、聞こうとする勇氣を持たず

踵を返して部屋を出て行った。

再び部屋に一人となり、アルガストは今日何度目か分からないため息を吐く。

落ち着きのない気持ちを抑えるために、呼び起こされたかつての記憶とともに部屋の
中を右往左往する。

ふと窓の外を眺めると、丁度眼下に案内をするロトウスとその後には歩く二人の子供が
目に入った。

アルガストの視線は一点。トゥネリの方に向けられていた。その瞳の奥にはどこか
冷ややかな感情が垣間見える。

「ガチガチに震えてるじゃねえか」

独り呟くと、アルガストは窓から離れて机に置かれた書類に目を通す。二人が来るま
でに纏められた調査の報告書だ。

書類には殺害された二人の身元だけでなく、周辺の人間関係についても書かれてい
る。

一度目を通した内容の再確認のために、一枚一枚捲つていく。そしてその中の一枚で
手を止めると、書面に書かれている文字を指でなぞった。

「まったく……子供のくせになんでも背負い込みやがつて……」

嘆きに似た言葉とともに、アルガストは書類の束を机上に放り投げた。



静かな街の中をソラとトウネリは歩く。前方を歩くロトウスに続いて向かったのは一軒の家だ。

二階建ての大きめな家には小さな門が設けられていた。門の前には二人の兵士が見張りとして立っている。

「おいロトウス。なんだその後ろの子供は？」

ここでも兵士たちに同様の反応をされて、トウネリは堪らず唇を噛む。

確かに彼らからすればまだ子供だ。それでも一体誰が何のために夫婦を殺害したのか。その真実を突き止めたいたい思いは誰にも負けるはずがないというのに。不満と反感が彼女の胸の内で燻り始めていた。

「彼らは王都から派遣された調査員だ。現場はそのままにしてあるんだな？」

「ああ。隊長の指示だったからな。遺体はまだ動かしていない」

「よし。二人ともついてきてくれ」

ロトウスに続いて二人も門を潜る。

玄関の前に差し掛かった辺りで、最後尾を歩いていたトウネリの耳に「あれ見てきつ

と吐き出すぜ」という微かな声が入ってきていた。

そんなことするはずがない。そう奥歯を噛み締めた彼女だったが、その意思をすぐに裏切ることになった。

玄関を入つてすぐに見つけた男の死体には、僅かな不快感を覚えつつも耐えることは出来た。しかし。

「な……………？」

女性の死体を見て、堪えていた不快感が爆発した。

「うぐつ……………うえ……………」

トウネリはすぐさま死体から顔を逸らし、壁際で蹲る。

まだ昼食は取っていないが、そんなことはお構いなしに胃の中の物を吐き出して
いる。

一方のソラは歯を噛み締めて、必死に目の前の光景を耐えていた。

惨たらしい女性の死体。腹部を中にいる赤子諸共滅多刺しにされ、心臓部は抉られ、乾いた血が顔にまでこびりついている。

二人は微かな後悔とともに納得していた。なぜロトウスが現場を見せることに躊躇していたのかを。こんな光景は大人にさえ憚れるものだ。

「殺害されたのはホールキンズ夫妻。夫のヴェルデイさんは玄関先で首を切られた後に

心臓を抉られたんだと推定している。妻のアンナさんは腹部に無数の刺し傷が原因だろうね」

「なんで……どうして……？ 誰が一体こんなことを……？」

ソラは思わず疑問を口にする。

死体から見て取れるのは怒りと憎しみ。犯人に一体どれだけの激しい感情があったというのか。並々ならぬものが無ければ、ここまですることは出来ないだろう。

「犯人は見つかっていない。それどころか目星もついていない状態だ。彼らの身の回りがある程度調べたが、ここまでの恨みを持つような人間はいなかった」

「そう……ですか……」

複雑な表情でソラは屈み、被せられていた布を掛け直す。何度か布は変えられていたのか、血はほんの僅かしか付着していない。

「ただ一つ気になることがあってね」

不意に思い出したかのように、ロトウスが呟く。

部屋の隅で呼吸を整えていたトウネリも、話に耳を傾けた。

「気になること？」

ソラの問いかけにロトウスは頷く。

「ああ。この夫婦にお金を渡していた老夫婦がいたらしくてね」

ロトウスの言葉にトウネリは目を見開く。

ソラも心当たりがあり、トウネリの方に顔を向けていた。

「ホールキンズ夫妻に多額な借金があつて、それで殺したんじゃないかつて疑う兵士も

——」

ロトウスが言い終わるよりも先に、トウネリはすぐさま立ち上がつて外へと駆け出していった。

その慌てた様子を見て、ロトウスはソラの顔色を伺つた。

「どうしたんだい彼女？」

「あ、えつと……」

トウネリが部屋を飛び出した理由は分かつている。ここは疑いを晴らすために、ソラは事情を話した。

ロトウスは腕を組み、額に右手を当てて項垂れる。

「そうか。君たちは六年前の」

道理で、とロトウスは内心呟く。

普通に育つた子供であれば、殺人事件が起こつたと自分から首を突つ込もうとはしないだろう。仮に大人であっても、そういう仕事に就いていない限りは、余程正義感のあるものでないと進んで関わろうとはしないはずだ。

しかし二人は違う。彼らは悲劇を幼い時から体験し、その記憶を抱えたまま育つてきたのだ。

悲しい現実だ。そうロトウスは嘆く。

同時に、きつと隊長のアルガストはこれ以上の思いを受けたことだろうと思った。彼もまた、六年前の事件で強い思いを抱いた人間であるのだから。

「すまなかつた。君たちのことを子供呼ばわりして」

どう声を掛ければいいのか分からず、ロトウスは精一杯の言葉を口にした。

「いえ……皆さんが思ったことは何も間違つてないですから……」

ロトウスの言葉を受け止めきれず、ソラは顔を伏せる。

「とにかく彼女を追いかけよう。老夫婦に事情を聞いている兵士と揉め事になったら大変だ」

一方、殺害現場を飛び出したトウネリは、脇目も降らず一直線に老夫婦の家へと向かつていた。

静かな街に荒々しい息遣いが微かに響く。

目的地が見えてくるとトウネリは、速度を上げて力強く駆けた。

「おじいちゃん！ おばあちゃん！」

家の中に飛び込むとすぐさまトウネリの視界に、三人の兵士と話す老夫婦の姿が入

てきた。

「トウネリちゃん？ どうしてここに？」

老婆が驚いた様子でトウネリを見た。

兵士たちも突然のことに啞然とした表情を浮かべている。

「なんだこの娘？ どこかで見た覚えが」

兵士のうちの一人が警戒心を露わにする。そして何かを思い出したように口を開いた。

「そうだ。キアンロレスの娘だ」

「キアンロレス？ と言えば、あの魔物事件の？」

「ああ。だがこの街を出て行ったはずだが」

兵士の物言いに苛立ちが募り、トウネリは牙を剥く。

「なによ？ わたしの関係者だからこの二人を疑ってるわけ？」

トウネリの脳裏には夫婦の無惨な死体が焼き付いて離れなかった。急く気持ちが抑えられず、今の彼女にはとても正常な判断ができる状態ではない。

敵意剥き出しのトウネリを見て、兵士たちは警戒心を強めた。

「トウネリちゃん、落ち着いておくれ。わしらは大丈夫じゃから」

老爺が宥めようと立ち上がる。

すると張り詰めた表情の兵士がそれを見て、老翁をひと睨みした。

「まさかお前たちが殺した犯人だな？」

「違います。私たちは、あの人たちに——」

老婆がゆつくりとした口調で事情を改めて話そうとするが、興奮した様子**の**兵士には聞く耳などなかった。

「その人たちは関係ない。わたしがあの二人にお金を送っていたのよ」

「ほう？　つまりお前はあの夫婦に借金をしていたんだな？　それでその返済に嫌気がさして殺した。違うか？」

兵士の問いかけにトウネリは齒を軋ませる。

女性のやり場のない怒りに満ちた表情。泣きながら夫に抱きつく姿。その全ての原因が誰にあるのかも脳裏に甦る。

「わたしは——」

夫婦が愛し大切にしてきた命を奪ったのは自分だ。ならば今回夫婦の不幸を招いたのも自分に違いない。抱えていた罪悪感がトウネリの中で肥大していく。

「そうよ。わたしが——」

震える唇を開き、トウネリが何かを言おうとした時だった。

「お前ら落ち着け」

不意に声がして、その場にいた全員が玄関の扉に顔を向けた。

「ただならぬ顔で走っていくのが見えたから何かと思えば」

アルガストが冷ややかな表情で立っていた。

その表情は呆然とするトウネリに向けられている。

「隊長！ この女が——」

「そいつは王都から送られてきた調査員だ。まず犯人じゃない」

何かを告発しようとしていた兵士たちだったが、アルガストの言葉を聞いて飲み込んだ。

遅れてソラとロトウスが家にたどり着く。張り詰めた空気がすでに漂っており、二人は息を呑んだ。

「隊長、その子は——」

「知っている。この老夫婦にお金を渡させていた張本人だって言うんだろう？」

冷ややかな視線を変えず、アルガストは口を開く。

「おい、トウネリと言ったか。お前今、なんて言おうとした？」

アルガストの問いに対し、トウネリは顔を逸らした。

「別に……なんだっていいじゃないですか」

声を震わせた後、唇を噛み締める。目頭には涙が溜まっていた。

「トウネリ……？」

心配した表情でソラが近寄る。するとそれとすれ違うように、トウネリは足を動かし
た。

視線を動かさないアルガストの横をすり抜けて、トウネリは外に駆け出していく。

「待つてトウネリ！」

後を追つてソラも駆け出した。

重苦しい空気が漂い、アルガストは嘆息を漏らす。トウネリの挙動の一部始終を見て
いた彼は、一体彼女が何を口にしようとしていたのかは察しがついていた。故に「まだ
まだ子供だな」と静かに呟く。

「トウネリ！ 待つて！」

ソラから逃げるようにトウネリは走つた。

彼女の罪悪感の対象はあの夫婦だけに止まらない。当然ソラにも向けられている。

だが同時に、別の思いも抱いていた。

トウネリは速度を落として足を止める。

「トウネリ、どうしたの？」

聞かずとも分かっている。それでもソラは問いかける。そうすればきつと、思いを打
ち明けてくれると思つていた。

体を震わせてトウネリは振り返った。溜まっていた涙はいつしか溢れ始めていた。

「ソ……………ラあ……………」

救いを求めて、トウネリはソラの胸に飛び込んだ。その体をソラは優しく受け止める。

「ああ……………うああ……………ッ！」

手紙を見てからずつと募らせていた思いを吐き出すように、トウネリはひたすらに泣き叫ぶ。

衣服を両手で掴み、胸に顔を埋め、声を枯らして泣き叫ぶ。

しかしトウネリの声が曇天の空に響くことはなかった。ソラが泣き叫ぶ声も何もかも、全てを包み込んでいるからだ。

自分だけに聞こえる悲痛な声に、ソラは表情を曇らさせながらも優しく頭を撫でる。

掛ける言葉が浮かばない。彼女が抱えている思いを取り払うことも彼女の笑顔を保つこともできない。

その悔しさにソラは強く歯を噛み締めた。

第一節 静寂に包まれし暗雲の空 3

鼻を吸り、頬を赤らめながらトウネリは涙を拭った。

泣き叫んだことで憑き物が多少落ちたのか、どこか清々しい表情をしている。

「ごめん、急に」

「いいよ。気にしないで?」

「うん。ありがとう」

謝罪しながらも微笑むトウネリの姿に、ソラも笑顔を浮かべる。

手紙を見て以降、トウネリは一度も笑っていないかった。そんな彼女に僅かでも笑顔が垣間見えた。それが嬉しかったのだ。

トウネリは深呼吸をして、気持ちを落ち着かせる。

落ち着いてから、周囲に目をやる。

街に来た時にも感じていたこと。本来あるべき笑顔や活気が街から消えてしまっている。人々の多くは自分も殺されてしまうのではないかという恐怖に怯えているのだ。

と。

「ソラ」

「ん？」

「早くみんなの笑顔を取り戻さないかね」

「うん、そうだね」

少しでも早く犯人を見つけ出し、人々の心の平穏を取り戻す。それが亡くなった夫婦のためにもなるのだからと、トウネリは決心した。

「悪いんだけど先に現場に行つてももらえる？ わたしも後で合流するから」

「トウネリは戻るの？」

ソラの問いかけにトウネリは頷く。

老夫婦に掛けられた疑いを晴らすためとはいえ、自分の職務を全うしようとしていた兵士に高圧的な態度を取ってしまったことを後悔している。謝罪しにいくことも兼ねて、まずは二人の家に戻らなければならないと考えていた。

「わかった。あまり無理はしないでね？」

トウネリの考えを汲み取り、ソラは少し心配したように声をかける。

「大丈夫よ。あなたのおかげでもう落ち着いてるから」

対しトウネリは笑つて返すと、老夫婦の家へと駆け出した。

走り去る背中を見送りながら、ソラはふと殺害現場を思い出す。何度思い出してもやってくる不快感。それに加えてどこか違和感があった。その正体を確かめるためにも、あの現場に再び向かわなければならぬ。

ソラはひとつ深呼吸をする。はじめ見たとき吐き気を必死に堪えていた彼は、心の準備をする。しっかりと自分の目で見て、手掛かりを見つげるために。

「よしー」

気合の一声とともに、ソラの足先は夫婦の家に向けて動き出す。

その様子を窓から眺める姿が幾つかあった。六年前の当時子供だった者たちだ。

彼らの中にはある微かな期待があった。きっと六年前と同じように解決してくれるだろうという期待が。

同時にある思いも募っていた。あの時と同じように、頼り切ってしまったている申し訳なさが。

「大丈夫だよ。ボクがなんとかしてみせるから……」

そんな彼らの視線に気が付いているソラは小さく呟き、拳を強く握る。彼らの不安を取り除くためにも、真実を明らかにして犯人を捕まえる。それがエイネとの約束のためにもなるのだからと。

しかし真つ直ぐ前を見るソラの碧眼は、どこか哀しみに包まれていた。



ソラとトウネリがドウエセに着いた頃、ギルドヘルデイロ支部支部長室にてヴェラドーナはほくそ笑んでいた。

「いやあ、彼らはどれだけの事件に巻き込まれるのやらねえ」

全てを見据えているかのような眼差しで机の上を見つめる。視線の先には何ひとつ置かれていない。暇を持て余している様子だ。

「ふむ。せっかくだから見に行ってみようか？ いや、けどさすがにここから離れるとユースが余計私に目をつけるからやめた方がいいか」

そしてあまりに退屈なのか独り言が多い。誰かに話しかける口調でぶつぶつと呟いている。

側から見れば不気味極まりないが、彼女の言動のひとつひとつには不思議なものがある。まるでここにはいない誰かと会話を交わしているかのような雰囲気だ。

「けど流石に退屈だ。なにか面白いことはないものか」

頬杖をついて唇を尖らせるヴェラドーナ。こういう時に何か遊戯になるものでもあればいいのだが、と呟いてため息を吐いている。

不意に退屈そうにしている彼女の視線が、出入り口の扉に向いた。

「誰か来たね」

廊下から聞こえてくる足音。ヴェラドローネの言葉通り、誰か来訪者が来たようだ。

来訪者は止まると、数回扉を叩いた。

「ヴェラドローネさん宛に手紙が届いたので、こちらにお持ちしました」

扉越しに聞こえてきた声に、ヴェラドローネは顎を親指で搔く。

普段聞き慣れていない声だから、というのもあるが何よりも「手紙」に強く反応していた。

「手紙？ 一体誰からだろうねえ？」

ヴェラドローネは口元を引き攣らせて、怪しげな笑みを浮かべる。手紙ひとつで「面白そうなものが来た」と思っているあたり、余程退屈だったのだ。

「いいよ。入ってくれ」

「失礼します」

入室の許可を得た来訪者は、一言置いて扉を開く。入ってきたのは今日からギルドの受付嬢として働くことになったレフィナだった。

「ああ、君だったか。どうだい？ 受付嬢の仕事は。と言っても、あまり大した仕事でもないだろう？」

ヴェラドローネは見知った顔に笑顔を振り撒く。

すると、どこか緊張した表情で入ってきたレフィナも顔を綻ばせた。

「いえ。基準となるものが曖昧ですから、中々適正な依頼だと判断するのが難しいです」
「まあ確かにそれはあるかもしれないね。依頼内容にあつた報酬かどうかの判断は、君たち受付嬢に任されているからね」

「はい。場合によつては依頼人と請負人の衝突を招きかねない。とルーさんが言つていました」

他愛のない話で場を多少盛り上げながら、ヴェラドローネの視線はレフィナではなく手紙の方に向いていた。

長方形の封筒に、厚さから考えるに紙一枚だけが入っている。そう分析してヴェラドローネは内心落ち込んでいた。これでは大した内容ではないのだろうと。

それでも持つてきてもらった以上、受け取らないのは失礼にあたる。彼女は渡すのを促すように手を伸ばした。

「で、誰からの手紙なんだい？」

「それが、実は差出人が書かれていないのです。宛名はヴェラドローネさんになっているのですけれど」

レフィナは言いながら手紙を渡す。

彼女の答えにヴェラドローネの肩が微かに動いた。

「なんだい、悪戯の手紙かな？」

笑いながらヴェラドローネは封筒の表裏を確かめる。レフィナの言う通り、どこにも差出人の名前は書かれていない。

差出人を書く習慣を持たぬ知人がいるヴェラドローネにとっては、別段不思議でもなんでもない。むしろこの類の方が多いくらいだ。

その大半が本当にどうでもいい内容ばかり書かれていたりするのだが、一方でその人物の手紙の特徴を知っている彼女は、既に確信を持っていた。これを送ってきたのはその人物ではないと。

「怪しい手紙なのでルーさんに相談したのですが、支部長にはよく宛名しか書かれていない手紙が送られてくるからと言われて」

「ああ。まあ、確かにね。そういう意味では君も、ちゃんと名乗り出てから用事を話してほしいね。一瞬臆でも来たのかと思つたよ」

「え？ あ！ す、すみません！ 気をつけます！」

顔を赤くして慌てて謝罪するレフィナに対し、ヴェラドローネはくつくつと笑つた。

「いや気にしなくていいよ。ちよつとからかつただけさ。確かに手紙は受け取つた。戻つていいよ」

「あ、はい！」

一礼するとレフィナは部屋から出て行こうと踵を返した。返して、ふと止まった。

「あのヴェラドーネさん——」

振り返るレフィナを見て、ヴェラドーネは小首を傾げる。

「ん？ まだ何か用があったかな？」

「えっと……」

問われたレフィナは口をまごつかせる。何かを言おうか言うまいかと悩んでいる様子だ。

彼女は下唇を一度噛むと、

「いえ、なんでもありません。失礼します」

と言って足早に部屋から出て行った。

閉じられた扉を見つめて、ヴェラドーネは嘆息する。

「大方、夫を殺した犯人について聞きたかったんだらうね」

そう呟く一方、ヴェラドーネの興味は既に手紙に注がれている。

封を切り、中から一枚の紙を摘み出す。そして広げて内容を目だけで追っていき、直後ヴェラドーネは満面に笑みを浮かべた。

「これはこれは。なかなか面白いものを送ってくるじゃないか彼は」

ヴェラドローネの瞳が、まるで新たな獲物を見つけた獣のように光る。光の矛先は最後の一行。そこにはこう書かれていた。

今夜、貴方様をお食事にご招待します——と。

第二節 笑顔の理由（わけ） 1

「すみませんでした。さつきは失礼なことを言つて」

トウネリはそう言つて兵士たちに深々と頭を下げる。

ソラと一度別れた彼女は老夫婦の家に戻つてきていた。

飛び出してからそう時間は経つていなかったため、中には先刻衝突した兵士たちもいる。

真つ先に頭を下げるトウネリを見て、兵士たちは思わず顔を見合わせるとバツの悪そうに口を開いた。

「いや、こちらこそすまなかつた。他に手掛かりがなかつたために、つい君を責めてしまった」

兵士たちも兜を取るとそう陳謝する。

事情を聞かされた彼らにはもう、トウネリを追及するつもりはない。それどころか同情の念すら湧いていた。

「だが念のため確かめさせてくれ。君は本当にあの二人を殺してはいないんだね？」

「そんなことするはずがありません。私はあの人たちから大切な人を奪つてしまった。

その上で彼らの命を奪おうとは思いません」

兵士たちは、トウネリの言葉の裏にある重荷をひしひしと感じていた。

「そうか。本当にすまなかつた」

代表して謝罪する兵士に続いて、背後にいた二人も「すまない」と口にして頭を下げ
る。

和解は程なくして終わった。どちらもただ焦っていたに過ぎない。故に事情を知つてさえしまえば、修復するのに時間など必要なかつた。

「我々は外で見回りをしてくる。何かあれば言ってくれ。すぐに駆けつける」
「はい。ありがとうございます」

玄関から兵士を見送ると、トウネリは緊張の糸を解すように一息吐く。

「ただいま。おじいちゃん、おばあちゃん」

老夫婦の方を向くと、トウネリは目頭に涙を浮かべながら笑つた。

二人の姿を見るのはいつ以来だろうか。ずっと手紙のやり取りをしていただけで、ドウエセを出てから六年間一度も会っていない。

それ故に変わらぬ二人の姿を見ると、込み上げてくるものがあつた。

「おかえり。トウネリちゃん」

老夫婦は声を揃えて言うと言ち上がる。ゆっくりとした足取りでトウネリに近づい

ていく。

そして彼女の体をそつと抱き寄せた。

「大きくなつたねえ、トウネリちゃん」

老婆が微笑みながらも涙を溢す。

「ああ。それに見違えるほど美人になつたわい」

老爺はトウネリの赤茶けた髪を優しく撫でる。

「うん。わたしも、二人にまた会えて嬉しいよ」

これは本来望んだ形の再会ではない。それでもトウネリは今この瞬間を噛み締めるように、二人の手をぎゅつと握り締める。

二人の温もりが、塞ぎ込んでいた時支えてくれた温もりが変わらずにあった。

堪らず笑みを溢すトウネリだったが、今はそれどころではないと目を鋭くさせる。

「教えてほしいんだけど、あの夫婦は本当に昨晚亡くなつたんだよね？」

トウネリの問いかけに、老夫婦は頷く。

「ええ。そうか、トウネリちゃんもその話を聞いてここに来たんだね」

老爺が暗い表情で答える。

はたりと、トウネリの思考が止まった。

「え？ 今、なんて言ったの？」

「どうかしたのかい？」

トウネリが聞き返すと、老爺は逆に首を傾げた。

トウネリの脳内で、彼が言った言葉が反復する。何かがおかしいと本能が訴えかけている。

その引つ掛かりが何かということに気がつくと同時に、そう言えばともう一つ思い出す。家の中に飛び込んだ時は焦っていたために、気にも留めなかつた言葉を。

「ねえ、待って。二人ともわたしに手紙を送ったよね？」

恐る恐る問いかけてみる。すると老夫婦は顔を見合わせて、まるでその事柄を知らないかのような表情を見せた。

「はて、手紙？ そんなもの送った覚えはないが……」

「ええ、私も。トウネリちゃんに心配かけさせないよう、この事は教えないでおこうって二人で話していたくらいよ？ でもまさか、あの二人がどうして殺されてしまったのか」

「どういう……こと……？」

背筋に悪寒が走り、トウネリの顔が一気に青ざめる。

最初家に飛び込んだ際、老婆がトウネリの姿を見て思わずこう言っていたのだ。どうして……と。

手紙を見てやってくると予想出来なかったために出た発言ではない。二人はそもそも彼女に送られてきた手紙の存在を知らないのだ。

「嘘。だって二人からこれが」

トウネリは荷物の中から手紙を取り出すと、老夫婦に広げて見せる。老夫婦は紙をしばし見つめていたが、知らないと言を横に振った。

「じゃあ、この手紙は一体……？」

字は紛れもなくよく手紙を書く老爺の字だ。寸分狂いなく彼が書いた字と同じであるのは、老婆も認めている。しかし老爺に書いた記憶は一切ない。

纏わりつく不快感に、トウネリの額から冷や汗が滲む。

ふとトウネリの脳裏に嫌な予感が過った。

「ソラー！」

トウネリは堪らず叫ぶと、家を飛び出した。

向かった先は殺害された夫婦の家。そこには現場を隈なく調べるソラがいるはずだ。

もしも犯人がまだあの家のどこかに潜伏していて、また誰かの命を狙っているとすれば。そう考えると居てもいられず必死に走る。

家の門前にいる二人の兵士を無視して、一目散に中に駆け込んだ。

入り口に姿はなかった。とすればいるのは二階の寝室か。思考が心を掻き乱して急

かす。

「ソラ、大丈夫!」

閉じられた扉を勢いよく開けて、トウネリは叫んだ。

そして寝室の中に、屈んで女性の遺体をまじまじと見つめるソラの姿を見つけた。

彼の身を案じていたトウネリは、無事であることを理解してほつと胸を撫で下ろす。

が、あることに気がつき小首を傾げた。

（あれ? ソラの目って、あんな色してたっけ……?）

遺体を見つめるその瞳は、金色に輝いていた。

しかし記憶しているソラの瞳は綺麗な碧色だったはず。

そうトウネリが疑問に思っていると、ソラがゆつくりと口を開いた。

「ねえ、トウネリ。少し聞きたいことがあるんだけど……いいかな?」

妙な静けさにトウネリは息を呑んで頷く。

「人が誰かに殺されそうになった時、笑うことってあるのかな?」

「それ、どういう意味?」

一体何を聞かれているのか分からず、トウネリは聞き返す。

するとソラは立ち上がって、遺体を見るよう視線で促した。

あまり見たくない気持ちを抑えて、トウネリは遺体に近づく。そして見た。血塗れ

だった顔が綺麗になったことで、表情が明らかになっていくのを。

「笑って……る……？」

女性はまるで幸せに満ち溢れたかのように、穏やかな笑顔を浮かべていた。

「ずっと疑問に思っていたんだ。この人のお腹には赤ちゃんがいた。大きさから多分、もうすぐ出産を迎えようとしていたんだと思う。そんな人が赤子を庇う様子もなく倒れているのはどうしてなんだろうって」

ソラは視線を落とす。金色の瞳で女性の首元を見つめる。

「この人多分、首を切り落とされて亡くなったんだと思う」

「えっ？　でも、首と胴体は分かれてないじゃない」

「トウネリも確か魔力の痕跡を見ることが出来たよね？」

「あ、うん」

「じゃあ見てみて。この人の首のあたりを」

言われてトウネリは、魔力痕跡を探るために目を凝らす。すると魔力の痕跡である緑の粒子のようなものが、部屋中に漂っているのが見えた。

そしてその漂う粒子は、女性の首元から出ている。

この痕跡が何を物語っているのか理解し、トウネリは唾を飲み込んだ。

「ソラ、これって……」

「うん。これだけ強い痕跡が残っているんだ。犯人は切り落とした首を魔法で無理矢理にくつつけたんだ」

何故そんなことを。トウネリの中に新たな疑問が生まれ、纏わりつく。

「この痕跡は、玄関で殺されていた男性の遺体にも残されていたよ」

「なんでよ。なんで犯人はわざわざこんなことを！」

疑問に思っていたことを堪らず口にするトウネリ。

対してソラは首を横に振ると、ただ一言「わからない」と答える。

「ボクはなにか強い恨みがあつて、この夫婦が殺されたんだと思つてた。わざわざお腹の中の赤ちゃんを、何度も刺してらんだからね」

けど、とソラは続ける。

「本当に強い恨みを持つた人ならこんなことはしないはずだ。きつと首と胴体を繋げたのには理由があるはず。そしてもう一つ——」

ソラの視線は女性の顔に向けられる。金色に輝いていた瞳はもう、元の碧眼に戻っている。

「殺されようとしている人が、どうして犯人を見て笑つていたのか。普通ならこんなにも満たされた表情を浮かべないはず」

ソラは女性が浮かべている表情に見覚えがあつた。

記憶の中に刻まれているある光景が、女性の表情と重なる。消え行こうとする中、我が子を落ち着かせようと笑う母親の——エイネの顔と。

(もしかして犯人は——)

ある考えが浮かび、ソラはそれをすぐに掻き消した。あり得ない、そんなことはあつてはならないと、目を逸らすかのように。

一方トウネリは、開き切った瞳孔で女性の遺体を見つめていた。ソラの言葉は途中から彼女の耳に届いていない。

彼女の脳裏にもある考えが浮かんでいる。

殺された夫婦との関係。送られてきた謎の手紙。そこに加えられる、遺体に残された痕跡。全てがある考えに行き着く要素となっている。

その考えを震える唇でなんとか口にしようとする。が、隣にいるソラが存在が、声に出すことを拒ませていた。

(まさか……犯人は……)

トウネリの脳裏にはある男の——邪悪な笑みを浮かべる父親の顔が浮かんでいた。

第二節 笑顔の理由（わけ） 2

「そういえば慌てた様子で入ってきたけど何かあった？」

不意に思い出し、ソラは問いかける。部屋に入ってきた時、トウネリの様子が明らかにおかしかった。何かあったのではないかと。

「あ、えつと……」

対しトウネリは迷っていた。

送られてきた手紙は老夫婦によって書かれたものではなかった。それはつまり、この手紙は犯人から送られてきたことになる。

しかし今それを話すべきか。話したところで余計な不安を煽ることになりかねない。何より犯人からという確証もない。

「な、なんでもないわ。ただちよつと心配になっただけ」

苦笑を漏らしながら、トウネリはそう答える。

「そう？ 何か隠してない？」

さらに問われて、トウネリは息を呑んだ。

ソラは人の変化に殊更敏感だ。ほんの少しでも表情を変えれば、心配したように訪ね

てくる。

それを痛感し、トウネリは冷や汗を滲ませる。やはり明かすべきだろうか。答えを考えあぐねていると、ソラの真っ直ぐな目と目が合った。

なんの曇りもなく、輝いて見える碧眼。その吸い込まれるような瞳を見た時、トウネリの脳裏にソラの眩しいほどの笑顔が過った。

「ううん。本当に大丈夫よ。気にしないで」

視線を逸らして、トウネリは平然とした顔で答える。

手紙は自分に当てられたもの。仮に犯人からだったとしても、その矛先は自分に向けられているはずだ。ならばソラの手紙を守るためにも話す必要はない。そう彼女は考えていた。

「それよりさ、わたし達この現場がどのようにして発見されたか知らないわよね？」

「あ、うん。隊長さんからは特に聞かされなかったから」

「じゃあさ、ここの隣の家に話を聞きに行かない？もしかしたら何かの手掛かりになるかも」

「わかった。そう……だね」

トウネリの提案に少し戸惑いながらも、確かに必要なことだとソラは頷く。

「トウネリ……」

「ん？」

頷いて、ソラはトウネリの顔をよく観察する。彼女の表情には一切の曇りが無い。しかしそれでも言いたいことがあった。

「無理しないでね？」

やっぱり隠し通すのは難しいか、と内心でトウネリは笑う。

それでも答えるわけにはいかなかった。例えこの身が犠牲になろうとも、ソラの笑顔だけは守り通したいのだから。

「大丈夫よ。ほんと心配性なんだからソラは」

笑顔を取り繕って、トウネリは部屋を出て行こうと歩き始める。

その背中を追いかけられるようにソラも歩く。そしてふと前を歩くトウネリが、強く拳を握り締めていたのを見逃さなかった。

◇

ベッドに寝転がりながら、セシルは一冊の本に目を通していた。

本には魔法に関する基礎知識——魔法の定義や魔法を扱う際の注意点、魔力に関する一般論などが書かれている。

母親には内緒で図書館から借りてきたものだが、セシルはこれを少し退屈そうにページを捲っている。

不意に彼女の口から深いため息が漏れ、本を閉じると仰向けになった。

「今日もお兄ちゃんはお仕事で帰ってこないのかなあ」

物憂げな表情でセシルは呟く。

ソラとはまだ会って数日の関係ながらも、すでにセシルにとっては家族に近い存在となっている。その感情の大部分を占めているのは憧れだ。

魔法の本を借りたのも、亡くなった父親やソラのように強くなり、母親を守れる存在になりたいという願いの下で取った行動だった。

「お兄ちゃんともっとお話したいのに……」

ソラがしばらくこの家で暮らすことが決まった時は、飛んで喜んだほどに嬉しかった。きっとこれから沢山、この人と話が出るのだろうと。その中には、魔法についても聞いてみたいという思いもあった。

だがセシルは、その憧れの人と共に過ごす時間は少ないのだとすぐに悟っていた。

亡き父がそうであったように、彼もまた誰かのために日々奔走する。そうなれば自ずと、共に過ごす時間は減っていくのだと。

「お兄ちゃんもお父さんみたいにな——」

まさか父親のように、ある日突然いなくなってしまうのではないか。そんな不安が過り、セシルはベッドに顔を埋めた。

思考が悪い方向へと流れていく。今日来るのではないか。それとも明日来るのではないか。不安は恐怖へと変わっていく。

セシル自身、なぜここまでソラのことを心配しているのか分からなかった。あの人なら大丈夫だ。そう思おうとしても、不安と恐怖が思考をすぐに塗り替えてしまう。

いつしかセシルは涙を溢していた。ベッドに被せてあるシーツを強く握りしめて、微かな声で呻く。

嫌だ。大好きな人がいなくなるのはもう嫌だ。そう心の中で悲鳴をあげる。

「ただいま、セシル」

セシルが泣いていると、不意に部屋の扉が開いた。入ってきたのは母親のレフィナだ。

「休憩をもらって、心配になったから帰って——どうしたのセシル?」

レフィナが問いかけたと同時に、セシルは立ち上がって母親に抱きついた。

「どうしたの? なにかあったの?」

何も言わず顔を埋めて泣くセシルに対し、レフィナはどうしていいか分からず動揺する。

ふとベッド上の無造作に置かれた本に気がつき、ようやく原因を理解した。

「そつか。ソラさんがいなくて寂しくなったのね？」

セシルは微かに頷く。

「ねえお母さん……？ お兄ちゃんはお父さんみたいになくなったりしないよね？」

セシルの問いに、レフィナは胸を締め付けられる。この子も自分と同じように、彼を父親と重ねている部分があるのだと。

それは二人の生き方があまりにも似ているからだ。誰かの笑顔のためにあろうとするその姿が。

レフィナは姿勢を低くすると、小さな体を優しく抱きしめた。

「大丈夫よ。きっと大丈夫だから」

根拠はない。きっとその場凌ぎな一時の言葉だ。

そう理解していても、レフィナが言えるのはこれが精一杯だった。

「ほんと？」

「ええ、本当よ」

「ほんとにほんと？」

「うん。だってセシルはあの人のことを信じたんでしょ？」

レフィナの問いをセシルは小さく頷いて肯定する。

「だったら信じて待ちましょう？　ね？」

「うん……」

セシルの体を引き離すと、レフィナはその顔を真っ直ぐ見つめた。涙を流し、顔が赤くなっている。

「ほら、泣かないの。もし帰ってきた時にあなたがそんな顔をしてたら、きつと心配しちゃうわ」

「うん……そうだよね……」

セシルは服の裾で涙を拭くと、再び明るい笑顔を浮かべた。

「大丈夫。ぼくもう泣かないよ」

「そう。偉いわ、セシル」

それを見てレフィナも微笑むと、セシルの頭を優しく撫でた。

この時、セシルの中にある思いが芽生え始めていた。彼女の人生を左右するある強い思いが。

そのことに彼女が気がつくのは、まだ少し先の話である。

第二節 笑顔の理由（わけ） 3

木造二階建ての一軒家。この家には若い夫婦と、もうすぐ十二歳になる一人娘が仲良く暮らしていた。

夜も深まり、夫婦と娘がそれぞれの部屋で眠りについている頃。奇妙な音が聞こえ、夫婦は目を覚ました。

耳を澄ましてみると、左隣の家から常軌を逸した狂った女性の笑い声が響いている。確か隣の家にはもうすぐ赤子が産まれる夫婦が住んでいるはずだ。何かあったのだろうか。夫婦は疑問に思い、耳を傾けていた。

狂った笑い声はそう長く続くことはなかった。

まるで楽器の弦が切れたかのように、突然音が途切れたのである。

もしかしたら何かの悪夢にうなされていただけなのかもしれない。そう考えて二人は再び眠りに着こうとした。

次の瞬間、悲鳴が響き渡った。

この悲鳴で夫婦は普通ではない。この闇夜の中、隣の家で何かが起こったのだと確信した。

しかし身は起こせど、確認しようという勇氣は持てなかった。何せ外は真つ暗闇だ。地面を照らしているのは心許ない街灯の蠟燭のみ。こんな中に出ていき、もし自分にも危険が降りかかったら。そう思うと、とても動こうという気にはなれなかった。

結局夫婦は日が昇るまで、不安な一夜を過ごすこととなった。

そして翌朝になり兵士に通報したところ、隣の家に住む夫婦が殺害されていたと知ったのである。



殺害現場を後にして隣の家を訪れたソラとトウネリは、中に案内されて夫婦から昨夜体験したことを聞いていた。

テーブルを囲む四人の傍らには、警護のために滞在することになった二人の兵士も立っている。どちらも腰に携える剣の束に触れて、険しい表情だ。

「そうですか。貴重な話をありがとうございます」

身を寄せ合うようにして話してくれた夫婦に一言礼を言うと、ソラは思考を巡らせる。

彼らが聞いた音というのは、間違いなく殺害の瞬間に発せられたものだろう。

「それで、お二人が聞いた悲鳴というのは本当に少女のものだったんですか？」

「ああ。うちにも娘がいるから間違いないよ。あれは女の子が発する高い声だった」

ソラの質問に夫が頷きながら答える。

「でもおかしい。あの夫婦にはお腹の中の赤ちゃん以外、子供はいなかったはず……」

トウネリは眉を顰めて呟く。

殺害された夫婦には確かに娘がいた。しかしその娘は六年前の事件で、無惨な死体となつて発見されたはず。であればその悲鳴は一体誰が発したもののなのか謎が残る。

「本当はすぐ外に出て、夜の見回りをしている兵士に報せようと思つたんだ。けど丁度音が聞こえた時間帯は、見回りがいないことを知つていたから……」

夫婦の話を聞き、確認のためにソラは側に立つ兵士たちに顔を向ける。すると左に立つ兵士が頷いて答えた。

「夜の見回りは少人数で行っているからな。時間によつてはここから遠く離れたところにいることもあるだろう」

ドウエセにいる兵士は多いわけではない。六年前の事件を受けて増えているとはいえ、夜に街全体を見通すほどの警戒態勢を取るのは無理がある。

その穴を突いて犯行があつた。おそらくそのための計画も入念に練られていたのだろう。

「ちなみに見回りの人が悲鳴を聞いたという話は——」

「いやない。故にあの殺害現場は今朝、この夫婦が通報したことで初めて見つかったのだ」

兵士の話を聞いて、ソラは目の前にいる夫婦が置かれている状況を察した。

この家を訪れてずっと疑問に思っていたこと。なぜ兵士二人で、彼らを険しい顔でじつと見ているのかを。

彼らは容疑者として数えられているのだ。現状手がかりが少ない中で、隣接する家に住む人間が疑われるのは当然のこと。通報もアリバイを工作するための可能性だつてある。

つまりこの兵士たちは監視しているのだ。彼らの身の安全を守ることと、身の潔白の証明のために。

（それにしても、発見されたのは朝……か……）

ソラは一瞬トウネリの方に視線を向ける。

彼女に手紙が届いたのは今朝のことだ。つまり手紙が送られたのは、殺害現場が見つかる前——もつと言えば夫婦が殺害される前ということになる。

（トウネリが隠していることつて手紙のことだよ。きつとボクに心配を掛けさせないために）

だが気づいた以上、考えから除外することはできない。

殺害前にトウネリ宛に、しかも彼女が世話になつてゐる老夫婦を装つて手紙を送つたとなれば、犯人の真の目的はトウネリということになる。

加えてギルドに届くように送つたということは、犯人は彼女の身の回りをすでに調査済みのはず。となれば共に行動している者の存在にも気づくはずだ。

(あの手紙はきつとトウネリだけじゃない……ボクにも向けられているんだ)

殺害現場でふと浮かべた、あり得ないとかき消したはずの犯人像が形になつていく。殺害された夫婦の素性。トウネリに送られてきた手紙。そして今聞いた夫婦の証言が、その形を浮き彫りにしていく。

ソラが考えることに気を取られていると、ふと男が二人に問いかけた。二人が事件を調査していると知つた者ならば、誰もが思い浮かべたであろう疑問を。

「すまない。ずっと気になつていたんだが、君たちはまだ子供のはずだ。なのにどうしてこの事件の調査をしているんだい？」

問われて、ソラは少し俯く。

犯人はきつと六年前の事件に関わつた人間だ。そしてその人間はきつと、あの日救い切れなかつた存在——。

そう考えた時、答えはひとつしか浮かばなかつた。

「もしかしたらボクたちは何かを取りこぼしてしまっただと思います。だからその責任を果たさないと」

ソラの言葉に若い夫婦は顔を見合わせた。事情を知らない二人は、その答えに少し困惑している。

一方でソラの答えを聞き、トウネリは察していた。隠していた内容にもう気づいてしまったのだと。事件現場の発見が朝だと分かった以上、彼が気づかないはずがない。

顔を伏せて、トウネリは自分の浅慮さに唇を噛む。結局自分のせいで、彼はどんどん深みに入っていくているのだと。

「並々ならぬ事情があるんだな」

男は物悲しげな顔を見せる。まだまだ成長途中の彼らが一体どれだけの重荷を背負っているのか、想像もできなかった。

「そんな君たちにこんなことを頼むのも申し訳ないのだが、良かったら少し娘の様子を見に行ってくれないか？」

「ちよつとあなた。これは私達が解決すべきことでしょうか？」

「そうだが……見たところ二人とも娘と同一年くらいだし。もしかしたらあの子が一体何を抱えているのか、この二人なら聞けるかもしれないだろう？」

「あの、どうかしたんですか？」

夫婦の反応にソラは小首を傾げて問いかける。すると男は事情を話し始めた。

「実は今朝から娘が部屋に鍵を掛けてずっと出てこないんだ。兵士さんからこの部屋に家族全員でいるよう指示されているのだが」

確認のためにソラが兵士の顔色を伺うと、二人の兵士はそれぞれ顔を逸らしながら小さく頷く。

その反応からソラは、彼らもこの一家を疑うことは本意ではないのだと理解できた。彼らもまた老夫婦の家の時と同様に、事件のせいで疑心暗鬼になっているだけなのだ。それ故に、娘を無理やり連れ出そうとはしなかったのだろう。

「一応娘の部屋の前にも兵士さんが一人警護のために着いてくれているんだ。けどそれだとあまりに申し訳ないのでね。どうにかして娘もこの部屋に來させたいんだ」
「わかりました。それにもしかしたら娘さんも昨晩なにか気づいたかもしれませんし」

頼みを承諾してソラは席から立ち上がる。

「行こっかトウネリ」

「えっ？ あ、うん……」

気のない返事と共に、トウネリも立ち上がった。

その様子を少し心配しながらも、ソラは夫婦に向き直って深々と一礼する。

「お話ありがとうございます。少し娘さんとも話してきます」

「あ、ああ、よろしく頼むよ」

「その……お願いね？」

ソラの行動に戸惑いながらも、夫婦は微かに笑顔を見せた。

部屋を出て、ソラとトウネリは階段を登った。

木で作られた階段は二人の重さを受けて、微かに軋む音を出している。

階段を登りながらトウネリはひとつ深呼吸する。気持ちを切り替えて、今は前進しなければならぬと真つ直ぐ前を見た。

登った先には槍を片手に立つ、茶髪の女性兵士が立っていた。少し退屈そうに天井を見上げていた彼女だったが、気配に気がつくとも態度を一変させて鋭い眼光を注ぐ。

「誰？ あなたたち」

二人の姿を見て女性兵士は問いかける。

「えっと、娘さんに用があつて来ました。彼女の様子はどうですか？」

ソラは少し戸惑いながらも事情を話す。

すると女性兵士は警戒心を解き、呆れた眼差しを扉に向けた。

「別にどうもこうもないわよ。ずっと閉じこもつたまま。時折耳を澄ませると、次は私の番だつて聞こえてくるけどね」

愚痴のように呟きながら、女性兵士は二人の方に向き直る。

「で、あなたたちは何？　この子の友達？」

「わたし達はその——」

トウネリが説明しようとした時、不意に女性兵士は笑みを浮かべた。

「冗談よ。あなた達でしょ？　アルガストが言っていた。王都から送られてきた調査員

“つてき”

「あつ、はい。そうです」

「ふーん。まったく王様は何を考えているのかしらね。こんな子供二人、あの人は反対しなかったのかしら」

「あの人？」

「王都の騎士団を纏めている人。私とアルガストの師匠に当たる人のこと」

話について行けず困惑する二人を見て、女性兵士は深い嘆息とともに項垂れる。

「ごめんなさい。あなた達にこんな話しても仕方ないことだったわね。いいわよ。私はちよつと外の空気を吸ってくるから」

吐き捨てるような物言いで言葉を残すと、女性兵士は懷を弄りながら足早に去っていく。

どこか苛立ちの見えるその背中を見送ってから、ソラとトウネリは困惑した表情のまま顔を見合わせた。

「わたし達何か気に触ることしたの？」

「分かんないけど——」

ソラはすれ違いざまに向けられた眼差しを思い出す。まるで何か恨みでもあるかのような、あるいは蔑むかのような、微かな殺気が込められた黒く淀んだ目を。

「とにかく今はこの部屋にいる子から話を聞かないと」

「それもそうね」

二人の視線は同時に部屋の扉に注がれる。女性兵士が話していた通り耳を澄ませると、確かに「次は私の番だ。私が殺されるんだ」と怯えるような声が微かに聞こえてくる。

ソラは恐る恐るといった仕草で扉を軽く叩いた。

「誰ッ!？」

扉の向こうから息を呑むような少女の声が響く。余程警戒しているのか、すぐ返事が出来なかつたソラに対して「一体誰なの!？」と続けて叫んでいる。

「えっと、君のお父さんとお母さんから頼まれて様子を見に来たんだ。それに話も聞きたいからここを開けてくれると嬉しいんだけど」

言いながらソラは軽くドアノブに手を掛けてみる。確かに鍵が掛けられている感触があった。

「あなた一人だけ？」

しばらくしてから、扉の向こうからひとつ問いかけがあった。

それを聞きソラはトウネリの方に顔を向ける。

すると相手の一言で心中を察していたトウネリは頷いた。

「ごめん、トウネリ」

その場から離れようとするトウネリに、囁き声で謝罪を述べるソラ。

「大丈夫。話は一応ここからでも聞こうと思えば聞こえると思うし。それによくよく考えたらわたし……この子に嫌われてるだろうから」

それに対してトウネリは微かに笑うと、廊下から姿を隠した。

事件のきっかけは自分にある。そうトウネリが自負しているのだと気づきつつも、ソラは再び扉の向こうに声を掛ける。

「うんそうだよ。ボク一人だから安心して？」

「本当？」

「うん。本当だから」

ソラの返事の後またしばらくして、今度はカチャリと開錠の音が鳴った。

慎重な動きで扉が開き、中から茶髪の少女が顔を覗かせる。その揺らぐ瞳から不安がはつきりと見て取れる。

「あなたは……」

少女はソラの顔を見て目を丸くしてまじまじと見つめている。

「あ、えつと……」

この反応を想定出来ていなかったソラは、どう切り返すべきか頭を悩ませた。

もしかしたら彼女は六年前のことがトラウマになっているのかもしれない。それを自分の顔を見たいせいで思い出させてしまったのなら。そう考えていたソラに対して少女の取った行動は、

「そっか。やっぱりあなただっただんだね」

と安心したように微笑むことだった。

「やっぱり?」

「うん。たまたま窓からあなた達が家に入ってくるどころ見てたから」

答えてから少女は廊下を見渡す。「あなた達」と言ったことから、トウネリ存在にも気づいているようである。

しかし彼女の姿が見えないことを言及することなく、少女は「入って」と言つてソラを招き入れた。

少女の部屋の中は質素なものだった。置かれているのは人一人分のベッドと衣装を入れるための棚だけである。机も椅子も無く、ただ寝るための部屋といった様子だ。

ソラが少し部屋を見渡していると、少女は「ここに座って」とベッドに腰掛けて手招きした。

妙な空気にソラは表情を固くしながらも、招かれるままに、少女の右隣に座る。

「それでこの街に何しに来たの？」

唐突な少女の問いかけに、ソラは思わず息を呑む。まるで喉元に刃を突きつけられているような感覚が彼に纏わりつく。

軽く冷や汗を滲ませるソラを見て、少女は肩を落とした。

「ごめんなさい、聞き方が悪かったよね？ えーつと私に何か用かな？」

「あ、えつと……その。昨夜隣の家に住んでいる夫婦が亡くなったのは知ってるよね？」

「うん知ってる。私犯人の顔を見たから」

「そうなんだ。じゃあ何か知って——」

少女の答えを遅れて認識すると、ソラは表情を凍りつかせた。

「見たの？ 犯人の顔を？」

問いかけに少女は小さく頷く。

「パパとママが隣の家の音を聞いたのと同じように、私も当時目を覚まして聞いていたの」

この時少女は何とか表情を取り繕うとしていた。

彼女ははっきりと六年前のことを覚えていた。当時ソラに助けられたことも。だからこそ、あの時のように情けない姿を見せまいと気丈に振る舞おうとしていた。

しかし彼女の顔は徐々に恐怖で歪んでいく。自分が見たものを思い出すに連れて、瞳に絶望を宿して、歯をガチガチと鳴らし始める。

「気になって私、外を見てみたの」

恐怖で飲みそうになるのを必死に抑えて、訴えかけるように言葉を吐き出す。

「忘れるはずもない。だってあの子は……あの子は……っ！」

そして少女は絞り出すような声ではっきりと言った。

「——六年前に殺されたはずの女の子だったから」

第二節 笑顔の理由（わけ） 4

「亡くなった女の子？」

「覚えてるよね？ 六年前のあの日、最初に犠牲になった子のこと」

忘れるはずもない。あの時もう少しの勇気を振り絞っていれば、救えたかもしれない命だったのだから。

そう考えているが故にソラは困惑していた。あの時失われたはずの命、その存在を見たという話をそう易々と信じられるはずもない。況してやそれが事実であるならば、自分が想像した犯人像通りではないかと。

しかし、もし犯人が亡くなったはずの夫婦の娘だとするならば、殺害された女性が満足そうな表情を浮かべていたことの説明がつかない。女性はただ、亡くなったはずの娘の姿を見られて嬉しかったのだらうと。

ソラがなんとも言えぬ表情をしている一方で、少女は話を続けた。

「私ね、あの事件以来あまり深く眠れなくなる時があるの。部屋を真っ暗にすると、あの時のこと思い出しちゃって」

少女は冴えない顔で微笑する。

「六年も経ったからさすがに頻度は落ちてただけで、ここ数日はそれで眠れない日が続いてた。それは昨日も同じだったの」

少女が言うには、眠れない日は音に敏感になるためはつきりと奇妙な声を聞いていたのだという。

はじめは女性の狂気じみた笑い声。その後には聞こえたまだ年端もいかぬ少女が発するような悲鳴。どちらも彼女の両親が聞いた内容と同じだ。

「争ってる音は聞こえなかったから、多分一方的だったんだと思う」

「それで……君は見たんだ？」

ソラの問いかけに少女は頷く。

「音が気になって外を見てみたんだ。そしたら亡くなったはずの女の子が下に立ってて……それで……目が合ったの」

言いながら少女は唇を震わせる。閉じこもっている際に出た「次は自分が殺されるんだ」という言葉も、犯人と目が合った恐怖から来たものだった。

「すごく冷たい目をしてたのを覚えてる。まるで感情がないかのような目をしてた」

少女の顔から血の気が引いていく。目に涙を溜めて、訴えかけるような声で話し始める。

「きつとあの子……私達を恨んでるんだよ。私達が生き残ったから……っ！」

どう切り返すべきかソラは頭を悩ませる。何を言えば少しは安心させられるだろうか。

「大丈夫。兵士さんたちと一緒になんとかするから」

しかし出てきたのは気休め程度の言葉だった。

犯人の居場所がまだ特定できていない以上、これから先また犠牲者が現れる可能性だってある。その犠牲者が彼女ではないという保証はできない。そもそも犯人と目が合ったというのならば、次の犠牲者になる可能性の方が高い。

こんな言葉しか掛けられない自分の不甲斐なさにソラは内心歯噛みする。一時の安心すら与えられないのかと。

「ねえ、どうして?」

不意に少女が問いかけた。

「どうしてあなたはそうやって戦うことができるの? 六年前の時もそう。あの時みんなを助けようと立ち上がったのはあなただけだった」

「それは……」

「私ほんとは気付いてるの。あなた……あの子と一緒に行動してるんでしょ? あのトウネリって子と」

指摘にソラが小さく頷くと、少女は微かに唇を震わせる。

「私ね、事件のことを思い出すといつも一緒にあの子の顔が浮かぶの。そして思っちゃうんだ……あの子がいなかったら私は怖い思いをしなかったんじゃないかって」

少女の言葉は廊下にいるトウネリの耳にまで届いていた。

彼女が隠そうとしても、言葉の節々から滲み出る恐怖。それを感じてトウネリは唇を噛み、拳を強く握る。冷たい何かがトウネリの心に纏わりついていく。

「本当はあの子のせいじゃないって分かっている。だけど思い出すたびにどうしてもそう思っちゃうの……私が眠れない夜を過ごすことも無かったんじゃないか、あの日の記憶が頭に残ることもなかったんじゃないかって……」

少女はソラとトウネリと一緒に部屋の前にいることに気がついていた。気がついていたからこそ、敢えて一人でいるかどうかを聞くことで避けようとしたのだ。恐怖の根源となり得るものを見ないために。

少女はソラに詰め寄るように一歩前に出ると、服を掴んで鬼気迫るような表情で言った。

「ねえ！ どうすれば私もあなたみたいに強くなれるの!?!」

それは恐怖を克服したい一心で飛び出た言葉だった。あの日のことを今でも忘れられず、いつまでも心に癒えない傷を抱えているのが嫌で仕方なかった。

そんな少女に対してソラは、首を微かに横に振った。

「ボクは強くないよ。ただ臆病なだけ……届くはずの手が届かず、目の前で誰かの笑顔が消えるのが怖いだけ」

ソラは言いながら手のひらを見つめる。あの日掴んで離れたくなかった大切なものが、抜け落ちるように消えていく感覚を思い出す。

あんな思いはもうしたくない。あんな思いを目の前にいる誰かにさせたたくない。その思いが今のソラを突き動かしている。

「だからボクは戦うんだ。目の前でもう誰かの笑顔が消えないように」

そして何よりも彼の中に深く根付いているものがある。

「それに約束したから。たくさんの人を笑顔にするって」

「だったら……!」

なにかを言いかけて少女は俯いた。しばしの静寂が部屋を包み込む。

「出てって……」

「えっ?」

「だからもうこの部屋から出てってよ! 話すことはもう話したから!」

突然のことに困惑するソラを他所に、少女は強引に部屋から追い出す。

扉を勢いのままに閉めて鍵を掛けると、少女は膝から崩れ落ちた。恐怖と安心、そして何より自分への失望という緋い交ぜになった感情が溢れ出す。

部屋を追い出されたソラはドアノブに手を伸ばそうとした。

しかしそれではダメだと思い止まった。少女の笑顔もこの街に住む人々の笑顔も――全ての笑顔を取り戻すためには、誰よりも早く犯人の居場所を突き止めなければならないのだと。

「色々教えてくれてありがとう。ボク達行くね?」

遠ざかっていく足音を聞き、少女は歯を強く噛み締める。

「私いま……あの子を利用してしようと……ッ!」

自分の中に潜む醜い感情に気がつき、少女は声を押し殺して泣いていた。



家屋の影に隠れて、女性兵士はひとり葉巻を吹かしていた。

左手には年季の入った木の箱が握られている。その中身は今彼女が嗜んでいる葉巻と、それを吸うために必要な小道具だ。

煙を吐きながら女性兵士は空を見上げた。吐き出した煙は曇天に向かって登っていき、

葉巻を吸いながら彼女は耳を澄ませる。聴覚強化の魔法を使い、遠くの音を聞き分け

ていく。そしてその中からハッキリと聞こえてきた内容に舌打ちを鳴らした。

「なるほどね。やっぱりそういうことか」

聞こえて来たのは少女の声。女性兵士が部屋の外でしばらく警護していた少女のものだ。

少女は言った。犯人を見た。そしてその姿は、六年前の事件で命を落としたはずの女の子だった。

薄々感じていた違和感の正体が分かり、女性兵士の中に苛立ちが募っていく。

そんな折、彼女に近づく男の姿があった。

「お前、またそんなものを吸っているのか」

呆れた様子でやってきたのは、隊長のアルガストだった。

アルガストは、女性兵士が手にしている箱に目をやると肩を竦める。

「いつまでそんな物を持っているつもりだ？」

女性兵士は苛立ちの矛先を向けるかのように、木箱を強く握りしめる。

「別にいいでしょう？ この世にある物を持つてて一体何が悪いって言うのかしら？ それに」

不意に握っていた力を緩めると、女性兵士は木箱を眼前にまで持つていった。彼女の目はどこか哀しげで、何かを思い出しているかのような様子だ。

「彼が気に入っていた物だから……これ……」

女性兵士にとつてこの木箱は、かつての愛人が持っていた大切な形見だった。

未練の象徴であるそれを手放せないことを、アルガストは常に嘆いていた。まるで失ったものを味わうかのように葉巻を吸う彼女の姿は、とても痛々しくいつまでも見ていられるものではない。

上司として、同期として、そしていつかはなつていたかもしれない家族として彼女の身を案じているのだ。

「ゼルレシアス……お前があいつにどれだけの思いを抱いていたかは知っているが――」

「そんなことより、どうやら今回の事件はあなたの読み通りみたいよ?」

嗜めようとするアルガストの言葉を遮り、女性兵士ゼルレシアスは口元に笑みを浮かべる。

「六年前に子供を失った夫婦が殺された。ある人物を誘き寄せるための餌としてね。その人物とは、六年前に起こった魔物事件の犯人の娘。目的はただひとつ……復讐のため」

ゼルレシアスの見解を聞き、アルガストは目を逸らして嘆息する。

「お前、盗み聞きしてるのか」

「当然よ。何せ事件の中心に立たされている子達が話すことだもの。聞き逃すわけにはいかないわ」

逸らした目を戻し、アルガストはゼルレシアスの瞳を見る。

「お前……あの二人を恨んでいるのか？」

瞳の奥底に潜む邪悪を見て、アルガストは問いかける。するとゼルレシアスは即答した。当然でしょ、と。

「逆に聞くけどあなたは一体誰のせいで彼が死んだと思ってるわけ？」

「少なくともあいつらのせいだとは思ってない。あいつらはただ巻き込まれただけだ」

アルガストの答えを、ゼルレシアスは鼻で嘲笑う。

「巻き込まれた？ 違うわ。巻き込まれたのは彼よ。あの二人は事件の歯車の中に最初から組み込まれていたんだもの」

「どうしてそう思うんだ？」

「だってそうじゃなきゃ、あの子たちがまた都合よく巻き込まれることの説明がつかないじゃない？」

ゼルレシアスの答えに、アルガストは呆れ返る。彼女の言っていることはただの想像に過ぎない。怒りの矛先を向けるべき場所が分からず、ただ八つ当たりしているだけだと。

だが彼がそれを言葉として発することはなかった。彼女の心情を理解しているからこそ、その思いを踏み躪るようなことを言えるはずがない。況してや怒りの原因は自分にもあるのだからと。

故にアルガストは肩を竦め、怒りの捌け口となることに徹する。これまでずっとそうしてきたように、ただ彼女の衝動的な言葉を受け止める。

「逆に聞くけど、どうしてあなたはあの子たちを恨まないわけ？ 私と同じように彼を殺された身のくせに、あの子たちを真実からできる限り遠ざけて、自分が犯人を見つかるまでの時間を稼ごうとしてる。はつきり言つて意味が分からないわ」

「当然だろう？ あいつが……弟が命を賭して救った命だ。その命を兄の俺が恨んでどうする？」

アルガストが端的に答えると、ゼルレシアスは不快そうに啞えていた葉巻を地面に吐き落とした。

「ほんとつまらない男。どうして兄弟でここまで差が出たのかしらね」

「悪いな。あいつがお前にどう接していたのかは知らんが、俺はあいつみたいには一生なれねえさ」

苛立ちが頂点に達し、ゼルレシアスは眉間にしわを寄せて強く舌打ちする。

「誰もあなたに彼の代わりなんか求めてないわよ」

高まった苛立ちをぶつけるように吸い殻を踏みつけると、ゼルレシアはその場から足早に立ち去っていく。

すれ違った背中を見送ると、アルガストは吐き捨てられた吸い殻を拾い上げる。まだ微かな煙を吐く吸い殻はまるで、彼女が抱えている怒りを宿しているようだ。

「恨む……か。もし俺が恨んでるとすればそれは——」

立ち上つては消える煙の中にかつての記憶が映し出されると、アルガストはそれを嘆くように夢げな声で呟いた。

第三節 笑顔をかき消す忌まわしき記憶 1

「ありがとうございます」

そう言つて玄関の扉を閉めると、ソラは家を見上げて少女の部屋のあたりに視線を置く。部屋には物憂げな表情で見下ろしている少女の姿があつた。

一方で背後に立つトウネリも、暗い表情で視線を地面に向けている。

二人は言葉を交わさず、しばらくその状態を保った。

「ねえ、あの子が言つていたこと……本当なのかしらね？」

最初に静寂を破つたのはトウネリだった。

トウネリの問いに少し考えると、ソラは顔を下ろして小さく頷く。

「嘘は言つていなかったよ……あの子」

死者の魂が残つた未練から彷徨うという事例は少なくない。鎮魂を目的とした業者もあるほどだ。しかしその彷徨っている魂が人間の命を奪つたという話は聞いたことがなかった。あつても取り憑いた人間の調子を多少悪くしていたという程度だ。

そもそも魂には実体が無く、物に触れることが出来ないときれている。このことに準拠した場合、殺された夫婦には刃物で斬られた痕跡が残つていたことから、犯人が死者

の魂という線は考えにくい。

「もし仮に、仮によ？ 仮にその亡くなった女の子の魂が犯人だったとして、そんな実体もないものどうやって見つけるの？」

トウネリの問いにソラは答えられなかった。

死者の魂は明るいうちに姿を現すことができないとも言われている。かといって夜になると必ず姿を現すというわけでもなく、例え広域に渡る探索魔法を使ったとしても実体の無い彼らを捉えることは出来ない。

そこで専門家である鎮魂業者を頼ることが出来るかと言われると、それも不可能に近いと言えた。ドウエセの街に限らず、ヘルデイロ内にはその業者が存在しない。なにせヘルデイロで経営していくには事例があまりにも少ないからだ。

鎮魂業者が最も盛んなのは、ここから遠く離れた国。通称夜の国——ナハトヴェイルだ。ここは遙か昔に人間から変異した種族“吸血鬼”が住む国であるため、死者の魂が彷徨いやすいのだという。理由としては様々な噂があるが、最もな理由としては彼らが人間を食らって生きているからとされている。

つまり現状その死者の魂が夫婦を殺害した犯人だったとしても、見つける方法はなくすぐに対処することは不可能と言えた。

「とにかく今はできる限り情報を集めないで。まだ犯人がそうだと決まったわけじゃな

いから」

「確かに……そうね」

少女の証言を記憶の片隅に置き、二人は歩き出そうと振り返った。

「なにか収穫はあったかしら？　可愛いお二人さん？」

すると先程出会った女性兵士が二人に声を掛けた。

優しいに微笑み掛ける女性兵士に対し、二人は顔を見合わせる。先程すれ違った際に向けられた憎悪に似た眼差しは気のせいだったのだろうか。

「まだなんとも……」

「あらそう？」

ソラの有耶無耶な返事を聞き、女性兵士は含みのある笑みを浮かべた。

「じゃあ、あなた達にとっておきの情報を教えてあげるわ」

「とっておきの情報？」

情報が足りない今、可能性があるものであればどんな些細なものでも欲しい。そんな思いがソラの態度に表れる。

すると女性兵士はまるでそれを嘲笑うかのような表情を浮かべて言った。

「あなた達がこの街からいなくなれば、事件は丸く収まるかもしれないってこと」

女性兵士の発言にソラとトウネリは息を呑む。

失礼なことを言っていると捉えるのが大半の人間の反応だろう。

しかし二人にとって彼女が放った言葉は、胸を突き刺す刃物以外の何物でもなかった。

調べれば調べるほどに、あの六年前の事件が関係しているのではないかと考えてしまう。あの日巻き起こったが故に、あの日救えなかったが故に、今回の殺人が起こったのではないかと。

二人は何も言い返せなかった。言い返す言葉を持ち合わせているはずもなかった。

女性兵士は二人が俯く様子を鼻で笑うと、また警護していた家の中に入っていく。扉を閉める際、彼女は憎悪の眼差しを二人に向けていた。

「あいつが言ったことはあまり気にするな」

無言で立ち尽くす二人に歩み寄り、遠くから見守っていたアルガストが声を掛ける。

彼の憂いの目は閉められた扉に向いている。

「あいつはゼルレシアス。俺の同期だ。あいつも色々あってな。昔はあんなんじゃないかな。あったんだが——」

「六年前の事件で変わってしまった……ですよね？」

ソラの指摘にアルガストは肩を竦める。

「察しがいいな」

「何があつたんですか？」

トウネリは問いかける。

知りたかつた。何故彼女があんなにも自分たちに憎悪を向けているのかを。大体の理由は想像出来ているが、それでもはつきりとさせたかつた。

二人の思いを汲み取り、アルガストは視線を曇天の空に向けて話し始めた。遠くから微かな雷鳴が聞こえている。

「六年前の魔物騒動で、犠牲になつた兵士が二人いたのは知つてるか？」

二人は鮮明に覚えている。突如現れた魔物になす術もなく、食われて命を落とした兵士たちのことを。

「はい……目の前で見てましたから……」

「そうか。その犠牲になつた兵士のうちの一人が、あいつの恋人だつた」

二人は唇を噛む。薄々勘づいていたことだ。あの女性もなにか大切なものを失つたのだらうと。

「そしてその恋人は……俺の弟だつた」

思いも寄らぬ事実には、二人は目を見開く。哀愁漂う彼の表情が事実であると証明していた。

「俺たちはまるで本当の兄妹のように毎日一緒だつた。大人になつて俺と弟が兵士にな

ると聞いた時も、あいつは俺たちの後について兵士になるって言ってた。二人して反対したんだが、あいつ知らぬ間に頑固な性格になりやがって、結局そのまま押し切って同じ時期に訓練兵になった」

気づけばアルガストは思い出を二人に語り始めていた。本来彼らに話すべきことではないのかもしれない。そう考えながらも、彼は優しい口調で話を続けていく。

「いつ頃からだったか……弟とあいつはいつの間にか恋仲になっていた。将来を誓いあつて、いつか二人の間に子供が出来たらいい。なんてことを話してることもあった。そんなあいつらの幸せを、俺はただ願うことしかしなかった」

アルガストは手のひらを見つめる。まるでそこにあつた物が突然消えてしまったかのように、寂しげに。

「六年前のあの事件の日、俺も笛の音に操られていた。意識だけが真つ暗闇の世界に囚われるような感覚。洗脳から解放されても、俺はその恐怖で動くことも出来なかった。外で魔物騒動が起こっても、俺は戦おうともせずただ片隅で膝を抱えていたのさ。笑いのどころ？」

自嘲気味に笑うアルガストに対し、二人は返す言葉が浮かばなかった。

彼の感じた恐怖は正常なものだ。平穏な日常が突如脅かされて恐怖を感じない者などそういない。

しかしアルガストにとってその時感じた恐怖は、ただの恥でしかなかった。己はこの街に住む人々を守るために兵士になったはずだ。だというのにその覚悟もまるで足りず、恐怖で足が竦み、大切な弟の命を失うという結末に至ってしまったのだと。

「あの時の俺は弱かった。だからせめてもの罪滅ぼしのために俺は一度王都に戻り、王都直属の騎士の中で最も手練れだった人に弟子入りを頼んだ。そしたらどういわけかゼルレシアスの奴もついて来てな。そして今は俺の部下の一人として一緒にいる」

誰にも明かさなかつた積もり積もつた感情をさらけ出す。彼もまた感情の捌け口を探していたのだ。

それがよりによって何故、この二人の子供なのだろうか。微かな違和感を覚えつつも、アルガストは話すことをやめない。

「長い間家族のように一緒にいたつてのに、弟というひとつの繋がりを無くした瞬間、俺たちの関係は一気に不安定なものになった。俺はあいつが怖い。あいつとどう接したらいいのか俺には分からない。少しでも触れたら、その瞬間すべての関係が崩れるような気がしてな」

ソラとトウネリは無言で話を聞いていた。慰めの言葉もこうしたらいいという提案の言葉も浮かばない。ただ一心にこう思っていた。この人もまた、あの六年前の事件で人生を狂わされた一人なのだ。

何も言わず俯く二人の様子を見て、アルガストは肩を竦める。

「すまない。こんな話をお前らにしても仕方がないことだったな」

我ながらズルい物言いだとアルガストは笑う。もしかすると心の奥底に、彼らに対する微かな恨みを飼っているのかもしれないと。

「お前らは俺の弟が守ろうとした命だ。だからもう今回の件には関わらないでくれ。お前らにもし何かあつたら、死んだ弟に顔向け出来ないからな」

言い残すだけ言い残して、アルガストはその場から立ち去ろうと踵を返した。

「嫌です……」

その時不意に聞こえた言葉にアルガストは足を止める。

振り返るとソラと目が合った。どんなに揺らしても崩れることのない固い意志が宿る目と。

「だったら尚更ボクは……今回の事件から逃げるわけにはいきません。ボクはあの日約束しました。沢山の人を笑顔にするって。そして今この街には……ボクの目の前には心の底から笑顔になれない人たちがいる。そんな時にボクがすることは一つしかない」

ソラは拳を握る。すでに決めた覚悟を今更覆すはずもない。目の前に悲しく辛い過去を抱えた人がいるのであれば、尚更引けるはずもない。それは約束に、己の意思に反することだ。

「事件がきつかけの一つに過ぎないのだとしても、目を背けるわけにはいかないんです」
ソラは一步前に詰め寄る。

「あなたが意図的に情報を隠していたことは薄々気づいてました。さつきボク達が聞いた話をあなた達が知らないはずがない。これまで集めた情報だつてあるはずです。それを明かささないのは、ボク達が信用されてないからだとずつと思つてました」
でも、と続けてソラはさらに一步前に入る。

その気迫に押されて一步後ろに退こうとした時、アルガストは気がついた。

(ああ、そうか……俺はまた……)

また逃げるのか。今度は「何も守れないかもしれない」という恐怖から、目の前の守ろうと覚悟したのから逃げるのか。

アルガストは踏み止まる。微かな笑みを浮かべて、真つ直ぐにソラの思いを受け止める。

「もしそうでないのなら教えてください。あなた達が知り得た情報を全て」

トウネリも顔を上げた。ソラと同じように真つ直ぐな目でアルガストを見ている。

「わたしも……わたしだつて逃げたくない。わたしにはその責任があるから」

二人のことをただの子供だとアルガストは考えていた。まだか弱く、危険から遠ざけて守らなければならない子供だと。

しかしその見解は誤りだったと理解した。彼らにだつて辛いことから目を背けたい気持ちはあるだろう。それでも二人は一度決めたことから逃げようとせず、ひたすらに前を向いて進もうとしている。それがどんな歪な形であれ、前に進もうと齒を食いしばっているのだ。

それはもうか弱い子供の姿ではなく、立派なひとりの大人の——ひとりの強い人間の姿だった。

「そうだな……お前達は最初から相応の覚悟でここに来てたからな」

己の覚悟の足りなさを笑いながら、アルガストは空を見上げる。分厚い雲の隙間から微かな日差しが見える。

「分かった。俺たちが知っている情報をすべて話そう」

アルガストがそう口にした時、遠くの道端に落ちていた吸殻の灰が、柔らかな風に吹かれて消えた。



少女の部屋の前でゼルレシアスは親指の爪を噛んで立っていた。彼女の耳には家の外で話すアルガストの声が響いている。

詳らかな彼の心情を聞き、ゼルレシアスは舌打ちを鳴らす。明らかな苛立ちが彼女の表情に出ている。

深いため息を吐き、懐から葉巻の入った箱を取り出す。箱を強く握りしめ、怒りの籠った目で見つめたまま彼女は「ふぎけないですよ」と呟く。

衝動的に箱を叩きつけようとゼルレシアスは振りかぶった。が、すぐに動きは止まり、大事そうに葉巻の入った箱を抱き締める。

「私は……私はただ……」

蚊の鳴くような声でゼルレシアスは呟く。その目には微かな涙が浮き出ている。

捨て切れない何かを抱えたまま、彼女の膝が崩れ落ちそうになった時だった。

肩に何かが触れる。懐かしさと同時に背筋が凍るような感覚に、ゼルレシアスは慌てて振り返る。

背後には何もない。あるのはただの壁だ。

「気のせい……か……」

嫌な汗が彼女の額に滲み出る。嫌に覚えのある感触だったと生唾を飲み込む。

「ゼルレシアス」

不意に名を呼ぶ声が聞こえ、ゼルレシアスはまた慌てて声のした方向を見た。

「どうした？ 顔色が悪いぞ？」

そこにいたのは、下の階にいた兵士のうちの一人だった。

「別に問題ないわ。それより何かあったの?」

ゼルレシアスは平静を装い、葉巻の箱を懐にしまった。心臓が異様に高鳴っているのを感じている。

「いや、女の子の様子はどうだと思つてな」

言われてゼルレシアスは扉の方を見つめる。先刻とは違い震えるような声が聞こえない。おそらく錯乱状態から少し落ち着いたのだろう。

「さっきの子たちのおかげで少し落ち着いたみたいね」

「そうか。何かあったのかは知らんが、酷い怯えようだったからな。心配していたんだ」

「安心しなさい。何かあつても私が——」

ふとゼルレシアスは異変を感じた。

確かに声はしない。それは落ち着いたからだと判断した。だが部屋の中から人の気配さえ無いのはどういふことか。

先程の悪寒といい何か嫌な予感がする。

「一応、ちよつと部屋の中覗いてみるわ」

「鍵は開いてるのか?」

兵士の問いかけにゼルレシアスは考える。先程人を招き入れたのだ。開いている可

能性はある。

ドアノブを軽く捻ると、鍵が掛かっている感触は無かった。

「ごめんなさい、ちよつと失礼するわね?」

念のため断りを入れて、ゼルレシアスは恐る恐る扉を開いた。

開いて、息を呑んだ。

「なんでよ? どういうことよ?」

あるはずの少女の姿がそこには無かった。

「おい、あの子ども行ったんだ?」

ゼルレシアスは思考を巡らせる。

ここに戻ってくる際、少女とのすれ違いはなかった。部屋の窓も開いていない。仮に窓を開いて外に出たとしても、開いた時点で下にいるアルガスト達が気づくはずだ。

——可哀想なゼルレシアス……本当に可哀想だよ君は……”

突然聞き覚えのある男の声が、ゼルレシアスの耳奥を刺激した。

「ひっ……!!?」

堪らずゼルレシアスは短い悲鳴を上げる。

「お、おい。どうした?」

隣にいた兵士が彼女の異変に顔を覗き込んだ。先程よりもさらに青ざめた顔をして

いる。

「な、なんでもないわ。それよりあなたはあの子の姿を見た？」

「いや見ていない。部屋から移動したのか？」

ゼルレシアスは慌てて二階にある部屋をすべて隈なく探した。しかしどこにも少女の姿は見当たらない。まるで元からそこにいなかったかのように忽然と姿を消したのだ。

「何かあつたんですか？」

慌ただしい音を聞きつけて、下にいた母親が二階に上がってきた。

「それが娘さんが姿を消しまして」

「えっ!？」

兵士の説明に目を剥くと、母親は少女の部屋を見る。確かに彼女の目から見ても、娘の姿はどこにも無かった。

「どういうことですか! どうしてあの子が!」

母親は動揺してゼルレシアスの肩を掴む。

騒ぎを聞きつけて、下にいた他の兵士と父親も上がってくる。

「あなた! あの子がいなくなったの!」

夫の姿を見て、母親は泣きつくように叫ぶ。

夫もそれを聞くや否や、二階の部屋全てを開けてゼルレシアスと同じように探した。
(くそ……私がちゃんと見てなかったせいで……!)

騒然とする状況にゼルレシアスの心が掻き乱される。一瞬だけ感じた聞き覚えのあの声と感触が彼女の動揺を誘っていた。

「どういふことだ!　なぜあの子がいなくなつたんだ!」

「待つて……」

ふと何かを思い出したように母親が呟く。

「そうだ……思い出したわ」

「思い出したって何をだ?」

「何つてさつき来てた茶髪の女の子よ!　あの子確か六年前に魔物騒動を起こした犯人の娘だつたはずよ!」

「お前いきなり何を言つて——」

「だからあの子が私たちの娘を攫つたのよ!　六年前の時と同じように!」

半ば錯乱状態に陥っている母親の発言を聞き、ゼルレシアスは奥歯を噛んだ。

「兵士さん!　急いでさつきの女の子たちを捕まえて!」

「奥さん少し落ち着いてください。お気持ちは分かりますがあの二人は——」

「けどあの子たち以外に誰が!」

兵士が宥めようとするも、母親の勢いが増すばかりだ。

そんな折にゼルレシアスが口を開いた。

「少なくとも私が証明出来るわ。あの二人は何もしてないってね」

彼女の一言に場が一瞬静まり返った。

「証明って……大体あなたがしつかり見てなかったから！」

「その点については謝罪するわ。完全に私の落ち度よ。けど今ここで騒いでいてもあの子が見つかからない一方よ」

「それは……！」

どの口がと言いたげだが、母親はゼルレシアスの指摘に押し黙る。

その様子を見て微かに安堵すると、ゼルレシアスは他の兵士たちに顔を向けた。

「急いでアルガストにこの事を報告して頂戴。それと念のために他の子供たちが攫われてないかの確認もしなさい！」

「分かった！」

慌てて駆け出す兵士たちの後を追って、ゼルレシアスもその場を移動しようとする。その際。

“——可哀想なゼルレシアス……兄さんに振り向いても貰えない可哀想なゼルレシアス……”

また耳の奥で聞き覚えのある声が響いた。

ゼルレシアスは唇を噛み締めて、震える手のひらを強く握りしめる。

「黙りなさい……亡霊のくせに私に纏わりつくな……！」

怒りと恐怖が入り混じった微かな声で呟くと、ゼルレシアスは逃げるような速い足取りでその場を後にする。

この時部屋の扉の影に、不敵な笑みを浮かべる男の姿があつたことに誰も気づくことはなかつた。

第三節 笑顔をかき消す忌まわしき記憶 2

ドウエセの兵舎には集会を開くための部屋があつた。有事の際はこの部屋に集まり、隊長他各位が対応のために会議を開くことになつてゐる。

この部屋に隊長であるアルガスト。小隊を率いるゼルレシアスとロトウス他三名が険しい顔つきで立つてゐる。

ソラとトウネリも彼らに同席し、どちらも表情を見せないように俯いてゐた。

「まずは状況を確認する」

中央の卓に集まつた者たちを見渡しながら、アルガストは言う。

「子供の大半がこの街から消えた。間違いないな？」

今からほんの数刻前、一人の少女が突如行方不明になつた。どこを探しても見当たらず、街に住む誰一人としてその姿を見た者はいなかつた。

だが事態はそれだけに止まらず、より深刻なものになつてゐた。

その少女以外にも行方不明になつた者が現れたのだ。それも一人や二人ではない。この街に住んでいる子供の大半が行方知れずとなつたのだ。

当然街は騒然となつた。嘆く者や恐怖する者。中にはヘルデイロ人の多くが信奉し

ている賢者イヴェルテラの名を口にして祈る者もいた。

その中でも多くの者が口々にこう言った。まるで六年前の事件の再現のようだ。

「はい。間違いありません」

集まった小隊長を代表して、ロトウスが一步前に出て報告する。

「消えた子供の数は六名。そして——」

何かを言いかけて、ロトウスの視線が一瞬ソラとトウネリに向けられた。どちらもまだ俯いたまま、顔を上げようとするとする気配もない。

「そして彼らの過去を調べた結果、その全員が六年前の事件を経験していました」

やはりか、とアルガストは軽く舌打ちを鳴らす。報告を受ける前から薄々予想はできていたことだ。

殺害被害にあつた夫婦は六年前の事件で愛する子供を失っていた。

その夫婦が暮らす隣に住んでいた少女も、六年前の事件で被害を受けた者であり、突然姿を消した。

そして消えた他の子供も当時の被害にあつた者たちだった。

ここまで出揃えば、もはや今回の事件はあの日の延長線上にあると言つても過言ではないだろう。

「六年前……ねえ……」

腕を組みながらレルレシアスが呟く。

「事件当時被害を受けた子供の記録は残されています。そのため先ほど王都に伝令を飛ばし、移住者の中で他に行方不明になった者がいないか至急調査するように嘆願しました」

「確かにそれがいいだろうな。国外までとなると時間がかかるだろうが、王都内であればすぐに分かるはずだ」

「それと一緒にいた親御さんたちの証言ですが、どうやら彼らは目を離れた一瞬の時間に消えてしまったようです」

アルガストは口元に手を添えて思考を巡らせた。

まず誰にも悟られずに一瞬にして人を消す方法となると限られてくる。

最も有力なのは転移魔法だ。標的としてい人物を魔法陣に乗せてしまえば容易い。

だが現場にはその痕跡が何も残されていなかった。転移魔法の陣は発動した直後もその場に残される。また魔法の性質上必ず起こる現象 “強い発光” もなかったという証言もあった。

他にも方法は挙げられるが、そのどれもが転移魔法以上に手間や規模が大きい。近くに他の人間がいる以上、考えから除外されて然るべきものばかりだ。

「これまで見えていたのは幻影か何かで、最初から姿を消して——」

「それは……違うと思います」

アルガストの考察を遮るように、ソラは口を開いた。

「ボクはあの子に触れられました。実体はあった。だから」

「幻影という線もない……か……」

アルガストの言葉にソラは小さく頷く。

ソラも出来る限り方法を考えていた。アルガスト同様持つている知識で紐解いて行くこうとするが、彼の蓄えられた知識を以てしても答えは見つからない。

アルガストの言う様に最初から幻影だったという線も考えた。

幻影魔法にもいくつか種類がある。人に蜃気楼のような形で見せるものや、自分の影の一部を切り取って人の形と成すもの。だがどの幻影魔法も実体が存在しないため、触れれば正体が分かってしまう。

少女に服を掴まれたときに確かな感触があった。ともなれば実体のある人間であったことに間違いはない。

では他に何か可能性はないかと考えた時、不意にソラの脳裏に少女の証言が過った。

自分は犯人と思しき少女と目があつた。そう彼女は言ったのだ。

(もしかしたら……あの子以外が連れ去られていた可能性も——)

少女に実体があつたのは、犯人がまだ利用できるかと踏んで見逃していたからではない

か。そんな考えをソラは浮かべる。

あの少女以外が幻影であつたならば、他の者も忽然と消えることに納得ができる。同時に全員を移動させる必要はなく、少女だけをなんらかの方法で連れ去ればいい。

ソラが考えあぐねていた時、腕を組んで静かに佇んでいたゼルレシアスが口を開いた。

「犯人がどうやって連れ去つたかなんて今はどうでもいいでしょう？ そんなことよりも消えた子たちが今どこでどうしているかが重要よ」

彼女の指摘は最もだ。どんな手段であれ既に実行されてしまつては、足取りを掴むことなど困難。今は一刻も早く見つけ出し、救出する方法を探さなければならない。

「だが、犯人は一体なんのために連れ去る必要があつたんだ？」

兵士の一人が疑問を投げかける。

「そんなの決まつてるじゃない」

疑問に対し、ゼルレシアスは鼻で笑つて答えた。

「見せしめのためよ」

「見せしめ？ まさか後手に回っている我々に対して——」

「いいえ違うわ」

嫌な笑みを浮かべて、ゼルレシアスは鋭い視線を目の前の一点に向ける。それに釣ら

れて他の兵士たちも視線の後を追う。

誰に向けての発言か察したアルガストとロトウスも同じ方向に顔を向けた。

「ねえ？　そこですつと下を向いているお嬢さん？」

ゼルレシアスの言葉にトウネリの肩が微かに震える。

声と視線を一身に受けて、トウネリはゆつくりと顔を上げた。

「六年前と言い、今回の事件も全部あなたが絡んでるんじゃないの？」

「それは——」

否定できないトウネリ。隣に立つソラもどう切り返せばいいのか分からなかった。

黙り込む二人に対し、アルガストが助け舟を出そうと口を開く。

「おいゼルレシアス。根拠もないことを言うな」

「根拠ならあるわよ。そもそもどうして街を出て行つたはずのこの子が今この街にいる

わけ？」

「言つたはずだ。王が直々に彼らに命令を出して派遣されたのだと」

「そこよ。そこがおかしいのよ」

そう言つてゼルレシアスは二人に歩み寄る。

「そもそも事件があつたことはまだ報告していない段階だったのに、王からの勅令が届いた。これって普通に考えておかしくないことじゃない？」

そこを指摘されれば返す言葉もない。アルガストは軽い舌打ちの後に口を噤んだ。その様子を見てゼルレシアスは笑みを浮かべながら言葉の圧に拍車をかけていく。「これって要は、この子達がなんらかの方法で事件があったことを知っていなければならぬじゃない？」

「確かに……そうだな……」

兵士の一人が賛同を呟く。

「ねえお嬢さん？ そろそろ教えてくれないんじゃないかしら？ あなたがここへ来た目的を……」

追求の手を緩めることなく、ゼルレシアスはトウネリの方へと歩み出す。

まるでトウネリが犯人であるかのような物言いに、ソラの眉が微かに動いた。

そこへロトウスが宥めようと行く手を阻む。

「今は彼女を責め立てる時ではないはずです。落ち着いてくださいゼルレシアスさん」
しかしゼルレシアスが止まることはなく、ロトウスを押し退けた。

「残念だけどこれは大事なことなのよ。犯人の目的を見つけるためにもね」

「犯人の目的？ 彼女を責め立てればそれが分かるっていうんですか？」

「ええそうよ」

ロトウスが訝しむのに対して、ゼルレシアスはあたかも確信しているかのように断言

する。

トウネリは一体彼女が何を聞こうとしているのか察していた。ソラにさえまだ口に出していないこと。老夫婦を装って送られてきた手紙のことだ。

「ねえお嬢さん？ 隣にいる子にもまだ話していないようなことがあるのでしょうか？」
「どうして……それを……？」

なぜまだ出会って間もないはずのゼルレシアスが知っているのか理解できず、トウネリは声を震わせる。

「そんなの考えれば分かることよ。あなた達が王に願い出たことで派遣されたって話を聞いた。てことはなんらかの方法で事件のことを知らなければ、そんな行動は起こせないわよね？」

トウネリの目の前まで顔を接近させて、ゼルレシアスは瞳の中を覗き込むようにして見つめた。

まるですべてを見透かすかのような目に、トウネリは思わず顔を逸らす。

「答えなさい。あなたがどうやって今回の事件のことを知ることができたのか？」

「それは——」

トウネリは生唾を飲み込み、隠しきれない動揺から声を震わせた。

「さあ、早く」

異様な緊迫感が部屋中を包み込む。トウネリに視線が集まり、彼女の答えを待つかのような状況だ。

トウネリは俯く。そもそも隠そうとすること自体が愚かな行為だった。隠したところで事態が良くなることもない。むしろ悪化を辿っているばかりだ。

「そうやって俯いても何も始まらないわよ?」

ソラを不安にさせないために、そして何よりこれは自分の責任なのだからと黙っていた。

否、本当は違う。自分の責任だと言って黙り込む一方で、周囲から責められるのを怖がっただけだ。本来背負うべき責任から目を背けただけだ。

トウネリの揺らいでいた決心が固くなる。震える手を握り締めて面を上げる。

「わかりました。話します。どうしてわたしたちが今回の事件のためにこの街を訪れたのかを」

「トウネリ……いいの? 辛いなら、代わりにボクが話すよ?」

心配した表情でソラが覗き込む。するとトウネリは笑って「大丈夫」と答えた。

「心配してくれてありがとう。でもこれはわたしが負うべき責任だから」

辛い気持ちはある。だがそれ以上にトウネリは、目の前のことから目を逸らそうとする自分の弱さが何よりも嫌だった。

「今日の朝のことです。わたしの下に一通の手紙が届きました。差出人はこの街に住んでいる、わたしがよくお世話になっていた老夫婦からでした。内容は今回亡くなった夫婦が殺害されたというもの」

「待ってください。事件現場が発見されたのも今朝のことです。住民が知ったのはその後です。それだとあまりにも早すぎます」

トウネリの説明を聞き、あり得ないとロトウスが口を挟む。

「はい。わたしも現場発見の時刻を聞いて同じことを思いました。そしてもう一つあることが分かったんです」

「へえ、何が分かったのかしら？」

ゼルレシアスは腕を組み、口元を歪ませる。おおよその見当がついていた彼女も、その先を本人の口から聞きたかったのだ。

「どうやらわたしに送られてきた手紙は、別の人間が書いたものだったみたいなんです」
トウネリの一言に一部がざわつく中、アルガストは「やはりか」と肩を竦める。

「わたしは……この手紙は今回の事件を巻き起こした犯人が送り付けたものだと思つて
います」

「ですがなんのために？」

「先ほどゼルレシアスさんが言いました。見せつけのためだと。この中にはもうすでに

知っている人もいますが、わたしは六年前に起こった魔物事件を引き起こした男——その娘です」

一拍置いてトゥネリは周囲を見渡す。そこでようやく気付いたことだが、集まった小隊長の中に先刻言い争った兵士のうちの一人がいた。

彼も事情を多少知っているが故に、苦虫を噛み潰すような表情でトゥネリのことを見ている。

「犯人はわたしへの復讐のために今回の事件を起こした。そうわたしは考えています」

「けどあの事件は君が悪いわけでは……」

「そうとも限らないわ。中にはこの子に強い恨みを持った人間だっているはずよ」

ロトウスの擁護を遮り、ゼルレシアスはトゥネリを見下ろす。蔑みの眼差しが彼女を突き刺している。

しかし臆することなくトゥネリは見上げたまま真つすぐにゼルレシアスを捉えている。彼女の思いを受け入れるために。

「けどこれではつきりとしたわ。今回の事件を解決する鍵はこの子が握っているってことかね」

「一体なにを考えてるんですか、あなたは……?」

「決まってるじゃない。この子を囮にするのよ」

ロトウスの問いかけに、ゼルレシアスは平然とした表情で言う。

「ちよつと待つてください！ 彼女はただ——」

これには流石のソラも黙っていられず、目を剥いて抗議しようとする。が、これをトウネリが目配せで制止した。

「わたしもゼルレシアスさんの意見に賛成です」

もうこれ以上事件を悪化させるわけにはいかない。すべて後手に回っているのであれば、次の一手はこちらから打って出る他に方法などない。

そうトウネリは考えていた。今の状況を変えるだけでなく、己の責任を果たすために必要なことだと。

その考えをソラも理解していた。現状では何も変わらない。それどころかこのままではいつまで経つても犯人にたどり着くことはない。

「そうは言うが、何か策でもあるのか？ 考えなしに実行できるものでもないだろう？」
アルガストの問いに対し、真っ先に答えたのはゼルレシアスだった。

「考えなら私にあるわ。この子を囿にすることで初めて成り立つ、とっておきの方法がね」

そう言ってゼルレシアスは自分が考えた方法を話し始める。

その内容を聞いて、アルガストは軽く舌打ちを鳴らした。

「確かにそれなら一つの手段として成り立つかもしれないが……」

「ですがそれはあまりに危険すぎます！」

ロトウスが大声で警鐘を鳴らす。が、ゼルレシアスは澄ました顔で問いかけた。

「じゃあ他にいい方法があるのかしら？」

「それは……けど……そんな方法を取らなくても何か他にあるはずですよ」

「確かにそうですね。時間があるなら私もその意見に賛成するわ。でも今は悠長に構えていられる状況じゃない。今日中にも犯人を捕まえられなかったらまた犠牲者が出るわ。それでもいいのかしら？」

返す言葉が浮かばず、ロトウスは口を噤む。

その様子を見て満足したように鼻を鳴らすと、ゼルレシアスはトウネリの方に視線を移した。

「あなたはどうかしら？」

「わたしはこの方法で大丈夫ですよ」

トウネリは頷いて答える。

「そう。じゃあ、あなたはどうかしら？」

今度はソラに視線を移して問いかける。

「ボクは——」

確かにゼルレシアスが考えた方法は、現状最も効果的と言える。しかしその反面トウネリに多くの危険が及んでしまうものだ。

彼女は思っている。自分のせいでここまでの大事になっているのであれば、この身を犠牲にしても解決する責任があるのだと。

その考えを理解できているからこそ、ソラは複雑な思いを抱いていた。彼女はまた負う必要のない責任まで一人で背負おうとしている。そんな彼女に対して自分はどうするべきかと。

「ソラお願い。やらせて」

不意に声を掛けられて、ソラはトウネリの顔を見つめる。

ついこの間も彼女は同じ表情を見せていた。自分を信じてほしいという一心で、真っ直ぐに相手の目を見る様を。

「わかった。何かあつたらすぐに駆け付けるから」

ならばとソラは静かに決意する。

何があつても必ず守る。それはトウネリの命だけではない。ここにいる者たちの命も、消えてしまった子供たちの命も、これから出会うであろう犯人の命さえも。そして失われた笑顔を取り戻すのだと。

「こう言っているけど、アルガストはいいかしら？」

「仕方ない。現状他に打つ手はないからな」

アルガストは半ば諦めたように答える。事実他に方法といえるほどのものは思い浮かばない。事が大きく動いてしまった以上、ゼルレシアスの言う通り呑気にしている場合ではない。

「それじゃあ決まりね。号令よろしく。隊長さん？」

少し嫌味な口調で言うと、ゼルレシアスはその場を離れる。

それを見てアルガストは肩を竦めると、周囲を見渡して言った。

「作戦の決行は今夜だ。ロトウス、お前は他の小隊と分担して街の中を巡回、ならびに住民たちに今一度外出しないよう伝達してくれ。巡回しながら引き続き消えた子供たちの搜索をするんだ」

「……わかりました」

まだ何か言いたげな表情を見せながらも、ロトウスは軽く頷いてから部屋を出ていく。その後が続いて他の小隊長たちも部屋を出て行った。

「ゼルレシアス、そしてトウネリ。お前たちは今回の作戦の要だ。決行の時間まで休息をとっておけ」

「言われなくてもそのつもりよ。なにがあるか分からないものね」

ゼルレシアスはその答えると、胸元に手を当てて強く握りしめる。

今にして気がついたことだが、彼女は本来兵士が身に纏うはずの甲冑を着ていなかった。アルガストやロトウス、ほかの兵士たちは今も纏っている防具を身に着けていないのだ。それを見てソラは、飄々としている彼女の裏に隠された何かを見たような気がしていた。

そうとは気が付くことなく、ゼルレシアスは胸元に手を当てたまま部屋を出ていく。まるで孤独を背負っているような背中を見て、トウネリは目を細める。

「ねえ、ソラ。今からわたしの家に行かない？」

「トウネリの家に？」

「うん。気にしてるんでしょ？ わたしの家が……あの家にあつた地下が今どうなっているのか」

問われてソラは微かに頷く。

犯人の潜伏先として真っ先に浮かんだのが、あの事件の際に使われたトウネリの家にあつた地下の部屋だった。しかしそれは当事者であつたトウネリも同じようにたどりに着くこと。話題に上がらなかつたことと彼女の心の傷に触れないよう、敢えて聞かないようにしていた。

それを突然どうして。今のソラにはトウネリが考えていることが分からなかつた。

「じゃあ行きましょ」

そそくさとその場から逃げるような足取りでトウネリは部屋を出ていく。

その後を追いかけるように、ソラも部屋から出て行った。

二人の様子を静かに見守っていたアルガストは、部屋に一人残されると深いため息を吐く。

部屋に設けられた椅子のうちのひとつに腰かけると、背もたれに背中を預けながら天井を見上げた。

「なあ、俺はどうしたらいいと思う？」

アルガストは虚空に問いかける。

ゼルレシアスが胸元に手を当てた際、誰にも聞こえないような微かな声を発したのを彼は聞き逃さなかった。「これでようやく……」と呟いていたことを。

その意と今回の作戦の真の目的を理解して、アルガストは自分がどう立ち回るべきか考えていた。

幼き頃、三人で楽しくはしゃいでいた時の記憶がアルガストの脳裏に呼び起こされる。

「兄貴のくせに……お前がいなくて何もできないなんて情けないよな」

アルガストはそう物憂げに言うと、ゆっくりと瞼を閉ざした。

第三節 笑顔をかき消す忌まわしき記憶 3

ソラは唾然と立ち尽くす。

彼の眼前にあるのはひとつの大岩だ。住宅街から少し離れた場所にあるそれは、まるで元からそこに置かれていたかのような存在感がある。

周辺を見渡すと、近隣の住居はこの大岩を避けるようにして建てられているのが見て取れる。

トウネリに案内されてここまでやってきたが、これは一体。そう疑問に感じたのも束の間、ソラは姿勢を低くして右手で地面に触れた。

瞼を閉じて、右手に集中させた魔力をゆつくりと地面に流し込む。すると彼の脳内に地中の映像が映し出された。

「これは……っ」

思わず息を呑む。

ソラが魔法で見たのは、六年前に見たことのある地下の空間——ではなく、地下を埋め尽くさんばかりの土砂だった。

「まやか(っ)……」

「うん、そう。ここはわたしの家があった場所よ」

ソラは臉を開けて立ち上がる。

記憶に間違いがなければ、ここにトウネリの家があったはずだ。しかし今日の前にはその影さえもなくなっている。

再び啞然とするソラを横目に、トウネリは話し始めた。

「あの事件から五日ほど経った後に取り壊されたの。それまではこの兵士たちが事件の調査のために立ち入っていたけど、ある時住民から苦情が出たみたい。事件のことを思い出すから壊してくれてね」

トウネリは大岩に近づくと、撫でるように岩肌に触れる。

「あれだけのことがあったんだから当然よね」

「でも……こんなの……」

あんまりだ。そう言おうとして、ソラは閉口する。当時街に住んでいた人たちのことを考えれば、無責任なことを口にできるはずもなかった。

「別に気にしてないよ。ママとの思い出の場所が無くなったのは寂しいけど、それ以上にここはわたしにとって……苦い記憶ばかり思い出させるから」

トウネリは六年前のような儂げな声音で呟く。

「わたしもね、犯人が潜伏している場所って考えた時、真っ先にここが思い浮かんだ。こ

こなら誰も近寄らないし、隠れるのにはうってつけだから」

「でもここには——」

「そう。ここにはもうどこにも人が住める場所はない。地下の部屋も運び込まれた大量の土砂とこの岩によって封鎖されているから」

地下には多少の隙間はあれど、トウネリの言う通り人が居座れるような空間は存在しない。つまり犯人が潜伏先として扱えるはずもないということだ。

そう納得はできても、ソラは快く受け止めることができなかった。

「さてと、戻りましょう。犯人がここにいないと確認できた以上、もうここに用はないから」

「あ、うん……そう、だね……」

トウネリは少し名残惜しそうに大岩を見つめた後、足早に歩き始める。

一方ソラは大岩を見つめて、かつてここにあったはずのものを思い浮かべる。トウネリが過ごした時間、そこにある彼女の笑顔。

「ねえ……トウネリ?」

ソラに呼ばれトウネリは足を止める。

「ボクが言えたことじゃないかもしれないけどさ、あまりなんでも一人で抱え込まないでね? ボク、力になるから」

トウネリは振り替えり、ソラの顔に視線を向ける。真つすぐで優しい瞳に引き込まれていく。

しばしの静寂が二人の間に流れた。

「バカね。あなたはもう十分すぎるくらいに、わたしの力になってくれるわよ」

トウネリはそう言つて笑うと、踵を返す。唇を固く結び、微かな涙を瞳に溜めて再び歩き始める。

その寂しげな背中を見つめて、ソラは表情を暗くした。どうすれば彼女がまた心から笑えるようになるのだろうか。

しかしその思いもまたトウネリの重荷のひとつになっていることに、ソラはまだ気がついていなかった。



商業の国リヴェルタ。その首都にあたるリヴェルテスにヴェラドーネは单身足を運んでいた。

ヘルデイロと時差があることから、現在のリヴェルテスは夜明け前直後の早朝といっ

たところ。ヘルデイロに住む者であれば多くがまだ眠っている時間帯だ。

にも拘わらず、リヴェルテスの市場はすでに人で賑わっていた。その多くが獲れたての魚介類を求めてやってきている。

そんな彼らでさえ、ヴェラドローネの美貌には思わず動きを止めて見惚れていた。

しかし彼女はそんなものには目もくれず、一人で悠々と市場の中を歩いていく。

「いやはや、こんな朝っぱらから元気なことだね。まあヘルデイロでは今頃、酒盛りしている親父どもが騒いでいるんだろうが」

ふと立ち止まり、ヴェラドローネは一枚の封筒を取り出す。中に入れられた手紙を開くと、呆れたように項垂れた。

「今にして思えば、実に不親切な手紙だよ。場所を指定しておきながら、どっちの時間軸で今夜と言っているのか分かりやしないんだからね。そうは思わないかい？」

そうヴェラドローネが問いかけると、建物の影から一人の男が姿を現した。黒の紳士服に身を包まれ、長い前髪で左目を隠している。

「これは失礼いたしました。確かにあなたのおっしゃる通りですよ。だからこうしてこんな朝早くからあなたのことを待っていたんじゃないですか」

「実に殊勝な心掛けだよクローネくん。もし私がここの時間で言う夜に来たらどうしたんだい？」

「そうですねえ。まあ適当に時間を潰して、夜になったら同じようにして待つていたでしょうか」

「なるほどなるほど。実は君頭が悪いだろう?」

「返す言葉もないですね」

「下らない会話に花を咲かせながら、二人はふと周囲に目をやる。

「さすがはヴェラドーネさん。あなたの美しさに皆が注目していますよ」

「まあ、当然だろう。私は美しいからね」

「にやけた表情を浮かべると、ヴェラドーネは再び足を動かす。

「それで? こんな無駄話をするためわざわざ私をここまで呼び出したんじゃないんだ

ろう? さっさと場所を移そうじゃないか」

「それもそうですね。察しが良い方で助かりますよ」

「なんだか嫌味に聞こえるが、まあ今回は大目に見ておくよ。私は優しいからね」

「どの口が、と言いそうになるのをクローネは堪える。

歩きながらふとヴェラドーネは、背後を歩くクローネに向けて言った。

「そういえば君が殺した男の奥さんが、今私のところで受付嬢をしているよ」

「はて? 一体誰のことやら」

「私の部下——君が前に住んでいた屋敷に乗り込んだ男のことだよ」

クローネを顎下に手を当てると、わざとらしく今思い出したかのように「ああ、あの
人ですか」と呟いた。

「よく覚えてますよ。私が生み出した実験体の検証のために利用しましたからね」

「まったく可哀想に。まだまだ若いのに、旦那の死を経験しちゃうんだからねえ」

「可哀想ですか。そんなことあなたは露ほども思っていないでしょうに」

まあね。そう答えるとヴェラドローネは周囲を見渡す。市場は確かに人で賑わっているが、食事を用意してくれる店が開いている様子がない。

「ところでどこに行けばいいんだい？　どっか店に行くとかそんな感じだと私は思っているんだけど」

「どこに行くか分かってて前を歩いてるんだと思つてましたけど、違うんですね」

呆れながらも笑うと、クローネは人差し指を前に突き出した。

「あそこに変わった看板を立てている店があるでしょう？」

言われてヴェラドローネは目を細めて遠くを見る。

「ああ、確かに。なんか魚の頭をして人間の足が生えたよく分からない生き物の絵が描かれているね」

「あそこが目的地です。すでに店の中で待っている人がいるはずですよ」

うわあ、嫌な予感がするよ。そうヴェラドローネは心底嫌そうな顔をして呟く。

「ちなみにあの看板の絵、かつてエルフと戦争をした末に滅ぼされた種族を基にしているそうですよ」

「ああ、道理で見覚えのある姿をしていると思つたよ。確か今エルフが暮らしている島に、最初に行き着いた種族だったっけね」

なんとも下らない話だと笑いながら、ヴェラドローネは店の前で立ち止まった。

建物を見上げると、窓から店内の様子が見て取れる。その数ある窓の中に一人、見覚えのある顔を見つけて乾いた笑みを浮かべる。

「なあクローネくん。本当にあいつに会わないといけないのかい？」

「ええ、そうですけど。何か問題でも？」

クローネの問いかけながらも分かっている口振りに、ヴェラドローネは諦めたように項垂れる。

「私、あいつ苦手なんだよなあ」

ため息混じりにそう言いながら、ヴェラドローネは店の中に足を踏み入れた。

第四節 怨嗟の渦に巻き込まれて 1

殺人に子供の失踪と不可解な事件が立て続けに起こったことで、ドウエセの街はより一層の静寂に包まれていた。

この街を今支配しているのはやはり恐怖以外のなにものでもない。住民のほとんどが「次は自分の出番なのではないか」という不安を抱えている。それ故に、失踪した子供の無事を願う親はいても、この暗い夜道の中を探そうとする者は誰一人としていなかった。

そんな中、一軒の家の扉が静かに開いた。蠟燭の明かりが外に漏れ、心許ない街灯とともに微かに地面を照らしている。

「それじゃいつてきます。おじいちゃん、おばあちゃん」

心配そうに見送る老夫婦に対し、トウネリは優しく微笑む。

「その……気をつけるんだよ？ トウネリちゃん」

「うん、大丈夫だから」

トウネリはそう言いながら、二人の背後で静かに立っている兵士たちに視線を向け

る。

一度衝突して言い合いになってしまった三人の兵士。その事を気にしてか、彼らは今晩老夫婦の護衛を買って出てくれたのだという。

「二人のことお願ひします」

トウネリが深々と頭を下げるのに対し、中心に立つ兵士は小さく頷く。

「君もくれぐれも命を落とさないよう気をつけてくれ。二人にまた顔を見せられるようにな」

名も知らぬ兵士の言葉にトウネリは少し視線を逸らす。がすぐに向き直ると、笑顔を作って応えた。

「はい。皆さんも……もしもの時は気をつけてください」

そう伝えると、トウネリは夜道を一人歩き始める。

これから向かうのは、町外れにあるあの大岩の場所。そこでゼルレシアスと落ち合うことになっている。そしてそれが作戦決行の合図でもあった。

果たして本当に上手くいくのか。トウネリの内心に不安が渦巻く。相手が自分に恨みがある素振りを見せていることから尚更だ。

「大丈夫。きつと上手くいく」

俯きながら自分に言い聞かせるように呟く。それと同時に人の気配を感じてトウネ

りは顔を上げた。

「ソラ……」

街灯の下にソラが立つて待つていた。彼もまた見送る老夫婦同様の眼差しでトウネリを見ている。

「どうしてここに居るの？ あなたは隊長さんと待機でしょ？」

「あ、うん。ちよつと心配になつてね。大丈夫？」

ソラらしい理由にトウネリは少し呆れる。彼の心配性は今に始まつたことではないが、過保護な部分も見受けられる。それが人によつては重荷になることも気づかずに。「大丈夫よ。何かあればすぐに駆けつけてくれるんでしょ？」

「それは勿論。絶対に誰も死なせたりしないから」

自信に満ちた発言にトウネリは少し笑う。

「だつたら少しはわたしのこと信じてくれてもいいんじゃない？ 前みたいにさ」

「それは……」

トウネリの指摘にソラは彼女の瞳を見つめる。不安とそれ以上の覚悟が見える瞳を。

「そうだね。うん、ごめん」

「謝らないですよ。まつたく……その何かにつけて謝る癖は治した方がいいわよ？」

「それは……トウネリには言われたくないかな？」

「それもそうね。ごめんなさい」

二人はしばし見つめ合うと、途端に堪えきれず小さく笑った。二人の中の張り詰めた感情が少し解れていく。こんな時間がいつまでも続けばいいのにとさえ思った。

「ありがとうソラ。少し気が楽になった」

「ボクの方こそ。気をつけてねトウネリ」

「ええ。あんたもね」

だがそれを求めるのはまだ先の話だ。

二人はすれ違うように、各々が向かうべき場所に足を運んでいく。真反対の方向に進んでいる彼らだが、二人は間違いなく同じ道を歩んでいる。同じ目的と、同じ願いを抱いて――。

ソラが向かった兵舎では、入り口の前でアルガストが待っていた。

アルガストは扉脇の壁に背中を預けながら、夜空を見上げる。星も月も雲の影に隠れて見えない。生憎の曇天模様だ。

戻ってきたのに気がつき、アルガストは視線をソラに移す。特段変わった気配はない。却ってより決心がついた様子だ。

「どうだった？ キアンロレスの様子は」

アルガストの問いにソラは頷くと、

「大丈夫でした。むしろ心配しすぎて怒られたくらいです」
と微笑かに笑って答えた。

「そうか。信頼しあつてるんだな、お前らは」

「そう……ですかね。本当に信用したら、今みたいなことはしないのかも。きつと心の奥底では信用し切れてないじゃないんですよ」

「そんなもんだ。例えどれだけ信用していても、相手が大切であれば大切であるほどのどこかに不安を抱えるものだ。だからつい、常に自分が見える範囲にいてほしいと願っちゃう」

アルガストはそう言いながら、失った弟の顔を思い浮かべる。もし殺されようとしている瞬間を目にしたならば、自分は助けようと動いただろうか。情けなく蹲っていた当時に照らし合わせて、いつも考えてしまうことだ。

そしてアルガストはいつも、内心で首を横に振った。当時の自分のことはよく分かっている。どんな人間でも守ってみせるなどと大見得を張る一方で、ただその思いだけで何をするわけでもなく兵士となった自分のことを。

きつと目の前にいたところで勇敢に立ち向かうことも出来ず、弟が殺される瞬間を目の当たりにしていたただけだろうと。

「丁度良い機会だ。なあ、ヴィルレ……ひとつ聞いていいか？」

改まって何を聞く気なのだろうかと、ソラは小首を傾げる。

「あいつは……俺の弟は勇敢に死んだのか？」

「それは……」

どう答えたものかとソラは言葉を詰まらせる。

あの日二人の兵士が命を落としたことはよく覚えている。目の前で繰り広げられた凄惨な光景は忘れようとしても忘れられないものだ。

だが一方でどちらが彼の弟であるかは把握していない。故に一瞬どう答えるか悩んだのだ。

「はい——」

考えるまでもなく答えは決まっていた。

「弟さんはボクたちを守ろうと、勇敢に立ち向かっていました」

「……そうか」

アルガストはまた物憂げに空を見上げる。分厚い雲の隙間からほんの一瞬、一筋の星光が見えた気がした。

「いや、すまない。今は感傷に浸っている場合じゃなかったな」

アルガストは自嘲気味に笑うと、腰に携えた剣の柄を強く握って歩き始めた。

その後に続きソラも足を動かす。

「なあ、ヴィルレ。お前は今回の作戦上手くいくと思うか？」

「どう……ですかね。正直分の悪い賭けだと思ってます」

「同感だ。犯人がそう易々と綱に掛かってくれるとは俺も思えない。これで掛かるなら、犯人は相当の恨みを抱えているってことになる」

ソラは俯く。犯人は一体誰なのか。その答えがこれからはつきりするかもしれない。罪のない夫婦を殺し、街に住む子供たちを拉致し、トウネリを苦しめようとしている者の正体を。

再び脳裏に浮かんだ犯人像にソラは思わず足を止めた。

「どうした？」

立ち止まったのを感じてアルガストは振り返る。その表情と雰囲気からおおよその見当はついている。それでも彼はソラからの答えを待った。

「アルガストさん……お願いがあるんです」

「……一応聞こう」

「もし犯人が現れた時、その人と話させてほしいんです」

「……お前犯人に心当たりがあるんだな？」

アルガストの問いにソラは目を伏せる。あまり考えたくはないその犯人像を思い浮かべて、拳を強く握る。

「あの夫婦の遺体を見たときに……違和感を感じたんです。そしてもしかしたらって。まだ確証はないけど、でももしそうならボクはその人と話さなきゃいけない」

「どうしてだ？」

「あの時ボクが取り溢したものだから」

「お前……」

アルガストは腕を組み、瞼を閉じて考える。

ソラの言葉の節々に隠れているものとこれまでの情報を整理し、彼が思い浮かべた犯人像を拾い出していく。

しばらくして、答えに行き着いたアルガストは額に手を当てた。

「そういうことか……」

もしこれが正解だというのなら、あの夫婦が如何に不幸で哀切を極めているか。なによりこの答えを、実際に犯人を見るその瞬間まで伏せようと考えるのも頷ける。

「アルガストさんも見たんですよね？ 女性がどんな顔をして亡くなったのか」

「……っ……ああ、そうだな」

アルガストは思い出す。新しい命を身ごもった女性がなんの抵抗もなく殺された挙げ句、何かに満足したような死に顔を浮かべていた。その不可解な点が、この犯人像と照らし合わせた時に納得できるものになってしまう。

「だからもしそうだった時はボクに任せてほしいんです。自分勝手なのは分かっています。けど……きつとこれはボクが果たさなきゃいけない責任だから」

アルガストはソラが何をしようとしているのかすぐに察していた。それが本来殺人を犯し、これだけの事件にまで発展させた人間にすべきことではないことも。

「ダメだ——と言つても聞く気はないんだろう？」

ソラが固い意志で小さく頷くのを見て、アルガストは項垂れる。大人しい外見に反して実に頑固なやつだと。

本来ならばここで止めるのが自分の勤めだとアルガストは理解している。そもそも事件に巻き込むこと自体間違っていることだとも。それでも止めないのは、かつての自分が持ち得なかつたものを二人がすでに持っていると感じているからだつた。

「わかつた。だがこちらで不可能だと判断したときは容赦なく拘束する。それでもいいな？」

「はい。ありがとうございます」

直後、静寂を切り裂くように爆発音が響き渡つた。音の方向からして、町外れの大岩あたりからだ。

「どうやら始まつたみたいだな。急ぐぞ」

「はい」

きつとすべて上手くいく。ソラは拭いきれない不安を隠すように、首から下げた魔力結晶を強く握り締める。それが僅かな隙となるとも知らずに。

「——っ!？」

ソラが駆け出そうと一步踏み出した瞬間、彼の足元に突如魔法陣が現れた。その形状と陣内に書き記された文字の羅列から転移の類だ。

「しまっ——」

急いでその場を離れようとするが、魔法陣の周辺には逃れられないよう障壁が展開されている。

完全なる油断。よもや転移の魔法が罠として仕掛けられているとは思っていないなかつた。

ソラの異変を察知したアルガストもすぐさま振り返る。

「ヴィルレー！」

この手の障壁は内部の衝撃に対して強固な代わりに外からの衝撃には脆いことが多い。

アルガストはその知識と勘を頼りに、すぐさま阻止しようと剣を引き抜く。が、些か反応が遅すぎた。

抜いた時にはもうソラの姿は忽然と消えていた。転移が完了した直後に消滅する仕

組みになっていいのか、魔法陣の痕跡も消滅している。

「してやられたか……!」

現状を歯噛みするのも束の間、アルガストは背後に感じた殺気を振り向き迎え撃つ。剣先は背後を狙って放たれた一撃を受け止めて鏝迫り合っている。

「お前……誰だ?」

正体不明の存在にアルガストは睨みを効かせる。

黒いマントを羽織り、顔はフードを深く被って隠している。周囲も暗いため顔を確認することは出来ないが、アルガストと同じくらいの体格から男であると推察できる。

「悪いが今お前に構っているほど暇じゃないんだがな」

苦笑を漏らすアルガストに対し、黒マントの男は無言で距離を取る。

「なるほど。お前が今回の事件の犯人……というわけか」

アルガストは男を鋭く観察して探りを入れる。

「よくあれだけ凄惨なことをやれたもんだな。ええ?」

警戒しつつ、アルガストは周囲にも気を配る。

「どうやら目の前の男以外に気配らしきものはない。彼一人でここに現れたのだろう。」

「騎士隊長アルガスト……俺はあんたに聞きたいことがある」

不意に男が口を開いた。

低い声音だがどこか幼さの残る雰囲気アルガストは肩をすくめる。どうやらソラの考えが的中してしまったようだ。

「どうしてあんたは……あいつらを恨んでいないのかを」

「……逆に聞きたい」

アルガストは亡くなった夫婦のことを——母親が死の間際に見せていたであろう表情を思い出す。

構えた剣を下ろして、男に同情の眼差しを向ける。

「お前は何故ああも簡単に……自分の両親とこれから産まれてくる子供を殺せた？」

第四節 怨嗟の渦に巻き込まれて 2

静寂に包まれていたドウエセに轟音が鳴り響く。

かつて巻き起こった惨劇の象徴とも言うべき大岩の前では戦闘が繰り広げられていた。

掠めた傷口から微かに血が滲むのを感じながら、トウネリは冷や汗混じりに目の前の“敵”を認識する。ドウエセを守る騎士団。そこに所属する女性兵士のゼルレシアスの顔を。

「ちよつと避けないでくれないかしら？」

笑みを浮かべてゼルレシアスと言う。

トウネリはそれに答えることなく、歯を強く噛み締めて動きを見極めようとする。

ゼルレシアスの放つ怒濤の突きは、切っ先が無数に並んでいるかのように錯覚させる。これらをすべて目で追って避けなければならぬため、トウネリの意識は槍に集中してしまっていた。

それ故に出来た一瞬の隙を見逃さず、ゼルレシアスは左手の平をトウネリの腹に添える。

「——っ!？」

「爆ぜろ」

短い詠唱の直後、小さな爆発がトウネリの腹部を襲った。

小さい威力ながらも放たれたその一撃に、トウネリの呼吸が乱れる。

「うっ……ぐう……!」

意識を保ち、膝を突きそうになる体を支えて、トウネリは次に放たれた槍の一撃をまた寸での所で躲す。避けきれなかった槍の切っ先が、彼女の頬を掠めて横切った。

（——この人……強い……っ!）

ゼルレシアスの動きは一流のものであった。

隙も無ければ無駄もない予測不能な槍捌き。そこに織り交ぜられる爆破の魔法。猛攻から逃れるために一旦距離を置こうとしても、一瞬で間合いを詰めてくる俊敏性。そのどれもがトウネリを苦しめている。

肩で息をするトウネリに対し、ゼルレシアスは余裕の表情を浮かべて動きを止めた。

「私あなたのことはそれなりに調べてるんだけど、その強さで本当にあの有名なユース
|| テア || ガルディアンに鍛えられたの？」

まるでまだ手を抜いてるかのような物言いに、トウネリは目を逸らして奥歯を噛む。

「ゼルレシアスさんは……一体誰にその戦い方を教わったんですか？」

苦し紛れに逆に問いかける。

これだけ洗練された動きができるのだ。彼女の師は余程の手練れなのだろう。

ゼルレシアスは答えるかわりに無言で槍を構える。その視線は一点——トウネリ of 心臓を狙っている。

何故このような事態に陥ったのか。事はソラとアルガストが会話していた時間まで遡る。

ソラと別れたトウネリは、ゼルレシアスの誘いを受けて大岩の前にまで足を運んでいた。目的はただひとつ。事件の解決に繋げるためのある作戦を執行すること。

作戦は至って単純なものだ。トウネリを囮にする。そうすることで犯人をおびき寄せようというものだ。犯人の最終的な狙いが、自分の手で彼女を殺すことだと読むのでことである。

そのため相手役として名乗り出たのは他でもない。作戦を企てたゼルレシアス自身だった。

彼女の恨みを持っているかのような姿勢は、何も知らない第三者から見ればトウネリの命を狙う存在に見えるだろうと見越してのことである。

トウネリが大岩の前にたどり着くと、大岩を背もたれにして煙草を吹かすゼルレシアスの姿があった。

天に昇る煙を哀愁漂う目で見つめる彼女を見て、トゥネリは今にも逃げ出したい気分
に駆られた。ゼルレシアスの恋人の命を奪ったのは自分だ。そんな罪悪感に苛まれて
いた。

故に思わずこう口にしてしまったのだ。「ごめんなさい……ゼルレシアスさん。わた
しのせいで大切な人を……」と。

それがどう聞こえたのかゼルレシアスは、はつきりと聞こえるように舌打ちを鳴らし
た。

「よくもまあそうやって自惚れることができるわよね、あなた」

「えっ……？」

彼女は冷たい眼差しをトゥネリに向ける。

「だってそうでしょう？ なんでもかんでも自分がやったかのように言うじゃない。な
に？ あなたにそこまでの力があるってことかしら？」

笑う顔とは裏腹にゼルレシアスの声には怒りが入り混じっている。

「だったら試してあげるわ。その力がどれほどのものかをね」

ゼルレシアスは吹かしていた煙草を地面に落として踏みにじる。そして大岩に立て
かけていた槍を取った。

「構えなさい。でないと……本当に殺すわよ？」

この時放ったゼルレシアスの言葉が脅しではない。彼女の動作のひとつひとつに込められた殺意がそれを物語っている。

槍を構えた前屈みの姿勢のまま、ゼルレシアスはゆっくりと足に力を入れていく。

その初動にトウネリも身構えて、次の一撃に備えた。ゼルレシアスが真にどこを狙っているのかを見極め、防がなければ命を落としかねない。

張り詰めた空気が両者に漂う。それを裂くように一迅の風が微かに吹いた。

（——来る！）

トウネリが察知したのと同時に、ゼルレシアスが大地を強く蹴り飛び出した。

ゼルレシアスが視線は構えていた時と変わらない。心臓を見据え、そこに必殺の一撃を穿つつもりなのだろう。

そう読んだトウネリの取れる行動は限られている。回避するか、真つ正面から何らかの方法でこれを受け止めるだけだ。

研ぎ済まされた感覚の中、トウネリはゆっくりと密かに身につけていた物に手を伸ばす。

彼女が手にしたのは一振りの短剣だった。それを一瞬躊躇いながらも引き抜くと、槍の一撃を捌こうと体勢を整える。

しかしトウネリの読みは間違っていた。

「なっ——!?!」

ゼルレシアスは加速していく中で、構えていた槍を巧みに持ち替えて投擲したのだ。意表を突かれたトウネリは咄嗟に短剣を振るい槍を上空に弾く。

弾かれた槍は円を描きながら上空を舞う。人の心理故か、それが畏だと気づかずトウネリは槍を視線で追ってしまっていた。

「あなた……それを扱うの初めてでしょ? 動きでわかるわ」

声が視線よりも低い位置から聞こえ、トウネリはハツとして顔を下ろす。

ゼルレシアスが前屈みの状態で、トウネリの心臓あたりに手を添えている。

「しまっ……!」

槍はただの囷。本命は心臓に向けて爆破の魔法を叩き込むことだった。いくら小規模の爆発と云えど、零距离で放たればそのまま絶命しかねない。

だが気づくのが遅すぎた。今から防御の姿勢を取ろうとしても、それよりも早くゼルレシアスは魔法を放つに違いない。

詠唱のためゼルレシアスが口を微かに開く。

「——ああ……(こ)で終わりか……」

彼女の大切な人の命を奪ったのだ。これもまた運命なのだろう。そうトウネリは死を受け入れようとしていた。この人に殺されるのならそれもそれで構わないと。

脳裏にソラの背中が浮かび上がる。ここへ来る前に交わした会話を思い出す。約束を反故にする自分の弱さと情けなさに嫌気が刺した。

「風よ……槍に纏いて我が身を守る盾となれ」

そんなトウネリの思いとは裏腹に、ゼルレシアスが口にしたのは異なる詠唱だった。詠唱が終わると同時に、宙を舞っていた槍が突如として方向を変える。槍はそのまま一直線に飛ぶと、そのままゼルレシアスの背後の地面に深く突き刺さった。

直後、鉄と鉄が打ち合う激しい音が夜空に響いた。

「あなた、目的をもう忘れたのかしら？」

トウネリは槍が何を弾いたのかを目にする。細長い針のような形をしている。先端には何かが微かに反射していることから、おそらくは猛毒の類いが塗られているのだろう。

それを見て呆れたように肩を竦めると、ゼルレシアスは背後を振り返って睨んだ。

「この子の危険に駆けつけた王子様……てわけじゃなさそうねえ？」

視線の先には黒い影。背の丈は小柄であるが、街灯の光が届いておらずその正体を明かすまでには至っていない。が、その影が取った行動から今回の事件を巻き起こした犯人であることは容易に想像が出来た。

「正直私も駄目元で提案してみたのだけど、まさかこうもあっさり釣られてくれるなん

てね」

ゼルレシアスは自嘲気味に笑う。

「トウネリ……早く構えなさい。ここからが本番よ」

背後で呆気にと取られているトウネリに、ゼルレシアスは注意を促す。

「私たちの目的はこのドウエセで不可解な事件を巻き起こした犯人を捕まえること。そして行方不明となった子供たちを助けること……違つかしら？」

ゼルレシアスの問いかけに、トウネリは思わず項垂れる。自分は一体なにを考えていたのかと、我がことながらに呆れていた。

そうだ。これまでの戦いはあくまで作戦だ。自分に強い恨みを持つているであろう犯人に対し、復讐する機会が潰えようとしている状況を生み出す。そうして犯人をおびき寄せるのが目的だった。

「そう……でしたね」

トウネリは短剣を構える。構えて、この短剣をかつて持つていた人物のことを思い浮かべる。

（——そうだ……まだ終わりにしちゃいけない。わたしはまだ、あの人になんの償いもできていないから）

トウネリが意志を固めたのと同時に、ゼルレシアスは上空に向けて火の玉を放つ。見

る見るの内に上り詰めた火の玉は、ある高度に達したと同時に破裂した。周囲に向けての合図だ。

この合図と同時に、物陰で息を潜めていたロトウスや他の兵士たちが飛び出す。そしてそのまま黒い影を取り囲むようにして陣取り、その正体を明かすために角灯で周囲を照らした。

「——あれ……は……？」

黒い影の正体は幼い少女だった。

その見覚えのある姿にトウネリは戦慄する。脳裏に浮かぶのは、現在行方不明となっている少女から聞いた証言。

「——六年前に殺されたはずの女の子が——」

トウネリの記憶に刻まれている顔と幼き少女の顔が一致する。

「嘘……なんでよ……？」

絶句するトウネリと同様に、一部の兵士たちも動揺する。彼らは過去に少女の無惨な死体を目の当たりにしている者たちだ。

彼らの反応を見たゼルレシアスは軽く舌打ちを鳴らす。

「まるで死者が蘇ったみたいね」

実際にこの目で見ただけではないが、ゼルレシアスも六年前の事件で発見された唯一

の死体については耳にしていた。

その死体は少女のものだった。四肢は切断され、頭部は無造作に床に転がり、胴体は心臓が抜かれた状態で発見された。無くなっていた心臓は、騒動を起こした魔物の餌にでもされたのだろうと推察されている。

この時殺害された少女の名はリリイ・ホールキンス。今回殺害された夫婦の娘だ。

「見た感じ死者の魂……ってわけじゃなさそうね」

彷徨う死者の魂には外見的特徴があるとされている。微かに人物を判別できる透明感のある体。その心臓にあたる部分には小さな青白い炎を宿していることが通例だ。

目の前の幼い少女にはその特徴がひとつも見当たらない。つまり、実体を持った生きた人間である。

だがその風貌とは裏腹に、少女が纏う雰囲気は人間のそれとは明らかに違う。

トウネリはこの感覚を覚えていた。これは人ならざる者の気配。人によって生み出されてしまった怪物——魔物の気配だ。

(まさか……これはお父さんが……?)

脳裏に父親の姿が過る。やはりどこかで生きており、また魔物を生み出してしまったのか。そんな不安と恐怖がトウネリの心を蝕んでいく。

「警戒してください。突然攻撃してくるかもしれません」

動揺する兵士たちに対しロトウスがそう促す。

(どういうこと……？ さつき攻撃してきたくせに、こいつからは一切の敵意を感じない)

一方ゼルレシアスは眉を顰めて少女を凝視する。

少女からは最初の攻撃以外に一切動こうとする気配が見られない。こちらの動向を伺っているのか、それとも別の目的があるのか。読めない思考にゼルレシアスは警戒心を強める。

その時だった。

「二人のか弱い女の子を相手に大勢で取り囲むなんて、ここの兵士たちは落ちたもんだねえ」

どこからかともなく男の声が響き渡った。

突如聞こえてきた声に兵士たちは思わず周辺を見渡して警戒する。

一方先ほどまで強い警戒心を見せていたゼルレシアスは一転、目を見開いてその場に固まった。

「まあでも仕方ないか。この街じゃろくに大きな事件も起きないし、ここ最近で記憶に新しいのが六年前の出来事だしね」

「また……この……声……？」

ゼルレシアスは声を震わせる。彼女にとつて聞き覚えのある声。聞こえるはずのない声がドウエセの不穏な空に響いている。

「誰だ！ 一体どこにいる！」

一人の兵士が声を張り上げた。額には冷汗を滲ませて、高い緊張状態で得物である剣を握つて周囲を警戒している。

それは同時にこの不可思議な声がゼルレシアス以外にも聞こえている証左でもある。

「そうは思わないかい？ 僕の可愛いゼルレシアス？」

「——っ!? ゼルレシアスさん後ろだ！」

ロトウスが叫ぶ。

「酷いとは思わないかい？ 相手はまだ小さい子供なのにさ」

突如現れた黒い影は背後から寄り添うと、ゼルレシアスの耳元で囁く。

間近にその声を聞いたゼルレシアスは握っていた槍を手放した。乾いた鉄の音が響き、目には涙が浮かんでいる。これまで彼女が見せていた威厳は欠片もなく、ただ恐怖に打ちひしがれていた。

「けどそうだよ。街の平和を守るには手段なんか選んでられないもんね？」

「その人から離れろ！」

傍にいたトウネリはすぐさま黒い影に飛び掛かり、得体の知れない短剣の切っ先を突

き立てた。

(なに? この手応え……?)

トウネリは息を呑む。

切っ先は確かに影を貫いている。人体なり物体なりに接触すればその分手元に重みがあるはず。

しかしあるのは短剣の重みだけで、黒い影を貫いた先には何も無い。まるで虚空でも裂いたかのような感覚だ。

「危ないなあ。そんなもの人様に向けて振り回しちゃいけないって、お母さんから教わらなかつたのかい?」

黒い影はけたけたと笑いながら、黒い手をトウネリに伸ばす。

これにトウネリは身の危険を感じると、短剣を引き抜いてすぐさまその場を飛び退いた。

その様を見て黒い影は「勘がいいね」と称賛を述べると、

「でもそつちも危ないよ」

口元を歪ませて笑った。

「——っ!?!」

突然影の手が変貌し、鞭のように伸びる。鞭状になった影はそのままトウネリの首に

纏わりつくつと、締め上げるようにして彼女の呼吸を奪った。

「がっ……くっ……あ!？」

トウネリは振り解こうと藻掻くが、その度に締め上げる力が強まっていく。体が酸素を求めているが、ゼルレシアスとの戦闘も重なりそんな余裕などとうに無くなつていた。

「トウネリさん!」

ロトウスは助けに入ろうとするが、その行く手を少女が阻む。

一歩動けば即座に殺される。その予感と無言の圧力に押されロトウスは固まった。他の兵士たちも少女の放つ殺気に吞まれてしまっている。

そうしている内にもトウネリは思考もままならない状態へと陥っていく。

「ほらゼルレシアス。早く助けないと彼女死んじゃうよ!」

「あ……?」

ゼルレシアスは呆然と振り返り、苦悶の表情を浮かべているトウネリを見る。見て、目を逸らした。

「見捨てるのかい?」

ゼルレシアスの行動を見て、黒い影は笑みを浮かべる。

「でもそっか。嬉しいなあ。君はそれだけ彼女のことを強く恨んでるってことだもんね

「？」

影はトウネリの体を持ち上げて更なる追い打ちを掛ける。

地に足がついていたことでまだかろうじて呼吸出来ていたトウネリだったが、宙に浮いてしまつてはもはやその余裕さえ奪われていく。

「にしても君のお友達の到着が遅いね？ どうしてなのかな？」

影の言う通り、ソラとアルガストの到着が遅い。ゼルレシアスの合図からそれなりの時間が経っているにも関わらず、二人の姿はいまだに見えないのは不可解だ。

しかしトウネリの意識は完全に遠のき、墜ちる寸前。それを考えることなど出来るはずもなかった。

虚ろとした目でトウネリは空を見上げる。ああ、ついに天罰は下る。微かに残った思考能力がそう告げている。このまま自分は死ぬのだと。

体の力が抜け、手から短剣がすり抜ける。

(ソ……………ラ……………)

再び走馬灯のように、守りたいと願った少年の背中が浮かび上がる。その背中に向かつて、トウネリは最後の思いで謝罪しようとした。

すると彼の背中がゆっくりと振り返った。

直後、
トウネリの体から強い光が解き放たれた。

第四節 怨嗟の渦に巻き込まれて 3

リヴェルテスの市場にある店メアフロウ。魚人の絵が描かれた看板が特徴の店は、朝早くから開いているのもあつて漁師たちの憩いの場としても親しまれている。

「いらつしやいませ」

ヴェラドローネが店内に入ると、一人の女性店員が待ち構えていた。

二つに結った艶のある黒髪を靡かせながら丁寧な一礼を見せる女性店員。ほかに人がいる様子もないことから貸し切り状態のようだ。

「ヴェラドローネ様とクローネ様でいらつしやいますね？ お客人はすでにお待ちです。どうぞこちらへ」

女性店員は微笑みながら階段の方へと手招きする。

「ああ、知ってるよ。二階の窓からいやらしい目でこつちを見ていたからね」
ヴェラドローネの不服そうに答えると、女性店員はくすりと笑った。

「それはそれは。あなた様ほどの美しきであれば、私でもついそう見てしまいます」
「ほほう？ 君、なかなか可愛いこと言うじゃないか」

機嫌のいい声とは裏腹に肩を竦めると、ヴェラドローネは女性店員の案内に沿って歩いて行く。その背後をクロローネが歩いているが、先ほどとは打って変わり無言だ。

「おいおいクロローネくん。急に喋らなくなったじゃないか」

それを不思議に思ったヴェラドローネは歩きながら尋ねる。するとクロローネはわざとらしい笑みを浮かべ、いはいえと言いなながら答えた。

「女性同士の楽しい会話を邪魔するのは不躰かと思ひまして」

クロローネの答えにヴェラドローネはまた呆れ返る。

「そういうの気にする性格だったかね？ 君は」

呆れるヴェラドローネに対しクロローネは「私も男ですからね」と笑って答えた。

下らない会話をしている内に女性店員はある部屋の扉の前で立ち止まった。その部屋の位置は、先ほど店外から見えた場所と一致している。

この先に気に入らない男がいる。そう思うとヴェラドローネは扉の先へ行くことを躊躇う。それこそ本心から話したくない相手だ。

しかしここまで来た以上引き下がるわけにもいかない。これから彼らが何を話すのかも興味がある。

「はあ……律儀に招待を受けてここに来るんじゃないかなかったよまったく……」

ヴェラドローネが愚痴を溢すのに対し、クロローネは背後で「心中お察しますよ」とま

た笑った。

女性店員が扉を開けると、その先に一人の男が待つていた。

「やあ、来たね。ここへ上がってくるまで少し時間が掛かったようだが」

質素な服装に身を包みながらも、整った顔や立ち居振る舞いから身分の高い人間であることを隠せていない。さらさらとした白髪も太陽の光を浴びて煌びやかに光っているようだ。

「うるさいよヘンドレル。相変わらず気に入らない口の利き方だ」

「それはお互い様というものだよヴェラドローネ。君ほど人を煽るような口調をしている女は会ったことがないからね」

リヴェルトス商会の長ヘンドレル。ヴェラドローネがこの世で最も嫌悪している男の一人だ。

顔を見ただけで苛立ちが募るほどだが、ヴェラドローネは諦めたように向かいの席に腰掛ける。何故彼女がここまで嫌悪しているかと言えば、

「うんうん。やはりいつ見ても君の顔は美しいよ。その口調さえなければ最高の女だというのに勿体ない」

「はっ、お前に至ってはその見た目も性格も醜悪そのものだけだね」

と言ったように、人を煽ることに生涯を掛けているような性格をしているからだ。

言つてしまえば同族嫌悪である。

二人のやり取りを見てクローネは「やはりこうなりますか」と落胆して呟く。

「すみません、ヴェラドローネさん。あなたは嫌われているから会わない方がいいと言つたのですが、まったく言うことを聞かなかつたもので」

「そう言いながら君はこの状況を楽しんでいるのだろうか？」

「ええ、まあ端的に言つてしまえばそうですね」

容易く手のひらを返し、クローネはくつくつと笑いを溢す。

それを見てヴェラドローネは思わず項垂れ、ここには頭の狂つたやつしかいないと嘆く。すでにここへ足を運んだことを後悔していた。

ここは少しの気分転換に先ほどの女性店員と会話を交わそう。そう思いヴェラドローネは辺りを見回す。が、こうなることを見越してかすでに姿はなかった。

「それで気に入つてくれたかい？ この店は」

「なんだ？ ここお前が経営しているのか？」

「いや？ だがこの店の看板は私が考案したものでね」

「看板？」

ヴェラドローネは思い出す。かつて滅ぼされた種族である魚人の絵が描かれた悪趣味な看板。それがこの店に掛けられていた。

「予てから君とあの看板のあるこの店で食事をしたいと思つててね。ちなみにここは魚料理が主だよ」

「余計に興味が悪い看板じゃないか。どうせ売り上げも大して振るわないんじゃないか？ あんな看板じゃさ」

「それがそうでもなくてね。この料理人はなかなかいい腕をしていてね。味がいいと評判さ。それに人知れず滅んだ種族のことなんて人間が知っているはずもないだろう？」

「あてつけのつもりかい？」

「まさか。まあ君がもしまだ気に病んでいるというのなら話は別だけど」

「別に気に病んでなんかないよ。あいつらは実に不快な連中だったからね」

ため息混じりに言うと、ヴェラドローネは席から立ち上がる。

「それで？ こんなことを話すためにわざわざ呼んだんなら帰らせてもらうが？」

「なに、ここまでの話はただの前座さ。楽しんでくれたかい？」

ヘンドレルの問いかけにヴェラドローネはまた舌打ちを鳴らす。余程この男が嫌いなのか、普段の彼女からはあまり見られないような不快感と嫌悪感を露わにした表情で睨んでいる。

「この顔を見れば答えはわかるだろう？」

「あつはつはつ！ 確かに、今にでも後ろから刺されそうだ！」

ヴェラドローネの表情を見て満足したように喜ぶヘンドレル。それを見てさすがに引いたのか、クローネは「知りませんよ。本当に刺されても」と小さく呟いた。

「だったらさつきと本題に入ってくれないか？ 私も忙しい身でね」

「忙しい？ まさか君の口からそんな言葉を聞くなんてね。どうせ毎日部下に書類仕事任せてのんびりしているくせに」

「ああ、そうだね。うちを拠点にしているやつらは皆大人しいからほんと助かってるよ。どっかの国を拠点にしてるやつらとは違ってね」

「それはもしかしなくても、この国のことかい？」

「ああそうだよ。一体どんな基準で入会を許可しているのか。会員の殆どがただのならず者ばかりじゃないか」

呆れるヴェラドローネに対し、ヘンドレルは「君がそんなことを心配するなんて、今日は矢の雨でも降るのかな？」と笑う。

苛立ちを募らせつい反論しそうになるヴェラドローネだが、このままでは一行に話が進まない。そう判断し、彼女は何も言わずに腰を落ちつかせた。

それを見て安心したのか、あるいはそれを待っていたのか、クローネが口を開く。

「今回お呼びしたのは、あなたにも我々の協力者になってもらおうと思ったからですよ」
「協力者？」

クローネの言葉にヴェラドローネは眉を顰める。

「それなら先日の会話で答えは分かっているはずだが？」

「ええ。ですが我々はそうも言っていられなくてですねえ。彼女を出し抜くためにもあなたの力添えが必要だと判断したのですよ」

「ヴェルティナのことか。別に彼女は驚異でもなんでもないだろう？ 間接的に何かすることはあっても、直接手を下すことはないんだからね」

ヴェラドローネは鼻で笑いながら答える。

するとヘンドレルは肩を竦めて、テーブルに用意されたコップを手に取ろうとする。が少し揺れる水面を眺めてから、その手を遠ざけた。

「ええ。確かに彼女自身は大して驚異ではありません。しかし彼女の持つ繋がり是我々の驚異になり兼ねないのです。あなたの飼う犬もそのひとつです」

「ユースのことか？ 別にあいつは誰にも飼われていない一匹狼だよ。まあ変な取り巻きが二人いるけど」

笑いながら言うヴェラドローネは、テーブルのコップを手に取り中に入っていた水を一気に飲んでいく。

「君には彼の手綱を握っておいてほしいんだ。そうするとかなり計画を実行しやすくなるからね」

「君たちの計画っていうのはあれだろうか？」

空になったコップを置き、ヴェラドローネは鋭い視線を二人に向ける。

「太陽の巫女の力の覚醒——違うかい？」

ヴェラドローネの指摘に男二人は顔を見合わせた。

「気づいていましたか、あの子の中にそれが眠っていると」

「当然だよクローネくん。じゃなきゃわざわざ自分で足を運んで、自分の手元に置こうとなんかしないさ」

「それはご尤もで」

クローネが笑うと、ヴェラドローネはテーブルに頬杖をついて話し始める。まるで狙った獲物を見定めるかのような目で二人の男を見ている。

「当てるやろうか？ 君たちの計画とやらをさ」

「へえ？ それは聞きたいね」

「だろう？ けどそれより先にはつきりさせておきたいことがあるんだけどいいかな？」

「ああ、いいとも」

「ヘンドレルお前今、どこにいるんだい？」

ヴェラドローネの発言に、張り詰めたような重い沈黙が流れる。

その沈黙を最初に破ったのは、他でもないヘンドレルだった。

「バレちゃったかあ」

「お前水を飲むとうとしてやめただろ。実にわざとらしくさ」

笑うヘンドレルに対しヴェラドローネは呆れ返ったように嘆息する。それを見てクローネも呆れたように項垂れた。

ヘンドレルはひとつ咳払いをすると、両の手のひらをヴェラドローネに見せながら答える。

「実は今ある女の子と一緒になんだ。で君と話しているのはそんなか弱い女の子と一緒にいるはずの僕の幻影——と言っても視覚聴覚嗅覚は共有されてるからこうして話せるわけだけど」

よく見るとヘンドレルの体は少し透けて見える。はっきりと分かるわけではなく、じっくりと見てようやく分かるような違いだ。

それを見てヴェラドローネは合点がいったのか、あからさまな笑みを浮かべた。

「ははーん。さてはお前今ナハトヴェイルにいるな？」

「お、よく分かったね」

「てことはやっぱり君たちの計画の目的っていうのは、夜の国を崩壊させることか」
行き着いた答えを賞賛するかのようにヘンドレルは拍手する。といつても実体がな
い以上音は鳴らず、ただの真似に過ぎないのだが。

一方ヴェラドローネはと言うと、面白いことを聞いたと言わんばかりに引きつった笑み
を浮かべていた。その目は新たな獲物を見つけて高揚する獣のように光っている。

「この国を壊してほしいってお願いされてね」

「いいのかい？ そんなことをすればあいつが黙っていないだろう？」

「ああ、そうだね。だから君に彼の手綱を握っていてほしいんだよ。僕の知る限り、彼は
唯一の対抗手段だからね」

「なるほど。まあ確かにユースならあいつと相對しても互角に渡り合えるだろうね」

「だろう？ だから是非とも——」

「嫌だね」

ヘンドレルの言葉を遮り、ヴェラドローネは見下した目で彼を見る。彼女が纏っている
のは紛れもない殺気。

それを直に受けて、クロローネは冷や汗を滲ませた。今にも突き刺さんばかりの殺気に
身の毛がよだつ。

「お前さ。私をここまで不快にさせておいて快諾するとも思っただのか？」

「いや、全然。むしろ怒って僕を殺しかねないと思つていたさ」

「だったら何故わざわざ話そうと思つた」

ヴェラドローネでさえ、ヘンドレルの考えがわからなかつた。この男は一体何を企み、なんのために一国を崩壊させようとしているのかさえも。

唯一分かるのは、ヘンドレルという男は彼女の殺気に怖じ気づくこともなく、平然とした表情でむしろ笑つて話すほどに肝が座つていくということだ。

「別に？ 勝手にあれこれしたら君は余計に怒るだろうと思つてね。だから前もつて話しておこうつて。ただそれだけさ」

ヴェラドローネは冷や汗を滲ませているクロローネに視線を向ける。彼が苦笑を浮かべているのを見るに、どうやらここまでのやり取りはヘンドレルの独断によるものらしい。

「お前、相変わらず何考えてるかわからないやつだな」

「それはお互い様だろう？ 僕だつて正直君がなにをしたいのか分からないよ」

二人は言葉を交わさずにしばらく睨み合う。もし今ヘンドレル本人がいたならば、ヴェラドローネは即座に手を掛けていたかもしれない。

そんなまさに一触即発の空気といった状況の中、一切臆することなくその輪に入つていく者がいた。

「だったらその女、僕が殺してやりますよ」

気配を消してどこかに隠れていたのか、突如現れたその人物にヴェラドーネは視線を向ける。所々黒が入り混じったような特徴的な紅の髪。腰には二本の剣を携えて、仕立ての良い黒服で身を包んだ美青年だ。

青年は黒い瞳でヴェラドーネとヘンドレルの双方を見ながら、口元には余裕の笑みを浮かべている。

「おや、誰かと思えば懐かしい顔じゃないか。一体どうしてここにいるんだい？ リブレスⅡフォステイラⅡガルディアンくん？」

「ちよつと彼らに協力してるんですよ。ところで兄さんは元気にしてますか？」

リブレスと呼ばれた青年は礼儀正しく一礼すると、笑顔のまま尋ねた。

「ああ、元気にやっているよ。女二人を侍らせて、鼻の下を伸ばしながら町中を歩いているよ」

「そうですか。それを聞いて安心しました。なにせ兄さんは僕が超えるべき存在ですから」

リブレスはそう言つて左腰の剣に手を添えながら笑う。その表情の奥底からは微かな怒りが感じられた。

（なるほどね。彼は護衛役といったところかな？）

幻影に護衛をつけるというのはどういう意図があるというのか。とヴェラドローネは計らいながら苦笑を溢す。

(別に彼とやり合つても生き残れる自信は全然あるけど……余計な騒ぎは起こしたくないよねえ)

一瞬だけ窓の外に目をやってから、ヴェラドローネは剣呑な雰囲気を押さえ込む。そして咳払いをすると改めて笑顔を取り繕った。

「確かに。君でも多少はやり合えるかもね」

「多少? その女はそんなに強いんですか? それは楽しみだ」

「その余裕が続けばいいけどねえ。なにせ君のお父上でもついで決着がつかなかったほどだからさ」

世界最強とさえ謳われている父とさえ渡り合える。それを聞きリブレスの手が微かに震えるのをヴェラドローネは見逃さない。

そしてハンドレルに済ました顔を向け、少し呆れた息づかいで尋ねる。

「いつの間に彼を手駒にしたんだい?」

「……最近だよ、彼と協力関係を結んだのは」

問いに答えながらハンドレルは名残惜しそうにコップを見つめている。入っているのはただの水だというのに、どうやら本体は余程喉が渴いているらしい。大方側にいる

であろう。「か弱い女の子」とやらが原因なのだろう。

そうヴェラドローネは内心嘲笑すると、またリブレスに関心を寄せた。

「よくもまあこんな何考えているか分からない胡散臭い男に協力する気になったね」
ヴェラドローネが悪態を吐いた直後、彼女の首筋に剣先が突きつけられた。

「一応彼は僕の現主なので、口を滑らせないように気をつけてください」

「それならさつきまで彼と悪態の応酬をしてたけどね」

リブレスは無言で力を微かに込める。

それを感じたヴェラドローネは左の親指と人差し指で剣先を摘まんだ。

お互い顔が笑っている反面、一触即発の雰囲気を纏っている。

「騎士の家系ガルディアンの名に恥じない忠誠心だ。いい心がけだよ」

賞賛とともにヴェラドローネは剣先を離す。

「それはどうも」

するとリブレスはため息混じりに剣を収めた。

「で、協力するかしないのかどっちなんだい？」

「こんな脅し紛いなことをされたら余計に協力する気が失せたよ」

「そうかい。まあ仕方ないね。そう答えるのは最初から織り込み済みさ。気を悪くさせ

てすまなかつたね」

「おや、お前の口から謝罪の言葉が出るなんて。明日は天地がひっくり返るのかな?」

ヴェラドローネが笑うと、ヘンドレルは鼻で笑ってから忽然と姿を消した。

それを見てクローネは安堵したように胸をなで下ろす。この場で争いごとが起きるのではないかと気が気でなかったようだ。彼とて余計なことに巻き込まれるのはご免なのである。

「一時はどうなるかと思いましたが、一応平穩無事に済んだようですね」

クローネの発言に対し、ヴェラドローネは腕を組んで座席にふんぞり返る。

「君も大変だねえ。実験結果を知るためとはいえ、こんなことに加担するなんて」

「そうですね。正直あんな研究に手を出すべきではなかったのかもしれない。まあ彼女との出会いで実験は成功しているのだと証明されたのですけど」

「彼女? ああ……母親を演じていたあの女のことか。常々思っていたけど彼女一体何者なんだい? この私でさえ過去の足取りが掴めなかったんだが」

ヴェラドローネの問いかけにクローネは含みのある笑みを浮かべて、彼女の瞳を真っ直ぐ見つめた。

「ははは、まあそうでしょうねえ。当然です。ですがあなたは彼女のことをよく知っているはずですよ? 幼い姿を目にしているのですから」

「はあ? 謎かけのつもりかい?」

呆れながらヴェラドローネは少しだけ考えを巡らせる。そしてすぐに驚きの表情を見せた。彼女にしては珍しく動揺の色も出ている。

「まさか……そういうことなのかい？」

問いにクロローネは小さく頷く。

するとヴェラドローネは突然吹き出すような高笑いを上げると、嬉々とした目でクロローネの顔に詰め寄った。先ほど見せたような獲物を見る目ではなく、まるで新しい玩具を見つけた子供のように輝かせている。

「君、それならもつと早くに教えてくれ給えよ！」

「どうです？　気が変わりましたか？」

「いいとも！　そういうことなら大歓迎だ！　君たちに協力するよ！」

ヴェラドローネの解答を聞き、クロローネは背後に移動したりブレスの顔色を伺う。話しの内容に興味がないのか無言で窓の外を眺めている。

「いやしかしあの子には同情するよ。自分が人間によって意図的に造られた存在であり、両親が偽りでしかなかったと知ったらどれだけ絶望するだろうねえ」

「偽り……そうですね」

「どうかせつかく店に来たんだから、何か頼まないで失礼つてもものじゃないか。どうせあいつ何も頼んでいないんだろう？　ちよつと下に行って注文してくるよ！」

いつになくはしやく様子でヴェラドローネは部屋を飛び出していく。

その様子を見送った後、クローネは笑みを消してテーブルのコップを見つめた。ヴェラドローネが起こした振動で水面が揺れている。

「果たしてあの子にとって、あれは本当に偽りの時間だったんですかね」

何かに同情めいた事を呟くと、背後にいるリブレスに顔を向けた。

「先ほどからずっと外を見てますけど、どうかしましたか？」

「いえ、どうやら盗み聞きしている輩がいるようなので。どうしますか？」

リブレスは興味深そうに窓の外を眺めていた。

彼の視線の先、建物と建物の間の路地に見える人影。男の変装をしているが、隠しきれていない体つきから女だと分かる。

「ああ。それなら私も気がついてますよ。放っておいても問題はありません」

「よろしいのですか？ あの女。ただの人間にしてはなかなかの手練れのようにすが」

「所詮は泳がせているネズミの一匹に過ぎません。それにいつか何かの役に立つかも知れませんか」

言いながらクローネはリブレスの視線の先を一瞥する。そこにはすでに女の姿はなく、活動し始めた人の流れがあるだけだ。

「そう……あなたにはまだ役立つてもらわないと。ですからねえ——元団長殿？」

含みのある笑みとともにクローネは静かにそう呟いた。

第四節 怨嗟の渦に巻き込まれて 4

「うっ……くうっ！」

額に手を当ててソラは呻く。

急な転移に体が拒否反応を起こしている。視界がぼやけ、酷い頭痛で立っていることもままならない。

しばらく荒い呼吸を繰り返しながらソラは体を落ち着かせるためにも現状を整理する。

ドウエセで起こった夫婦殺害事件、ならびに子供失踪事件の犯人をおびき寄せるためにある作戦を立てた。

ゼルレシアスにトウネリを襲わせ、トウネリに強い恨みを持っているであろう犯人を焚きつけようという内容だ。あまりに無謀にも近い作戦だが、他に手立てがなくトウネリも了承したことで決行に移された。

その現場へと向かう道中、犯人が仕掛けた罠に掛かり現状に至っている。

「(っ)……は……？」

ある程度体が回復し、視界もはつきりしたところでソラは周囲を見渡す。

どこかの洞窟なのか一面岩肌の壁に囲まれていた。道は一方にしか続いておらず、何か鋭い刃物で掘削された跡があることから人の手によって生み出されたのは間違いない。

一体誰がなんのために生み出したのかは不明だが、転移魔法で訪れる前提の構造から人に知られたくない重要な拠点なのだろう。

ソラはひとつ深呼吸する。不安を取り除き、意を決して進み始める。一步一步踏み出すごとに、両脇に立てられた松明が燃え盛る。まるでソラの来訪を歓迎しているかのようだ。

長い一本道を進み続けると、前方に開けた場所が見えてきた。何やら奇妙な緑色の光が漏れている。心なしか周囲の空気も冷たい。

張り詰めた雰囲気にはソラは生唾を飲み込んだ。

「な……………に……………」

開けた場所に足を踏み入れて、そこにあった光景にソラは絶句した。

大きな瓶状の入れ物が何本も立ち並んでいる。中は緑に光り輝く液体で浸されており、そこに沈むようにして幅広い年齢の子供たちが眠っている。その中にはあの少女もいることからドウエセで失踪した子供たちであるのは明白だ。

「これはなにしているの……?」

ソラは声を震わせる。

「一体なにをやつてるのさ!」

堪らず絶叫した。

こんな光景は見たことがない。人を人として扱っていないかのような許されざる行為だと怒りを露わにする。

よく観察すると微かな空気を出しているのか、彼らの口元から小さな泡が浮いている。まだ生きている望みはあった。

「なんとかしてここから——」

「どう? 素敵な光景でしょ?」

子供たちを救出しようとしてソラが動こうとした時、声が響いた。声音からして女性のものだ。

「この子達にはね、大事な使命があるのよ。私の餌になるって大事な使命が」

コツコツと足音が響く。

立ち並ぶ瓶状の影から一人の女が姿を現した。真紅のドレスに身を包み、妖艶な笑みを浮かべながら紅の瞳を輝かせている。

「ごきげんよう。この姿で会うのは初めてかしらね? ヴェルティナの……いえ、賢者

イヴェルテラの息子ソラ」

女の顔を見てソラは息を呑む。

「トウネ……り……？」

似ていた。まるで生き移したかのようにトウネリの顔と。

「いや、違う。あなたは——」

そして、六年前に遭遇した魔物の顔と。

「ふふふ……真つ先にその名前が出てくるなんて、あの子は愛されてるわね」

「トウネリの……お母さん？」

瞳孔が開き、ソラは己が見ているものを疑った。

トウネリの母親は病で命を落とした。その現実を受け入れられなかった彼女の父によつて魔物の姿に変えられ、六年前エイネの奮闘により討伐されたはずだ。つまりトウネリの母親は完全に生涯を終えたはずなのだ。

だが目の前にいるのは紛れもなくトウネリの母親だった。病に倒れた様子もなければ、魔物として絶命した様子もない。五体満足の姿で立っている。

「あの人に似て忌々しい顔をしているわ。永遠に消えることのない、この世の誰もが羨む美貌を持った顔」

「なんで……あなたは死んだはずじゃ？」

「ええ、そうね。あなたのでせいで危うく使命を果たす前に死ぬところだったわ」

「ボクの……せい……?」

ソラの反応にトウネリの母親は鼻を鳴らして笑う。

「そう、覚えてないのね。すつごく刺激的だったのに」

震える体を抱えるようにしてトウネリの母は蹲った。その表情は熟れた赤い果実のように赤面している。

「思い出しただけでもゾクゾクしちゃう。あの時のあなたにならこの身の全てを捧げてもいいとさえ思えたくらいに」

異常な様子にソラは思わず一歩後ずさる。状況を飲み込めず困惑していた。

「どうして? なんのためにこんなことを……?」

「なんのためってさっき話したじゃない。使命のためにつて。もう忘れちゃうほど物覚えの悪い子なのかしら?」

「みんなをどうするつもりなの?」

「それも言ったわ。彼らは私の大事な餌になってもらうの。この体を維持するためにね」

「体を維持……?」

ソラは理解することを拒んでいた。仮に冷静だったとしても、彼にはトウネリの母親

の言葉の意味を瞬時には理解し得なかったであろう。

故にトウネリの母親は己の目的を話した。何も複雑な意味もない単純な目的を。

「私はね、吸血鬼なの。人の血肉を食らうことでその生命を維持できる存在。だから私は彼らを餌の在庫としてここに保存しているの」

「吸……血鬼……？」

ただただ困惑するソラを滑稽だと言わんばかりにトウネリの母親は笑みを浮かべる。

「あなた、あの人の子供にしては賢くないのね。別に私がしていることはごくごく普通のことよ？ あなた達人人間が他の動物の肉を食らって生きているのと同じように、私は人間の肉と血を食らっているだけ」

「でも吸血鬼には吸血鬼の国があるはずじゃ。あそこでは病などで命を落としてしまった人間の体を、他国との取引で仕入れて売買しているって」

あまり気持ちの良い話ではないが、夜の国ナハトヴェイルでは死んだ人間の肉体を食用として市場で売られていると聞いたことがある。それらは合法的に他国との貿易で仕入れられたものであり、暗黙の了解のもと吸血鬼たちは人間の肉を食らうことが出来ているという。

これは同時にそれ以外の方法で人間の肉を食すことは許されていないということでもあった。過去にも彼女同様人間の肉を確保しようとした者がいたが、そのすべてが捕

らえられ天敵である太陽の下に晒されて灰になつてゐる。

つまり例え吸血鬼という種族の特性故だとしても、彼女の行為は犯罪として処罰されるということだ。

「あなた達人間が他の動物の命を平気で脅かしているのに、どうして私たち吸血鬼が制限されなきゃいけないのかしら？」

トウネリの母親の質問にソラは返す言葉を失う。

確かに彼女や吸血鬼たちの立場からしてみれば自由を制限されていると捉えるのも仕方のないことだろう。

「それにね、すごく不味いのよ？ あの国で売っている人間の肉つて。死後から大分経ってから入ってきているんですもの。あなた達人間は必ず死んだ者を弔うために葬儀を行うじゃない？ その分新鮮さが失われているのよ」

だからと一言置いて、トウネリの母親は舌なめずりをしながら狂気と快楽に満ちた表情で子供たちを見渡す。

「だからこうして若くて新鮮で上質な肉をかき集めてるの」

その発言にソラは奥歯を噛み締める。拳を握り、ふつつつと沸き起こる言い様のない怒りを抑えるように声を震わせた。

「もしかして……そのためにドウエセを襲つたの？」

「ええそうよ。大事な使命のためにも仕方なく……ね」

使命。そうトウネリの母親は何度も口にする。一体それがなんなのかソラは気にかかった。

「あなたの言う使命ってなんですか？ トウネりを……娘さんを悲しませてまでやらなければならぬことなんですか？」

「ええそうよ。私の使命を果たすにはあの子の中に眠る力が必要なもの」

「トウネリの中に眠る力……？」

「賢しいあなたなら知っているのでしょ？ 太陽の巫女の伝承を」

太陽の巫女伝説——この世界に古くからある伝承のひとつだ。ヘルデイロの王家に伝わっている『月の巫女』とは対の存在で、異常なほどの魔力を宿し太陽と同等の力を持つて生まれてくるのだという。

「知っています。けどそれが一体なんの関係があるっていうんですか？」

どこか話を逸らされているように感じ、ソラは僅かに冷ややかな口調で答える。

「太陽の巫女はこの世界に救済をもたらすと言われているわ。けど長い歴史の中、その存在がこの世界に生み落とされたことは一度もない。伝承は伝承に過ぎないはずだった」

「だった？」

しばしの沈黙のあとソラの表情が驚愕の色に一変する。

「まさか……!」

「そう。トウネリという少女は太陽の巫女になるため人工的に作られた生命体なのよ」
息を呑み、ソラは信じられないと目を開く。

「そんな出鱈目なこと誰が信じるっていうんですか!」

その思いは言葉としても表に出していた。

「残念だけどそれが真実よ。私たちは最初からあの子を太陽の巫女として覚醒させるために動いていた。あの子と家族ごっこをしたのもそのためよ」

「家族……ごっこ……?」

人を人として扱わない行為、言動。そのひとつひとつに対しソラは激昂しかけた感情をかううじて抑えてきた。微かに残っていた冷静さがそうさせていた。

しかしトウネリの母親が放ったその一言は耐え難きものだった。失いかけていた冷静さを消失させ、怒りを爆発させるには十分すぎるほどに。

「ふざ……けるな……ッ!」

怒りの感情に呼応してソラの瞳が金色に変わる。脳裏にこれまでトウネリが家族のことを話す際に見せた表情が浮かぶ。家族が元に戻ることを望むどこか寂しげで孤独を抱えている表情を。

「そんなことトウネリはひとつも思っていない！　それはあなただつて分かつてるはずだ！」

「あなたつて私が思っていた以上に感情的なのね。けど残念。私にとってはあの子との時間なんて取るに足らない退屈なものだったわよ」

トウネリの母親があざけた直後、ソラはその場から姿を消していた。そして次の瞬間には握った左拳をトウネリの母親に振りかざしていた。

拳を片手で容易く受け止めたトウネリの母親はほくそ笑む。

「あら過激。たとえ悪人でも守ってみせるのがあなたの理想じゃなかったのかしら？」

「黙れ……」

「でも当然よね。そんな理想、長く続くはずもないんだもの。この世に悪意を持った存在なんて幾らでもいるんだから」

「黙れえーッ!!」

叫びとともにソラはありつただけの魔力を拳に込めて暴発させた。

その衝撃でトウネリの母親の右腕は吹き飛び、周囲に赤い血が飛び散る。

だがトウネリの母親は涼しい顔でソラを見つめている。吹き飛んだ腕もすぐさま再生したことから、彼女が人ではない何かであることを物語っている。

そんなどこか蔑むような眼差しにソラは奥歯を噛み締めて次の攻撃に移ろうと構え

る。怒りで我を忘れかけている彼は、眼前の女を敵として認識していた。

「どうしてそうやって簡単に苦しめることができるんですか！ トウネリはあなたと一緒に過ごした時間を大切に思っているのに！」

かつて一緒に過ごした場所を壊されたことに嘆く姿を見ている。彼女にとってあの場所ですごした時間はかけがえのないものだった。たとえそこにあつたのが偽りの家族だったとしても、トウネリにとっては本物だったに違いないのだ。

それを理解しているからこそ、ソラはその思いを踏み躪る発言に激昂した。到底許せるものではないと。

「別にあの子にとつては大切でも、私にとつてそうとは限らないじゃない？ 大体あの子は『太陽の巫女』という道具。道具に特別な感情を抱くはずがないわ」

「トウネリは道具なんかじゃやない！ これ以上彼女を侮辱するな！」

ソラは歯を剥き出しにすると、トウネリの母親目掛けて一直線に駆ける。魔力を纏った両脚からは雷の如き稲光が走り地面を焦がす。

一瞬にして距離は縮まり、再び握った左の拳をソラは叩き込む。が、今度は光の障壁によつて阻まれていた。

「言葉で諭すのではなく暴力を行使するなんて、あなたの理想とは程遠い行為ね。それともあの子のためであればなんだってすることかしら？」

トウネリの母親が笑みを浮かべたと同時に、ソラは背後に殺気を感じ取った。その察知通り、彼の背後に血のような赤い液体で象られた無数の針が生成されている。

「——ッ!？」

ソラは咄嗟に振り返り迎え撃とうと構える。それが同時に大きな隙となり、トウネリの母親は彼の脇腹に向けて蹴りを放った。

「があ……っ」

体が軽々と飛び壁面に叩きつけられる。その衝撃にソラは呻き声を上げた。

一方で生成された無数の針はすべて地面に突き刺さって砕けた。破片の輝きに混じり、断ち切られた光の糸が薄らと浮かび上がっている。

「言葉と身を挺しての攻撃をする一方で糸を張り巡らせる。当然意識はあなたに向けられるから、普通の人であれば糸に気づくこともなく捕まるでしょうね。でもそんな戦い方じゃ私は止められない」

地面に伏し、脇腹を抑えながらソラは身を振らせる。痛みにこれまでにない苦悶の表情を浮かべていることから、防御する間もなくもろに受けている様子だ。

それを見てトウネリの母親は失望したような眼差しを向ける。

「脆いわね。まあ所詮は人の子と言ったところかしら」

トウネリの母親が呆れたように呟く。

対しソラは負けじと痛みを堪え、怒りに震えながら立ち上がろうと手をついた。

不意に青い魔力結晶がソラの視界に飛び込んだ。エイネの形見であり、彼女との約束の証とも言うべきそれが。

ソラは目を見開いて結晶を見つめる。見つめる内に怒りの感情が薄れていく。

彼は思い出していた。自分がなんのために力を求めたのかを。自分がなんのために今戦わなければならないのかを。

（トウネリは今も家族一緒に笑い合える日を望んでる。もし母親が生きていると知ったら、その思いはきつと今よりもっと強くなるはずなんだ。だったら今ボクがやるべきことは——）

顔を上げたソラの瞳にはもう怒りは宿っていない。ただ冷静に目の前にいる女を知ろうとしていた。

「そう……ですね。あんな戦い方をしてもあなたを止められるはずがない。トウネリの本当の望みだつて叶えてあげられない」

脇腹を抑えながらソラはゆっくりと立ち上がる。

「ボクはあなたのことを知らないきやいけない。あなたの本当の目的を」

「本当の目的？ だからそんなのさつき——」

違う。とソラは言葉を遮る。

彼は頭の中で情報の断片を探し出す。真実へと辿り着くために、何よりトウネリのために。

「だったらわざわざボクをここに連れてきたりはしません。あなたの言っていることが真実ならここは活動の拠点となるはず。それを明かすということは、それで何か得られるものがあるからでないと説明がつかない。そもそもトウネリが太陽の巫女として生み出されたという話をボクに言う必要もないはずですよ」

そうだ。冷静に考えるとおかしい話だとソラは断言する。

第一この場所の構造が不可解だ。出口もなければ入り口もない。座標を特定し転移しなければたどり着けない作りになっている。

人の目に触れないようにするための手段であるはずなのに、第三者を招き入れる必要がどこにあるのか。餌として子供たちを保存するためだというならば尚更だ。

力を覚醒させるためという点についても気にかかるところがある。もし仮に彼女たちが太陽の巫女を生み出すための研究者であるならば、力を無理やり引き出す方法も見つけているはずだ。

なにか支障があると考えることもできるが、見方次第ではトウネリに試練を与えているようにも捉えられる。

「それになにより——」

ソラは思い出す。彼女が今トウネリのことをなんと呼んでいたのかを。

「本当にトウネリのことを道具としか思っていないのなら、あの子”なんて口にしなはずです」

ソラは真つ直ぐに女の目を見て思った。トウネリと同じ目の色をしている。何か悲しみを背負っている色だと。

「そんなのはあなたの勝手な妄想よ」

「そうかもしれない。けどあなたが何かを隠しているということは分かります。それを今口にするか迷っていることも」

トウネリの母親は口を閉ざすと、不意に微かな笑みを浮かべた。

「どうやら時間切れみたい」

「えっ……?」

疑問を口にした直後、突如として花卉の嵐がソラの周囲を覆った。

「なっ……!!?」

慌ててその場から退こうとするも、吹き荒れる風を中心にいるため身動きひとつすることもままならない。飛ばされまいとソラは足に力を入れて踏ん張る。

「これは……まさか!? 待って! ボクはまだこの人と話しをしなきゃ!」

状況をなにごとつ飲み込めずにいるが、何者の仕業なのかだけは思い当たった。

「待ってよ母さん!」

一切目にしたことはないが、こんなことを出来るのは自分の母親以外に浮かばない。どういう理由かは分からない。どうやってこの場所が分かったのかも不明だが、ここから連れ出そうとする意思だけは感じられる。必死に虚空へと叫ぶが嵐の勢いは増すばかりだ。

ソラは花の嵐から抜け出そうと魔力を込めようと試みる。が何か特別な力が働いているのか、魔法を行使することは敵わない。

「もつとお話ししたかったけど、ここまでのようね。真実に一歩近づいたご褒美にひとつだけ教えてあげるわ」

この時トウネリの母親の声は風の音で妨害されていたが、ソラの耳には届いていた。「私の名前はリユネティ——リユネティ||リゾル||キアンロレス」

リユネティが名乗り終わると同時に、花の嵐はソラとともに消えた。

見送ったリユネティは微笑みながら振り返る。子供たちが入れられた容器の影に何かが潜んでいる。

「思ったよりも遅い介入でしたね、ヴェルティナ。いえ、今は女神イヴェルテラと呼ん

「だ方がいいのかしら?」

影から姿を現したのはソラの母親ヴェルティナだった。

「別に。あの子の出産を手伝ってくれたよしみで時間を上げただけよ」

「そう言う割には到着にも時間が掛かっていたようですけど」

くすりと笑うリユネティに対し、ヴェルティナは無表情で言葉を続ける。

「こんな場所を作るなんて、只者じゃないとは思っていたけどあなた一体何者なのかしら?」

「貴方に比べれば大したことないですよ。ただちよつとだけ世界から切り離された空間を作る魔法を試しただけです。おかげで貴方でさえ見つけられない場所を生み出せましたし、彼の秘密も知ることができた」

ヴェルティナは表情を変えずに嘆息する。

「なるほど。最初からそれが目的だったわけ」

「はい。今回事件を起こしたのは最初からそのためでした。どうです? してやられたでしょう?」

ヴェルティナは周囲を見渡して肩を竦めた。容器の中身がいつの間にか空になつていく。まるで元から存在していなかったかのように忽然と。

「この装置もあの子を激昂させるための罠つてわけね。なかなか手の込んだことをする

じゃない」

「そうでもしないと貴方を騙せませんから。大変だったんですよ？」

「そう。じゃあこれはいらないうってことかしら？」

ヴェルティナが手のひらを見せると、そこには赤い結晶体が三個乗っていた。

リユネティはそれを見てばつが悪そうに苦笑する。

「できればそれは私の唯一の生命線なので欲しいです。あの子たちが持つ魔力量ではそれが限界だったので」

「別にそれは構わないわ。そもそも私が直接回収することは許されていないもの」

そう言うヴェルティナは結晶体を手渡す。渡しながらリユネティの体を眺めた。

人間の女性と何ひとつ変わらない体つき。だが一部分だけ異質な箇所についでいた。ソラに吹き飛ばされて再生した腕。その腕が乾燥しきったかのように所々ひび割れていることに。

「吸血鬼の体に拒絶反応が出ている。そう……やはりそういうことなの」

「ああ、流石にこの体だと気づかれちゃいますよね」

リユネティは左手で結晶を受け取る。その際、ヴェルティナの微かな眩きを耳にして彼女は笑った。

「残念ですけど、私にその資格はありませんよ」

答えながらリユネティは結晶を二つ口の中に放り込んで噛み砕く。飲み込んだと同時にひび割れた腕が元通りに回復していく。

その様子を見たヴェルティナはただ一言「そう」とだけ言う。と花びらとなつて姿を消した。

一人残されたリユネティは、天を仰いで緊張の糸を解きほぐすかのように深く息を吐く。

「そう、今の私にその資格はない」

眩きながら視線を落とし、手のひらにひとつだけ残った結晶を見つめる。今彼女の胸中には多くの思いが渦巻いている。その中にはソラに対する特別な感情も含まれている。

「だからあの子に与えたいんですよ」

リユネティは物憂げに眩くと結晶を強く握り締めた。

第四節 怨嗟の渦に巻き込まれて 5

「逆に聞きたい。お前は何故ああも簡単に自分の両親とこれから産まれてくる子供を殺せた？」

アルガストは目の前の殺人犯に問う。

黒マントを羽織った男は静かに鋭い双眸をアルガストに向ける。まるで彼を見定め
るかのよう。

「お前、六年前に行方不明となっていたあの夫婦の息子だろ？ あの日犯人の自宅で発見された遺体は四肢や頭部を切断された少女のものだけだった。当時は魔物が地上へ出る道中食らったのだとして処理され、以降捜索は行われず真実は永遠に閉ざされた」

アルガストが言いながら剣を構えた直後、男は距離を詰めて斬り掛かった。

「否定はなし——か。今にして考えてみれば、お前の妹が魔物の腹の中に入っていたか
ったということはどこかで生きているという証左だったのかもしれないな」

ここまで読み通りに動くとは思っていなかったが、アルガストは軽く受け止めて分析
する。表情は見えないが剣の重みから静かな怒りを感じる。

「おっと、すまない。少し軽はずみな発言だったか」

挑発のためとはいえよくも軽々しく言えたものだ、アルガストは自嘲の笑みを浮かべる。まるで目の前の男に向かつて「弟の死体は見つからなかった」と嫌味を口にしていうようだ。

もしそう捉えてしまったのだとすれば、この男が激昂するのも無理はない。本質的には同じことなのだから。

いつからこうなってしまったのかと嫌気がさしながらも、アルガストは目の前の男と向き合う。

「妹を失った過去を持ちながら、お前はどのようにして残った家族の命を奪った。俺は……いや、俺とあいつはその理由を知りたい」

アルガストの言葉が増すに連れ男の力も増していく。剣の重みがより強く、より鋭く、そしてより殺気立ったものになっていく。剣の重みがより強く、より鋭

真意は分からない。が、この男に現状に対する後悔がない事は感じ取れる。何か余程の覚悟と信念を持って行動したのだろう。それがどれ程のものか、あるいはどんな目的があるのか見極める必要がある。

(そーいや……教えを受けてた時あの人が言ってたっけな)

ふと師である女騎士士の言葉がアルガストの脳裏に過ぎる。

“——相手の真意を知りたければ剣を交えるのが一番手っ取り早いわ。なにせ言葉の中には意識無意識に関わらず必ず裏が存在する。それを言葉だけで知るなんてのは相手の心が読めない限り不可能よ”

それは真つ先に対話を試みようとしていたソラとは真逆の精神だ。そしてその精神は自分の中にも存在する。

「悪いなヴィルレ。どうやら俺はお前よりお利口さんじゃないらしい」

自虐的な呟きとともにアルガストは男の腹部を蹴り飛ばした。

特に怯んだ様子もなく、男は無言で距離を置いて剣を構え直す。淡々とアルガストの出口方を見ている様は何処となく不気味さがある。

「俺は周りくどい会話が苦手だな。こいつで少し語り合おうぜ」

先の攻撃には相手の裏をかくようなものはひとつとしてなかった。初見の者の多くはそれだけで「この男は構えが一丁前の弱い」と判断するところだろう。

しかしアルガストは薄々感じていた。

この男は自分よりも相当若いはずだ。だというのに底の知れない強大な存在であると。

「来な。あいつの代わりに相手になってやるよ」

それでも引くわけにはいかない。剣を両手で構え、その切先を男に向けてアルガスト

は己を鼓舞する。

一陣の風が流れる。

遠くで響いた爆発音が合図となり、二人は同時に動いた。

アルガストの横風ぎの払いに対し、男は剣身を軽く当てて僅かな力でもって受け流す。

逸らした次の瞬間にはアルガストの顔面目掛けて切先を突き出しており、アルガストは咄嗟に身を反らすことでこれを躲した。

(こいつ!?)

距離を置き、息を軽く整える。あまりにも無駄のない動きにアルガストは面食らう。

一瞬反応が遅ければ男の刀身は間違ひなく顔面を串刺しにしていた。

頬を伝う感触に苦笑すると、アルガストは再び構え――

(あいつはどこに……?)

異変に思わず周囲を見渡した。

距離を置いた一瞬の隙に男が何処かへと姿を消したのだ。

気配を辿り、男の居場所を探るアルガスト。

「上か!？」

彼がハッと上空を見上げたと同時に稲光が宙に走った。

「炎火よ、我が得物に憑依し必勝の一撃となれ！」

軽い舌打ちとともにアルガストは詠唱を口にする。

その間にも男は雷を纏った刀身とともにアルガスト目掛けて降下する。

当たれば必死の一撃と察したアルガストは、これに炎を纏いし刀身で迎え撃った。

技と技、魔法と魔法が衝突し、直後暴発し合う。

「ぐおっ……!?!」

爆風に吹き飛ばされ、アルガストの体が煙の中から弾き出された。

「荒れ狂う風よ、我が身に憑依しその命を守りし鎧となれ！」

詠唱により爆風がアルガストの身を包む。風は吹き飛ばされた勢いを徐々に失速させていく。

ある程度余裕が生まれたところで受け身を取り、アルガストは次の攻撃に備えて剣を構える。鋭い視線と意識をもくもくと立ち昇る煙に向けた。

「また気配が消えた……?」

煙が晴れるもその中に男の姿はない。それどころかあらゆる気配さえも消えている。

（事件発生からこれまでの間、一切姿が見つからなかったのも同じ芸当を使つてか？）

周辺に気を張り、アルガストは警戒心を強める。

視界が悪い暗がりでの戦闘とはいえ、ここまで気配を消せるのはそう容易なことでは

ない。何らかの方法あるいは魔法を用いているのは間違いない。

その正体を探るべく、アルガストはこれまでの男の攻撃を思い返した。

「まるで闇の中にでも紛れてるみてえな——」

闇。その単語に反応し、ある可能性が浮かび上がる。

「まさか……っ!?!」

背後に殺気を感じ、アルガストは即座に振り向いた。振り返った先にあつたのは信じ難い光景だった。

男の半身が黒い霧状のような物に変貌している。否、どちらかと言えば黒い霧が人間の形となつてそこに現れようとしているという表現の方が正しい。

「くっ!」

アルガストはその場から直ぐさま退こうと後ろに飛んだ。が、男の剣先はすでにアルガストの体を捉えた後だった。

「ぐっ……!」

肩から脇腹に掛けて斜め一直線に出来た斬傷から鮮血が吹き出す。

痛みと失血により体の力が抜け落ちる。

膝を突きそうになるが、アルガストはかろうじて持ち堪えた。

「まさか今のは」

冷や汗を額に滲ませて、アルガストは男を睨む。

「闇魔法……お前はそこまで……」

闇魔法。禁じられた魔法に付けられた総称だ。

その多くはかつて世界から切り離された場所に隔離された「闇」と繋がりを得ることとで使役することから、そう名付けられている。

使役者が騒動を起こしたという記録は世界各地に残されており、今では「最も犯罪が起こらない国」と言われているヘルデイロも例外ではなかった。

そして残された記録には総じてこう記されていた。使役者は尋常ならざる恨みを持つっていた——と。

「そこまであいつらを恨んでいるっていうのか」

「……当然だ」

最初の問答から硬く閉ざしていた口を男は開く。

これまで見たこともない憎しみの表情にアルガストは微かに動揺する。妹の死はこの男にとつてそこまでの絶望だったのかと。

「あいつらのせいで俺の妹は死んだ。あいつらがいなければ、俺たち家族は平和に暮らしていたはずなんだ」

「違う。あいつらだって被害者だ」

「違わない。今この世界はあいつらを中心にして回り始めている。特にあのソラってやつを中心に」

「お前……何を言ってる」

「俺は聞かされたのさ。あいつが何者であるのか……この世界にとってどんな存在であるのかを」

男は拳を握り、携えた剣に力を込める。叫びはせずとも彼の激しい怒りが垣間見える。

その憎悪に満ちた目にアルガストは見覚えがあった。

“——なんで？ どうして彼が？”

愛する者の死を知った時ゼルレシアスが浮かべていたものと似ている。深い哀しみとそれ以上の何かに取り憑かれたような強い憎しみ。それらが入り混じった目だ。

「あいつらがいなければ……六年前の事件は起きなかつたんだ。あいつらがいなければ俺たち家族は……」

「そうか。お前もあいつと同じことを言うんだな」

「あんただって本当は分かっているはずだ。あの事件はあいつらがいたことで巻き起こされた悲劇だってことを」

「言っただろう？ 俺は利口な男じゃないって。だから俺はそんなことひとつも考え

ちやいねえよ」

笑いながら、アルガストは血を失っていく感覚に軽い舌打ちをする。

このまま止血しなければ衰弱し、最悪命を落とすことになるだろう。それでも彼は剣を構えて言い放った。

「俺が恨んでいるのは俺自身……あの時守るために精一杯力を使わず、ただ怯えることしかしなかった自分なんぞな」

アルガストの意思に、男は諦めと呆れたように力を抜く。彼の目には憎悪から一転、憐れみが表れている。

「そうか……どうやらあんたも死をもってでしか救うことができないようだ」
「死が救い……か」

男の言葉にアルガストも憐れみの眼差しを向ける。

「そんなもの救いでもなんでもねえよ」

アルガストが微かに笑った時、遠くで強い光が天に向かって放たれた。

第五節 闇に差し込む光明 1

ブリアンテスで飲食店を営む夫婦の間に、アルガストと彼の弟ネリドは生まれた。

二人の名は両親の強く逞しい男に成長してほしいという願いから、伝承の中で力が強かったとされる賢者二人の名を取って付けられたものだ。その甲斐もあつてか、二人は当時暮らしていた子供の中でも一際快活で元気な子供に育つていった。

そんな二人の家の近所に住んでいたのがゼルレシアスだった。

ゼルレシアスの両親は方々から仕入れた食材を売る店を営んでいた。アルガストの両親はこの店の得意先であつた。

家族ぐるみの付き合いもあつて、彼ら三人は何をする時も一緒に時間を過ごし楽しい日々を送つていた。時に喧嘩することもあつたが、仲直りする度に彼らの仲はより一層深まつていった。まさかこの中の誰かが未来で命を落とすことになるなどと、この時の彼らが想像するはずもなかつた。

大人に近づいた時ふとアルガストは言った。「俺の名前は誰よりも強い男になることを願つて名付けられた。だから俺はこの国を守る騎士を目指す」と。

するとネリドもこう口にした。「俺も兄さんと一緒に騎士になる。二人でならもつと沢山の人を守るはずだからさ」と。

二人の思いを両親はいたく感動し、すぐに王都の騎士訓練校に入学することが決まった。

これを知ったゼルレシアスは両親に「私も二人と一緒に騎士になりたい」と嘆願した。当初は店を継いでほしい考えから反対していた両親だったが、彼女の強い思いを否定することもできず、結局は押されて承諾した。

三人はこうして騎士の道を進み始めたのである。

訓練校でも三人は一緒にいる時間が多かった。というより一緒にいる時間が長すぎたのもあってそれが当たり前のようになっていた。この時彼らの教官を務めていた女騎士も思わず「ほんと仲が良いわね」と笑ったほどだ。

そんな三人の中で最も優秀だったのはなんとゼルレシアスだった。彼女は勉強の成績も高く、戦闘訓練では例え自分より力のある男の訓練生でも打ち負かすほどであった。

周囲はそんなゼルレシアスの才能を羨み、中には妬む者もいた。だが実のところ彼女は教官に嘆願して秘密裏に訓練を受けていたのだ。それは同じ時間を過ごすこと多い兄弟でさえ知らないことだった。

時は流れ、いよいよ訓練校を卒業し正式な騎士になる日が近づいてきた。

アルガストとネリドの配属は王都より少し離れた街ドウエセに決まった。元より平和な国であるヘルデイロだが、ドウエセは当時でも最も平和な街だと言われていた。

そんな街への配属となり二人は複雑な心境だった。というのも優秀さを買われたゼルレシアスは王都配属に指名されたからだ。同じく王都配属を目指していた二人にとって、この結果はあまり喜ばしいものではなかった。

ゼルレシアスにとつても望んだ結果ではなかった。彼女はただ二人の後に続いて騎士を目指しただけ。教官に秘密裏の特訓を懇願したのも、力が弱い自分が二人と一緒に行くために必要なことだと考えたからだ。

「どうしてあの二人と一緒に配属ではないのですか？」

辞令が下りたその日の夜。ゼルレシアスは教官の下へ赴き直談判した。教官は自分の思いを知って訓練してくれた人だ。きつと気持ちを汲み取ってくれるだろう。そう考えてのことだ。

結果は変わらなかつた。代わりに返ってきたのは「私が団長に上り詰めるまで待つてほしい」という言葉だけだった。

即時退役も考えたゼルレシアスだったが、それを行動に移せるはずもなかつた。両親の反対を押し切つてまで進んだ道だ。例え望まない結果だったとしても、その責任から

逃れるわけにはいかない。

ゼルレシアスは渋々結果を受け入れ、王都配属の騎士になることを選んだ。

叙任式の日。アルガストとネリドの二人は気持ち切り替えて式に臨んだ。希望は王都配属ではあつたが、どんな結果であれ自分たちのすることは変わらない。ドウエセが平和な街であるというのなら、それを守り続けていくのが騎士としての責任。平和だからといって気を緩めてはいけないと。

一方でゼルレシアスもまたほんの少しだけ気持ちを切り替えていた。教官が口にした言葉を信じて、今はこの住み慣れた街で頑張っていくしかない。

◇

少しの年月が経ち、ゼルレシアスにある辞令が出た。王都配属からドウエセに移るという内容だ。

この前日に教官は騎士団の団長に就任していた。彼女の言葉に嘘偽りが無かったのだとゼルレシアスはすぐに分かった。待ちに待った日が来たのである。

また三人一緒にいられる時間が来る。そうゼルレシアスは胸を躍らせた。ずっと待ち望んでいた、子供の頃のように下らない会話を交わして一緒に笑うことの出来る時間だ。

そう思う一方でゼルレシアスの中に別の感情が渦巻いていた。どうして今更——と。

受諾した翌日。ゼルレシアスはすぐに王都を発ち、ドウエセに向かった。

手紙のやり取りは多少すれど、長い間会っていない二人だ。どれだけ変わっていることだろうか。そう思いながらドウエセに足を踏み入れた。

噂通りドウエセは平和そのものだった。行き交う人の誰もが笑顔で歩いている。騎士たちも街の人と談笑したりしている。その中にあの兄弟の姿を見つけた。誰とも分け隔てなく話すことのできる二人は、この街でも多くの人に慕われているようだった。

ゼルレシアスの姿を見つめるなり二人は笑って迎え入れた。あの頃から何も変わっていない。ゼルレシアスはそう感じた。

その夜、ゼルレシアスの歓迎会が行われた。酒宴で盛り上がる中、ゼルレシアスは少しだけ居心地の悪さを感じていた。別にこういう時間は訓練校時代にもあったことだ。それにあの兄弟もいる。だというのに何故か彼女の心の中には不安が募っている。

ゼルレシアスが不安の正体に気づくのはそう遅くはなかった。

なんとなく夜風に当たろうと外に出た時、少しして隣に一人の男がやってきた。ネリドだ。

ネリドはどこか神妙な面持ちでゼルレシアスの隣に立つと、懐からひとつの箱を取り出した。箱の中身は煙草。その内から一本取り出すと、慣れた手付きで先端に火を点けて吸い始めた。

これまでネリドが煙草を口にするところを見たことがなかったため、ゼルレシアスは少し驚いたように見つめた。

しばらくするとネリドは煙を吐きながらこう口にした。「やっぱり君は綺麗だね」と。これまで彼が口にしたことのない言葉にゼルレシアスは自分の耳を疑った。

困惑する彼女を他所にネリドは続けて言う。

「ゼルレシアス……俺は君のことが好きだ。君と離れ離れになつてようやく自分の気持ちを理解したんだ。ずっとずっと君のことが好きだったんだって」

言つてネリドは再び煙草を啜える。そして煙を吐きながら「けど」と続けた。

「俺は君の気持ちも理解している。君はさ、兄さんのことが好きなんだろう?」

「えっ?」

ゼルレシアスは思わず問い返す。

ただ唾然とする彼女に対しネリドは続けて言った。

「君、俺たちそれぞれに手紙出してただろう?」

確かに彼の言う通り、ゼルレシアスは手紙を分けて書いていた。それがなんだというのか。ゼルレシアスは分ならず小首を傾げる。

「だつて君さ、俺に書く手紙よりも兄さんに書く手紙の方が分量が多かつただろ?」

思いも寄らぬ一言にゼルレシアスは硬直する。

「もしかして自覚がなかったのかい？」

ネリドの指摘にゼルレシアスは小さく頷く。ただそれぞれに話したいことがあったために分けて送っていただけだ。文量など意識すらしていない。

「そっか。じゃあ俺の思い過ぎしなのかな？」

煙草を吹かしながらネリドは星空を眺める。明かりの少ない街並み故、満天の星空がよく輝いて見える。

「でもさ、昔から君は俺と話すより兄さんと話してる時の方が楽しそうだったんだよね。三人で歩いている時、俺がなんとなく足を止めても君はしばらく気づかず兄さんと歩いていたし。だからそうなのかなって」

「そんなことないわよ。たまたま気がつかなかっただけで」

「じゃあさ、君は俺と兄さんどっちの方が好きなのさ？」

問われてゼルレシアスは言葉を詰まらせる。彼女にとってはお互いどちらも大切な存在で、どちらか一方だけを好いているつもりなど毛頭ない。これまで考えたこともないことに答えなどすぐ出るはずがなかった。

黙るゼルレシアスに対しネリドは夜空を見ながら煙を吐く。視界に無数の星が広がっているが、彼がそこに重ねているのはゼルレシアスが見せた数々の行動だ。そのどれもが「兄に向けられた好意は自分に向けられている以上のものである」という確信に

繋がっている。

「なんだお前ら、二人でこんなところにいたのか」

そんな時アルガストがやってきた。

「急に二人していなくなってるから探したぞ」

ネリドは咄嗟に吸っていた煙草を握って隠すと、笑って兄を迎え入れた。

「ああ、ごめん兄さん。ちよつと飲みすぎて夜風に当たりたくなつたんだ」

「お前がー？ 誰よりも酒に強いくせしてよく言うぜ」

アルガストはそう言つて笑いながら、二人の間に割つて入るように立つた。

星空を眺めながら、アルガストはひとつと嘆息を漏らす。

「またこうして三人集まれるなんて、俺たち恵まれてるよな」

アルガストの一言にネリドはゼルレシアスに視線を向けた。少し気まずい様子で俯いている彼女に対しネリドは笑う。

「急に何言つてんだよ兄さん。あ、さては飲み過ぎたんだろ？」

「ばか言え。俺は一杯しか飲んでねえよ」

「いやいや、兄さんは僕と違つてお酒にすごく弱いからねえ」

「はあ？ ていうかその言い草、お前やつぱり酔つ払つてねえじゃねえか」

「当たり前だろ？ あれのお酒くらいじゃ酔わないって」

「こいつ。おいゼルレシアスも何か言つてやれよ」

仲睦まじい会話を交わす兄弟に対し、ゼルレシアスは依然俯いている。その様子に気がかかったのか、アルガストは少しだけ姿勢を低くして彼女の顔を覗き込んだ。

「おいどうした？ 元氣ないぞ？」

突然目の前にアルガストの顔が現れ、ゼルレシアスは思わず一步後ずさる。

「あ、えと、大丈夫よ。久々の移動だったから少し疲れただけ」

「そうか？ まあ確かに王都からここまではそれなりに時間が掛かるからな。それにお前、馬も借りず歩いて来たみたいだし」

「それはだつて、二人に会えるのは楽しみだったけど、久々に顔を見るから心の準備を
て」

「心の準備ってそんな大袈裟な」

「なんで大袈裟なのよ？ 私は二人がすっかり変わつてたりするんじゃないかって心配
で」

不意にゼルレシアスは言葉を切る。初めは顔を逸らしてアルガストと会話していた彼女だったが、今は面と面を向かわせている。

「で、変わつてたか？」

ゼルレシアスは本心を自覚する。自分はアルガストのことが好きなのだ。

思えばいつも先を歩く彼の背中を追いかけていた。隣で一緒に笑っていたくて、たくさん時間を共に過ごしたくて。

三人でいる時間はとても楽しい。でもそんな中で真に見つめていたのは、アルガストのことだったのだと。

「そうね。全然変わってなかった」

ゼルレシアスは微笑みながら答える。

「だろ？ だからこうして三人でいられて俺は幸せつてもんだ」

ゼルレシアスは理解した。彼は何も変わっていない。何も変わらず三人の時間を大切にしている。その視線は等しくネリドと自分に向けられているのだと。

彼女の心に黒く歪んだ感情が渦巻く。自分だけを見てほしい。三人の時間だけではなく、二人きりの時間を作って欲しい。そのために必要なのはきっかけだと。

「ねえ、アルガスト」

「ん？ どうした？」

そのために彼女は、

「私、ネリドとお付き合ひしてみることにしたの」

ネリドの告白を利用することを選んだ。

「私前々から彼のが好きだったのよ。だからさつき二人きりの時に告白したの」

アルガストは呆然とゼルレシアスを見つめる。彼女の思惑通り、アルガストの意識は間違いなくゼルレシアスに向けられていた。

「ね、そうでしょう？ ネリド」

ネリドもこの行動に驚きを隠せない様子だった。否定もできずただ小さく頷き、兄アルガストの顔色を伺う。

沈黙が流れる。これまで三人でいた時には一度もなかった重い空気が漂う。

「あー、そういうことだったのか」

頭を掻きながらアルガストは二人の顔色を伺う。

「お前から昔から仲良かったもんな。うん、お似合いだと思っうぜ」

アルガストはそう言って笑った後、「邪魔したな」と一言だけ謝罪してその場を立ち去った。

アルガストが見えなくなった後、ネリドはすぐ様ゼルレシアスに詰め寄った。

「君、一体なにを考えて……っ!？」

言葉を遮るかのように、ゼルレシアスはネリドを抱き寄せる。

「いいじゃない。あなたが望んだことでしょう?」

ネリドは目を泳がせて、バクバクと高鳴る胸を落ち着かせようと唇を噛む。

「けど、これは君が望んでいることじゃない」

「あら、どうして?」

「だって君は兄さんのことが……」

「大丈夫よ。きつとアルガストも気付いてくれる」

このゼルレシアスの発言でネリドは理解した。彼女は自分の告白を利用し、兄に振り向いてもらうとしているのだと。

だが彼はアルガストの性格をよく知っている。知っているからこそ、この状況は良くないと感じていた。

ネリド自身、彼女への告白はほんの気の迷いから来たものでもあった。ただ久しぶりにゼルレシアスの顔を見て、感情が抑えられずに出たものだった。そして結局はその思いが実ることなどなく、最終的には兄とゼルレシアスの関係が進んでいくものだと思うていた。

だが今のこの状況は違う。二人の関係が進展するどころか、三人の関係さえ破綻してしまいかねない。そう感じていたのだ。

ネリドの予感は的中していた。

彼が告白した翌日の朝。ネリドとゼルレシアスは食堂で向かい合った席に着いていた。まるで告白のことなんて忘れたかのように、二人は他愛のない会話をしながらアルガストが来るのを待っていたのだ。

「あー！ アルガストこっちよこっちー！」

ふと珍しく遅れてやってきたアルガストを見つけて、ゼルレシアスは手を振って立ち上がった。

「ほらこっちに早……く……？」

対しアルガストはその呼びかけを無視して、仲良くなった同僚の隣に座って食事を始めた。

その行動を見て、誰よりもアルガストを側で見ていたネリドは察した。兄を自分たちに気を遣って避けているのだと。

食事の後、ネリドはすぐにゼルレシアスを人目の付かないところに連れ出して忠告した。

「ゼルレシアス……今すぐ兄さんに謝って本当のことを話しに行こう？」

「は？ なんでよ？」

「君だつて分かっているだろう？ 兄さんは俺たちに気を遣って避けているんだつてことを。このままじゃ三人バラバラに——」

ネリドの発言にゼルレシアスは怒りを隠せなかった。そもそも最初に告白したのはネリドの方だ。だというのに何故自分が咎められるのか理解できなかった。

「だつたらなんで？ だつたらなんであんなこと言ったのよ！ あんなこと言わなかつ

たら私だつて！」

罵声を浴びせながらゼルレシアスは涙を溢す。

よもやアルガストがあんな態度を取るとは思ってもおらず、彼女は酷く動揺していた。例えあんなことをしてもアルガストはまた三人で笑い、そしていつしか自分と二人の時間を作つてくれる。そんな自分勝手な夢を信じていたのだ。

「分かつてる。俺のせいだ……だから二人で本当のことを話そう？」

「無理よ……怖い……！ 私もう……あの人に嫌われて……！」

ゼルレシアス自身、何故こんなにも動揺しているのか分かつていなかった。ただたつた一度アルガストに無視されたことが、彼女の心に深い恐怖心を植え付けていた。

「大丈夫だよゼルレシアス。兄さんは君のことを嫌いになつたりしない」

「無理よ……無理……私にはもう……」

ネリドにはもうどう言葉を掛けていいのか分からなくなっていた。

ここまで取り乱すゼルレシアスを見たことがない。いつも朗らかな笑顔を見せ、どんなことにも前向きに取り掛かっていた彼女が、まさかここまで兄アルガストに依存していたとは思ひもしなかった。

ネリドはゼルレシアスが落ち着くよう体を強く抱き締める。答えを求めて精一杯取つた行動がこれだった。

「落ち着いて……ゆっくり深呼吸するんだ。そうすれば大丈夫だから」

「ネリド……」

言われた通りゼルレシアスは荒くなった呼吸を整えようと試みる。が、アルガストの顔が何度も浮かび上がりすぐに乱れてしまう。

「離して。離してよー！」

終いにはネリドの事を突き放し、その場から逃げるように走り去った。

ネリドは立ち尽くす。自分の軽率な行動がまさかこんな事態に発展するとは思って
もいなかった。これが兄の目を僥んで行動した報いかと。

気持ちを落ち着かせようと懐から煙草を取り出して口に啜える。火は付けず、ただ呆然とその先端を見つめる。

「クソっ！」

そして吐き捨てると、ネリドは箱を叩きつけて持ち場へと向かった。

◇

自室に戻りゼルレシアスはすぐに決心した。この街から、あの二人から離れようと。彼女は求めていた時間も捨てて逃げることを選んでいた。

それから二人と一切の会話を交わすことがないまま王都に戻った二日後、ゼルレシアスはある報せを受けることになる。

「ネリドが……死んだ……?」

ドウエセに魔物が出現。その事件に巻き込まれてネリドは命を落としたのだという。自分が二人から逃げたことも忘れてゼルレシアスはドウエセに戻った。報告を信じられるはずがなかった。きつと二人は無事で、笑いながら話しているのだろうか。

しかし現実は違った。

「なあ、ゼルレシアス?　なんで……なんであいつが死ななきやいけなかつたんだ?」

ドウエセに着くと待っていたのは、これまで見たことがないアルガストの姿だった。

「なあ?　なあ?　俺は、俺はどこで間違えたんだ?」

ネリドの墓前でずがる様な声を出して泣きながら問いかけるアルガスト。それを見てゼルレシアスは啞然とした。

違う。違う。こんな顔が見たかつたんじゃない。こんな顔が見たかつたんじゃない。私のせいだ。私のせいだ。呪いのようにそう小声で呟く。

不意に彼女の目にネリドが携帯していた煙草の箱が入った。

衝動に駆られたゼルレシアスは墓前に添えられた箱を掴み、中から出した一本に火を付けて煙を吸った。むせ返りながらも、吐き出そうとはせずにただ何度も何度も吸った。

「お前!　何してんだ!　やめろ!」

彼女の行動を見てアルガストは即座に我に帰ると、ゼルレシアスを取り押さえて煙草を取り上げた。

「離して！ お願い！ 私を殺して！ 私を殺してよ！」

「なんでだよ！ お前急にどうしたんだよ！」

わけもわからず、アルガストは暴れる彼女を必死に取り押さえる。愛人であるネリドの死を目の当たりにしたとはいえ、幾らなんでも取り乱しすぎている。況してや自分から死を選ぶなどもつてのほかだ。

「お前まで失ったら俺はどうすればいいんだよ！ お前まで……お前がいなくなったら俺は……」

アルガストの目から涙が溢れ、ゼルレシアスの頬を濡らす。涙の生温さがゼルレシアスの凍り付いて乱れた心を戻していく。

「お前まで失いたくねえよ……ゼルレシアスっ」

掠れた声でアルガストは懇願する。

「ごめんなさい。そうよね。ごめんなさい」

冷静になったゼルレシアスは謝罪を口にする。そこには彼が大事にしていた三人の時間を奪った意味も込められていた。

第五節 闇に差し込む光明 2

トウネリの体から光が溢れる。柔らかな温かみを持った強い光は周囲を朝焼けのように照らし、分厚い雲に覆われた天を貫く。

「なんだこの光は!? くっ……目……目……!」

ロトウスたちは光を直視しないよう咄嗟に目を覆うが、僅かに間に合わず視界が白く塗り潰されてしまう。

「ははっ、まるで本物の太陽のようだね」

一方、影の男は感嘆し笑みを溢す。トウネリの首を拘束していた男の腕は、光に照らされて消えていくのにも関わず満足げだ。

その傍らで少女が光を浴びて苦しみだした。終始無言で放つ殺気で兵士たちを拘束していた少女だったが、今は甲高い悲鳴を上げて焼け焦げる目を覆っている。この場から今すぐ離脱しなければならぬ。そんな本能が働く反面、地に伏して光が当たる量を軽減しようと試みる。光源は目の前。当然防げるはずもなく、身を焼かれるかのような苦痛に悶えている。

その様子と消えた自分の腕を見て影の男は肩を落とす。

「瞬時に消滅できないとなると、まだ覚醒には程遠いようだね」

嘆きに似た言葉と同時に、光はゆっくりと消えた。

拘束から解放されたトウネリは膝を突き、空気を求めて喘いだ。彼女の首元にはくつきりと拘束の跡が赤く残っている。あのまま拘束が解かれていなければ首の骨が折れ、呼吸もままならないまま絶命していたであろう。

自身の体に何が起きたのかは分からない。だが今はそんなことはどうでも良かった。今彼女の心を占めているのは強い生存願望と「死ぬわけにはいかない」という使命感だ。涙目になりながらも、トウネリは顔を上げて影の男を睨む。

「死ね……ないのよ。わたしは……ッ！」

「おや、それはどうしてだい？ 君は心のどこかで自分の死を望んでいたのだろうか？」

影の男の問いにトウネリは否定しない。事実、死を望み受け入れようとしたのは今日に限った話ではない。

しかし死の淵に立たされた際に垣間見た幻影。ソラの背中と振り返った表情を見てその考えは消えた。

「分かってるから。ソラは……あの人は例えこんなわたしでも、死んでしまったら悲しむって。だったら死ねない……死んじやいけないのよわたしは！」

幻影は泣いていた。例えそれが現実でなくとも、真実だとトウネリは知っている。ソラは何に置いてもまるで我が事のように受け止める。そういう人なのだからと。

トウネリの想いを聞き、俯いていたゼルレシアスは思い出す。

(ああ……そういえばそうだったわね……)

ネリドの死を目の当たりにし、罪悪感で自ら命を絶とうとした時のことを。あの日必死になって止めたアルガストの顔を。

(自分のことばかり。あの時から何も変わってない……私ほんと最低ね)

今回の事件でゼルレシアスが望んだのは紛れもなく、「己の死」だった。

犯人の目的がトウネリであることは、彼女がこの街に誘われた時点で確定していた。ある事情からトウネリの身边を調査したことがあったゼルレシアスにとって、それを想像するのは容易なことだったのだ。

トウネリを一目見て、ゼルレシアスは考えた。アルガストのためにこれまで自ら命を絶つことができなかった。だがこの事件を利用し、トウネリを殺そうと目論めば犯人はきつと自分を殺しに来るはずだと。そのためにトウネリと一騎討ちになる状況を作り、こうして誘き寄せるための役を買って出たのだ。

(まさかこんな大事なことをあの子に気づかさされるなんて)

自嘲の笑いとともに、ゼルレシアスは槍を強く握りなおす。

「そうかい。でも残念だ。君は今ので魔力を使い果たしたのだろうか？ 体も疲弊している。立つことだって出来ないはずだ」

男の指摘どおりトウネリは意識を保つので精一杯だった。体の震えは止まらず、少しでも気を緩めれば倒れるのは彼女も理解している。それでも諦めず、鋭い眼光だけは男に向けていた。

「それにさつき見せた光の影響で周りの兵士たちは一時的に視界を奪われている。今の君を殺すのは簡単なことだよ」

男の黒い腕が鋭利な刃物のような形を取る。目的はトウネリの喉元を貫くため——
「けどどうやら幸運にも一人だけ影響を受けなかったようだね」

ではなく、ゼルレシアスの放つ刺突を受け止めるために。

「どうしたんだいゼルレシアス。どうして僕に牙を剥くのかな？」

「黙りなさい。どうやって声を真似ているのかは知らないけど、彼は昔から“僕”なんて言わないのよ。いつもアルガストの真似をして“俺”って言ったのを知らないのかしら？」

ゼルレシアスは距離を取り、トウネリの前に着地する。

「取り乱してごめんなさいね。いえ、今はありがとうって言うべきかしら。あなたのおかげで大切なことを思い出せたわ」

「ゼル……シ……さ……」

当に限界に達していたトウネリは安堵したように微笑むと、そのまま意識を手放して崩れ落ちた。

呼吸を確認してから、ゼルレシアスは槍を構えて影の男と対峙する。

「いいねえ、感動的だよ。まるでその子の姉みたいじゃないか」

「誰が姉なもんですか。まずはその減らず口を叩く舌から貫いてあげるわ」

構えながらゼルレシアスは額に冷や汗を滲ませる。強気の姿勢を崩さずにいるが、相手はただの影。本体が別の場所にいることは察しがつく。加えて背後には気絶したトウネリがいる。

今しがた槍による刺突を受け止めたのも気に掛かる。一切の攻撃が効かないというのであればそもそも防ぐ必要がない。トウネリが発した光を受けた影響があつたのか、それともそう思わせるための罠なのか。どちらにせよ迂闊に手出しはできない。

動向を伺うゼルレシアスに対し、影の男は少女の方に顔を向けた。皮膚が焼け焦げ、白目を剥いて仰向けに倒れている。体は痙攣し、呻き声にも似た微かな呼吸音が漏れていることから死んではない。

「残念だ」

そう言つて男は手を再生させると、少女を抱きかかえた。

「もう少し君と話していたかったけど、どうやらこの子の再生を優先した方が良さそう
だ」

「なに？ 逃げるつもり？」

「そうさ。君たちを見逃してあげるよ。計画を次の段階に進めることもできたし、美人
を殺すのは僕の趣味でもないしね」

男が笑うと、まるで元からそこにいなかったように忽然と姿を消した。

念のため警戒を払うゼルレシアスだったが、その必要が無いと分かると肩の力を抜き
息を吐いた。

「なんとか行ってくれたようね」

もしあのまま戦闘が続いたとしたら勝機はあっただろうか。そんな取り留めのない
考えを捨て、ゼルレシアスは周囲を見る。

「みんな大丈夫かしら？」

ロトウスたちはようやく回復し始めたのか、片目だけ開けて周囲を見渡す。

「ゼルレシアスさん、大丈夫なのか？ さっきの影の男は？」

「残念だけどまんまと逃げられたわ。いえ……あんな魔法の対処を知らないもの。言葉
どおり見逃してくれたってことね」

癪だけど。ゼルレシアスはそう言いながらトウネリを拾い上げると、ロトウスにその

まま差し出した。

「ロトウス。悪いけどこの子の面倒を見といてくれるかしら？」

「えっ？ あ、ああ。けどあんたはどうする気だ？」

「決まってるでしょ。アルガストを探しに行くのよ。本来ならとつくに合流してるはずなのに姿がない。何かあったんだわ」

それにあの子もいないしね。トウネリを一瞥しながらそう付け足すと、ゼルレシアスは槍を手に颯爽と駆け出した。

漸く回復したロトウスは瞼を震えさせながら恐る恐る両目を開ける。開けて、手元で気絶しているトウネリを凝視した。他の兵士たちも怪訝そうにトウネリの顔を見ている。

「なあロトウス。この子は一体？ さっき何をしたんだ？」

問いを受けてロトウスは思い出す。

トウネリの体から放たれた光。幸運なことに全員時間の経過とともに回復することが出来たが、あと一步防ぐのが遅れていれば失明する者がいてもおかしくはなかった。影の男が口にしたのを聞いていたが、紛れもなく太陽の如き輝きだった。

「分からない。けどおかげで俺たちは助かったんだ。今は考えないでおこう」

「だが——」

提案に不満を口にする兵士もいたが、ロトウスは無視して兵舎に歩みを向ける。こんな少女を守ることもできないほどに自分は弱いのか。燻る無力感に彼は唇を噛んだ。